

上越新幹線関係  
埋蔵文化財発掘調査報告

第7集

# 洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡

平安時代須恵器生産工人集落と  
中・近世集落の調査

1986

群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
日本鉄道建設公団





上越新幹線関係  
埋蔵文化財発掘調査報告

第7集

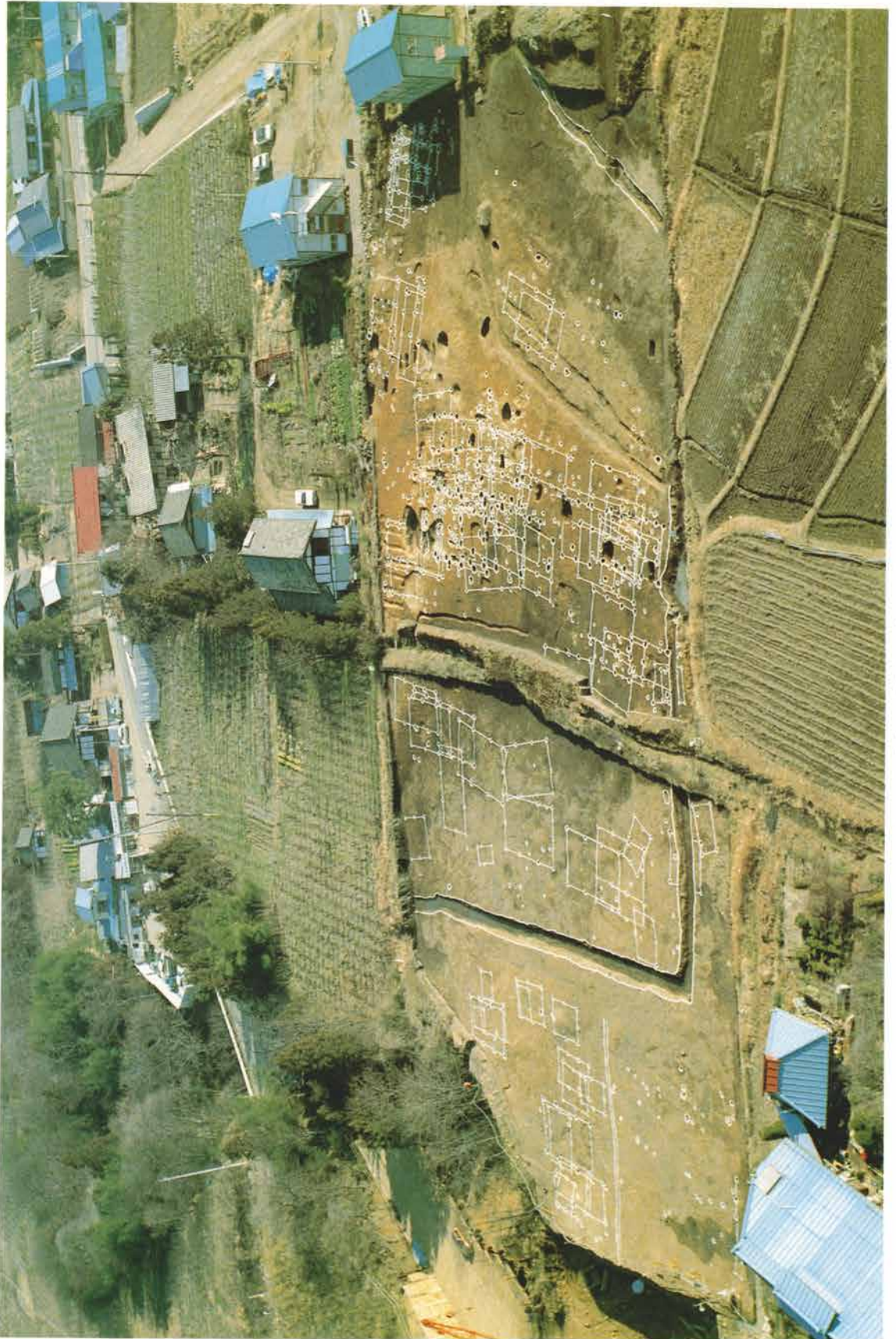
# 洞 I・II・III遺跡

平安時代須恵器生産工人集落と  
中・近世集落の調査

1986

群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
日本鉄道建設公団





洞山遺跡全景（航空写真、西方より）



1 洞III遺跡2号住居跡出土遺物



2 洞II遺跡鍛冶屋敷跡出土の鏡





洞Ⅲ遺跡 2号溝出土の中世甕



1 洞II遺跡出土の16・17世紀の磁器



2 洞III遺跡出土の中世舶載陶磁器

## 序

関東と新潟を結ぶ高速交通幹線として上越新幹線、関越自動車道  
が相次いで完成され、群馬県も新しい交通時代を迎えました。新し  
い建設は、長年にわたって地中に埋没されてきた私達先祖の遺産の  
上に築かれることとなり、埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。

ここは三国街道から北へ4 km入った利根川の右岸段丘上で、奈良  
時代、平安時代を中心とする遺跡地であります。調査によりまして  
すぐ北にある薮田遺跡とともに古代から近代にかけての群馬をとり  
まく日本海側地方とのつながりや交通、流通などの諸問題を究明す  
る手掛かりを得ることができました。

厳しい自然条件の中で発掘調査にあたられたかたがた、報告書の  
作成にあたられた皆様の労をねぎらうとともに、鉄道建設公団を始  
めとする工事関係者、並びに地元関係者各位のご尽力に感謝いたし  
ます。

終わりに、本報告書が古代群馬の解明の一助となりますれば、幸  
甚であります。

昭和61年5月31日

群馬県教育委員会

教育長 千吉良 覚





# 例 言

- 1 本書は上越新幹線建設事業に伴う事前調査として、日本鉄道建設公団の委託を受けて群馬県教育委員会が、昭和51年から53年にかけて発掘調査を実施した<sup>ほら</sup>洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は洞Ⅰ遺跡が群馬県利根郡月夜野町大字月夜野字洞1369番地を中心とし、洞Ⅱ遺跡が同字洞1442番地を中心に、洞Ⅲ遺跡が同字洞1506番地を中心としている。
- 3 洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡は上越新幹線関係の事前の分布調査で76地区と称した遺跡であり、調査時の概要は上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ（昭和53～55年）に掲載した。
- 4 発掘調査は群馬県教育委員会文化財保護課が実施し、調査担当職員は以下の通りである。

洞Ⅰ遺跡	文化財保護主事	長谷部達男・平野進一・中束耕志・下城 正
	調 査 員	横山 巧
洞Ⅱ遺跡	文化財保護主事	長谷部達雄・平野進一・中束耕志・下城 正
	調 査 員	横山 巧
洞Ⅲ遺跡	文化財保護主事	細野雅雄・須田 茂
	調 査 員	山下歳信・石坂 茂
- 5 整理事業は昭和59年1月から61年5月にかけて（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施し、担当職員は以下の通りである。

事務担当職員	常務理事	白石保三郎	事務局長	井上唯雄	管理部長	大沢秋良	調査研究部長	上原啓巳	庶務課長	定方隆史	調査研究第2課長	桜場一寿	庶務課主事	国定 均・笠原秀樹・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏
整理担当職員	主任調査研究員	下城 正	調査研究員	女屋和志雄	嘱託員	坂庭常磐	補助員	平野照美・永井真由美・渡辺フサ枝・安達好子・光安文子・小林幸枝・吉原清乃						
- 6 本書の執筆分担は次の通りである。

第Ⅰ章	神保侑史（群馬県埋蔵文化財調査事業団 第3課長）	第Ⅱ～Ⅳ章	下城	第Ⅴ章	中束耕志（群馬県立歴史博物館 学芸員）
第Ⅵ章第1節	下城	第2節	中束耕志	第3節	下城
第Ⅶ章第1・2節	下城	第3節1	中束耕志	第3節2～6	下城
第Ⅷ章第1節	下城	第2節1	須田 茂（新田町教育委員会 文化財保護主事）	第2節2・3	下城
第3節1・2	山下歳信（大胡町教育委員会 主任）	第3節3～5	下城	第Ⅸ章	1 山下歳信 2 大江正行（群馬県埋蔵文化財調査事業団 主任調査研究員） 3 下城
- 7 本書の作成にあたっては関係各方面の協力を得、また、発掘調査に際しては月夜野町教育委員会ならびに地元関係者の多大なる支援を頂いた。ここに記して感謝の意を表わす次第である。
- 8 発掘調査資料および遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

# 凡 例

- 1 本書は洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の3遺跡をまとめており、各遺跡の調査概要は洞Ⅰ遺跡が第Ⅵ章、洞Ⅱ遺跡が第Ⅶ章、洞Ⅲ遺跡が第Ⅷ章となっている。また、3遺跡全体にかかわる事項は第Ⅰ～Ⅴ・Ⅸ章にまとめた。
- 2 遺構番号については調査時の番号を使用することを原則としたが、整理上、本書作成段階において一部修正した遺構もある。
- 3 遺構および遺構図の方位は磁北を基準としており、月夜野町周辺の磁針方位は西偏約7°00' (国土地理院発行2万5千分の1 猿ヶ京による。) である。
- 4 遺構図の縮少率は全体図が1/500 (付図)、分布図が1/200、住居跡・井戸・土坑が1/60、掘立柱建物が1/100を原則とした。溝については縮少率を統一できなかった。また、縮少率については図中にスケールをともに記載した。
- 5 遺構図中のスクリーントーンは以下の内容を示す。



- 6 掘立柱建物遺構図中の表記と数値は以下の内容を表わす。また、入口部と推定される箇所については矢印 ➡ により示した。

例 (0.30) ( ) は近接する柱穴の径を表わす。数値の単位はm。

-0.35 - は近接する柱穴の深さを表わす。数値の単位はm。

[3.60] [ ] は柱痕のある場合は柱痕の心芯間の柱間を表わす。柱痕のない場合は柱穴の心芯間の柱間を表わす。数値の単位はm。

- 7 遺物の観察については縄文時代の遺物を東中耕志が、平安時代の遺物を下城と坂庭が、中・近世陶磁器を大江正行が行ない、その他の遺物は下城が行なった。
- 8 洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡からはコンテナバットに約150箱の量の遺物が出土したが、図示した遺物量は縄文時代の遺物79点、平安時代の遺物528点、中・近世の遺物128点である。
- 9 本書における遺物番号は各遺跡の遺構ごとに通番号とし、遺物図・観察表・写真図版の3者の番号は同一の個体である。しかし、陶磁器については各遺跡ごとに通番とし、番号に○を付けて表わした。
- 10 遺物図の縮少率は縄文時代の遺物が $\frac{1}{3}$ 、平安時代の遺物のうち杯・蓋・小型甕等が $\frac{1}{3}$ 、壺・甕・鉢等が $\frac{1}{4}$ 、中・近世陶磁器は青白磁が $\frac{1}{2}$ 、小型のものが $\frac{1}{3}$ 、大型のものが $\frac{1}{4}$ 、木器は $\frac{1}{4}$ 、石製品は小型のものが $\frac{1}{3}$ 、大型のものが $\frac{1}{4}$ 、金属製品は煙管・銭貨が $\frac{1}{2}$ を原則とし、図中にスケールとともに縮少率を記載した。
- 11 平安時代の土器の図表現として、破線---は器面の稜線を表わし、一点鎖線---は回転性のナデ・ロクロ痕跡を表わし、細線—はヘラ削りおよびヘラナデの稜線を表わし、破線状曲線は輪積み痕跡および指頭圧痕を表わす。

12 平安時代の遺物観察表は以下を原則としている。

- ① 出土位置については住居内をカマド・南東隅（貯蔵穴のある場合は貯蔵穴）・カマド前・北東隅・南壁中央・中央・北壁中央・南西隅・西壁中央・北西隅に分割し位置名称を統一した。床面下出土のものは床面下落ち込みも含め掘形として一括した。また、出土位置に続き出土レベルを床面（床面密着のもの）・床面近（床面より5cm以内のレベルのもの）・覆土の3者に分けた。また、Naは調査時における遺物取り上げ番号である。
- ② 法量は①が遺存状態を表わし、②は口径を表わし、( )は復元径である。③は底径を表わし、( )は復元径である。④は器高を表わす。②～④の一は復元不能な場合および不明な場合である。法量の単位はcmである。

13 洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡からは鎌倉時代から近世・近代までの長きにわたる陶磁器が出土しており、出土量も多く陶磁器の選択・観察については、以下の通りとした。

- ① 3遺跡の陶磁器の総数は2,970点で、その内、176点について実測を行ない図示し、333点についてドット個体として分布図を作成した。内訳は洞Ⅰ遺跡では総破片数368点、実測個体数31点、ドット個体数99点で、洞Ⅱ遺跡では総破片数1,791点、実測個体数92点、ドット個体数29点で、洞Ⅲ遺跡では総個体数811点、実測個体数53点、ドット個体数205点である。
- ② 陶磁器の選択は中世陶磁器と考えられる破片はすべて掲載した。近世陶磁器は江戸時代前期・中期と考えられる破片のうち、稀少性の高い破片についてのみ掲載した。また、一括性の高い組み合わせや接合率の高い破片も重視した。
- ③ 観察にあたっては、一率・均等な意識で観察する意図から各遺跡単位で一覧表を作成し、項目立ては出土陶磁器の特徴が現われるようにした。
- ④ 観察表の器種では焼物種名称と器種・釉種を併記した。出土位置では遺構名称と出土状況を明記した。量目では( )で記入された数値は復元値であり、無い場合は実長である。量目単位はcmで表わした。胎土の項ではその色調を記入、焼成の項では見た目の焼き上りを記述した。釉調は概ねその色調をとらえた。備考欄には製作地の推定ないしは作調から見た製作地系統と製作年代を記入した。

14 陶磁器の図表現として、スクリーントーンのあるものは鉄釉の施釉を表わす。釉境については二点鎖線で、ロクロ痕については一点鎖線で表わした。割口は細線で表わしたが、染付等の意匠が見えなくなる場合は省略した。染付については濃淡を1個体の中で3段階に分けて表現した。

15 羽口の図表現としてスクリーントーンは、以下の内容を表わす。



表面がガラス質状に溶出し発泡している部分



鉄滓が付着している部分



火熱により還元状態で変色している部分





# 目 次

序

例 言

凡 例

第 I 章	調査にいたる経過	1
第 II 章	調査の方法と経過	4
第 1 節	調査の方法	4
第 2 節	調査の経過	4
第 III 章	遺跡の立地と歴史的環境	7
第 IV 章	基本土層	13
第 V 章	洞 I・II・III 遺跡出土の 縄文時代遺物	14
第 1 節	土器	14
第 2 節	石器	16
第 VI 章	洞 I 遺跡	35
第 1 節	概要	35
第 2 節	平安時代の遺構と遺物	40
1	住居跡	40
2	1区J-09落ち込みと平安時代遺物包含層	45
第 3 節	中・近世の遺構と遺物	62
1	柱穴群	62
2	溝	62
3	井戸	64

4	土 坑	67
5	グリット出土の遺物	73

## 第 VII 章 洞 II 遺 跡

第1節	概 要	103
第2節	平安時代の遺物	108
第3節	中・近世の遺構と遺物	109
1	鍛冶屋敷跡と関連遺構	109
2	掘立柱建物	114
3	溝	128
4	井 戸	147
5	土 坑	148
6	グリット出土の遺物	152

## 第 VIII 章 洞 III 遺 跡

第1節	概 要	177
第2節	平安時代の遺構と遺物	178
1	住居跡	178
2	土 坑	200
3	グリット出土の遺物	203
第3節	中・近世の遺構と遺物	206
1	掘立柱建物	206
2	溝	279
3	井 戸	283
4	土 坑	284
5	グリット出土の遺物	292

## 第 IX 章 ま と め

1	洞III遺跡の掘立柱建物群	337
2	洞 I・II・III遺跡出土の中世～近代の陶磁器	358
3	洞 I・III遺跡の平安時代集落について	375

# 図 版 目 次

巻頭図版	1	洞III遺跡全景（航空写真、西方より）	図版	16-1	1号住居跡（北より）
	2-1	洞III遺跡2号住居跡出土遺物		2	1号住居跡遺物出土状態（東より）
	2	洞II遺跡鍛冶屋敷跡出土の鏡	図版	17-1	平安時代遺物包含層全景（南西より）
	3	洞III遺跡2号溝出土の中世甕		2	平安時代遺物包含層出土状態（南より）
	4-1	洞II遺跡出土の16・17世紀の磁器	図版	18-1	平安時代遺物包含層1区P-03出土状態（北より）
	2	洞III遺跡出土の中世舶載陶磁器		2	1区J-09落ち込み遺物出土状態（北東より）
本文図版	1	洞I遺跡第1次調査グリット設定状況（南東より、左上隅の山裾に昭和16年調査の洞窯跡がある）	図版	19-1	1号溝（南東より）
	2	1号住居跡の遺物出土状態（南より）		2	1号井戸（中段、南より）
	3	3-C溝の堰（東より）		3	2号井戸（西より）
<b>洞I・II・III遺跡</b>					
図版	1	洞I・II・III遺跡の周辺地形（航空写真、昭和49年撮影、1/4,000）	図版	20-1	6号土坑（東より）
図版	2-1	遺跡遠景（北東の利根川対岸より）		2	7号土坑（南より）
	2	遺跡遠景（北西の沢入窯跡のある寺山より）		3	8号土坑（東より）
図版	3-1	洞I遺跡第1次調査状況（1区南半、南西より）		4	14号土坑（南より）
	2	洞II遺跡試掘調査状況（2区北半、北より）		5	15号土坑遺物出土状態（南西より）
図版	4-1	洞I遺跡調査状況（第1次調査、1～3号土坑周辺、南西より）	図版	6	15号土坑掘形（南より）
	2	洞II遺跡調査状況（第2次調査、3号溝、南西より）		7	16-a・b号土坑（南より）
図版	5-1	洞III遺跡調査状況（第1次調査、1号掘立柱建物周辺、東より）	図版	8	18号土坑（南より）
	2	洞III遺跡調査状況（第2次調査、16号掘立柱建物周辺、西より）	図版	21	1号住居跡出土遺物（1）
図版	6	縄文土器	図版	22	1号住居跡出土遺物（2）
図版	7	縄文石器（1）	図版	23	1号住居跡出土遺物（3）
図版	8	縄文石器（2）	図版	24	1号住居跡出土遺物（4）
図版	9	縄文石器（3）	図版	25	1区J-09落ち込み出土遺物
図版	10	縄文石器（4）	図版	26	平安時代包含層出土遺物（1）
図版	11	縄文石器（5）	図版	27	平安時代包含層出土遺物（2）
図版	12	縄文石器（6）	図版	28	平安時代包含層出土遺物（3）
			図版	29	平安時代包含層出土遺物（4）
			図版	30	平安時代包含層出土遺物（5）
			図版	31	平安時代包含層出土遺物（6）
			図版	32	平安時代包含層出土遺物（7）
			図版	33	平安時代包含層出土遺物（8）
			図版	34	平安時代包含層出土遺物（9）
			図版	35	平安時代包含層出土遺物（10）
			図版	36	平安時代包含層出土遺物（11）
			図版	37	平安時代包含層出土遺物（12）
			図版	38	平安時代包含層出土遺物（13）
			図版	39	平安時代包含層出土遺物（14）
			図版	40	平安時代包含層出土遺物（15）
			図版	41	1号井戸出土遺物
			図版	42	土坑出土遺物（1）
<b>洞I遺跡</b>					
図版	13-1	洞I遺跡遠景（北東より）	図版	36	平安時代包含層出土遺物（11）
	2	洞I遺跡近景（南西より）	図版	37	平安時代包含層出土遺物（12）
図版	14-1	第1次調査1区南半調査状況（西より）	図版	38	平安時代包含層出土遺物（13）
	2	第1次調査0区北半から1区南半グリット設定状況（南より）	図版	39	平安時代包含層出土遺物（14）
図版	15-1	1区北半全景（南西より）	図版	40	平安時代包含層出土遺物（15）
	2	0区南半全景（南より）	図版	41	1号井戸出土遺物
			図版	42	土坑出土遺物（1）

図版	43	土坑出土遺物 (2)
図版	44	土坑出土遺物 (3)
図版	45	グリット出土の中・近世遺物 (1)
図版	46	グリット出土の中・近世遺物 (2)

## 洞II遺跡

図版	47-1	洞II遺跡遠景 (北西より)
	2	洞II遺跡調査状況 (第1次調査、東南より)
図版	48-1	1・2号溝および2~7号土坑 (南より)
	2	1号柱列および3号溝周辺 (南より)
図版	49-1	掘立柱建物群南半 (南より)
	2	掘立柱建物群北半 (南東より)
図版	50-1	1~7号掘立柱建物 (南より)
	2	8号掘立柱建物と2・3号柱列 (南より)
図版	51-1	1号柱列と2・3号井戸 (西より)
	2	鍛冶屋敷跡 (南より)
図版	52-1	3号溝 (東より)
	2	3-c溝の堰 (北西より)
図版	53-1	9号掘立柱建物 (北西より)
	2	10号掘立柱建物 (北より)
	3	11号掘立柱建物 (東より)
	4	12号掘立柱建物 (東より)
	5	13号掘立柱建物 (南より)
	6	12号掘立柱建物の柱痕 (北より)
	7	1号土坑 (上面、西より)
	8	1号土坑 (下面、北より)
図版	54-1	3号溝土層断面 (東より)
	2	3号溝蔵骨器出土状態 (東より)
	3	3号溝木器出土状態 (南東より)
	4	3号溝銭貨出土状態 (東より)
	5	2号井戸 (北より)
	6	3号井戸 (北より)
	7	4号井戸 (南より)
	8	5号井戸 (北東より)
図版	55-1	2号土坑 (南東より)
	2	3号土坑 (南東より)
	3	8号土坑 (南より)
	4	9号土坑 (西より)
	5	13号土坑 (東より)
	6	10号土坑 (東より)
	7	15号土坑 (南西より)
	8	17号土坑 (北より)
図版	56	グリット出土の平安時代遺物
図版	57-1	鍛冶屋敷跡関連の1号土坑出土遺物
	2	鍛冶屋敷跡関連の3号溝出土鉄滓
図版	58	鍛冶屋敷跡出土の磨石状台石
図版	59	3号溝出土遺物 (1)
図版	60	3号溝出土遺物 (2)
図版	61	3号溝出土遺物 (3)

図版	62	3号溝出土遺物 (4)
図版	63	3号溝出土遺物 (5)
図版	64	3号溝出土遺物 (6)
図版	65	3号溝出土遺物 (7)
図版	66	3号溝出土遺物 (8)
図版	67	3号溝出土遺物 (9)
図版	68	3号溝出土遺物 (10)
図版	69	3号溝出土遺物 (11)
図版	70	3号溝出土遺物 (12)
図版	71	グリット出土の中・近世遺物 (1)
図版	72	グリット出土の中・近世遺物 (2)
図版	73	グリット出土の中・近世遺物 (3)
図版	74	グリット出土の中・近世遺物 (4)
図版	75	グリット出土の中・近世遺物 (5)
図版	76	グリット出土の中・近世遺物 (6)

## 洞III遺跡

図版	77-1	洞III遺跡遠景 (調査前、南西より)
	2	洞III遺跡全景 (南西より)
図版	78-1	調査中の洞III遺跡全景 (南より)
	2	洞III遺跡に関連する小川城二の丸の調査 (昭和55年、南より)
図版	79-1	調査状況 (14号掘立柱建物周辺、西より)
	2	調査状況 (2号溝周辺、南西より)
図版	80-1	2号住居跡 (西より)
	2	3号住居跡 (西より)
図版	81-1	4号住居跡 (東より)
	2	5号住居跡 (西より)
図版	82-1	6号住居跡 (西より)
	2	7号住居跡と30号土坑 (西より)
図版	83-1	1号住居跡 (東より)
	2	2号住居跡遺物出土状態 (南東より)
	3	3号住居跡貯蔵穴 (西より)
	4	4号住居跡貯蔵穴 (東より)
	5	5号住居跡貯蔵穴 (西より)
	6	6号住居跡カマド (南西より)
	7	2号土坑 (南東より)
	8	47号土坑 (北東より)
図版	84-1	1~4号掘立柱建物 (東より)
	2	5・6・32号掘立柱建物と1・2号柱列 (東より)
図版	85-1	7・8・22~35号掘立柱建物と1 (左)・2号溝 (手前、南より)
	2	36・96号掘立柱建物と4・5号柱列および1・2号溝 (南より)
図版	86-1	18~21号掘立柱建物と2号溝 (南より)
	2	11~17号掘立柱建物と2号溝 (南西より)
図版	87-1	9~17・39号掘立柱建物と6号柱列 (西より)



	2	80~85・97号掘立柱建物と11・12号柱列(西より)	図版	96	2号住居跡出土遺物 (3)
			図版	97	2号住居跡出土遺物 (4)
図版	88-1	40号掘立柱建物(南より)	図版	98	2号住居跡出土遺物 (5)
	2	42号掘立柱建物(南より)	図版	99	2号住居跡出土遺物 (6)
	3	43号掘立柱建物(南より)	図版	100	2号住居跡出土遺物 (7)
	4	46号掘立柱建物(南より)	図版	101	2号住居跡出土遺物 (8)
	5	53号掘立柱建物(南より)	図版	102	2号住居跡出土遺物 (9)
	6	55号掘立柱建物(南より)	図版	103	2号住居跡出土遺物 (10)
	7	57号掘立柱建物(北より)	図版	104	3号住居跡出土遺物
	8	59号掘立柱建物(西より)	図版	105-1	4号住居跡出土遺物
図版	89-1	60号掘立柱建物(西より)		2	5号住居跡出土遺物 (1)
	2	62号掘立柱建物(西より)	図版	106	5号住居跡出土遺物 (2)
	3	65号掘立柱建物(北より)	図版	107-1	5号住居跡出土遺物 (3)
	4	67号掘立柱建物(北より)		2	6号住居跡出土遺物
	5	72号掘立柱建物(北より)	図版	108-1	2号土坑出土遺物
	6	74号掘立柱建物(北より)		2	グリット出土の平安時代遺物 (1)
	7	75・76号掘立柱建物(東より)	図版	109	グリット出土の平安時代遺物 (2)
	8	70号掘立柱建物の柱痕と銭貨(南より)	図版	110	グリット出土の平安時代遺物 (3)
図版	90-1	2号溝北辺(西より)	図版	111	グリット出土の平安時代遺物 (4)
	2	2号溝西辺(北より)	図版	112	掘立柱建物出土遺物
	3	3号溝(北西より)	図版	113	2号溝出土遺物
	4	78号掘立柱建物と現在の水路(南東より)	図版	114-1	2・3号溝出土遺物
図版	91-1	2号溝北辺土層断面(東より)		2	2号溝出土の平安時代遺物
	2	2号溝北西隅出土状態(南東より)	図版	115-1	2号井戸出土遺物
	3	2号溝西辺と37・38号掘立柱建物(南東より)		2	30・40号土坑出土遺物
	4	2号溝中世襲出土状態(東より)	図版	116-1	46・18号土坑出土遺物
	5	2号溝平安時代遺物出土状態(東より)		2	18・40号土坑出土遺物
	6	鳥形土器の出土状態(北より)		3	40・24号土坑出土遺物
	7	1号井戸(東より)	図版	117-1	20号土坑出土遺物
	8	2号井戸(南より)		2	40号土坑出土遺物 (1)
図版	92-1	5号土坑(南西より)	図版	118	41・46号土坑出土遺物
	2	15号土坑(南より)	図版	119	46号土坑出土遺物
	3	21号土坑(東より)	図版	120	46・13・18号土坑出土遺物
	4	23号土坑(西より)	図版	121	グリット出土の中・近世遺物 (1)
	5	31号土坑(西より)	図版	122	グリット出土の中・近世遺物 (2)
	6	10号土坑(東より)	図版	123	グリット出土の中・近世遺物 (3)
	7	14号土坑(東より)	図版	124	洞I・II・III遺跡調査員(昭和53年12月)
	8	16号土坑(西より)			
図版	93-1	35~37号土坑(東より)			
	2	38号土坑(南より)			
	3	18号土坑(東より)			
	4	20号土坑と石列(西より)			
	5	40号土坑(北より)			
	6	41号土坑(南より)			
	7	46号土坑(北より)			
	8	24号土坑出土状態(東より)			
図版	94	2号住居跡出土遺物 (1)			
図版	95	2号住居跡出土遺物 (2)			

# 挿 図 目 次

第 1 図	洞 I・II・III遺跡位置図	3	第 45 図	13～18号土坑	71
第 2 図	洞 I・II・III遺跡調査範囲と周辺遺跡 (1:10,000)	6	第 46 図	13～15・18号土坑出土遺物	72
第 3 図	周辺遺跡位置図	9	第 47 図	グリット出土遺物 (1)	73
第 4 図	縄文土器	15	第 48 図	グリット出土遺物 (2)	74
第 5 図	縄文石器 (1)	22	第 49 図	洞II遺跡遺構分布図 (1)	104
第 6 図	縄文石器 (2)	23	第 50 図	洞II遺跡遺構分布図 (2)	105
第 7 図	縄文石器 (3)	24	第 51 図	洞II遺跡遺構分布図 (3)	106
第 8 図	縄文石器 (4)	25	第 52 図	洞II遺跡遺構分布図 (4)	107
第 9 図	縄文石器 (5)	26	第 53 図	グリット出土遺物	108
第 10 図	縄文石器 (6)	27	第 54 図	鍛冶屋敷跡および1号井戸・1号土坑	110
第 11 図	縄文石器 (7)	28	第 55 図	鍛冶屋敷跡出土遺物 (1)	111
第 12 図	縄文石器 (8)	29	第 56 図	鍛冶屋敷跡出土遺物 (2)	112
第 13 図	縄文石器 (9)	30	第 57 図	鍛冶屋敷跡関連の1号土坑出土遺物	113
第 14 図	縄文石器 (10)	31	第 58 図	1・2号掘立柱建物	117
第 15 図	洞 I 遺跡遺構分布図 (1)	36	第 59 図	3・4号掘立柱建物	118
第 16 図	洞 I 遺跡遺構分布図 (2)	37	第 60 図	5・6号掘立柱建物	119
第 17 図	洞 I 遺跡遺構分布図 (3)	38	第 61 図	7・8号掘立柱建物	120
第 18 図	洞 I 遺跡遺構分布図 (4)	39	第 62 図	9・10号掘立柱建物	121
第 19 図	1号住居跡	41	第 63 図	11・13号掘立柱建物	122
第 20 図	1号住居跡出土遺物 (1)	42	第 64 図	12号掘立柱建物	123
第 21 図	1号住居跡出土遺物 (2)	43	第 65 図	14・15号掘立柱建物	124
第 22 図	1号住居跡出土遺物 (3)	44	第 66 図	16・17号掘立柱建物	125
第 23 図	1区J-09落ち込み出土遺物	46	第 67 図	18・19号掘立柱建物	126
第 24 図	洞 I 遺跡平安時代遺構および包含層と洞窟跡 (1:2,500)	47	第 68 図	1～8号柱列	127
第 25 図	包含層出土遺物 (1)	48	第 69 図	1・2号溝	128
第 26 図	包含層出土遺物 (2)	49	第 70 図	3号溝流路模式図	130
第 27 図	包含層出土遺物 (3)	50	第 71 図	3号溝	131
第 28 図	包含層出土遺物 (4)	51	第 72 図	3号溝遺物出土状態	132
第 29 図	包含層出土遺物 (5)	52	第 73 図	3号溝出土遺物 (1)	133
第 30 図	包含層出土遺物 (6)	53	第 74 図	3号溝出土遺物 (2)	134
第 31 図	包含層出土遺物 (7)	54	第 75 図	3号溝出土遺物 (3)	135
第 32 図	包含層出土遺物 (8)	55	第 76 図	3号溝出土遺物 (4)	136
第 33 図	包含層出土遺物 (9)	56	第 77 図	3号溝出土遺物 (5)	137
第 34 図	包含層出土遺物 (10)	57	第 78 図	3号溝出土遺物 (6)	138
第 35 図	包含層出土遺物 (11)	58	第 79 図	3号溝出土遺物 (7)	139
第 36 図	包含層出土遺物 (12)	59	第 80 図	3号溝出土遺物 (8)	140
第 37 図	包含層出土遺物 (13)	60	第 81 図	3号溝出土遺物 (9)	141
第 38 図	包含層出土遺物 (14)	61	第 82 図	3号溝出土遺物 (10)	142
第 39 図	1号溝	63	第 83 図	3号溝出土遺物 (11)	143
第 40 図	1・2号井戸	65	第 84 図	3号溝出土遺物 (12)	144
第 41 図	3号井戸	66	第 85 図	3号溝出土遺物 (13)	145
第 42 図	1号井戸出土遺物	66	第 86 図	3号溝出土遺物 (14)	146
第 43 図	1～6号土坑	69	第 87 図	2～5号井戸	147
第 44 図	7～12号土坑	70	第 88 図	2～8号土坑	149
			第 89 図	9～13号土坑	150
			第 90 図	14～17号土坑	151

第 91 図	グリット出土遺物 (1) .....	153	第 140 図	14・15号掘立柱建物 .....	222
第 92 図	グリット出土遺物 (2) .....	154	第 141 図	17・18号掘立柱建物 .....	225
第 93 図	グリット出土遺物 (3) .....	155	第 142 図	19・20号掘立柱建物 .....	226
第 94 図	グリット出土遺物 (4) .....	156	第 143 図	21～23号掘立柱建物 .....	227
第 95 図	グリット出土遺物 (5) .....	157	第 144 図	24・25号掘立柱建物 .....	228
第 96 図	グリット出土遺物 (6) .....	158	第 145 図	26・27号掘立柱建物 .....	229
第 97 図	洞Ⅲ遺跡平安時代遺構分布図 .....	178	第 146 図	28・29号掘立柱建物 .....	230
第 98 図	1号住居跡 .....	179	第 147 図	30・31号掘立柱建物 .....	233
第 99 図	2号住居跡 .....	180	第 148 図	33～35号掘立柱建物 .....	234
第 100 図	2号住居跡掘形 .....	181	第 149 図	37・38号掘立柱建物 .....	235
第 101 図	2号住居跡出土遺物 (1) .....	182	第 150 図	40・41号掘立柱建物 .....	236
第 102 図	2号住居跡出土遺物 (2) .....	183	第 151 図	42・43号掘立柱建物 .....	237
第 103 図	2号住居跡出土遺物 (3) .....	184	第 152 図	44・45号掘立柱建物 .....	238
第 104 図	2号住居跡出土遺物 (4) .....	185	第 153 図	46・47号掘立柱建物 .....	241
第 105 図	2号住居跡出土遺物 (5) .....	186	第 154 図	48～50号掘立柱建物 .....	242
第 106 図	2号住居跡出土遺物 (6) .....	187	第 155 図	51・52号掘立柱建物 .....	243
第 107 図	2号住居跡出土遺物 (7) .....	188	第 156 図	53・54号掘立柱建物 .....	244
第 108 図	2号住居跡出土遺物 (8) .....	189	第 157 図	55号掘立柱建物 .....	245
第 109 図	2号住居跡出土遺物 (9) .....	190	第 158 図	56号掘立柱建物 .....	246
第 110 図	2号住居跡出土遺物 (10) .....	191	第 159 図	57号掘立柱建物 .....	247
第 111 図	3号住居跡 .....	193	第 160 図	58号掘立柱建物 .....	248
第 112 図	3号住居跡出土遺物 .....	194	第 161 図	59号掘立柱建物 .....	249
第 113 図	4号住居跡 .....	195	第 162 図	60号掘立柱建物 .....	250
第 114 図	4号住居跡出土遺物 .....	195	第 163 図	61号掘立柱建物 .....	251
第 115 図	5号住居跡 .....	196	第 164 図	62号掘立柱建物 .....	252
第 116 図	5号住居跡出土遺物 .....	197	第 165 図	63号掘立柱建物 .....	253
第 117 図	6号住居跡 .....	198	第 166 図	64・65号掘立柱建物 .....	254
第 118 図	6号住居跡出土遺物 .....	198	第 167 図	66号掘立柱建物 .....	255
第 119 図	7号住居跡・30号土坑 .....	199	第 168 図	67号掘立柱建物 .....	256
第 120 図	2・43・44号土坑 .....	200	第 169 図	68・69号掘立柱建物 .....	257
第 121 図	45・47・48号土坑 .....	201	第 170 図	70号掘立柱建物 .....	258
第 122 図	2号土坑出土遺物 .....	202	第 171 図	71号掘立柱建物 .....	259
第 123 図	グリット出土遺物 (1) .....	203	第 172 図	72・73号掘立柱建物 .....	260
第 124 図	グリット出土遺物 (2) .....	204	第 173 図	74・75号掘立柱建物 .....	261
第 125 図	グリット出土遺物 (3) .....	205	第 174 図	76・77号掘立柱建物 .....	262
第 126 図	洞Ⅲ遺跡中・近世遺構分布図 (1) .....	206	第 175 図	78・79号掘立柱建物 .....	263
第 127 図	洞Ⅲ遺跡中・近世遺構分布図 (2) .....	207	第 176 図	80・81号掘立柱建物 .....	264
第 128 図	洞Ⅲ遺跡中・近世遺構分布図 (3) .....	208	第 177 図	82・85号掘立柱建物 .....	265
第 129 図	洞Ⅲ遺跡中・近世遺構分布図 (4) .....	209	第 178 図	83号掘立柱建物 .....	266
第 130 図	洞Ⅲ遺跡中・近世遺構分布図 (5) .....	210	第 179 図	84号掘立柱建物 .....	267
第 131 図	洞Ⅲ遺跡中・近世遺構分布図 (6) .....	211	第 180 図	86・87号掘立柱建物 .....	268
第 132 図	洞Ⅲ遺跡中・近世遺構分布図 (7) .....	212	第 181 図	88号掘立柱建物 .....	269
第 133 図	1号掘立柱建物 .....	215	第 182 図	89号掘立柱建物 .....	270
第 134 図	2・4号掘立柱建物 .....	216	第 183 図	90号掘立柱建物 .....	271
第 135 図	5・6号掘立柱建物 .....	217	第 184 図	91号掘立柱建物 .....	272
第 136 図	7・8号掘立柱建物 .....	218	第 185 図	92・93号掘立柱建物 .....	273
第 137 図	9・10号掘立柱建物 .....	219	第 186 図	94・95号掘立柱建物 .....	274
第 138 図	11・12号掘立柱建物 .....	220	第 187 図	96～98号掘立柱建物 .....	275
第 139 図	13・16号掘立柱建物 .....	221	第 188 図	3・32・36・39号掘立柱建物、1～5号柱列 .....	276

第 189 図	6～12号柱列	277	第 219 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物棟方位分類 II-a 類	344
第 190 図	掘立柱建物出土遺物	278	第 220 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物棟方位分類 II-b 類	344
第 191 図	溝位置図	279	第 221 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物棟方位分類 II-c 類	345
第 192 図	溝断面図	280	第 222 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物棟方位分類 II-d 類	345
第 193 図	2号溝出土遺物	281	第 223 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物構造分類図	346
第 194 図	2・3号溝出土遺物	282	第 224 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物構造分類 A 類	347
第 195 図	2号溝出土の平安時代遺物	282	第 225 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物構造分類 B 類	347
第 196 図	1・2号井戸、2号井戸出土遺物	283	第 226 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物構造分類 C 類	348
第 197 図	1・3～11号土坑	288	第 227 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物構造分類 D 類	348
第 198 図	12～17号土坑	289	第 228 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物構造分類 E 類	349
第 199 図	18～20号土坑	290	第 229 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物構造分類 F 類	349
第 200 図	21～28号土坑	291	第 230 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物構造分類 G 類	350
第 201 図	29・31・32・34号土坑	292	第 231 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物構造分類 H 類	350
第 202 図	35～39号土坑	293	第 232 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物構造分類 I 類	351
第 203 図	40～42・46号土坑	294	第 233 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物面積分類図	353
第 204 図	土坑出土遺物 (1)	295	第 234 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物面積分類 I 類	354
第 205 図	土坑出土遺物 (2)	296	第 235 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物面積分類 II 類	354
第 206 図	土坑出土遺物 (3)	297	第 236 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物面積分類 III 類	355
第 207 図	土坑出土遺物 (4)	298	第 237 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物面積分類 IV 類	355
第 208 図	土坑出土遺物 (5)	299	第 238 図	洞Ⅲ遺跡周辺の城館分布図 (1:50,000)	357
第 209 図	グリット出土遺物 (1)	300	第 239 図	洞 I 遺跡中・近世陶磁器の世紀別出土量	364
第 210 図	グリット出土遺物 (2)	301	第 240 図	洞 II 遺跡中・近世陶磁器の世紀別出土量	365
第 211 図	グリット出土遺物 (3)	302	第 241 図	洞Ⅲ遺跡中・近世陶磁器の世紀別出土量	366
第 212 図	グリット出土遺物 (4)	303	第 242 図	洞 I 遺跡中世陶磁器出土位置図	367
第 213 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物分布図	338	第 243 図	洞 I 遺跡近世陶磁器出土位置図	368
第 214 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物 東西棟	340	第 244 図	洞 II 遺跡中世陶磁器出土位置図	369
第 215 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物 南北棟	340	第 245 図	洞 II 遺跡近世陶磁器出土位置図	370
第 216 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物棟方位分類図	341	第 246 図	洞Ⅲ遺跡中世陶磁器出土位置図	371
第 217 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物棟方位分類 I-a・a' 類	343	第 247 図	洞Ⅲ遺跡近世陶磁器出土位置図	372
第 218 図	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物棟方位分類 I-b・b' 類	343			

## 付 図

付図 1 洞 I 遺跡全体図

付図 2 洞 II 遺跡全体図

付図 3 洞Ⅲ遺跡全体図

# 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表		10
第2表	石器観察表		16
第3表	洞Ⅰ遺跡遺物観察表	1 平安時代 ① 1号住居跡出土遺物 ② 1区J-09落ち込み出土遺物 ③ 包含層出土遺物 2 中・近世 ① 洞Ⅰ遺跡出土陶磁器 ② 1号井戸出土遺物 ③ グリット出土遺物	75 77 79 96 99 99
第4表	洞Ⅱ遺跡遺物観察表	1 平安時代 ① グリット出土遺物 2 中・近世 ① 洞Ⅱ遺跡出土陶磁器 ② 鍛冶屋敷跡出土遺物 ③ 3号溝出土遺物 ④ グリット出土遺物	159 160 168 169 173
第5表	洞Ⅲ遺跡遺物観察表	1 平安時代 ① 2号住居跡出土遺物 ② 3号住居跡出土遺物 ③ 4号住居跡出土遺物 ④ 5号住居跡出土遺物 ⑤ 6号住居跡出土遺物 ⑥ 2号土坑出土遺物 ⑦ グリット出土遺物 2 中・近世 ① 洞Ⅲ遺跡出土陶磁器 ② 掘立柱建物出土遺物 ③ 2号溝出土遺物 ④ 2号井戸出土遺物 ⑤ 土坑出土遺物 ⑥ グリット出土遺物	304 318 319 320 322 322 323 327 332 332 333 333 335
第6表	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物の棟方向分類表		339
第7表	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物の棟方位分類表		342
第8表	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物の構造分類表		346
第9表	洞Ⅲ遺跡掘立柱建物の面積分類表		353
第10表	洞Ⅰ遺跡出土陶磁器集計表		359
第11表	洞Ⅱ遺跡出土陶磁器集計表		360
第12表	洞Ⅲ遺跡出土陶磁器集計表		361



## 第I章 調査にいたる経過

昭和48年4月1日付けで日本鉄道建設公団（以下、鉄建公団と略称）と群馬県教育委員会（以下、県教委と略称）は、群馬県内を通過する上越新幹線の路線上に分布する22箇所の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について、「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結し、併せて同日付にて昭和48年度の「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結し、発掘調査に着手した。用地買収が十分に解決しない中で、工事計画との関係があり、地権者の了解を得て昭和48年5月より利根郡月夜野町上津に所在する十二原遺跡－No69地区－の調査を端緒として、以後昭和50年3月末日まで、次の遺跡を調査した。

1	昭和48年8月～10月	利根郡月夜野町上津所在	大原遺跡第1次調査－No70地区－
2	昭和48年12月	同上	大原遺跡第2次調査
3	昭和48年10月～49年4月	高崎市下小鳥所在	下小鳥遺跡－No22地区－
4	昭和49年11月～50年3月	高崎市上佐野所在	舟橋遺跡第1次調査－No21地区－
5	昭和49年4月～50年2月	高崎市大八木所在	融通寺遺跡－No24・25地区－
6	昭和49年9月～50年3月	同上	熊野堂遺跡第1次調査－No26地区－
7	昭和49年9月～10月	利根郡月夜野町上津所在	大原遺跡第3次調査

ところで、昭和48・49年度の調査を通して鉄建公団及び県教委が常に課題としたことは、上越新幹線の大規模工事の一つでもあり、しかも、最大の埋蔵文化財包蔵地の面積を有する仮称上毛高原駅周辺の調査をいかに進めるかであった。この区域には分布調査の段階でNo76・78地区の遺跡が確認されており、新幹線の工事計画の関係から1日も早く調査を開始する必要があった。

鉄建公団は仮称上毛高原駅が建設される利根郡月夜野町の上組・橋上・橋下地区の上越新幹線対策委員会（以下、対策委員会と略称）、地権者会と昭和47年度以来用地買収交渉を進めてきたが、折衝は思うように進展せず、中心杭・巾杭も打たれぬまま昭和50年を迎えた。そして、昭和49年度の調査が終了間近となった3月に一つの動きが生じた。即ち鉄建公団及び県教委は文化財調査を打開すべく一時鉄建公団の用地買収交渉を棚上げにして、文化財調査を優先させて、用地買収前の文化財調査が可能か否かの打診を地元の月夜野町教育委員会（以下、町教委と略称）を通じて対策委員会、地権者会に申し入れた。

町教委の数回にわたっての対策委員会・地権者会との接触・協議が進められる中、昭和50年7月になると対策委員会・地権者会は県教委等の上記申し入れ事項の趣旨を理解し、7月14日に仮称上毛高原駅周辺の文化財調査のための地権者会議を開催してくれた。この会議の席上、県教委及び町教委は上越新幹線建設用地内の埋蔵文化財発掘調査の必要性・計画・方法等について詳細に説明を行なった。これに対して対策委員会及び地権者会は①埋蔵文化財発掘調査には協力する。②しかし調査中に土地が一時凍結されるので何等かの補償が必要である。③埋蔵文化財発掘調査は鉄建公団の用地買収とは別個の対応とする。④文化財調査に必要な新幹線建設用地の仮中心杭・仮巾杭は打つてもよいとの方針を示してくれた。



この方針に基づき県教委は7月30日に対策委員会・地権者役員と文化財調査を実施するための細部の詰め交渉をもち、その中で両者は、①埋蔵文化財発掘調査は借地方式でいく、②調査期間は降雪期間を除いた4月～12月頃までとし、凡そ2年間で終了させる。ということで合意した。しかし、この合意の中で最大の交渉課題は①の調査区域の借地料及び上物補償の評価をいくりにするかであった。前者については8月18日、8月27日、9月5日と再三にわたる交渉がもたれ、これがまとまった9月7日に地権者会の総会が開かれ、この席で一応の妥結をみた。後者については借地面積が確定しないと算定不可能との判断から、一応後日の取り扱いとしたが、年内にはすべて解決した。

昭和48年来懸案となっていた仮称上毛高原駅建設地の埋蔵文化財発掘調査は、曲折を経ながらもようやく調査可能となったが、9月8日以後も地権者会とは用水路・馬入道・発掘作業員・調査事務所建設用地・測量等細部の取扱い問題で交渉が継続され、これら細部問題交渉が煮詰った9月30日に最終の対策委員会・地権者会の総会が開かれ、この席上、①埋蔵文化財発掘調査対策区域の一括借用・返還、②調査区域内の用水路の確保、③残地補償も考慮する。等が追加・合意されて、いよいよ発掘調査着手となった。そして、この間に関係する地権者より、埋蔵文化財調査立入の承諾書・埋蔵文化財発掘承諾書もいただけることができた。調査区域確認のための仮中心杭・仮巾杭の杭打作業は9月30日に地権者会役員・対策委員会役員・地権者・県教委・町教委・鉄建公団立合いの下に測量会社によって開始された。そして10月1日には現地の発掘調査事務所に調査用の器材が搬入され、3日より調査が始まった。

仮称上毛高原駅建設地は既述の如く、県内の新幹線路線上に分布する埋蔵文化財包蔵地の中では最大の面積を有するので、調査着手時点で当該区域を古城沢を境にして2地域に分割した。各々の遺跡名は字名をとって、古城沢南側地域を「洞遺跡」(No76地区)、北側遺跡を「藪田遺跡」(No78地区)と命名した。10月より開始した調査は主に洞遺跡が対象となり、しかもそれは遺跡有無確認のための試掘調査に留めた。試掘調査は12月9日に終了したが、この間に当該地域に平安時代の竪穴住居跡を始めとする遺構が確認されたので、改めて調査体制を組みなおし、降雪期間が終了した昭和51年4月より本格的な調査にのり出した。

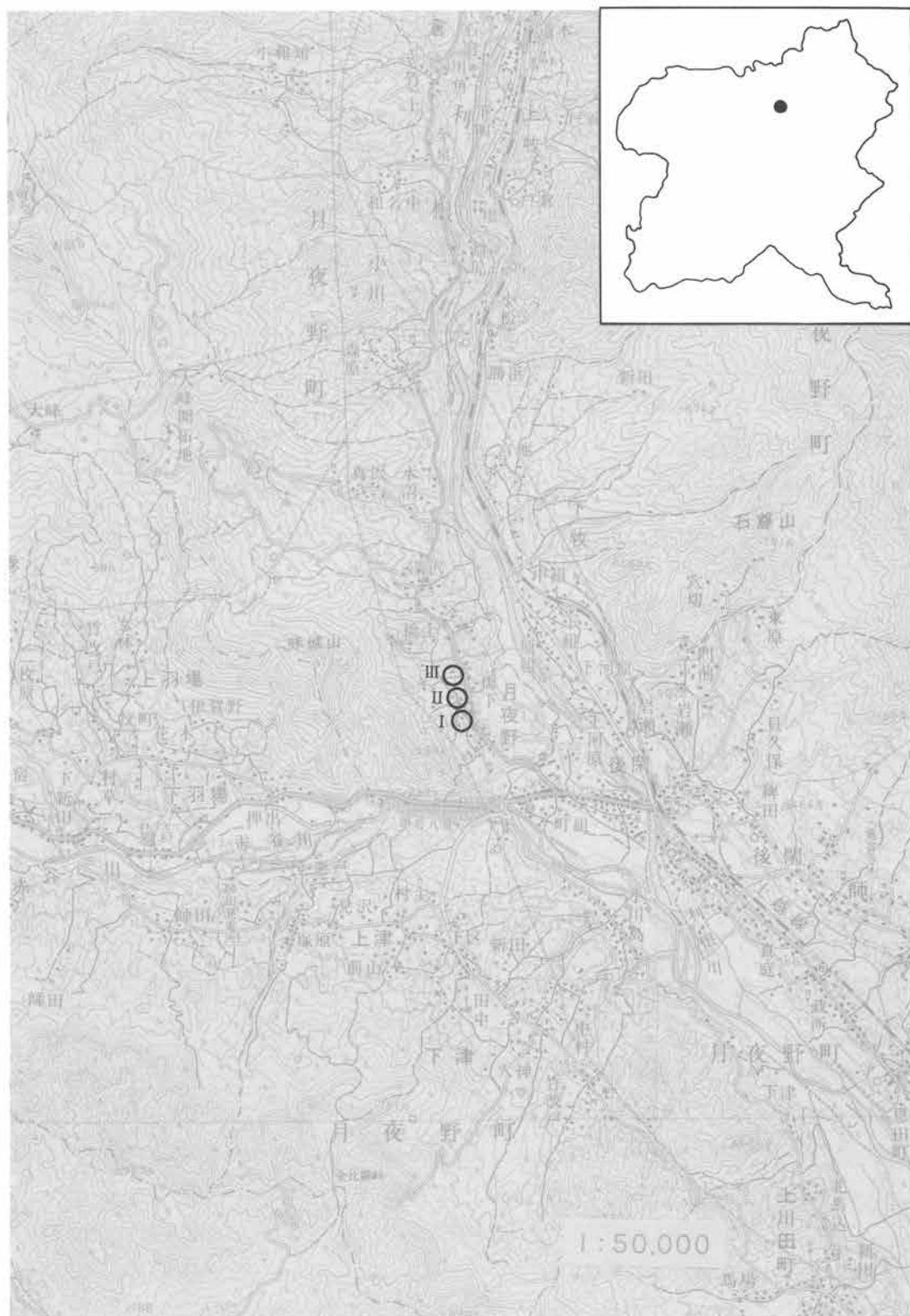
洞遺跡の発掘調査は面積が広大なことから遺構内を洞Ⅰ・洞Ⅱ・洞Ⅲ遺跡の3分割にして、次の期間により調査した。

- 1 昭和51年4月12日～10月13日 洞Ⅰ・Ⅱ遺跡第1次調査
- 2 昭和53年9月23日～12月23日 洞Ⅰ・Ⅱ遺跡第2次調査(主に宅地移転跡調査)
- 3 昭和52年9月5日～12月25日 洞Ⅲ遺跡第1次調査
- 4 昭和53年7月17日～12月22日 洞Ⅲ遺跡第2次調査

洞遺跡の調査は試掘調査を含めて4年の歳月を要したが、その調査内容は昭和60年～61年に群馬県教育委員会の委託を受けて財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が整理作業を行い、以下に報告するところのものをまとめた。

洞遺跡の調査は地元月夜野町の上組・橋上・橋下地区の地権者等の文化財に対する理解があったからこそ、降雪地域という悪条件はあったものの、短期間に調査を終了することができた。ここに改めて対策委員会・地権者会・地元関係者の文化財調査に対する努力を明記しておきたい。





第1図 洞I・II・III遺跡位置図

## 第II章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

上越新幹線建設に伴う「仮称上毛高原駅」建設予定地は月夜野町大字月夜野の字洞と字藪田にまたがる広範囲の包蔵地である。この包蔵地は事前の分布調査で字境である古城沢をはさんで南側をNo.76地区（洞遺跡）、北側をNo.78地区（藪田遺跡）と呼称した。

No.76地区（洞遺跡）は利根川右岸上位段丘で南北に連なる洞山の裾部にあり、調査対象区域は距離約600m、幅平均50mの範囲で予備調査の結果、3地点に遺構・遺物の分布が確認され、南よりそれぞれ洞I遺跡・洞II遺跡・洞III遺跡として本調査に入った。

各遺跡の調査面積は洞I遺跡が4,700㎡、洞II遺跡が5,300㎡、洞III遺跡が7,500㎡である。3遺跡の調査方法の基本は以下の通りである。

- ① 100mを1調査区とし、3m×3mをグリットの基本単位とした。しかし、調査区末端は1m×3mを1グリットとした。
- ② グリットの基軸線設定に際しては上越新幹線建設用センター杭（100m杭）を利用した。基軸線の方位はN-2°35'10"-Wである。
- ③ グリットの表示は基軸線に平行する方向を算用数字（01～34）で表わし、直交する方向をアルファベット（A～Z）で表わした。グリットの基点は南西隅に置き、この組み合わせに調査区名を加えてグリット名称とした。なお、洞III遺跡は調査範囲の変更がグリット設定後にあり、調査区が西端のAラインより西へ延びたため小文字のアルファベット（u～x）を付けてグリット表示を行なった。
- ④ 遺構番号は原則として遺跡単位で種類ごとに通しの番号とした。
- ⑤ 遺構図面は平・断面図ともに1/20作図を原則とし、平面図作成には平板を使用した。
- ⑥ 遺構の写真撮影は6×9版プロニーサイズと35mm版を併用した。

### 第2節 調査の経過

No.76地区（洞遺跡）の予備調査は昭和50年10月1日～12月9日の約2ヶ月にわたって実施された。調査は宅地部分を除く距離約600m、幅平均50mの範囲に1.5m×9mのトレンチを原則として10mに1本の間隔で発掘し遺構・遺物の確認と遺跡の範囲確認を行なった。この結果、3ヶ所に遺跡を確認しそれぞれ洞I・洞II・洞III遺跡として本調査を実施することとした。

洞I遺跡と洞II遺跡の第1次調査は調査区内の宅地部分を除く区域の調査を行なった。また、両遺跡は近接しており一部平行して調査を実施した。

洞I遺跡の第1次調査は昭和51年4月12日に開始した。調査は多量の遺物が包含されていると予想された平安時代の遺物包含層を中心に実施された。包含層は地表より約1.5mの深さにあり、調査区の

拡張を行ないながら遺物を検出して行った。また、拡張に伴ない包含層周辺で平安時代と近世の遺構を検出した。洞I遺跡の第1次調査は9月末より調査区の埋め戻しを開始し10月8日をもって終了した。

洞II遺跡の第1次調査は洞I遺跡調査中の昭和51年7月20日より開始した。第1次調査は鍛冶屋敷跡とその周辺部、調査区北東部に広がる掘立柱建物群のうち北半の建物群の調査を行なった。この間調査区周辺に散布する中・近世陶磁器の採集も実施した。洞II遺跡の第1次調査は10月13日をもって調査区の埋め戻しを終了した。

洞I・II遺跡の調査班は調査終了後、北約1kmに位置する同じく上越新幹線建設予定地であるNo.79地区（深沢遺跡）の予備調査を実施して昭和51年度の月夜野地区の調査を完了した。

洞I・II遺跡の第2次調査は宅地移転跡地の調査として設定され、昭和53年度に実施した。上越新幹線建設予定地である前田原・藪田遺跡の調査完了後、洞I遺跡は昭和53年9月23日から10月26日まで、洞II遺跡は同年10月16日から12月23日まで実施した。

洞I遺跡は第1次調査地点をはさんで調査区の北半と南端部分の調査を行ない、調査区北半では第1次調査で確認された近世遺構の延長である柱穴群や土坑群を検出した。また、調査区南端部分も拡張し遺構・遺物の検出を行なったが少量の平安時代の土器片を採集しただけで遺構は検出されず調査を終了した。

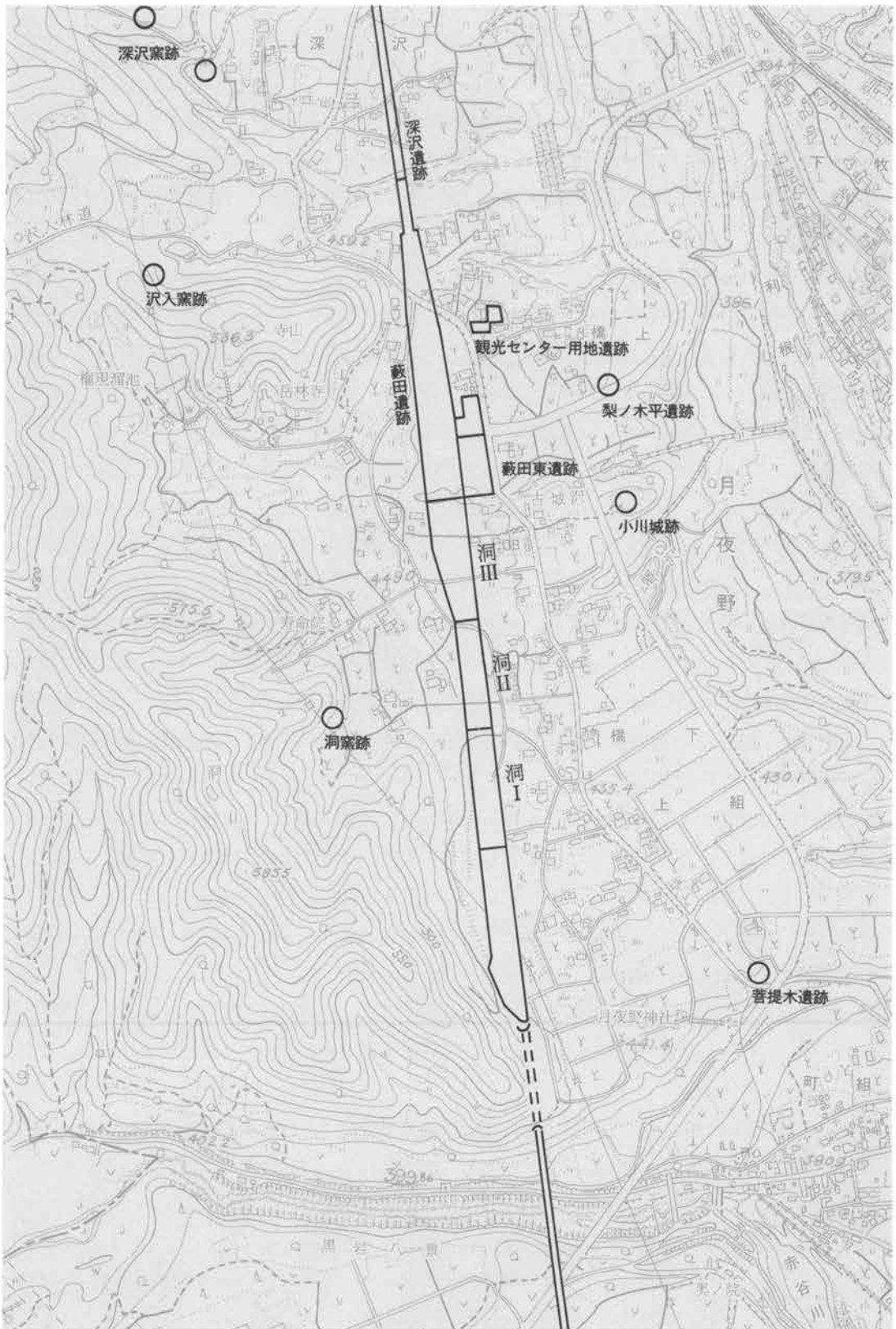
洞II遺跡は調査地点が3ヶ所に分かれ、鍛冶屋敷跡に東接する調査地点では近世と思われる溝と土坑を数基検出したにとどまったが、南東部の調査地点で建物跡・井戸・溝等を検出した。特に検出された3号溝は多量の鉄滓が流れ込んでおり鍛冶屋敷跡との関連を窺わせた。また、多くの木器や石製品、金属製品、陶磁器片も出土した。北東部の調査地点では第1次調査で確認された掘立柱建物群に続く建物群を検出し調査を終了した。

洞III遺跡は遺構が濃密に分布しているものと予想されたため、昭和52年9月5日より10月30日まで2m×2mの試掘坑を1グリットおきに設定し遺構・遺物の分布状態の確認調査を実施し、調査区の台地全面に遺構の広がりを確認した。

確認調査終了後、建設工事計画の関係から引き続き調査区北端の古城沢に沿った幅約66m、距離約20mの範囲を中心に本調査を実施することとなった。

第1次調査では平安時代の住居跡1軒と中・近世の掘立柱建物跡5軒、建物群を区画する溝等を検出した。住居跡からは多量の土器が出土したが、北接する藪田遺跡と同様の出土状態であり、須恵器生産工人集落の存在を窺わせた。

第2次調査は昭和53年7月17日より開始した。調査は重機により台地全面の表土を掘削し、調査区の北より遺構の検出を開始した。台地上には多くの柱穴が分布しており重複率の高さを窺わせた。また、建物群を区画するL字状の溝や建物群と重複する平安時代の住居跡や多くの土坑が確認された。調査前半は北半部分の建物群と溝の調査を中心に行なわれ、神奈川大学の学生の協力も得て調査を進めた。後半は南半部分の建物群の密集する部分の調査となり、1軒ごとの建物の確認に細心の注意を払った。同時に平安時代の住居跡や土坑・井戸等の調査も併行して実施し昭和53年12月22日をもって調査を終了した。



第2図 洞I・II・III遺跡調査範囲と周辺遺跡（1：10,000）

## 第三章 遺跡の立地と歴史的環境

洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡は県北山間部のほぼ中央奥利根への入口にあたる利根郡月夜野町に所在する。月夜野町は東を三峰山（標高1,122m）北西を大峰山（標高1,254m）南西を名胡桃山（標高862m）に囲まれ、ほぼ中央を利根川が南流し西方より赤谷川が合流している。3遺跡はこの合流点より北西へ約2kmの位置にあり、利根川右岸段丘上で大峰山東南麓の味城山（標高757m）の末端である洞山（標高589m）の東面に接している。

調査時においては畑地と水田の間に民家が点在する山間農村であったが、現在は上越新幹線上毛高原駅のある県北の交通の要衝となっている。

遺跡のある利根川右岸は高さ約30mの段丘崖を境に洪積面と沖積面を形成しており、洪積面はさらに高さ約6mの小段丘崖を境に上位と下位とに分かれている<sup>注1</sup>。3遺跡はともに洪積面上位に立地している。また、遺跡のある一帯の地質は緑色凝灰岩地帯で西接する味城山一帯は流紋岩質（軽石）結晶凝灰岩地帯であり、遺跡の北約1kmにある東流する深沢以北は石英安山岩質軽石凝灰岩地帯となっている<sup>注2</sup>。3遺跡周辺では良質の粘土が採取できる。

3遺跡はほぼ100mの間隔をおいて南北に位置し、最も南にある洞Ⅰ遺跡は洪積面上位で洞山東面裾部の緩傾斜地に立地している。続く洞Ⅱ遺跡は東流する八幡沢の最深部で洞山の湾入した山体（洞窠址が存在）の谷の出口にあたる扇状に広がる緩傾斜地に立地している。洞Ⅱ遺跡と洞Ⅲ遺跡との間には上記八幡沢に連なる幅約80mの谷地が入り込んでおり両遺跡と約2mの比高差を持っている。洞Ⅲ遺跡は南を谷地に、北を開析谷である東流する古城沢によって区切られた東西に走る幅約100mの台地上に立地している。この台地の東端は洪積面を2分する小段丘崖が南北に走っており、小段丘崖下には八幡沢と古城沢に挟まれた台地上に崖端城である小川城址がある。また、古城沢を挟んで北には須恵器生産工人集落である藪田・藪田東遺跡がある<sup>注3</sup>。

月夜野町における調査・報告例としては昭和5年の「利根郡誌」に上津塚原出土の弥生中期筒形土器があり、昭和13年の「上毛古墳総覧」<sup>注7</sup>では塚原古墳群で61基、古馬牧古墳群で97基が報告されている。昭和16年には洞と真沢の窠址が調査・報告され古窠址の所在地として知られるようになった。昭和28年には塚原古墳群の測量調査が行われ、同時に上津天神遺跡<sup>注10</sup>で古墳時代前期の住居跡の調査も行っている。昭和30年には八束脛洞窟遺跡<sup>注11</sup>が報告され縄文晩期～弥生中期を中心とする墓址であることが明らかとなった。昭和36年には「桃野村誌」<sup>注1</sup>が刊行され塚原古墳群測量調査の結果の一端が紹介された。昭和45・46年には洞窠址の本格的な調査が行われ登窯3基を検出、奈良時代末～平安時代にいたる窠址であることが判明した。昭和47年には「古馬牧村誌」<sup>注13</sup>が刊行され古馬牧古墳群の分析が行われた。

昭和48年以降は利根川右岸を通る上越新幹線や利根川左岸を通る関越自動車道および名胡桃平を横断する月夜野バイパス等の建設事業の事前調査として昭和58年まで次々に大規模な発掘調査が行われ、この成果は次第に報告される状況にあり、当地域の歴史がより具体的に明らかになりつつある。

月夜野町における遺跡は段丘上や山麓裾部に広く分布し、縄文時代～平安時代にいたる多くの集落



址や古墳群・窯址群があり、中世から近世にかけては城址や館跡・建物跡等がある。

旧石器時代の遺跡は現在のところ利根川左岸だけに確認されている。後田・善上・大竹・小竹Aの遺跡があり、特に後田遺跡はナイフ形石器を中心に4,500点以上の石器と20ヶ所以上のユニットが確認され、その広さは13,000m<sup>2</sup>に及ぶ大遺跡である。

縄文時代の遺跡としては草創期から早期にかけては利根川左岸では大竹・小竹A・宮地の各遺跡があり、利根川右岸では、三後沢・都・前中原等の遺跡がある。都遺跡からは時期は明確ではないが有舌尖頭器2点が出土している。前期～中期の遺跡としては利根川左岸に後田・善上・大竹・小竹A・小竹B・宮地等があり、利根川右岸では城平・諏訪・三後沢・十二原・十二原II・梨の木平・深沢・前中原遺跡等多くの遺跡があり住居跡も数多く確認されている。前期の遺跡では大木式や有尾式の土器が併出する例がある。また、梨の木平遺跡で中期末の敷石住居跡が確認されている。後期～晩期の遺跡は少なく現在のところ深沢と八束脛洞窟遺跡だけである。深沢遺跡では後期中葉の石棺状配石が50基近く確認された。

弥生時代の遺跡は利根川左岸では八束脛洞窟と大竹遺跡だけで右岸では諏訪・三後沢・十二原・十二原II・大原・大原II・上津塚原・梨の木平・藪田等多くの遺跡があり、特に利根川と赤谷川の合流点の南西に広がる通称「名胡桃平」の段丘上に多い。

古墳時代の遺跡は古馬牧古墳群のある利根川左岸南半と塚原古墳群のある名胡桃平に多く合流点より北西に広がる本遺跡のある段丘上には遺跡は確認されていない。利根川左岸では後田・師B・門前等があり、名胡桃平では諏訪・十二原・上津天神等の遺跡がある。後田遺跡では約270軒の後期の住居址があり県北最大の集落址である。また、古馬牧・塚原両古墳群とも6世紀末～7世紀の古墳群である。

奈良～平安時代の遺跡は利根川両岸の段丘上に16遺跡が確認されており、住居跡も240軒以上確認されている。特に合流点より北西の本遺跡周辺<sup>注25</sup>の山麓裾部には洞・沢入・深沢・真沢・水沼・須磨野の各窯址があり月夜野窯址群と称されている。月夜野窯址群は8世紀～10世紀にかけての時期で県北一帯に須恵器を供給しており、本遺跡も含め藪田・藪田東・梨の木平・前中原の各遺跡は須恵器生産工人の集落址である。また、倭名類聚鈔によれば利根郡には4郷が見られ、当地域は「吳桃<sup>桑久</sup>美<sup>美</sup>」の郷と推定されており前述のごとく広く通称として「名胡桃」の名が残っている。また、名胡桃地内には朝鮮系渡来人に関連すると言われている「村主神社」が鎮座している。なお、利根川左岸一帯は古馬牧と呼ばれ、延喜式に見られる久野牧の地と推定されており牧に由来する地名が多く残っている。

中世の当地域の歴史は明らかではないが、当地方の大部分は利根庄に包括され、鎌倉初期からは地頭として大友氏が補任され、南北朝以降は万里小路家の領有となったとされる。なお、昭和57年に大友館と称されている居館址が古馬牧地区で調査された。

戦国期には利根川を挟んで段丘崖上に名徳寺城・名胡桃城・小川城・石倉城の各城が築かれ、越後から関東への交通の要衝でもある当地域は沼田氏から上杉・北条・武田と目まぐるしく領有が移り変わって行き、戦国末は真田氏の領有となる。なお、名胡桃城と小川城は一部が近年調査されている。

中世～近世にかけての遺跡は本遺跡も含め15の遺跡で掘立柱建物や井戸・溝等が確認されており、舶載陶磁器や常滑・伊万里・唐津等の陶磁器が多く出土している。



第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺 跡 名	所 在 地	調査年度	遺 跡 の 概 要	文 献
1	洞Ⅰ遺跡	月夜野町大字月夜野字洞1369	S51・S53		
2	洞Ⅱ遺跡	月夜野町大字月夜野字洞1442	S51・S53		
3	洞Ⅲ遺跡	月夜野町大字月夜野字洞1506	S52・S53		
4	藪田遺跡	月夜野町大字月夜野字藪田1757	S52・S53	弥生時代住居跡1軒。粘土探掘坑を伴う平安時代集落、住居跡10軒。中・近世掘立柱建物28軒。	注4
5	藪田東遺跡	月夜野町大字月夜野字藪田1756	S54	藪田遺跡と同一の遺跡である。平安時代住居跡8軒と粘土探掘坑群。中・近世掘立柱建物6軒。	注5
6	観光センター用地遺跡	月夜野町大字月夜野字藪田1743	S54	調査地点2ヶ所。遺跡名は仮称。中・近世掘立柱建物20数基検出。	注27
7	深沢遺跡	月夜野町大字月夜野字深沢2111	S54	縄文時代中期住居跡1軒、後期配石遺構約50基。平安時代住居跡2軒。	注23
8	前田原遺跡	月夜野町大字月夜野字前田2397	S53	平安時代住居跡1軒。近世掘立柱建物2軒。	注28
9	前中原遺跡	月夜野町大字小川字前中原18	S50・S51	縄文時代早期炉穴4基、前期住居跡4軒、土坑22基。平安時代住居跡1軒。	注19
10	月夜野窯址群 洞A支群	月夜野町大字月夜野字洞	S12・S45・ S46	8c末～10cの登窯4基を確認。須恵器・瓦併用。	注8・ 12・25
11	月夜野窯址群 沢入A支群	月夜野町大字月夜野字藪田1691	S54	窯体の一部と灰原を確認、須恵器・瓦併用。窯址群内で確認されている最古の窯址。8c後半。	注25
12	月夜野窯址群 深沢C支群	月夜野町大字月夜野字深沢2307		複数の窯址が予想される。10c代。杯・碗・羽釜を焼成。	注25
13	月夜野窯址群 深沢B支群	月夜野町大字月夜野字深沢2324		4基の窯体を確認。10c代。杯・碗・甕・羽釜を焼成。	注25
14	月夜野窯址群 須磨野A支群	月夜野町大字月夜野字須磨野 2082	S56	窯体未確認。10c代。杯・碗・鉢・脚付羽釜を焼成。	注25
15	月夜野窯址群 水沼A支群	月夜野町大字小川字真沢2761		窯体の一部を確認。10c代。杯・碗・羽釜・瓦を焼成。	注25
16	月夜野窯址群 真沢A支群	月夜野町大字小川字前田2424	S16	窯体の一部を確認。10c代。杯・碗・脚付羽釜・甕を焼成。	注25



No.	遺跡名	所在地	調査年度	遺跡の概要	文献
17	梨の木平遺跡	月夜野町大字月夜野字藪田	S 51	縄文時代中期末敷石住居跡 1 軒。弥生時代中期包含層。平安時代住居跡 1 軒。	注22
18	小川城址	月夜野町大字月夜野字古城1132	S 55	明応 7 年 (1498) 築城。二の丸の一部を調査。掘立柱建物 7 軒と道路配石遺構を確認。	注 3・26
19	菩提木遺跡	月夜野町大字月夜野	S 56	経塚 1 基を確認。一字一切経多数出土。	注24
20	名胡桃城址 (城平遺跡)	月夜野町大字下津字城平3491	S 56	天正年間築城。馬出部を調査。昭和24年県指定史跡。	注20・26
21	諏訪遺跡	月夜野町大字下津字諏訪3376	S 56	縄文時代土坑46基。弥生時代後期住居跡 1 軒。古墳時代後期住居跡 6 軒。	注20
22	三後沢遺跡	月夜野町大字下津字三後沢	S 57	縄文時代前期～中期住居跡 7 軒。弥生時代後期住居跡 7 軒。	注17
23	十二原遺跡	月夜野町大字上津字十二原2255	S 48	縄文時代中期包含層。弥生時代後期住居跡 1 軒。古墳時代中期住居跡 1 軒。平安時代住居跡 1 軒。	注19
24	十二原Ⅱ遺跡	月夜野町大字上津字十二原	S 57	縄文時代前期～中期住居跡11軒、土坑 8 基。弥生時代後期住居跡 6 軒。	注17
25	大原遺跡	月夜野町大字上津字大原929	S 48・S 49	縄文時代土坑 6 基。弥生時代後期住居跡 2 軒。平安時代住居跡 1 軒。	注19
26	大原Ⅱ遺跡	月夜野町大字上津字大原	S 58	縄文時代陥穴22基、貯蔵穴 4 基、土坑 9 基。弥生時代後期住居跡 3 軒。	注21
27	村主遺跡	月夜野町大字上津字大原	S 58	奈良時代住居跡14軒。平安時代住居跡17軒。	注21
28	塚原古墳群	月夜野町大字上津字塚原	S 28	「上毛古墳総覧」では49基の古墳を確認。昭和28年。	注 7
29	上津天神遺跡	月夜野町大字上津字不動天神2609	S 28	古墳時代中期住居跡 2 軒。	注10
30	門前A遺跡	月夜野町大字後閑字門前	S 57	縄文時代前期～中期の遺物。古墳時代後期住居跡 7 軒。奈良・平安時代住居跡 9 軒。	注16
31	高平遺跡	月夜野町大字下牧字高平2293	S 58	縄文時代土坑 2 基、前期～中期の遺物。平安時代住居跡 5 軒。	注16
32	大竹遺跡	月夜野町大字下牧字大竹	S 58	旧石器時代ユニット25。縄文時代住居跡 2 軒、土坑33基。平安時代住居跡11軒。	注16

第三章 遺跡の立地と歴史的環境

No	遺跡名	所在地	調査年度	遺跡の概要	文献
33	小竹A遺跡	月夜野町大字下牧字小竹	S58	旧石器時代ユニット2。縄文時代早期・中期の遺物。近世溝2条、畑状遺構、炭焼窯。	注16
34	小竹B遺跡	月夜野町大字下牧字小竹	S57・S58	縄文時代土坑1基。近世掘立柱建物7軒、畑状遺構、暗渠。	注16
35	宮地遺跡	月夜野町大字下牧字宮地	S58	縄文時代住居跡2軒、土坑15基、草創期の土器。近世掘立柱建物1軒。	

参考文献

- 注1 『桃野村誌』 月夜野町誌編集委員会 1971
- 2 磯貝基一 「藪田東遺跡周辺の地質」 『藪田東遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 3 中束耕志・相京建史 『小川城址』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 4 下城 正・関 晴彦 『藪田遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 5 相京建史・中沢 悟・原 雅信 『藪田東遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 6 『利根郡誌』 群馬県利根教育会 1930
- 7 『群馬県史跡名勝天然記念物調査報告第五輯 上毛古墳綜覧』 群馬県 1938
- 8 山崎義男 「上野国利根郡月夜野二窯址について」 『古代文化第12巻第4号』 日本古代学会 1941
- 9 群馬大学尾崎喜左雄研究室を中心に実施。
- 10 『群馬県遺跡地図』 群馬県教育委員会 1973
- 11 山崎義男 「群馬県利根郡八束脛遺跡」 『日本考古学年報』 日本考古学協会 1955
- 12 井上唯雄 『群馬県利根郡月夜野町洞窟跡発掘調査報告』 月夜野町教育委員会 1973
- 13 『古馬牧村誌』 月夜野町誌編集委員会 1961
- 14 『群馬県埋蔵文化財調査事業団 年報2』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 15 昭和57・58年関越道新潟線建設事業の事前調査として月夜野町教育委員会が調査を実施。
- 16 大賀 建 「関越自動車道(新潟線)月夜野町埋蔵文化財発掘調査報告書』 月夜野町遺跡調査会 1985
- 17 相京建史・中沢 悟・菊地 実 「三後沢遺跡・十二原II遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 18 昭和50年月夜野町教育委員会調査。
- 19 能登 建・下城 正 「十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡』 群馬県教育委員会 1982
- 20 相京建史・中沢 悟・菊地 実 「城平遺跡・諏訪遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 21 相京建史・中沢 悟・菊地 実 「大原II遺跡・村主遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 22 能登 建・下城 正 「梨の木平遺跡』 群馬県教育委員会 1977
- 23 下城 正・西田健彦 「群馬県深沢配石遺構』 『日本考古学年報32』 日本考古学協会 1982
- 24 『群馬県埋蔵文化財調査事業団 年報1』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 25 中沢 悟 「月夜野古窯跡群』 月夜野町教育委員会 1985
- 26 山崎 一 「群馬県古城址の研究 上・下巻』 群馬県文化事業振興会 1972
- 27 昭和54年月夜野町教育委員会調査。
- 28 中束耕志・須田 茂 「上越新幹線地域文化財発掘調査概報』 群馬県教育委員会 1980

## 第IV章 基本土層

洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡のある利根川右岸は比高差約30mの段丘崖を境にして沖積面と洪積面とに分かれ、洪積面はさらに上位と下位とに分かれている。3遺跡は洪積面の上位にあり一帯は緑色凝灰岩地帯となっている。各遺跡の基本土層は以下の通りである。

### 洞Ⅰ遺跡

- 第Ⅰ層 表土（現耕作土） 暗褐色砂質土層 平均20cm。
- 第Ⅰ層下部 凝灰岩風化礫混入暗褐色土層 第Ⅰ層よりやや褐色を帯び粘性が強い。平均30cm。
- 第Ⅱ層上部 凝灰岩風化礫混入黒褐色土層 少量の風化礫が混入。多量の平安時代遺物を包含。平均20cm。
- 第Ⅱ層下部 黒褐色粘質土層 部分的に多量の風化礫を含む。風化礫混入部分に多量の平安時代遺物を包含。平均10cm。
- 第Ⅲ層 暗茶褐色粘質土層 ほとんど風化礫を含まない。平均10cm。
- 第Ⅳ層 黄褐色粘土層（ハード・ローム層） 風化礫等が混入再堆積の可能性あり。平均20cm。  
第Ⅳ層以下は上層が灰白色をなし下層へ行くに従い青白色をなす粘土層が厚く堆積。

### 洞Ⅱ遺跡

- 第Ⅰ層 表土（現耕作土） 風化礫が混入。平均10cm。
- 第Ⅱ層上部 黒褐色砂質土層 風化礫が混入やや粘性を帯びる。平均25cm。
- 第Ⅱ層下部 角礫混入黒褐色砂質土層 大形の角礫が多量に混入。調査区北端に行くに従い角礫の混入が少なくなる。平均50cm。
- 第Ⅲ層 暗褐色粘質土層 角礫が多く混入しているが粘性は強い。平均30cm。
- 第Ⅳ層 黄褐色粘質土層 小角礫が多く混入。ロームの再堆積の可能性がある。平均30cm。第Ⅳ層以下は洞Ⅰ遺跡と同様。

### 洞Ⅲ遺跡

- 第Ⅰa層 表土（現耕作土） 平均15cm。
- 第Ⅰb層 褐色土層 小角礫・FP（6世紀代降下の榛名山ニツ岳軽石）を含む。平均10cm。
- 第Ⅱ層 黒褐色土層 小角礫・FPを多量に含む。平均20cm。
- 第Ⅲa層 黒色土層 FPを多量に含む。平均15cm。
- 第Ⅲb層 黒色土層 やや粘性を帯びFPを含まない。平均30cm。
- 第Ⅳ層 暗褐色土層 やや粘性を帯び小角礫を含む。平均10cm。
- 第Ⅴ層 黄褐色土層 粘性を帯び大角礫を多量に含む。ロームの二次堆積と考えられる。平均30cm。第Ⅳ層以下は洞Ⅰ遺跡と同様。

## 第V章 洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡出土の縄文時代遺物

本遺跡における縄文時代に関する資料は、全て単発的な出土であり、包含層としての出土と断定できるものでもなかった。よって、出土地点も個々別々であったが、本章で一括して報告することとした。土器は早期から中期後半にかけてのものであった。

### 第1節 土器 (第4図、図版6)

1 (洞Ⅲ・表採) は口縁部破片であり、胎土中には多量の繊維を混入している。絡条体原体により横位と斜位に施文している。口唇部上および内面には条痕が認められる。

2 (洞Ⅲ4区O-03) は胴部破片であり、胎土中には繊維を混入している。表・裏面ともに条痕が認められる。表面の上端部には、連歯状工具によると思われる刺突が認められる。

3 (洞Ⅲ3区S-09第Ⅰ層) は胴部破片であり、灰黒色を呈する。器表面にはやや繊維の混入が認められる。表・裏面ともに条痕が施されている。

4 (洞Ⅲ・表採) は胴部破片である。胎土中には多量の繊維と小砂礫を混入している。表・裏面ともに粗い条痕が施されている。

5 (洞Ⅲ4区U-09第Ⅰ・Ⅱ層)、6 (洞Ⅲ4区W-09第Ⅰ・Ⅱ層) はともに胴部破片であり、胎土中に繊維を混入している。6の内面整形はしっかりおこなわれている。5は上端部にコンパス文が施され、以下付加条の原体で施文されている。6は2段の縄(LR)を用いている。

7 (洞Ⅲ4区W-07第Ⅰ・Ⅱ層)、8 (洞Ⅲ4区S-07)、9 (洞Ⅲ4区O-01) は胎土中に繊維を混入している。6は口縁部破片であり、他は胴部破片である。8は付加条と2段の縄(RL)の二本で羽状縄文を構成している。9は2段の縄(LR)を用いている。同図10・11 (洞Ⅲ4区G-23第Ⅱ層) は同一個体の破片と思われる。胎土中には少量の繊維を混入している。2段の縄(LR)を用いている。

12 (洞Ⅲ) は半截竹管による横位と縦位の平行沈線文と「C」字状刺突文を施している。

13 (洞Ⅲ4区Q-23第Ⅱ層) は胴部破片であり、胎土中に小砂礫と微量の雲母が混入している。1段の縄(L)が縦位に施文されている。

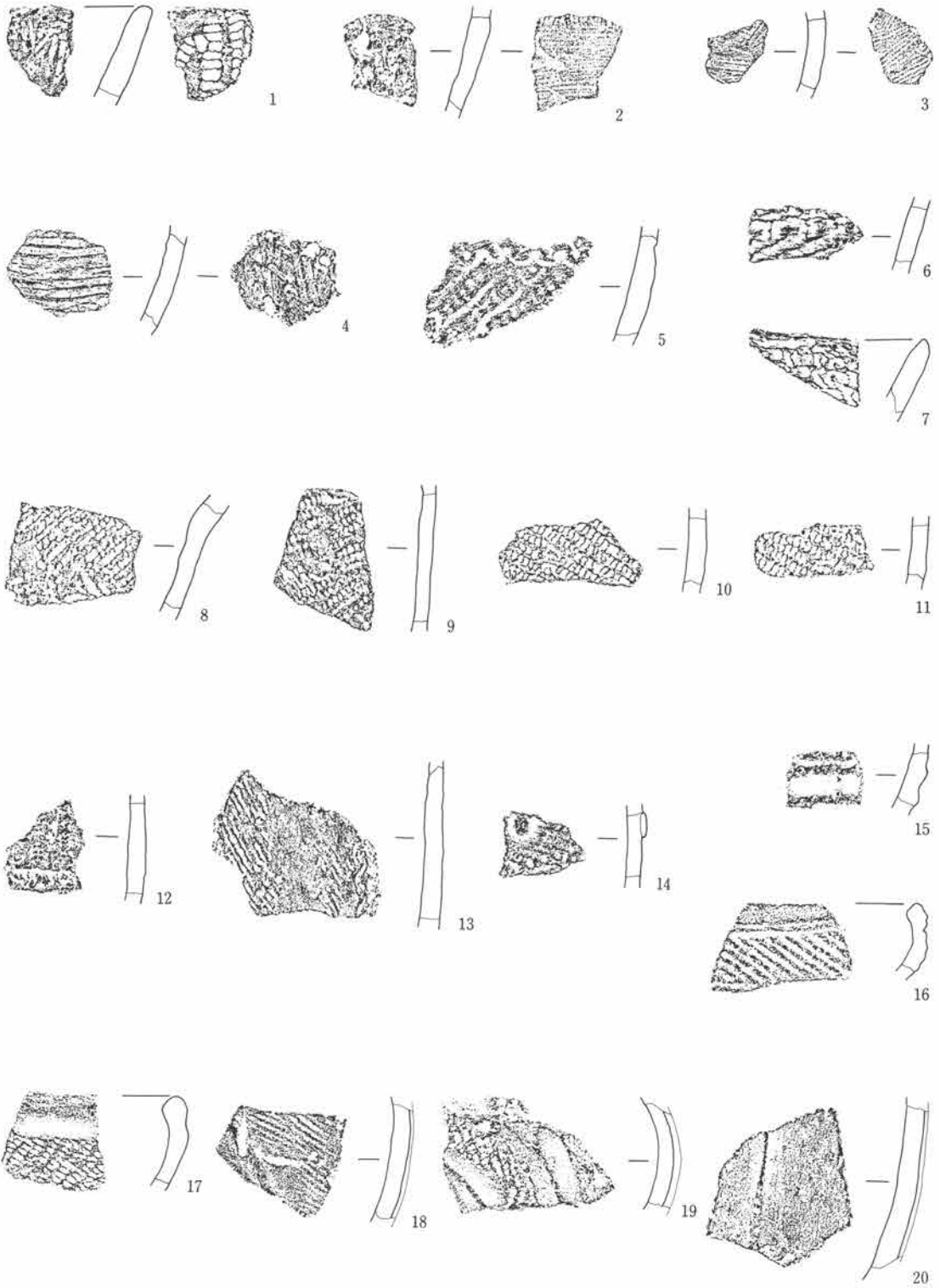
14 (洞Ⅲ) は地文に2段の縄(RL)を施し、ボタン状の粘土瘤を貼付している。

15 (洞Ⅲ3区K-22第Ⅰ層) は胎土中に雲母を混入し、幅広の沈線と刺突文を施している。

16 (洞Ⅰ1区B-03) は口縁部破片である。口縁部は内湾し、横位と斜位の沈線が施される。

17 (洞Ⅰ1区H-11第Ⅱ層)、18 (洞Ⅲ)、19 (洞Ⅲ3区I-24第Ⅱ層)、20 (洞Ⅱ3号溝)、沈線ないし隆起線と縄文で文様構成される。17は2段の縄(LR)を用いている。18は断面三角の微隆起線が施されている。19は18と同様の微隆起線と2段の縄(LR)が施されている。

以上、No.2～4は早期の段階であり、No.1は前期前半、No.5～11は前期後半の段階である。5は関山式に比定される。No.13～14は前期後半でも諸磯式段階であり、14は諸磯C式に比定される。No.12・15～20は中期の段階であり、15は阿玉台式、12・16は勝坂式、17～20は加曾利E4に比定されるものと考えられよう。



0 1 : 3 10cm

第4図 縄文土器

## 第2節 石器 (第5～11図、図版7～12)

本遺跡出土の石器は、土器と同様に単発的な出土であった。器種は打製石斧・削器・石匙・石鏃・凹石・磨石・敲石などである。石皿・錐など欠落しているなど断片的な資料ではあるが、打製石斧の中には注目される形態の資料が含まれている。

第7図14や15、第8図17は、大型の河原石の剥片を素材として製作されたものである。大型の分銅形の形態を呈するが、器体中央部両側縁の挟り込みは特徴的である。14のように主要剥離面側の挟り込み部分にのみ入念な調整加工を施すものもある。この調整加工は、大型の石斧にしては小半円状に施される例が多い。また、平面形態は基部側が方形で、刃部側は丸みをもつものや、両端が尖るものなどの変化がある。器全体が磨耗しているものも少なからず認められる。本種の打製石斧は前記したようにいくつかの特徴をもっている。今後、所属時期を解明できる可能性があり、より積極的に検討していく必要がある。

第11図34は正・裏面ともに片側縁部に入念な調整加工を施した削器であり注目されよう。また、削器として分類したものには、刃部が第10図25・28などの平縁になるものと、同図26や第11図30・35などの挟入状になるもの、第10図24、第11図31などの湾曲し外反するものがある。

また、第11図36は大型の石匙としたが、つまみ部の調整加工が顕著ではなく、今後、本例と類似する資料との比較検討が必要であろう。

第2表 石器観察表 (第5～11図、図版7～12)

番号	器種	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質
備考							
1	打製石斧	洞Ⅲ 3区 第Ⅰ層	12.8cm	5.2cm	2.0cm	145g	黒色頁岩
河原石を使用し、剥片を素材とした短冊形に近い石斧である。正面に大きく自然面を残し、周縁部を粗く剥離している。							
2	打製石斧	洞Ⅱ 3号溝	11.9cm	5.5cm	1.5cm	119g	黒色頁岩
刃部平面形は角形になり、最大幅は刃部寄りになる。刃部の先端には磨耗痕が認められる。							
3	打製石斧	洞Ⅲ 4区Q-11 第Ⅰ層	11.9cm	5.7cm	2.6cm	202g	黒色頁岩
正面右側縁部は挟りの入った状態となっている。刃部先端のみ薄い作りとしている。							
4	打製石斧	洞Ⅲ 4区 表採	10.3cm	5.0cm	2.0cm	128g	黒色頁岩
剥片を使用した片刃の石斧である。裏面には大きく第一次剥離面を残し、正面左側縁部には細かな調整加工を施している。							
5	打製石斧	洞Ⅰ 0区H-33 第Ⅱ層	9.8cm	4.5cm	1.2cm	54g	黒色頁岩
小型で薄身の作りで、最大幅は刃部にある短冊形の石斧である。							



番号	器種	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質
備考							
6	打製石斧	洞Ⅰ 1区K-01 第Ⅱ層	(9.2)cm	4.0cm	1.6cm	(60)g	黒色頁岩
No5と同様に小型で薄身の作りである。側面の稜線は湾曲している。また、刃部先端が欠損している。							
7	打製石斧	洞Ⅲ 4区 表採	8.6cm	4.2cm	1.7cm	66g	黒色頁岩
小型で短冊形に近い形態のものであったが、使用による正面左側部分の破損により、本部分の裏面に調整加工が施されている。							
8	打製石斧	洞Ⅲ 4区 G23 第Ⅱ層	7.9cm	4.3cm	1.3cm	50g	黒色頁岩
三角形に近い形態のものであり、片刃の作りになっている。							
9	打製石斧	洞Ⅰ 表採	18.1cm	9.0cm	1.9cm	432g	黒色頁岩
大きな河原石を使用し、剥片を素材とした石斧である。正面の一部には自然面を残している。大型石斧で、石鍬かもしれない。							
10	打製石斧	洞Ⅲ 4区M-03 第Ⅱ層	15.5cm	9.8cm	2.5cm	438g	黒色頁岩
No9と同様の剥片素材の石斧である。正面には大きく自然面を残し、周縁部のみ調整加工が施されている。							
11	打製石斧	洞Ⅱ 3号溝	(11.3)cm	5.8cm	1.7cm	(114)g	黒色頁岩
小型ではあるが、No10と同様の形態となり、一方が丸く張り出すつくりとなっている。							
12	打製石斧	洞Ⅲ 4区Q-11 第Ⅱ層	13.7cm	6.7cm	2.4cm	212g	黒色頁岩
裏面には大きく自然面を残している。横断面は三角形を呈する。							
13	打製石斧	洞Ⅲ 4区U-09 第Ⅱ層	8.7cm	5.0cm	1.7cm	84g	黒色頁岩
基部に主要剥離面の打面を残している。正面刃部方向から整った調整加工が施されている。							
14	打製石斧	洞Ⅱ 3号溝	19.8cm	8.3cm	2.7cm	491g	黒色頁岩
河原石を使用し、剥片を素材とした大型の分銅形に近い石斧である。挟り込み部分のみ細かな調整加工が施されている。							
15	打製石斧	洞Ⅰ 1区I-02	19.2cm	9.0cm	1.6cm	505g	黒色頁岩
No14と同様に大型の分銅形に近い形態の石斧である。上・下端とも部分的に磨耗痕が認められる。							
16	打製石斧	洞Ⅰ 表採	18.8cm	9.3cm	1.6cm	295g	黒色頁岩
粗雑なつくりではあるが、No14・15と同様の分銅形に近い形態の石斧である。薄身の作りである。							

第V章 洞I・II・III遺跡出土の縄文時代遺物

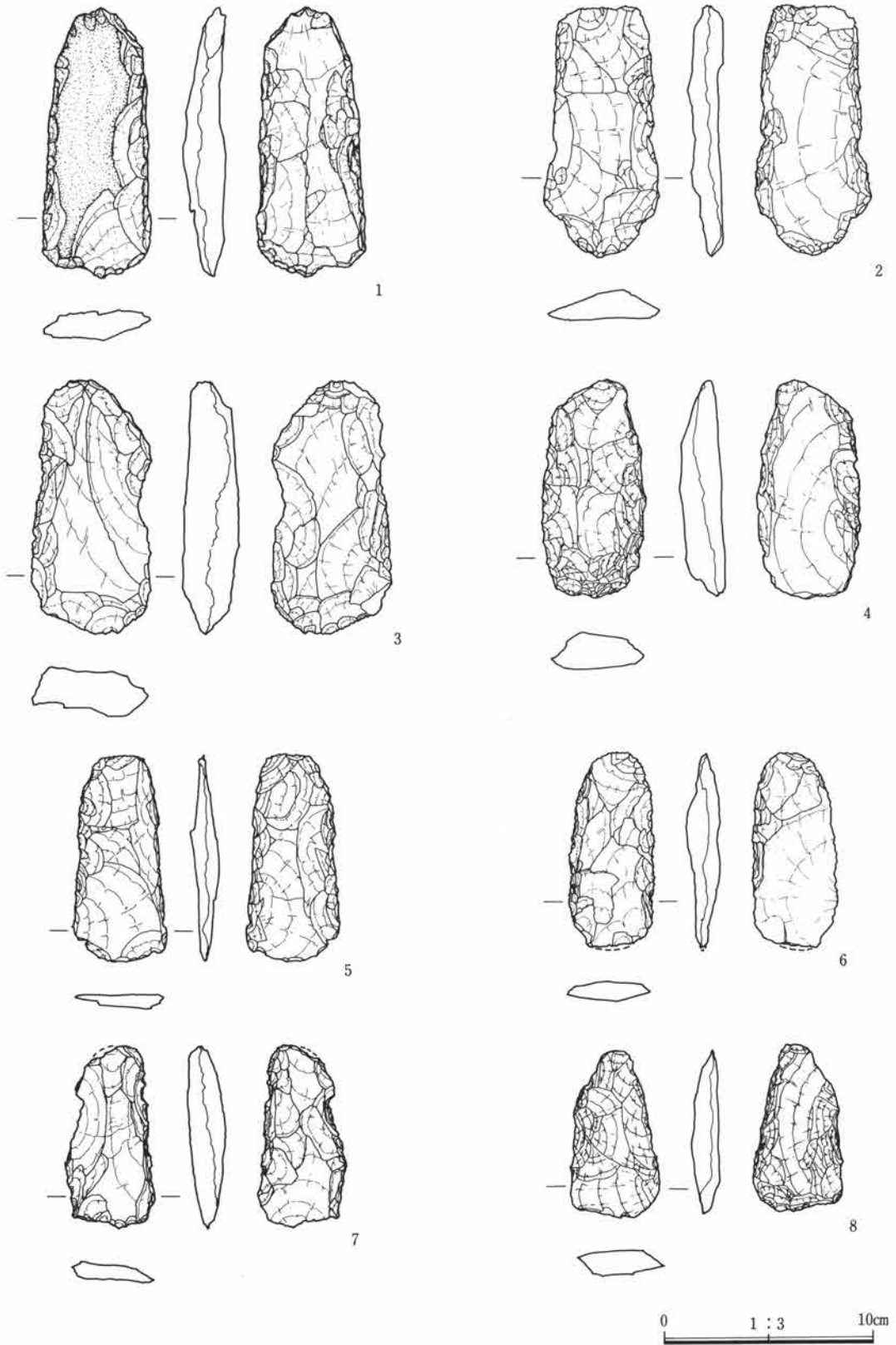
番号	器種	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質
備考							
17	打製石斧	洞I 1区I-02	16.2cm	7.8cm	2.7cm	338g	黒色頁岩
No14~16と同様の形態をした石斧であるが、基部・刃部ともに平面形は方形に呈する特徴をもつ。刃部に磨耗痕がある。							
18	打製石斧	洞I 表採	14.3cm	7.6cm	2.0cm	268g	黒色頁岩
No16と同様の形態を呈していたものと思われるが、刃部の破損により、再生加工が施され現形になったものと推定される。							
19	打製石斧	洞III 4区L-20 第I層	10.5cm	7.1cm	1.4cm	110g	黒色頁岩
小型分銅形の石斧である。No18と同様に刃部が再生されている可能性がある。							
20	打製石斧	洞I 1区K-06 第III層	17.0cm	9.6cm	2.6cm	512g	不明
小判形をした石斧である。基部は厚く、刃部は薄い作りになっている。17cmの大型の石斧であるが、全体的に薄身である。							
21	打製石斧	洞II 3号溝	(13.4)cm	10.8cm	2.6cm	(414)g	黒色頁岩
基部は欠損しているが、本来はNo20と同様の形態を呈していたものと思われる。							
22	礫器	洞II 第II層	13.1cm	7.4cm	3.6cm	394g	黒色頁岩
基部は厚い作りになっている。礫器としたが、石斧に近いものであろう。							
23	礫器	洞II 第I層	13.1cm	7.3cm	2.7cm	301g	黒色頁岩
不定方向からの粗い剝離が施され、裏面左周縁部のみ細かな調整加工が施されている。石斧の末製品の可能性もあろう。							
24	打製石斧	洞I 表採	8.5cm	15.1cm	3.1cm	348g	黒色安山岩
No20と同様の小判形を呈した石斧である。基部に自然面を残している。							
25	削器	洞I 表採	7.5cm	12.7cm	1.8cm	156g	黒色頁岩
平面形が台形状になり、最大幅部分が刃部となる。基部は調整加工を施し、薄くしている。正面右側面に自然面を残す。							
26	礫器	洞III 4区M-13 第II層	7.0cm	12.4cm	2.6cm	249g	黒色頁岩
No25と比較すると厚く、重量のある石器であるが、最大幅部分を刃部とするなどの類似点が認められる。削器かもしれない。							
27	削器	洞II 第I層	7.5cm	11.1cm	2.4cm	183g	灰色頁岩
直角三角形の剝片の底辺を刃部としている。打面の一部を除去しているが、裏面は主要剝離面を残している。							

番号	器種	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質
備考							
28	削器	洞Ⅰ 1区J-02 第Ⅱ層	8.5cm	9.8cm	2.0cm	159g	黒色頁岩
No25と同様の形態を呈する。正面左下端部は丸みをもち、右下端部は尖っている。周辺部全体に調整加工が認められる。							
29	削器	洞Ⅱ 第Ⅰ層	5.7cm	9.9cm	1.9cm	85g	黒色頁岩
No25・28と同様の石器であるが、剥片をそのまま使用し、下端部に鋸歯状の刃部を作出している。							
30	削器	洞Ⅲ 4区表採	4.9cm	8.5cm	0.9cm	36g	黒色頁岩
薄い三角形の剥片を素材とし、先端部に内湾する刃部を作出している。							
31	削器	洞Ⅰ 1区M-07 第Ⅱ層	5.5cm	9.2cm	1.4cm	70g	黒色頁岩
薄い剥片を素材とし、周縁部に外反する刃部を作出している。							
32	削器	洞Ⅲ 4区W-11 第Ⅱ層	3.6cm	6.0cm	1.1cm	21g	黒色頁岩
小型の翼状剥片を素材とし、外反する刃部を作出している。打面部分は除去している。							
33	削器	洞Ⅲ 4区U-13 第Ⅱ層	3.9cm	4.5cm	1.1cm	20g	黒色頁岩
正面右側面は欠損。							
34	削器	洞Ⅲ 4区表採	9.9cm	5.2cm	2.0cm	89g	黒色頁岩
35	剥片石器	洞Ⅰ 表採	8.2cm	5.2cm	1.6cm	46g	黒色頁岩
正面右上端部に打面を残している。左側縁部と右側縁の一部に調整加工を施し刃部を作出している。							
36	石匙	洞Ⅱ 3号溝	9.1cm	10.2cm	2.1cm	126g	黒色頁岩
正面の一部に自然面を残している。裏面は周縁部の調整加工以外は第一次剝離面を残している。基部には方形のつまみがつく。							
37	石匙	洞Ⅱ 3号溝	(2.7)cm	6.5cm	0.9cm	(11)g	黒色頁岩
つまみ部分は欠損している。刃部のみ調整加工を施し、他は第一次剝離面をとどめている。							
38	石匙	洞Ⅰ 1区K~M-13第Ⅲ層	8.2cm	3.1cm	1.3cm	(29)g	黒色頁岩
正面つまみ部分の右上端は欠損している。正裏面ともに細かな調整加工が施されている。							

第V章 洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡出土の縄文時代遺物

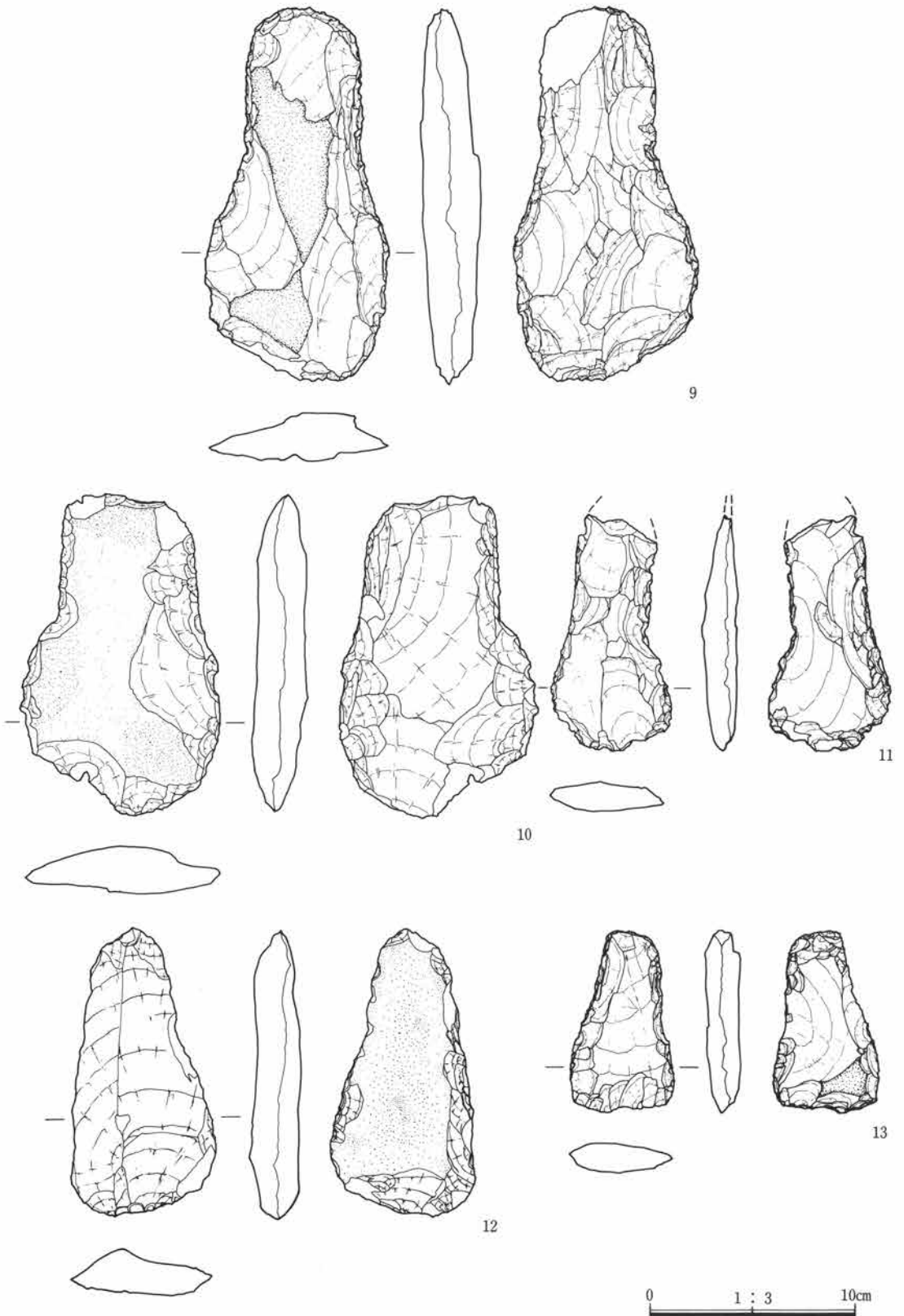
番号	器種	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質
備考							
39	石 匙	洞Ⅲ 4区W-09 第Ⅱ層	(5.7)cm	2.0cm	0.6cm	(6)g	珪質頁岩
つまみ部分の先端が欠損している。正面の周縁部には細かな調整加工が施され、裏面は先端の一部に調整痕が認められる。							
40	削 器	洞Ⅲ 4区E-11 第Ⅱ層	7.1cm	3.6cm	1.3cm	25g	黒色安山岩
正裏面ともに周縁部に調整加工が施されている。削器と思われるが、検討を要する。							
41	石 鏃	洞Ⅲ 4区 第Ⅰ層	2.8cm	2.3cm	0.7cm	2.8g	黒色頁岩
基部がやや内湾しているが、三角形に近い大型の鏃である。							
42	石 鏃	洞Ⅱ 表採	2.2cm	1.6cm	0.5cm	1.0g	黒色頁岩
基部が内湾した、無柄三角鏃である。							
43	石 鏃	洞Ⅲ 4区 表採	2.3cm	1.9cm	1.1cm	3.5g	硬質頁岩
正面中央部に一部自然面を残している。厚い作りであり、未製品の可能性もあろう。							
44	石 鏃	洞Ⅰ 1区L-08	1.6cm	1.2cm	0.4cm	0.4g	黒色頁岩
小型の二等辺三角形に近い形態の鏃である。							
45	石 鏃	洞Ⅲ 4区S-09	1.7cm	1.0cm	0.5cm	0.6g	黒色安山岩
小型の三角鏃である。							
46	石 鏃	洞Ⅲ 4区 表採	3.7cm	2.5cm	0.8cm	(5.2)g	黒色安山岩
大型で有脚の鏃である。先端部はわずかに欠損している。							
47	石 鏃	洞Ⅲ 4区K-19 第Ⅱ層	(2.3)cm	(1.5)cm	0.4cm	(0.7)g	黒曜石
先端部と正面左側脚部が欠損している。							
48	石 鏃	洞Ⅲ 4区S-09	3.2cm	1.1cm	0.5cm	1.9g	黒曜石
他のものとは形態が異なり、基部寄りに最大幅があり、基部は薄い作りである。先端部はやや磨耗している。							
49	石 鏃	洞Ⅲ 4区 表採	(3.3)cm	(1.5)cm	0.5cm	(2.2)g	黒色頁岩
先端と基部および正面左側部分が欠損している。							

番号	器種	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質
備考							
50	石 鏃	洞III 4区 表採	(3.6)cm	2.0cm	0.5cm	(2.0)g	珉質頁岩
正面左側部分は先端から側縁中央部まで欠損している。							
51	凹 石	洞III 4区G-09 第II層	(9.8)cm	8.8cm	3.8cm	(441)g	安山岩
平面形態はほぼ円形であり、断面は長方形を呈する。両面に凹みがある。磨石および敲石としても併用された可能性がある。							
52	凹 石	洞I 表採	9.6cm	6.9cm	3.8cm	354g	安山岩
卵形を呈し、両面に凹みがある。裏面は偏平である。							
53	凹 石	洞II 3号溝	9.2cm	8.0cm	3.6cm	401g	安山岩
形態はNo52に類似する。同様に両面に凹みがある。磨石としても使用されたものと思われる。							
54	凹 石	洞III 4区I-17 第II層	8.7cm	7.6cm	5.1cm	496g	閃緑岩
円形で卵形に近い形態を呈する。わずかながら凹みが認められる。敲石としても使用された可能性があろう。							
55	凹 石	洞II 3号溝	8.5cm	7.0cm	5.8cm	491g	閃緑岩
No54と同様の形態を呈する。磨石として使用された可能性もあろう。							
56	磨 石	洞I 0区J-32 第II層	12.1cm	7.2cm	2.5cm	389g	安山岩
小判形で偏平な形態を呈している。周辺部に研磨された痕跡をとどめる。							
57	磨 石	洞III 4区M-13 第II層	11.5cm	5.6cm	2.7cm	280g	凝灰岩
変形はしているが、長楕円形の磨石である。片面には凹んだ状態で研磨痕が認められる。							
58	磨 石	洞I 1区P-04 第II層	(10.5)cm	6.2cm	5.1cm	(557)g	安山岩
棒状の形態をしているが、下半部は欠損している。磨石であるが先端部は敲石として使用されている。							
59	磨 石	洞III 4区O-07 第II層	(8.6)cm	8.3cm	4.0cm	(417)g	安山岩
No58と同様に器中央部で破損している。周辺部に顕著な研磨痕が認められる。							



第5図 縄文石器 (1)

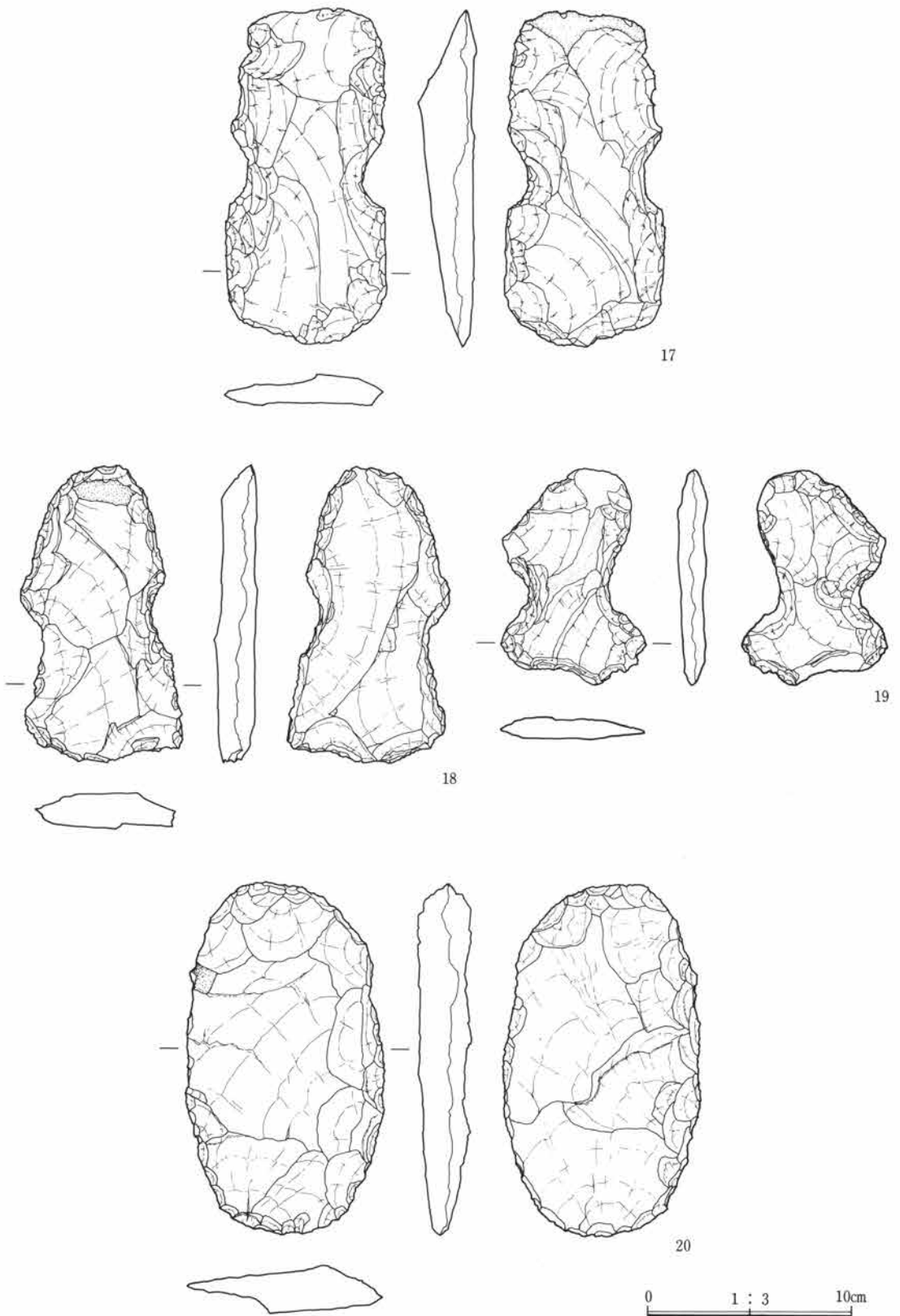




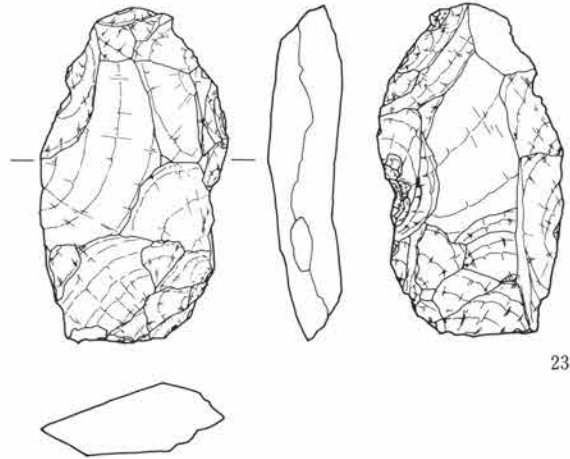
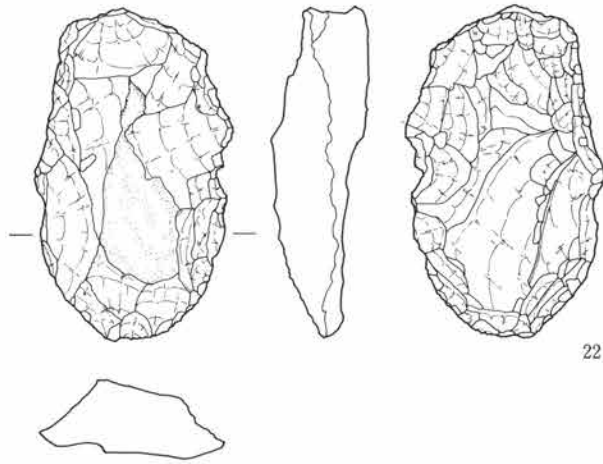
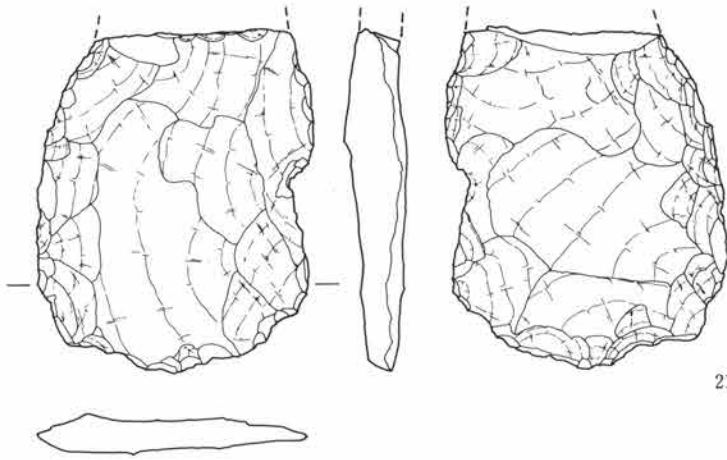
第6図 繩文石器 (2)



第7図 縄文石器 (3)

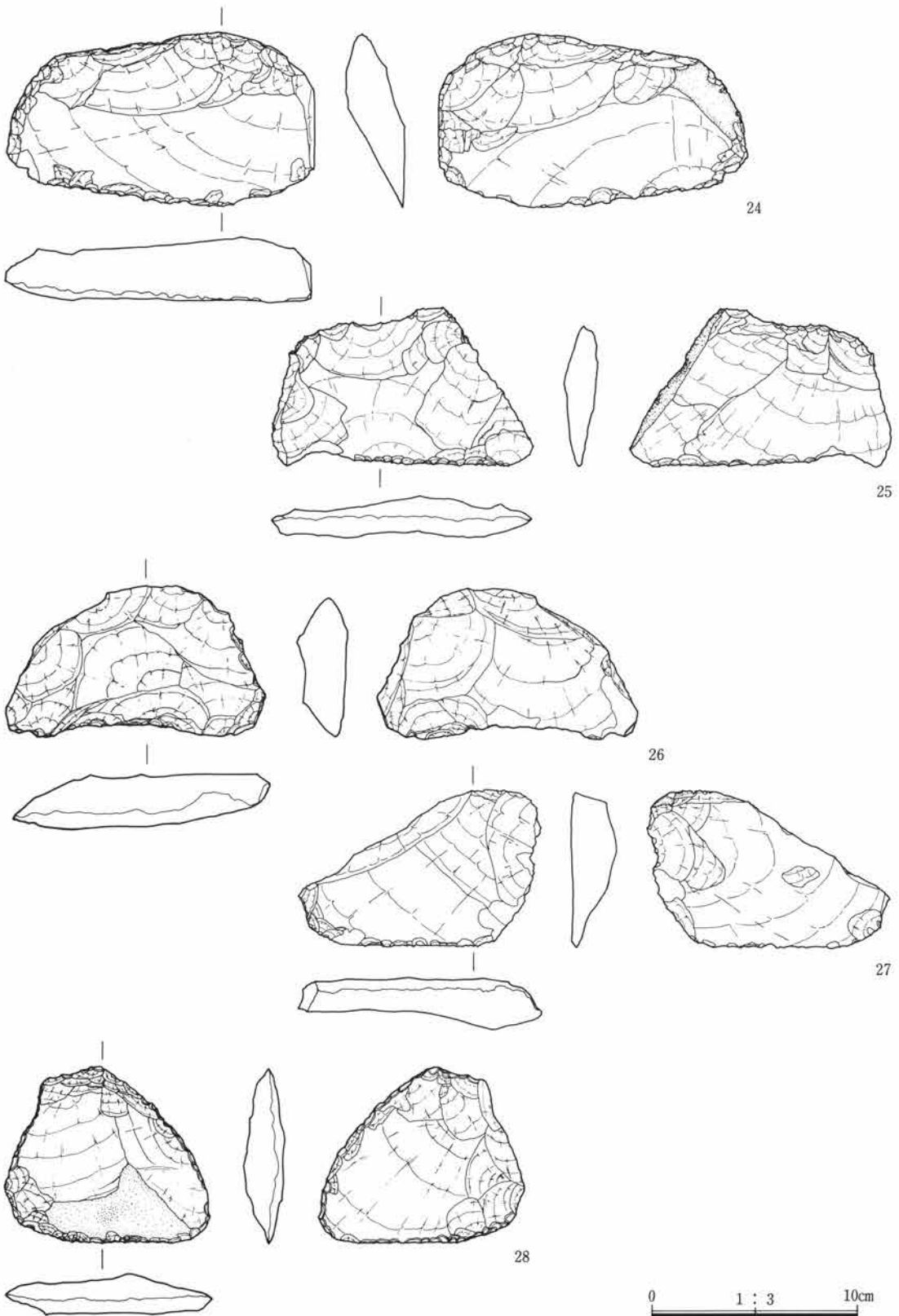


第8図 縄文石器 (4)

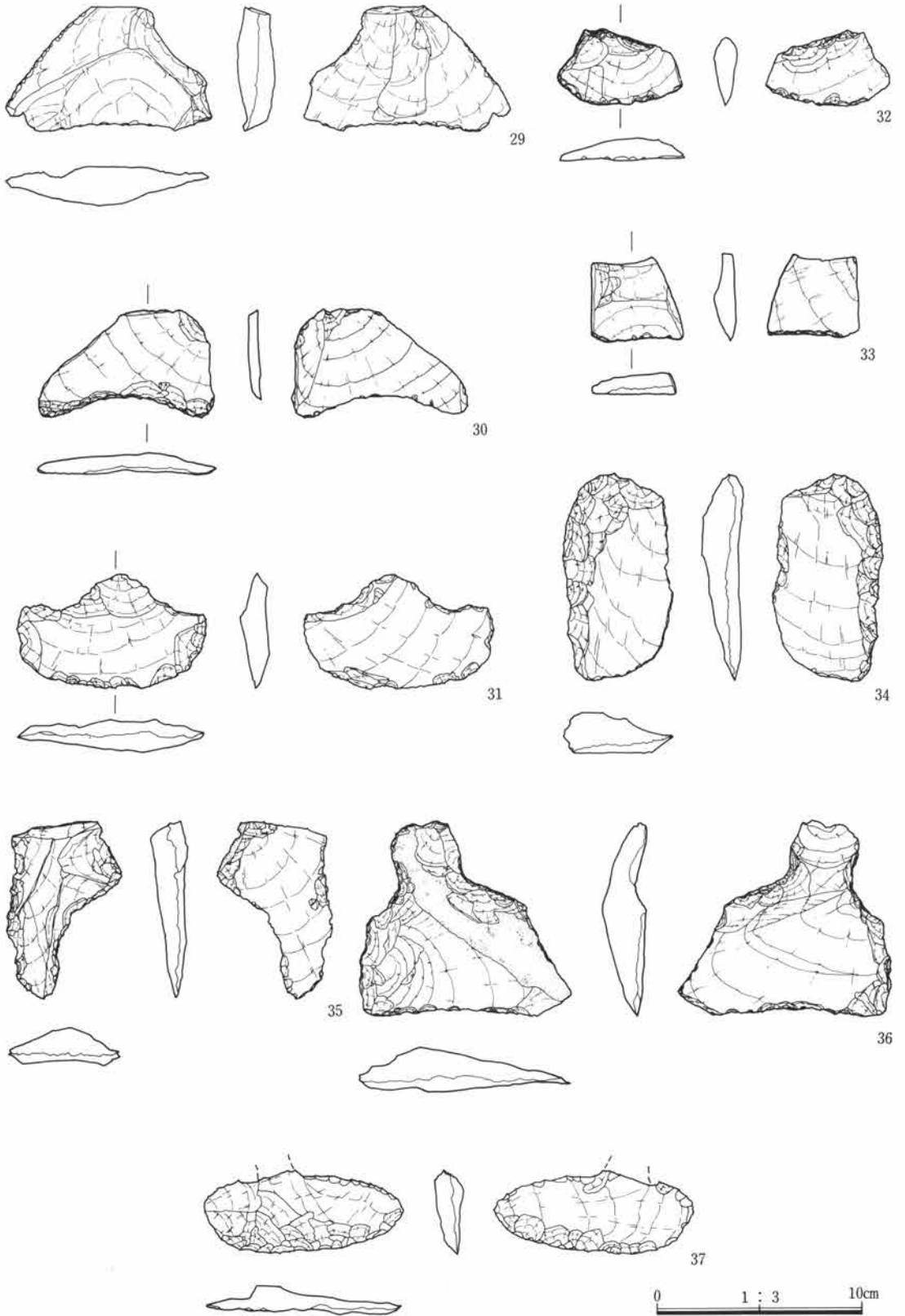


0 1 : 3 10cm

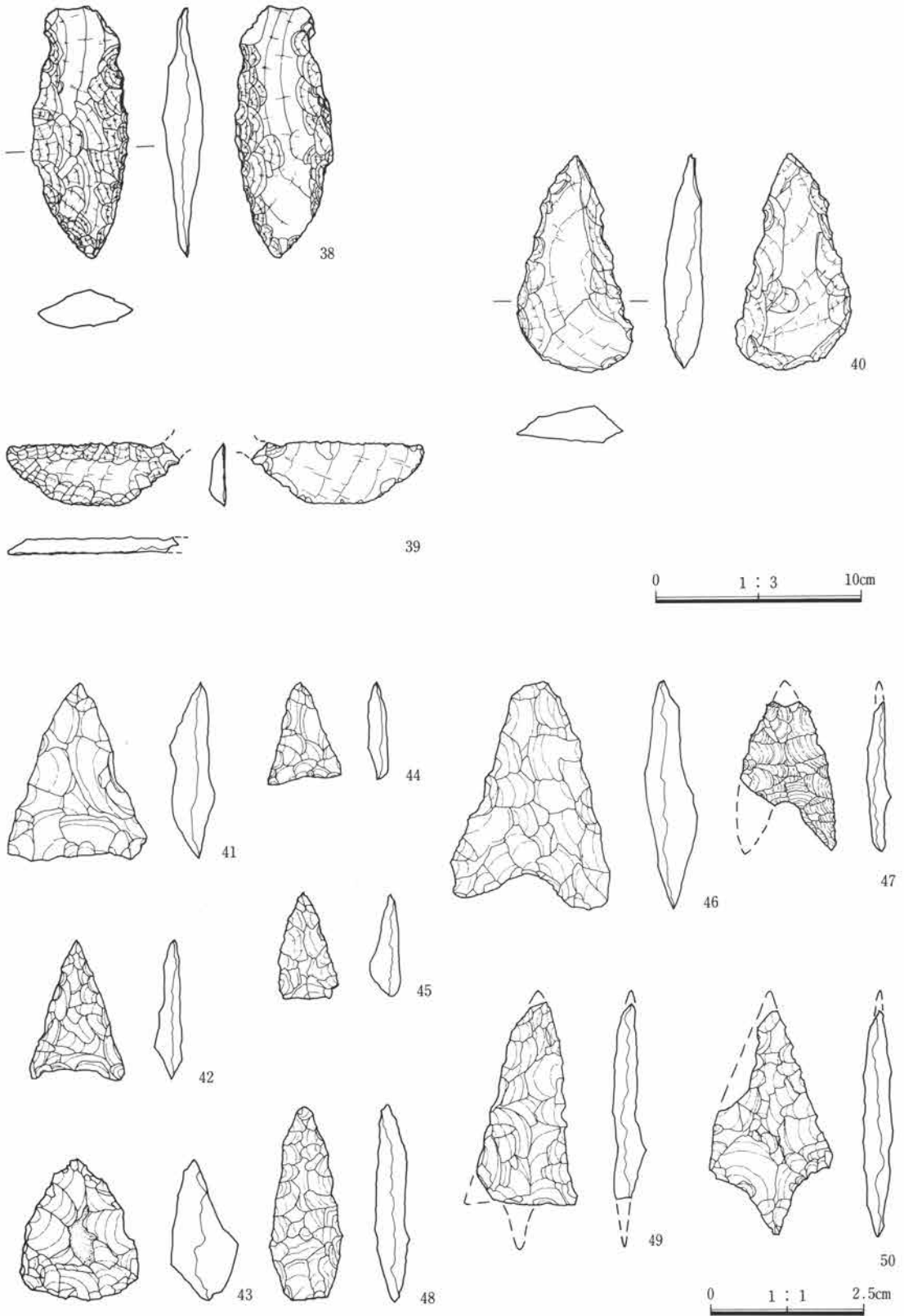
第9図 縄文石器 (5)



第10図 縄文石器 (6)

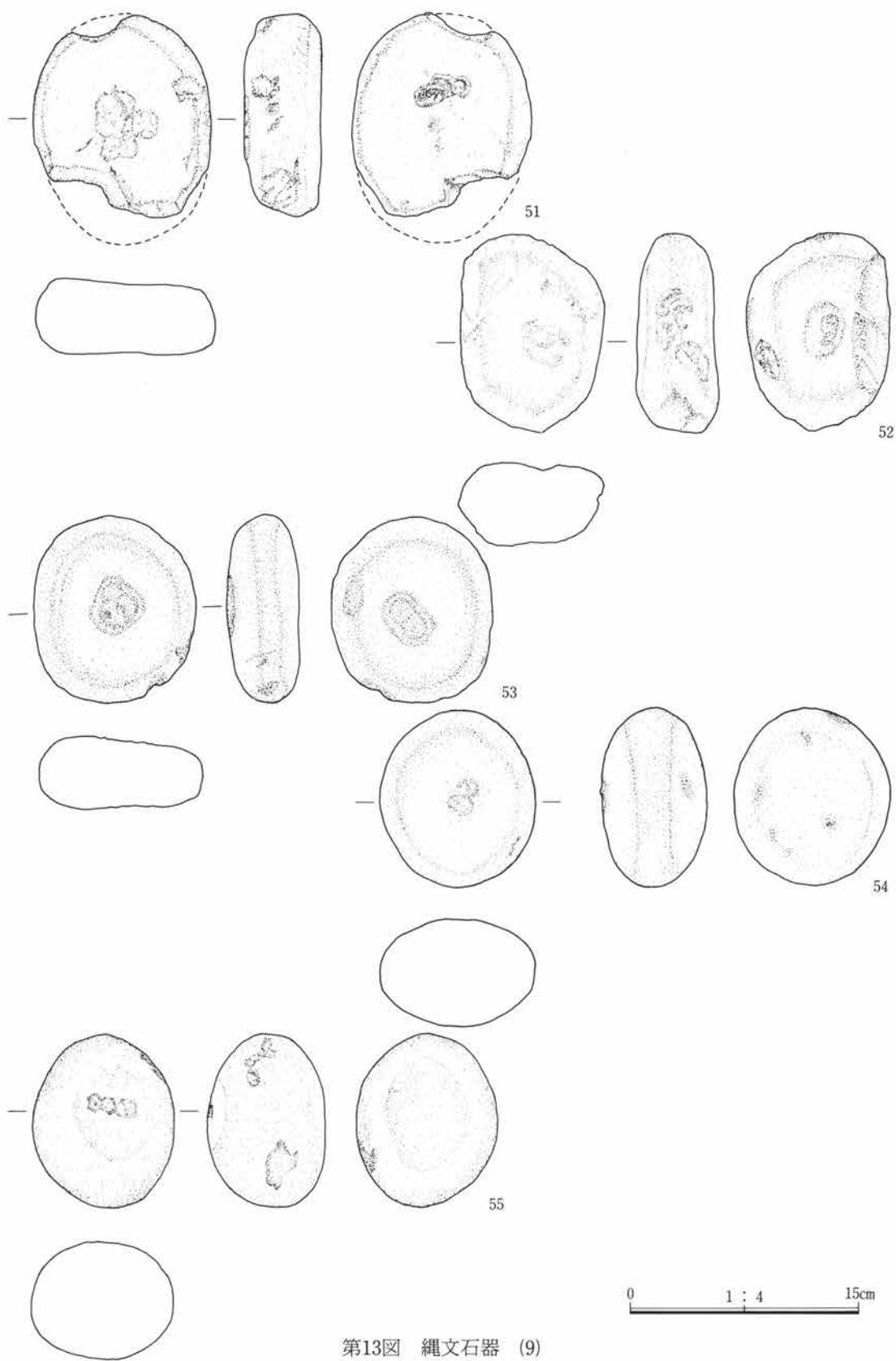


第11図 縄文石器 (7)

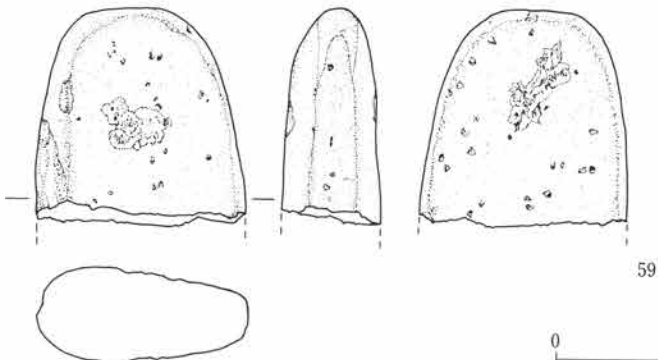
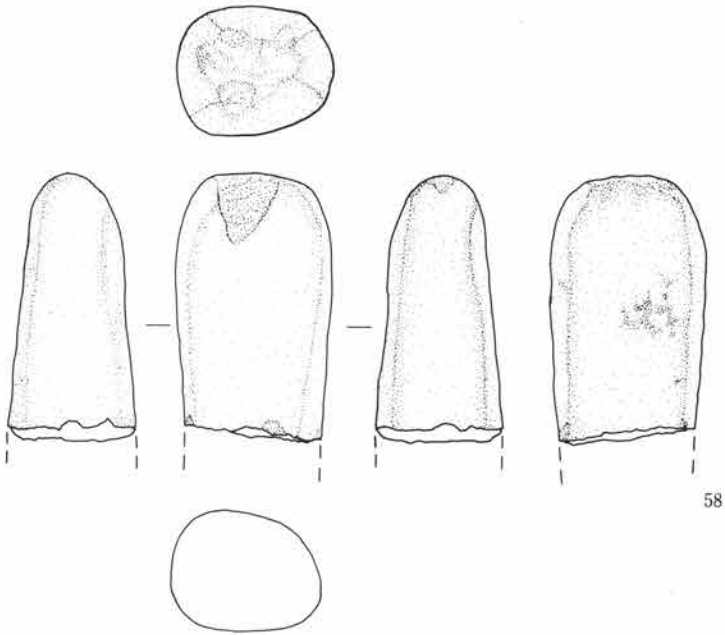
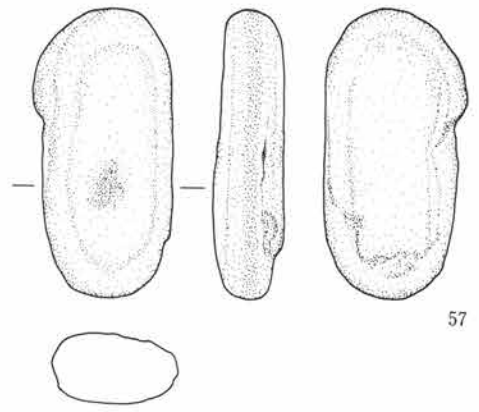
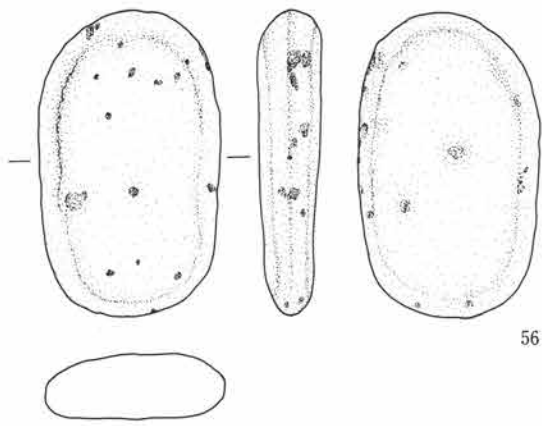


第12図 縄文石器 (8)





第13図 縄文石器 (9)



第14図 縄文石器 (10)



# 洞 I 遺跡



## 第VI章 洞 I 遺跡

### 第1節 概要

本遺跡は大峰山系の末端である洞山の東面裾部の傾斜地に立地し、洞窯跡のある谷の出口の南に位置している。洞II遺跡は北に続く連続した遺跡であり、洞窯跡の南東約200m、小川城跡の南西約500mの位置関係にある。

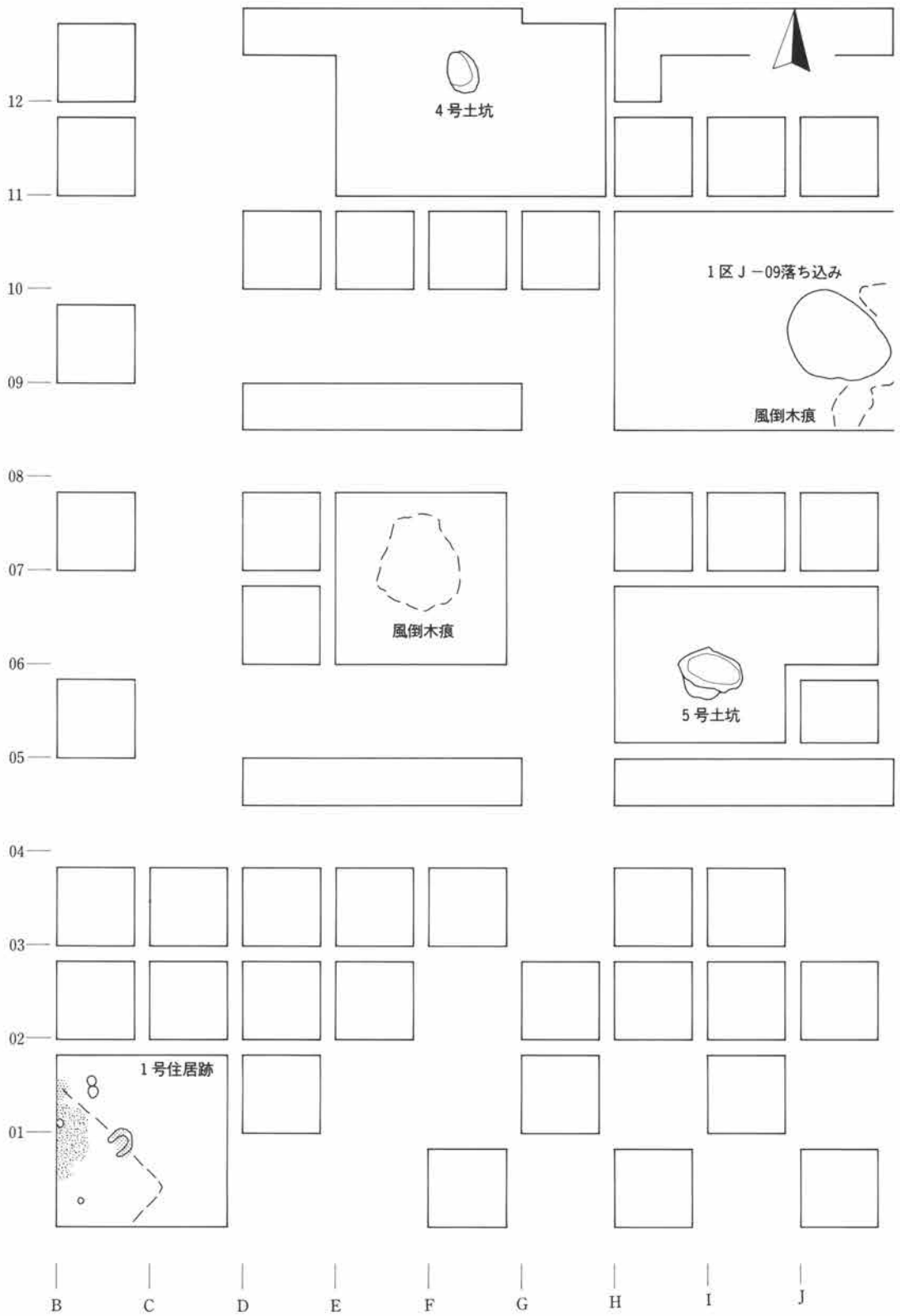
本遺跡の主体をなす遺構と遺物は平安時代と中・近世のもので、縄文時代の遺物もわずかながら出土しているが遺構は確認されておらず、他の時代の遺構・遺物は確認されなかった。

平安時代の遺構は調査区南半に集中し、住居跡1軒・落ち込み1基がある。なお、風倒木痕として扱った中に粘土採掘坑と考えられるものもあった。また、調査区南半の浅い低地に堆積した黒褐色土層には多量の遺物が包含され、洞窯跡群に近接する遺跡として特徴を持つものである。

中・近世の遺構としては柱穴群・溝1条・井戸3基・土坑19基がある。調査区の北半に分布しており洞II遺跡に続くものと考えられる。遺物としては中世に属するものであるが、主体は近世中期以降にあり、確認された遺構も同様の時期と考えられる。



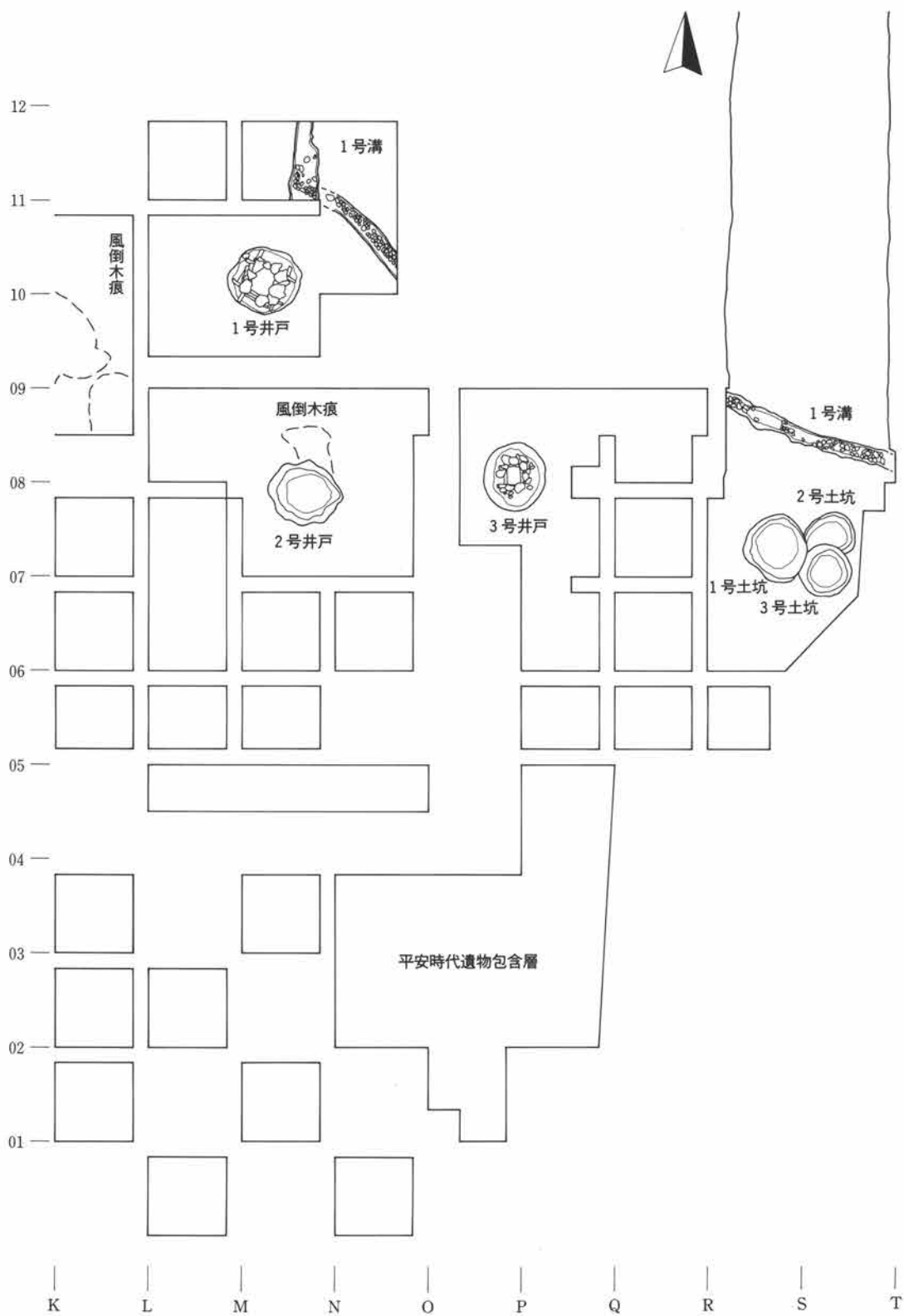
洞 I 遺跡第 1 次調査グリッド設定状況（南東より。左上隅の山裾に昭和16年調査の洞窯跡がある。）



第15図 洞 I 遺跡遺構分布図 (1)

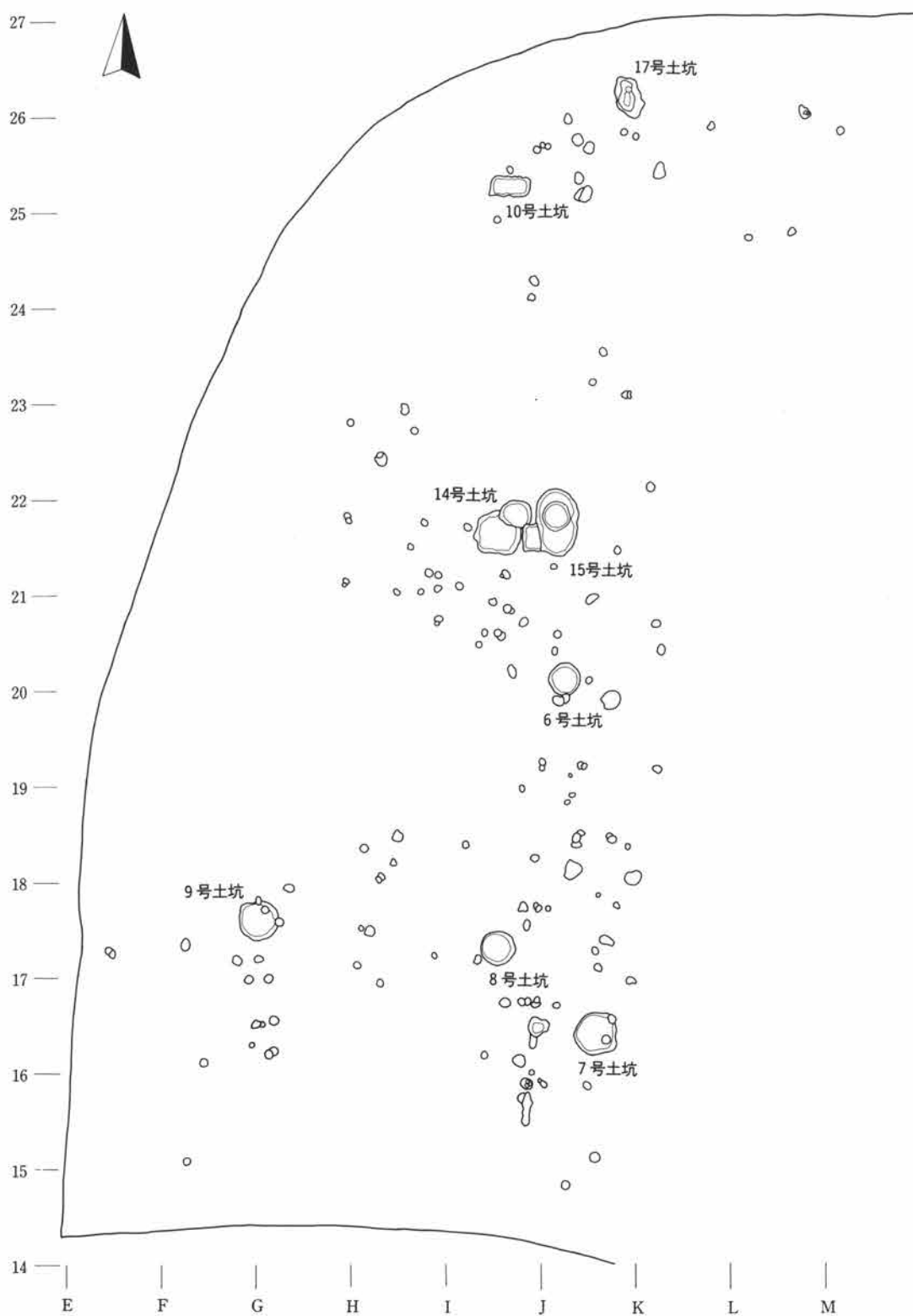
0 1 : 200 5 m



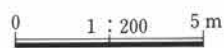


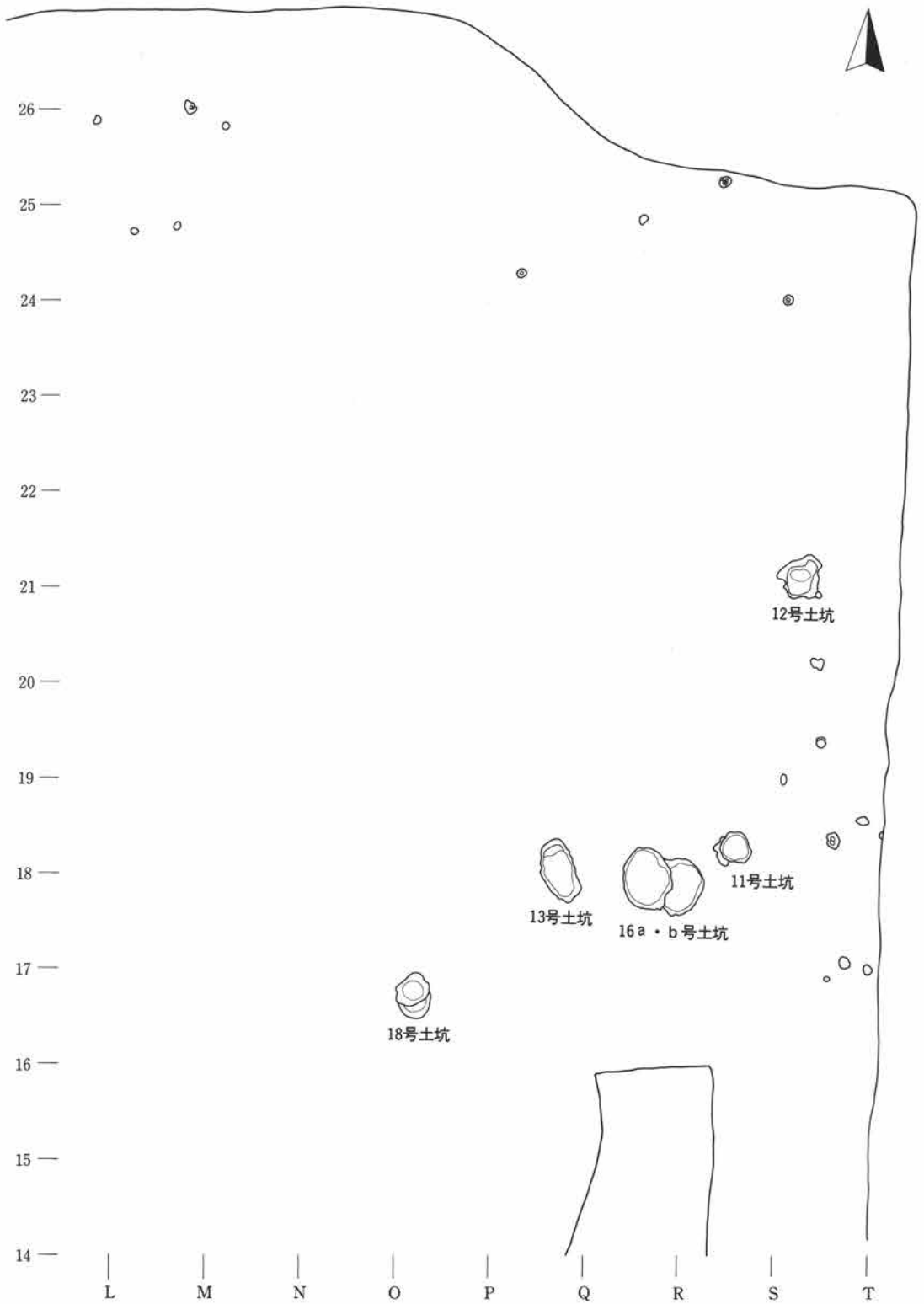
第16図 洞I遺跡遺構分布図 (2)

0 1 : 200 5 m



第17図 洞 I 遺跡遺構分布図 (3)





第18图 洞 I 遺跡遺構分布图 (4)

0 1 : 200 5 m

## 第2節 平安時代の遺構と遺物

### 1 住居跡

#### 1号住居跡（第19図、図版16）

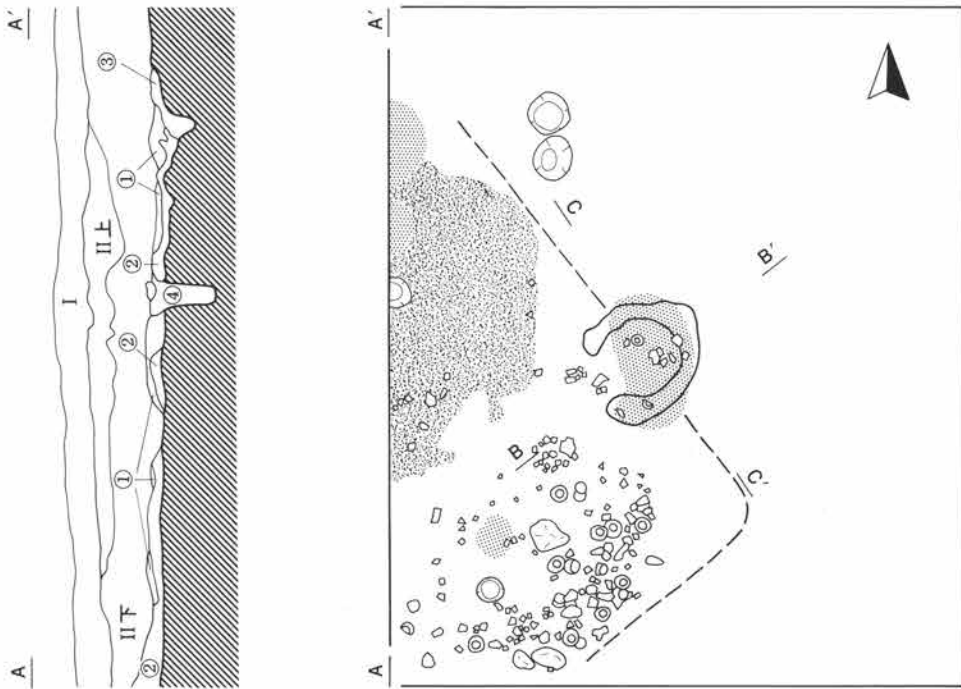
洞I遺跡において検出された住居跡は1軒のみである。発掘区の北西隅に位置している。カマドと粘土の堆積が認められたが、山麓の傾斜地に位置し、しかも住居跡の大部分は発掘区域外になってしまうため、住居跡の明確なプランは確認できなかった。また、住居跡の壁も明確には把握できなかった。カマドと柱穴の位置、および土器と粘土の分布状況から判断し、住居跡の平面形を推定した。

それによると本住居跡は、カマドが南東隅に寄った位置につくられ、カマド右袖部分に遺物が集中し、左袖部分から住居の中央部にかけて、張り床状の粘土の散布と焼土が確認された。カマドは表土層の堆積が浅いことにもより、保存状態は良好ではなかった。また、カマドは第II上部層を切り込んで構築されていた。カマド内からは杯・椀・甕の破片が出土した。柱穴は床面からおよそ40cm余りの掘り込みが確認された。

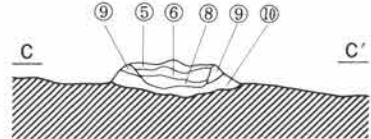
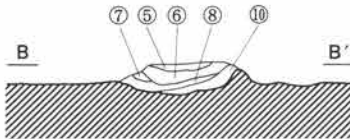
本住居跡から出土した遺物の多くは破片となっていたが、一部土師器も含まれていた。甕にはカマド内とその右袖部、および粘土散布部分での接合関係が認められた。



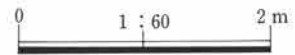
1号住居跡の遺物出土状態（南より）



- ①黒褐色土
- ②暗褐色土
- ③暗褐色土 焼土小ブロックをやや多く含む。
- ④暗黄褐色土 ロームブロックと黒褐色土ブロックが混じり合っている。



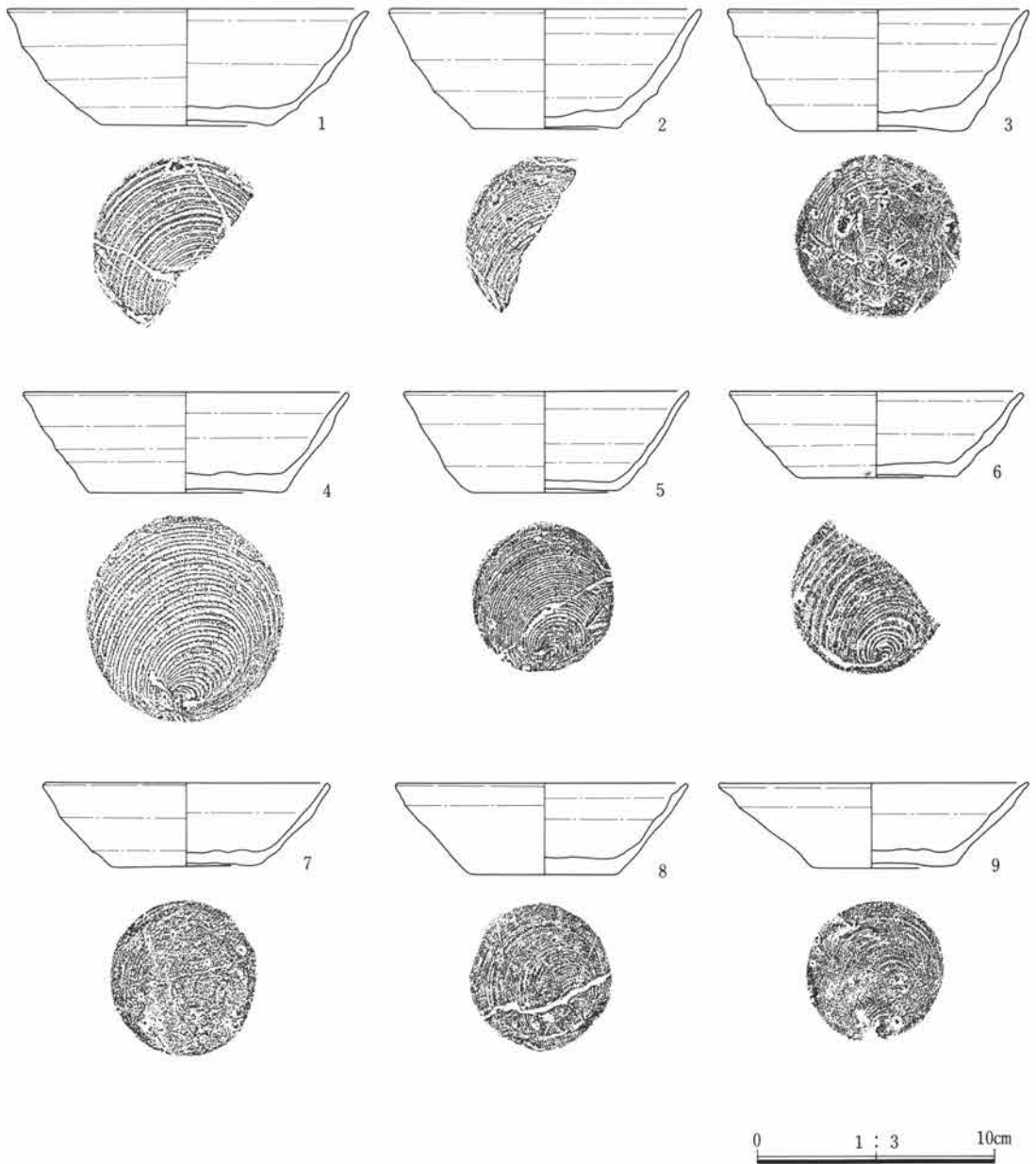
- ⑤暗褐色土 焼土ブロックを少量含む。
- ⑥暗褐色土 焼土ブロック・炭化物をやや多く含む。
- ⑦ロームブロック
- ⑧暗赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む。
- ⑨暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- ⑩暗褐色土 ロームブロックを少量含む。



第19図 1号住居跡

1～9は杯である。3は底部右回転の糸切り無調整のものであり、他の8点は底部左回転糸切りで無調整のものである。口縁部はわずかに外反している。10・11・12は高台碗であり、底部には外向する高台がつけられている。10は底部右回転、11・12は左回転糸切り無調整のものである。14・15・17は土師器甕であり、16・18は土師器小型甕である。20は須恵器の鉢であり、21は口縁部直下にクシ描波状文が施されている。

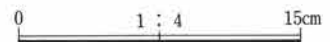
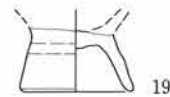
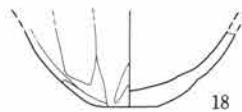
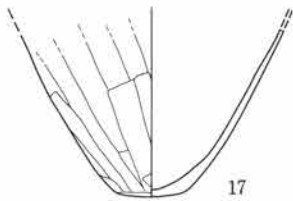
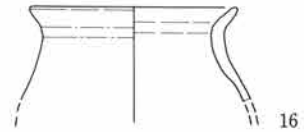
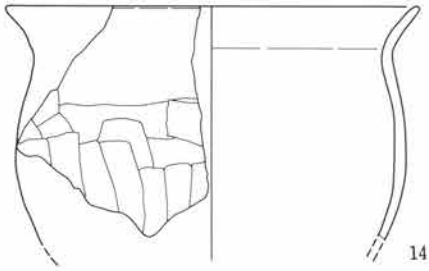
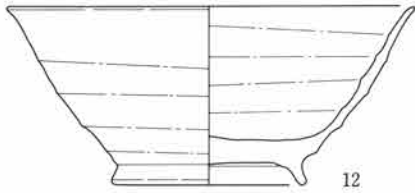
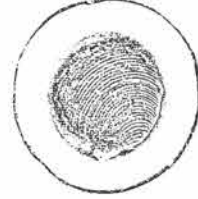
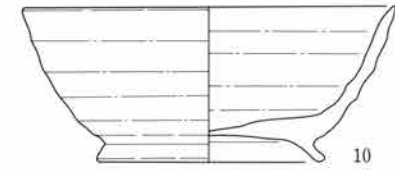
また、24は断面正方形を呈する凝灰岩製の砥石である。



第20図 1号住居跡出土遺物 (1)

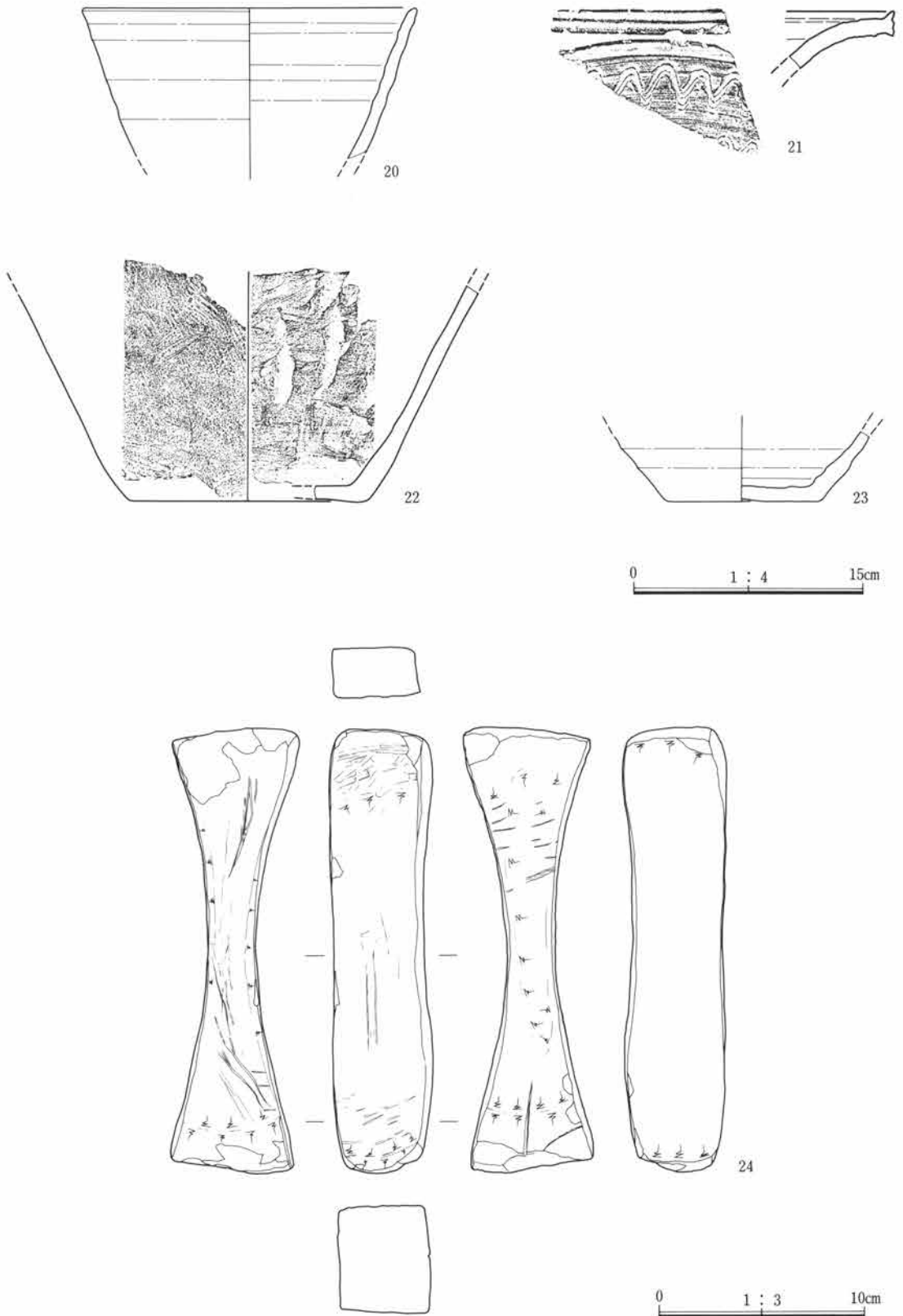
これらのことから考えて、本住居跡は9C後半段階に位置づけられよう。次項でふれるが、洞A窯跡群の一部と、「1区J-09落ち込み」部分から出土した9C代に位置づけられる遺物は、本住居跡に関連するものであろう。

また、発掘区で明確に検出された住居跡は1軒のみであったが、立地条件から考えて、本調査区と洞A窯跡群との地域には、本窯跡群と関連した工房集落跡の存在も予測される。



第21図 1号住居跡出土遺物 (2)





第22図 1号住居跡出土遺物 (3)

## 2 1区J—09落ち込みと平安時代遺物包含層

### 1区J—09落ち込み（第24図、図版18—2）

本発掘区の中央部分には、数カ所の落ち込みが確認された。黒色土の落ち込みで土器が包含されているものと、下部の粘土層が黒色土層中にもり上がったような状態で認められる部分があった。発掘時においては、前者を「ピット状遺構」、後者を「風倒木痕」と把握していた。その後、周辺部の遺跡の調査が進み、本遺跡に類似する藪田東遺跡などで粘土採掘坑が確認された。周辺部の遺跡の調査成果を検討した結果、本遺跡で確認された性格不明の落ち込みも、粘土採掘坑に類似したものと判断した。

本遺跡の西方約120メートルの地点に洞窯跡がある。洞窯跡は昭和12年に山崎義男氏が調査し、その後昭和45年に井上唯雄氏が3基の窯体を調査している。大江正行・中沢 悟氏は月夜野古窯跡群を集成し、この洞窯跡を洞A支群と呼称し、8C末～10Cに位置づけた。これより、本遺跡の第1号住居跡や「1区J—09落ち込み」の粘土採掘坑も、この洞A窯跡と関連した遺構と推測されよう。

「1区J—09落ち込み」から第23図1・2の杯が出土している。底部端と胴部下端の間に段をもつ。4・5・6は椀である。4は口縁部がやや外反し、高台は断面長方形を呈している。7・8・9・10は羽釜である。鏝は短く断面三角形を呈している。7・9は鏝の部分に胴部整形時の削り痕を残している。以上のことから、本遺構は10C前半に位置づけたい。

### 平安時代遺物包含層（第24図、図版17・18—1）

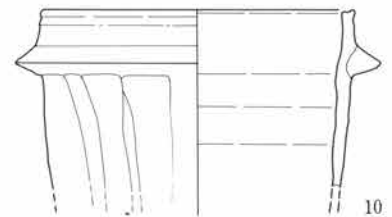
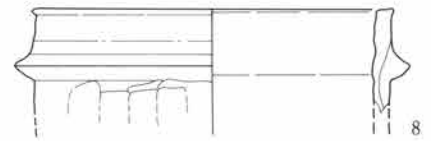
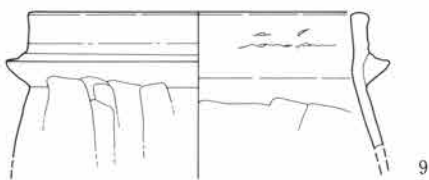
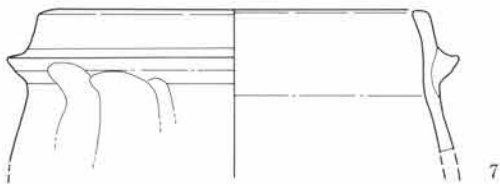
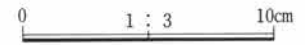
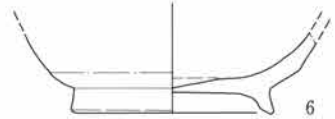
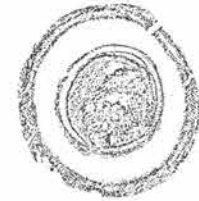
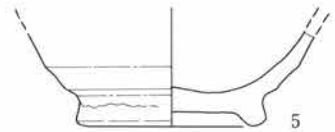
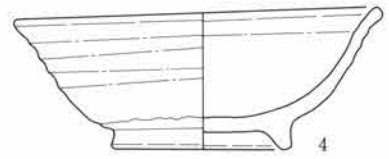
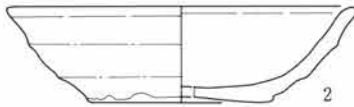
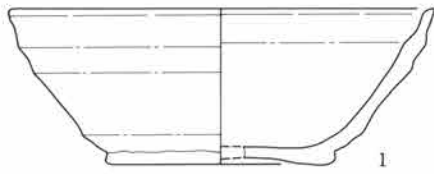
発掘区の東寄り斜面でP—9グリットを中心として、多量の土器が出土した。遺構に伴出したものではなく、所謂包含層の出土であった。調査に着手した段階では、人家と道路および排土の問題があり、第1期としてB—6～18グリットとO—7～S—14グリットの範囲を調査した。次に、その南半部分の調査をおこなった。しかし、山麓の平坦部分にあたる調査区の南東部分では、わずかの遺物出土が認められただけであった。これより、包含層は山麓部から平坦部分に至る地形転換地点である、1区P—9グリットを中心にして形成されていたことが判明した。

包含層からは杯・椀ともに9C前半段階のものから認められ、10C前半段階まで連続して出土している。杯では5・6・7のような9C前半に位置づけられるものと、18・19のように口縁部の外反する9C後半、24・25の10C前半に位置づけられるものが出土している。椀では26・27・28の9C前半に位置づけられるものと、30の9C後半、38の10C前半段階のものが出土している。また、鏝が断面三角形を呈し、鏝の部分まで削りを施した羽釜が出土している。125・126は脚付羽釜の脚部破片である。10C前半段階に位置づけられよう。

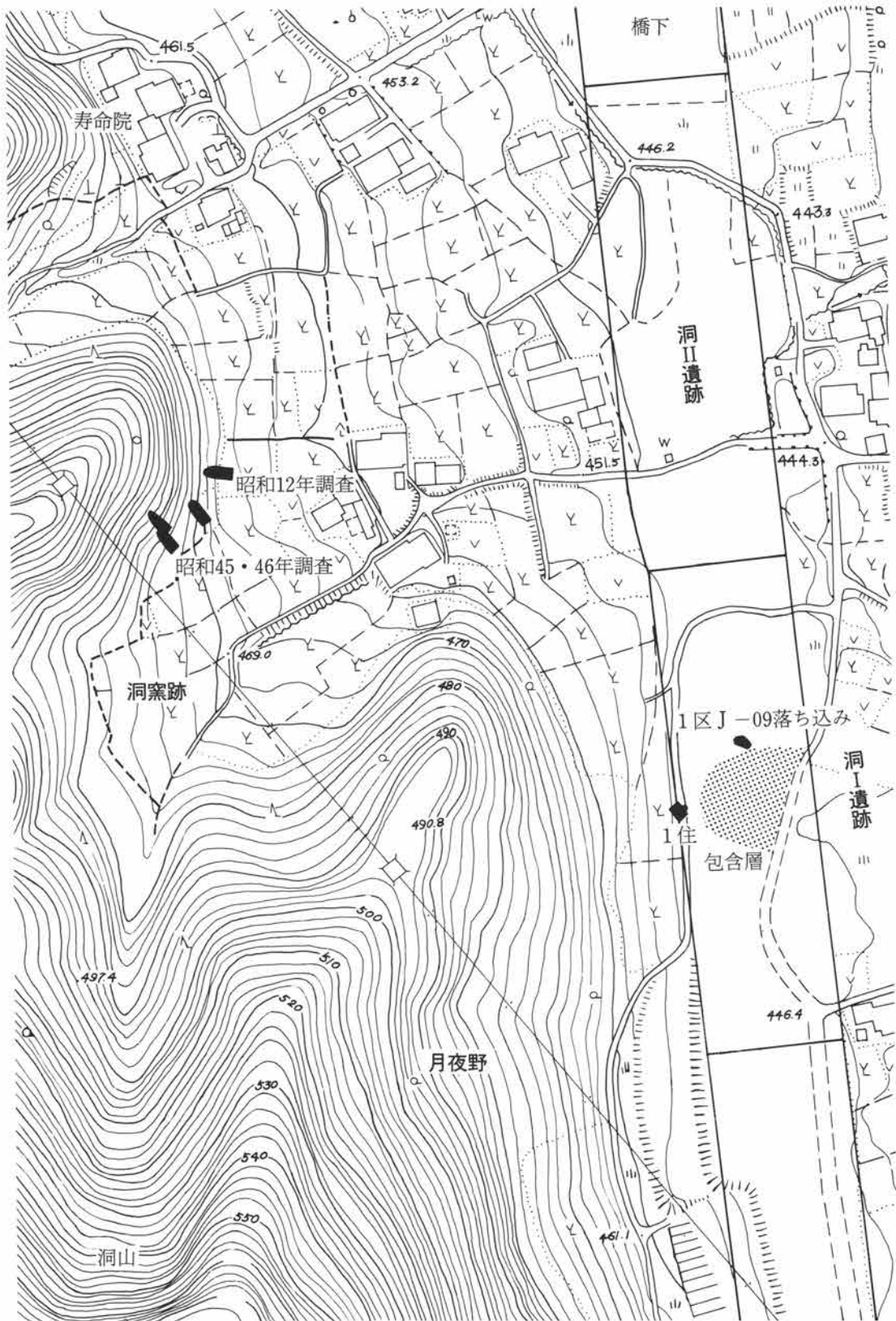
その他、40・41の環状摘みを持つ蓋や、54・55のような小孔をもつ耳皿、71のクシ描波状文を施した大甕や、87の広口甕、92・93の鉢、127の甑などが出土している。

一方、97・98のような酸化硬質の土師器甕、135の土錘、143・144の有孔円盤、145の須恵質の硯も出土している。

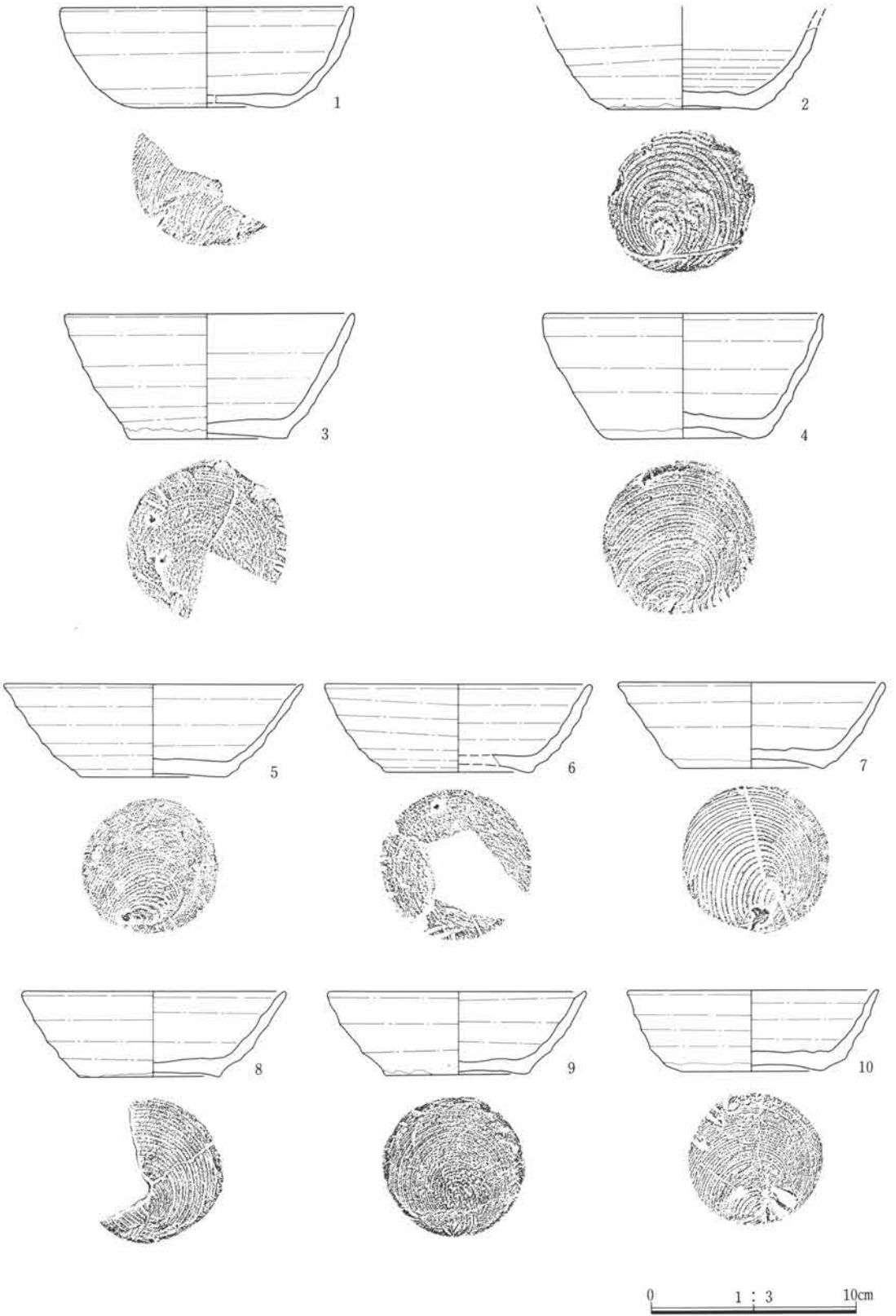
このように、「1区J—09落ち込み」部分には、10C前半段階のものが集中するのに対して、P—9グリットを中心とする部分には、9C段階のものが集中化する傾向が認められた。



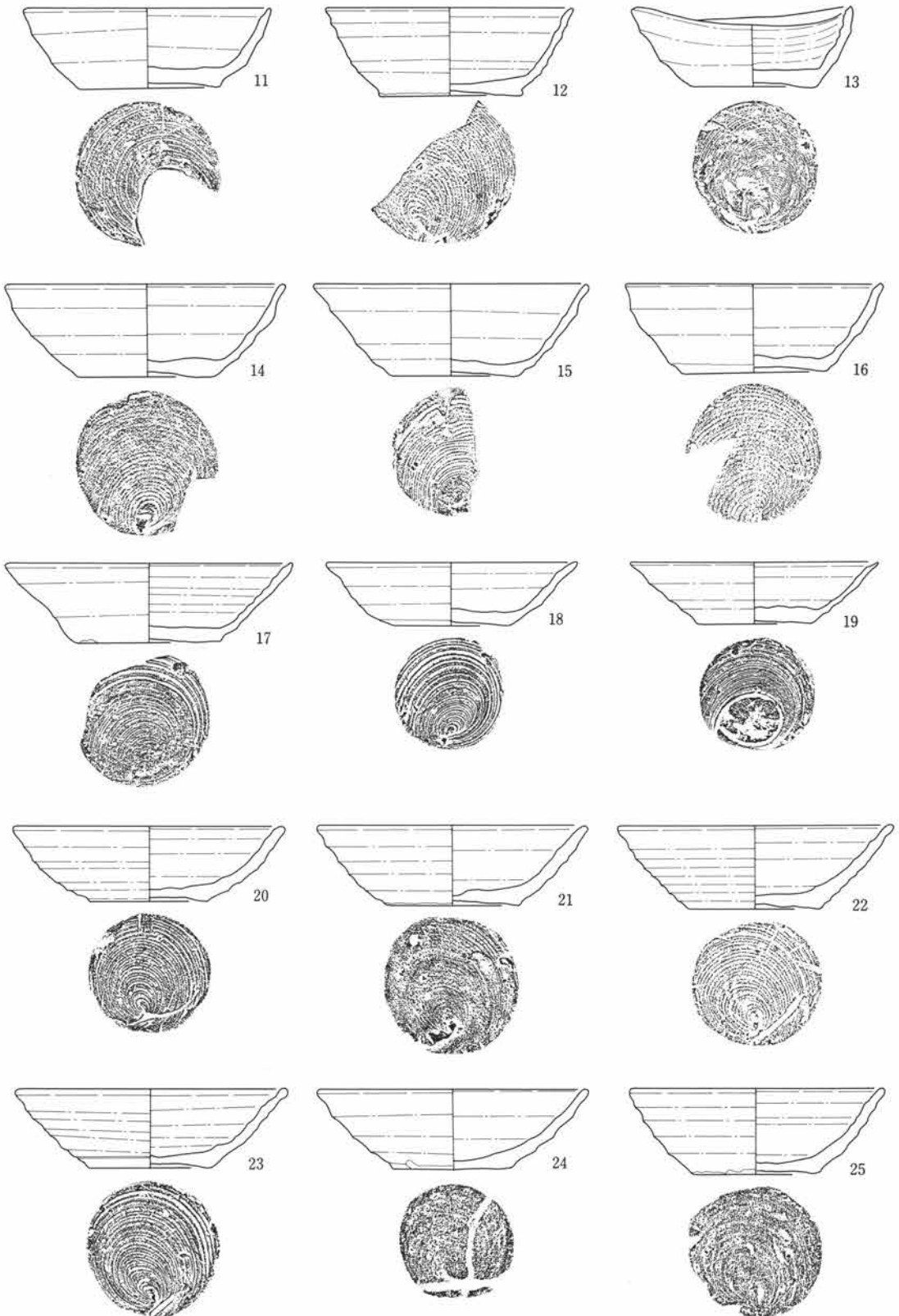
第23図 1区J-09落ち込み出土遺物



第24図 洞I遺跡平安時代遺構および包含層と洞窟跡 (1:2,500)

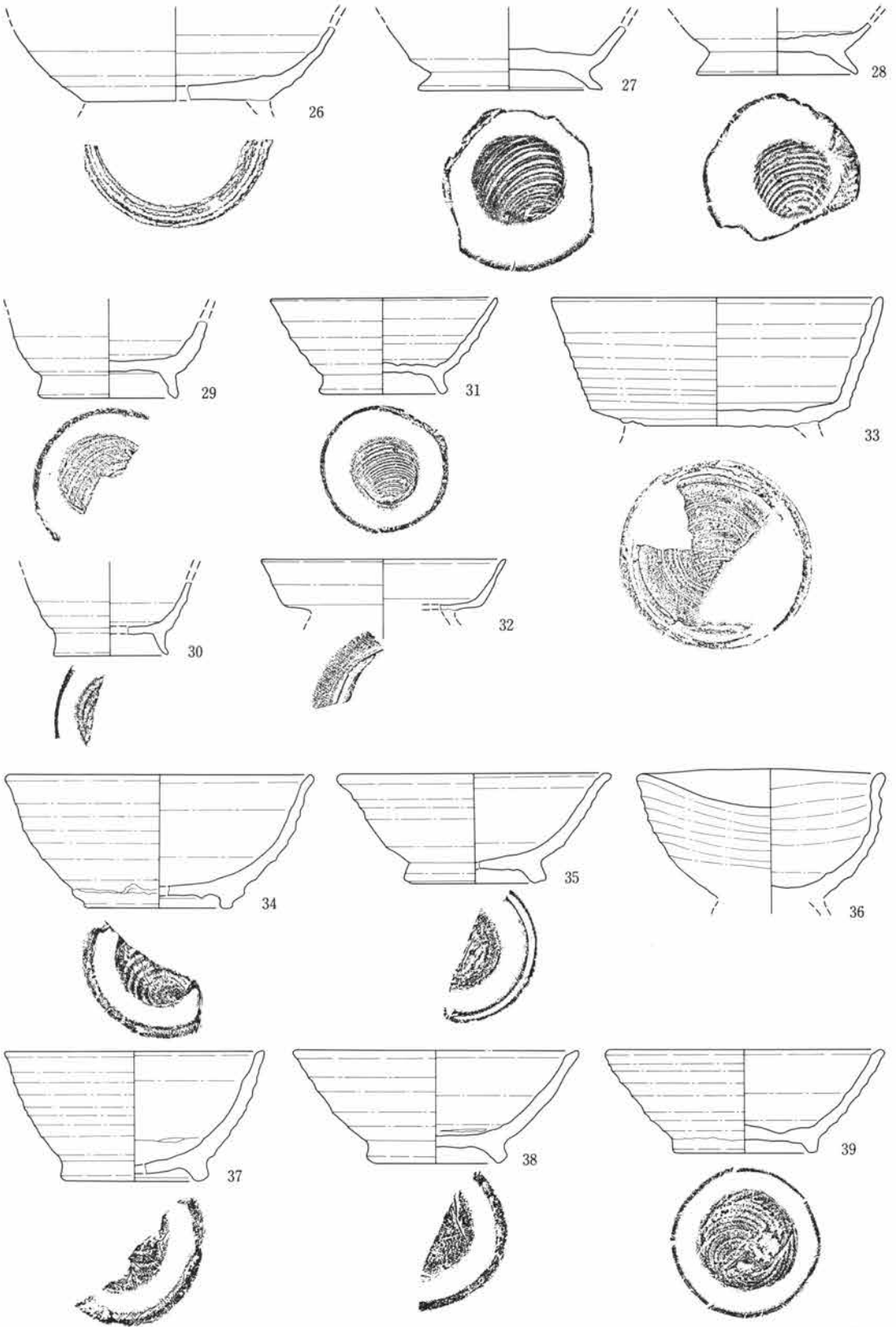


第25図 包含層出土遺物 (1)



第26図 包含層出土遺物 (2)

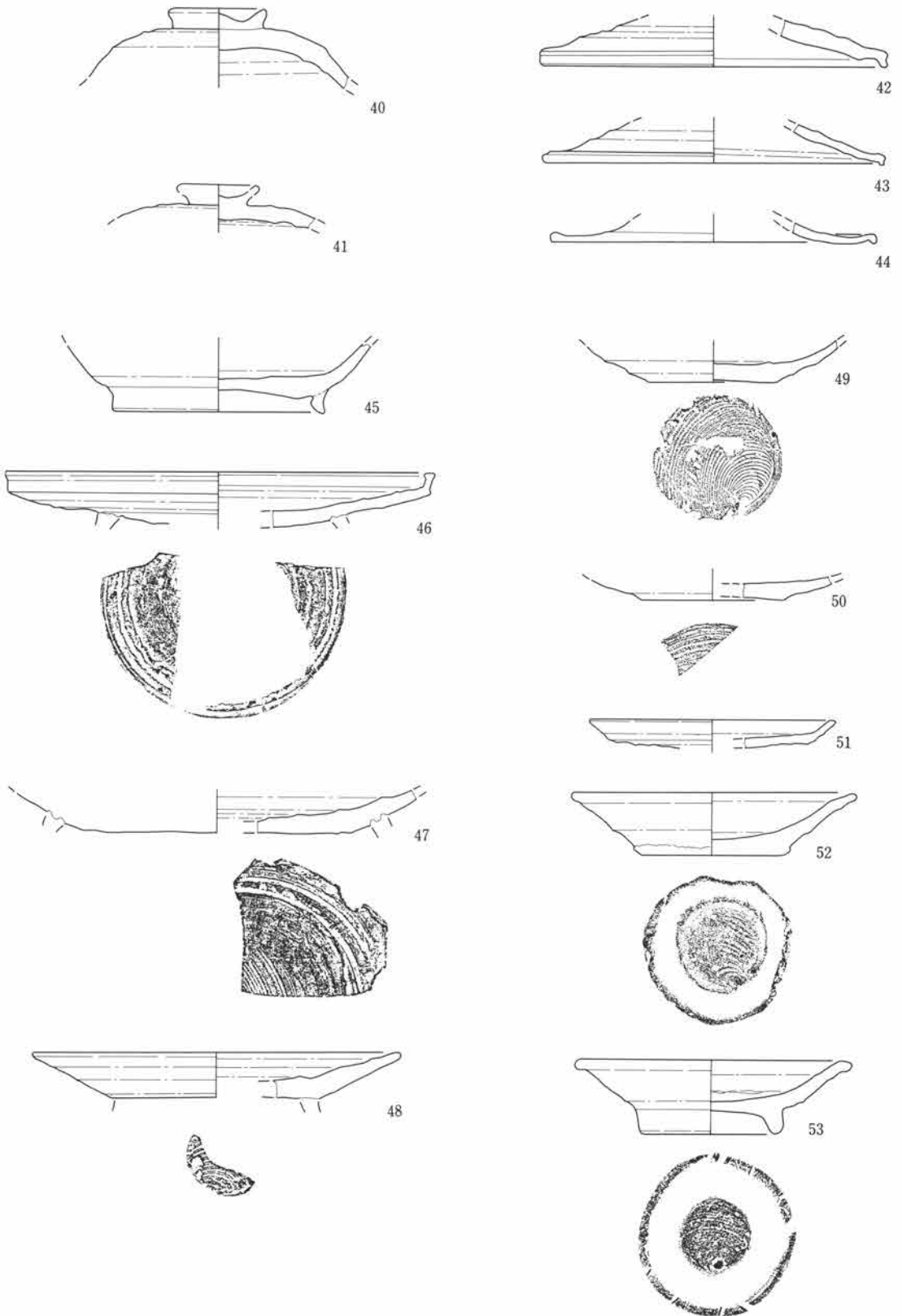
0 1 : 3 10cm



第27図 包含層出土遺物 (3)

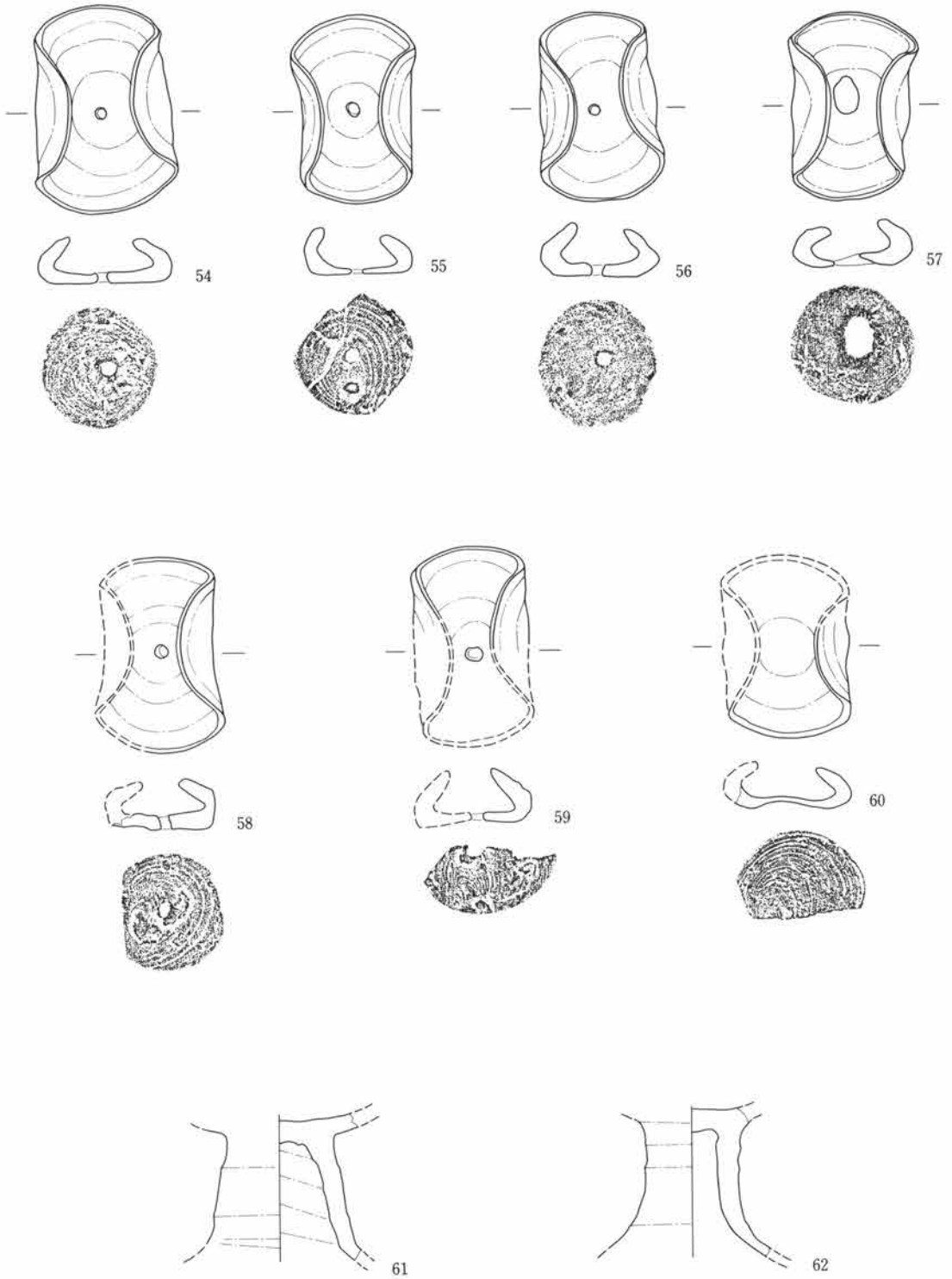
0 1 : 3 10cm



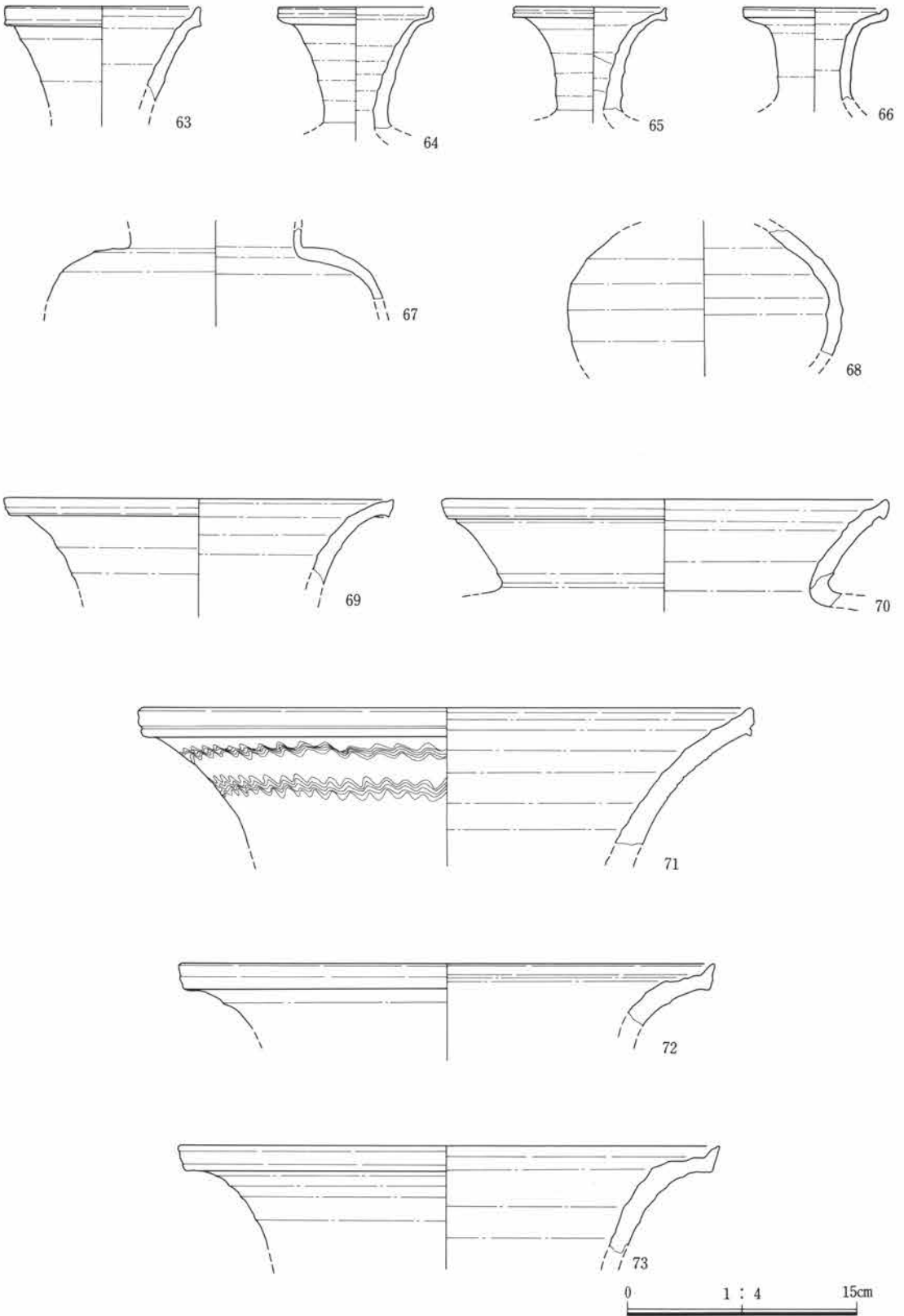


第28図 包含層出土遺物 (4)

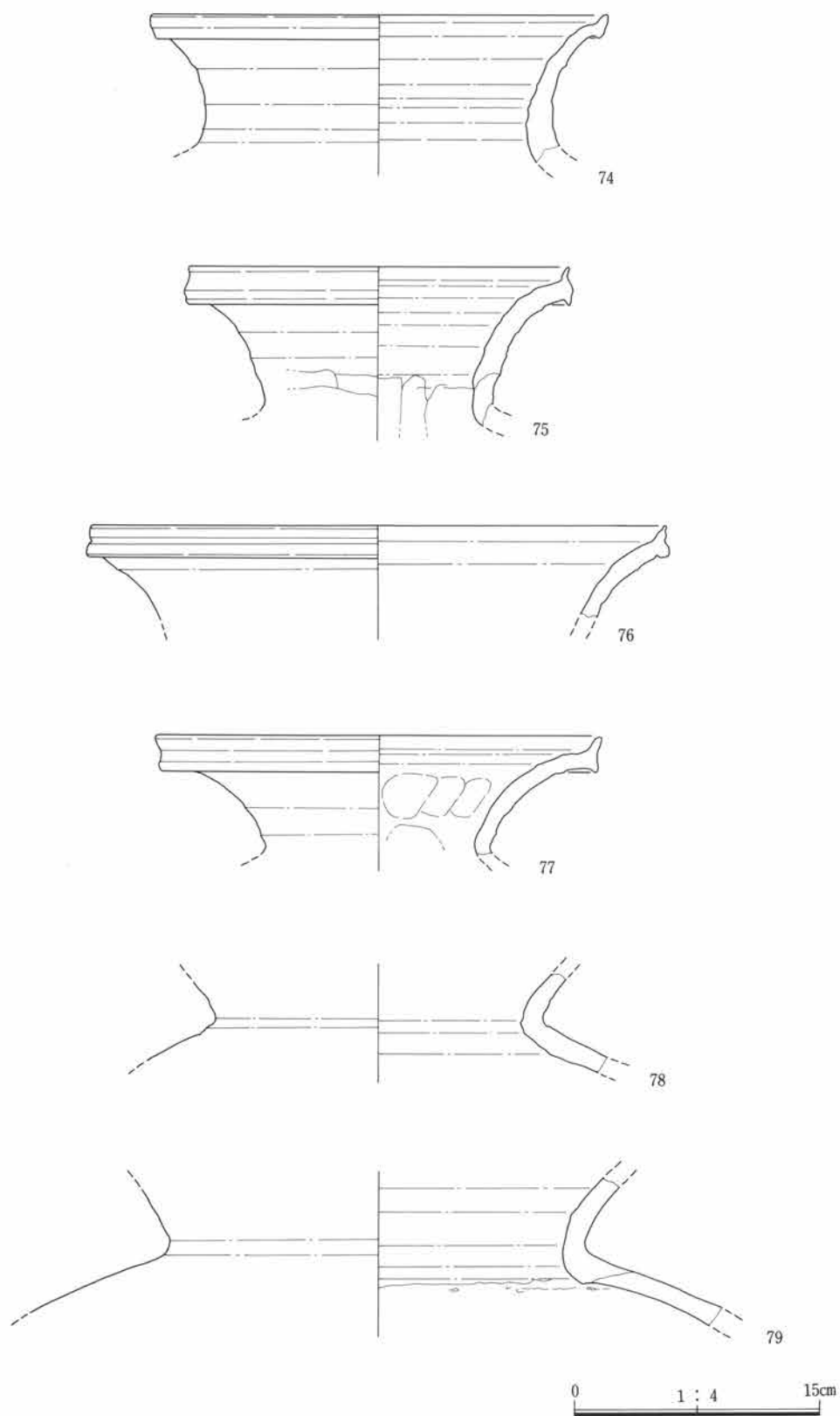
0 1 : 3 10cm



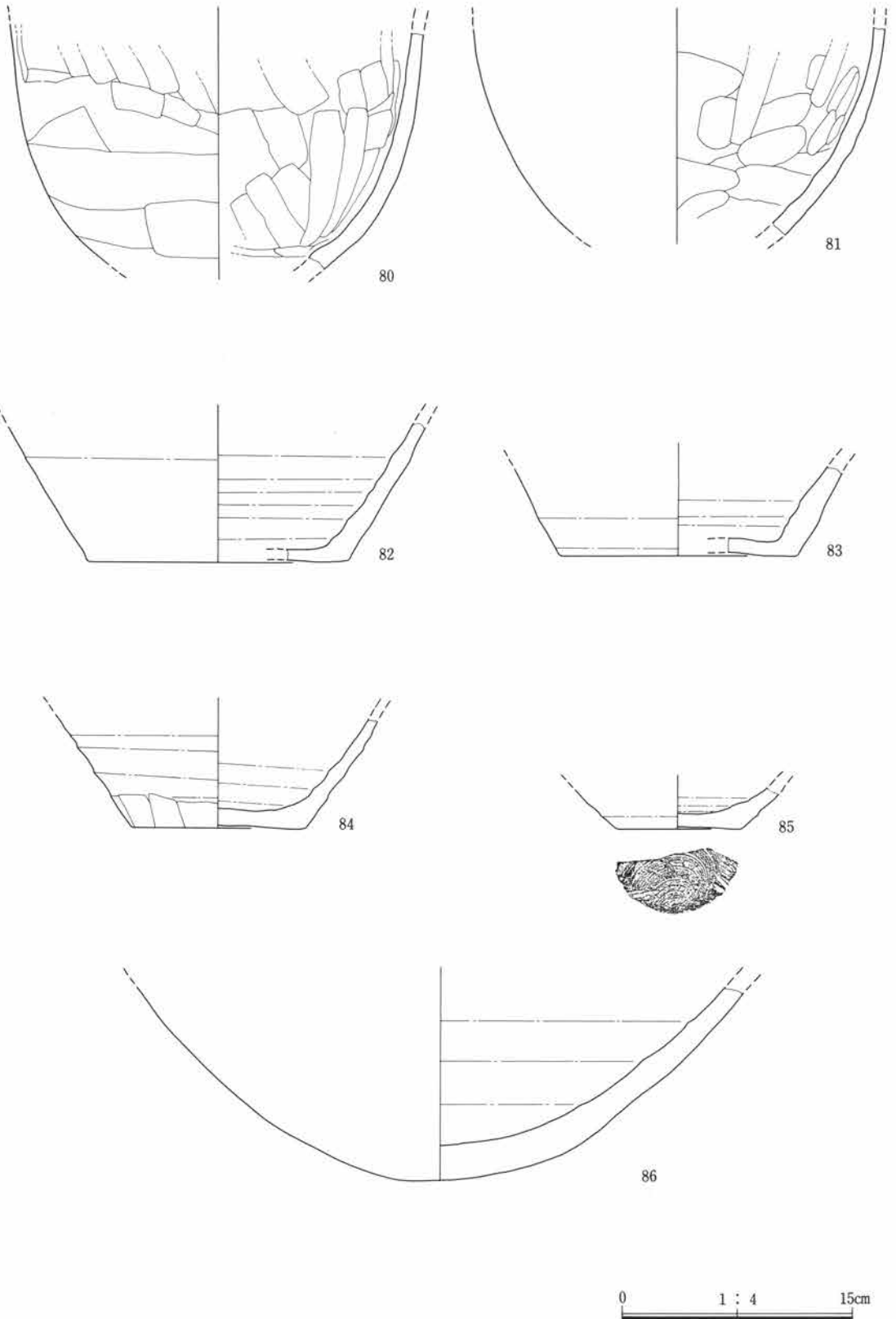
第29図 包含層出土遺物 (5)



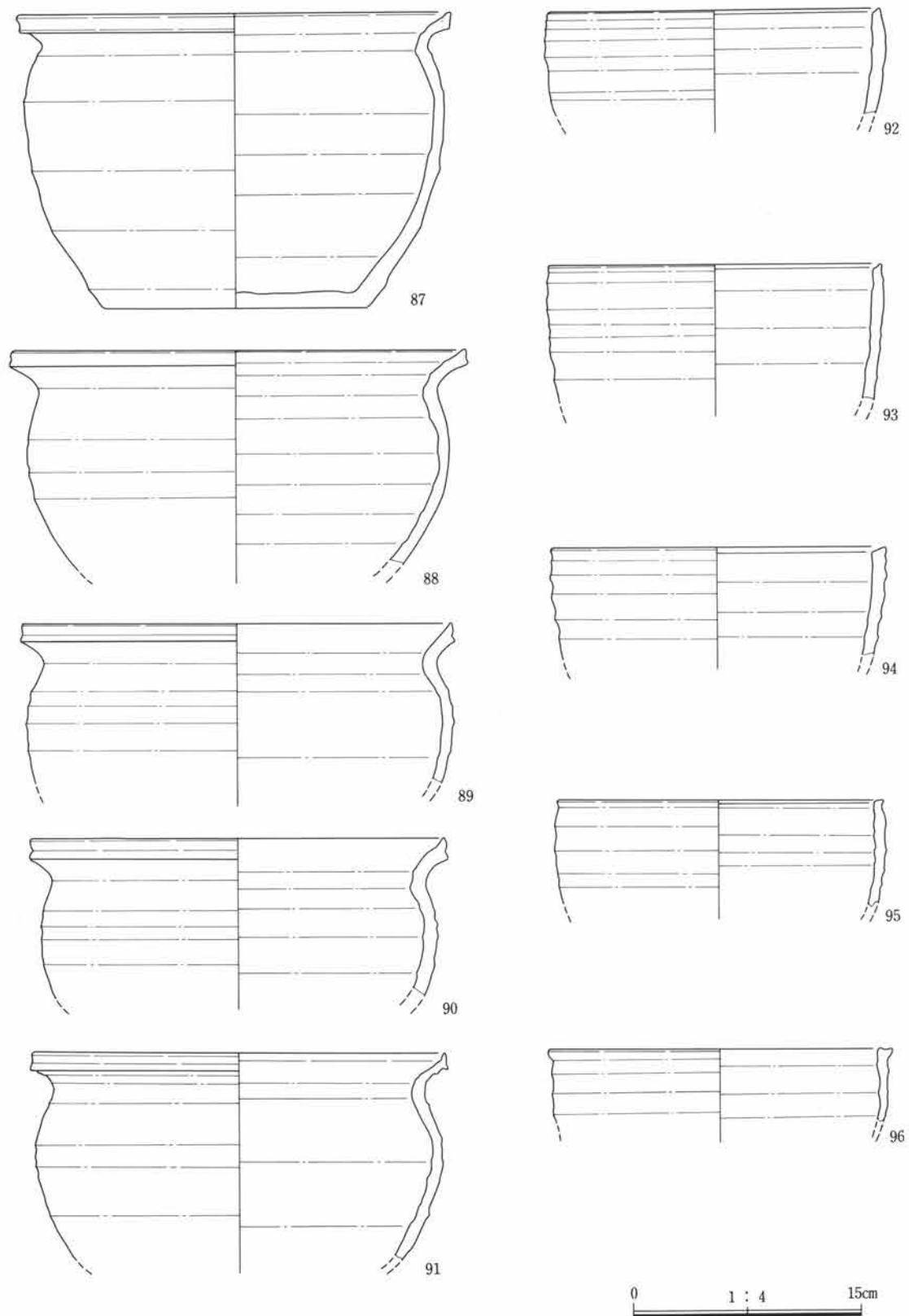
第30図 包含層出土遺物 (6)



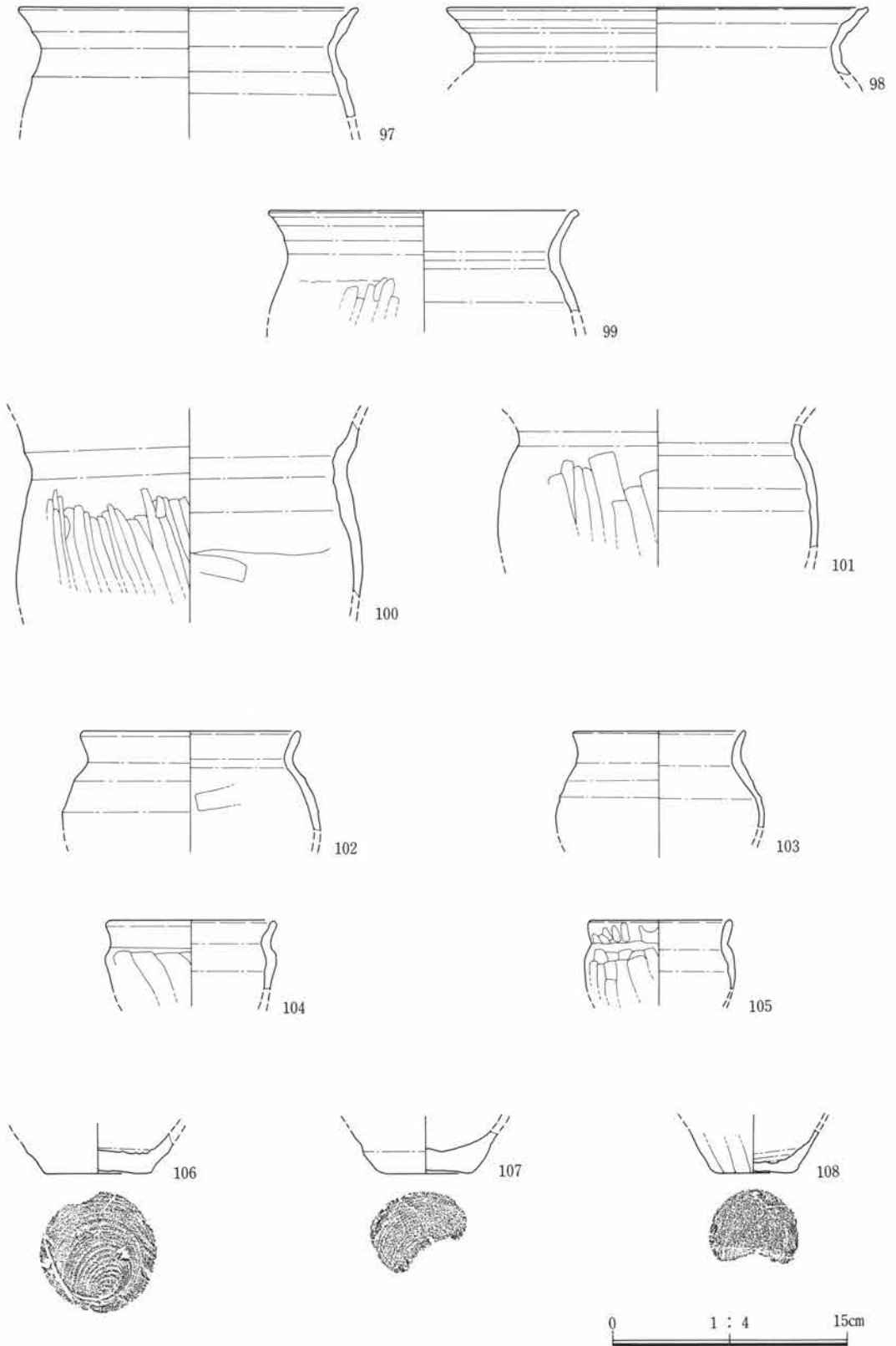
第31図 包含層出土遺物 (7)



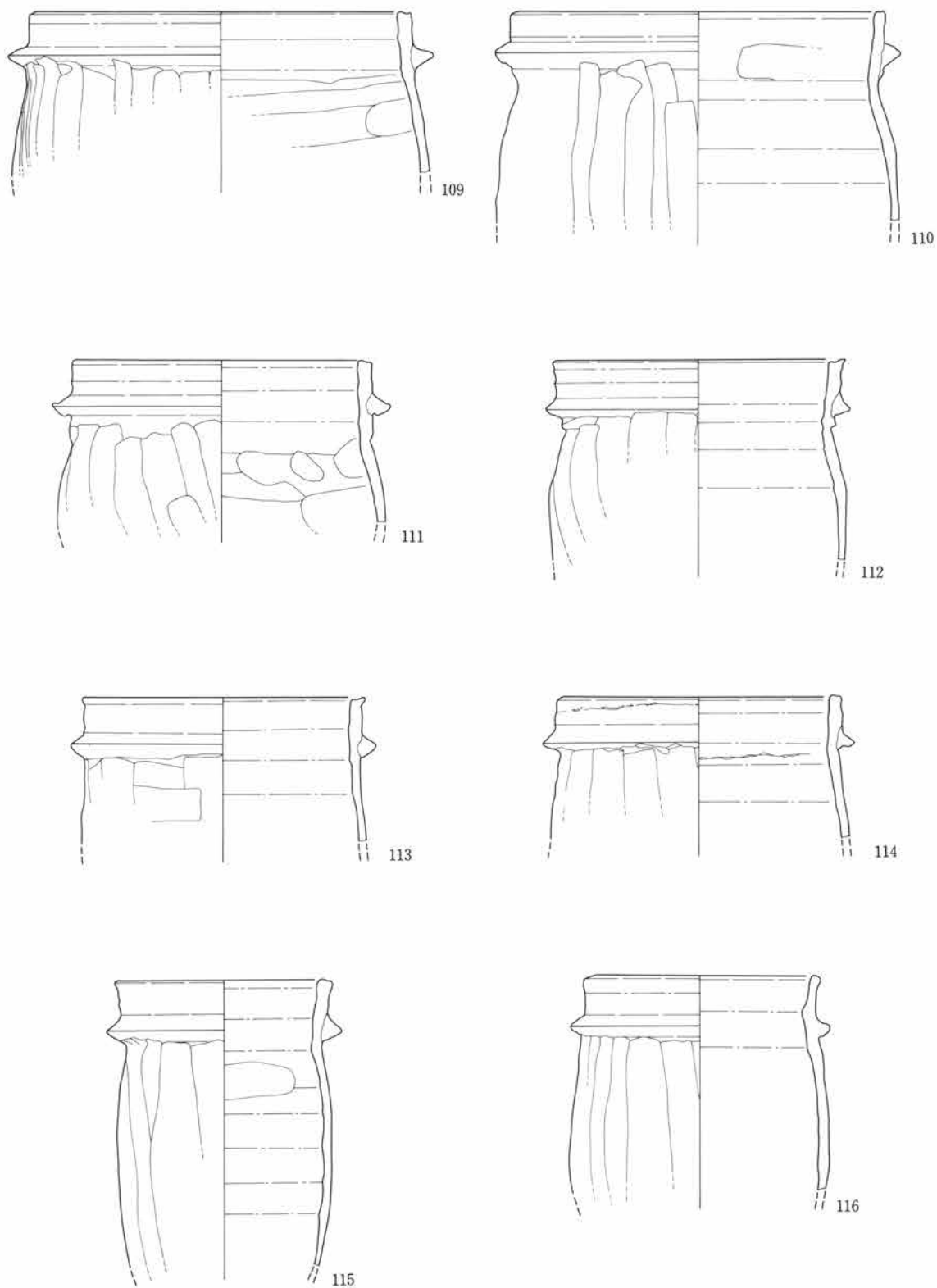
第32図 包含層出土遺物 (8)



第33図 包含層出土遺物 (9)

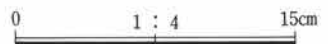
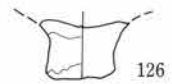
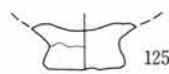
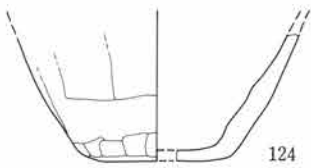
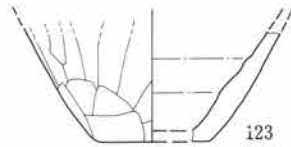
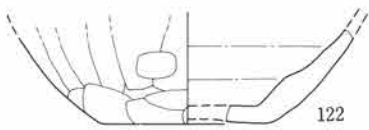
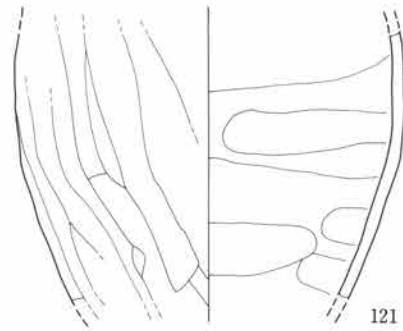
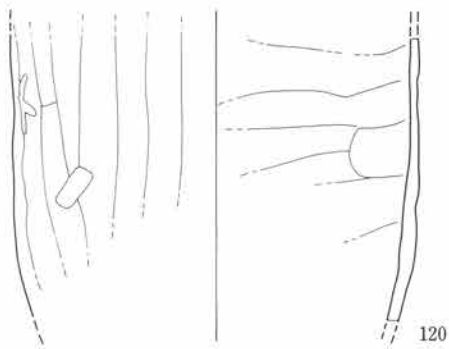
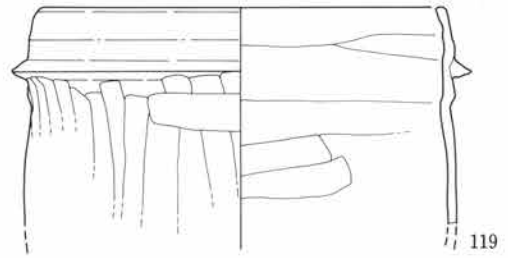
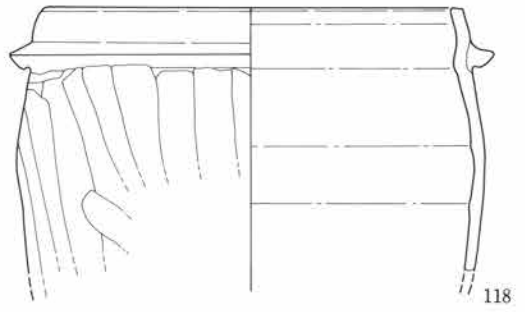
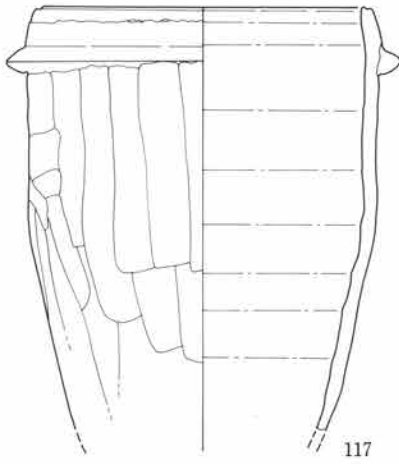


第34図 包含層出土遺物 (10)

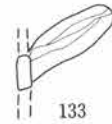
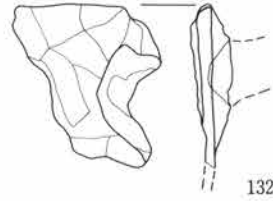
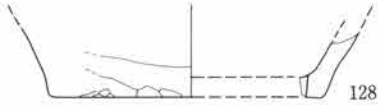
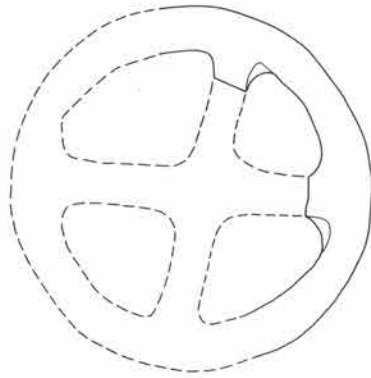
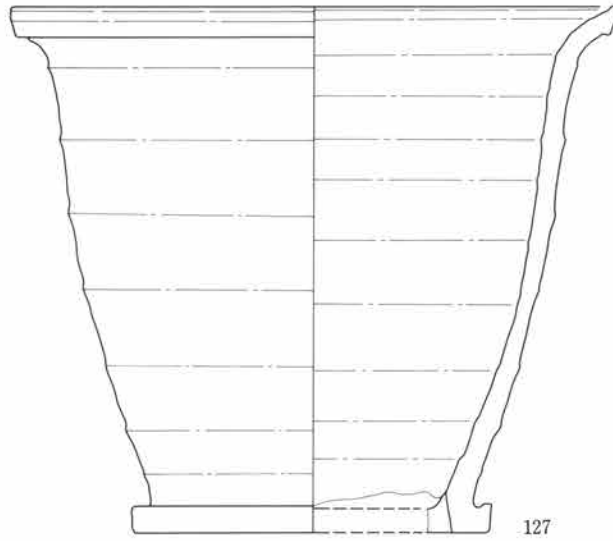


第35図 包含層出土遺物 (1)

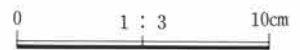
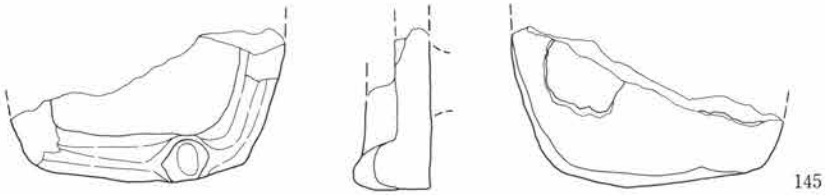
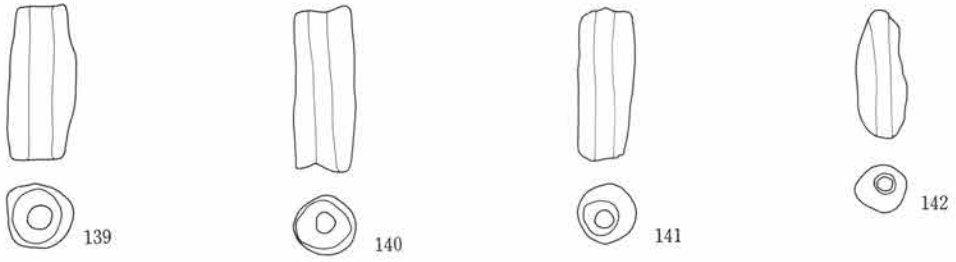
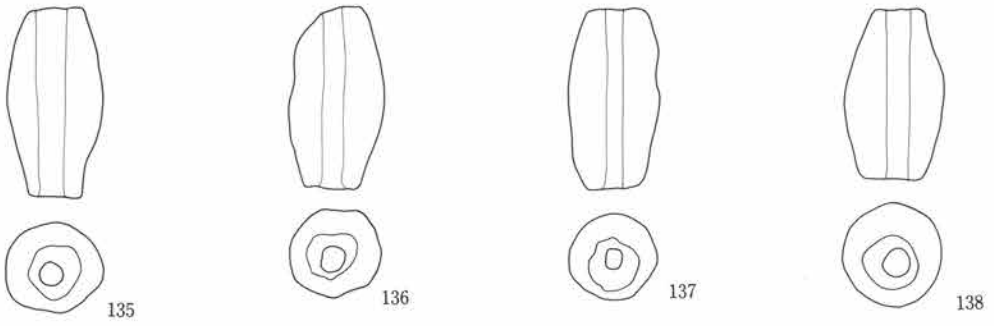




第36図 包含層出土遺物 (12)



第37図 包含層出土遺物 (13)



第38図 包含層出土遺物 (14)

### 第3節 中・近世の遺構と遺物

本遺跡の出土遺物としては中世に属するものもあるが、各遺構およびグリット出土の遺物は近世中期以降を主体としており、量的には少ない。遺構の多くは時期を明確にする遺物を伴っていないが、覆土や形態・周辺の遺物出土状況等から遺物の出土傾向と合致する時期と類推される。

#### 1 柱穴群（図版15-1）

調査区北半1区15～26ラインにかけて140本近い柱穴を検出したが、建物としてまとまるものはなかった。柱穴は円形で径20cm～60cmの小規模なもので、柱穴の中には底面に礫を敷き詰めたり、グリ石を詰めたものもあった。柱痕の判明した柱穴はなく、出土遺物も皆無である。

柱穴群は洞山の湾入した山体の谷の出口に扇状に広がる傾斜地の南端に位置し、南東方向へ緩やかに傾斜する面に分布している。調査区西半は傾斜がやや強く、中央部が傾斜変換点で、東半はやや平坦となる。

柱穴は西半のやや傾斜の強い面に6～10・14・15・17号土坑とともに密集し、中央部にはほとんど存在せず、やや平坦となる東半の11～13・16a・16b・18号土坑周辺では散在的となる。

柱穴群は周辺の出土遺物から近世中期以降と考えられ、柱穴群の上部には第1次調査段階では民家が立っており、現在の民家の前身に掘立柱建物の存在が推定される。この傾向は洞II遺跡の掘立柱建物群のあり方と符合するものである。

#### 2 溝

##### 1号溝（第39図、図版19-1）

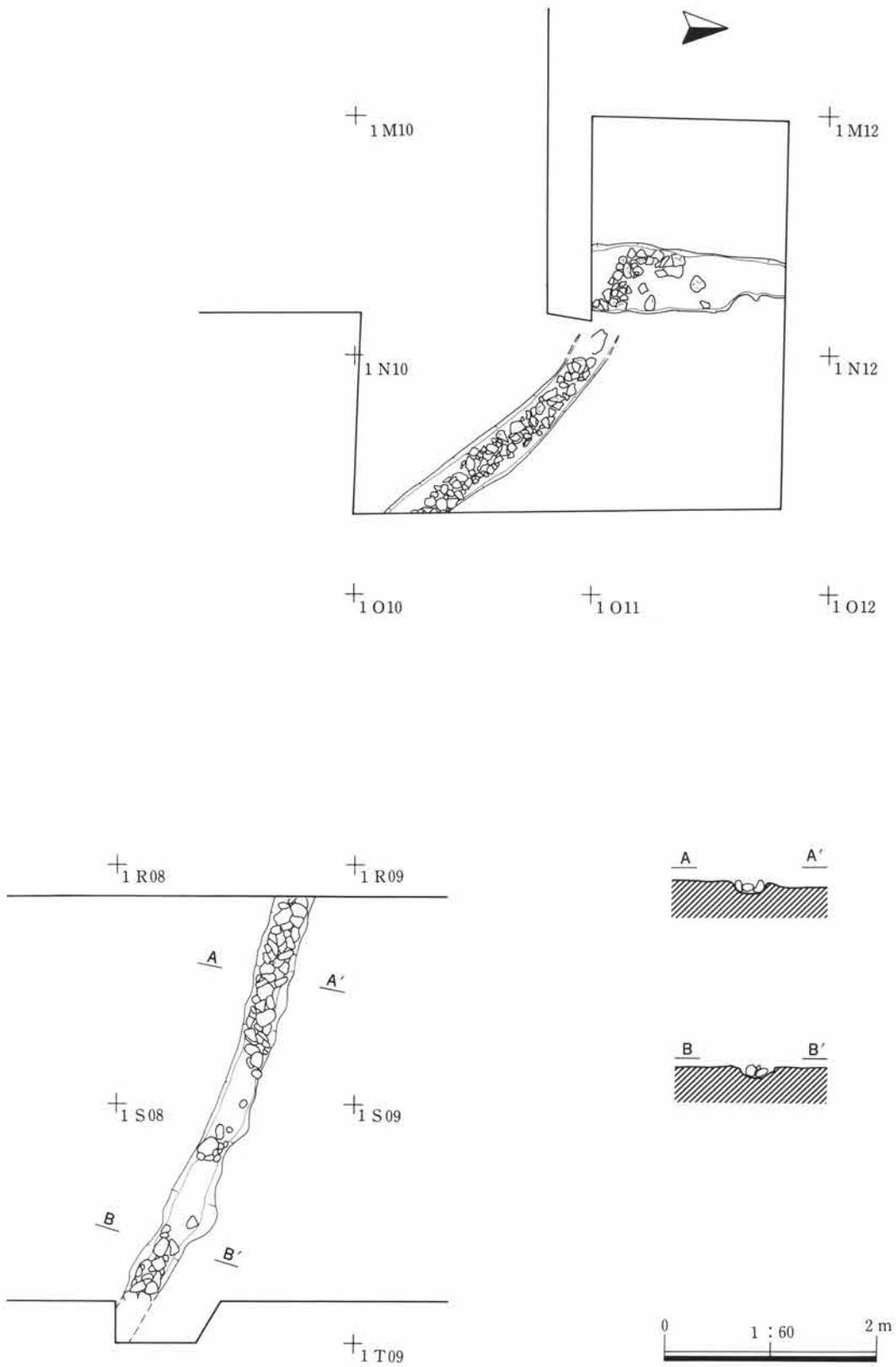
1区M-10～11にかけてと1区R～S-08にかけて位置しており、2ヶ所において距離約13mを部分的に確認しただけである。

溝は北西から南東方向へ傾斜を持ち、西端部において屈曲している。西端は等高線に平行しほぼ南北に走り、屈曲点からは等高線を斜めに横切る状態で走り、ほぼN-114°-Eの方向性を持つ。

溝の規模は幅0.34m～0.80m、深さ0.16m～0.21mで断面形は箱状をなしている。溝の円部には大小の礫が敷き詰められたように埋め込まれており、部分的に礫が抜かれ乱れている。

本溝は暗渠として排水を目的として構築されたと考えられる。当地域の特性としてローム下は滲水性の良い粘土層が厚く堆積しているため、雨水等は表層を流れる傾向にあり、また、洞山に近く傾斜地であるため現在でも小規模な湧水が散在しており、宅地の防水・防湿のために構築されたものと考えられる。

本溝からは遺物が出土せず、時期を断定する資料はないが、溝が1～3号井戸・1～3号土坑を画する状態で走向しており、周辺の遺構・遺物の分布状態から近世中期以降の時期と推定できる。



第39図 1号溝

### 3 井 戸

#### 1号井戸（第40図、図版19-2）

1区M-10に位置する方形の石組井戸で上部の石組は崩落している。井戸の下半は素掘りの円筒状をなし、上面より0.85mの井戸のほぼ中位に平坦面を設け、上半はややラップ状に開いている。上半掘形は隅丸方形をなしている。

石組は掘形上半の平坦面より上位に築かれており、最下部は丸太材を1列3本を使用して井桁を組み石組の支えとしている。石組は偏平な山石を平積みにして組み上げている。また、この石組の裏込めには粘質土を用いて固めている。

石組上端は現状で0.63m×0.68m、下端は0.70m×0.84mである。掘形上端は2.10m×2.15m、中段は1.35m×1.36m、底面は0.95m×1.10mで深さは1.58mである。本井戸は2・3号井戸に比べ浅く、青白色粘土層上面で止まっている。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中からは18世紀代の陶磁器片と一對の煙管が出土しており、本井戸の時期を示すものと考えられる。

#### 2号井戸（第40図、図版19-3）

1区N-08に位置し風倒木痕を切っている。不整円形をなす井戸で、覆土中に多くの礫が混入しており掘形の構造上からも石組の井戸と推定され、石組は全面的に崩落したものと考えられる。

井戸の下半は素掘りで円筒状をなし、上半は上面から1.40mの所よりラップ状に開いており、この部分に石組があったと考えられる。

井戸の上端径は2.10m×2.35m、中段径は1.68m×1.96mで底面は湧水が激しく確認できず深さ3.76mまで検出した。

本井戸は1・3号井戸と比べると、石組構築のための掘形平坦面がなく、構造的に石組の基盤が脆弱であったと推定される。遺物は出土しなかった。

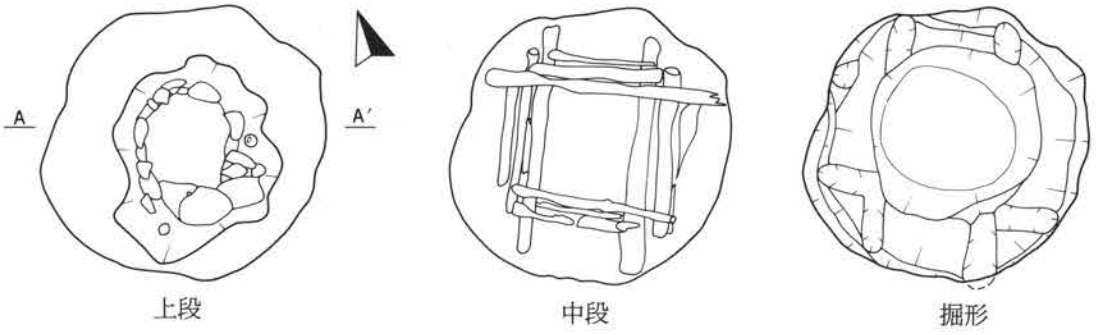
#### 3号井戸（第41図、図版19-4）

1区O-13に位置するやや長方形の石組井戸で上部は石組が崩落している。1号井戸と同様の構築方法で、下半は素掘りで円筒状をなし、上面より1.30mの深さの所に平坦面を設け、上半はラップ状に開いている。上半掘形は隅丸長方形をなしている。

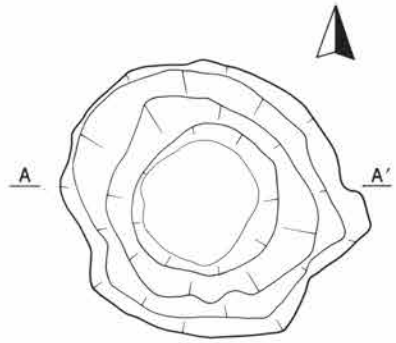
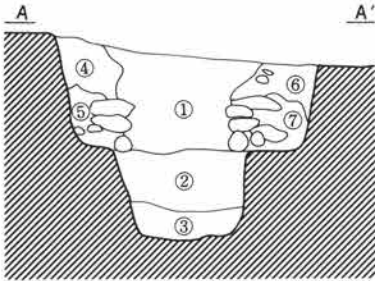
石組は掘形上半の平坦面より上位に築かれており、最下部はほぼ南北に長い丸太材を用い、東西に短い丸太材を用いて井桁を組み、石組の支えとしている。石組は偏平な山石を平積みにして組み上げている。石組の裏込めには粘質土を用いて固めている。

石組上端は現状で0.53m×0.64m、下端で0.38m×0.68mである。掘形上端は1.81m×2.18m、中段は1.45m×1.54mで深さは3.63mである。

覆土は自然に埋没した様相を示し、遺物は出土しなかった。1～3号井戸は近接した位置にあり、構築方法も類似しており、1号井戸と相前後する時期と推定される。

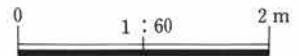
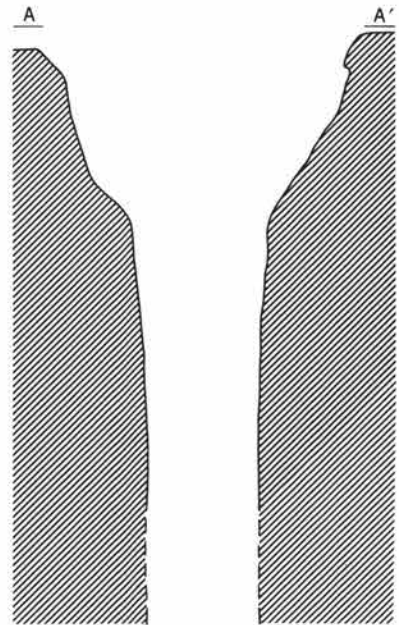


1号井戸

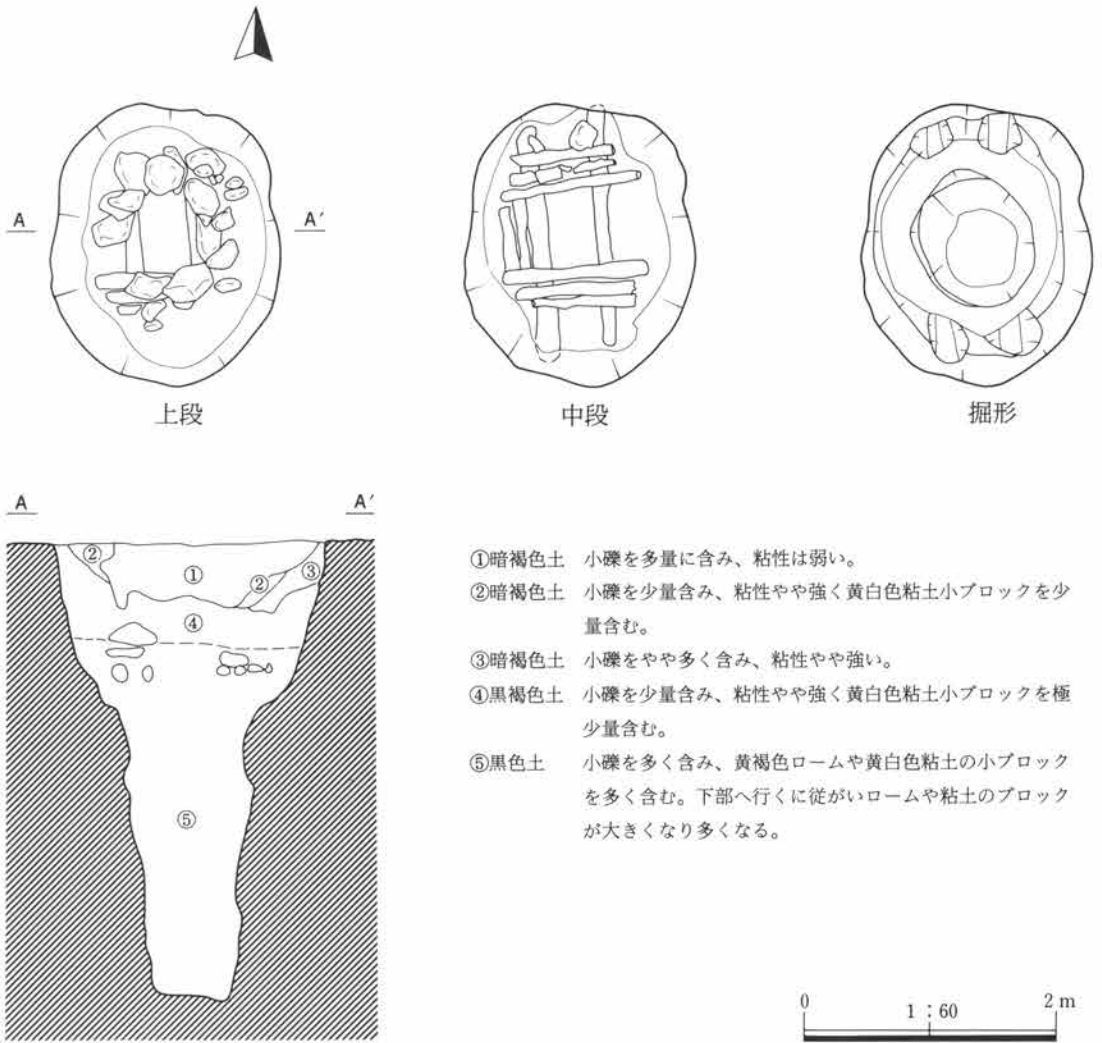


2号井戸

- ①黒色土 小礫を多く含み、粘性がやや強くソフトな土層である。
  - ②黒色土 小礫を多く含み、粘性が強くやや固く締っている。
  - ③青灰色土 青灰色粘土の小ブロックが堆積。
  - ④黒褐色土と黄褐色粘土・黄白色粘土等の大小のブロックが堆積。固く締っている。
  - ⑤黄褐色粘土を主とする大小のブロックが堆積。固く締っている。
  - ⑥黄褐色粘土の大小のブロック中に黒褐色土の小ブロックが混入。やや固く締っている。
  - ⑦黄褐色粘土と黄白色粘土の大小のブロックが混じり合っている。固く締っている。
- ①～③は自然埋没土層、④～⑦は井戸の裏込めの土層である。

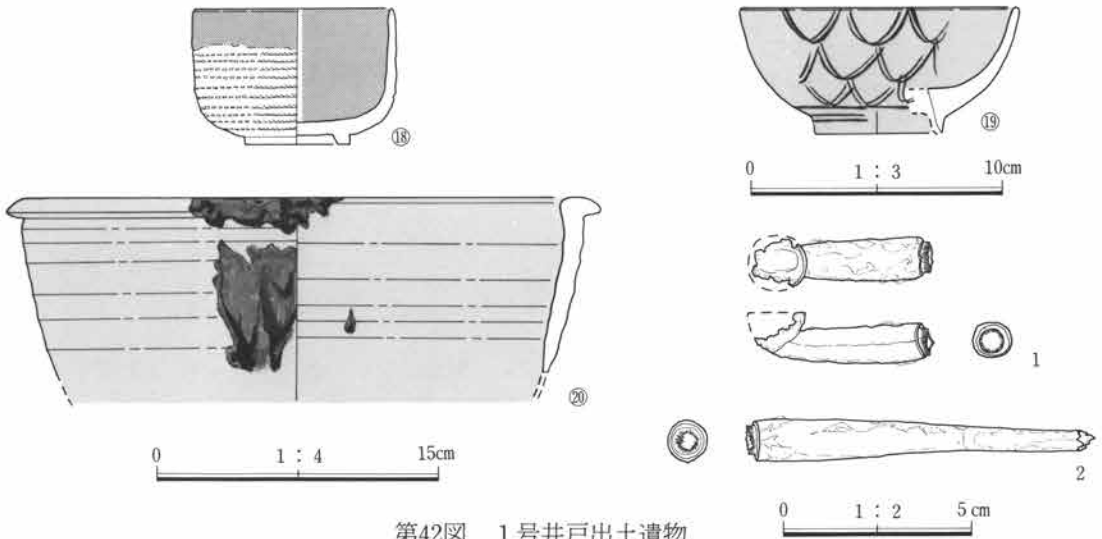


第40図 1・2号井戸



- ①暗褐色土 小礫を多量に含み、粘性は弱い。
- ②暗褐色土 小礫を少量含み、粘性やや強く黄白色粘土小ブロックを少量含む。
- ③暗褐色土 小礫をやや多く含み、粘性やや強い。
- ④黒褐色土 小礫を少量含み、粘性やや強く黄白色粘土小ブロックを極少量含む。
- ⑤黒色土 小礫を多く含み、黄褐色ロームや黄白色粘土の小ブロックを多く含む。下部へ行くに従ってロームや粘土のブロックが大きくなり多くなる。

第41図 3号井戸



第42図 1号井戸出土遺物



## 4 土 坑

## 1号土坑（第43図、図版19-5）

1区R-13に位置し2・3号土坑を切る。掘形平面形は不整円形をなし断面形の底面は平坦で周壁は斜めに立ち上がる。掘形中央に桶を設置したと考えられ、底面にはアシの痕跡がある。掘形は径1.99m、深さ0.50mで桶アシの径は0.93mである。桶の周囲や底面を粘質土で固めており、桶内部には大小の礫が投げ込まれていた。出土遺物なし。

## 2号土坑（第43図、図版19-6）

1区S-13に位置し1・3号土坑に切られる。1号土坑と同様の形態・構築方法をしており、掘形は径1.00m×1.12m、深さ0.32mで桶アシの径は0.81mである。桶内部には10世紀代の椀・羽釜片が数点混入し、大小の礫が投げ込まれていた。

## 3号土坑（第43図）

1区S-13に位置し1号土坑に切られ2号土坑を切る。1・2号土坑と同様の形態・構築方法をしており、掘形は径1.66m、深さ0.44mで桶アシの径は1.00mである。出土遺物なし。

## 4号土坑（第43図、図版19-7）

1区F-12に位置する。平面形は不整楕円形で断面形は丸みのある箱状をなす。規模は1.20m×1.02m、深さ0.82mで長軸方向はN-11°-Wを示す。出土遺物なし。

## 5号土坑（第43図、図版19-8）

1区I-05に位置する。平面形は不整長楕円形で断面形はU字状をなす。規模は2.10m×1.60m、深さ1.26mで長軸方向はN-80°-Wを示す。出土遺物なし。

## 6号土坑（第43図、図版20-1）

1区J-20に位置し柱穴と重複する。平面形は円形で断面形は箱状をなす。規模は径0.99m、深さ0.27mである。出土遺物なし。

## 7号土坑（第44図、図版20-2）

1区J-16に位置し柱穴に切られている。平面形は不整隅丸方形で断面形は皿状をなす。規模は1.35m×1.27m、深さ0.27mで長軸方向はN-4°-Wを示す。出土遺物なし。

## 8号土坑（第44図、図版20-3）

1区I-17に位置する。平面形は円形で断面形は丸みのある箱状をなす。規模は径1.03m、深さ0.32mである。出土遺物なし。

## 9号土坑（第44図）

1区F-17に位置し柱穴に切られる。平面形は不整円形で断面形は丸みのある箱状をなす。規模は径1.21m、深さ0.51mである。覆土中より平安時代の土器片2点出土。

## 10号土坑（第44図）

1区I-25に位置する。平面形は隅丸長方形で断面形は箱状をなす。規模は1.35m×0.55m、深さ0.25mで長軸方向はN-87°-Eを示す。出土遺物なし。

11号土坑 (第44図)

1区R-18に位置する。平面形は不整円形で断面形は箱状をなす。規模は径0.99m、深さ0.28mである。出土遺物なし。

12号土坑 (第44図)

1区S-21に位置し柱穴と重複する。平面的な不整形で断面形は楕円状をなす。規模は1.50m×1.38m、深さ0.55mで長軸方向はN-32°-Eを示す。出土遺物なし。

13号土坑 (第45図)

1区P-18に位置する。平面形は不整隅丸長方形で断面形は丸みのある箱状をなす。規模は1.93m×1.10m、深さ0.47mで長軸方向はN-30°-Wを示す。出土遺物としては中世常滑焼大甕の小片1点と近世陶磁器小片2点、鉄滓1点が出土。

14号土坑 (第45図、図版20-4)

1区I-21に位置し15号土坑に近接する。南半の1/2弱は攪乱を受けている。掘形平面形は円形で断面形は丸みのある箱状をなす。掘形中央に桶を設置した痕跡を留めている。掘形規模は径1.08m、深さ0.32mで桶アシの径は0.65mである。桶の周囲や底面を粘質土で固めている。桶内部の覆土中より18世紀代の陶磁器等が数点出土した。

15号土坑 (第45図、図版20-5・6)

1区J-21に位置し一部を攪乱されている。14号土坑と同様の形態・構築方法で掘形平面形が楕円形をなす。掘形規模は2.04m×1.42m、深さ0.33mで桶アシの径は0.97mである。桶内部の覆土には大小の礫が多く投げ込まれ、中世～近世にいたる各種の陶磁器類が出土した。

16-a号土坑 (第45図、図版20-7)

1区Q-17に位置し16-b号土坑を切る。平面形は楕円形で断面形は丸みのある箱状をなす。規模は1.94m×1.55m、深さ0.67mで長軸方向はN-12°-Wを示す。覆土は一挙に埋没した様相を示し、近世陶磁器小片1点出土。

16-b号土坑 (第45図、図版20-7)

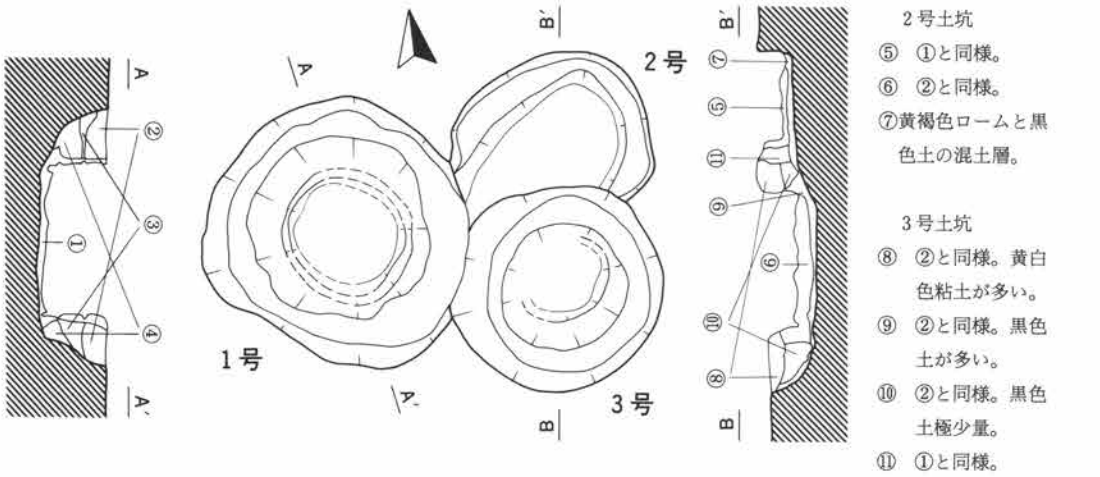
1区Q-17に位置し16-a号土坑に切られる。平面形は不整楕円形で断面形は丸みのある箱状をなす。規模は1.67m×1.03m、深さ0.67mで長軸方向はN-19°-Eを示す。覆土は一挙に埋没した様相を示し、遺物は出土しなかった。

17号土坑 (第45図)

1区K-26に位置する。平面形は不整長楕円形で断面形は段のある楕円状をなす。規模は1.33m×0.80m、深さ0.44mで長軸方向はN-26°-Wを示す。出土遺物なし。

18号土坑 (第45図、図版20-8)

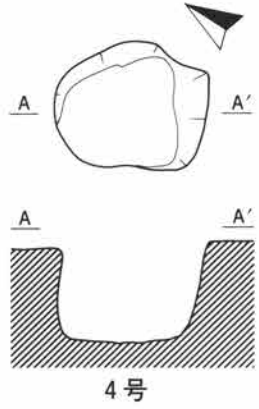
1区O-16に位置する。平面形は不整楕円形で断面形は2段に落ち込むU字状をなす。規模は1.42m×1.10m、深さ0.16mで長軸方向はN-16°-Wを示す。18世紀代の伊万里系の染付皿が覆土中より出土した。



1号土坑

- ①黄白色粘土を詰めている。
- ②黄白色粘土と黒色土の混土層。
- ③黄褐色ローム・黄白色粘土・黒色土の混土層。
- ④黄褐色ロームと黄白色粘土の混土層。

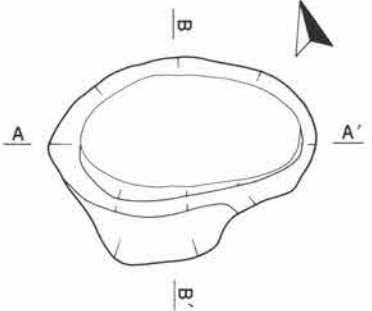
- 2号土坑
- ⑤ ①と同様。
  - ⑥ ②と同様。
  - ⑦黄褐色ロームと黒色土の混土層。
- 3号土坑
- ⑧ ②と同様。黄白色粘土が多い。
  - ⑨ ②と同様。黒色土が多い。
  - ⑩ ②と同様。黒色土極少量。
  - ⑪ ①と同様。



4号

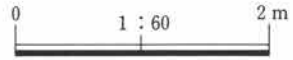


5号

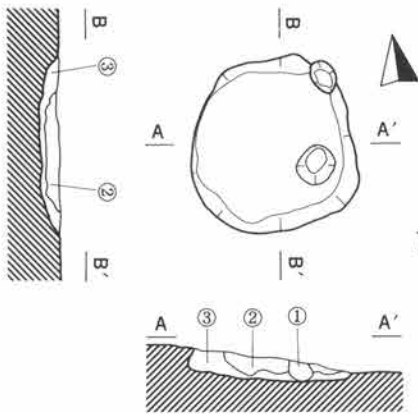


6号

- ①黒色土 ローム小ブロックを少量含み、粒子細かく粘性が強い。
- ②黒褐色土 ローム小ブロックを多量に含み、粒子細かく粘性が強い。
- ③黒色土 砂質をおびた黒色土層。
- ④黒色土 黄白色粘土ブロックが少量混入。粘性強い。
- ⑤暗黒褐色土 小礫が少量混入。
- ⑥暗黒褐色土 小礫が多量に混入するが、粘性の強い土層である。

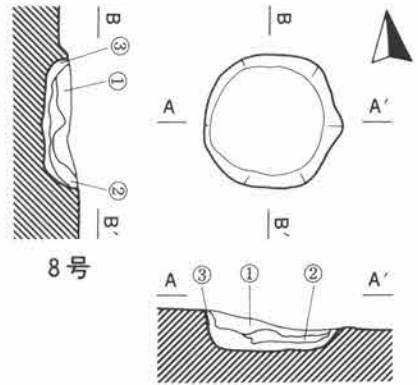


第43図 1～6号土坑



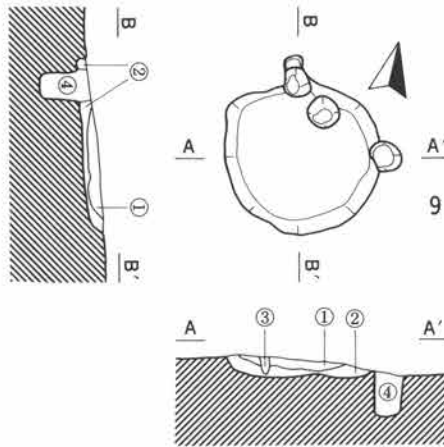
7号

- ①黒褐色土 ローム大ブロックを含む。
- ②黒色土 ローム粒子を極少量含む。
- ③黒褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
- ①・②・③とも粒子細かく粘性が強い。



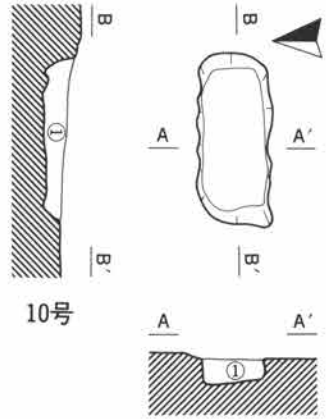
8号

- ①黒色土 ローム小ブロックをやや多く含む。
- ②黒色土 ローム小ブロックを極少量含む。
- ③黒褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
- ①・②・③とも粒子細かく粘性が強い。



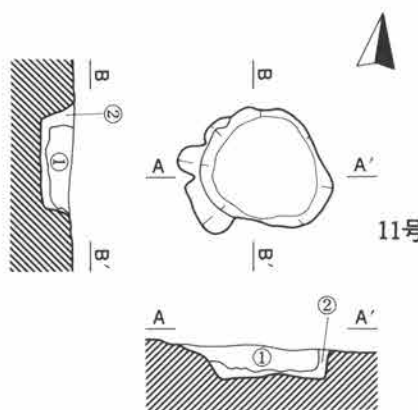
9号

- ①黒色土 ローム小ブロックを極少量含む。
- ②黒褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。
- ③木根による攪乱層。
- ④黄褐色ロームと黒色土の混土層。柱穴の埋土。
- ①~④ともに粒子細かく粘性が強い。



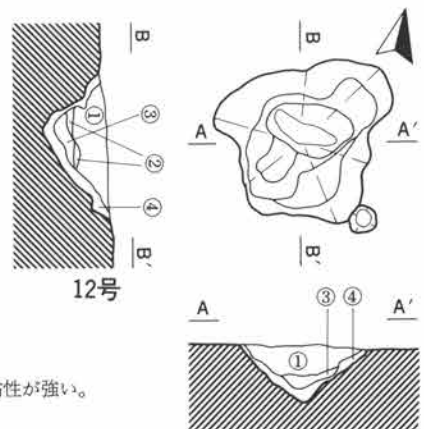
10号

- ①黒色土 ローム小ブロックを多く含み、粒子細かく粘性が強い。固く締っている。

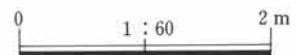


11号

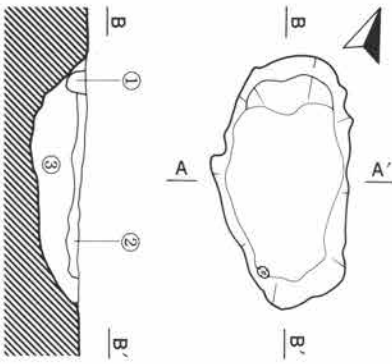
- ①黒色土 小礫が少量混入。
  - ②黄褐色土 ロームブロックがレンズ状に堆積している。
  - ③黒褐色土 小礫が少量混入。ローム小ブロックを極少量含む。
  - ④暗黄褐色土 ローム大ブロックを多く含む。
  - ①~④はともに粒子細かく粘性が強い。
- ①黒褐色土 ロームと褐色土の小ブロックをやや多く含み、粒子荒く粘性が弱い。
  - ②黄褐色土 ロームブロックの混土層。



12号

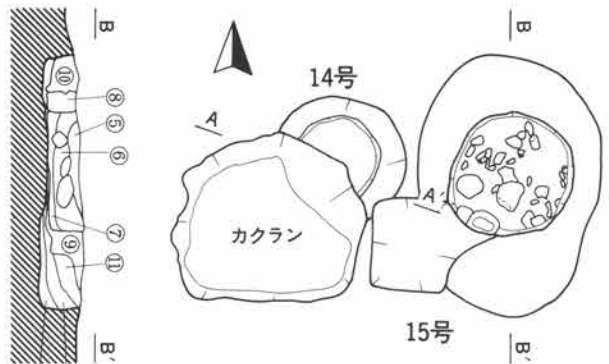


第44図 7~12号土坑



13号

- ①黒褐色土 土坑を切る柱穴の埋土。
- ②黒色土 ロームの大小ブロックを少量含む。
- ③黒色土 ローム小ブロックを極少量含む。

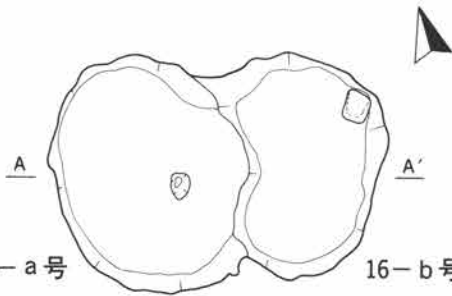


14号土坑

- ①黄白色粘土を詰めている。 ②黒色土・黄褐色ローム・黄白色粘土の混土層。 ③黄褐色ロームと黄白色粘土の混土層。ロームが多い。 ④黄褐色ロームと黄白色粘土の混土層。粘土が多い。

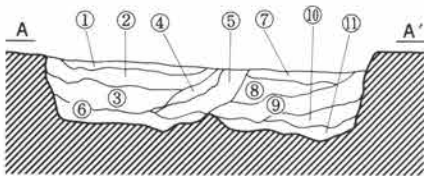
15号土坑

- ⑤暗黄褐色土 ローム小ブロックを多く含み、炭化物・焼土ブロックを少量含む。 ⑥褐色土 ローム小ブロックと炭化物をやや多く含む。 ⑦暗褐色土 ローム小ブロックと炭化物を極少量含む。 ⑧ ②と同様、ブロックが大きい。 ⑨黒色土と粘土の混土層。 ⑩ ④と同様。 ⑪～⑬ ⑨と同様。

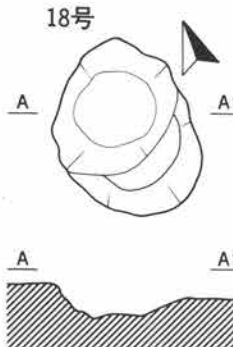


16-a号

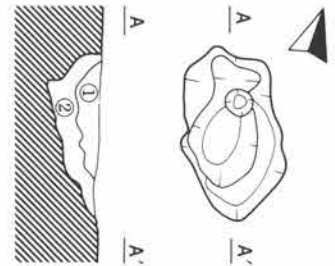
16-b号



- ①明褐色土 ロームと褐色土の混土層。
- ②暗褐色土 ロームと暗褐色土の混土層。
- ③明褐色土 ロームと褐色土の混土層。
- ④黒褐色土 黒褐色土中にローム小ブロックが混入。
- ⑤灰黄褐色土 ロームの大小のブロックが混り合う。
- ⑥暗黄褐色土 ロームと褐色土の混土層。
- ⑦暗褐色土 ロームと褐色土の混土層。
- ⑧暗黄褐色土 ロームの大小のブロックが混り合う。
- ⑨暗褐色土 黒褐色土と褐色土の混土層。
- ⑩暗黄褐色土 ロームの大小のブロックが混り合う。
- ⑪灰黄褐色土 ロームの小ブロックが混り合う。

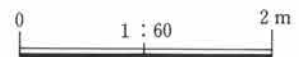


18号

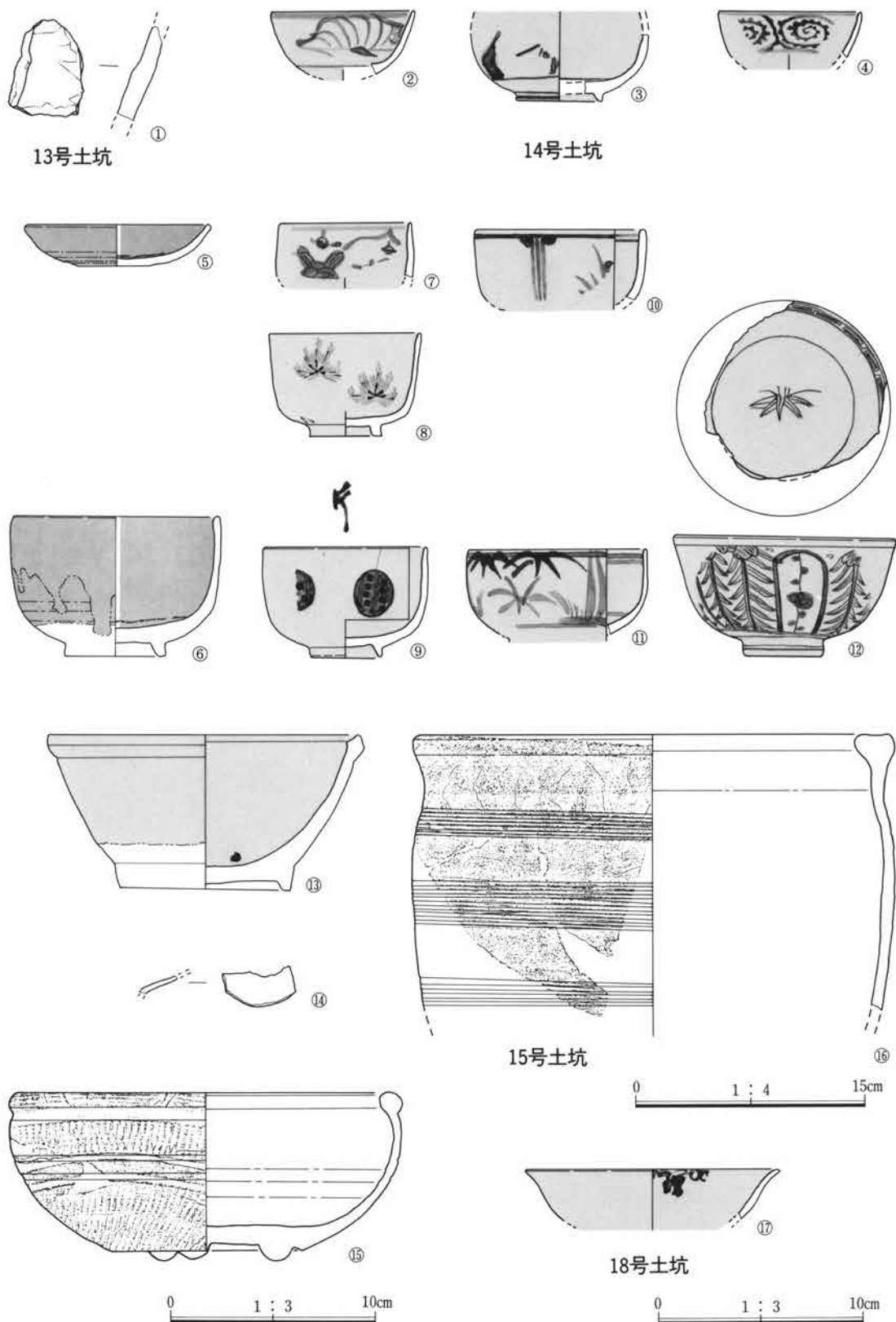


17号

- ①黒褐色土 ロームの大小ブロックを多く含む。
- ②暗黄褐色土 ロームの大小のブロックを多く含む。



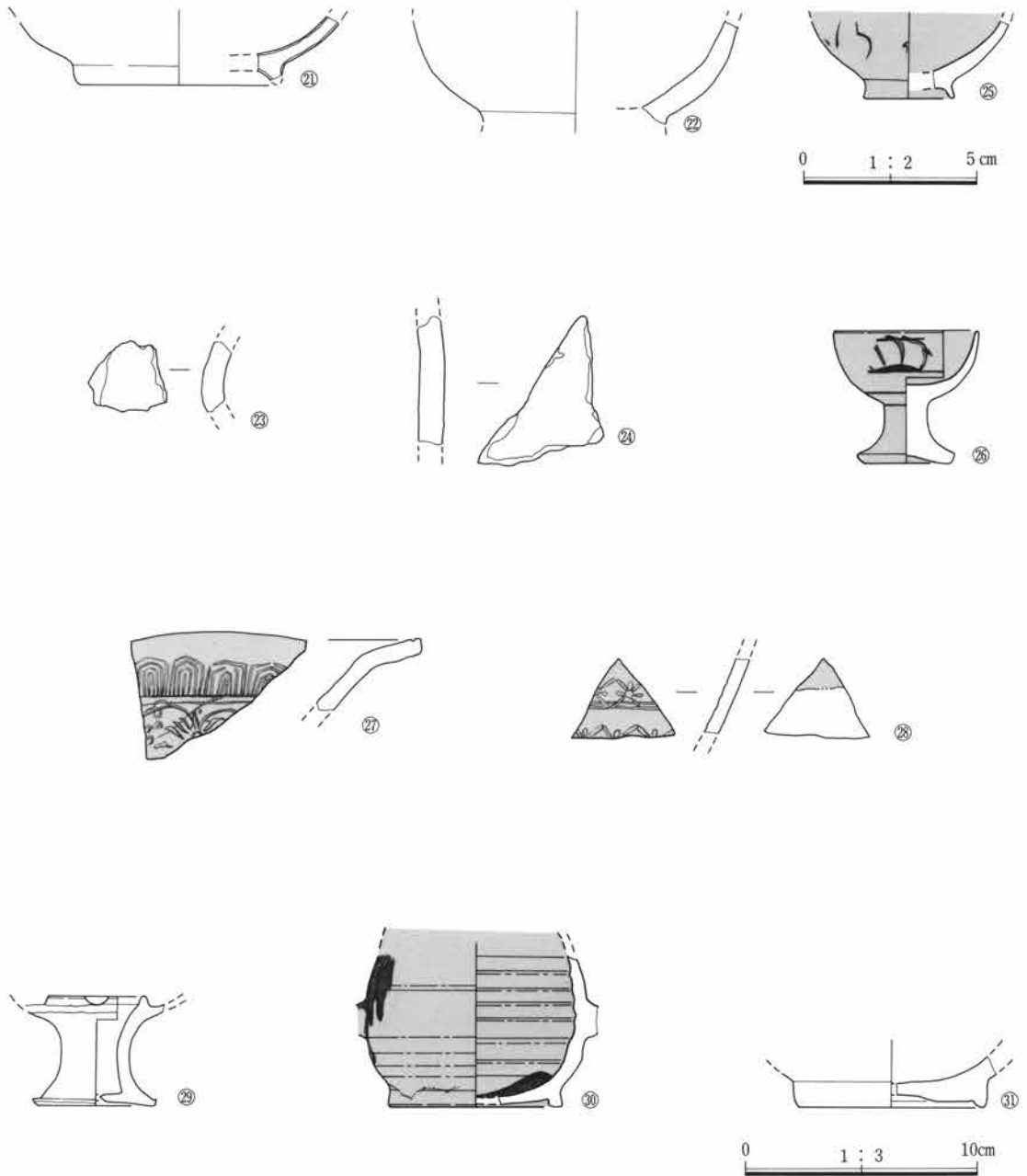
第45図 13～18号土坑



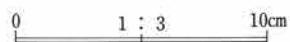
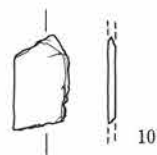
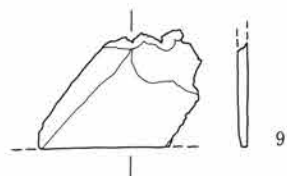
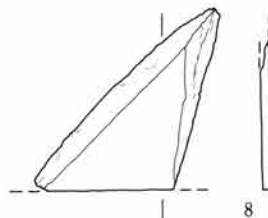
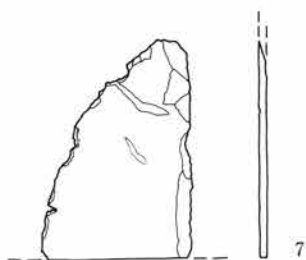
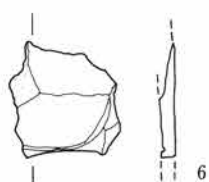
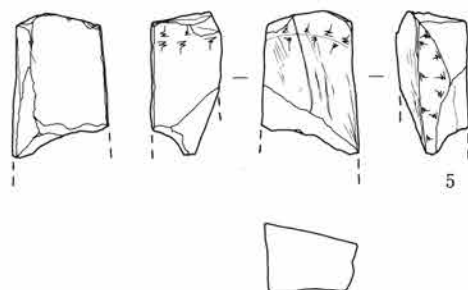
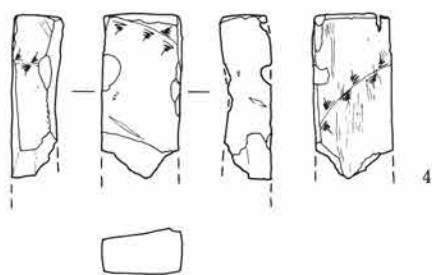
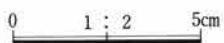
第46图 13~15・18号土坑出土遺物

5 グリット出土の遺物 (第24図、図版17・18-1)

グリット出土の遺物は量的には少ないが調査区のほぼ全体から出土しており、ほとんどが表土からの出土である。遺物としては第47・48図に図示した遺物に代表され、陶磁器類・銭貨・砥石・石板等がある。



第47図 グリット出土遺物 (1)



第48図 グリット出土遺物 (2)



## 第 3 表 洞 I 遺跡遺物観察表

## 1 平安時代

## ① 1号住居跡出土遺物(第20~22図、図版21~24)

番号	器種	出土位置	法 量 cm	胎土・焼成・色調	器 形 の 特 徴	成形・調整の特徴・その他
1	須恵器 杯	南辺中央 床面 No192	① $\frac{1}{2}$ ②(15.0) ③(7.0) ④4.8	白色鉍物粒子少量含む。酸化硬質。にぶい黄橙色。	体部は丸みを持って、内湾気味に立ち上がる。口縁部は緩く外反する。	底部左回転糸切り無調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。底部内面剝離痕あり。
2	須恵器 杯	中央床面 No148・ 255	① $\frac{1}{2}$ ②13.0 ③6.1 ④5.0	石英粒、白色鉍物粒子少し含む。還元やや硬質。灰色。	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部わずかに外反する。	底部左回転糸切り無調整。底部内面に強いヨコナデを施す。口縁部外面強いヨコナデ調整。底部側面にわずかな絞り込みがみられる。
3	須恵器 杯	南東隅床 面 No18	①口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠 ②12.6 ③6. 8 ④5.1	石英粒、白色・黒色鉍物粒子少し含む。還元やや軟質。灰白色。	体部は丸みを持って直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	底部右回転糸切り無調整。底部内面にロクロ痕残す。底部側面にわずかな絞り込みがみられる。
4	須恵器 杯	南東隅床 面 No17	① $\frac{1}{2}$ ②(13.6) ③8.2 ④4.2	砂粒子含む。還元やや硬質。灰白~灰色。	体部下半は直線的に立ち上がり、上半は丸みを持つ。口縁部はわずかに外反する。	底部左回転糸切り無調整。口縁部内外面共に強いヨコナデ調整。底部側面にわずかな絞り込みがみられる。
5	須恵器 杯	南東隅床 面 No57	① $\frac{1}{2}$ ②(11.9) ③6.2 ④4.2	白色鉍物粒子少量含む。還元軟質。暗灰白色。	体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部左回転糸切り無調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。
6	須恵器 杯	南東隅床 面 No103・ 104・106	① $\frac{1}{2}$ 弱 ② (12.2) ③ 6.6 ④3.6	砂粒、石英粒、白色鉍物粒子含む。酸化軟質。にぶい黄橙色。	体部下半は直線的に立ち上がり、上半は内湾気味となる。口縁部はわずかに外反する。	底部左回転糸切り無調整。底部側面にわずかな絞り込みがみられる。体部外面に工具による沈線あり。
7	須恵器 杯	南東隅床 面 No113・ 114	①略完形 ② 12.0 ③5.6 ④3.5	砂粒、白色鉍物粒子含む。酸化硬質。にぶい黄橙色。	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部わずかに外反し口縁直下に一条のロクロ線残す。	底部左回転糸切り無調整。口縁部外面強いヨコナデ調整。器面磨耗している。
8	須恵器 杯	南辺中央 覆土 No9	① $\frac{1}{2}$ ②12.2 ③6.1 ④3.8	砂粒、白色鉍物粒子含む。還元軟質。黒灰~浅黄色。	体部直線的に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。口縁直下に一条の弱いロクロ痕を残す。	底部左回転糸切り無調整。底部内面ヨコナデ調整。口縁部外面強いヨコナデ調整。

## 洞 I 遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
9	須恵器 杯	カマド前 床面 No20・223	①½ ②13.0 ③5.7 ④4.1	白色鉍物粒子、石英 粒子少量含む。還元 軟質。黒褐色。	体部は直線的に立ち上がり、 口縁部はわずかに外反。口縁 直下に一条のロクロ線を残 す。	底部左回転糸切り無調整。底 部内面回転ロクロ線残す。口 縁部外面強いヨコナデ調整。
10	須恵器 高台椀	南辺中央 床面 No190	①½ ②14.7 ③8.8 ④6.1	砂粒、白色鉍物粒子 含む。還元やや硬質。 灰色。	底部には外向する高台が付 く。体部は内湾気味に立ち上 がり、口縁部はわずかに外反 する。	底部右回転糸切り無調整。貼 付け高台時に糸切り痕周辺ナ デ消す。内底剝離痕あり。
11	須恵器 高台椀	南東隅床 面 No21・22・ 112	①% ②14.9 ③7.8 ④7.2	砂粒、白色鉍物粒子 含む。還元硬質。灰 色。	底部には外向する高台が付 き、体部は緩い稜を持って直 線的に立ち上がり、口縁部は そのまま外向する。	底部左回転糸切り無調整。貼 付け高台時に糸切り痕周辺ナ デ消す。体部中位に明瞭なロ クロ線。内底重ね焼痕あり。
12	須恵器 高台椀	南東隅床 面 No31・32	①略完形 ② 16.1 ③7.5 ④7.0	砂粒、石英粒、白色 鉍物粒子少量含む。 還元軟質。灰白色。	底部には外向する高台が付 き、体部はやや膨らみを持っ て立ち上がる。口縁部は緩く 外反し、薄くなる。	底部左回転糸切り無調整。貼 付け高台時に糸切り痕周辺ナ デ消す。内底に焼成時のヒビ 割れあり。
13	須恵器 杯	中央床面 No209	①¼ ②(15. 7) ③— ④—	細砂粒、白色鉍物粒 子含む。還元硬質。 灰色。	底部は丸みを持つ平底で、体 部から口縁部は直線的に開 く。口縁周辺から内面にかけ て自然釉付着。	ロクロ右回転。底部外面回転 ヘラ切り調整。口縁内外面ヨ コナデ調整。本住居址と時期 が異なり、沢入窯址産か？
14	土師器 甕	南東隅床 面 No237	①口縁～胴部 小片 ②(22. 0) ③— ④—	砂粒、石英粒、白色 鉍物粒子多く含む。 酸化。にぶい赤褐～ 橙色。	胴部は丸みを持ち、頸部は緩 やかに内湾し、口縁部は丸味 をもって大きく外反する。器 壁は7mmと厚い。	胴部外面下方向ヘケズリ、胴 部内外面ナデ調整。頸部～口 縁部内外面共にヨコナデ調 整。
15	土師器 甕	カマド No91	①口縁小片 ②(20.8) ③— ④—	細砂粒、褐色・白色 鉍物粒子含む。酸化。 明黄褐色。	丸みを持って「く」の字状に 外反し口縁直下に二条の明瞭 なロクロ線を残す。口縁端部 やや肥厚、器壁7mmと厚い。	頸部～口縁内外面共にヨコナ デ調整。須恵器的な胎土であ る。
16	土師器 小型甕	南東隅床 面 No62	①口縁～胴部 ②(10.9) ③— ④—	細砂粒、石英粒、白 色鉍物粒子含む。酸 化。外面にぶい褐色、 内面褐色。	胴部は膨らみを持ち、頸部は 緩やかに内湾し、口縁は丸み をもって大きく外反する。	胴部ヘラケズリ調整。頸部～ 口縁部内外面共にヨコナデ調 整。
17	土師器 甕	カマド前 床面 No67	①底部～胴下 部小片 ②— ③3.7 ④—	細砂粒、褐色鉍物粒 子含む。酸化。明赤 褐色。	底部は平底で径が小さく、内 底は丸みもち、胴部は斜め に立ち上がる。器壁は2mmと 極めて薄い。	底部外面、胴部ヘラケズリ、 内面ヘラナデ調整。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
18	土師器 小型甕	南東隅床 面 No42	①底部～胴部 ②－③(3.2) ④－	砂粒、石英粒、白色・褐色鉍物粒子多く含む。酸化やや硬質。外面褐色、内面褐色。	底部は平底で小さく、丸みを持って立ち上がる。底部内面は丸みがある。	底部外面～胴部不規則なケズリ、底部内面～胴部ナデ調整。
19	土師器 脚付甕	中央覆土 No75	①脚部のみ ②－③(5.8) ④－	細砂粒、白色鉍物粒子含む。酸化硬質。淡黄色。	脚付甕の脚部と思われる。脚部は「ハ」の字状に開く。	脚部上面周縁に右回転糸切り痕を残し、中央にホゾ状に出ている。
20	須恵器 鉢	南辺中央 床面 No241	①口縁部片 ②(22.0) ③－④－	小石、石英、褐色鉍物粒子を含む。酸化硬質。にぶい黄橙色。	胴部から口縁部にかけて直線的に外向する。	胴部～口縁部内外面共にヨコナデ調整。
21	須恵器 甕	覆土	①口縁部小片 ②－③－ ④－	黒色・白色鉍物粒子含む。還元硬質。灰色。	口縁部は大きく外反し、端部は上下につまみ出し直立した端部中位に一本の稜線が走る。	口縁部強いヨコナデ調整。口縁直下に4本1単位のクシ描波状文が施される。
22	須恵器 甕	カマド・ 中央覆土 ・南東隅 床面 No34・90	①底部～胴部 ②－③(15.2) ④－	砂粒、白色鉍物粒子少量含む。還元硬質。灰色。	平底で胴部は直線的に外反して立ち上がる。	底部外面雑なケズリ、底部内面ナデ。胴部押圧後ナデ調整。胴下端ケズリ、胴下半平行叩き後スリ消。底部、胴部の外面布目痕あり。
23	須恵器 甕	カマド前 床面 No40・81	①底部②－ ③10.1④－	白色鉍物粒子多く含む。酸化やや軟質。にぶい赤褐～黒褐色。	平底で胴部は直線的に外反して立ち上がる。	底部外面不規則なケズリ、底部内面回転ナデ。胴部外面丁寧なヨコナデ調整。
24	砥石	南壁中央 覆土 No4	長さ21.5 幅 4.7 厚さ6.2 重さ785g	凝灰岩。4面とも使用。表裏面は全面を平坦に使用し、研ぎ面が大きく内湾している。中央部断面は歪んだ平行四辺形をなし、利手側にやや片減りしている。両側面は浅い溝状に中央部のみを使用。細い溝状の研ぎ痕が3面に見られ、1側面には多く集中している。端部は部分的に自然面を残し、一部に作成時の削痕が見られる。		

## ② 1区J-09落ち込み出土遺物(第23図、図版25)

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
1	須恵器 杯	覆土 No362・ 366	①¼ ②(16.7) ③(18.4) ④6.2	砂粒、石英粒、白色鉍物粒子を含む。還元軟質。灰白色。	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部緩く外反する。	底部右回転糸切り無調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部に二条のロクロ線あり。
2	須恵器 杯	覆土 No406・ 237・404	①小片 ②(13.6) ③(6.8) ④3.8	細砂粒、褐色・白色鉍物粒子含む。酸化やや硬質。にぶい黄橙色。	体部は膨らみを持って立ち上がり、口縁部緩く外反し端部はやや肥厚する。底部内面は丸みを持つ。	底部右回転糸切り無調整。口縁部直下に強いヨコナデ調整。体部のロクロ線不明瞭。

## 洞Ⅰ遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
3	須恵器 杯	覆土 No491	① $\frac{1}{2}$ ②(13.0) ③(6.8) ④3.3	細砂粒、石英粒、白色粒子少量含む。酸化やや硬質。にぶい黄橙色。	底部内面は丸みを持ち、体部はやや膨らみを持って立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。	底部右回転糸切り無調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部のロクロ線不明瞭。
4	須恵器 高台椀	覆土 No242	①完形 ②14.3 ③6.8 ④5.4	砂粒、白色粒子含む。還元やや軟質。灰黄褐～にぶい黄褐色。	底部内面は丸みを持ち、底部には外向する高台が付く。体部は丸みを持って立ち上がり口縁端部は外反し肥厚する。	底部右回転糸切り無調整。貼付け高台時に糸切り痕周辺ナデ消す。口縁内外面と体部下半ヨコナデ調整。体部上半ロクロ線明瞭。
5	須恵器 高台椀	覆土 No69	①底部～体部 ②— ③6.5 ④—	小石、砂粒、白色鉍物粒子含む。還元硬質。灰色。	底部内面は丸みを持ち、底部には厚い高台が付き、体部は丸みを持って立ち上がっている。	底部右回転糸切り無調整。貼付け高台時に強いヨコナデで糸切り痕ナデ消す。高台部焼成時のヒビ割れあり。成形雑である。
6	須恵器 高台椀	覆土 No281	①底部～体部 $\frac{1}{2}$ ②— ③(7.8) ④—	細砂粒、白色鉍物粒子含む。酸化軟質。にぶい黄橙色。	底部には外向する高台が付き、体部は丸みを持って立ち上がっている。	底部右回転糸切り無調整。貼付け高台時に糸切り痕周辺ナデ消す。底部内面ナデ調整。
7	須恵器 羽釜	覆土 No691	①口縁～胴部小片 ②(20.2) ③— ④—	砂粒、白色鉍物粒子含む。還元硬質。灰白～黒灰色。	胴部は直線的で、口縁部は直立し、端部は平坦である。突帯断面は三角形形状をなす。	胴部は突帯まで縦上方向へ一気にヘラケズリ。口縁部内外面共にヨコナデ調整。
8	須恵器 羽釜	覆土	①口縁～胴部小片 ②(19.2) ③— ④—	砂粒、褐色鉍物粒子含む。還元軟質。淡黄色。	胴部は直線的で、口縁部は直立し、端部は平坦である。突帯断面は三角形形状をなす。	胴部は突帯まで縦上方向へ一気にヘラケズリ。口縁部内外面共にヨコナデ調整。突帯直下に強いヘラの痕がある。
9	須恵器 羽釜	覆土 No486	①口縁～胴部小片 ②(17.5) ③— ④—	砂粒、白色鉍物粒子含む。還元やや軟質。黒褐色。	胴部は直線的で、口縁部は直立し、端部は平坦である。突帯断面は三角形形状をなす。	胴部は突帯まで縦上方向へ一気にヘラケズリ。胴部内面は不規則なナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。口縁部内面に輪積痕あり。
10	須恵器 羽釜	覆土 No251	①口縁～胴部小片 ②(16.8) ③— ④—	小石、砂粒、石英粒、白色鉍物粒子含む。還元硬質。灰白色。	胴部は直線的で、口縁部は直立し、端部は平坦である。突帯断面は三角形形状をなす。	胴部は突帯まで縦上方向へ一気にヘラケズリ。口縁部内外面共にヨコナデ調整。突帯直下に輪積痕残す。

## ③ 包含層出土遺物（第25～38図、図版26～40）

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
1	須恵器 杯	1区P- 02 第II 層	① $\frac{1}{2}$ ②14.2 ③7.1 ④4.8	砂粒、黒色・白色鉍 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	体部は丸みを持って、内湾気 味に立ち上がる。口縁部はそ のまま外向する。	底部左回転糸切り無調整。口 縁部内外面共にヨコナデ調 整。
2	須恵器 杯	1区K- 09 第II 層	① $\frac{3}{8}$ ②— ③7.2 ④—	砂粒、褐色・白色鉍 物粒子含む。酸化軟 質。橙色。	底部内面は丸みがある。体部 下半は丸みを持ち上半は直線 的に立ち上がる。	底部右回転糸切り無調整。体 部中位に内外面共に明瞭で細 かいロクロ線を残す。底部に 工具による沈線がある。
3	須恵器 杯	1区P- 03 No47・ 48・51・ 53・55	① $\frac{1}{4}$ ②14.1 ③7.6 ④6.0	砂粒、黒色・白色鉍 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	体部はわずかに膨らみを持っ て立ち上がり、口縁部はその まま外向する。	底部右回転糸切り無調整。体 部内外面共にロクロ線あり。 体部側面に絞り込みがみられ る。
4	須恵器 杯	1区O- 02 No109・ 205・303	① $\frac{1}{8}$ ②13.5 ③7.4 ④6.0	砂粒、黒色・白色鉍 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	体部は膨らみを持って立ち上 がり、口縁部やや内向する。 片口状にやや歪みを持つ。	底部左回転糸切り無調整。口 縁部内外面共にヨコナデ調 整。外底に焼成時のわずかな ヒビ割れあり。
5	須恵器 杯	0区B- 32 No55	①略完形 ② 14.4 ③6.8 ④4.5	砂粒、石英粒、褐色 鉍物粒子含む。酸化 硬質。淡黄色。	体部は丸みを持って、内湾気 味に立ち上がる。口縁部は緩 く外反し、端部が薄くなる。	底部左回転糸切り無調整。口 縁部内外面共にヨコナデ調 整。体部下半に焼成時のヒビ 割れあり。
6	須恵器 杯	1区O- 01 第II 層	①略完形 ② 12.8 ③7.2 ④4.2	砂粒、黒色・白色鉍 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	体部は膨らみを持って立ち上 がり、口縁部わずかに外反す る。焼成時の歪みを持つ。	底部右回転糸切り無調整。体 部外面に細かいロクロ線残 す。口縁部辺に焼成時のヒビ 割れあり。
7	須恵器 杯	1区Q- 04 No15、 1区P- 04 No7	① $\frac{1}{8}$ ②12.9 ③7.1 ④4.1	細砂粒、褐色・白色 鉍物粒子含む。還元 軟質。にぶい橙～灰 白色。	体部は弱い稜を持って緩やか に立ち上がり、口縁部わずか に外反する。	底部左回転糸切り無調整。口 縁部内外面共にヨコナデ調 整。ロクロ線不明瞭。底部と 体部の接合痕が明瞭に残る。 重ね焼痕あり。
8	須恵器 杯	1区表土	① $\frac{1}{8}$ ②12.8 ③6.8 ④4.1	砂粒、白色鉍物粒子 多く含む。還元硬質。 灰色。	体部は膨らみを持って立ち上 がり、口縁部はそのまま外向 する。	底部右回転糸切り無調整。ロ クロ線わずかに残す。底部側 面をわずかに絞り込んでいる。
9	須恵器 杯	1区N- 02 No14 ～17	①略完形 ② 12.5 ③6.8 ④4.0	砂粒、白色鉍物粒子 含む。還元硬質。灰 色。	体部は膨らみを持って立ち上 がり、口縁部はわずかに外反 する。	底部右回転糸切り無調整。口 縁部内外面ヨコナデ調整。ロ クロ線不明瞭である。底部側 面にやや絞り込みが見られ る。重ね焼痕あり。

## 洞Ⅰ遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
10	須恵器 杯	1区O～ P-02 No.4・163	① $\frac{1}{4}$ ②12.1 ③6.8 ④3.9	小石、黒色・白色鈹物粒子含む。還元硬質。灰色。	底部から体部への立ち上がりに緩やかな稜を持ち、体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。	底部左回転糸切り無調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。ロクロ線少し残す。重ね焼痕あり。
11	須恵器 杯	1区N- 02 No.28	① $\frac{1}{4}$ ②12.0 ③6.9 ④3.8	砂粒、黒色・白色鈹物粒子含む。還元硬質。灰色。	体部は膨らみを持って立ち上がり、口縁部は緩く外反する。	底部右回転糸切り無調整。ロクロ線不明瞭である。底部側面に絞り込みが見られる。
12	須恵器 杯	1区O- 02 No.168	① $\frac{1}{2}$ ②11.9 ③6.9 ④4.2	小石、白色鈹物粒子含む。還元硬質。灰黄色。	体部は膨らみを持って立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。	底部右回転糸切り無調整。ロクロ線少し残す。底部側面にわずかな絞り込みがみられる。外面に重ね焼痕わずかにあり。
13	須恵器 杯	1区B- 01 第II 層	① $\frac{1}{4}$ ②10.6 ③6.0 ④3.7 ～2.9	小石、黒色・白色鈹物粒子含む。還元。灰色。	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は緩やかに外反する。口縁両側面を掴んでおり片口状をなす。	底部左回転糸切り無調整。口縁外面強いヨコナデ調整。底部内面に強い回転ナデを施す。口縁直下に強いロクロ線を一条残す。
14	須恵器 杯	0区B- 31 No.6	① $\frac{1}{2}$ ②13.5 ③6.6 ④4.4	砂粒、白色鈹物粒子含む。酸化硬質。にぶい黄橙色。	体部下半は直線的に立ち上がり、上半は丸みを持つ。口縁部わずかに外反する。	底部左回転糸切り無調整。口縁部強いヨコナデ調整。器面全体が磨耗しており、部分的に器面が剥落している。
15	須恵器 杯	0区B- 32	①略完形 ② 13.3 ③6.2 ④4.4	砂粒、褐色・白色鈹物粒子含む。還元軟質。にぶい黄橙～黒灰色。	体部は膨らみを持ってやや直線的に立ち上がる。口縁部は緩くわずかに外反する。	底部左回転糸切り無調整。口縁部強いヨコナデ調整。体部下半に焼成時のヒビ割れあり。
16	須恵器 杯	1区O- 02 No.262・ 276	① $\frac{1}{2}$ ②13.4 ③7.0 ④4.3	小石、白色鈹物粒子含む。還元硬質。灰色。	体部下端に緩い稜を持って直線的に上半は内湾気味に立ち上がり、口縁部わずかに外反する。	底部左回転糸切り無調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。底部側面にわずかな絞り込みがみられる。
17	須恵器 杯	0区B- 31 No.14	① $\frac{1}{4}$ ②13.8 ③7.0 ④3.8	砂粒、褐色・白色鈹物粒子含む。酸化硬質。にぶい黄橙色。	体部下半は直線的に立ち上がり、上半は丸みを持ち、口縁部はそのまま外向する。	底部左回転糸切り無調整。口縁部強いヨコナデ調整。体部内面には細かいロクロ線と剝離痕あり。
18	須恵器 杯	0区B- 31 No.15	① $\frac{1}{4}$ ②12.2 ③5.7 ④3.2	長石、褐色・白色鈹物粒子含む。酸化硬質。にぶい黄橙～褐色。灰色。	体部はやや膨らみを持って直線的に立ち上がり、口縁部緩く外反する。	底部左回転糸切り無調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
19	須恵器 杯	0区B- 31 No12	① $\frac{1}{2}$ ②(12. 0) ③5.5 ④3.9	砂粒、褐色・白色鈹 物粒子含む。還元や や軟質。褐灰色。	体部はやや直線的に立ち上 がり、口縁部は緩く外反し、端 部が薄くなる。	底部左回転糸切り無調整。口 縁部強いヨコナデ調整。底部 の回転糸切りによる切り離し が不完全で、無調整の部分が 残る。
20	須恵器 杯	1区O- 03 No74	① $\frac{1}{2}$ ②(13. 0) ③5.7 ④3.6	小石、白色鈹物粒子 含む。還元軟質。灰 黄色。	底部内面は丸みを持ち、体部 は膨らみを持って立ち上 がり、口縁部は緩く外反し、や や肥厚する。	底部右回転糸切り無調整。口 縁部内外面共にヨコナデ調 整。体部外面に明瞭な細かい ロクロ線あり。底部工具によ る沈線あり。
21	須恵器 杯	1区I- 10 第II 層	① $\frac{1}{2}$ ②(13. 0) ③6.5 ④3.8	砂粒、石英粒、褐 色・白色鈹物粒子含 む。酸化硬質。浅黄 色。	底部内面は丸みがあり、体部 は膨らみを持って立ち上 がり、口縁部は緩く外反する。	底部右回転糸切り無調整。口 縁部内外面共にヨコナデ調 整。
22	須恵器 杯	1区K- 07 第II 層	① $\frac{1}{2}$ ②(13. 2) ③6.4 ④4.0	小石、褐色・白色鈹 物粒子含む。酸化軟 質。黄褐～黒褐色。	底部内面は丸みを持ち、体部 は直線的に立ち上がり、口縁 部は緩く外反し、やや肥厚す る。	底部右回転糸切り無調整。口 縁部内外面共にヨコナデ調 整。体部外面に明瞭な細かい ロクロ線あり。底部工具によ る沈線あり。
23	須恵器 杯	1区J- 09 第II 層	①略完形 ② 13.0 ③5.9 ④3.8	小石、白色鈹物粒子 含む。酸化軟質。に ぶい黄橙色。	底部内面は丸みがあり、体部 は内湾気味に立ち上がり、口 縁部は緩く外反し肥厚する。	底部右回転糸切り無調整。口 縁部内外面共に強いヨコナデ 調整。体部外面に明瞭な細か いロクロ線を残す。
24	須恵器 杯	1区O- 02 No84	① $\frac{1}{2}$ ②13.0 ③5.2 ④3.8	砂粒、石英粒、白色 鈹物粒子含む。酸化 硬質。淡黄色。	底部内面は丸みがあり、体部 はやや直線的に立ち上がり、 口縁部は外反し肥厚する。口 縁直下に明瞭なロクロ線あり。	底部右回転糸切り。摩滅のた め糸切り不明瞭。口縁部強い ヨコナデ調整。焼成時に出来 た棒状痕あり。
25	須恵器 杯	1区I- 09 第II 層	① $\frac{1}{2}$ ②(12. 2) ③5.9 ④4.1	小石、白色鈹物粒子 少量含む。酸化硬質。 淡黄色。	底部内面は丸みを持ち、体部 は内湾気味に立ち上がり、口 縁部は緩く外反しやや肥厚す る。	底部右回転糸切り無調整。体 部上半に明瞭なロクロ線を残 す。体部外面が一部剥離して いる。
26	須恵器 高台椀	1区O- 03 No33	①底部～体部 $\frac{1}{2}$ ② - ③ - ④ -	砂粒、石英粒、黒色・ 白色鈹物粒子含む。 還元硬質。灰色。	体部は丸みを持って立ち上 がる。高台が剥落。	右回転ロクロ成形。貼付け高 台時に底部をヘラナデ調整。 高台剥落部に二本の沈線が見 られる。
27	須恵器 高台椀	1区J- 02 第II 層	①底部～胴部 ② - ③ (8. 9) ④ -	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鈹物粒子含む。 酸化軟質。にぶい黄 橙色。	底部に「ハ」の字状に開いた 薄い高台が付く。体部は丸み を持って立ち上がる。	底部右回転糸切り無調整。貼 付け高台時に糸切り周辺ナデ 消す。

## 洞Ⅰ遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
28	須恵器 高台椀	1区K- 01 第Ⅱ 層	①底部～体部 小片 ②— ③(7.7) ④—	砂粒、褐色・白色鉍 物粒子含む。酸化硬 質。にぶい黄橙色。	体部には「ハ」の字状に開い た薄い高台が付く。体部はや や丸みを持って立ち上がる。	底部左回転糸切り無調整。貼 付け高台時に糸切り周辺ナデ 消す。高台部周辺強いナデ調 整。
29	須恵器 高台椀	1区P- 02 №14	①高台～体部 ½ ②— ③(6.7) ④—	砂粒、黒色・白色鉍 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	底部には外傾する高台が付 き、体部は膨らみを持って立 ち上がる。	底部左回転糸切り無調整。貼 付け高台時に糸切り痕周辺ナ デ消す。
30	須恵器 高台椀	1区P- 03 №52	①高台～体部 ½ ②— ③(5.4) ④—	砂粒、黒色・白色鉍 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	底部には「ハ」の字状に外向 する高台が付く。体部はやや 膨らみを持って直線的に立ち 上がる。	右回転ロクロ成形。貼付け高 台時に丁寧なヨコナデ調整。
31	須恵器 高台椀	0区B- 31 №35	①½ ②(11. 0) ③6.0 ④4.6	砂粒、白色鉍物粒子 含む。還元硬質。灰 色。	底部に「ハ」の字状に外傾す る高台が付く。体部は膨らみ を持って立ち上がり、口縁部 はそのまま外向する。	底部左回転糸切り無調整。貼 付け高台時に糸切り周辺ナデ 消す。底部内面回転ロクロ線 明瞭に残す。
32	須恵器 椀	1区O- 02 №145 ～147・ 288	①% ②(16. 1) ③— ④—	砂粒、白色鉍物粒子 含む。還元硬質。灰 色。	体部は底部との境に強い稜を 持って直線的に立ち上がり、 口縁部はそのまま外向する。 高台が剥落。	底部右回転糸切り後、貼付け 高台時に糸切り周辺ヘラでナ デ消す。体部外面に明瞭な細 かいロクロ線を残す。高台剥 落部に二本の沈線が見られ る。
33	須恵器 椀	1区P～ Q-03 №10 第 Ⅱ層	①口縁～体部 小片 ②(11. 9) ③— ④—	砂粒、黒色・白色鉍 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	体部は底部との境に強い稜を 持って直線的に立ち上がる。 口縁部はそのまま外向する。 器高が低い。高台が剥落。	右回転ロクロ成形。高台剥落 部に沈線がある。
34	須恵器 高台椀	1区J- 09 第Ⅱ 層	①¼ ②(15. 0) ③(6.9) ④6.5	砂粒、石英粒、白色 鉍物粒子含む。酸化 硬質。黒褐～にぶい 黄橙色。	底部に外向する高台が付く。 体部は内湾気味に立ち上がり 口縁部は外反し肥厚する。体 部下端に高台貼付け時のバリ あり。	底部右回転糸切り無調整。貼 付け高台時に糸切り周辺強く ナデ消す。体部外面明瞭な細 かいロクロ線あり。
35	須恵器 高台椀	1区L- 10 第Ⅱ 層	①¼ ②(13. 2) ③(6.1) ④5.3	砂粒、石英粒、白色 鉍物粒子少量含む。 酸化硬質。淡黄色。	底部には外向する高台が付 く。体部は丸みを持って立ち 上がり、口縁部外反する。底 部内面は丸みがある。	回転ロクロ成形。口縁部内外 面共にヨコナデ調整。ロクロ 線不明瞭。高台部に回転時の 沈線が廻っている。



番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
36	須恵器 椀	1区N- 03 No4	①略完形(底部欠) ②11.9 ③— ④—	小石、白色鉱物粒子含む。還元やや軟質。灰黄色。	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は肥厚し外反する。口縁部を片口状に掴み出している。	右回転ロクロ成形。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部外面中位に明瞭な細かいロクロ線を残す。底部が剝離している。
37	須恵器 高台椀	1区J- 09 第II層	① $\frac{1}{2}$ ②(12.5) ③(6.6) ④6.3	小石、石英粒、白色鉱物粒子含む。還元やや軟質。灰色。	底部にはやや外向する高台が付く。体部は直線的にやや膨らみを持って立ち上がり、口縁部は外反する。底部内面は丸みがある。	右回転ロクロ成形。貼付け高台時に底部ナデ調整。体部外面明瞭な細かいロクロ線あり。底部内面に重ね痕あり。
38	須恵器 高台椀	1区K- 09 No17	① $\frac{1}{2}$ ②(13.8) ③(6.0) ④5.5	小石、石英粒、白色鉱物粒子含む。還元やや軟質。灰色。	底部には外向する高台が付き、底部内面は丸みがある。体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部は緩く外向する。	底部右回転糸切り調整。貼付け高台時に糸切り周辺ナデ消す。体部内面細かいロクロ線あり。底部内面重ね痕あり。
39	須恵器 高台椀	0区B- 28 第II層	① $\frac{1}{2}$ ②(13.5) ③6.8 ④5.0	砂粒、白色鉱物粒子含む。酸化硬質。黒褐～浅黄色。	底部には内傾気味の高台が付き、内底中央がロクロ成形により突起している。体部はやや膨らみを持って立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。	底部右回転糸切り後、貼付け高台時に糸切り痕ナデ消す。体部外面に明瞭な細かいロクロ線残す。内面燻。
40	須恵器 蓋	0区B- 31 No1	①摘み～口縁小片 ②— ④—	砂粒、黒色・白色鉱物粒子含む。還元。黄灰色。	摘径4.5cmの中くぼみの摘みで中央が突起する。天井部は平坦で、口縁部は丸みを持って大きく開く。	摘みは丁寧なナデ調整。天井部はロクロ成形後ケズリ調整。ケズリ調整とロクロ成形の境に明瞭なロクロ痕残す。口縁部内面はナデ調整。
41	須恵器 蓋	0区L- N-31- 29	①摘み～口縁小片 ②— ④—	砂粒、黒色・白色鉱物粒子含む。還元。灰色。	ボタン状の摘みで、中央がわずかに突起する。天井部は平坦で緩やかに内湾する。	摘みナデ調整。天井部はロクロ成形後ケズリ調整。摘みを貼付け時に周縁部をナデ調整。口縁部内面ナデ調整。重ね痕残す。摘み端部欠損。
42	須恵器 蓋	1区P- 07、0 区 H-29	①口縁部小片 ②(16.6) ④—	砂粒、黒色・白色鉱物粒子含む。還元。灰色。	口縁部の器壁0.8cmとやや厚みを持ち直線的に大きく開く。端部は垂直に下向き、外面は「く」の字状の断面をなす。	天井部ロクロ成形後ケズリ調整。ケズリ調整とロクロ成形の境に明瞭なロクロ痕残す。口縁部内外面共にヨコナデ調整。
43	須恵器 蓋	0区B- 29 第II層	①口縁部小片 ②(16.5) ④—	砂粒、石英粒、褐色・白色鉱物粒子少量含む。還元。灰白色。	口縁部は緩やかに大きく開き、端部寄りには平坦となる。端部は丸みを持って下向へ掴み出している。	口縁～端部内外面共にヨコナデ調整。

洞 I 遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
44	須恵器 蓋	0区I- 30 第II 層	①口縁部小片 ② (15.8) ④ -	砂粒、白色鉾物粒子 少量含む。還元硬質。 灰色。	口縁部は直線的に大きく開 き、端部寄りには内湾気味とな る。端部は垂直に下向き、断 面は三角形をなす。内面自 然釉付着。	口縁～端部内外面共にヨコナ デ調整。
45	須恵器 盤	1区P- 03 No 8	①高台～体部 ② - ③ (10 .1) ④ -	石英粒、褐色・白色 鉾物粒子含む。酸化 軟質。にぶい黄橙色。	底部には外傾する高台が付 き、体部は丸みを持って立ち 上がっている。	底部切り離し調整。貼付け高 台時に高台周辺強いヨコナデ 調整。体部と高台部の接合痕 残る。器面磨耗している。
46	須恵器 盤	1区P- 03 No30・ 37・61・ 89	① $\frac{1}{3}$ ②(20. 8) ③ - ④ -	小石、黒色・白色鉾 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	底部高台は剥落している。体 部は水平気味に開く。口縁は 体部から垂直に立ち上がり、 端部は平坦で外面にやや抓み 出している。	底部切り離し後、ヘラケズリ 調整。貼付け高台時にケズリ 痕周辺ナデ調整。体部外面ナ デ調整。内面回転ナデのロク ロ線残す。口縁部内外面共に 強いヨコナデ調整。高台剥離 部に一条の沈線あり。
47	須恵器 盤	1区P- 04 第II 層	①底部～体部 小片 ② - ③ - ④ -	砂粒、白色鉾物粒子 含む。還元硬質。灰 色。	底部高台は剥落している。体 部は水平気味に開く。	底部回転糸切り後ケズリ調 整。貼付け高台時にケズリ痕 周辺ナデ調整。高台剥落部に 二条の沈線あり。糸切り痕残 す。
48	須恵器 皿	0区E- 30 第II 層	①口縁～底部 ② (18.0) ③ - ④ -	砂粒、石英粒、白色 鉾物粒子含む。還元 硬質。灰黄色。	体部は直線的に大きく開き立 ち上がる。高台が剥落。	底部左回転糸切り無調整。貼 付け高台時に糸切り周辺ナデ 消す。底部糸切り痕残す。体部 内外面共にロクロ線残す。
49	須恵器 皿	0区B- 29 第II 層、0区 I-28	①底部～体部 ② - ③ (6. 3) ④ -	小石、白色鉾物粒子 含む。還元硬質。灰 色。	体部は直線的に大きく開く。 体部の厚みに比し底部が厚 い。	底部左回転糸切り無調整。
50	須恵器 皿	0区I- 30 第III 層	①底部～体部 小片 ② - ③ (7.0) ④ -	砂粒、白色鉾物粒子 含む。還元硬質。灰 色。	体部は直線的に大きく開く。 体部の厚みに比し底部が厚 い。内面に自然釉付着。	底部左回転糸切り無調整。
51	須恵器 盤	1区B- 11 第II 層	①口縁部小片 ② (12.0) ③ - ④ -	砂粒、黒色・白色鉾 物粒子少し含む。還 元硬質。灰色。	体部は水平気味に直線的に開 き、口縁部も直線的に外反し、 端部はそのまま薄くなる。	体部ヨコナデ調整。口縁～端 部内外面共にヨコナデ調整。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
52	須恵器 皿	1区I- 09 第II 層	①% ②13.8 ③7.0 ④3.0	砂粒、白色鈹物粒子 含む。還元軟質。灰 白～黄灰色。	底部内面は丸みがあり、体部 はやや膨らみを持って直線的 に大きく開く。口縁部は外反 し端部肥厚する。	底部右回転糸切り無調整。口 縁部内外共にヨコナデ調整。 内面は丁寧なヨコナデ調整。
53	須恵器 皿	0区H- 29 第II 層	①% ②13.2 ③6.6 ④3.6	小石、石英粒、褐色・ 白色鈹物粒子含む。 還元やや軟質。灰白 色。	底部には外向する高台が付 き、底部内面は丸みがある。 体部は膨らみを持って大きく 開く。口縁端部外反し肥厚す る。	底部右回転糸切り無調整。貼 付け高台時に糸切り周辺ナデ 消す。内面は丁寧なヨコナデ 調整。内底に重ね焼痕あり。
54	須恵器 耳皿	1区I- 09 第II 層	①完形 ②縦 9.5 横6.2 ③5.5 ④2.1	小石、白色鈹物粒子 含む。還元やや軟質。 にぶい黄～黒褐色。	耳部は、底部との境より内側 に折り曲げている。口縁内側 に強いロクロ線があり口縁端 部の断面は三角形状に薄くな る。底部中央に0.4cmの焼成前 の小孔がある。	底部右回転糸切り(2回切り) 調整。体部外面一条のロクロ 線残す。口縁部内面強いヨコ ナデ調整。
55	須恵器 耳皿	1区J- 09 第II 層	①略完形 ② 縦8.6 横5.0 ③5.6 ④2.1	小石、石英粒、白色 鈹物粒子少し含む。 還元。灰色。	耳部は、底部周縁部から内側 に折り曲げている。底部中央 に0.5cmの焼成前の小孔があ る。	底部右回転糸切り無調整。体 部外面折り曲げ後縦方向のナ デ調整を施す。
56	須恵器 耳皿	1区I- 09 第II 層	①完形 ②縦 8.7 横5.3 ③5.7 ④2.4	小石、石英粒、褐色・ 白色鈹物粒子含む。 酸化硬質。浅黄色。	耳部は、底部辺から内側に折 り曲げている。底部中央に0. 5cmの焼成前の小孔がある。	底部右回転糸切り無調整。体 部外面わずかにロクロ線残 す。口縁部内外面ヨコナデ調 整。底部磨減している。
57	須恵器 耳皿	1区I- 09 第II 層	①完形 ②縦 8.6 横5.4 ③5.8 ④2.1	砂粒、石英粒、白色 鈹物粒子少し含む。 還元やや軟質。にぶ い黄～灰黄色。	耳部は、底部との境より内側 に折り曲げている。底部の器 壁が0.25cmと薄く、中央に大 きく孔が開いている。	底部右回転糸切り無調整。体 部外面一条のロクロ線残す。 口縁部内外面共にヨコナデ調 整。
58	須恵器 耳皿	1区J- 10 No64	①% ②縦8. 9 横(5.0) ③5.6 ④2.3	石英粒、白色鈹物粒 子少し含む。還元。 灰色。	耳部は、底部周縁部から内側に 折り曲げている。底部は0.6cm とやや厚く中央に0.6cmの焼 成前の小孔がある。	底部右回転糸切り無調整。体 部外面折り曲げ後縦方向のナ デ調整を施す。耳部内外面共 にロクロ線残す。片耳部欠損。
59	須恵器 耳皿	1区J- 09 第II 層	①%以下 ② 縦(9.2) 横(5.3) ③(3.2) ④2.5	砂粒、石英粒子含む。 還元軟質。暗黄灰色。	耳部は、底部周縁部から内側 に折り曲げている。底部中央 に0.7cmの焼成前の小孔があ る。	底部右回転糸切り無調整。体 部外面に強い一条のロクロ線 残す。体部内面丁寧なナデ調 整。口縁部内外面共にヨコナ デ調整。

## 洞Ⅰ遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
60	須恵器 耳皿	1区J- 09 第II 層	①½ ②縦8. 4 横5.8 ③2.9 ④1.8	砂粒、白色鉾物粒子 少し含む。還元。灰 色。	耳部は、底部との境より内側 に折り曲げている。底部には 孔がない。	底部右回転系切り無調整。体 部外面一条のロクロ線残す。 体内面丁寧なナデ調整。口 縁内外面共にヨコナデ調整。
61	須恵器 高杯	1区P~ R-04 第II層	①脚部上半の み ②- ③- ④-	砂粒、黒色・白色鉾 物粒子含む。還元。 灰色。	筒部はやや内湾気味に開く。 裾部は欠損し、杯部は底部の み残る。	脚部内外面共にヨコナデ調 整。杯部ロクロ回転ナデ残す。 脚外面に成形時の指頭痕残 す。内面に粘土巻き作り痕明 瞭に残す。
62	須恵器 高杯	1区P- 03 No43	①脚部上半の み ②- ③- ④-	砂粒、黒色・白色鉾 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	筒部は緩く内湾し、裾部は緩 やかに開く。杯部は底部のみ 残る。	脚部内外面共にヨコナデ調 整。杯部丁寧なナデ調整。
63	須恵器 長頸壺	1区N- 02 No42	①口縁部小片 ②(12.6) ③- ④-	砂粒、白色鉾物粒子 少し含む。還元。灰 色。	口縁部やや丸みを持って直線 的に外反する。口縁端部は直 立し上下に抓み出している。	口縁部強いヨコナデ調整。口 縁直下に一条の明瞭なロクロ 線あり。
64	須恵器 長頸壺	1区O- 03 No59	①頸部~口縁 ②(9.9) ③- ④-	小石、黒色・白色鉾 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	頸部径は4.2cmで緩く立ち上 がる。口縁部は大きく開く。 口縁端部は直立し上方に強 く抓み出し端部下位に微隆線 走る。	口縁部内外面共にヨコナデ調 整。口縁内面強いヨコナデを 施し平坦面を出す。内外面共 にやや明瞭なロクロ線残す。
65	須恵器 長頸壺	0区N- 31 No2	①頸部~口縁 ②(9.9) ③- ④-	砂粒、黒色・白色鉾 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	頸部径は4.3cmで緩く立ち上 がる。口縁部大きく開く。口 縁端部は直立し上下に抓み出 し端部断面は「く」の字状を なす。	口縁部内外面共に強いヨコナ デ調整。内面に輪積痕残す。 頸部辺外面が部分的に剝離し ている。
66	須恵器 長頸壺	1区P~ R-04 第II層	①頸部~口縁 ½ ②(9.2) ③- ④-	砂粒、黒色・白色鉾 物粒子含む。還元軟 質。灰色。	頸部径は4.7cmで緩く立ち上 がる。口縁部は大きく開く。 口縁端部は直立し上下に少し 抓み出している。	口縁部内外面共に強いヨコナ デ調整。内外面わずかにロク ロ線残す。
67	須恵器 短頸壺	1区P- 02 No124	①肩部片 ② - ③- ④-	細砂粒、黒色・白色 鉾物粒子含む。還元 硬質。灰色。	肩部は大きく張りを持つ。頸 部は復元径が11.5cmで「く」 の字状に開いている。胴部外 面、内面の頸部迄自然釉付着。	頸部強いヨコナデ調整。胴部 内外面共にヨコナデ調整。
68	須恵器 壺	1区P- 03 No50	①肩部片 ② - ③- ④-	砂粒、黒色・白色鉾 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	肩部に最大径を持つと思われ 推定で径17.8cmを計る。肩部 は張りのある丸みを持っている。	肩部内外面共にヨコナデ調 整。肩部内面最大径の所強い ヨコナデ調整。肩部外面剝離 痕あり。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
69	須恵器 甕	1区P- 03 No40・41	①口縁部小片 ② (25.3) ③ - ④ -	砂粒、黒色・白色鉍物粒子含む。還元硬質。灰色。	口縁部丸みを持って大きく外反する。口縁端部は直立し上下に掴み出し端部中に微隆線走る。内外面に自然釉付着。	口縁部内外面共に強いヨコナデ調整。内面に明瞭なロクロ線残す。
70	須恵器 甕	1区Q- 04 No.9	①口縁部小片 ② (28.8) ③ - ④ -	砂粒、黒色・白色鉍物粒子含む。還元や軟質。灰白色。	頸部は「く」の字状に大きく外反する。口縁端部は直立し上下に掴み出し端部中に微隆線走る。	口縁部内外面共に強いヨコナデ調整。内面に明瞭なロクロ線残す。
71	須恵器 甕	1区P- 03 No45、 1区O- 03 No57	①口縁部½ ② (40.4) ③ - ④ -	砂粒、褐色・白色鉍物粒子含む。酸化や硬質。にぶい赤褐色。	口縁部は大きく外反する。口縁端部は直立し上下に掴み出し端部下位に一条の沈線が走る。	口縁部強いヨコナデ調整。口縁直下に4本1単位のクシ描波状文を二段に施す。器面が部分的に剝離している。
72	須恵器 甕	1区K- 02 第II 層 No104	①口縁部小片 ② (35.0) ③ - ④ -	砂粒、石英粒、白色鉍物粒子含む。還元軟質。極暗褐色。	口縁部丸みを持って大きく外反する。口縁端部は直立し上に強く掴み出し端部中にわずかに沈線が走る。	口縁部強いヨコナデ調整。内外面共に明瞭にロクロ線残す。端部剝離している。
73	須恵器 甕	1区N- 02 No4・5	①口縁部小片 ② (35.6) ③ - ④ -	砂粒、褐色・白色鉍物粒子含む。還元や軟質。外面暗灰色、内面褐色。	口縁部は丸みを持って大きく外反する。口縁端部は直立し上に強く掴み出し端部中にわずかに隆線走る。	口縁部内外面共に強いヨコナデ調整。内外面共に明瞭なロクロ線残す。器面が部分的に剝離している。
74	須恵器 甕	1区O- 02 No2・9・ 11	①口縁部小片 ② (27.9) ③ - ④ -	小石、黒色・白色鉍物粒子含む。還元や軟質。灰色。	口縁部下端は頸部との接合のため粘土を重ねており厚くなっている。口縁部丸みを持って大きく外反する。口縁端部は直立し上下に強く掴み出し端部中に微隆線が走る。	口縁部強いヨコナデ調整。外面丁寧なナデ、内面に細かく明瞭なロクロ線残す。
75	須恵器 甕	1区H- 03 第II 層	①口縁部小片 ② (23.2) ③ - ④ -	砂粒、褐色・白色鉍物粒子含む。還元や軟質。灰白色。	口縁部丸みを持って大きく外反する。口縁端部は直立し上下に強く掴み出し端部断面は「S」字状をなす。	口縁部強いヨコナデ調整。内外面共に明瞭なロクロ線を残すが、頸部寄り外面は雑なヨコナデ。内面に明瞭な輪積痕が見られ、タテナデ調整を施す。
76	須恵器 甕	1区I- 02 第II 層	①口縁部小片 ② (35.7) ③ - ④ -	小石、白色鉍物粒子含む。還元硬質。灰色。	口縁部丸みを持って大きく外反する。口縁端部は直立し上下に強く掴み出し端部中に沈線が走る。外面に自然釉付着。	口縁部強いヨコナデ調整。口縁直下に4本1単位のクシ描波状文が2段見られる。内面に静止ナデ痕残す。

河 I 遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
77	須恵器 甕	1区K- 07 第II 層	①口縁部小片 ② (27.3) ③ - ④ -	砂粒、黒色・白色鈹 物粒子含む。還元や や軟質。灰色。	口縁部丸みを持って大きく外 反する。口縁端部は直立し上 下に強く抓み出し端部断面は 丸みのある「く」の字状をなす。	口縁部強いヨコナデ調整。内 面中位の輪積痕をタテナデ調 整。
78	須恵器 甕	1区P- 04 No11・12	①肩部小片 ② - ③ - ④ -	細砂粒、黒色・白色 鈹物粒子含む。還元 やや軟質。灰白色。	肩部は大きく張りを持つ。頸 部は復元径が20.0cmで「く」 の字状に大きく外反する。	頸部内外面共に強いヨコナデ 調整。胴部外面ナデ、内面押 圧後ナデ調整。
79	須恵器 甕	1区O- 02 No292・ 299	①肩部小片 ② - ③ - ④ -	細砂粒、黒色・白色 鈹物粒子含む。還元 硬質。灰色。	肩部は大きく張りを持つ。頸 部は復元径が25.4cmで「く」 の字状に大きく開く。	頸部内外面共に強いヨコナデ 調整。胴部内外面共にナデ調 整。肩部内面輪積痕残す。
80	須恵器 甕	1区P- 02 No100・ 108	①胴部下位小 片 ② - ③ - ④ -	砂粒、褐色・白色鈹 物粒子含む。還元軟 質。暗灰色。	膨らみを持った胴部片であ る。	胴部外面下端ヨコナデ調整。 上半不規則なナデ調整。内面 押圧後ナデ調整。下端ヨコナ デ調整。底部との剝離痕明瞭 に残る。
81	須恵器 甕	1区P- 02 No55、 1区Q- 03 No42	①胴部下小片 ② - ③ - ④ -	小石、黒色・白色鈹 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	80と同様の胴部片である。	胴部外面平行叩き後ナデスリ 消し調整。内面押圧後不規則 なナデ調整。胴部下端に底部 との剝離痕明瞭に残る。
82	須恵器 甕	1区I- 03、0区 M-32 第II層	①底部～胴部 下端小片 ② - ③ (17. 0) ④ -	砂粒、黒色・白色鈹 物粒子含む。還元や や軟質。外面灰色、 内面灰褐色。	底部は平底である。胴部は直 線的に開いて立ち上がる。	底部は無調整。胴部外面下半 成形時のナデ、上半ヨコナデ 調整。胴部内面回転ナデ、ロ クロ線明瞭に残す。
83	須恵器 甕	1区P- 02 No76	①底部～胴部 下端小片 ② - ③ (15. 5) ④ -	砂粒、白色鈹物粒子 含む。還元やや軟質。 外面灰色、内面灰褐 色。	底部は平底である。胴部は直 線的に開いて立ち上がる。	底部は無調整。胴部外面ナデ 下端ケズリ調整、胴部内面ロ クロ回転ナデ、ロクロ線残す。 底部と胴部の接合部が円形に 割れている。
84	須恵器 甕	1区K- 02 第II 層 No51	①底部～胴部 下端 ② - ③11.2 ④-	砂粒、褐色・白色鈹 物粒子含む。還元や や軟質。暗灰黄色。	底部は平底である。胴部は直 線的に開いて立ち上がる。	底部は無調整。指頭痕明瞭に 残す。胴部外面丁寧な回転ヨ コナデ、下端ケズリ調整。胴 部内面ナデ調整。底部内面回 転ナデ、ロクロ線明瞭に残す。
85	須恵器 甕	1区O- 02 No195	①底部小片 ② - ③ (8.0) ④ -	細砂粒、褐色・白色 鈹物粒子含む。還元 やや軟質。外面灰色、 内面灰白色。	底部は平底で復元径が8.0cm である。胴部は直線的に大き く開いて立ち上がる。	底部左回転糸切り無調整。胴 部外面ナデ、下端ケズリ調整。 胴部内面回転ナデ、ロクロ線 残す。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
86	須恵器 甕	1区O- 02 No264・ 271	①底部 ② — ③— ④—	小石、白色鈹物粒子 含む。還元。灰色。	底部は丸底で不安定である。 胴部は底部との境を持たず張 りを大きく持ち立ち上がる。	底部外面は工具で雑にケズリ ナデている。胴部外面平行叩 き目痕残す。胴部内面押圧後 ナデ調整。
87	須恵器 広口甕	1区P- 03 No9・74・ 80	① $\frac{1}{2}$ ②(28. 5) ③17.2 ④19.3	砂粒、石英粒、白色 鈹物粒子含む。還元 硬質。灰色。	底部は平底で、胴部は膨らみ 頸部は短かく丸みを持って 「く」の字状に大きく外反す る。口縁端部は直立し上下に 掴み出している。	底部は不規則なケズリ調整。 胴部はロクロ成形後ヨコナ デ。内面押圧後ナデ調整。口 縁内外面共に強いヨコナデ調 整。
88	須恵器 広口甕	1区P- 03 No71・78・ 83・84	①口縁～胴部 ②(30.0) ③— ④—	石英粒、黒色・白色 粒子含む。還元やや 軟質。灰白色。	胴部は膨らみを持って立ち上 がる。頸部は短かく丸みを持 って大きく外反する。口縁端 部は直立しわずかに上下に抓 み出している。	胴部内外面共にロクロナデ。 口縁部内外面共にヨコナデ調 整。胴部内面に明瞭なロクロ 線残す。胴部外面剥離痕あり。
89	須恵器 広口甕	1区P- 02 No46、 1区O- 02 No72	①口縁～胴部 小片 ②(27. 8) ③— ④—	砂粒、白色鈹物粒子 含む。還元硬質。灰 色。	胴部は膨らみ、頸部は短かく 丸みを持って大きく外反す る。口縁端部は直立し上下に 掴み出し端部下位に沈線が走 り断面がやや「く」の字状を なす。	胴部内外面共にロクロナデ。 口縁部内外面共にヨコナデ調 整。
90	須恵器 広口甕	1区P- 02 No157	①口縁部 ② (26.9) ③ — ④—	砂粒、黒色・白色鈹 物粒子含む。還元。 灰色。	胴部は膨らみを持つ。頸部は 短かく丸みを持って大きく外 反する。口縁端部直立し上下 に掴み出し、断面がやや「く」 の字状をなす。	胴部内外面共にロクロナデ。 口縁部内外面共にヨコナデ調 整。胴部外面ロクロ線あり。 頸部辺に輪積痕わずかに残 す。
91	須恵器 広口甕	1区B- 01 第II 層	①口縁～胴部 小片 ②(20. 5) ③— ④—	砂粒、黒色鈹物粒子 少し含む。還元やや 軟質。外面灰色、内 面灰白色。	胴部は膨らみ、頸部は短かく 丸みを持って大きく外反す る。口縁端部は直立し上下に 強く掴み出し端部中位に沈線 が走り、断面は「く」の字状 をなす。	胴部内外面共にロクロナデ。 口縁部内外面共に強いヨコナ デ調整。外面に回転時に出来 た工具の沈線あり。
92	須恵器 鉢	0区C- 28 第II 層	①口縁～胴部 小片 ②(21. 8) ③— ④—	小石、黒色・白色鈹 物粒子含む。還元硬 質。外面褐灰色、内 面灰色、黒色。	胴部から口縁部にかけて膨ら みを持って外反する。口縁端 部は平坦で内側へ斜めに切れ 込んでおり、わずかに外側へ 掴み出している。	胴部内外面共にロクロナデ。 口縁部内外面共に強いヨコナ デ調整。胴部内外面共にロク ロ線残す。
93	須恵器 鉢	0区N- 33、0区 I-29	①口縁～胴部 小片 ②(22. 0) ③— ④—	褐色・白色鈹物粒子 含む。酸化硬質。灰 黄色。	胴部から口縁部にかけてやや 膨らみを持って直線的に外向 する。口縁端部は平坦で内側 へ斜めに切れ込んでいる。	胴部内外面共にロクロナデ。 口縁部内外面共にヨコナデ調 整。胴部外面細かいロクロ線 残す。

## 洞Ⅰ遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
94	須恵器 鉢	1区K-02 第II層 No53	①口縁～胴部 小片 ②(21.6) ③— ④—	小石、石英粒、黒色・白色鈹物粒子少し含む。還元硬質。灰色。	胴部から口縁にかけてやや膨らみを持って外向する。口縁端部は平坦であるが外側へやや抓み出している。	胴部内外面共にロクロナデ。口縁部内外面共にヨコナデ調整。胴部ロクロ線明瞭に残す。
95	須恵器 鉢	1区K-02 第II層 No46・55	①口縁～胴部 小片 ②(21.0) ③— ④—	小石、白色鈹物粒子含む。還元やや軟質。灰黄色。	胴部から口縁部にかけて膨らみを持ってわずかに外反する。口縁端部は平坦であるが外側へわずかに抓み出す。	胴部内外面共にロクロナデ。口縁部内外面共に強いヨコナデ調整。胴部内外面共にロクロ線残す。
96	須恵器 鉢	1区H-09 第II層	①口縁～胴部 小片 ②(22.2) ③— ④—	黒色・白色鈹物粒子含む。還元。灰白色。	胴部から口縁にかけてわずかに膨らみを持って外向する。口縁端部は平坦であるが外側へ強く抓み出す。	胴部内外面共にロクロナデ。口縁部内外面共にヨコナデ調整。胴部ロクロ線明瞭に残す。
97	土師器 甕	1区K-02 第II層 No44・45	①口縁～胴部 小片 ②(21.2) ③— ④—	砂粒、石英粒、褐色・白色鈹物粒子含む。酸化硬質。にぶい黄橙色。	器壁は0.6cmと厚く胴部はやや膨らみ、頸部は短かくやや丸みのある「く」の字状で、口縁部はそのまま外反する。	口縁部内外面共にヨコナデ調整。胴部外面やや磨耗している。
98	土師器 甕	0区B-33 第II層	①口縁～頸部 小片 ②(26.0) ③— ④—	砂粒、石英粒、褐色・白色鈹物粒子含む。酸化硬質。にぶい黄橙色。	器壁は0.6cmと厚く、頸部はやや丸みを持った「コ」の字状をなし、口縁部は大きく外反し、端部がやや薄くなる。	頸部～口縁部内外面共に強いヨコナデ調整。
99	土師器 甕	0区B-33	①口縁～胴部 小片 ②(19.4) ③— ④—	石英粒、褐色・白色鈹物粒子少し含む。酸化硬質。にぶい橙色。	器壁は0.7cmと厚く胴部はやや膨らみ、頸部は短かく丸みを持って外反し、口縁端部はやや肥厚する。口縁直下に2条のロクロ線あり。	胴部外面縦下方向へ強いヘラ状工具でケズリ調整。口縁部内外面共に強いヨコナデ調整。胴部内面に輪積痕残す。
100	土師器 甕	1区B-01 第II層	①頸部～胴部 小片 ②— ③— ④—	砂粒、石英粒、褐色・白色鈹物粒子含む。酸化硬質。にぶい褐色。	器壁は0.7cmと厚く、胴部はわずかに膨らみを持ち、頸部の復元径は19.6cmで丸みを持ち、口縁部にかけて緩やかに外湾する。	胴部外面縦下方向へ細いヘラ状工具でケズリ調整。胴部内面不規則なナデ調整。頸部内外面共にヨコナデ調整。
101	土師器 甕	0区B-33	①頸部～胴部 小片 ②— ③— ④—	砂粒、石英粒、褐色・白色鈹物粒子多く含む。酸化硬質。にぶい橙色。	器壁は厚さ0.4cmで、胴部はやや膨らみがあり、頸部は丸みが強く外反する。	胴部外面縦下方向へ不規則なヘラケズリ調整。頸部内外面共にヨコナデ調整。
102	須恵器 小型甕	1区K-09 第II層	①口縁～胴部 小片 ②(13.7) ③— ④—	砂粒、褐色・白色鈹物粒子含む。還元軟質。灰黄色。	肩部は膨らみを持ち、頸部は丸みを持った「く」の字状で、口縁部は外反し短かい。口縁端部は丸みを持つ。	胴部外面にケズリ調整。口縁部内外面共に丁寧なヨコナデ調整。



番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
103	須恵器 小型甕	1区K- 07 第II 層	①口縁～胴部 小片 ②(10. 9) ③— ④—	小石、石英粒、白色 鉍物粒子少し含む。 還元やや軟質。灰白 色。	肩部は膨らみを持ち、頸部は 緩やかに屈曲し、口縁部はや や外反し、端部はわずかに薄 くなる。	口縁部内外面共にヨコナデ調 整。肩部外面水挽ナデの痕跡 あり。
104	須恵器 小型甕	1区I- 09 第II 層	①口縁～胴部 小片 ②(10. 4) ③— ④—	細砂粒、石英粒、白 色鉍物粒子少し含 む。還元やや軟質。 灰白色。	胴部はやや膨らみを持ち、肩 部は丸みのある段を持ち、頸 部は丸く屈曲し、口縁部は外反 し短かく、端部は丸みがある。	口縁部外面強いヨコナデ調 整。胴部斜め上方向ヘケズリ 調整。内面頸部辺に輪積痕あ り。
105	須恵器 小型甕	1区J- 09 第II 層	①口縁～胴部 小片 ②(9. 2) ③— ④—	砂粒、褐色・白色鉍 物粒子含む。還元や や軟質。灰色。	胴部膨らみを持ち、頸部は 「く」の字状となり、口縁部 は直線的に外反し短かい。	口縁部内外面共に強いヨコナ デ調整。胴部縦上方向ヘケズ リ調整。口縁部に一部当って いる。
106	須恵器 小型甕	0区B- 29 第II 層	①底部片 ②— ③7.0 ④—	小石、石英粒、褐色・ 白色鉍物粒子含む。 酸化やや硬質。外面 灰色、黄橙色、内面 黄橙色。	底部は平底で厚さは1.2cmで ある。胴部下端は直線的に開 いて立ち上がる。	底部左回転糸切り無調整。胴 部外面下端ケズリ調整。底部 内面クロ回転線明瞭に残 す。外底に焼成時の棒状の沈 線がある。
107	須恵器 小型甕	1区Q- 04 第II 層	①底部小片 ②— ③(6. 0) ④—	砂粒、石英粒、白色 鉍物粒子含む。酸化 やや硬質。外面黒褐 黄灰色、内面黄灰色。	底部は平底で厚さは1.4cmで ある。内底は丸みがあり、中央 が突起している。胴下端はや や丸みを持って立ち上がる。	底部回転糸切り無調整。胴部 下端外面ケズリ調整。底部内 面ナデ調整。
108	須恵器 小型甕	0区B- 28 第II 層	①底部～胴部 下端 ②— ③5.2 ④—	石英粒、褐色・白色 鉍物粒子含む。酸化 やや硬質。におい橙 色。	底部は平底で厚さ0.7cmで、胴 部の厚さも0.3cmと薄い。胴部 下端は直線的に開いて立ち上 がり、内底は丸みを持つ。	底部ケズリ後ナデ調整。胴部 外面縦下方向ヘケズリ調整。
109	須恵器 羽釜	1区N- 11 第II 層、1区 K-09	①口縁～胴部 小片 ②(23. 7) ③— ④—	小石、黒色・白色鉍 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	胴部は直線的で、口縁部は直 立し、端部は平坦である。突 帯断面は三角形状をなす。	胴部は突帯まで縦上方向へ一 気にヘラケズリ。胴部内面ヘ ラナデ調整。口縁部内外面共 にヨコナデ調整。
110	須恵器 羽釜	1区F- 11 No.1	①口縁～胴部 小片 ②(24. 2) ③— ④—	砂粒、白色鉍物粒子 含む。還元やや軟質。 灰黄色。	胴部はやや膨らみを持つ。口 縁部は直立し、端部は平坦で ある。突帯断面は三角形状を なす。	胴部は突帯まで縦上方向へ一 気にヘラケズリ。胴部内面雑 なヨコナデ調整。口縁部内外 面共にヨコナデ調整。
111	須恵器 羽釜	0区K- 33	①口縁～胴部 小片 ②(18. 6) ③— ④—	砂粒含む。還元。灰 色。	胴部はやや膨らみを持つ。口 縁部は直立し、端部は平坦で ある。突帯断面は三角形状を なす。	胴部は突帯まで縦上方向へ一 気にヘラケズリ。胴部内面不 規則なナデ調整。口縁部内外 面共にヨコナデ調整。

## 洞Ⅰ遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
112	須恵器 羽釜	1区Ⅰ－ 09 第Ⅱ 層 №53・443	①口縁～胴部 小片 ②(18. 8) ③－ ④－	砂粒、長石粒、白色 鉍物粒子含む。酸化 硬質。にぶい黄橙色。	胴部はやや膨らみを持つ。口 縁部直立し、端部はやや斜め に切込み凹んでいる。突帯断 面は三角形をなす。	胴部は突帯まで縦上方向へ一 気にヘラケズリ。口縁部内外 面共にヨコナデ調整。突帯直 下に輪積痕を残す。
113	須恵器 羽釜	1区G－ 12	①口縁～胴部 小片 ②(18. 4) ③－ ④－	砂粒、白色鉍物粒子 含む。還元軟質。外 面灰色、内面灰白色。	胴部は直線的で、口縁部は直 立し、端部は平坦で凹んでい る。突帯断面は三角形をな す。	胴部は突帯まで縦上方向へ一 気にヘラケズリ、一部横方向 へケズリ調整。口縁部内外面 共にヨコナデ調整。
114	須恵器 羽釜	1区E－ 03 第Ⅱ 層	①口縁～胴部 小片 ②(18. 6) ③－ ④－	砂粒、褐色鉍物粒子 含む。還元やや硬質。 灰白色。	胴部は直線的で、口縁部は直 立し、端部は平坦である。突 帯断面はやや下向きの三角形 状をなす。	胴部は突帯まで縦上方向へ一 気にヘラケズリ、突帯直下に ヘラの痕跡が明瞭に残る。胴 部内面輪積痕残る。
115	須恵器 羽釜	1区F－ 12 第Ⅱ 層、1区 G－12	①口縁～胴部 小片 ②(13. 5) ③－ ④－	砂粒、白色粒子多く 含む。還元硬質。灰 色。	胴部は直線的で、口縁部はや や外向し、端部は平坦である。 突帯断面は三角形をなす。	胴部は突帯まで縦上方向へ一 気にヘラケズリ、胴部内面ナ デ調整。口縁部内外面共にヨ コナデ調整。
116	須恵器 羽釜	0区H－ 29 第Ⅱ 層	①口縁～胴部 小片 ②(14. 4) ③－ ④－	砂粒、石英粒、白色 鉍物粒子多く含む。 還元やや軟質。灰色。	胴部は直線的で、口縁部は直 立し、端部はやや外傾し、斜 めに切り込み丸みを持っている。 突帯断面はやや丸みのあ る三角形をなす。	胴部は突帯まで縦上方向へ一 気にヘラケズリ、胴部内面ナ デ調整。口縁部内外面共にヨ コナデ調整。
117	須恵器 羽釜	1区F－ 11	①口縁～胴部 小片 ②(17. 2) ③－ ④－	小石、白色鉍物粒子 多く含む。酸化軟質。 黒褐～にぶい黄褐 色。	胴部は直線的で、口縁部はや や内湾し、端部は平坦である。 突帯断面は三角形をなす。	胴部は突帯まで縦上方向へヘ ラケズリ、一部に横方向のケ ズリ調整。口縁部内外面共に ヨコナデ調整。胴部輪積痕残 す。
118	須恵器 羽釜	1区N－ 07 第Ⅱ 層、1区 J－09	①口縁～胴部 小片 ②(21. 7) ③－ ④－	小石、砂粒多く、白 色鉍物粒子含む。還 元。灰色。	胴部は直線的で、口縁部はや や内湾し、端部は平坦である がやや丸みを持っている。突 帯断面はやや上向きの三角形 状をなす。口縁部に比し胴部 が薄い。	胴部は突帯まで縦上方向へ一 気にヘラケズリ、一部横方向 へケズリ調整。口縁部外面ナ デ、内面水挽きナデ調整。突 帯剝離痕明瞭に残す。
119	須恵器 羽釜	1区E－ 03 第Ⅱ 層	①口縁～胴部 小片 ②(21. 2) ③－ ④－	砂粒含む。還元やや 軟質。灰白色。	胴部は直線的で、口縁部は直 立し、端部は平坦であるがや や丸みを持っている。突帯は 小さく断面は三角形をな す。	胴部は突帯まで縦上方向へ一 気にヘラケズリ、一部横方向 へケズリ調整。口縁部内外面 共に雑なナデ調整。突帯剝離 痕明瞭に残る。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
120	須恵器 羽釜	1区I- 09 第II 層 No95・530	①胴部小片 ② - ③ - ④ -	小石、砂粒多く、褐色・白色鉍物粒子含む。酸化やや硬質。にぶい黄褐色。	胴部中位の小片で、直線的である。	縦上方向へ明瞭なヘラケズリ、一部斜めのケズリ調整。内面不規則なナデ調整。
121	須恵器 羽釜	1区K- 09 第II 層	①胴部小片 ② - ③ - ④ -	砂粒、褐色粒多く、白色鉍物粒子含む。酸化軟質。明赤褐色。	胴部中位の小片で、やや膨らみを持っている。	縦上方向へ明瞭なヘラケズリ調整。内面は不規則なナデ調整。輪積痕あり。
122	須恵器 羽釜	1区F- 11 第II 層	①底部～胴部 小片 ② - ③ (9.0) ④ -	砂粒、白色鉍物粒子含む。還元やや軟質。外面灰～灰褐色、内面灰色。	底部は不安定な平底である。胴部下端はやや直線的に立ち上がる。	底部は不規則なケズリ。胴部は縦上方向ケズリ後、胴下端は横方向のヘラケズリ調整。外面に工具の痕あり。
123	須恵器 羽釜	0区E- 30、0区 I-29	①底部小片 ② - ③ (6. 0) ④ -	小石、石英粒、白色鉍物粒子含む。酸化硬質。浅黄色。	底部は平底で復元型が6.0cm、厚さ0.6cmである。胴部はやや膨らみを持って直線的に立ち上がる。	底部は不規則なケズリ。胴部は縦方向ヘラケズリ後、胴下端は横方向のヘラケズリ調整。胴部内面輪積痕あり。
124	須恵器 羽釜	1区J- 07 第II 層	①底部小片 ② - ③ (5. 0) ④ -	砂粒、白色鉍物粒子含む。還元やや軟質。灰色。	底部は平底で復元型が5.0cm、厚さが0.6cmである。胴部は直線的に立ち上がる。	底部は不規則なケズリ。胴部は縦上方向ヘラケズリ後、胴下端は横方向のヘラケズリ調整。胴部内面ナデ調整。
125	須恵器 脚付羽 釜	1区J- 09 第II 層	①脚部のみ ② - ③ - ④ -	砂粒、白色鉍物粒子少し含む。還元やや軟質。浅黄色。	支脚のみ残存。台形状をなす。支脚の高さ2.3cm、支脚の径は4.2cmである。接合面は皿状をなして窪んでいる。	指頭により押えナデを施す。支脚の底面はケズリ後ナデ調整。雑な成形である。
126	須恵器 脚付羽 釜	1区Q- 05 第II 層	①脚部のみ ② - ③ - ④ -	砂粒、石英粒、白色鉍物粒子含む。還元やや軟質。黄灰色。	支脚のみ残存。台形状をなす。支脚の高さは2.8cm、支脚の径は3.6cmである。上面中央が窪んでいる。	指頭により押えナデを施す。雑な成形である。一部欠損。
127	須恵器 甕	1区O- 02 No249、 1区P- 02	① $\frac{1}{2}$ ②(32. 2) ③(18. 8) ④27.7	小石、褐色・白色鉍物粒子多く含む。還元軟質。灰色。	底部は平坦で、胴部下端より約1.0cm突出している。底面は外面から鋭利な工具で幅2.0cm、厚さ1.6cmの角棒状に削り出し十文字に簧を作出していると思われる。胴部はやや膨らみを持って立ち上がる。頸部は丸みを持ち短かく大きく外反する。口縁端部は直立し、上下わずかに掴み出している。	底部不規則なナデ調整後穿孔。胴部は平行叩き後ナデ、スリ消している。胴部内面押圧後ナデ調整。口縁部内外面共にココナデ調整。底部と胴部との接合痕明瞭に残す。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
128	須恵器 甔	1区Q- 05 第II 層	①底部小片 ② - ③ (14.3) ④ -	砂粒、白色鉍物粒子 含む。還元軟質。灰 黄褐色。	底面は平坦で外面から鋭利な 工具で幅0.8~1.4cm、厚さ1. 2cmの角棒状に削り出してい ると思われる。胴部下端はや や膨らみを持って直線的に開 く。	底部不規則なナデ調整後穿 孔。胴部外面不規則なナデ調 整。
129	須恵器 甔	1区B- 01 第II 層	①底部小片 ② - ③ - ④ -	砂粒、白色鉍物粒子 少し含む。還元。灰 色。	台部は欠損しているが「く」 の字状に開くものと思われ る。胴部下端は直線的に開く。 底面より3cm上方に径1.3cm の小孔がやや斜めに貫通して いる。	脚部辺内外面共にヨコナデ調 整。
130	須恵器 甔	1区表土	①台部小片 ② - ③ (20.0) ④ -	砂粒、褐色・白色鉍 物粒子含む。酸化や や硬質。黄褐色。	台部のみ的小片で「ハ」の字 状に開き、端部は丸みを持つ。	台部内外面共にヨコナデ調 整。外面端部工具による沈線 あり。
131	須恵器 甔	0区I- 29	①台部小片 ② - ③ (1. 9) ④ -	砂粒、長石粒、白色 鉍物粒子少し含む。 還元軟質。黒褐色。	台部のみ的小片で水平気味に 開き、端部は丸みを持つ。	台部内外面共にヨコナデ調 整。
132	須恵器 把手付 甔	1区J- 09 第II 層	①口縁部小片 ② - ③ - ④ -	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鉍物粒子含む。 酸化硬質。にぶい黄 色。	胴部の器壁は0.5cmで、直線的 である。把手は口縁直下に付 き、取り付け部は厚く盛り上 がり接合面は鋭利状工具で削 り込んでいる。口縁端部は平 坦でわずかに外反する。	胴部は不規則なケズリ後わず かなナデ調整を施す。口縁部 内外面共にケズリ調整。雑な 成形である。
133	須恵器 把手付 甔	1区I- 09 第II 層	①把手部のみ ② - ③ - ④ -	砂粒、褐色・白色鉍 物粒子含む。酸化硬 質。淡黄色。	把手のみ残存。把手は胴部か ら約60度位の角度で取り付 けである。把手の長さ5.0cm、厚 さ1.9cm、幅2.8cmとなる。	指頭により押えナデを施す。
134	須恵器 不明	1区K- 01 第II 層	①底部~体部 の小片に脚が 付く ② - ③ - ④ -	砂粒、白色鉍物粒子 含む。還元。灰色。	杯あるいは盤等に脚の付いた 特種な器形と思われる。底部 は平坦でわずかに丸みを持 ち、体部はやや丸みを持って 開き気味に立ち上がる。脚は、 やや内湾気味に底部に付いて いる。脚は鋭利な工具で削り 出し、脚の長さ1.4cm、幅1.5 cm、厚さ0.8cmである。	底部~体部外面ケズリ調整。 内面指頭によるナデ押え調 整。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
135	須恵器 土 錘	0区H- 31 第II 層	①略完形 長さ7.6 最大径3.8 孔径1.0 重さ90g	砂粒、長石粒、白色鋳物粒子少し含む。還元やや軟質。黒褐色。	紡錘形をなし、大型のものである。最大径は中位にある。	端部は平坦に切り落し後、全面指頭押え調整。一部剝離している。
136	須恵器 土 錘	0区J- 31 第II 層	①略完形 長さ7.1 最大径3.7 孔径4.2 重さ81g	砂粒、白色鋳物粒子含む。還元やや軟質。黒褐色。	紡錘形をなし、大型のものである。最大径は中位にある。	端部は平坦に切り落し後、全面指頭押え調整。一部破損。
137	須恵器 土 錘	1区H- 06 第II 層	①略完形 長さ7.1 最大径3.8 孔径1.0 重さ77g	砂粒、長石粒、白色鋳物粒子少し含む。還元軟質。黒褐色。	紡錘形をなし、大型のものである。最大径は中位にある。	端部は平坦に切り落し後、全面指頭押え調整。一部破損。
138	須恵器 土 錘	0区E- 30 第II 層	①完形 長さ6.7 最大径3.9 孔径0.9 重さ93g	砂粒、白色鋳物粒子少し含む。還元やや軟質。黒褐色。	紡錘形をなし、大型のものである。最大径は中位にある。	全面指頭押え成形後、端部切り落し。
139	須恵器 土 錘	1区I- 03 第II 層	①完形 長さ6.1 最大径2.7 孔径0.9 重さ42g	砂粒、褐色・白色鋳物粒子含む。酸化硬質。黒褐～暗灰黄色。	管状をなし、中型のものである。	端部は平坦で回し切り痕を残す。全面指頭押え調整。
140	須恵器 土 錘	1区O- 02 第II 層	①略完形 長さ6.5 最大径2.4 孔径0.8 重さ41g	小石、白色鋳物粒子少し含む。還元軟質。黒褐～にぶい黄褐色。	管状をなし、中型のものである。	端部は平坦で切り落し後、全面指頭押え調整。一方の先端部一部欠損。
141	須恵器 土 錘	1区J- 09 No.127	①略完形 長さ5.9 最大径2.3 孔径0.7 重さ32g	砂粒、長石粒、白色鋳物粒子少し含む。還元軟質。黒褐～灰黄色。	管状をなし、中型のものである。	端部は平坦で回し切り痕を残す。全面指頭押え調整。
142	須恵器 土 錘	1区L~ N-08 第II層	①完形 長さ5.1 最大径2.0 孔径0.6 重さ16g	白色鋳物粒子少し含む。酸化硬質。橙色。	紡錘形をなし、小型のものである。	全面指頭押えて端部は指頭押え調整のため薄くなっている。一方の孔先端は閉塞している。

## 洞 I 遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
143	須恵器 有孔円盤	0区B- 33 第II 層	①完形 ②5. 9 厚さ0.8 孔径0.4	砂粒、褐色・白色 鈹物粒子含む。酸化や や硬質。橙色。	杯等の底部用円盤を転用した ものと思われる。中央に焼成 前の小孔あり。	杯等の底部用円盤同様右回転 糸切り無調整後、側面を削り 滑らかに丁寧なナデ調整。表 面回転ロクロ線残す。用途不 明。
144	須恵器 有孔円盤	0区I- 30 第II 層	①½以下 ② (7.4) 厚さ 0.7 孔径(0. 45)	石英粒、褐色・白色 鈹物粒子含む。酸化 やや硬質。にぶい褐 色。	杯等の底部用円盤を転用した ものと思われる。中央に焼成 前の小孔あり。	杯等の底部用円盤同様右回転 糸切り無調整後、側面を削り 滑らかに丁寧なナデ調整。器 面表裏共に磨耗している。
145	須恵器 硯	1区I- 09 第II 層	①硯尻部小片 尻幅8.5 面厚さ1.4 帯厚さ1.8 帯高さ2.8	砂粒、石英粒、白色 鈹物粒子含む。還元 やや軟質。灰色。	風字硯の硯尻の小片と思われ 脚部を欠損している。硯尻に も縁帯が巡り、断面は丸みの ある三角形状をなす。硯尻縁 帯にえぐりを入れ、筆置きを 作り出している。	脚部の剝離痕は径3.1cmの円 形をなす。縁帯外面はヘラ切 り後ナデ調整。硯面の縁帯に 沿った部分がやや窪んでいる。

## 2 中・近世

## ① 洞 I 遺跡出土陶磁器 (第42・46・47図、図版41~45)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
①	陶器 焼締大甕	13号土坑 覆土	頸部片	灰白色 硬質	内面に指圧痕あり。内外面に自然釉が及ぶ。 白色鈹物粒を多く含む。	常滑 中世
②	磁器 小碗 染付	14号土坑	口径 (6.8) 器高 (3.0)	淡灰白色 軟質 呉須青色	外面に淡い呉須の施文あり。内外面に透明釉 を施す。	伊万里系 18C前半
③	磁器 小碗 染付	14号土坑	口径 (4.2) 器高 (3.3)	白色 硬質 呉須青色	白磁釉はやや青味がかり、呉須は山呉須であ る。高台端部を除き施釉。	伊万里系 18C後半
④	磁器 仏飯器 染付	14号土坑	口径 (6.8) 器高 (2.2)	白色 並 呉須青色	外面に蛸唐草の染付あり。内外面に透明釉を 施す。	伊万里系 18C
⑤	陶器 皿 鉄釉	15号土坑 覆土	口径 (9.0) 底径 (3.8) 器高 2.0	灰色 焼締 茶褐色	内外面に施釉。内面にトチン痕あり。外面下 半の底面に回転篋削を施す。	瀬戸 17・18C
⑥	陶器 胎釉碗	15号土坑 覆土	口径 (10.0) 高台径 (5.0) 器高 6.8	灰色 硬質 淡緑褐色釉	外面体部下半、高台が露胎となり他は施釉。	製作地不詳 17C後半

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
⑦	磁器 小碗 染付	15号土坑 覆土	口径 (6.4) 器高 (2.7)	白色 硬質 呉須青色	外面に呉須による施文あり。内面に圏線を描く。	伊万里系 19C後半
⑧	磁器 小碗 染付	15号土坑 覆土	口径 (7.4) 高台径 3.6 器高 5.0	白色 軟質 山呉須青色	高台端部を除き施釉。外面に松葉と松の施文あり。	伊万里系 18C
⑨	磁器 小碗 染付	15号土坑 覆土	口径 (7.8) 高台径 (3.4) 器高 5.4	白色 硬質 呉須青色	高台端部を除き施釉。外面に丸文、内面に染付の文あり。	伊万里系 19C
⑩	磁器 小碗 染付	15号土坑 覆土	口径 (8.0) 器高 (3.4)	白色 硬質 呉須青色	口縁部直下の内面に圏線あり。外面に染付の絵付けあり。	伊万里系 18C前半
⑪	磁器 小碗 染付	15号土坑 覆土	口径 (8.6) 器高 (4.2)	白色 硬質 呉須青色	外面に竹葉文あり。内面に圏線を呉須で施す。	伊万里系 18C後半
⑫	磁器 小碗 染付	15号土坑 覆土	口径 (10.8) 高台径 4.0 器高 5.7	白色 並 呉須青色	高台端部を除き全体に施釉。外面に梅花、葉文、内面に雷文、華文を呉須で描く。	伊万里系 18C後半～ 19C初頭
⑬	陶器 片口鉢 灰釉	15号土坑 覆土	口径 (15.0) 高台径 8.4 器高 7.5	灰色 焼締 灰色	片口部を欠損するが口縁部内面に返りがあるため片口である。	製作地不詳 18C前半
⑭	陶器 袋物 長石釉	15号土坑 覆土	頸部下位片	淡褐色 硬質 灰色	外面に灰色釉、内面に透明釉を施している。	製作地不詳 年代不詳
⑮	軟質陶器 香炉 燻焼	15号土坑 覆土	口径 (18.2) 底径 9.4 器高 8.2	夾雑鉱物微 硬質 黒灰色	体部下半に平行叩き目が施され、底面に円形の三ツ足が付される。轆轤右廻り。	在地製 中世後半以降
⑯	陶器 甕 鉄釉	15号土坑 覆土	口径 (31.0) 器高 (17.7)	夾雑鉱物粒を多く含む。 軟質酸化気味 茶褐色	外面に七条を一単位とする回転櫛掻き文が三段に施される。釉は外面のみ施される。	在地製 19C前半
⑰	磁器 皿 染付	18号土坑 覆土	口径 (12.4) 器高 (2.4)	淡灰色 軟質 山呉須青色	やや外反する口作りである。内面に嬰珞様の施文あり。呉須はくすんだ青色	伊万里系 17C

洞Ⅰ遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
⑮	陶器 碗 灰・鉄釉	1号井戸 覆土	口径 (7.4) 高台径 4.0 器高 5.4	灰色 焼締 淡褐色、茶褐色	外面体部下半に列点刺突文あり。内面から外面に上位にかけ鉄釉を施し、高台端部を除いて灰釉が施されている。鍍手、掛分け。	瀬戸 18C後半
⑯	磁器 小碗 染付	1号井戸 覆土	口径 (10.8) 器高 (4.9)	淡灰色 並 呉須青色	外面に綱代文を描く。内外面に施釉。	伊万里系 18C前半
⑰	陶器 鉢 銅釉長石釉	1号井戸 覆土	口径 (32.2) 器高 (9.2)	黄灰色 並 緑色	器面全体に長石釉を施し、口縁、体部上半にかけ緑色釉を施す。	美濃 年代不詳
⑱	磁器 碗 青磁釉	0区N- 33	体部下位小片	淡灰色 軟質 淡緑色	内外面に施釉。釉掛けは厚く大まかな貫入が生ずる。釉調は砧手の発色ですくれた出来である。	龍泉窯 14C
⑲	磁器 碗 青磁釉	0区N- 33	体部下位小片	白色 軟質 淡緑色	内外面に施釉。釉掛けは厚く砧手の発色である。	龍泉窯 14C
㉑	陶器 焼締大甕	1区S- 06	頸部片	白色鉱物粒を多く含む 並・酸化気味	内外面に横撫あり。	常滑 中世
㉒	陶器 焼締大甕	1区S- 06	胴部片	白色鉱物粒を多く含む。 軟質・還元気味	内面に指の圧痕あり。割れ口に粘土紐作り痕あり。	常滑 中世
㉓	磁器 小杯 赤絵	1区E- 15	体部下位小片	白色 軟質 赤色	全面に透明釉施す。赤絵の図柄は不詳。	製作地不詳 18C
㉔	磁器 仏飯器 染付呉須	1区M- 11	口径 (6.0) 底径 3.8 器高 5.7	白色 硬質 呉須青色	染付で杯部に菊花様の絵付あり。白磁釉は外部底面を除き全面に施釉。	伊万里系 18C
㉕	陶器 皿 三島手	1区H- 02	口縁部片	赤褐色 軟質 茶褐色	端折皿の口縁部片で、端折部に剣先紋の印文があり、下方に花文の印文がある。印文の内面に白土掛けあり。	唐津系 17・18C
㉖	陶器 皿 三島手	1区E- 33	頸部小片	赤褐色 軟質 茶褐色	体部外面下方を除き施釉。内面に麻葉様の印文あり。印文の中は白土掛けされている。	唐津系 17・18C



番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
㊸	陶器 乗燭 灰釉	1区N- 06	口径 (5.8) 底径 5.0 器高 4.7	灰色 硬質 淡黄緑色	底部を除き内外面施釉。底部に穿孔あり。釉は灰釉。皿部を欠損する。胴部に銅製針金のつり手あり。	瀬戸、美濃 18C
㊹	陶器 小壺 胎釉	1区D- 21	底径 (7.4) 器高 (6.5)	黄灰色 軟質 淡褐色	外面下半が露胎となり他は施釉。釉は胎釉。体部内面に轆轤目あり。	瀬戸、美濃 年代不詳
㊺	陶器 鉢 灰釉	1区E- 13	底径 (7.8) 器高 (2.2)	灰色 硬質 灰褐色	高台部分を除き内外施釉。内面にトチン痕あり。	製作地不詳 年代不詳

## ② 1号井戸出土遺物 (第42図、図版41)

番号	種類	出土位置	特徴	微
1	煙管 (雁首)	覆土	真鍮製・火皿は%ほど破損。火皿の径は約1.5cmで椀形をなすと思われる。首部は長さ4.3cm、径1.0cmで六角形をなし、直線的に火皿に取り付く。	
2	煙管 (吸口)	覆土	真鍮製。端部を欠損する。現存する長さは8.9cmで、径1.0cmである。直線的で六角形をなし、合せ目が明瞭に見られる。1と同様に管の木質が内部に残存する。1と2は1本の煙管と思われ18C代の陶磁器と伴出しており、同様の時期と思われる。	

## ③ グリット出土遺物 (第48図、図版46)

番号	種類	出土位置	特徴	微
1~ 3	銭貨	北半調査区	銅製。3点とも寛永通寶で、1は背に波型がある。ともに新寛永銭と思われる。	
4	砥石	1区L- 16	凝灰岩。小片。長さ不明。幅3.0cm、厚さ1.9cm。小型の砥石で、4面および端部も使用。表面は内湾し、利手側に片減りしている。他の3面には数多くの極めて細い条痕が走っている。端部は3面の研ぎ面が見られる。	
5	砥石	1区L~ N-18	凝灰岩。小片。長さ不明。幅3.6cm、厚さ2.7cm。4面とも使用。表裏面とも内湾気味で、同一方向に片減りしており、条痕が斜めに走っている。片側面は辺と平行に条痕が走り、片側面は斜めに研ぎ面が走っている。端部には作成時の削痕が見られる。	
6	硯	1区J- 15	粘板岩。硯尻部の小片と思われる。縁帯が弧状をなして走っている。	
7~ 10	石板	南半調査区	粘板岩。黒色で板状をなし、ともに側部の破片である。	



# 洞 II 遺跡



## 第VII章 洞 II 遺跡

### 第1節 概要

洞II遺跡は洞I遺跡の北に続く連続した遺跡であり、特にI遺跡北半の様相はII遺跡に包括できるものである。また、II遺跡北端から洞III遺跡の距離約80mは現在、水田地帯となっており八幡沢に連なる低地が入り込んでおり、III遺跡とは地形的には隔絶する。

洞II遺跡では縄文時代と平安時代の遺物がわずかに出土したが、該当する遺構は確認されておらず、本遺跡の主体をなすのは、中世～近世にかけての遺構と遺物である。

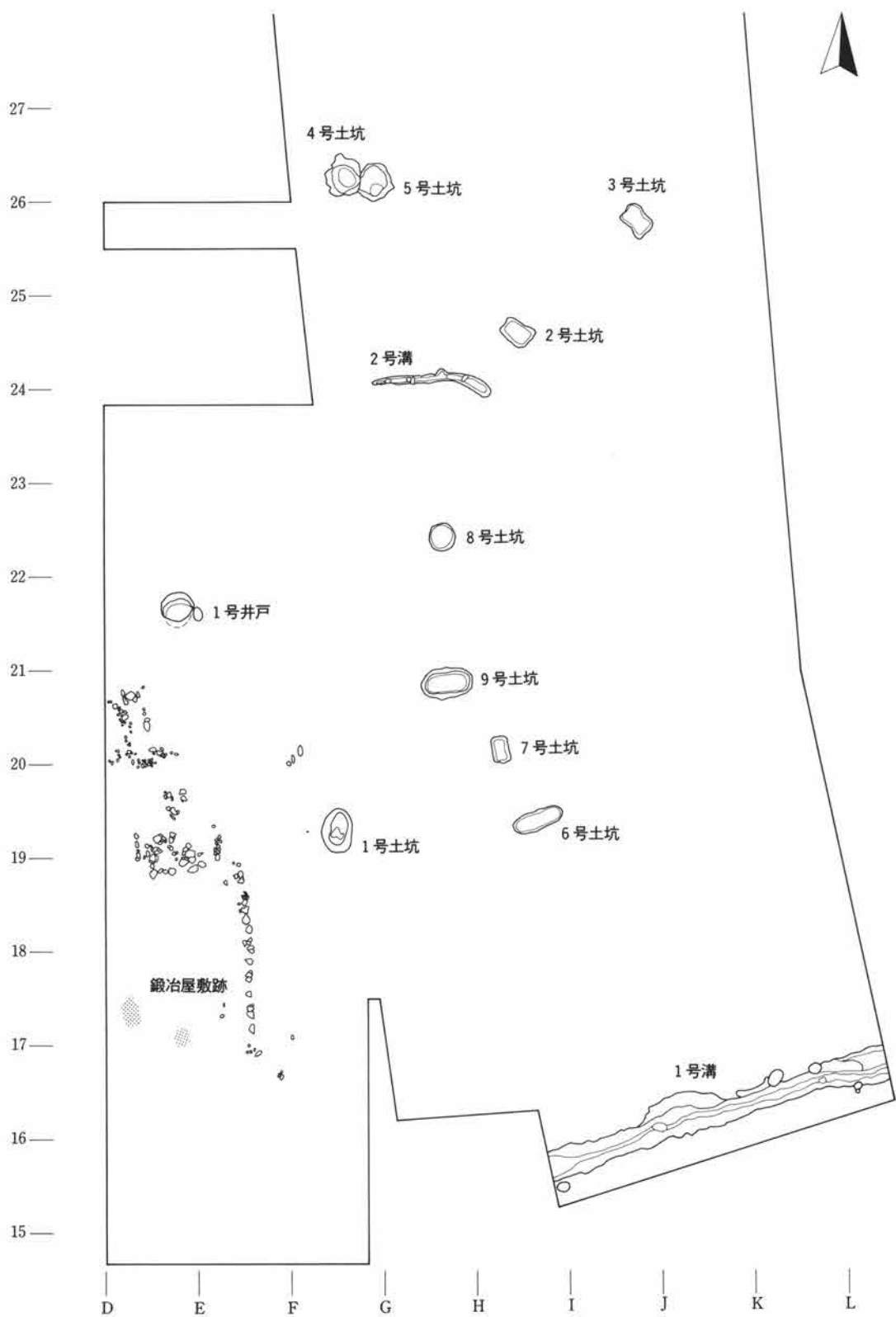
遺物は13世紀から近・現代にいたる各種の陶磁器、杭・桶・蓋・杓子・下駄等の木製品、羽口を中心とする土製品、臼・砥石等の石製品、鏡・煙管・銭貨等の金属製品がある。

確認された遺構としては、鍛冶屋敷跡1軒、掘立柱建物19軒・柱列8列、溝3条、井戸5基、土坑19基である。特に3号溝は改修を重ね長期にわたり存続したものと推定され、豊富な出土遺物がある。

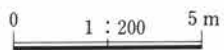
遺構の中には伴出遺物がなく時期の不確定なものもあるが、覆土や周辺の遺物出土状況等から近世の所産と類推される。

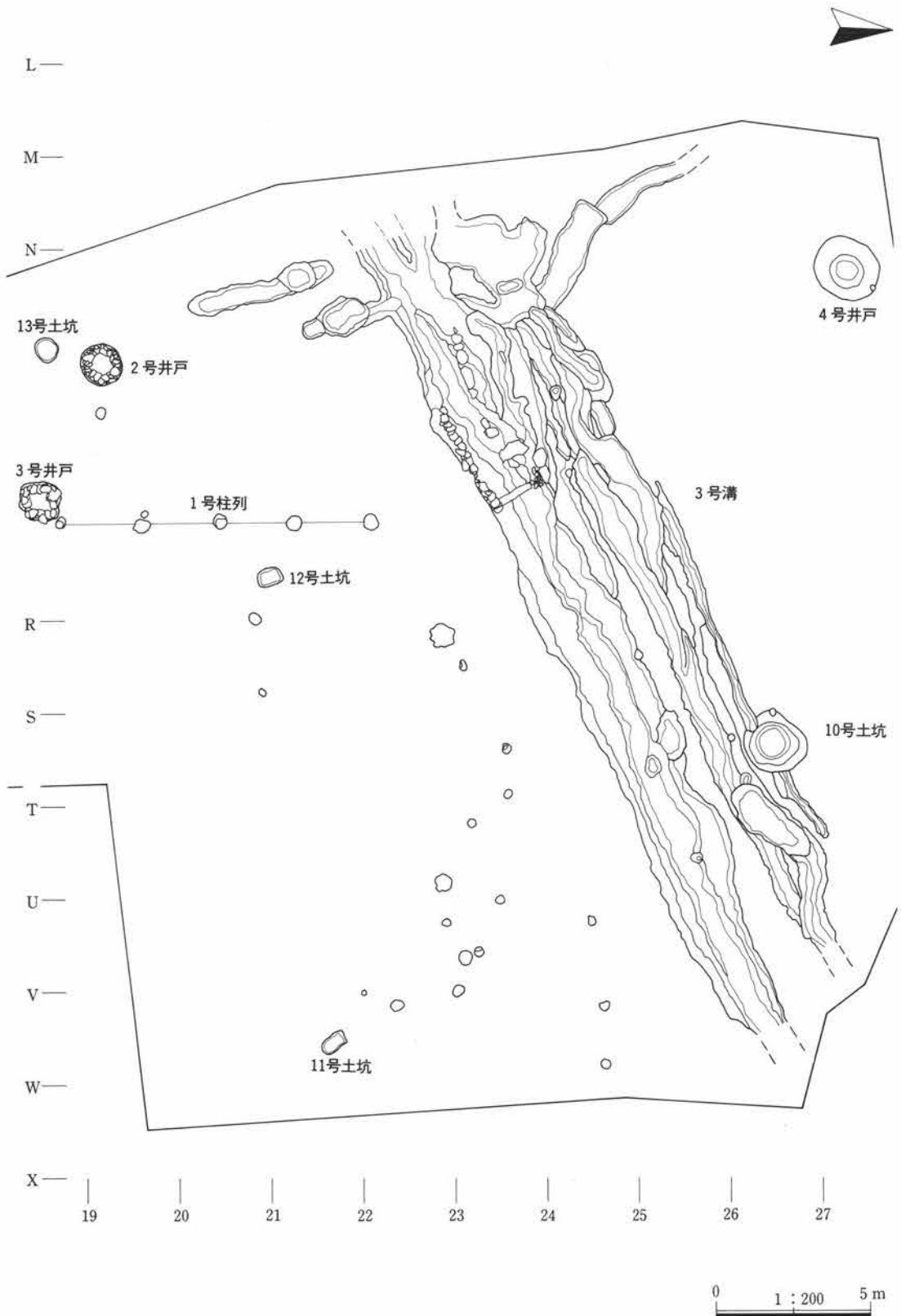


3号溝の堰（東より）

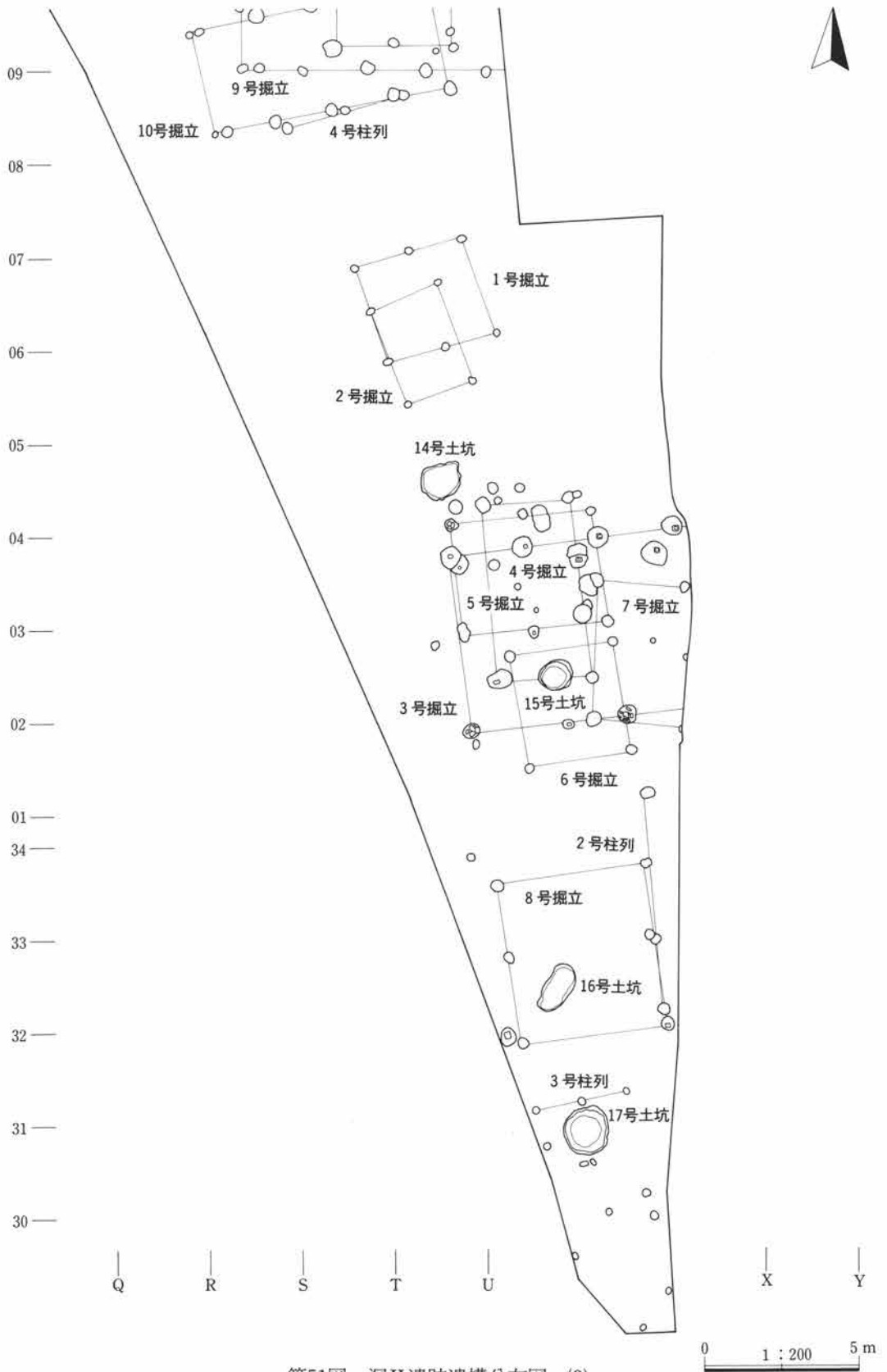


第49図 洞II遺跡遺構分布図 (1)



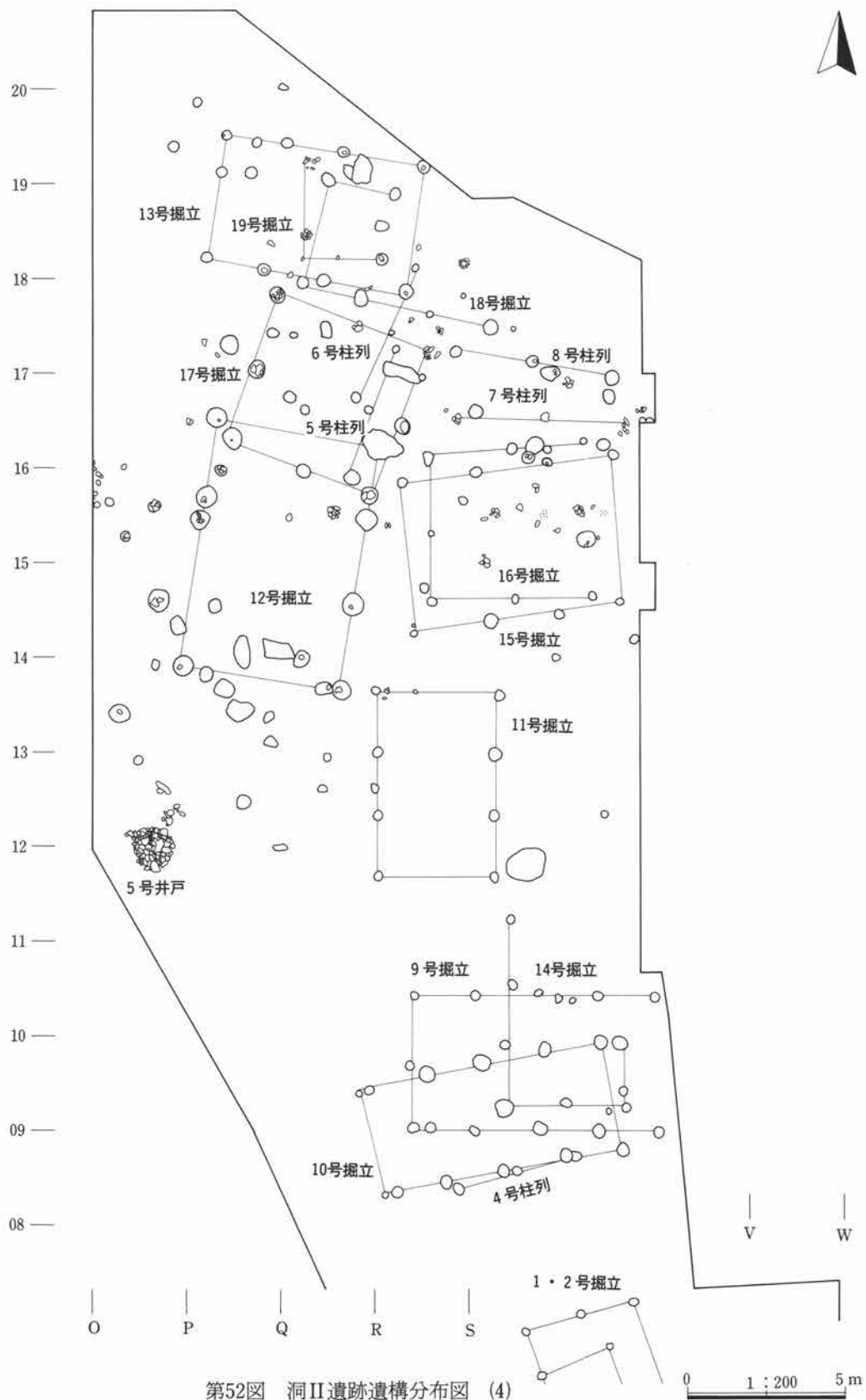


第50図 洞II遺跡遺構分布図 (2)



第51图 洞II遺跡遺構分布图 (3)





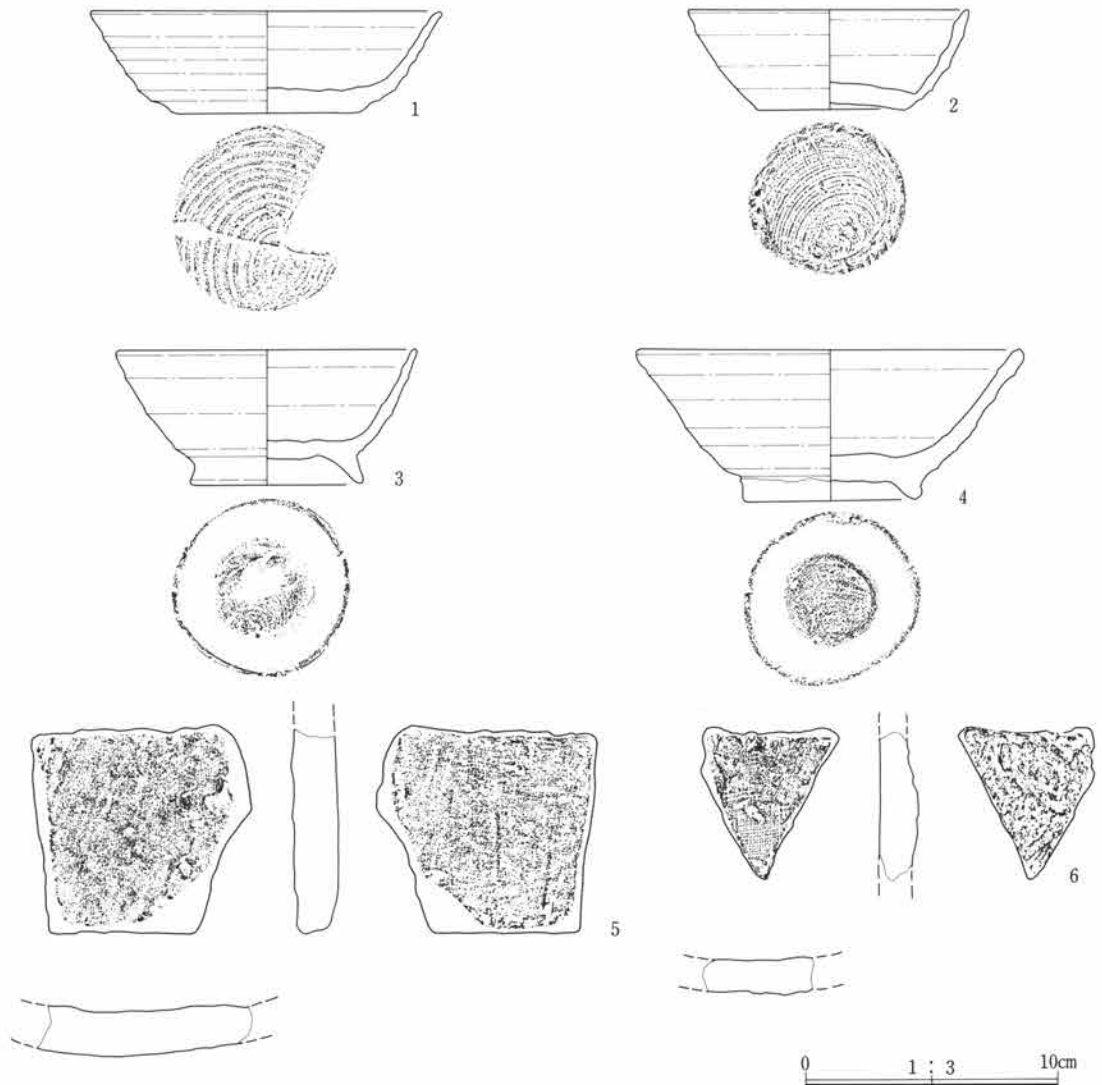
第2節 平安時代の遺物 (第53図、図版56)

洞II遺跡の調査区内では平安時代の遺構は確認されず、遺物も図示した6点だけである。これらの遺物もほとんどが近世の溝に混入して出土したものである。

洞I・II遺跡は連続した遺跡であり、洞窯跡に近接するが、平安時代の遺構・遺物はI遺跡南半に集中し、I遺跡北半からII遺跡にかけては遺構も存在せず、遺物も希薄となる。

第53図1は9世紀前半、2・3は9世紀後半、4は10世紀前半にそれぞれ比定され、洞窯跡の存続年代に合致し、技法・胎土等からも洞窯跡産と推定される。

5・6は技法的には8世紀前半の年代が与えられ、藪田遺跡出土の平瓦とともに利根郡内における最古の例となり、月夜野窯跡群の開窯時期に示唆を与えるものである。



第53図 グリット出土遺物

## 第3節 中・近世の遺構と遺物

### 1 鍛冶屋敷跡と関連遺構

#### 鍛冶屋敷跡 (第54図、図版51-2)

第54図のD～F-14～21グリットの範囲に、直径およそ20cm内外の偏平な河原石と、凝灰岩の角礫を「L」の字状に配した遺構が検出された。配石が確認できた部分は、南北方向が6m30cm余りで、D-19グリット付近で東西方向へつながる集石となっていた。区画内には焼土ブロックが3ヵ所確認され、その間には台石に使用されたと思われる河原石が発見された。周辺部から微細なチップが多数検出された。出土資料は陶磁器破片と鉄滓、チップ、羽口等であった。陶磁器は16～17C代に製作されたものと思われる。

これらのことから、配石で区画された内側は製鉄に関係した遺構として判断され、「鍛冶屋敷跡」と呼称した。しかし、鉄製品の出土は確認できなかった。また、本遺構の主体部は調査対象区域外に所在していたと推測されることから、どのような製鉄生産に関係したものであったのかは特定できなかった。

本屋敷跡の南側に接して東西方向にのびている1号溝は、本遺構に関連するとともに、3号溝へ続いていたものと考えられた。この3号溝中からは陶磁器の破片が検出された。13～14C代の渥美焼陶器を混えるとともに、19C代の製作にかかわると思われるものも含まれていた。出土量が最も多かったのは、17～18C製作されたものであった。

#### 1号土坑 (第54図、図版53-7・8)

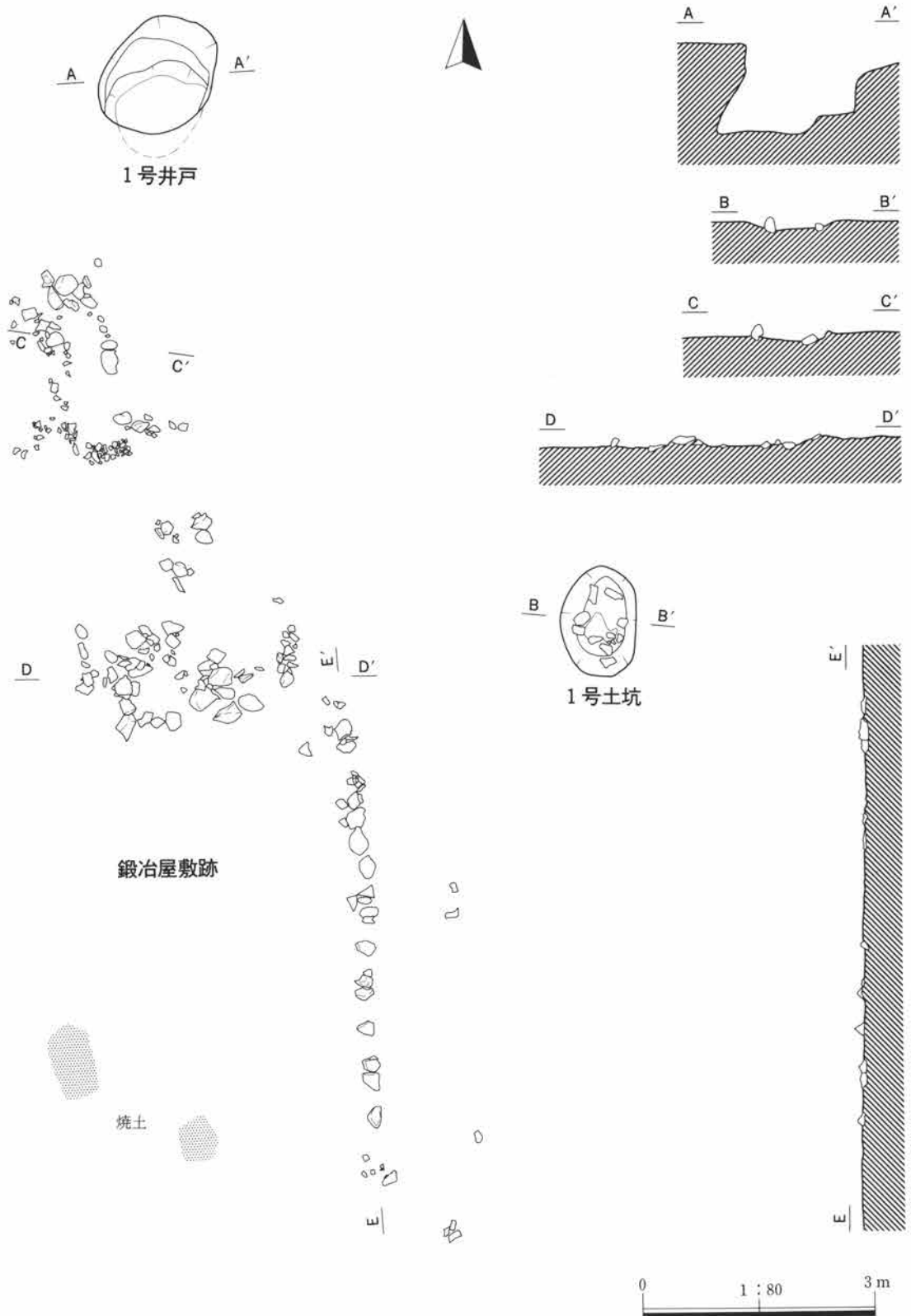
「鍛冶屋敷跡」に接したF-19グリットの土坑からは、焼土、鉄滓、羽口が一括廃棄されたような状態で検出された。本土坑の覆土中からは鉄滓と羽口が混在したような状態で出土し、下部の底面からは羽口が13個発見された。

#### 1号井戸 (第54図)

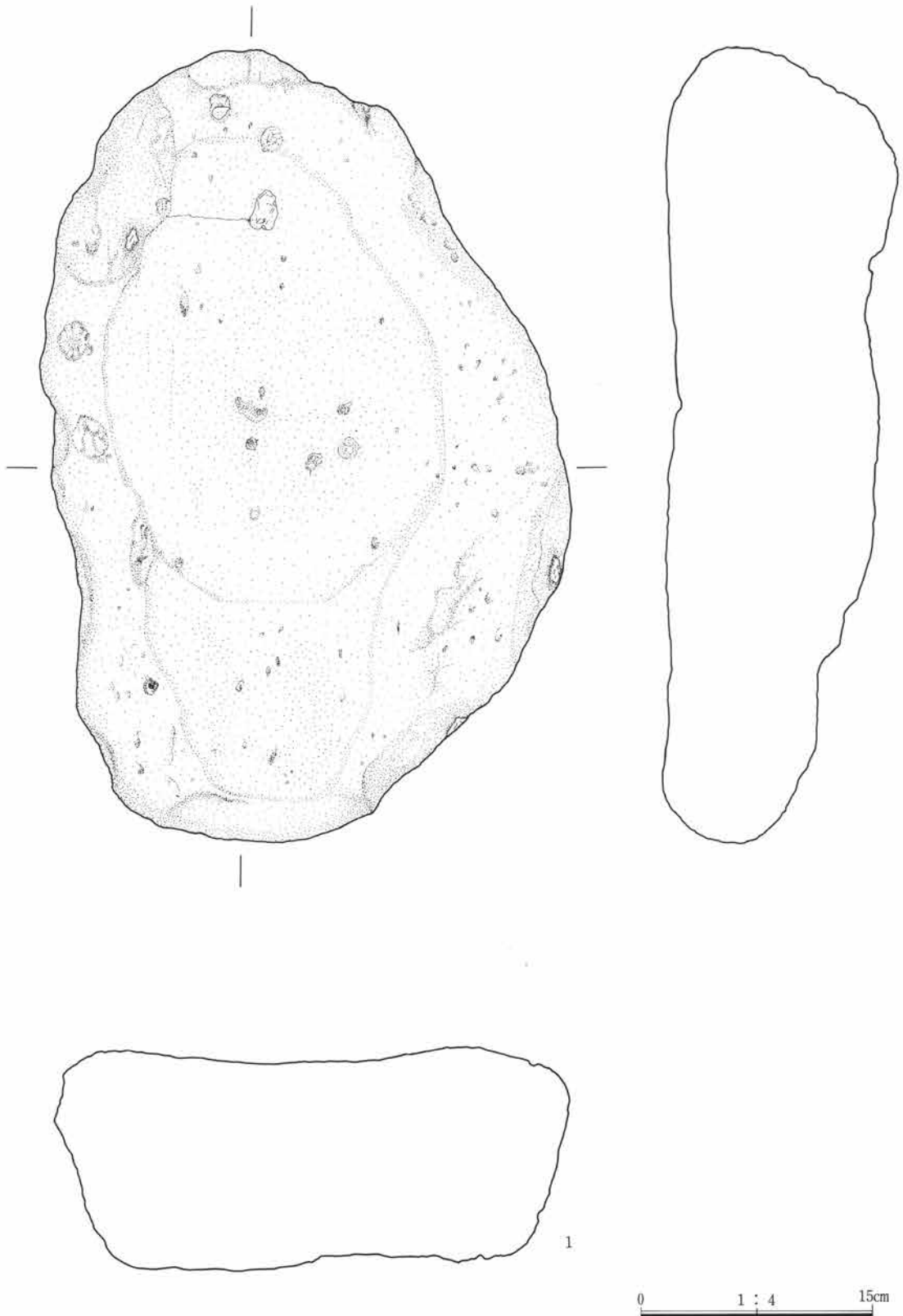
「鍛冶屋敷跡」の北側に接したD-21グリットからは、浅い井戸跡と思われる遺構が検出された。深さは確認面から1m弱と浅く明確に井戸跡と断定できるか検討の余地がある。

以上のごとく、「鍛冶屋敷跡」とその周辺部で確認された遺構は、陶磁器等の出土遺物から13～14C代の資料を含みつつ、主体は17～18C代に形成されたものと判断された。

また、洞Ⅱ遺跡では2区を中心として、多数の鉄滓と羽口等が検出された。これより、「鍛冶屋敷跡」と周辺部に形成された遺構は、江戸時代における製鉄生産と関連する集落の一隅に位置していたものと考えられよう。



第54図 鍛冶屋敷跡および1号井戸・1号土坑



第55図 鍛冶屋敷跡出土遺物 (1)



2

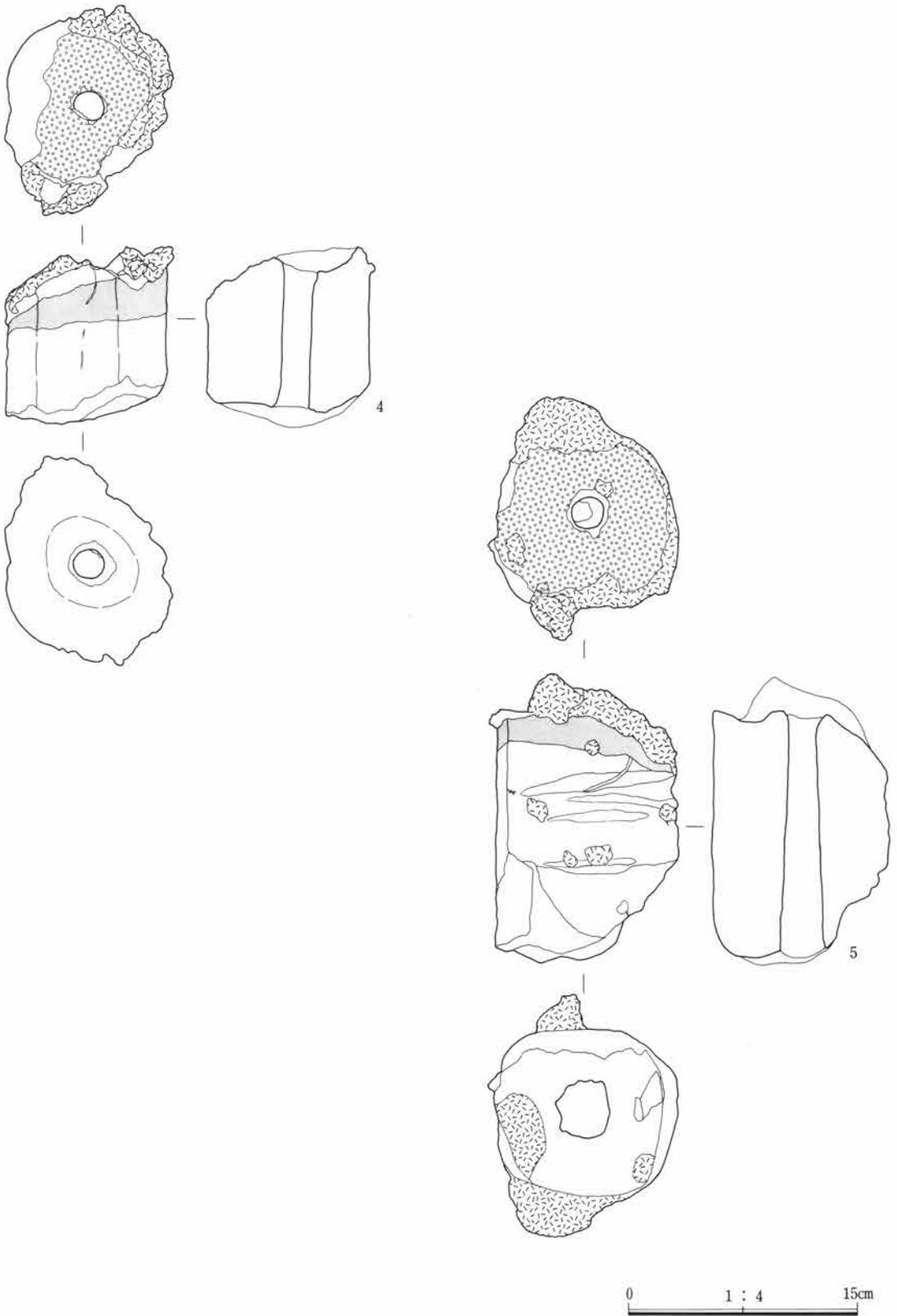


3



0 1 : 2 5 cm

第56図 鍛冶屋敷跡出土遺物 (2)



第57図 鍛冶屋敷跡関連の1号土坑出土遺物

## 2 掘立柱建物

本遺跡では19軒の掘立柱建物と8列の柱列が確認された。建物群は調査区北半の東側に集中し、ほとんどが重複関係にある。これらの建物群はさらに東方へ広がることが予想される。

なお、建物の中には不完全なものも含んでいるが、数多く検出された柱穴から最大限建物の存在をさぐろうとしたものである。

### 1号掘立柱建物（第58図、図版50-1）

3区T-06に位置し、2号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位はN-74°-Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間でわずかに歪みを持つ。柱間はほぼ等間であるが、桁行の柱間にわずかに差があり、東1間が西1間よりもほぼ12cm短かくなっている。規模は桁行3.66m、梁行3.22m、面積11.8㎡である。柱穴は円形で柱痕は不明。遺物は出土しなかった。

### 2号掘立柱建物（第58図、図版50-1）

1号掘立柱建物と重複する小規模な建物である。棟方向は南北で方位はN-26°-Wを示す。構造は桁行1間、梁行1間で歪みを持つ。規模は桁行3.30m、梁行2.28m、面積7.5㎡である。柱穴は円形で4本とも柱痕が確認され、内1本は柱材が残っており12cm角の角柱であった。1・2号掘立柱建物の重複は改築の結果と推定される。出土遺物なし。

### 3号掘立柱建物（第59図、図版50-1）

3区V-03に位置し、調査区外の東方へさらに延びると思われ全体の構造・規模は不明。4～7号掘立柱建物と重複する。東西棟と推定され棟方位はN-82°-Eを示す。現状の構造は桁行3間、梁行1間で、柱間はほぼ等間であるが南辺桁行の西1間は柱穴がない。現状の規模は桁行7.50m、梁行5.65m、面積42.4㎡である。柱穴は円形で大きくしっかりとしている。ほぼ15cm角の柱痕がすべての柱穴で検出され、南辺桁行の柱穴では柱痕を囲むように小礫が詰められていた。出土遺物なし。

### 4号掘立柱建物（第59図、図版50-1）

3区U-03に位置し、3・5・7号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位はN-82°-Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間で、梁行はほぼ等間であるが桁行は16cm～20cmの差があり、やや歪みを持つ。規模は桁行4.74m、梁行3.58m、面積17.0㎡である。柱穴は円形で、ほぼ16cm角の柱痕が桁行南辺中央の柱穴で検出された。また桁行北辺西端の柱穴には小礫が詰められていた。出土遺物なし。

### 5号掘立柱建物（第60図、図版50-1）

3区U-03に位置し、3・4・6・7号掘立柱建物と重複する。棟方向は南北で方位はN-6°-Wを示す。構造は桁行3間、梁行1間でわずかに歪みを持つ。また、東辺桁行中央の柱間が両端の柱間より23cm短かくなっており、両端柱間はほぼ等間である。また、西辺桁行は柱穴を1本欠いている。規模は桁行5.69m、梁行3.00m、面積17.1㎡である。柱穴は円形で、2本の柱穴よりほぼ7cm角の柱痕が検出された。出土遺物なし。

### 6号掘立柱建物（第60図、図版50-1）

3区V-02に位置し、3・5・7号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位はN-78°-Eを示す



す。構造は桁行1間、梁行1間で柱間はほぼ等間である。規模は桁行3.67m、梁行3.31m、面積12.1㎡である。柱穴は円形で、1本の柱穴よりほぼ12cm角の柱痕が検出された。出土遺物なし。

#### 7号掘立柱建物（第61図、図版50-1）

3区V-02に位置し、平行する1間づつの柱間を確認しただけで全体の構造・規模は不明。3～6号掘立柱建物と重複する。東西棟であるとすれば方位はN-94°-Eで、梁行は1間で柱間は4.44mである。また、桁行1間の柱間は2.35mと2.41mである。柱穴は円形で、ほぼ12cm角の柱痕が1本の柱穴より検出された。出土遺物なし。

#### 8号掘立柱建物（第61図、図版50-2）

2区V-32に位置し、2号柱列と重複する。棟方向は南北で方位はN-20°-Wを示す。構造は桁行2間、梁行1間でわずかに歪みを持つ。桁行の柱間は南1間が北1間よりも42cm～62cm長い。規模は桁行5.33m、梁行4.85m、面積25.8㎡である。柱穴は円形で、ほぼ15cm角の柱痕が2本の柱穴で検出された。出土遺物なし。

#### 9号掘立柱建物（第62図、図版53-1）

3区S-09に位置し、調査区外の東方へ延びる可能性がある。10・14号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西と推定され、方位はN-90°-Eである。現状の構造は桁行4間、梁行2間で歪みはないが、桁行の柱間は最大14cmの差がある。現状の規模は桁行7.89m、梁行4.20m、面積33.1㎡である。柱穴は円形で柱痕は検出されなかった。出土遺物なし。

#### 10号掘立柱建物（第62図、図版53-2）

3区S-09に位置し、9・14号掘立柱建物、4号柱列と重複する。棟方向は東西で方位はN-77°-Eを示す。構造は桁行4間、梁行1間で、西梁行には33cmの間隔をおいて補助柱穴がある。わずかに歪みを持ち、梁行は等間であるが桁行の柱間は最大29cmの差がある。規模は桁行7.44m、梁行3.39m、面積25.2㎡である。柱穴は円形で柱痕は検出されなかった。出土遺物なし。

#### 11号掘立柱建物（第63図、図版53-3）

3区R-12に位置する。棟方向は南北で方位はN-3°-Wを示す。構造は桁行3間、梁行1間で、桁・梁行の柱間ともわずかに差があり、わずかに歪みを持つ。規模は桁行5.81m、梁行3.89m、面積22.6㎡である。柱穴は円形で、ほぼ10cm角の柱痕が1本の柱穴で検出された。出土遺物なし。

#### 12号掘立柱建物（第64図、図版53-4・6）

3区P-14に位置し、17号掘立柱建物、5号柱列と重複する。棟方向は南北で方位はN-7°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で西辺桁行の柱穴1本を欠いている。梁行柱間はほぼ等間で、桁行柱間は北1間が南2間より平均28cm短くなっている。規模は桁行7.87m、梁行5.04m、面積39.7㎡である。柱穴は円形で大きくしっかりとしている。5本の柱穴で柱材が検出され、ほぼ16cm角の角柱であった。出土遺物なし。

#### 13号掘立柱建物（第63図、図版53-5）

3区Q-18に位置し、18・19号掘立柱建物、6号柱列と重複する。棟方向は東西で方位はN-98°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間である。梁行はほぼ等間で桁行の柱間は東1間が西2間より81cm長くなっている。規模は桁行6.63m、梁行4.06m、面積26.9㎡である。柱穴は円形で、3本の柱穴

にはほぼ15cm角の角柱が残っており、2本の柱穴に柱痕が検出された。また、3本の柱穴には扁平な円礫が据えられていた。出土遺物なし。

**14号掘立柱建物（第65図）**

3区T-10に位置し、9・10号掘立柱建物と重複する。全体の構造・規模は不明。南北棟と推定され方位はN-1°-Wである。確認された構造は西辺桁行3間、東辺桁行1間、南辺梁行2間である。やや歪みを持ち、西辺桁行柱間は両端では等間であるが、中央の柱間が10cm短くなっている。南辺梁行の柱間は18cmの差がある。柱穴は円形で柱痕は検出されなかった。出土遺物なし。

**15号掘立柱建物（第65図）**

3区S-15に位置し、16号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位はN-79°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で歪みを持つ。桁・梁行の柱間はわずかつ差がある。規模は桁行6.61m、梁行4.79m、面積31.7㎡である。柱穴は円形で柱痕は検出されなかった。出土遺物なし。

**16号掘立柱建物（第66図）**

15号掘立柱建物と重複する。調査区外の東方へさらに延びる可能性があり、全体の構造・規模は不明。東西棟と推定され方位はN-85°-Eである。現状の構造は桁行2間が確認され、西辺梁行のほぼ中央には扁平な円礫があり、これが柱を支える礫であるならば柱間は2間となる。桁行の柱間はわずかつ差がある。柱穴は円形で、1本の柱穴には柱材の断片が残り、ほぼ15cm角の柱痕が検出された。出土遺物なし。

**17号掘立柱建物（第66図）**

3区Q-17に位置し、12号掘立柱建物、5・6号柱列と重複する。棟方向は東西で方位はN-108°-Eを示す。構造は桁行2間、梁行2間でやや歪みを持つ。桁・梁行ともにわずかつ柱間に差がある。規模は桁行4.90m、梁行4.85m、面積23.8㎡である。柱穴は円形でやや大きく、5本の柱穴には大小の礫が詰められていた。また、南西隅の柱穴には柱材の断片が残存していた。出土遺物なし。

**18号掘立柱建物（第67図）**

3区R-18に位置し、13・19号掘立柱建物、6号柱列と重複する。全体の構造・規模は不明。東西棟と推定され方位はN-100°-Eである。確認された構造は南辺桁行3間、北辺桁行1間、西辺梁行1間である。桁行の柱間はばらつきが大きい。現状の規模は桁行6.05m、梁行3.38m、面積20.4㎡である。柱穴は円形で柱痕は検出されなかった。出土遺物なし。

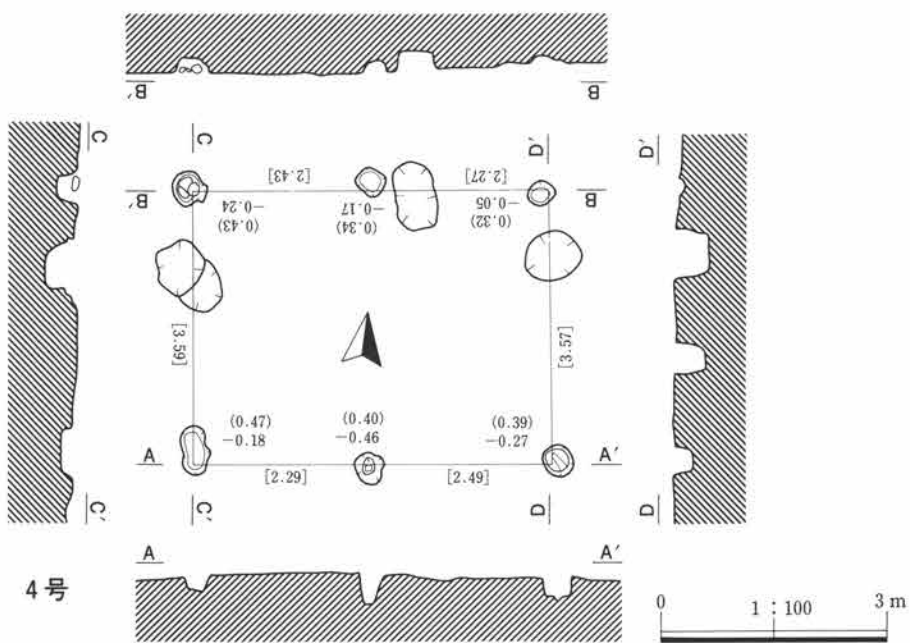
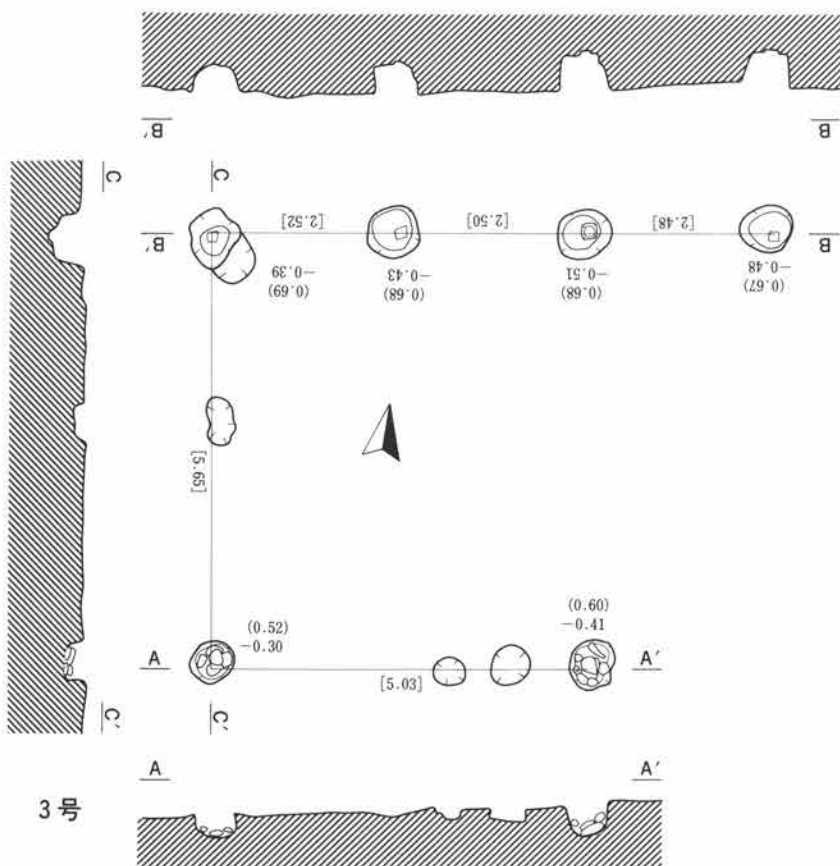
**19号掘立柱建物（第67図）**

13・18号掘立柱建物と重複する。建物としての根拠は弱いですが、東西2間、南北1間が検出された。東西列の方位はN-88°-Eで、構造は不明である。規模は東西列5.06m、南北列3.06mである。柱穴が検出されなかったものもあるが、すべて小礫が詰められている。出土遺物なし。

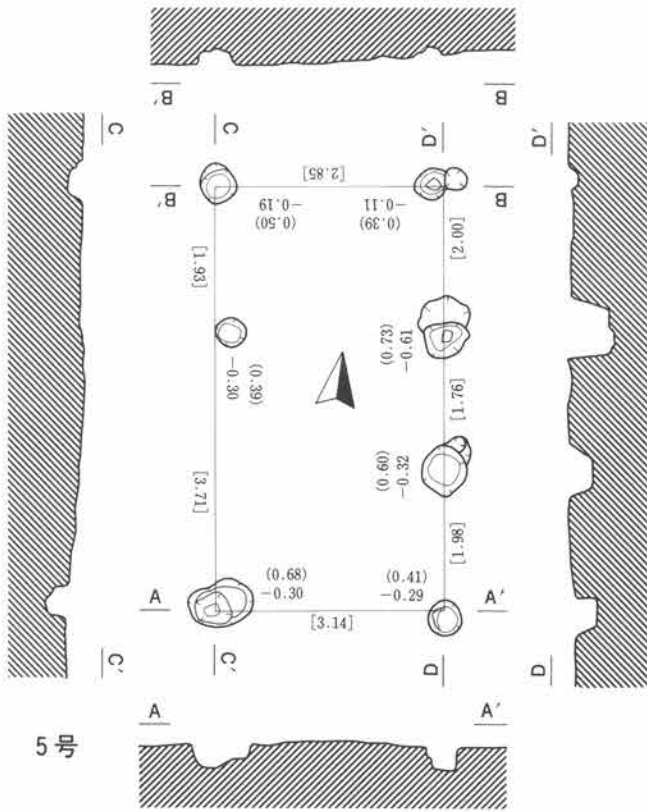
**1号柱列（第68図、図版48-2・51-1）**

3号溝の南の2区P-20に位置し、3号井戸に近接する。柱間4間が確認され、方位はN-3°-Wである。柱間は中央2間はほぼ等間であるが、両端の柱間は約15cmのばらつきがある。規模は10.10mである。柱穴は円形で、2本の柱穴には扁平な礫が据えられていた。また、1本の柱穴ではほぼ17cm角の柱痕が検出された。出土遺物なし。

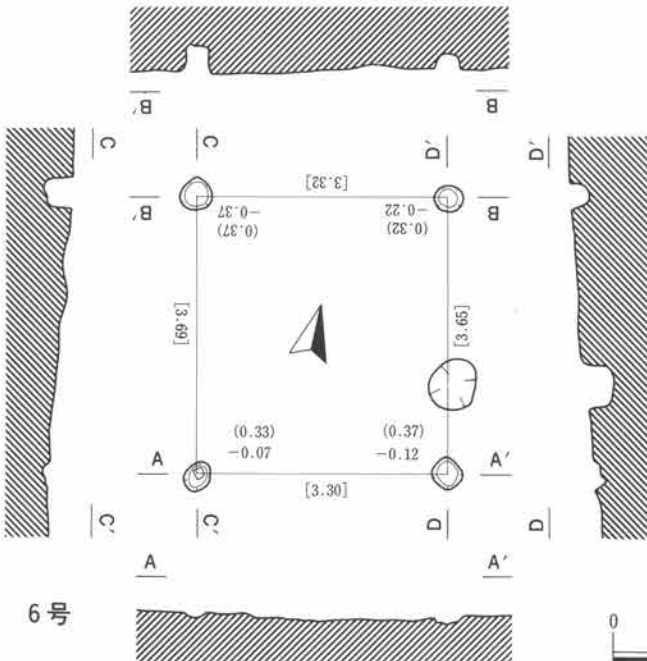




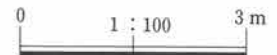
第59图 3・4号掘立柱建物



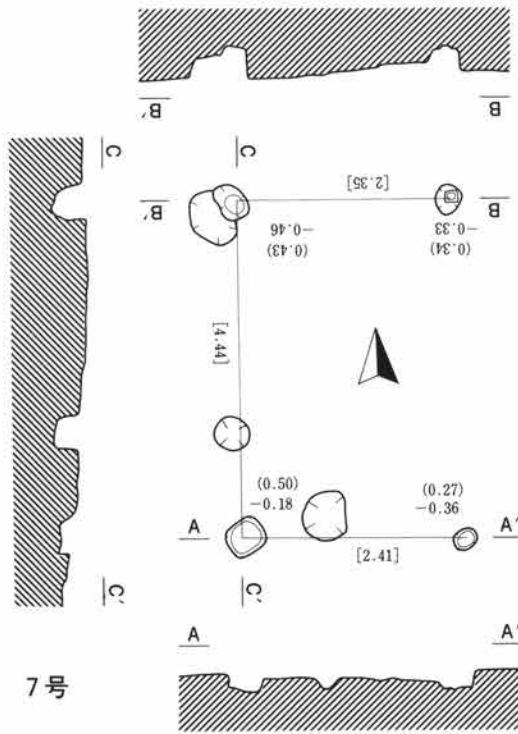
5号



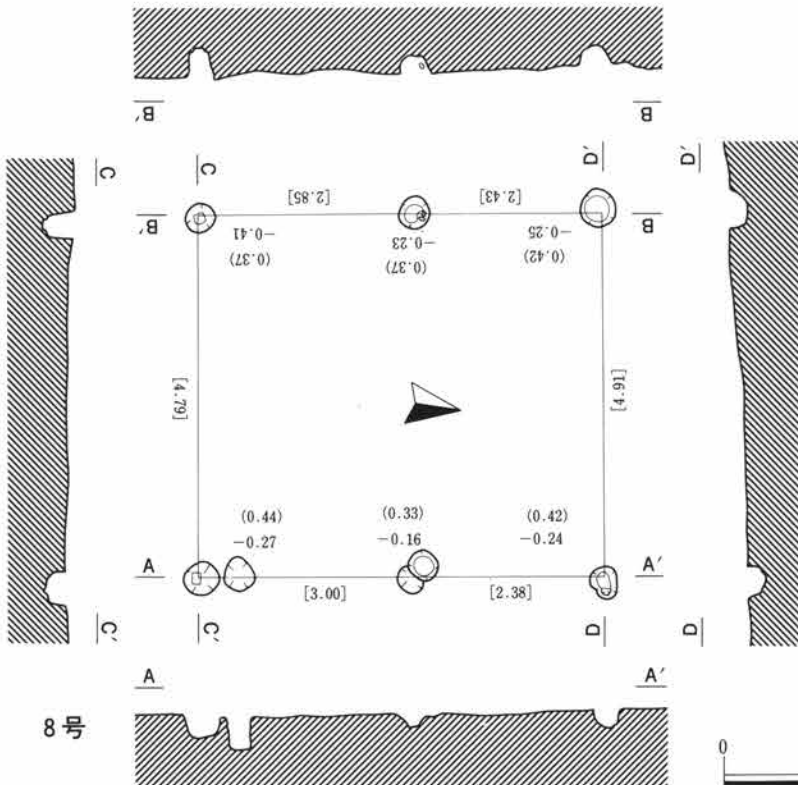
6号



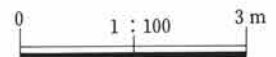
第60図 5・6号掘立柱建物



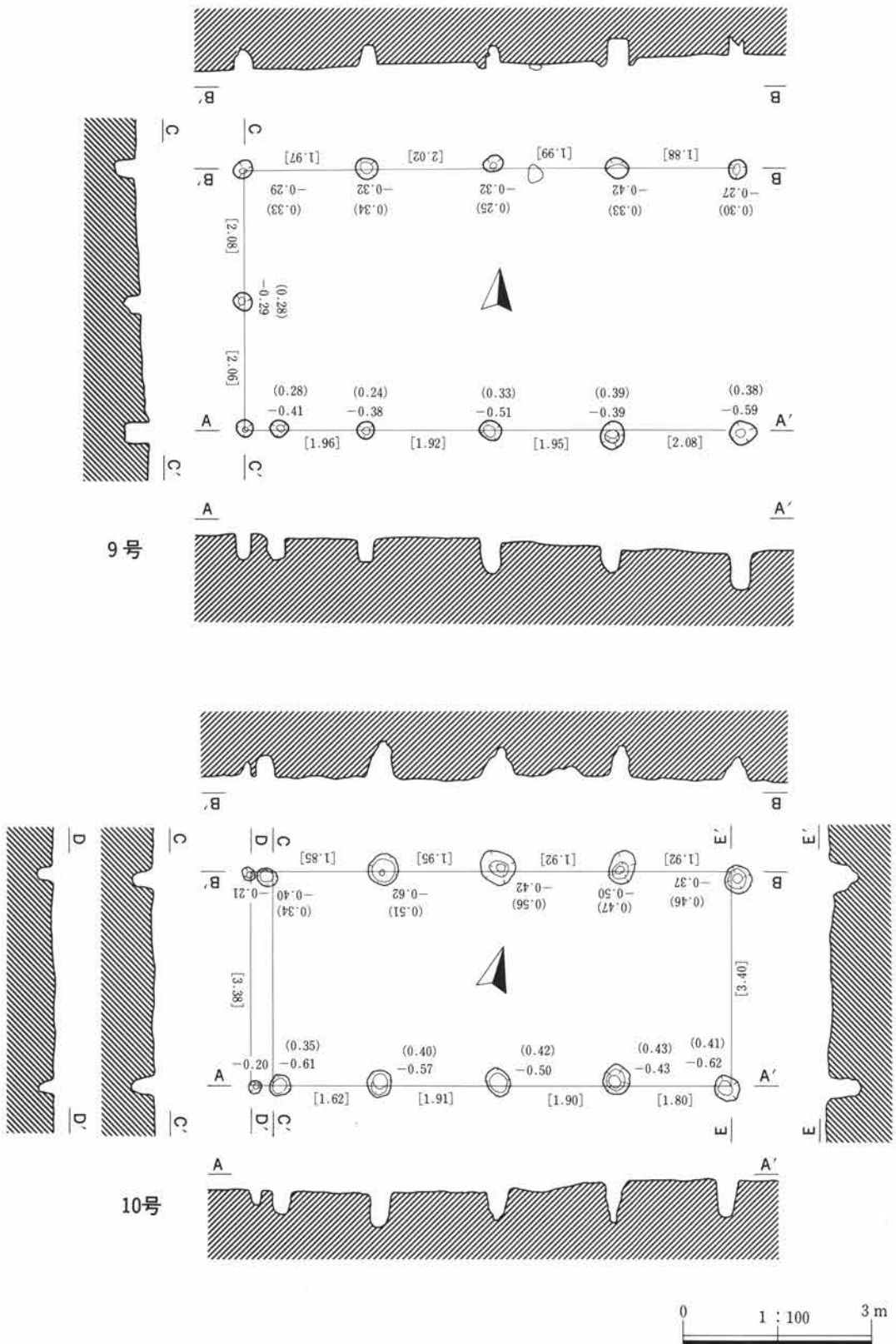
7号



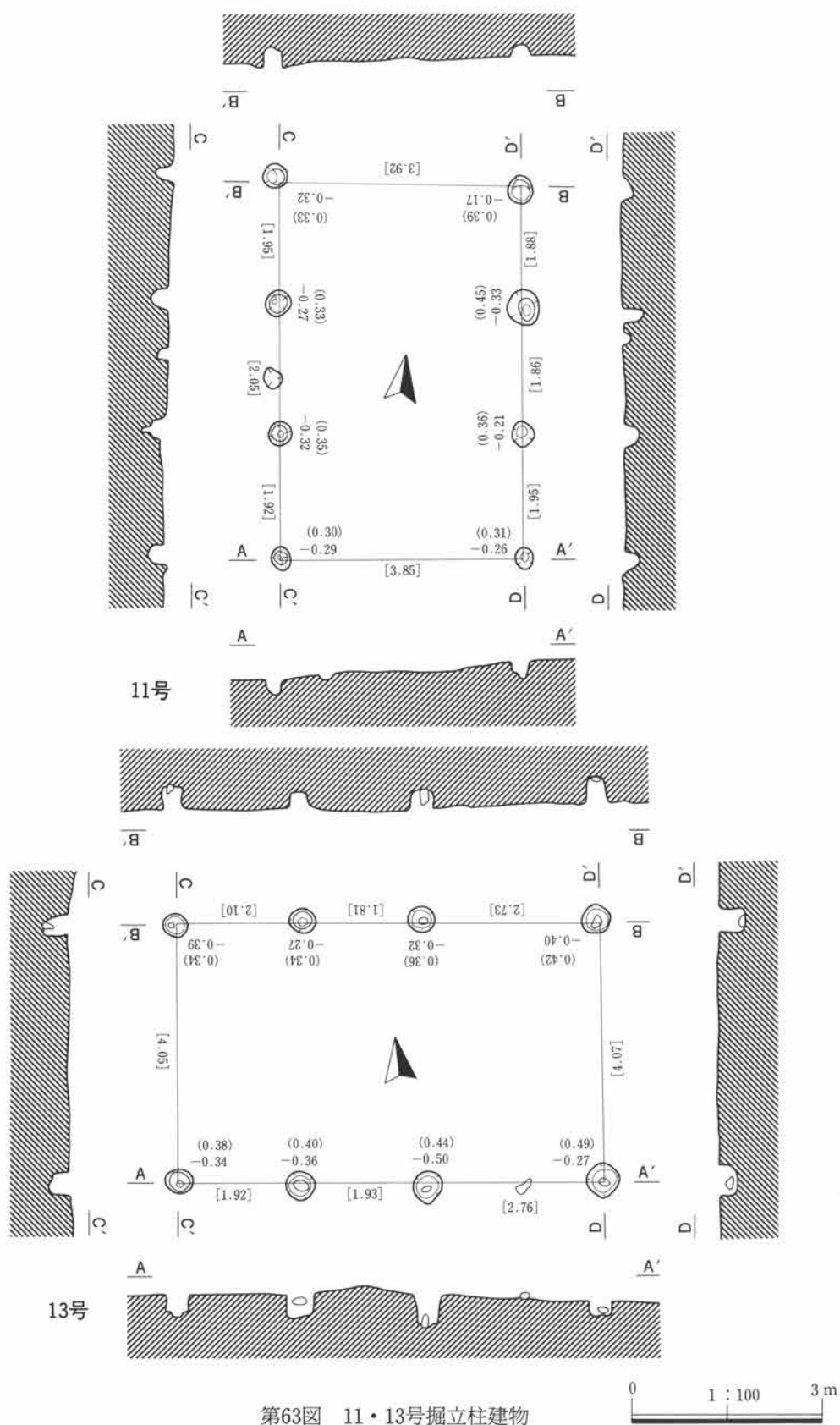
8号



第61図 7・8号掘立柱建物

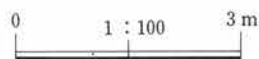
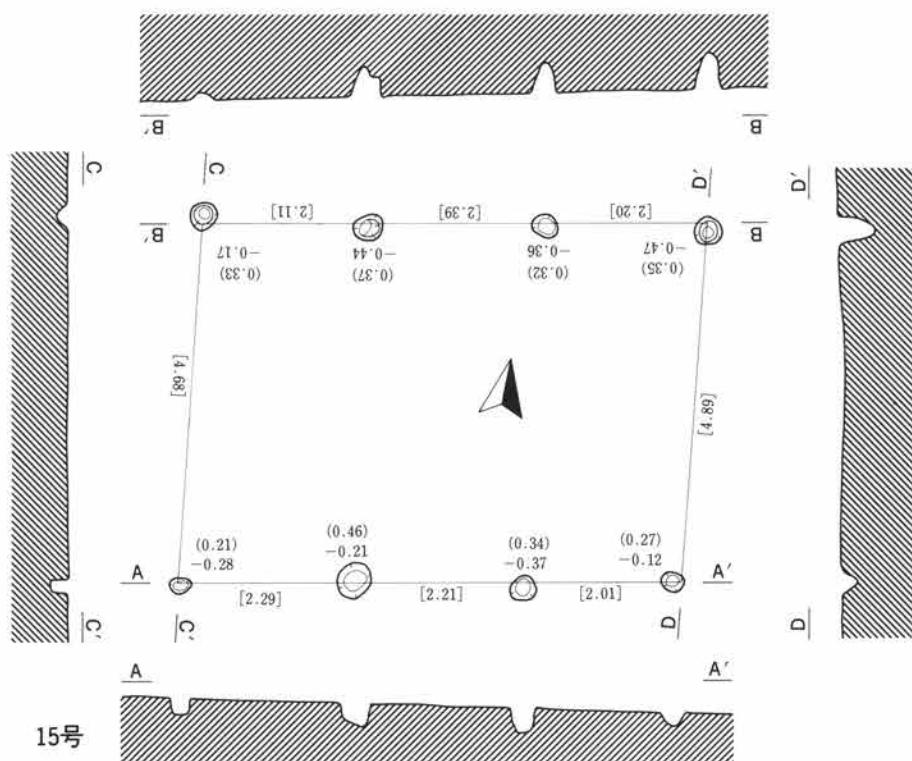
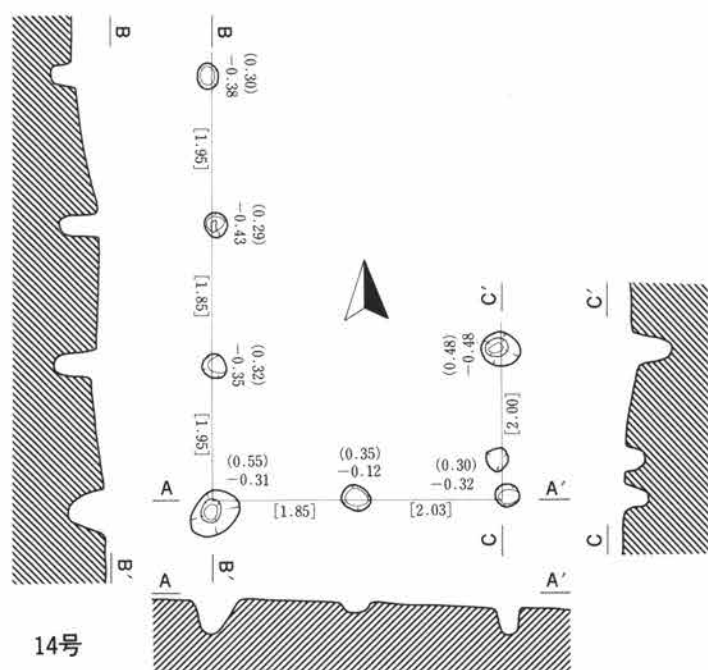


第62図 9・10号掘立柱建物

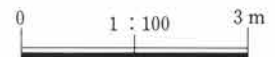
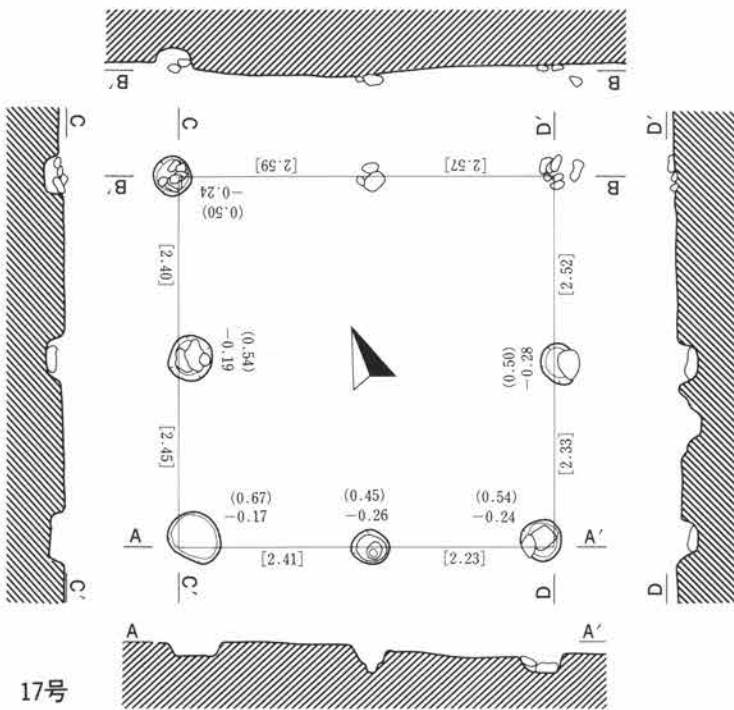
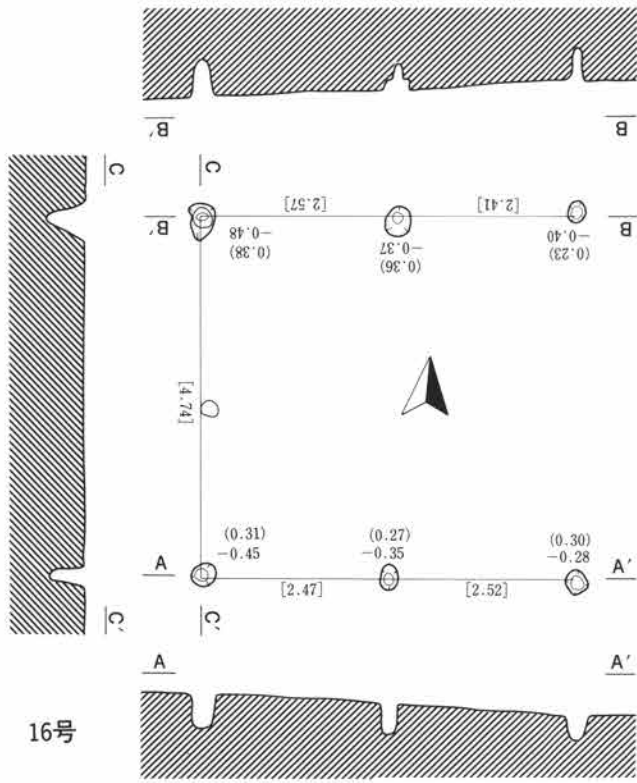




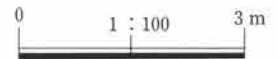
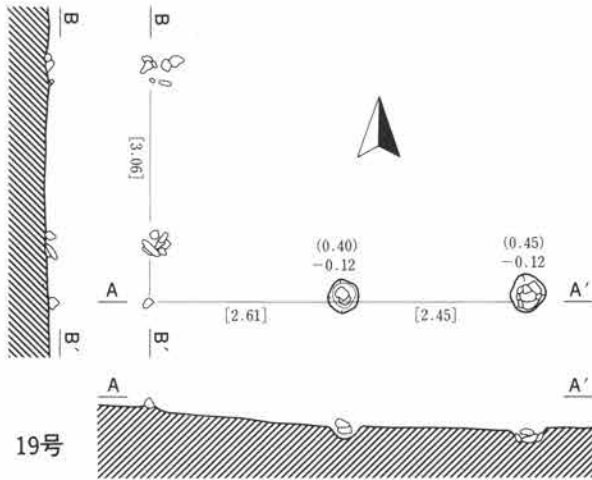
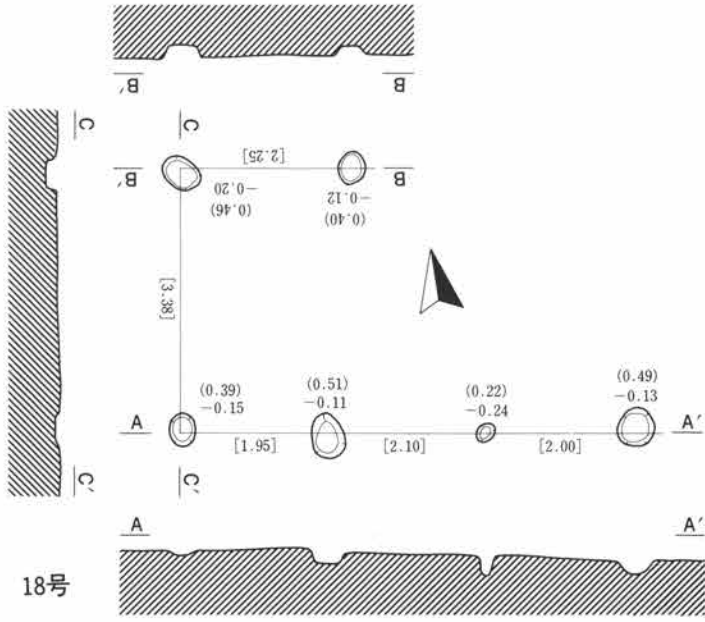




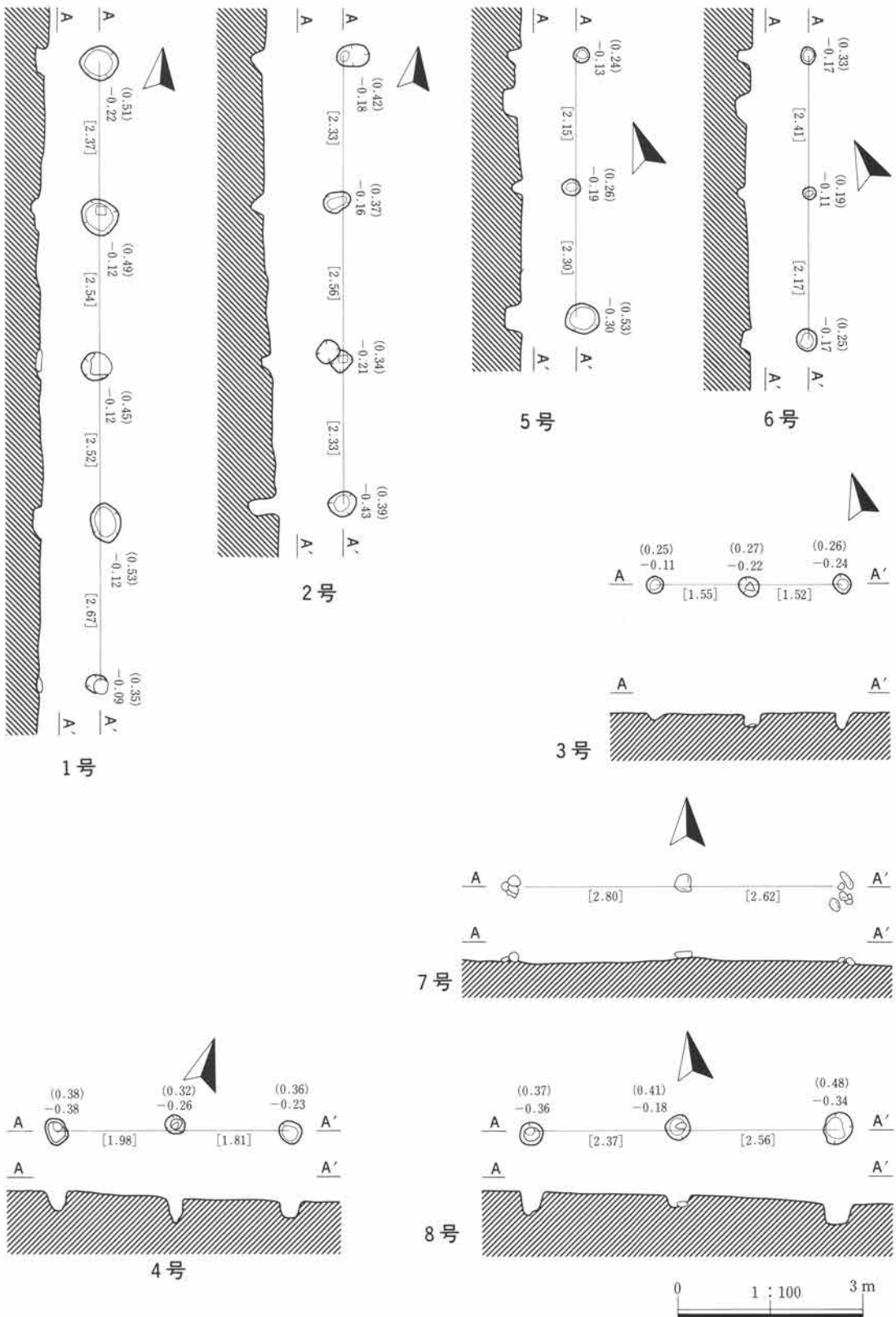
第65図 14・15号掘立柱建物



第66図 16・17号掘立柱建物



第67図 18・19号掘立柱建物



第68図 1～8号柱列

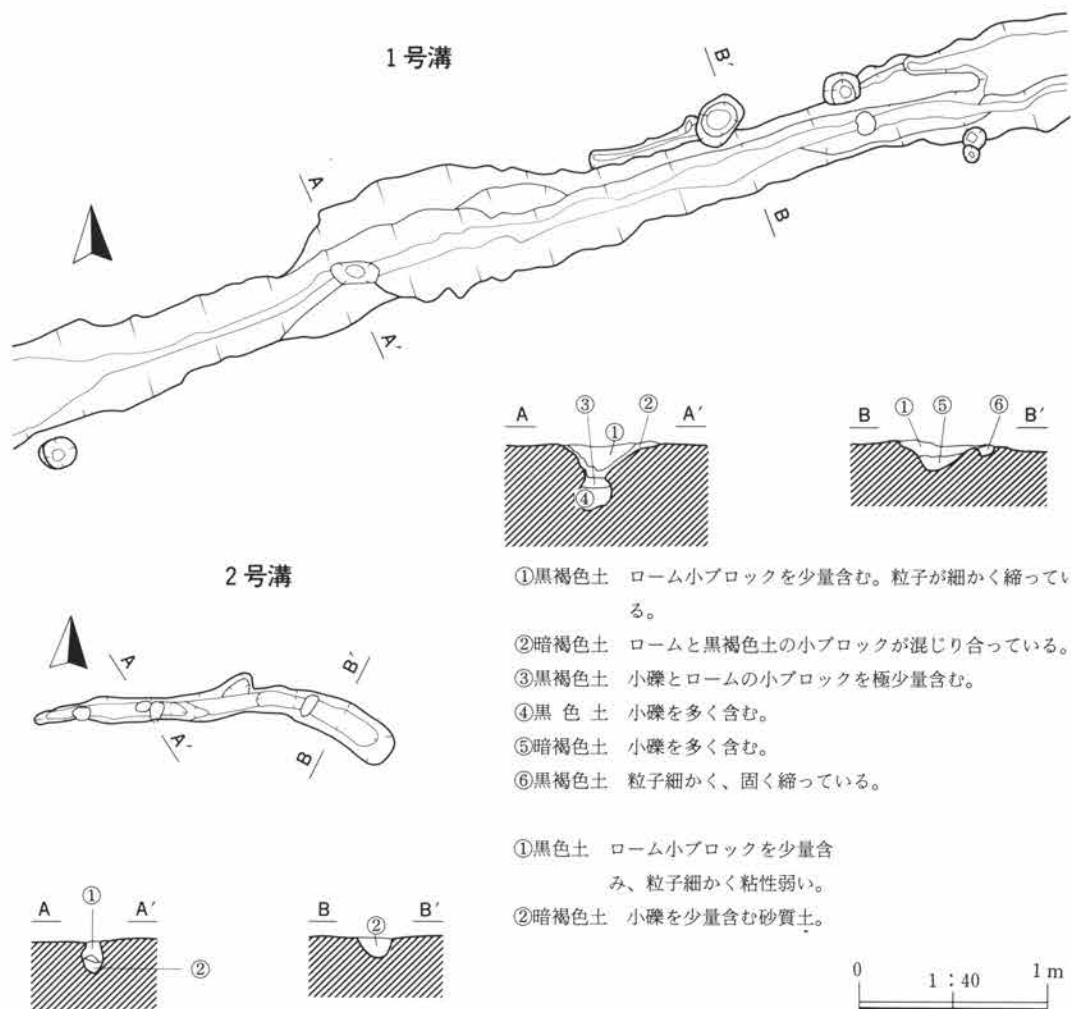
3 溝

1号溝 (第69図、図版48-1)

2区J-16から2区L-16にかけて位置する。等高線に直交する幅1.5mの町道の北側に平行して走る直線的な溝で、現在の水路は町道の南側を走っている。走向はN-72°-Eで上端幅は0.66m~1.35m、下端幅は0.08m~0.36m、深さ0.30m~0.34mである。断面形はU字状をなし、改修の痕跡が認められる。水流の痕跡も明瞭に見られ、柱穴と重複している。遺物は出土しなかった。本溝は町道に沿ってさらに東西に延びると考えられる。

2号溝 (第69図、図版48-1)

2区G-24に位置し、平面では距離3.80mを確認しただけであるが、断面が調査区西辺の壁で検出され、さらに東西に延びるものと思われる。走向はやや蛇行し、N-92°-Eを示す。上端幅は0.23m~0.40m、下端幅は0.15m~0.23m、深さ0.20m~0.32mである。断面形はU字状をなし、水流の痕跡がわずかに認められる。本溝の上部には地境が平行して走っている。



第69図 1・2号溝

## 3号溝 (第70～72図、図版48-2・52・54-1～4)

本溝は2区N-22～2区V-27にかけて、幅約6mの間で検出されたほぼ12条からなる溝の総称であり、各溝に個別にアルファベットを付け呼称した。

本溝は西に連なる洞山の湾入した山体の出口部分にあたり、扇状に広がる傾斜地のほぼ中央に位置し、溝の西端には等高線に平行する高さ約2mの人為的な段差がある。

本溝は改修を重ね長期にわたり使用されているが、おおむね3群の溝と合流点のタマリの部分から構成されている。1群は前記段差に平行して南北から流れ込むb'・j・k溝で、段差の直下にも溝の存在が推定される。他の2群は東西に走る溝群でほぼ同一の方向性を持ち、走向はN-64°-Eである。この溝群の中央には帯状に溝の走らない部分があり、この部分を境界として南半の比較的大きな溝群(a・b・b"・c溝)と北半の小規模な溝群(d～i溝)とに分かれる。なお、本溝の西端部は各溝の合流点となっており、1溝のようにタマリをなす例もある。

これらの溝は土層観察等により新旧関係が確認されており、東西に走る溝群は南半が古く北半が新しくなり、アルファベットの順に新しくなる。また、南北に走る溝群と東西に走る溝群との接続関係は一部が確認されただけである。

a溝は最も古い溝でb溝の杭列に切られ、c溝に伴なう堰の下部にある。一部が確認されただけであるがb溝の前身と推定され同様の流路をたどると思われる。現状の幅はほぼ0.65m、深さ0.90mで、やや蛇行ぎみに東流していたものと推定される。

b溝はc・i・j溝に切られ、c溝に伴なう堰の下部にある。b溝は遺物の出土状態からb'溝を合流させていたものと考えられ、b"溝はb溝の改修の痕跡と見られる。また、b'溝も改修の痕跡が見られる。b溝は幅0.90m～1.40m、深さ0.70m～1.10m。b'溝は幅0.55m～1.20m、深さ0.30m。b"溝は幅は不明で、現状の深さは0.70mである。b溝は底面の両岸にそって断続的に護岸用の杭が打ち込まれている。杭には丸太材や半裁材・割材・転用材等を使用、先端部の削りは一定の規則性を持つが杭の配列には用材や先端部の技法による規則性はなく、間隔も一定でない。また、b'溝の合流点は杭列が屈曲し、水流を受けている。b溝群の覆土中からは、各種の木器や流木・土製品・石製品・金属製品が出土し、多量の鉄滓も出土している。

c溝はa・b溝を切り、j溝によって切られている。西端は2条の流路を合せており、合流点下部に堰を築き、堰下は直線的に東流する。幅1.80m～2.78m、深さ0.70m～1.10mで数回の改修の痕跡が見られる。堰は溝をやや拡張して構築されており、両端は石垣が築かれ、2段に堰止めしている。右岸は溝底面より約25cm高く平坦な面を設け溝を拡張し石垣を築いている。石垣は長さ3.95mでほとんど根石のみ残存していた。根石は偏平な河原石を斜めに重ねるように構築されている。石垣上部は崩落しているが4～5段に築かれていたものと思われる。左岸も崩落が著しくほとんど根石のみである。堰止め部分は山石と河原石を併用した乱石積みでa・b溝を埋める状態で構築されている。上流部の根石は平積みとなっており、合流点の曲がりに合わせて屈曲している。2段の堰止めのうち上流部は河原石を2石平積みにして止めており、下流部は径25cm、長さ1.20mの丸太材で止めている。その丸太材の上面中央は幅30cmにわたり6cmほど削られている。c溝はb溝と同様に多くの遺物が出土し、多量の鉄滓が流れ込んでいます。

d 溝は e・g・i 溝に切られる直線的な溝で、改修の痕跡がある。幅0.65m～1.22m、深さ0.25m～0.40mである。鉄滓や木片が少量出土した。

e 溝は b・d 溝を切り f・g・i 溝に切られる蛇行した溝である。幅0.68m～1.05m、深さ0.40m～0.95mで、下流部の一段深くなった溝内に流木が堆積していた。

f 溝は e 溝を切り g 溝に切られる。距離1.30mを確認しただけで流路は不明である。幅0.60m、深さ0.15mである。遺物は出土しなかった。

g 溝は b'・d・e 溝を切り h 溝に切られる蛇行した溝である。幅0.42m～0.92m、深さ0.18m～0.60mで遺物はほとんど出土しなかった。

h 溝は b'・e・g 溝と10号土坑を切るやや蛇行した溝で改修の痕跡がある。幅0.23m～0.44m、深さ0.12m～0.23mである。遺物は出土しなかった。

i 溝は3号溝の中では一番新しい溝で約5mを確認した。幅0.52m～0.60m、深さ0.16m～0.26mで遺物は出土しなかった。

j 溝は3.40mにわたって確認され、a～i 溝に k 溝とともに南より直交する状態で流れ込む。幅0.60m～1.22m、深さ0.48mで遺物は出土しなかった。

k 溝は4.90mにわたって確認され改修の痕跡が見られる。幅0.66m～1.00m、深さ0.30m～0.68mで遺物は出土しなかった。

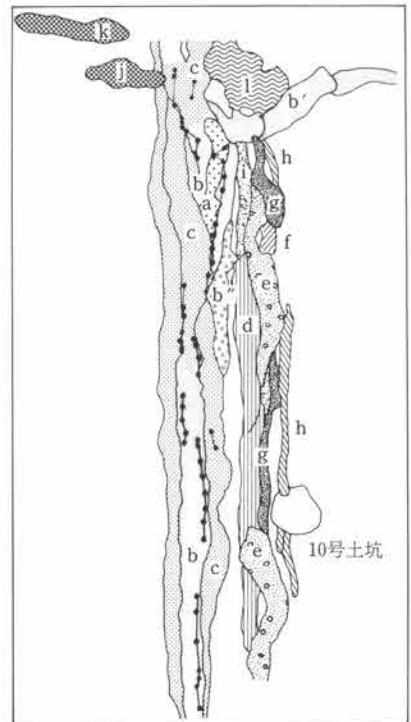
l 溝の確認された範囲は3.60m×2.55mで不整形をなし、深さは0.46mである。遺物としては鉄滓が少量出土しただけである。

以上のように改修を重ねた3号溝は陶磁器の年代観から見ると17・18世紀にピークがあり、その後の遺物も出土しており、長期にわたり存続していたことが類推され、周辺の集落しいては小川城にとって重要な存在であったと考えられる。

3号溝の西端にある段差と同様の段差は調査区北東部に広がる掘立柱建物群の西にもあり、集落の開始に伴ない宅地化のために傾斜地を削平して行ったものと考えられ、本溝の構築時期も同期と考えられる。

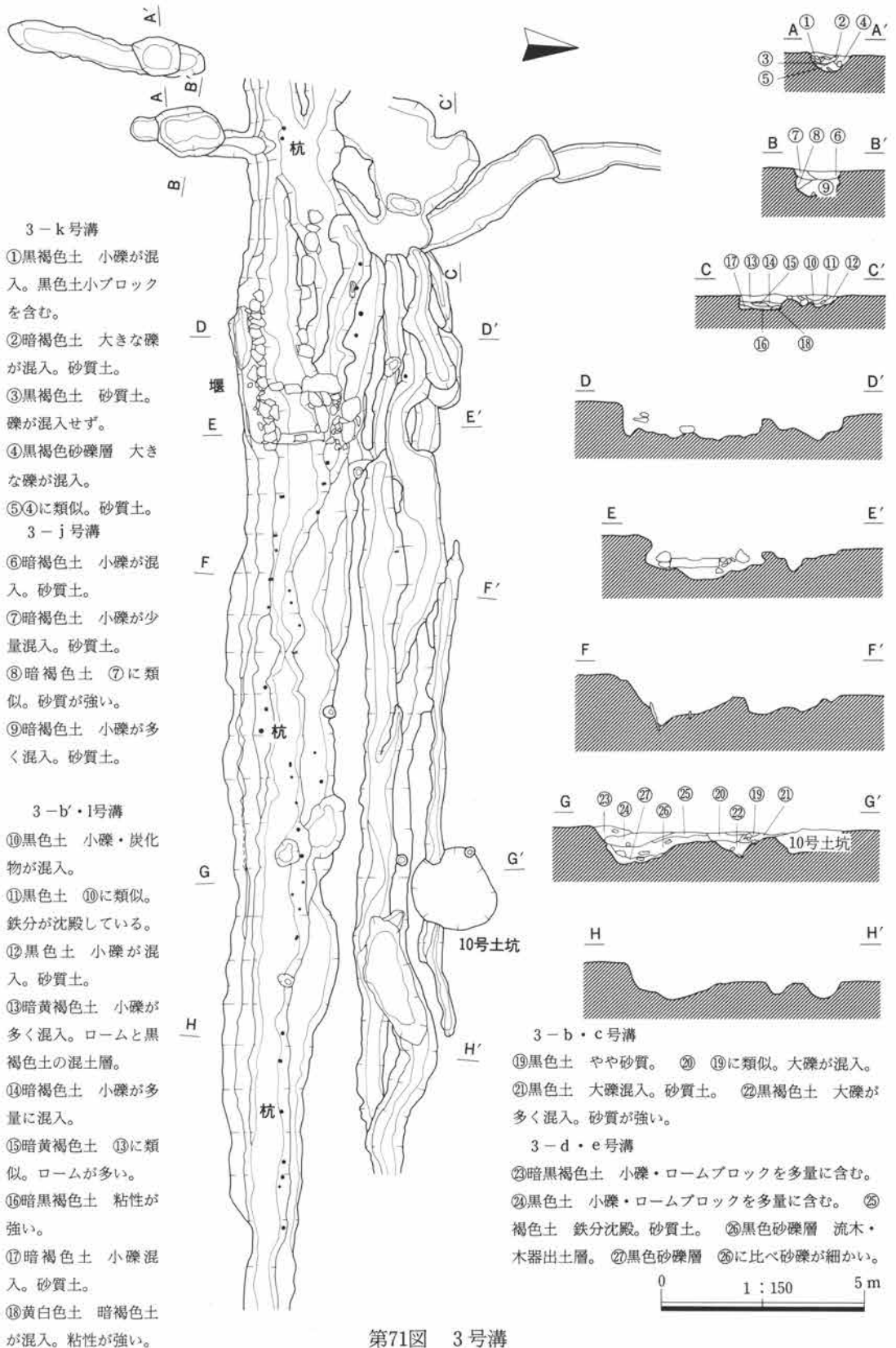
3号溝の古い段階の溝には多量の鉄滓が流れ込んでおり、段差上部の鍛冶屋敷跡と一時期同時存在していたと考えられる。

3号溝埋没後整地が行なわれており、第76図16・17の丸柱や第81図㉓・㉔の蔵骨器はこの時期のものであり、溝の廃絶は19世紀後半と考えられる。

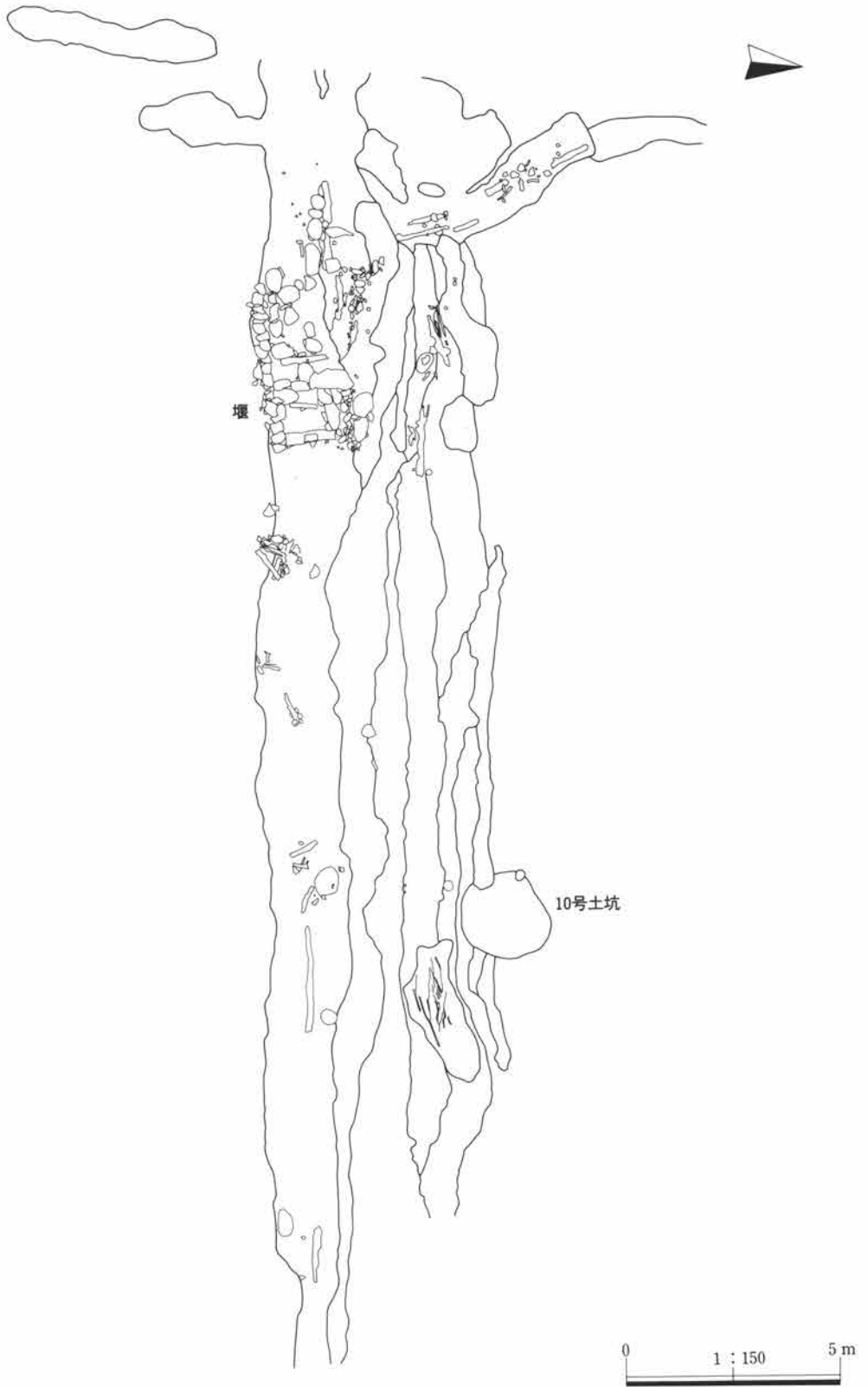


第70図 3号溝流路模式図

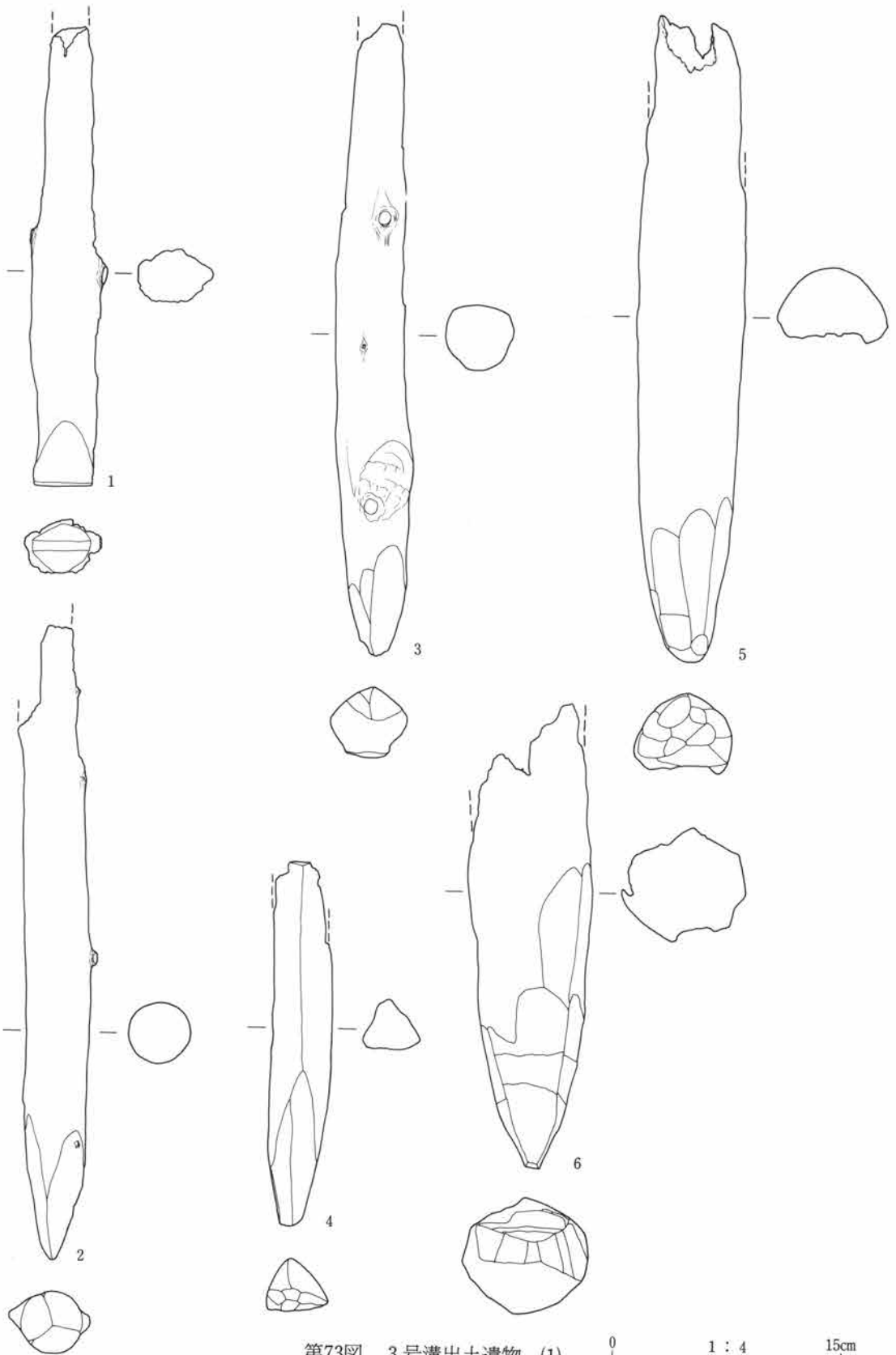




第71図 3号溝

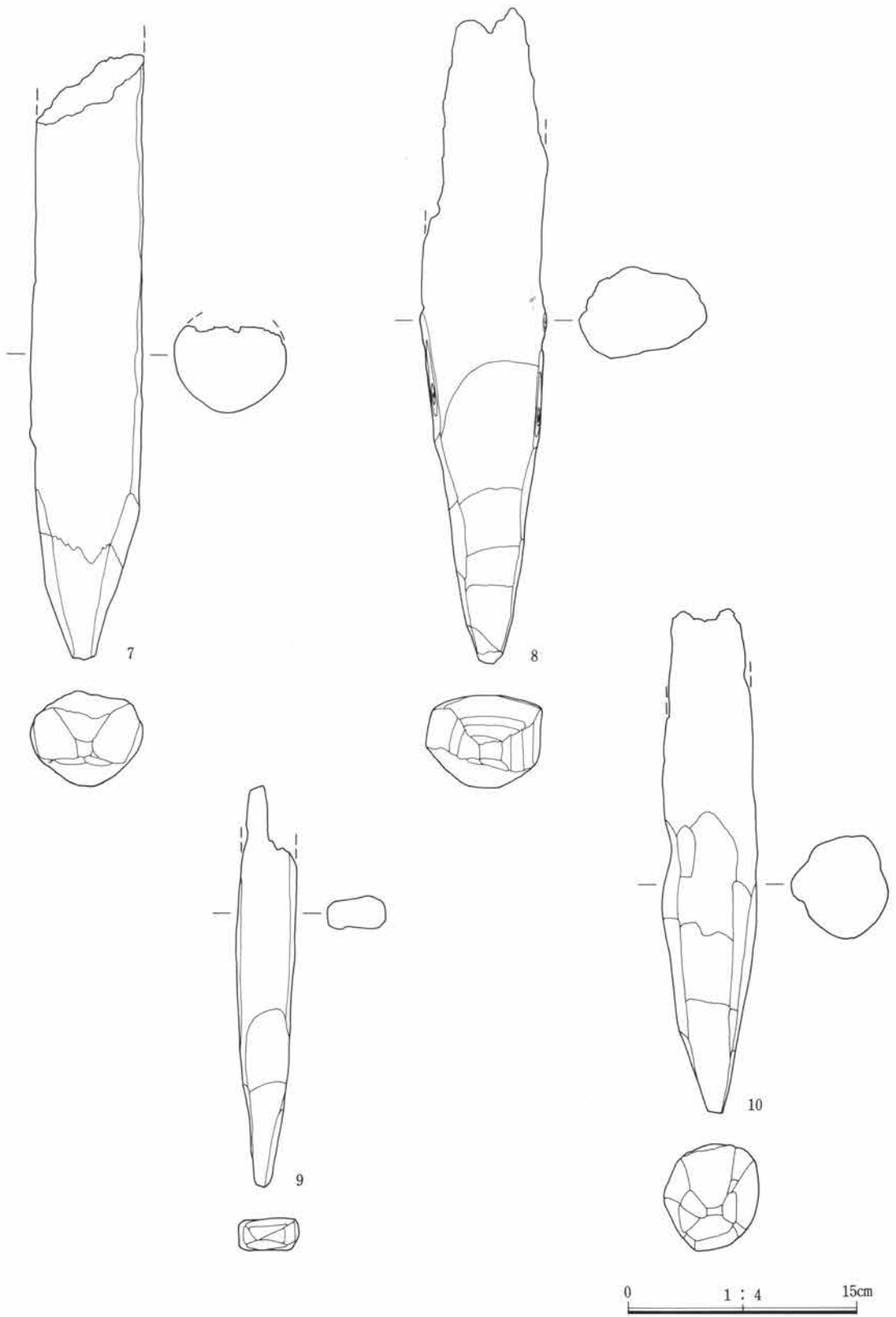


第72図 3号溝遺物出土状態

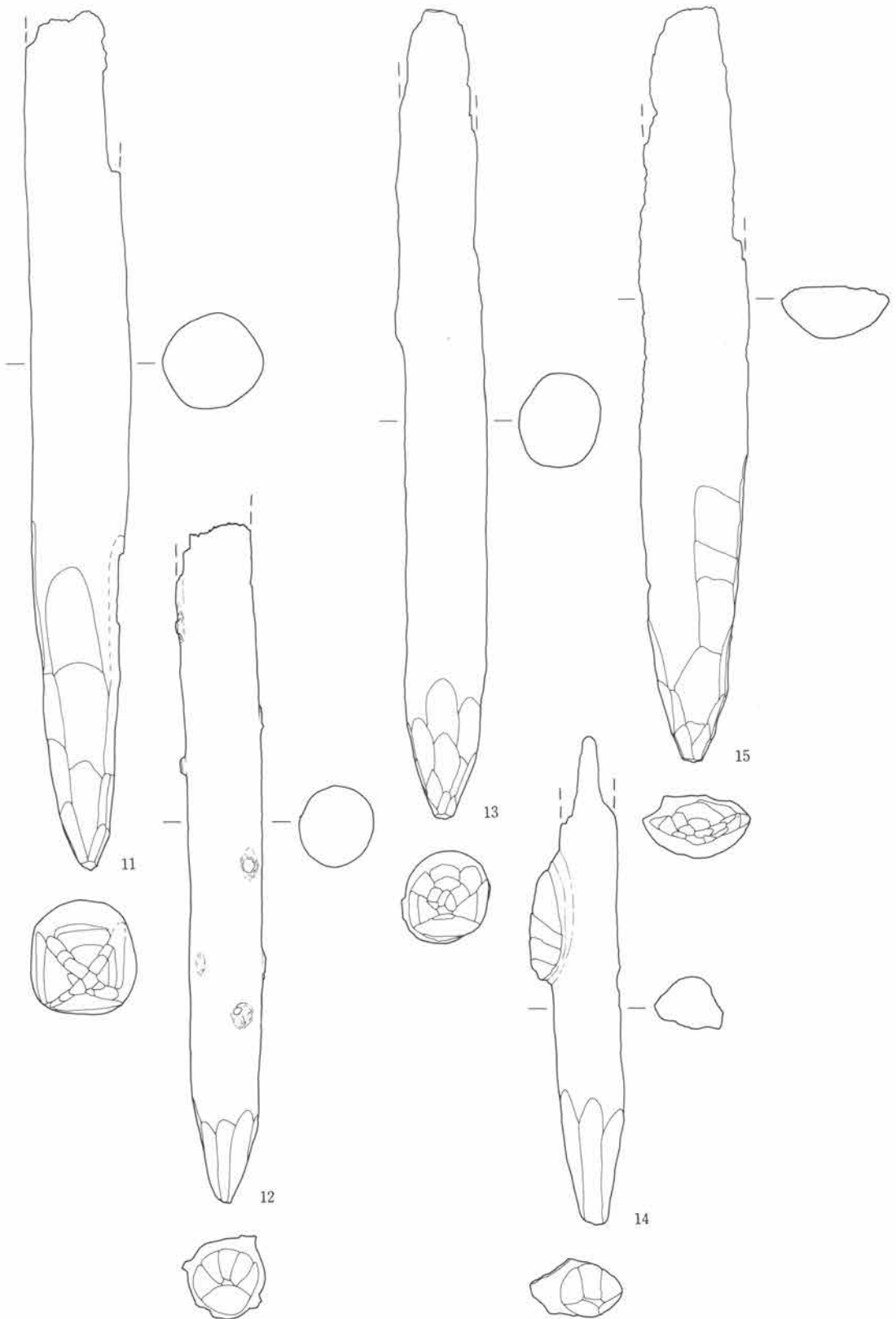


第73図 3号溝出土遺物 (1)

0 1 : 4 15cm



第74図 3号溝出土遺物 (2)



第75図 3号溝出土遺物 (3)

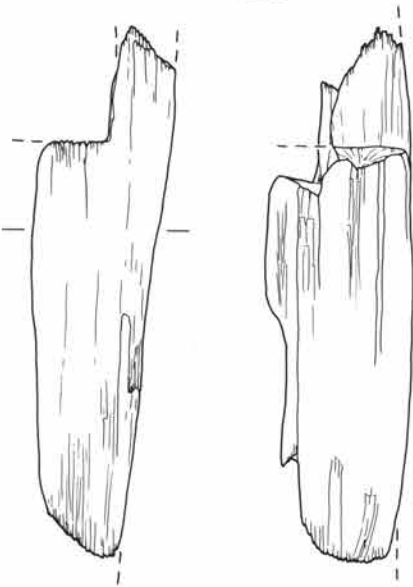
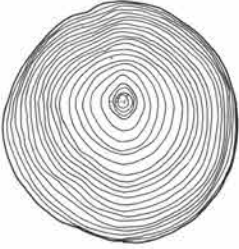
0 1 : 4 15cm



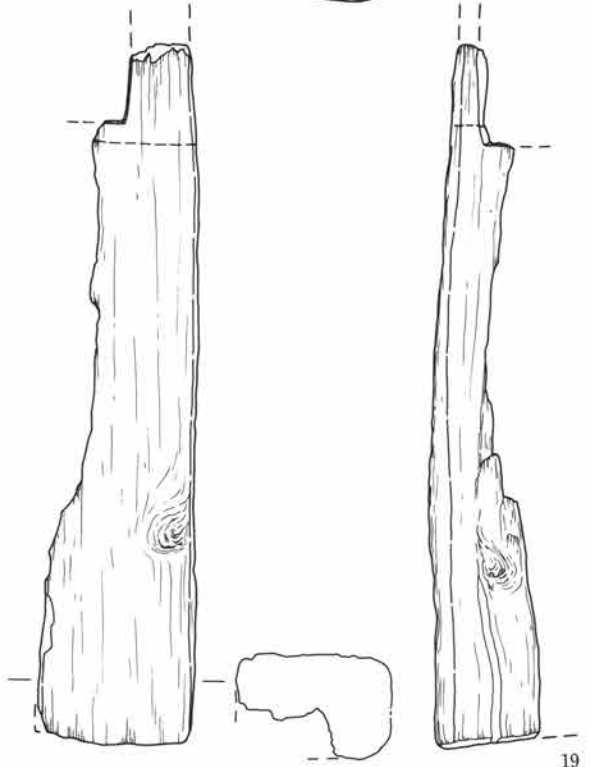
16



17



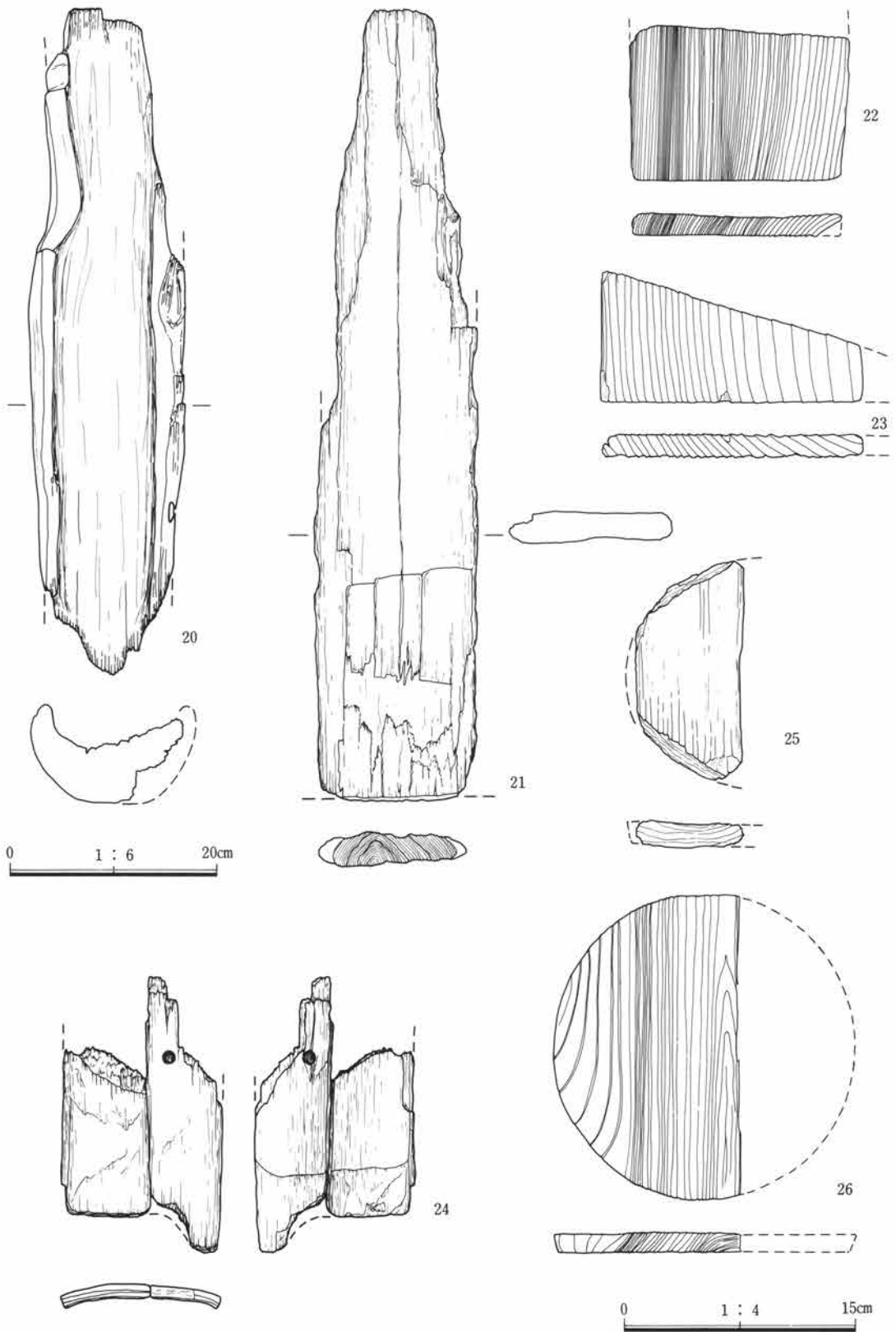
18



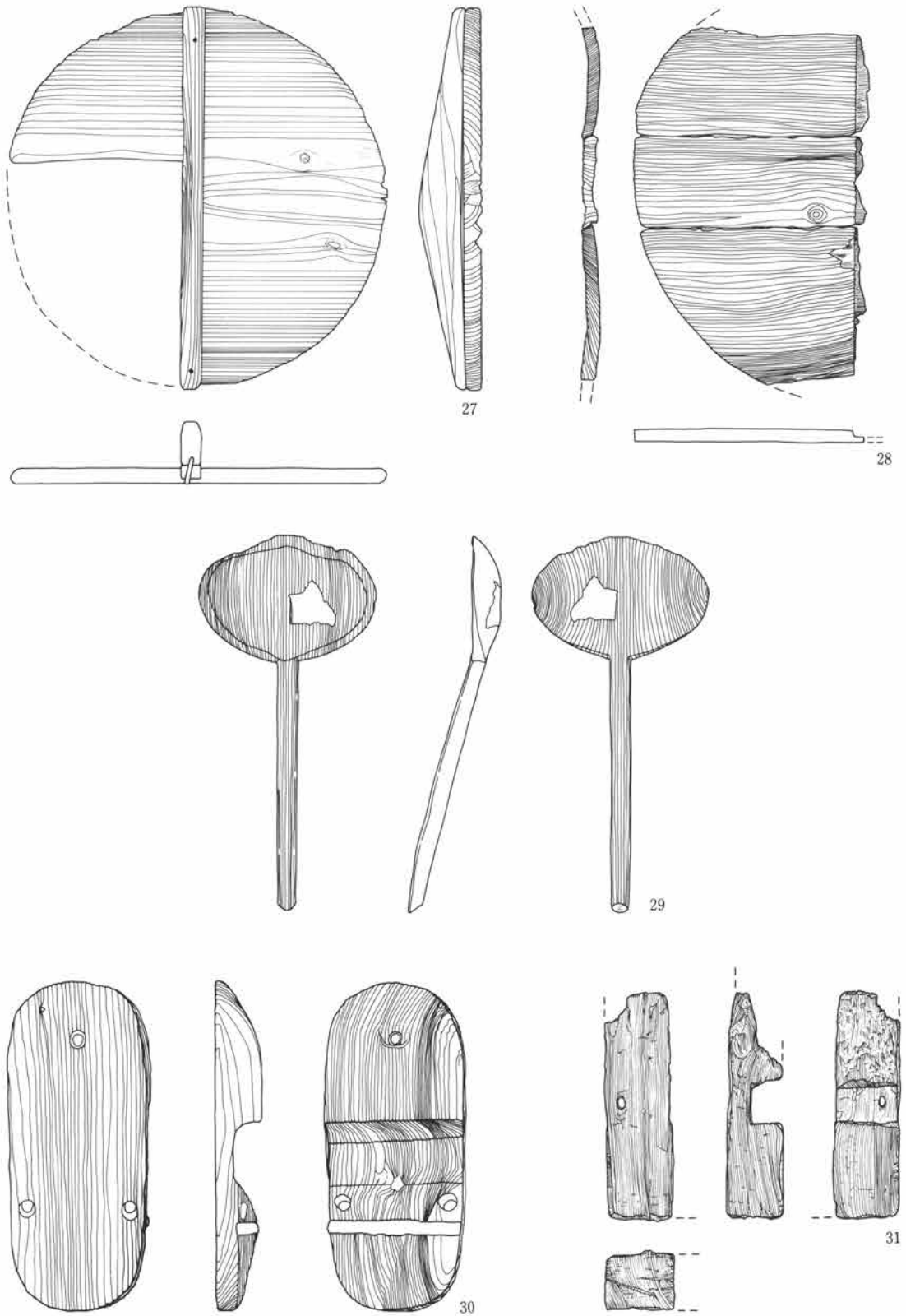
19



第76図 3号溝出土遺物 (4)



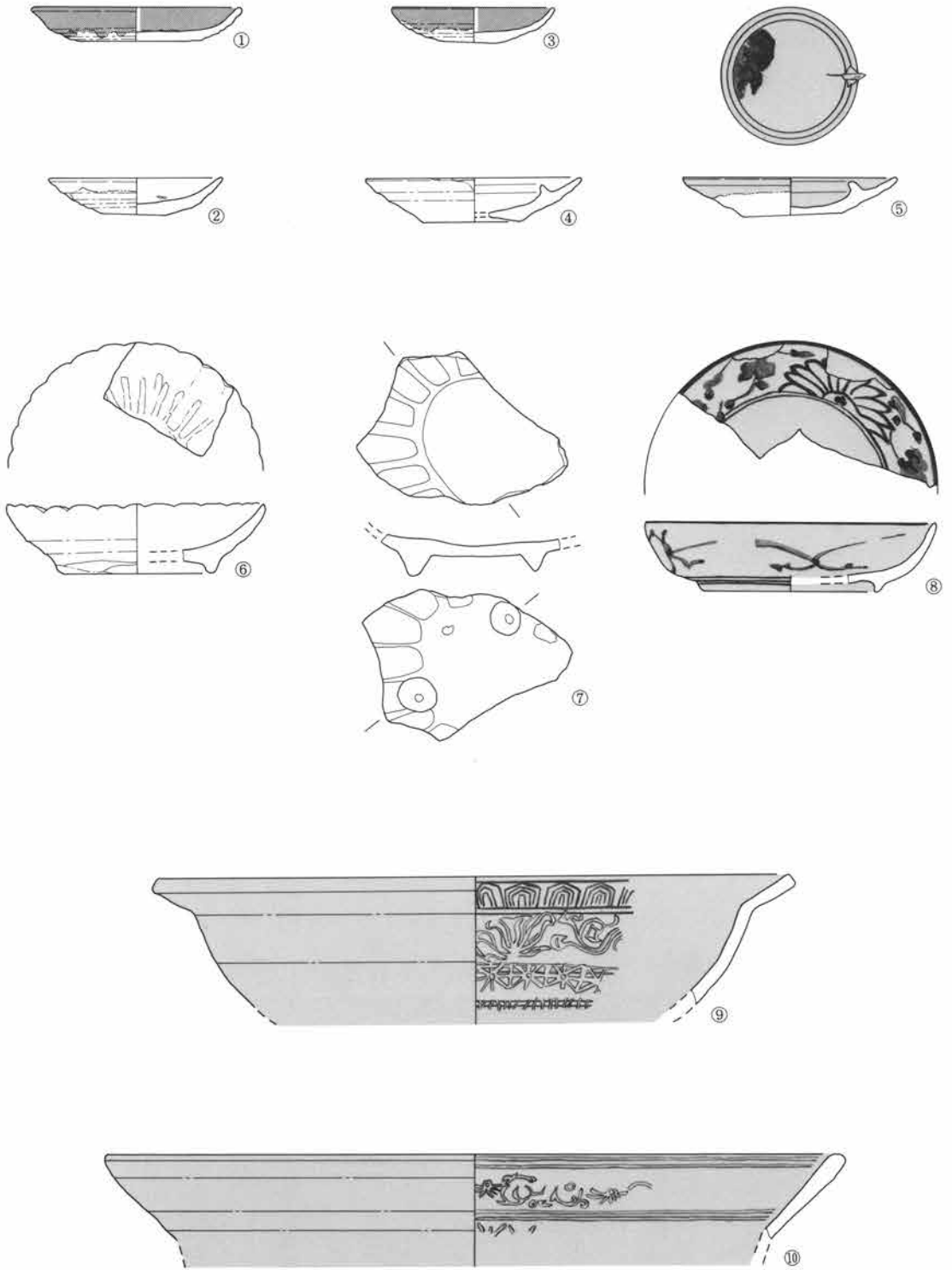
第77図 3号溝出土遺物 (5)



第78図 3号溝出土遺物 (6)

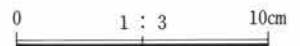
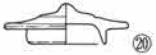
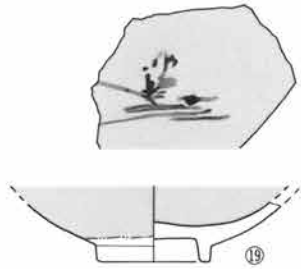
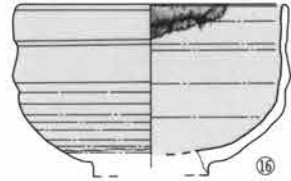
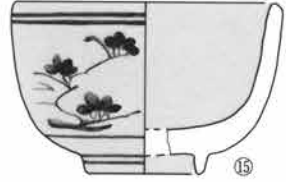
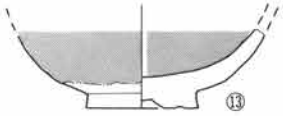
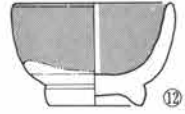
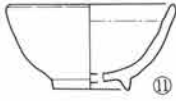
0 1 : 4 15cm



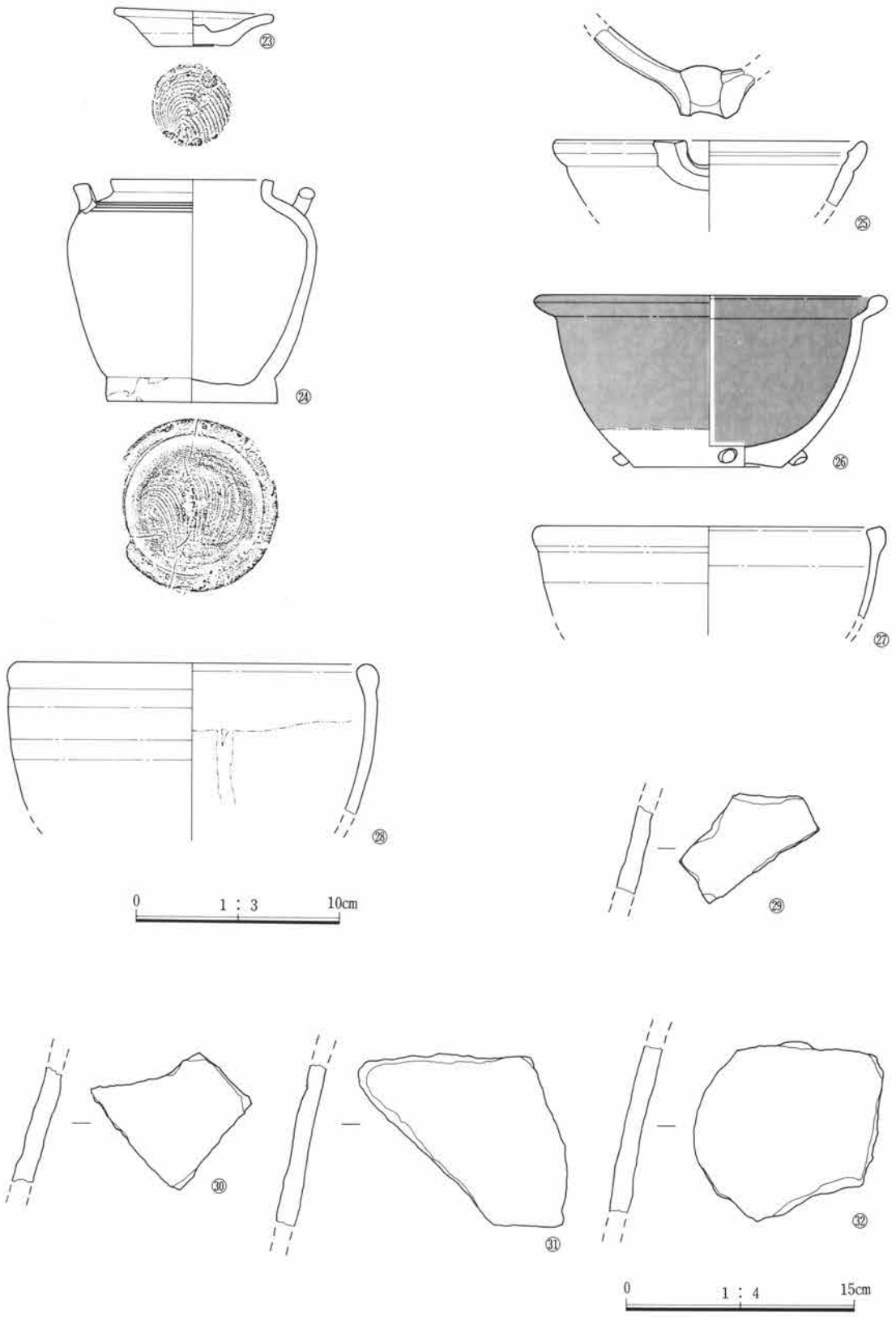


0 1 : 3 10cm

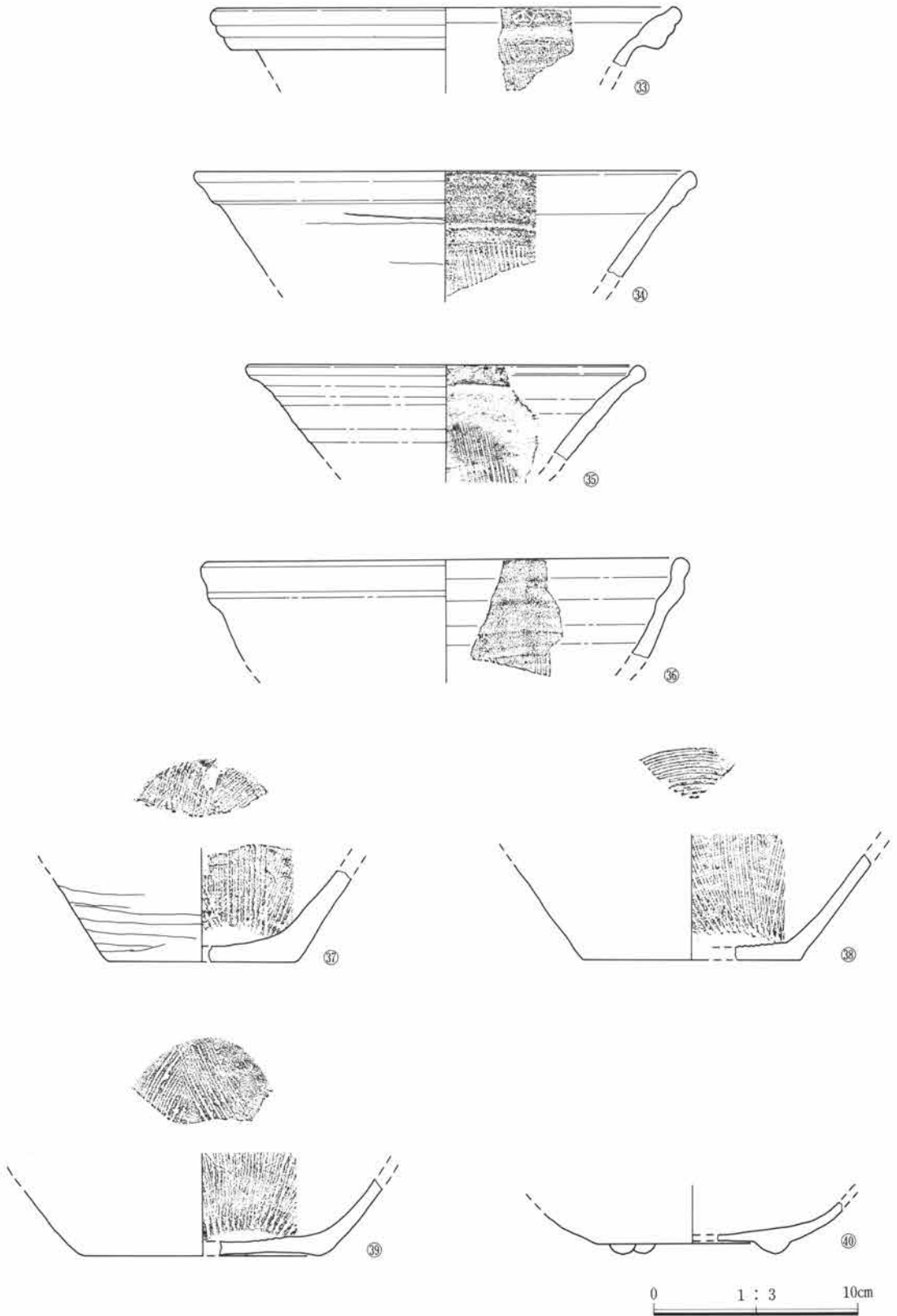
第79図 3号溝出土遺物 (7)



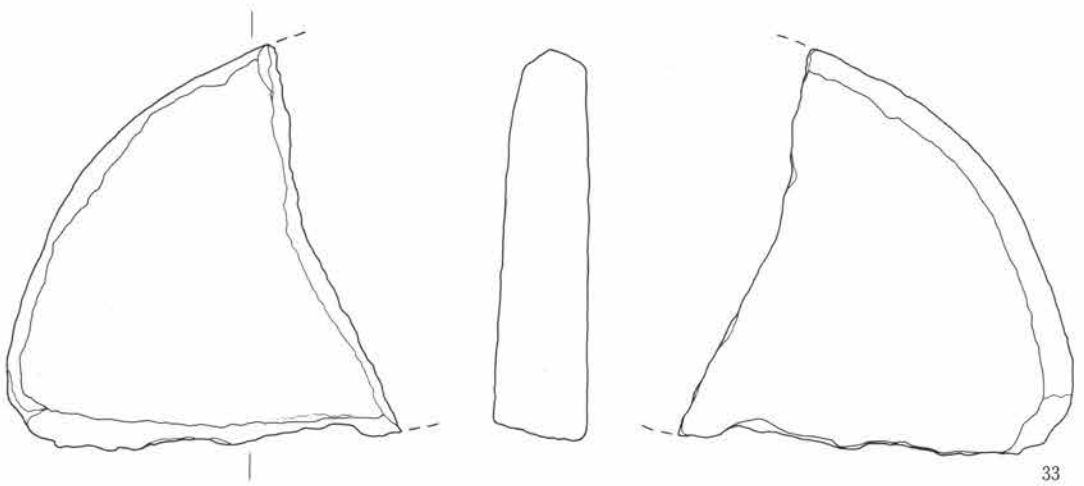
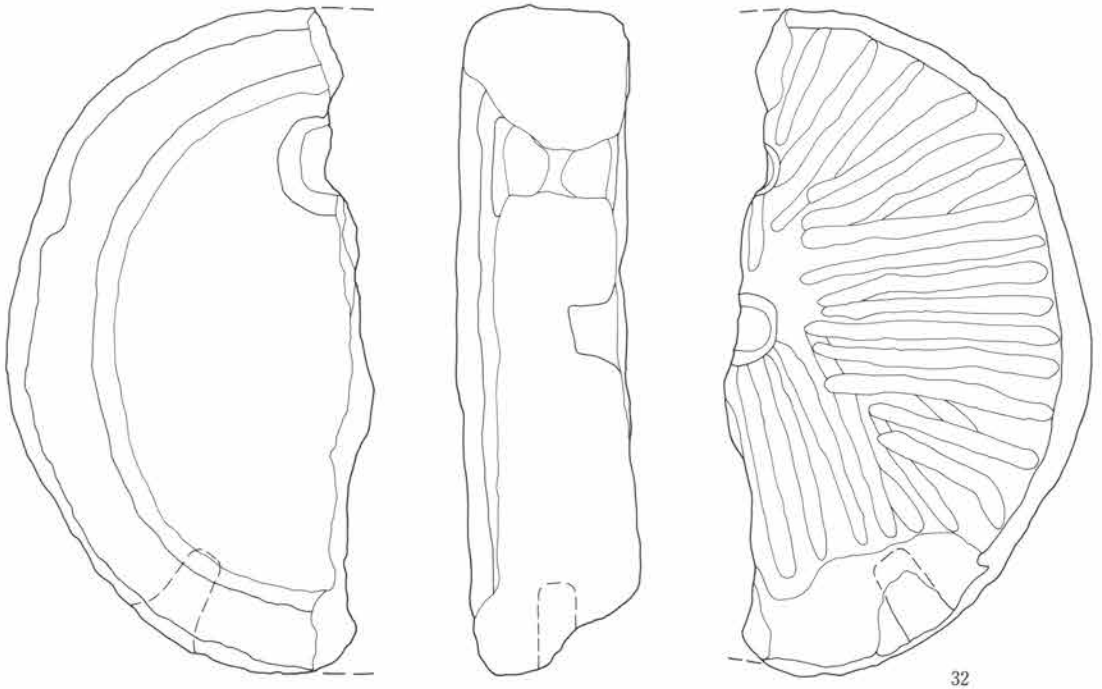
第80図 3号溝出土遺物 (8)



第81図 3号溝出土遺物 (9)



第82図 3号溝出土遺物 (10)

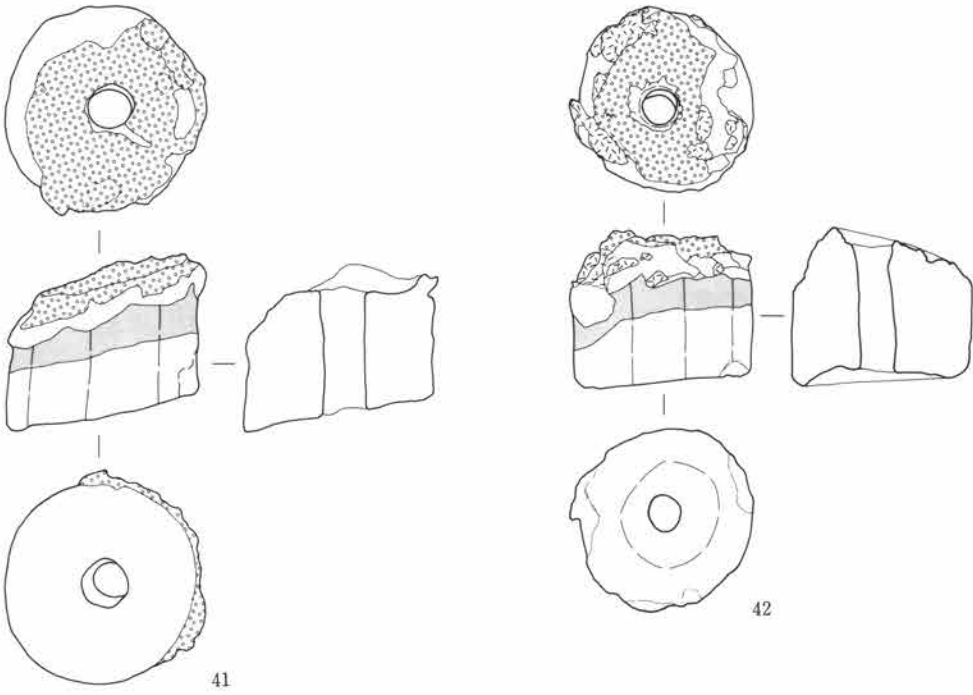
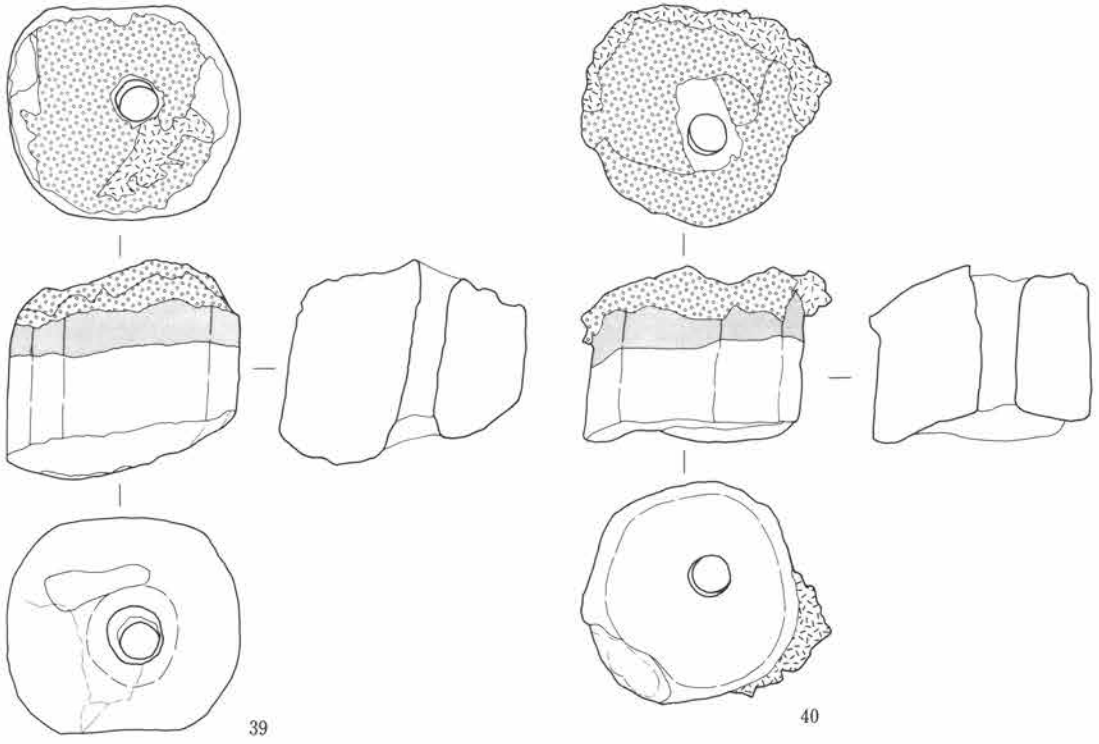


0 1 : 4 15cm

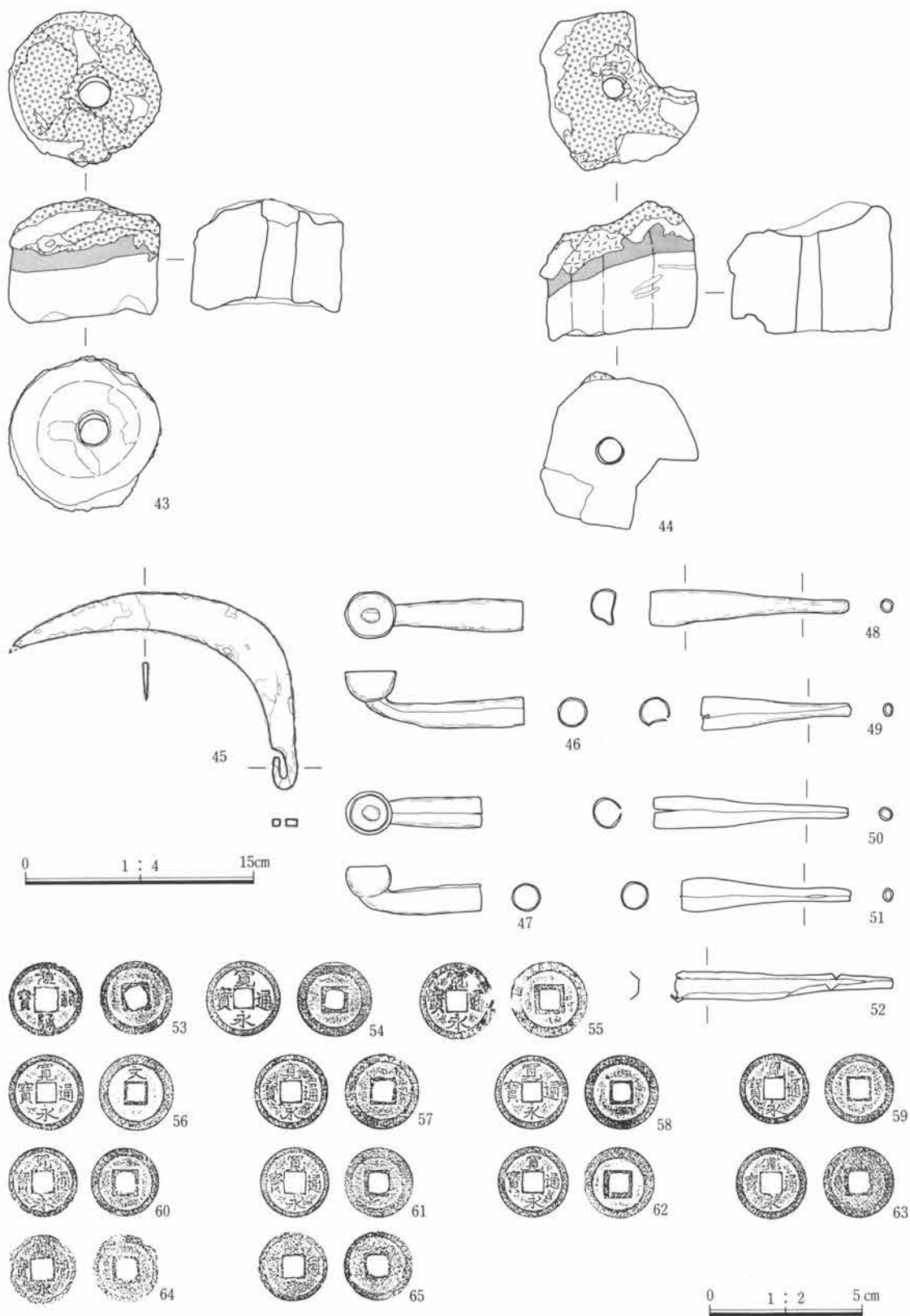
第83図 3号溝出土遺物 (1)



第84図 3号溝出土遺物 (12)



第85図 3号溝出土遺物 (13)



第86図 3号溝出土遺物 (14)



## 4 井戸

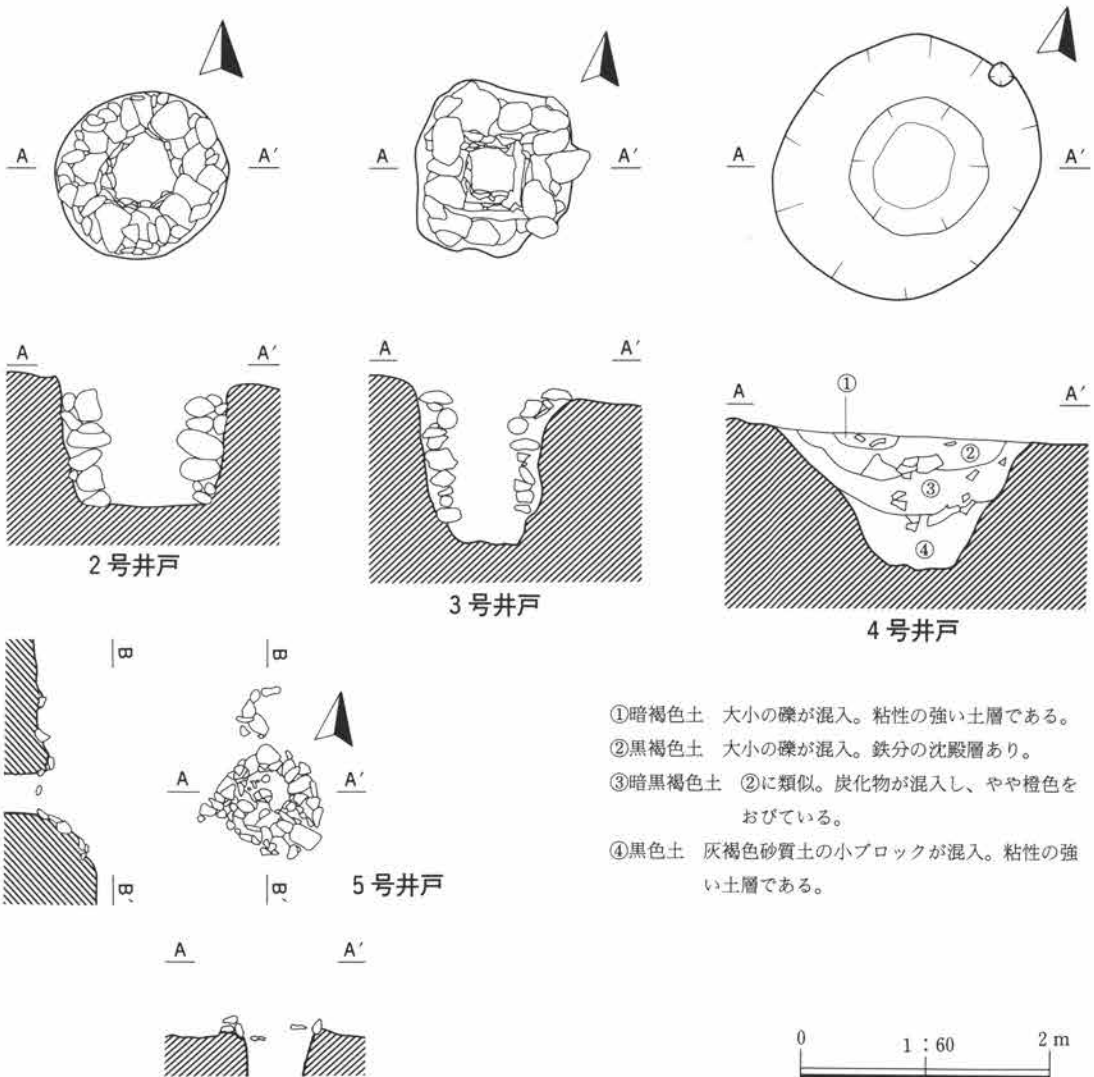
1号井戸および1号土坑は分布位置から、鍛冶屋敷の項の中に記載した。

### 2号井戸 (第87図、図版51-1・54-5)

2区O-19に位置する円形の石組井戸である。石組上端内径は0.66m、下端内径は0.50m。掘形上端径は1.34m、下端径は1.05m。深さは1.04mである。掘形は円筒状をなし、底面より礫を積み上げている。表面の石積みは大きな礫を小口積みに積み上げ、裏込めに小礫を用いている。覆土は粘性の強い黒褐色土で自然に埋没した様相を示す。遺物は出土せず、周辺の遺構・遺物の分布等から時期は近世と考えられる。

### 3号井戸 (第87図、図版51-1・54-6)

2区P-18に位置する方形の石組井戸である。石組上端は0.52m×0.63m、下端は0.35m×0.43m。



- ①暗褐色土 大小の礫が混入。粘性の強い土層である。
- ②黒褐色土 大小の礫が混入。鉄分の沈殿層あり。
- ③暗黒褐色土 ②に類似。炭化物が混入し、やや橙色をおびている。
- ④黒色土 灰褐色砂質土の小ブロックが混入。粘性の強い土層である。

第87図 2～5号井戸

掘形は隅丸方形をなし、上端は1.26m×1.39m、中段は0.65m×0.76m、下端は0.44m×0.48m。深さは1.25mである。底面は素掘りのままで、ほぼ20cm上方に平坦な段を設け丸太材と礫により石組を積み上げている。最下部は丸太材を井桁に組み上げ、その上に大小の礫を小口、平積みを併用しながら積み上げ、上端寄りにも一段の丸太材による枅を組み、さらに礫を積み上げている。覆土は粘性の強い黒色土で自然に埋没した様相を示している。出土遺物としては竹の根の小片が出土しただけである。本井戸も2号井戸同様に近世と考えられ、覆土等の状況から2号井戸より新しいと思われる。

#### 4号井戸（第87図、図版54-7）

2区N-27に位置する円形の素掘りの井戸である。上端径は1.90m×2.12m、下端径は0.58m×0.67mで、深さは1.11mである。断面形はラップ状をなし、覆土には大小の礫が混入し自然に埋没した様相を示す。遺物は出土しなかったが、他の井戸と同様に近世の所産と考えられる。

#### 5号井戸（第87図、図版54-8）

3区O-12に位置する円形の石組井戸である。石組の崩落が激しく、深さも不明である。上端径は現状で1.40m×1.50mである。石積みは小口、平積みを併用し、上端部だけ石を積んでいる。遺物は出土しなかったが、周辺の遺構・遺物の分布状態等から、近世の所産と考えられる。

## 5 土 坑

#### 2号土坑（第88図、図版48-1・55-1）

2区H-24に位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形は箱状をなす。規模は0.98m×0.67m、深さ0.48mで長軸方向はN-58°-Wである。底面ほぼ中央に小ピットがある。近世陶磁器小片3点出土。

#### 3号土坑（第88図、図版48-1・55-2）

2区I-25に位置する。2号土坑に近接し、平・断面形・覆土とも類似する。規模は0.99m×0.62m、深さ0.27mで長軸方向はN-52°-Wである。近世陶磁器小片1点出土。

#### 4号土坑（第88図、図版48-1）

2区F-26に位置し、5号土坑と重複するが前後関係不明。平面形は不整形で、断面形はやや凸凹した丸底状をなす。規模は径1.13m、深さ0.61mである。覆土は4・5号土坑ともにローム小ブロックを少量含む黒色土で、遺物は出土しなかった。

#### 5号土坑（第88図、図版48-1）

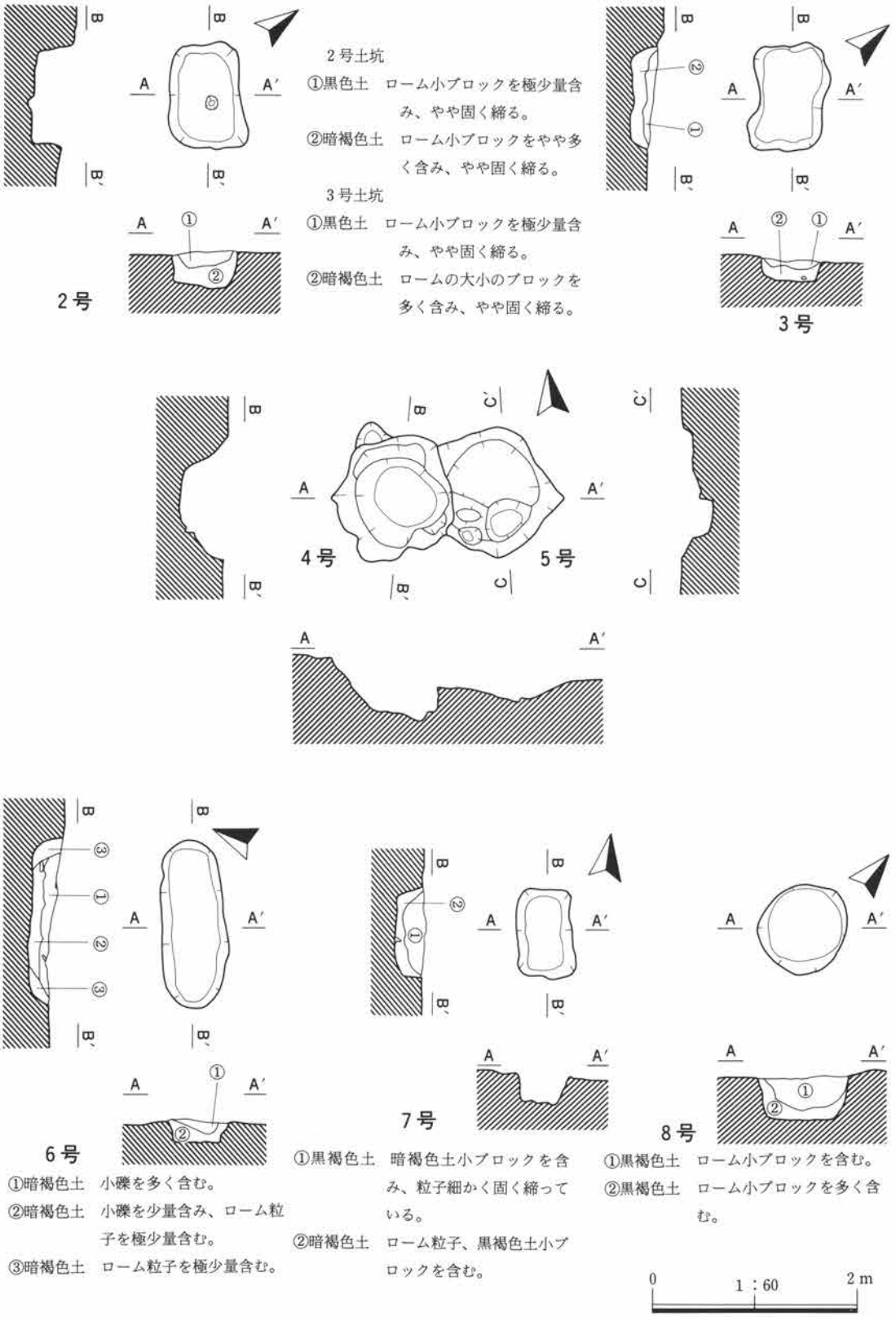
4号土坑と形状等類似。規模は径1.06m、深さ0.40mで、遺物は出土しなかった。

#### 6号土坑（第88図、図版48-1）

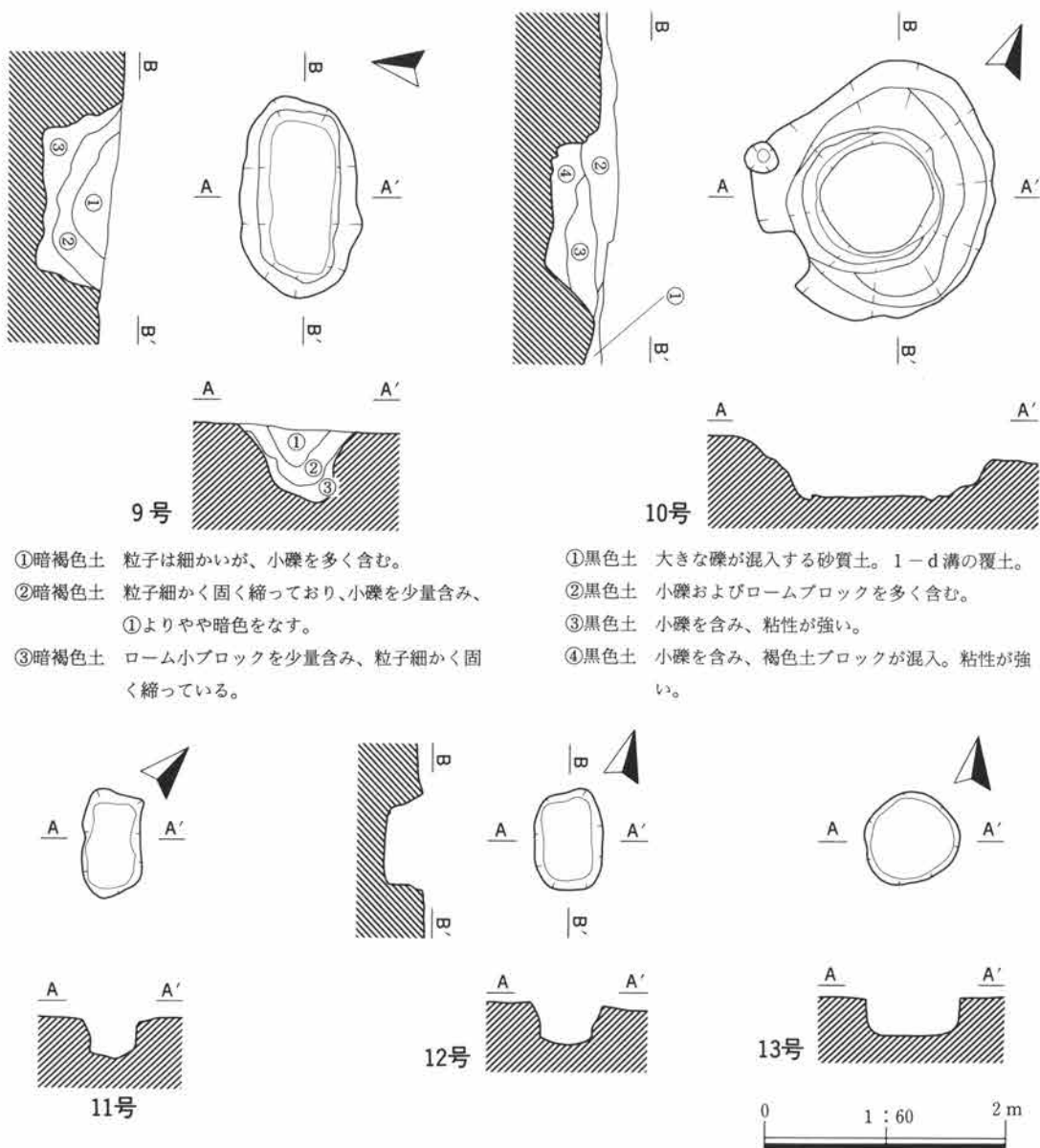
2区H-19に位置する。平面形は長楕円形で、断面形は箱状をなす。規模は1.62m×0.62m、深さ0.35mで長軸方向はN-66°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

#### 7号土坑（第88図、図版48-1）

2区G-22に位置し、形状・覆土等1・2号土坑に類似。規模は0.86m×0.53m、深さ0.31mで長



第88図 2～8号土坑



9号

10号

12号

13号

- ①暗褐色土 粒子は細かいが、小礫を多く含む。
- ②暗褐色土 粒子細かく固く縮っており、小礫を少量含む、①よりやや暗色をなす。
- ③暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む、粒子細かく固く縮っている。

- ①黒色土 大きな礫が混入する砂質土。1-d溝の覆土。
- ②黒色土 小礫およびロームブロックを多く含む。
- ③黒色土 小礫を含み、粘性が強い。
- ④黒色土 小礫を含み、褐色土ブロックが混入。粘性が強い。

第89図 9～13号土坑

軸方向はN-9°-Wを示す。出土遺物なし。

8号土坑 (第88図、図版55-3)

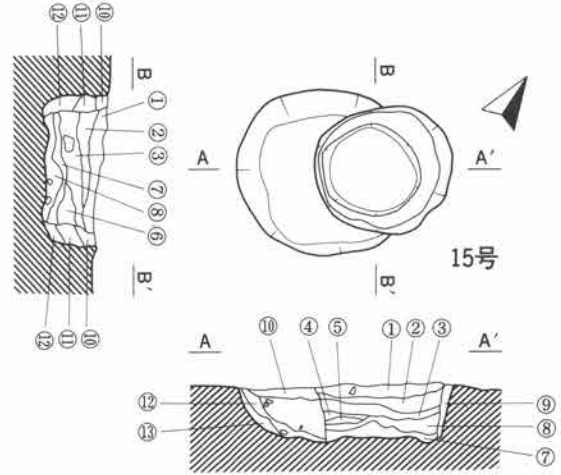
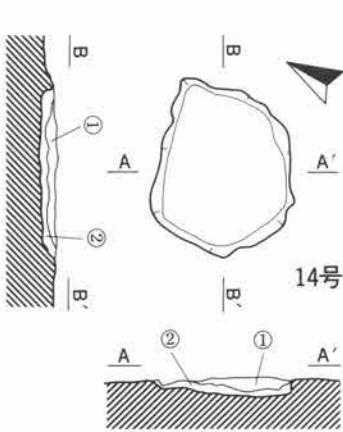
2区G-22に位置する。平面形は円形で、断面形はやや丸みのある箱状をなす。規模は径0.86m、深さ0.43mである。遺物は出土しなかった。

9号土坑 (第89図、図版55-4)

2区G-20に位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形はU字状をなす。規模は1.61m×0.98m、深さ0.71mで長軸方向はN-80°-Eを示す。出土遺物なし。

10号土坑 (第89図、図版55-6)

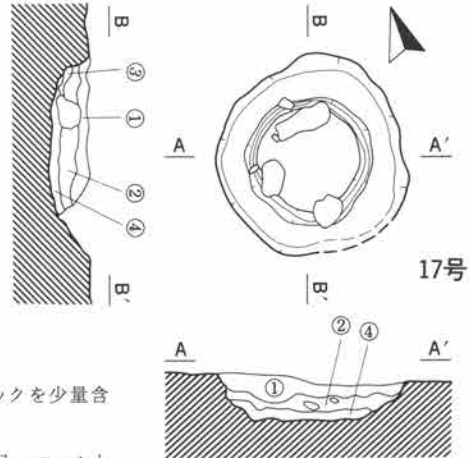
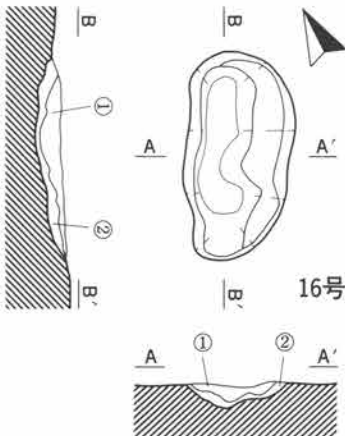
2区S-27に位置し、3号溝に切られる。掘形平面形は不整形円形をなし、底面は平坦で周壁は斜め



- ①褐色土 小礫が多く混入、ローム小ブロックを極少量含む。粒子荒く粘性が弱い。
- ②灰褐色土 小礫が多く混入、ローム小ブロックを少量含む。粒子荒く粘性弱い。

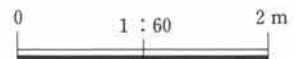
- ①褐色土 小礫が多く混入、ローム小ブロックを少量含む。
- ②暗褐色土 小礫が多く混入、ローム小ブロックを極少量含む。炭化物を多量に含む。
- ③明褐色土 小礫が多く混入、ローム小ブロックを少量含む。
- ④ ②と同様。小礫が少ない。
- ⑤ ③と同様。
- ⑥明褐色土 小礫およびローム大ブロックを多く含む。

- ⑦ ②と同様。小礫が少ない。
- ⑧ ③と同様。ロームが少ない。
- ⑨褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
- ⑩暗褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。
- ⑪褐色土 ロームの大小のブロックを多く含む。
- ⑫明褐色土 ローム大ブロックを多く含む。
- ⑬暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。



- ①黒色土 ローム小ブロックを少量含む。粒子細かく粘性強い。
- ②暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。粒子細かく粘性弱い。

- ①褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- ②明褐色土 大小の礫が混入、ローム小ブロックを少量含む。
- ③黄褐色土 小礫が少量混入。
- ④灰黄褐色土 粘土質のロームが強く固められている。



第90図 14～17号土坑

に立ち上がる。底面には桶のアシの痕跡と考えられる環状の窪みがある。掘形規模は径2.14m、深さ0.54mで、桶アシ痕跡の径は1.03mである。覆土は一挙に埋め戻された様相を示し、遺物は出土しなかった。

11号土坑 (第89図)

2区V-21に位置する。形状・覆土等2・3号土坑に類似。規模は0.87m×0.48m、深さ0.36mで長軸方向はN-45°-Wを示す。出土遺物なし。

12号土坑 (第89図)

2区Q-21に位置する。形状・覆土等は11号土坑と同様である。規模は0.82m×0.48m、深さ0.35mで長軸方向はN-69°-Eを示す。出土遺物なし。

13号土坑 (第89図、図版55-5)

2区Q-18に位置する。形状・覆土等は8号土坑に類似。規模は径0.77m、深さ0.31mである。遺物は出土しなかった。

14号土坑 (第90図)

3区T-04に位置する。平面形は不整隅丸長方形で、断面形は浅い箱状をなす。規模は1.28m×1.07m、深さ0.53mで長軸方向はN-75°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

15号土坑 (第90図、図版55-7)

3区U-02に位置する。掘形は不整楕円形をなし、東壁寄りに桶を設置した痕跡を留める。掘形規模は1.75m×1.25m、深さ0.45mで、桶痕跡のアシの径は0.88m、上端径は1.02mである。桶の周囲は粘質土で固めており、桶内部の覆土は自然に埋没した様相を示す。遺物は出土しなかった。

16号土坑 (第90図)

2区U-32に位置する。平面形は不整長楕円形で、断面形は段のあるU字状をなす。規模は1.62m×0.82m、深さ0.27mで長軸方向はN-27°-Eを示す。出土遺物なし。

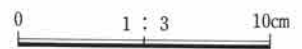
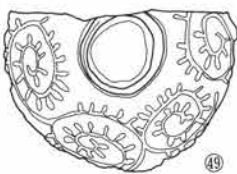
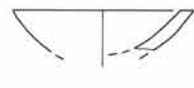
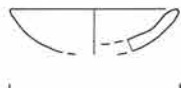
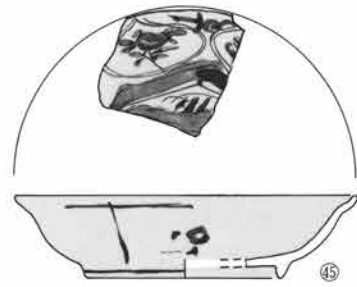
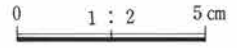
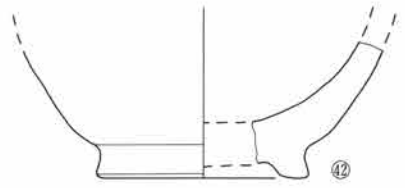
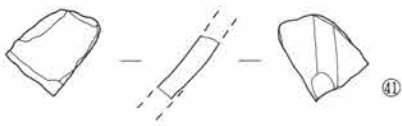
17号土坑 (第90図、図版55-8)

2区V-30に位置する。掘形平面は不整円形で断面形底面に桶のアシ痕跡と考えられる環状の窪みがある。掘形規模は径1.57m、深さ0.37mで、桶アシ痕跡の径は1.00mである。近接する3号柱列は建物群からの目隠しのための柵列の可能性があり。遺物は出土しなかった。

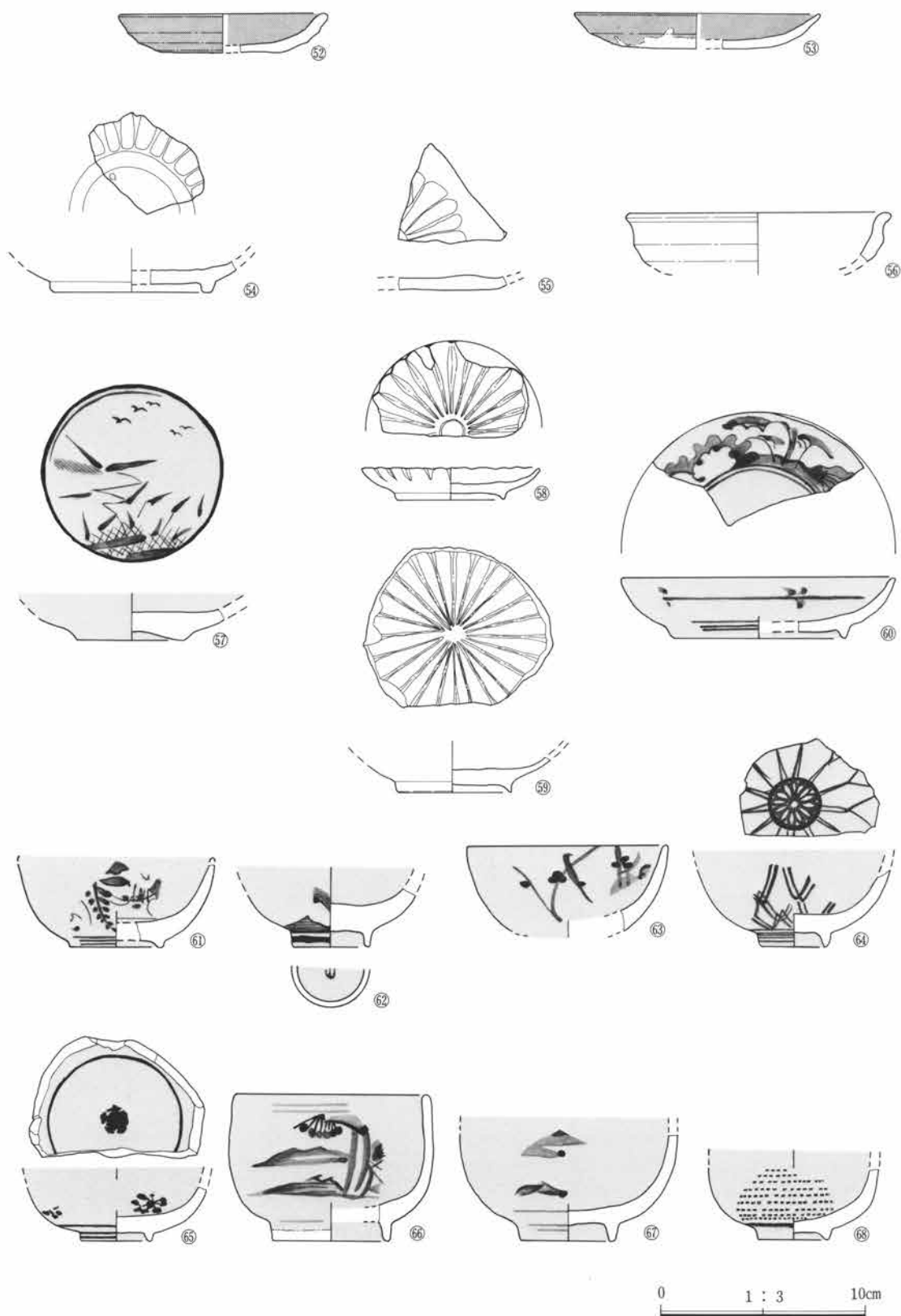
## 6 グリット出土の遺物 (第91~96図、図版71~76)

グリット出土の遺物は中・近世陶磁器、砥石、印型、土製人形、煙管、銭貨等多くの種類と量があり、図示した以外に近・現代の陶磁器類も多く採集されている。

出土した遺物は表面採集も含め、ほとんどが鍛冶屋敷跡周辺および北半調査区の掘立柱建物群周辺から出土しており、明確な出土遺物のない掘立柱建物群や屋敷跡の時期を考える上で、重要な示唆を与えるものである。

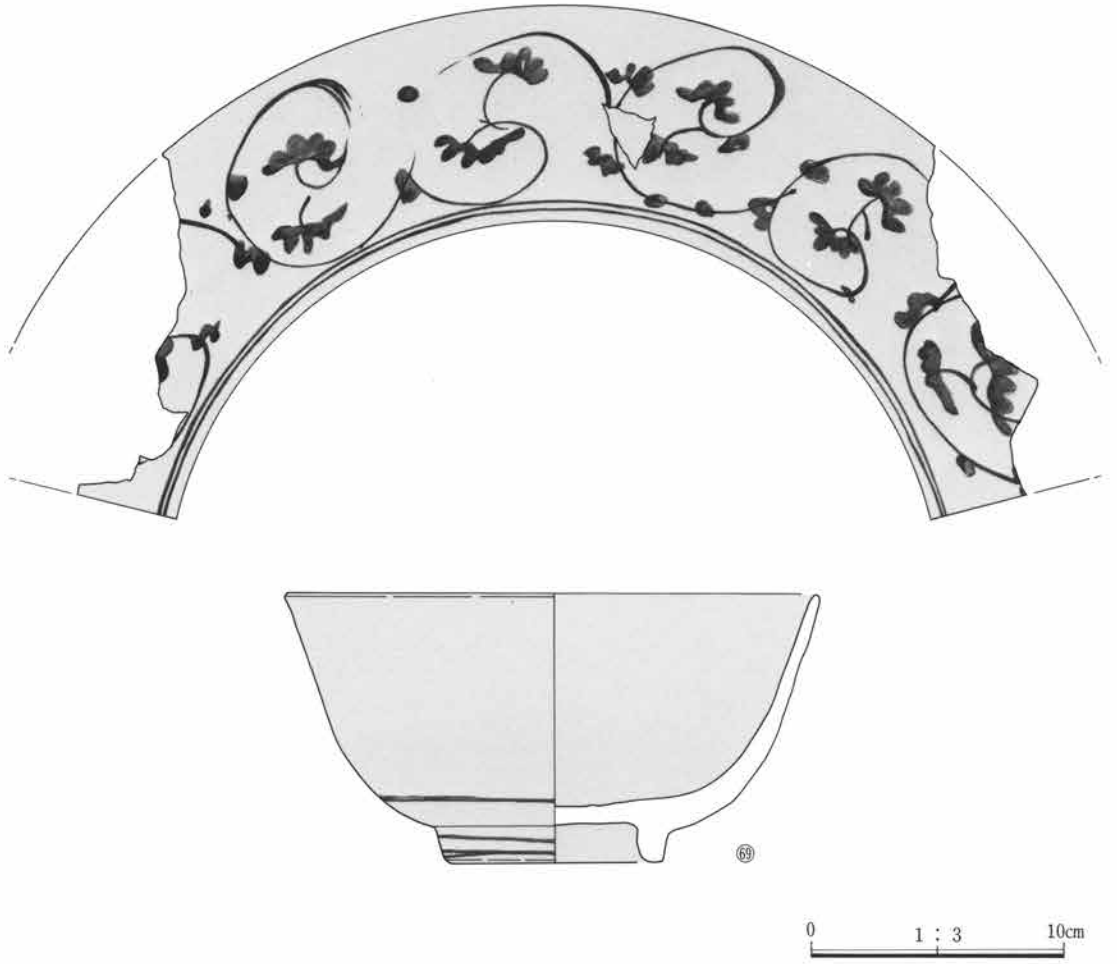


第91図 グリット出土遺物 (1)

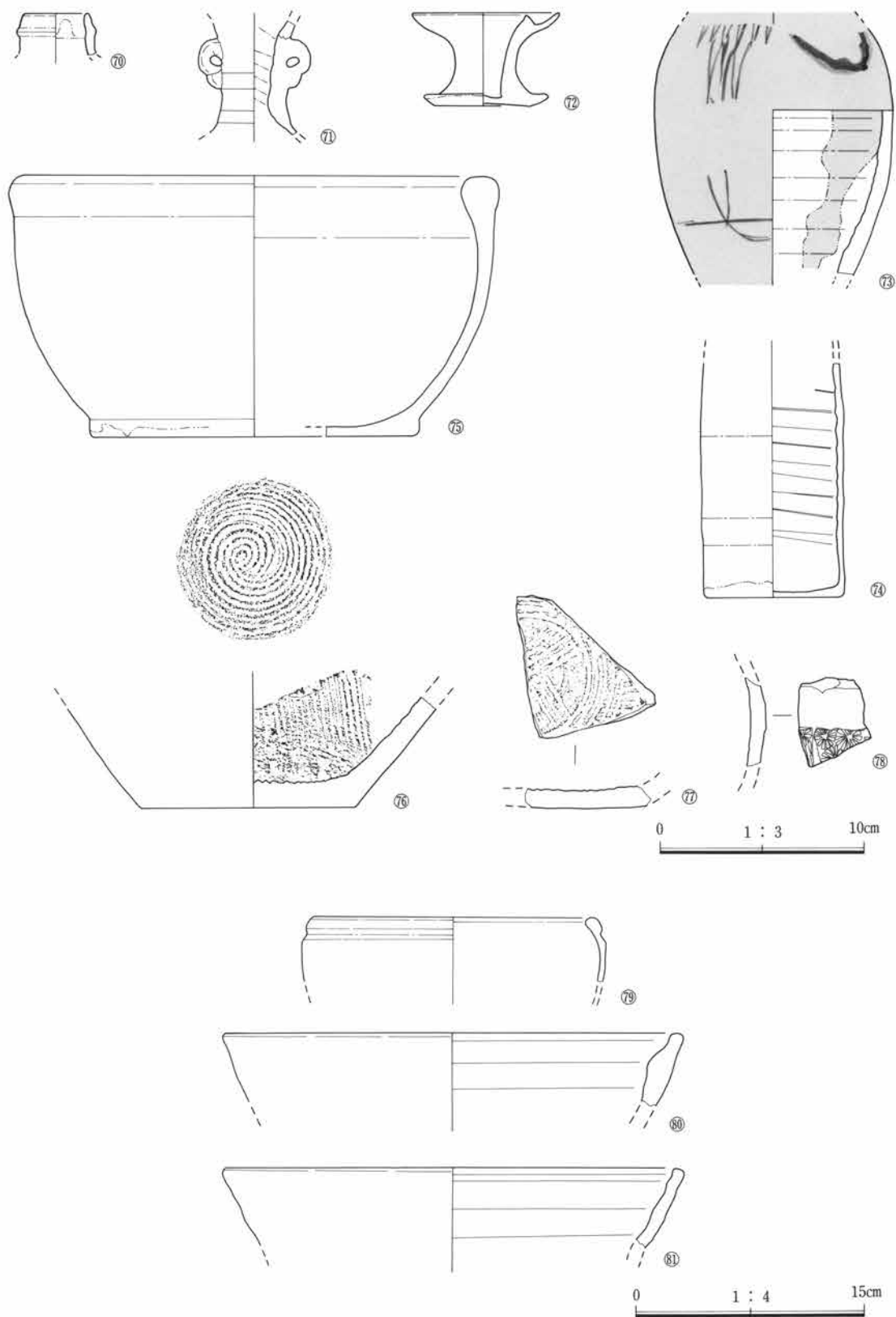


第92図 グリット出土遺物 (2)

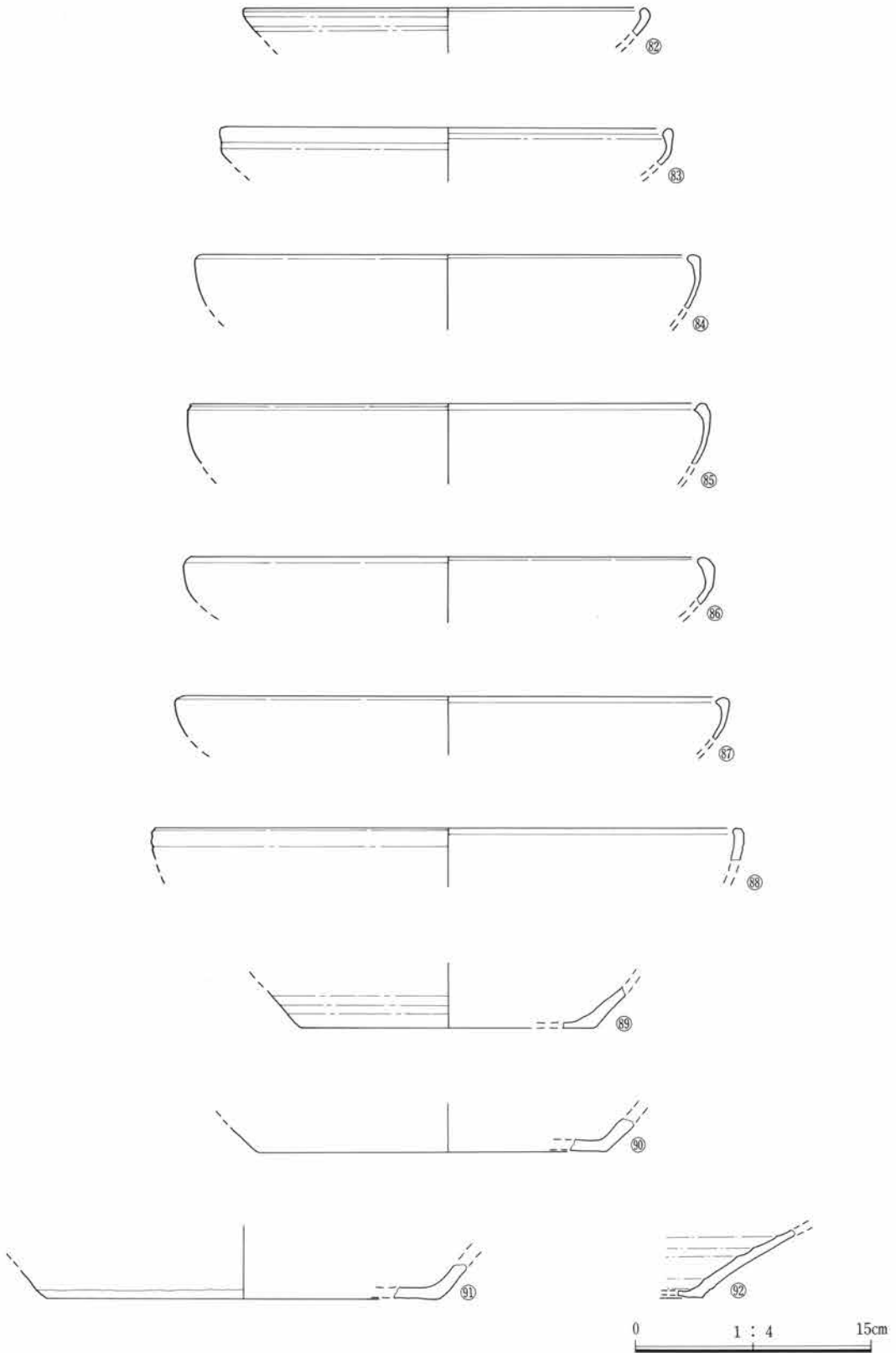




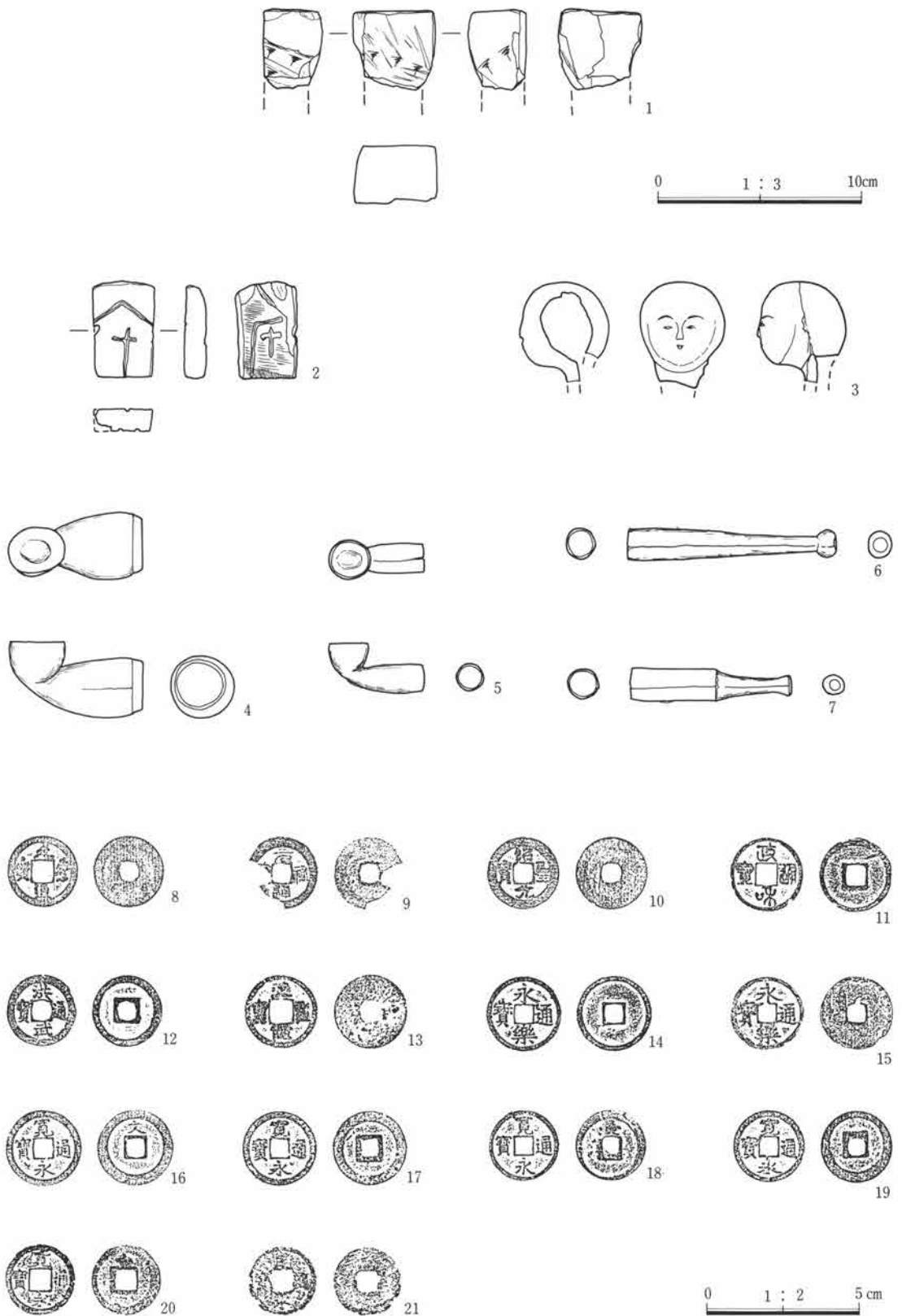
第93図 グリット出土遺物 (3)



第94図 グリット出土遺物 (4)



第95図 グリット出土遺物 (5)



第96図 グリット出土遺物 (6)

## 第4表 洞II遺跡遺物観察表

## 1 平安時代

## ① グリット出土遺物 (第53図、図版56)

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
1	須恵器 杯	3号溝	①½ ②(14.0) ③7.4 ④4.0	砂粒、石英粒、褐色・白色鉍物粒子含む。酸化硬質。黄灰色。	体部下端は丸みを持って立ち上がり、上半は直線的に開き口縁部はそのまま外向する。	底部左回転糸切り無調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部外面細かいロクロ線あり。底部側面に絞り込みがみられる。底部内面に重ね痕あり。
2	須恵器 杯	3号溝	①½ ②(11.0) ③6.0 ④3.9	石英粒、褐色・白色鉍物粒子含む。酸化やや硬質。黄灰色。	体部下半は直線的に立ち上がり、上半はやや丸みをもつ。口縁部はわずかに外反する。	底部左回転糸切り無調整。底部内面に強いヨコナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部外面ロクロ線不明瞭。
3	須恵器 高台椀	3号溝	①½ ②(12.0) ③6.9 ④5.3	小石、石英粒、白色鉍物粒子少し含む。還元硬質。灰白色。	底部には外向する高台が付き体部は丸みを持って立ち上がっている。口縁部はそのまま外向する。	底部回転糸切り無調整。貼付け高台時に糸切り痕周辺ナデ消す。高台貼付け部丁寧なナデ調整。底部内面回転ロクロ線明瞭に残す。
4	須恵器 高台椀	2区F-19	①½ ②(15.4) ③7.0 ④6.0	砂粒、石英粒、褐色・白色鉍物粒子含む。還元やや軟質。灰白色。	底部には直立する高台が付き体部は膨らみを持って立ち上がる。口縁部は外反し端部は肥厚する。	底部右回転糸切り無調整。貼付け高台時に糸切り痕周辺ナデ消す。底部内面に回転ロクロ線明瞭に残す。底部に焼成時のヒビ割れあり。高台貼付け痕明瞭に残す。
5	平瓦	1号溝	①端部小片 厚さ1.6	白色鉍物粒子を含む。還元やや軟質。灰色。	表面に布目痕があり、裏面は素文である。小口面端部が遺存する。	表面には模骨の圧痕があり、さらに布の一部を擦り消している。
6	平瓦	3号溝	①小片 厚さ 1.4	石英粒、白色鉍物粒子を含む。還元硬質。灰色。	表面は布目痕があり、裏面は素文である。	表面の布目の一部を擦り消している。割れ口に自然釉が付着。

## 2 中・近世

## ① 洞II遺跡出土陶磁器 (第79~82・91~95図、図版63~66・71~75)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特 徴	備 考
①	陶器 燈明皿 鉄釉	3号溝 覆 土	口径 (9.6) 底径 5.0 器高 1.5	灰色 硬質 茶褐色	底面は釉のぬぐい取りがなされている他、施釉される。見込み部にトチン痕あり。	製作地不詳 年代不詳
②	陶器 燈明皿 長石釉	3号溝 覆 土	口径 (8.0) 底径 3.0 器高 1.7	灰色 硬質 灰色	体部下半と底面を除き施釉。露胎部に回転篋削りが施される。内面にトチン痕あり。	製作地不詳 年代不詳
③	陶器 燈明皿 鉄釉	3号溝 覆 土	口径 7.4 底径 3.1 器高 1.7	灰色 硬質 茶褐色	底面は釉のぬぐい取りがなされている他施釉される。見込み部にトチン痕あり。	製作地不詳 年代不詳
④	陶器 燈明皿 灰釉	3号溝 覆 土	口径 (10.0) 底径 4.4 器高 2.0	淡灰色 硬質 淡灰色	外面を除き施釉。外面底と体部下半に回転篋削りする。内側に返りを持つ。	瀬戸 19C
⑤	陶器 燈明皿 鉄釉	3号溝 覆 土	口径 (10.0) 底径 (4.5) 器高 1.8	灰色 硬質 黄灰色	外面体部下半、底部が露胎となる。露胎部に回転篋削り痕が明瞭である。	製作地不詳 年代不詳
⑥	陶器 菊皿 灰釉	3号溝 覆 土	口径 (12.0) 高台径 (7.2) 器高 3.2	灰色 硬質 淡緑色	高台端部～内面は露胎となる。内面に、押圧による菊花弁表現がなされている。	美濃・瀬戸 17C
⑦	陶器 足付菊皿 灰釉	3号溝 覆 土	底部片	淡灰色 軟質 淡黄灰色	釉は全面に施され、底面に変形向付の脚部と考えられる小足が付く。皿部には圧痕による菊花弁が施される。	美濃 17C後半
⑧	磁器 皿 染付	3号溝 覆 土	口径 (13.4) 高台径 (8.2) 器高 3.2	白色 軟質 山呉須青色	高台端部を除き施釉。口縁部に口鏝を施す。内面に菊花、外面に唐草文を施す。	伊万里系 18C
⑨	陶器 端折皿 長石釉	3号溝 覆 土	口径 (29.0) 器高 (6.0)	赤褐色 軟質 乳白色	全面に刷毛塗痕あり。端折部内面に剣先文。体部内面に花文、米字状の印文あり。印文の中に白色が入り、全体に薄く白土が及ぶ。	唐津系 18C
⑩	陶器 皿 長石釉	3号溝 覆 土	口径 (34.0) 器高 (3.9)	暗灰色 硬質 淡灰緑色	内面に印文が施され、その中に白土が入る。	唐津系 18C

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
⑪	磁器 小杯 白磁釉	3号溝 覆土	口径 (6.6) 高台径 (3.0) 器高 3.3	灰白色 硬質 乳白色	高台端部を除いて施釉。	伊万里系 17C後半
⑫	陶器 小杯 黄褐釉	3号溝 覆土	口径 (6.0) 高台径 (3.8) 器高 4.1	黄灰色 硬質 黄褐色	体部下半を除き施釉。体部下半に篋削りあり。	製作地不詳 年代不詳
⑬	陶器 天目碗 鉄釉	3号溝 覆土	高台径 (4.5) 器高 (3.0)	淡黄色 並 黒色	外面体部下半、高台部を除いて施釉される。	美濃 18C前半
⑭	陶器 碗 長石釉	3号溝 覆土	高台径 (5.0) 器高 (2.6)	黄灰色 軟質 黄灰色	高台端部を除き施釉。細買入あり。	唐津系 17C後半
⑮	陶器 碗 染付	3号溝 覆土	口径 (10.6) 高台径 (4.6) 器高 6.8	灰色 並 山呉須青色	高台端部を除き全体に施釉。透明釉は淡灰色を帯びる。呉須による唐草文が外面に施されている。	唐津系 18C前半
⑯	陶器 碗 灰釉	3号溝	口径 (10.6) 器高 (6.5)	灰色 硬質 淡灰色	高台ぎわを除き施釉。口縁部下内面、見込みの一部に飴釉～鉄釉調の斑あり。	瀬戸 18C後半
⑰	陶器 碗 長石釉	3号溝 覆土	高台径 (4.5) 器高 (3.3)	灰色 並 淡灰色	体部外面、高台部が露胎となり、他は施釉。外面に鉄絵が施されている。	瀬戸・美濃 19C前半
⑱	磁器 小碗 染付	3号溝	口径 (8.8) 高台径 (4.5) 器高 6.4	白色 硬質 濃青色	外面に人物風景と考えられる施文あり。高台端部を除き全面に施釉。	伊万里系 19C前半
⑲	陶器 鉄絵碗 長石釉	3号溝 覆土	高台径 (4.5) 器高 (2.2)	灰色 硬質 淡黄灰色	高台・体部を除き施釉。内面に鉄絵あり。	京焼系 18・19C
⑳	陶器 蓋 灰釉	3号溝 覆土	口径 5.0 器高 1.5 つまみ径0.8	淡灰色 並 淡灰緑色	蓋物の蓋である。内面を除き施釉。	製作地不詳 年代不詳
㉑	陶器 仏飯器 灰釉	3号溝 覆土	底径 4.0 器高 (2.7)	灰色 軟質 灰色	脚端部下方及びその内面を除いて施釉。	美濃 年代不詳

## 洞Ⅱ遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
㉔	磁器 仏飯器 染付	3号溝 覆土	底径 3.8 器高 (3.5)	白色 軟質 呉須青色	脚部内面、脚端部を除き施釉。露胎部は鉄足状に酸化する。	伊万里系 18C
㉕	陶器 蓋 焼締	3号溝 覆土	底径 7.8 器高 2.0	灰色 硬質	底面に轆轤右回転による糸切痕あり。	瀬戸 19C
㉖	陶器 耳壺 灰釉	3号溝 覆土	口径 8.0 底径 8.4 器高 10.9	黄灰色 並 黄灰色	釉は内面、高台部を除き施釉される。肩部に三条を一単位とする条線帯あり。㉔と共に正位の状態で出土。	瀬戸 19C
㉗	陶器 片口鉢 灰釉	3号溝 覆土	口径 (15.2) 器高 (3.2)	灰色 並 暗褐色	片口部が貼られた鉢である。内外面に施釉。内面に返りあり。	瀬戸 年代不詳
㉘	陶器 足付鉢 鉄釉	3号溝 覆土	口径 (17.2) 底径 (7.2) 器高 8.4	白色 硬質 茶褐色	体部下半を除いて施釉。体部最下端に大豆大の三足が付される。	美濃 18・19C
㉙	陶器 片口鉢 灰釉	3号溝 覆土	口径 (16.0) 器高 (4.5)	黄灰色 並 黄灰色	内外面に施釉。全体に釉がかせる。	美濃 年代不詳
㉚	陶器 鉢 灰釉	3号溝 覆土	口径 (18.0) 器高 (7.3)	黄灰色 並 黄灰色	内面口縁から外面に施釉。口縁部は玉縁様となる。釉調は黄瀬戸風。	美濃 年代不詳
㉛	陶器 大甕 焼締	3号溝 覆土	胴部片	砂粒状 並	内面に紐作り痕と指の圧痕あり。外面に横方向の擦痕あり。酸化気味。	渥美 13・14C
㉜	陶器 大甕 焼締	3号溝 覆土	胴部片	砂粒状 並	内面に紐作り痕と指の圧痕あり。外面に横方向の擦痕あり。酸化気味。	渥美 13・14C
㉝	陶器 大甕 焼締	3号溝 覆土	胴部片	砂粒状 並	内面に紐作り痕と指の圧痕あり。外面に横方向の擦痕あり。酸化気味。	渥美 13・14C
㉞	陶器 大甕 焼締	3号溝 覆土	胴部片	砂粒状 並	内面に紐作り痕と指の圧痕あり。外面に横方向の擦痕あり。酸化気味。	渥美 13・14C
㉟	陶器 播鉢 焼締	3号溝 覆土	口径 (30.0) 器高 (3.8)	赤褐色 硬質	内面に10+αを一単位とする卸し目あり。口縁部内側に「[ ]」の刻印あり。	常滑 年代不詳



番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
③④	陶器 擂鉢 鉄釉	3号溝 覆土	口径 (32.2) 器高 (6.8)	灰色 硬質 茶褐色	全面に施釉。内面に13+ $\alpha$ を一単位とする卸し目あり。	常滑 年代不詳
③⑤	陶器 擂鉢 鉄釉	3号溝 覆土	口径 (26.0) 器高 (6.1)	黄灰色 軟質 茶褐色	全面に施釉。内面に12+ $\alpha$ を一単位とする卸し目あり。	美濃 年代不詳
③⑥	陶器 擂鉢 鉄釉	3号溝 覆土	口径 (32.0) 器高 (6.4)	黄灰色 軟質 茶褐色	全面に施釉。内面に3+ $\alpha$ を一単位とする卸し目あり。	美濃 年代不詳
③⑦	陶器 擂鉢 鉄釉	3号溝 覆土	底径 (12.2) 器高 (5.5)	黄灰色 軟質 褐色	全面に施釉。内面に12+ $\alpha$ を一単位とする卸し目あり。底面に糸切。	美濃 年代不詳
③⑧	陶器 擂鉢 鉄釉	3号溝 覆土	底径 (14.2) 器高 (6.3)	灰色 軟質 茶褐色	全面に施釉。内面に10+ $\alpha$ を一単位とする卸し目あり。底面は轆轤右回転糸切。	美濃 18C
③⑨	陶器 擂鉢 鉄釉	3号溝 覆土	底径 (15.4) 器高 (4.5)	赤褐色 軟質 茶褐色	内面に8+ $\alpha$ を一単位とする卸し目がある。見込み部中央に不定方向の卸し目あり。体部外面は轆轤左回転の篋削りあり。底面に砂付着。	製作地不詳 17・18C
④⑩	軟質陶器 香炉 黒色燻	3号溝 覆土	底径 (9.4) 器高 (1.5)	灰色 硬質	体部下半に平行叩き目が施され、底面に円形の三足が付される。轆轤右回転。	在地製 中世後半以降
④⑪	磁器 碗 青磁釉	表採	体部小片	灰色 軟質 淡緑色	内面に鐏手蓮弁文の凹凸あり。	龍泉窯系 13C
④⑫	磁器 碗 青磁釉	表採	高台径 (5.6) 器高 (3.3)	灰色 硬質 オリーブ色	高台端部を除き施釉。体部外面に不鮮明ながら鐏手蓮弁文様の凹凸あり。発色はすこぶる悪い。	龍泉窯系 14C
④⑬	磁器 大碗 青磁釉	表採	高台径 (7.6) 器高 (5.2)	淡灰色 軟質 淡緑色	高台端部を除き施釉。釉と素地との堺目は生掛けを示す。内面に圏線の段差あり。	龍泉窯系 14C
④⑭	磁器 花生 染付	表採	器高 (7.0) 最大径 (9.0)	白色 硬質 呉須青色	内面は無釉で外面に施釉。外面に草花文を呉須で描く。古染付か伊万里。	景德鎮窯か 伊万里 16・17C

## 洞Ⅱ遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
④⑤	磁器 皿 染付	表採	口径 (13.6) 高台径 (7.6) 器高 3.3	白色 硬質 呉須青色	端折皿、内面に果樹が描かれている。高台端部を除き施釉されている。高台端部に微砂が付着。生掛。古染付か伊万里。	景德鎮窯か伊万里 16・17C初頭
④⑥	磁器 皿 染付	表採	口径 (12.2) 器高 (1.3)	白色 硬質 呉須青色	やや端折の口縁で内面に草花文、外面に圏線と懸垂線が染付される。古染付か伊万里。	景德鎮窯か伊万里 16・17C
④⑦	磁器 鉢 染付	表採	口径 (15.6) 器高 (1.5)	白色 硬質 呉須青色	やや端折の口縁で内面に草花文、外面に圏線と懸垂線が染付される。古染付か伊万里。	景德鎮窯か伊万里 16・17C
④⑧	磁器 皿 染付	表採	高台径 (8.0) 器高 (0.9)	白色 硬質 呉須青色	高台端部を除き施釉される。内面に草花様の図柄あり。	景德鎮窯か伊万里 16・17C
④⑨	磁器 小杯 白磁	2区E- 23	口径 (6.2) 底径 (2.2) 器高 2.0	白色 軟質 白色	体部外面下方を除いて施釉。体部外面に蛸唐草の印文あり。型押し成形。	中国製か伊万里 16・17C
⑤⑩	磁器 小杯 白磁	表採	口径 (4.6) 器高 (1.1)	白色 硬質 白色	型押し成形。外面に鐫文あり。釉は体部外面下方を除き施釉。	中国製か伊万里 16・17C
⑤⑪	磁器 小杯 白磁	2区E- 23	口径 (4.4) 器高 (1.0)	白色 硬質 白色	型押し成形。外面に鐫文あり。釉は体部外面下方を除き施釉。	中国製か伊万里 16・17C
⑤⑫	陶器 燈明皿 鉄釉	表採	口径 (10.2) 底径 (5.0) 器高 1.9	黄灰色 軟質 暗茶褐色	内外面施釉される。外面の体部下半～底面にかけ回転篋削りが施される。	製作地不詳 年代不詳
⑤⑬	陶器 燈明皿 鉄釉	表採	口径 (12.0) 底径 (6.8) 器高 1.7	灰色 硬質 暗茶褐色	外面体部下半を除いて回転篋削り調整される。外面に重ね焼痕あり。	製作地不詳 年代不詳
⑤⑭	陶器 皿 灰釉	2区F- 20	高台径 (8.0) 器高 (1.5)	灰色 並 淡緑色	内面のみ施釉。内面に型押の布目付着。菊花を施す。菊皿。	瀬戸・美濃 17C
⑤⑮	陶器 皿 灰釉	表採	底部片	灰色 並 淡緑色	内外面に施釉。内面に菊花の印文あり。	瀬戸・美濃 16C

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
⑤⑥	陶器 皿 長石釉	表採	口径 (13.0) 器高 (2.4)	淡黄灰色 並 白色	釉を内外面に施す。	美濃 17C
⑤⑦	磁器 皿 染付	表採	底径 5.4 器高 (1.5)	淡灰色 軟質 呉須青色	高台端部を除き施釉。高台端部に砂付着。 見込みに風景の染付あり。	伊万里系 17C
⑤⑧	磁器 皿 白磁	表採	口径 (8.6) 高台径 (5.2) 器高 1.5	白色 硬質 白磁	菊皿で見込みに花卉あり。口縁部に口錆を施す。高台部を除き施釉。	伊万里系 17C
⑤⑨	磁器 皿 白磁	表採	高台径 5.6 器高 (1.5)	白色 軟質 白色	見込みに菊皿24弁あり。高台端部を除き施釉。	伊万里系 17・18C
⑥⑩	磁器 皿 染付	表採	口径 (13.2) 高台径 (8.4) 器高 3.0	白色 並 呉須青色	高台端部を除き施釉。内面に草樹、外面に略した唐草を描く。	伊万里系 18C末～19C初頭
⑥⑪	磁器 碗 染付	2区D-20	高台径 (4.6) 器高 (4.0)	淡灰色 軟質 呉須青色	内外に施釉。外面に下り藤の染付あり。	伊万里系 18C
⑥⑫	磁器 小碗 染付	表採	高台径 (3.6) 器高 (2.5)	白色 軟質 山呉須青色	外面に梅木を描く。高台端部を除き施釉。	伊万里系 18C前半
⑥⑬	磁器 小碗 染付	表採	口径 (9.8) 器高 (4.2)	白色 硬質 山呉須青色	外面に草文あり。内外面施釉。	伊万里系 18C前半
⑥⑭	磁器 碗 染付	表採	高台径 3.2 器高 (3.8)	白色 軟質 呉須淡青色	高台端部を除いて施釉。外面に網代文。内面に放射状の文様と菊花印判あり。	伊万里系 18C前半
⑥⑮	磁器 小碗 染付	表採	高台径 3.4 器高 (2.5)	淡灰白色 並 山呉須青色	高台端部を除き施釉。内面にこんやく判による花文。外面に印判による花文あり。	伊万里系 18C前半
⑥⑯	陶器 碗 染付	表採	口径 (9.4) 高台径 (5.6) 器高 7.1 最大径(10.0)	灰色 軟質 山呉須青色	高台端部を除き施釉。外面に臨海図が描かれる。	唐津系 18C前半

## 洞Ⅱ遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
⑥7	陶器 碗 染付	表採	高台径 (4.6) 器高 (5.2)	灰色 軟質 呉須青色	高台端部を除き施釉。外面に染付施文あり。	唐津系 18C前半
⑥8	陶器 碗 灰・銅釉	表採	高台径 (3.4) 器高 (3.5)	黄灰色 軟質 淡褐色、緑色	内面に緑釉。外面の高台端部を除き淡褐色釉が施される。外面に刺突文あり。	美濃 18C後半
⑥9	陶器 大碗 染付	表採	口径 (21.0) 高台径 8.6 器高 10.6	灰色 軟質 山呉須青色	内面に唐草文、内外面に圏線文を描く。高台端部を除き施釉。高台端部は鉄足状に酸化する。釉は貫入が入る。	唐津系 18C初頭
⑦0	陶器 梅瓶 灰釉	表採	口径 (3.0) 器高 (2.0)	灰色 並 淡緑色	外面のみ施釉される。釉は灰釉。	瀬戸・美濃 15・16C
⑦1	陶器 仏飯瓶 鉛釉	表採	器高 (5.5)	淡黄灰色 軟質 灰色	外面のみ施釉。釉は暗緑褐色を呈す。	美濃 16・17C
⑦2	陶器 乗燭 灰釉	表採	口径 (7.4) 底径 (4.6) 器高 4.5	淡黄灰色 軟質 淡黄灰色	底部を除いて施釉。皿部中央に燈芯受けあり。底面調整は回転篋削りによる。	美濃 年代不詳
⑦3	磁器 德利 染付	表採	胴部片 器高 (11.8) 最大径(11.6)	灰白色 軟質 山呉須青色	外面に丸文を中心とした染付あり。施釉は内面を除いて施される。	伊万里系 17C
⑦4	陶器 德利 淡黄灰色	表採	底径 6.0 器高 (11.5)	灰色 硬質 淡黄灰色	内面と底面を除き施釉。釉は灰釉。内面に轆轤目あり。	製作地不詳 年代不詳
⑦5	陶器 鉢 灰釉	表採	口径 (24.0) 底径 (15.6) 器高 12.7	淡灰色 軟質 淡灰色	底面を除き施釉される。見込み部にトチン痕あり。	製作地不詳 年代不詳
⑦6	陶器 播鉢 鉄釉	表採	底径 (10.0) 器高 (4.8)	黄灰色 軟質 茶褐色	底面の一部を除き施釉される。内面には16+ $\alpha$ を一単位とした卸し目があり、見込み中央を円圏の卸し目とする。底面右回転糸切。	美濃 17・18C
⑦7	陶器 播鉢 焼締	表採	底部小片	灰色 硬質 自然釉	内面に⊕の卸し目あり。	常滑 17・18C
⑦8	軟質陶器 不明。燻焼。	表採	胴部小片	暗褐色 軟質	体部外面に菊花の印文を配す。	在地製 年代不詳

番号	器 種	出土位置	量 目	胎土・焼成・釉調	特 徴	備 考
㉙	軟質陶器 香炉か 燻焼	表採	口縁部小片	夾雑物微・暗褐色 軟質	内面整形はよく遺存する。外面はやや荒れている。	在地製 年代不詳
㊱	軟質陶器 内耳鍋形 燻焼	表採	口縁部小片	夾雑物微・灰色 並	口縁部下、内面に稜がつくため内耳鍋か。	在地製 15・16C
㊲	軟質陶器 内耳鍋形	表採	口縁部小片	夾雑物微・灰色 軟質	口縁部の内外面に横撫が顕著である。燻焼。	在地製 15・16C
㊳	軟質陶器 器種不詳	2区F- 17	口縁部小片	夾雑物微・黒灰色 並	外面に印文あり。割れ口の内部は還元焰焼成の灰色を呈し器表面は燻され黒色を呈す。	在地製 年代不詳
㊴	軟質陶器 鉢状の盤	2区D- 22	口縁部小片	夾雑物微・黒灰色 並	口縁部がやや内傾する。	在地製 年代不詳
㊵	軟質陶器 浅鉢形 燻焼	表採	口縁部小片	夾雑物微・黒灰色 硬質	内外面にしっかりした横撫が見られる。	在地製 年代不詳
㊶	軟質陶器 浅鉢形 燻焼	表採	口縁部小片	夾雑物微・黒灰色 硬質	内外面にしっかりした横撫が見られる。	在地製 年代不詳
㊷	軟質陶器 浅鉢形 燻焼	2区A- 25	口縁部小片	夾雑物微・黒灰色 硬質	内外面にしっかりした横撫が見られる。	在地製 年代不詳
㊸	軟質陶器 浅鉢形 燻焼	2区R- 33	口縁部小片	夾雑物微・黒灰色 硬質	内外面にしっかりした横撫が見られる。	在地製 年代不詳
㊹	軟質陶器 盤形 燻焼	2区A- 25	口縁部小片	夾雑物微・黒灰色 硬質	割れ口の内部は還元焰焼成の灰色を呈し器表面は燻され黒色を呈す。	在地製 年代不詳
㊺	軟質陶器 内耳盤形 燻される	2区R- 33	底部～胴部下 位小片	夾雑物微・黒灰色 硬質	底面に砂付着。内外面に轆轤目あり。割れ口の内部は還元焰焼成の灰色を呈し器表裏面は燻され黒色を呈す。	在地製 年代不詳
㊻	軟質陶器 内耳 燻焼	2区D- 23	底部～胴部下 位小片	夾雑物微・灰色 硬質	内面には横撫がきく。底面に砂が付着。	在地製 年代不詳

番号	器 種	出土位置	量 目	胎土・焼成・釉調	特 徴	備 考
㉑	軟質陶器 内耳 燻焼	2区D- 23	底部～胴部下 位小片	灰色 硬質	内面には横撫がきく。底面に砂が付着。	在地製 年代不詳
㉒	軟質陶器 内耳 燻焼	表採	底部～胴部下 位小片	灰色 硬質	内面上は横撫がきく。底面に砂が付着。	在地製 年代不詳

## ② 鍛冶屋敷跡出土遺物 (第55～57図、図版57・58)

番号	種 類	出土位置	特 徴
1	磨石状台 石	鍛冶屋敷 跡	安山岩。長さ51cm、幅34cm、厚さ15cm、重さ33.2kg。不整楕円形をなし、側面および裏面は自然面のままで、表面は石皿状に中央が浅く窪み研磨されている。
2	鏡	鍛冶屋敷 跡	白銅製。面径10.6cm、重さ149.4g。直角式中縁の円鏡である。縁の高さは0.9cmである。鏡面は一部腐蝕しているが、保存状態は良好で光沢をおびている。鏡背も一部腐蝕しているが、良好である。鈕は亀甲形である。文様は中線二重圏の内側に、双鶴、松、桐などが表現されている。(東京国立博物館の勢多郡新里村大字新川十三塚出土蓬萊文鏡は本資料に類似している。特に、鏡面に「三世安楽富貴自在如意円足」と墨書された蓬萊鏡の松の表現は、葉が鱗状になるなど、本例と極めて類似していると考えられる。)
3	鏡	鍛冶屋敷 跡	白銅製。面径10.6cm、重さ157.0g。柄鏡で柄の長さ3.5cm、幅2.0cmである。柄の先端部の処理は粗雑である。本鏡は円鏡と鏡面を合わせて出土した。そのため、両鏡面の接していた部分が腐蝕しているが、保存状態は良好である。また、図文の鑄上がりは円鏡よりも良好である。鏡背の全面に牡丹の花を配している。また、外縁に沿って「天下一 人見作」という鏡師銘がみられる。(大阪市立博物館「日本の古鏡」展示図録によるならば、柄鏡で鏡背文様が「南天に桔梗紋の図」のものに「天下一 人見」銘がみられる。製作は18c代と考えられている。)
4	羽 口	1号土坑 覆 土	土製品。基部欠損。酸化焙焼成で胎土には砂粒・小石を多量に含む。丸みのある四角形状をなし先端部は斜めの面となっている。長さは現状で9.5cm、径10.3cmで、孔径は2cmである。先端部中央はガラス質状に溶出し、周辺に滓が付着している。先端部から3.3cm～1.2cmは側面が斜めに2次火熱により還元状態となっており、黒灰色をなしている。
5	羽 口	1号土坑 覆 土	土製品。基端部欠損。酸化焙焼成で胎土には砂粒・小石を多量に含む。丸みのある四角形状をなし、先端部はやや斜めの面となっている。長さは現状で15cm、径11.5cmで、孔径は3.8cm～2.6cmで先端部に行くに従って細くなっている。側面には数条のタガの痕跡がある。先端部はガラス質状に溶出し、周辺に滓が付着している。先端部から1cm～2cmは側面が斜めに2次火熱により還元状態となっており、灰色をなしている。

## ③ 3号溝出土遺物 (第73～78・83～86図、図版59～62・67～70)

番号	種類	出土位置	特 徴
1	杭	3-b溝 堰上底面	先端部のみ残存。現状の長さ30.0cm、径4.5cm～5.0cm。芯持ちの丸杭である。先端部を2方向より大きく削っており、先端部断面が長方形をなす。枝払痕がある。
2	杭	3-b溝 堰下底面	先端部のみ残存。現状の長さ41.6cm、径4.0cm～5.3cm。芯持ちの丸杭で樹皮残存。先端部は均等に3面を削り出しており、断面が三角形をなす。
3	杭	3-b溝 堰下底面	先端部のみ残存。現状の長さ41.3cm、径4.6cm～5.0cm。芯持ちの丸杭である。先端部半面は加工せず、他の半面を2面に削り出しており、断面は一辺が丸みを帯びた三角形をなす。基部方向より枝払いを行なっている。
4	杭	3-b溝 堰上底面	先端部のみ残存。現状の長さ23.8cm、幅3.7cm、高さ3.3cm。割材（ミカン割り）を使用。先端部を3方向が大きく削り出した後、端部をさらに細かく加工。断面は三角形をなす。
5	杭	3-b溝 堰上底面	先端部のみ残存。現状の長さ42.3cm、幅7.0cm、高さ5.2cm。半裁材を使用、断面は半円形をなす。先端部は3方向より1面2回ずつ大きく削り出し、さらに端部を細かく加工している。断面は丸みを帯びた三角形をなす。
6	杭	3-b溝 堰下底面	先端部のみ残存。現状の長さ30.4cm、径7.5cm～8.1cm。芯持ちの丸杭である。先端部半面は加工せず、他の半面を3方向より大きく削り出している。断面は半円状をなす。
7	杭	3-b溝 堰上底面	先端部のみ残存。現状の長さ39.7cm、径6.2cm～7.3cm。芯持ちの丸杭である。先端部半面は加工せず、他の半面を3方向より大きく削り出し、さらに端部を細かく加工している。断面は半円状をなす。
8	杭	3-b溝 堰上底面	先端部のみ残存。現状の長さ42.9cm、径6.0cm～8.3cm。芯持ちの丸杭である。先端部半面は加工せず、他の半面を3方向より大きく削り出し、さらに端部を細かく加工している。断面は半円状をなす。先端部両側に枝払いの大きな削り面がある。
9	杭	3-b溝 堰上底面	先端部のみ残存。現状の長さ26.4cm、幅3.8cm、高さ2.5cm。割材を使用、断面は長方形をなす。長方形の辺に合わせて4方向より削り出している。板材の転用か？
10	杭	3-b溝 堰下底面	先端部のみ残存。現状の長さ33.0cm、径6.2cm～6.9cm。芯持ちの丸杭である。先端部は4方向より大きく削り出した後、角の部分を落し、さらに端部を細かく加工。断面はほぼ角の丸い四角形をなす。
11	杭	3-b溝 堰上底面	先端部のみ残存。現状の長さ56.0cm、径6.5cm～7.0cmの芯持ちの丸杭である。先端部は4方向より大きく削り出した後、角の部分を落している。断面は角の丸い四角形をなす。
12	杭	3-b溝 堰上底面	先端部のみ残存。現状の長さ44.5cm、径5.0cm～5.5cm。芯持ちの丸杭である。先端部は4面の削り面のうち、3面は大きく削り出し、残る1面は3回で削り出している。断面は1辺が丸みを帯びた四角形をなす。樹皮が残存し、枝払痕がある。

番号	種類	出土位置	特 徴
13	杭	3-b 溝 堰下底面	先端部のみ残存。現状の長さ52.9cm、径6.0cm。芯持ちの丸杭である。先端部は4面の削り面のうち、3面は大きく削り出し、残る1面は3回で削り出し、さらに端部を細かく加工している。断面は1辺が丸みを帯びた四角形をなす。
14	杭	3-b 溝 堰下底面	先端部のみ残存。現状の長さ31.7cm、径4.2cm~6.1cm。芯持ちの丸杭である。先端部は5方向より削り出しており、断面は五角形をなす。大きな枝払痕がある。
15	杭	3-b 溝 底 面	先端部のみ残存。現状の長さ48.8cm、幅7.0cm、高さ4.1cm。半裁材を使用、断面は半円形をなす。半裁面のみを加工。細かい削りを不規則に加えている。断面は半面は丸く、他の半面は多角形をなす。
16 ・ 17	柱	3-c 溝 上部	端部のみ残存。現状で16は長さ28.9cm、径12.7cm。17は長さ26.0cm、径11.0cm。16・17はともに樹皮を剥いだ丸柱材で、切断面には鋸引きの痕跡がある。16・17は3号溝埋没後、何らかの構造物の柱として使用されたものと思われ、対をなしていた。両者とも一方の端部が自然腐蝕した様相を示している。
18	柱	3-c 溝 堰下覆土	角柱の断片と思われ、1側面のみ残存。現状の長さ28.2cm、幅7.8cm、厚さ6.8cm。端部に柄穴の一部が認められる。
19	柱	3-b 溝 覆 土	4寸×3寸規模の角柱の破片で、縦に裂けている。現状の長さ55.2cm、幅12.3cm、厚さ8.3cm。芯持ち材で、端部に1.6cmの段差を持って直交する2つの柄穴が認められる。
20	樋?	3-b 溝 覆 土	現状の長さ64.0cm、幅14.6cm、厚さ9.4cm、内面溝の幅12.3cm、深さ4.0cm。断面が「U」字状をなし、明確な加工痕はないが、半裁材をくり抜いた様相を示し、樋の可能性はある。
21	板	3-c 溝 堰下覆土	破片で、現状の長さ50.8cm、幅10.5cm、厚さ2.0cmである。柾目で、一部に削痕が見られる。
22	板	3-b・ c 溝覆土	長方形をなし、14.1cm×10cm、厚さ1.5cmで柾目板の切れ端と思われる。
23	板	3-b 溝 覆 土	三角形をなし、17.0cm×8.5cm、厚さ1.5cmで柾目板の切れ端と思われる。
24	桶?	3-b・ c 溝覆土	桶の側板の破片と思われ、1枚は現状で長さ10.8cm、幅5.7cm、厚さ0.9cm。他の1枚は現状で長さ17.6cm、幅4.6cm、厚さ0.8cmである。ともに板目で弧状をなす。また2枚とも内面下端寄りはやや斜めに削られ薄くなっており、端部が丸く抉るように削られている。1枚の側板には径0.8cmの孔があり、木釘で埋められている。
25	桶?	3-c 溝 堰下覆土	桶の底板と思われる破片である。現状の径14.0cm、厚さ1.6cm。板目で周縁部を斜めに削り込んでいる。
26	桶	3-b・ c 溝覆土	桶の底板で $\frac{1}{3}$ が欠損。径19.6cm、厚さ1.2cm、柾目板を使用、周縁部をやや斜めに削り込んでいる。



番号	種類	出土位置	特 徴
27	蓋	3-c 溝 堰下覆土	¼を欠損。蓋の径24.5cm、厚さ1.1cm。把手の長さ24.6cm、高さ2.8cm、厚さ1.3cm。蓋は柱目の1枚作りで、周縁部が丸くなっている。把手との接合部は溝状に削り込まれ、幅1.3cm、厚さ0.9cmの算木が埋め込まれ、その上に山形の把手が取り付けられている。3者の接合は裏面よりほぼ2.5cmの間隔で木釘が打ち込まれている。
28	蓋	3-c 溝 堰下覆土	把手と蓋のほぼ½を欠損。推定径29.6cm、厚さ平均0.8cm。柱目板3枚を合せて作成、周縁部は直角となっている。把手を受ける溝があり、0.4cm削り込まれている。3枚とも歪みが出ている。
29	杓子	3-c 溝 堰下覆土	ほぼ完形。全長24.1cm、柄部の長さ15.9cm、1.3cm角。匙部11.5cm×8.0cm、深さ1.9cm。一木のくり抜きで柱目を使用。柄部は直線で断面は四角形をなし、匙部に浅い角度で取り付く。匙部は楕円形をなし、1.5cmほど皿状に削り抜かれている。
30	下駄	3-c 溝 堰下覆土	完形。長さ21.0cm、幅9.0cm。台の前後は丸く、両横は直線でほぼ平行である。一木造りの削り抜きで後歯だけが差歯である。前歯は台裏を利用し、台先端部から丸みを持って削り抜かれ接地面は平坦となる。後歯は台裏を4方向から山形に削り抜き、頂部に幅0.8cmの差歯を差し込んでいる。差歯は摩耗が著しい。前緒孔は台先端部寄り中央に垂直に穿かれ、台裏の前緒孔の周りは「コ」の字状に削られている。横緒孔は台尻寄りほぼ½の両横にあり、斜めに穿かれている。極めて丁寧な作りの下駄である。
31	下駄	3-c 溝 堰下覆土	台尻寄りの破片である。現状の長さ14.6cm、幅4.3cm。一木造りの削り抜きと思われる。前歯は一部が残存しているだけで形状不明。後歯は角に削り抜かれている。横緒孔が1孔あり、両歯の中央に穿かれている。節もあり作りも雑である。
32	石白	3-c 溝 堰下覆土	安山岩。上白で半分に分れている。径は36.0cm、縁部の厚さは8.8cmである。白の目は六角角と思われるが放射状にやや乱れ、断面は丸溝状となっている。ふくらみは径1.0cmである。中心に芯棒受けがあり、径3.3cm、深さ2.5cmである。供給口の断面は鼓形をなし、上端の方が広がっている。側面には3.0cm角の把手穴がある。
33	磨石	3-c 溝 堰下覆土	緑色変質岩。盤状の河原石を使用、大きく割れている。半円形状をなすと思われ、現状の大きさは32.0cm×31.2cm、厚さ7.4cmである。表裏面とも平坦で良く磨れている。
34	砥石	3-b・ c 溝覆土	凝灰岩。長さ24.1cm、幅8.5cm、厚さ6.3cmで糸巻き状をなす大砥石である。幅の狭い両側面を使用、他の面は作製時の削痕が見られ使用していない。両側面は全面を使用し、研面は内湾し、利手側にやや片減りしている。
35	砥石	3-b・ c 溝覆土	凝灰岩。偏平で長方形をなす破片である。長さは不明であるが、幅5.1cm、厚さ0.9cmである。すべての面を全面使用。表面は平坦であるが、裏面は利手側に片減りしている。裏面の端部寄りには縦方向の短い条痕が集中して見られる。
36	砥石	3-b・ c 溝覆土	凝灰岩。偏平で端部の丸い長方形をなす破片である。長さは不明であるが、幅4.6cm、厚さ1.6cmである。端部を除き他の面は全面使用。表面は中央が溝状に窪んでいる。裏面は端部が盛り上がり、利手側にやや片減りしている。端部は作製時の削痕を残す。
37	砥石	3-b・ c 溝覆土	凝灰岩。長方形をなす端部寄りの小片である。長さは不明、幅4.1cm、厚さ3.0cmである。すべての面を全面使用。表裏面とも大きく内湾し、激しく片減りしている。側面も斜めに磨かれ込んでおり、断面が歪んだ平行四辺形をなす。

番号	種類	出土位置	特徴	特徴
38	硯	3-b・ c溝覆土		粘板岩。長方硯板で硯縁の破損が激しい。長さ12.3cm、幅7.1cm、厚さ1.4cmである。墨堂がわずかに窪んでいる。全体的にやや雑な作りである。
39	羽口	3-b・ c溝覆土		土製品。完形。酸化焙焼成で胎土には砂粒を多量に含む。丸みのある四角形をなし、先端部はやや斜めとなっており、基部は丸みを持つ。長さ11.8cm、径12.4cm×11.3cm、孔径2.4cmである。先端部全面がガラス質状に溶出し、発泡している。先端部からほぼ2.0cm側面が斜めに2次火熱により還元状態となっており、黒灰色をなしている。
40	羽口	3-b・ c溝覆土		土製品。端部欠損。酸化焙焼成で胎土には砂粒、小石を多量に含む。丸みのある四角形をなす。先端部は平坦で、基部は内湾気味に剝落している。現状の長さは9.4cm、径11.3cm、孔径2.2cmである。先端部全面がガラス質状に溶出し発泡しており、周辺に鉄滓が付着している。先端部から1.0cm～2.5cmは側面が2次火熱により還元状態となっており、灰色をなしている。
41	羽口	3-c溝 堰下覆土		土製品。完形。酸化焙焼成で胎土には砂粒を多量に含む。円形で、両端部は斜めとなっている。長さ6.7cm、径10.5cm、孔径2.3cmである。先端部全面がガラス質状に溶出し、発泡している。先端部から1.0cm～2.5cmは側面端部と平行に、2次火熱により還元状態となっており、灰色をなしている。
42	羽口	3-c溝 堰下覆土		土製品。完形。酸化焙焼成で胎土には砂粒を多量に含む。円形で、先端部は斜めとなっており、基部は内湾している。長さ8.4cm、径9.5cm、孔径1.8cmである。先端部は全面がガラス質状に溶出し発泡しており、部分的に鉄滓が付着している。先端部から1.5cm～3.0cmは側面2次火熱により還元状態となっており、灰色をなしている。
43	羽口	3-b・ c溝覆土		土製品。完形。酸化焙焼成で胎土には砂粒を多量に含む。ほぼ円形をなし、先端部は斜めで、基部は内湾している。長さ8.1cm、径9.7cm、孔径2.0cmである。先端部全面がガラス質状に溶出し、発泡しており、周縁に滓が付着。先端部から1.0cm～2.2cmは側面が2次火熱により還元状態となっており、黒灰色をなしている。
44	羽口	3-b・ c溝覆土		土製品。側面一部欠損。酸化焙焼成で胎土には砂粒を多く含む。八角形をなし、先端部は斜めで基部は平坦である。長さ9.1cm、径9.7cm、孔径1.1cm～1.8cmで先端部がやや細くなっている。先端部全面がガラス質状に溶出し、発泡している。先端部からほぼ1.0cmの側面は斜めに2次火熱により還元状態となっており、灰色をなしている。
45	鎌	3-b溝 覆土		鉄製品。完形で刃部でやや折れ曲っている。三日月型をなす薄手で細身の草刈り鎌である。刃先・峯とも緩く湾曲し、尻で大きく直角に近く曲がり、そのまま柄首となる。目釘孔は柄首の基部を細長く逆「し」の字状に折り曲げている。
46	煙管 (雁首)	3-b・ c溝覆土		真鍮製。火皿は径1.6cm、高さ1.1cmで椀形をなす。首部はわずかに湾曲し、長さ5.2cm、径0.9cmである。合せ目が側面にある。
47	煙管 (雁首)	3-b・ c溝覆土		銅製。火皿は径1.4cm、高さ1.0cmで椀形をなす。首部は直線的で長さ4.0cm、径0.9cmである。合せ目が上面にある。
48	煙管 (吸口)	3-b・ c溝覆土		銅製。長さ6.5cm、羅宇との接合部径1.1cm(折れ曲っている)、吸口径0.3cm。羅宇との接合部はわずかに膨らみを持ち、吸口部に向って緩やかに括れ、吸口端部はわずかに膨らみを持つ。

番号	種類	出土位置	特徴	特徴
49	煙管 (吸口)	3-b・ c溝覆土	銅製。長さ4.9cm、羅字との接合部径1.0cm(折れ曲っている。)、吸口径0.5cm。羅字との接合部は直線的で、吸口に向って緩やかに括れ、吸口部はやや膨らみを持つ。	
50	煙管 (吸口)	3-b・ c溝覆土	真鍮製。長さ6.3cm、羅字との接合部径1.0cm、吸口径0.4cm。羅字との接合部は直線的で、吸口に向って緩やかに括れ、吸口部はわずかに膨らみを持つ。	
51	煙管 (吸口)	3-b・ c溝覆土	銅製。長さ5.5cm、羅字との接合部径0.9cm、吸口径0.4cm。羅字との接合部はやや膨らみを持ち吸口部に向って緩やかに括れている。	
52	不明	3-b・ c溝覆土	真鍮製。現状の長さ7.1cm、幅0.9cmで折れている。「コ」の字状に端部を折り曲げている。	
53	銭貨	3-b・ c溝覆土	元符通寶(篆)。銅製。年代、北宋 元符元年 1098年。	
54 55 65	銭貨	3-b・ c溝覆土	寛永通寶。銅製。	

## ④ グリット出土遺物(第96図、図版76)

番号	種類	出土位置	特徴	特徴
1	砥石	2区E- 21 I層	凝灰岩。端部寄りの小片である。長さは不明、幅3.7cm、厚さ2.8cm。4面を使用、端部は使用しておらず、作製時の削痕が見られる。4面とも湾曲が激しく、段が付いており雑な使用である。	
2	印型	2区E- 22 II層	粘板岩? 長方形をなし、長さ3.0cm、幅1.9cm、厚さ0.7cmである。片面に山十、片面に鍵十を刻んでいる。	
3	泥人形	表採	土製。頭部のみ的小片。酸化焙焼成で緻密な胎土である。製作は表裏2つの型合せによる。	
4	煙管 (雁首)	2区F- 22 I層	銅製。火皿は径1.7cm、高さ1.3cmで椀形をなす。首部は大きく湾曲し、長さ4.0cm、径2.1cmで長さに比し径が大きく、羅字との接合部寄りが大きく膨らみ最大径をなす。羅字との接合部は1.5cmで段を設けている。合せ目が側面にある。	
5	煙管 (雁首)	2区H- 22 II層	銅製。火皿は径1.3cm、高さ0.9cmで椀形をなす。首部は長さ2.9cm、径0.9cmで直線的である。合せ目が上面にある。	
6	煙管 (吸口)	表採	銅製。長さ6.8cm、羅字との接合部径0.9cmである。羅字との接合部寄りは円筒状で、吸口部に向って直線的に細くなり、吸口部は径0.9cmの球形をなす。合せ目やヤスリ目が明瞭に見られる。	
7	煙管 (吸口)	2区F- 21 II層	銅製。長さ5.2cm、羅字との接合部径1.0cmである。羅字との接合部寄りは円筒状をなし、吸口部寄りは細く括れ、両者の間は段を持つ。	

## 洞II遺跡 遺物観察表

番号	種類	出土位置	特 徴
8	銭貨	表採	元豊通寶（真）。銅製。年代 北宋 元豊元年 1078年。
9	銭貨	2区F-22 II層	元祐通寶（篆）。銅製。年代 北宋 元祐元年 1086年。
10	銭貨	2区D-22 II層	紹聖元寶（真）。銅製。年代 北宋 紹聖元年 1094年。
11	銭貨	2区F-22 II層	政和通寶（篆）。銅製。年代 北宋 政和元年 1111年。
12	銭貨	2区N-23 III層	洪武通寶。銅製。年代 明 洪武元年 1368年。
13	銭貨	2区F-22 II層	銅製。渡来銭と思われる。
14	銭貨	2区F-22 II層	永楽通寶。銅製。年代 明 永楽六年 1408年。
15	銭貨	2区E-22 II層	永楽通寶。銅製。年代 明 永楽六年 1408年。
16 { 21	銭貨	2区F-22 II層	寛永通寶。銅製。No16・19・21 表採。No17・18 2区F-22 II層。No20 2区A-26 I層。

# 洞 III 遺跡



## 第Ⅷ章 洞Ⅲ 遺跡

### 第Ⅰ節 概要

洞Ⅲ遺跡は利根川右岸の上位段丘面にあり、北を古城沢、南を八幡沢に連なる谷地にはさまれた南北に走る幅約100mの台地上に立地し、本遺跡の西には古窯跡の所在する寺山や洞山が南北に連なっている。また本遺跡の立地する台地の東端は利根川右岸段丘面の上下の境となっており比高差約6mの段丘崖が南北に走っている。この段丘崖下の下位段丘面には本遺跡と同様に八幡沢と古城沢にはさまれた台地上に小川城址が築かれている。

洞Ⅲ遺跡で確認された中心的な遺構・遺物は平安時代と中・近世の時期のもので、縄文時代の遺物も少量出土したが遺構は不明である。また、この他の時期の遺構・遺物は確認されなかった。

平安時代の遺構としては堅穴住居跡5軒と土坑6基がある。住居跡の時期は9世紀～10世紀前半に位置付けられ、同様の時期である土坑の中には粘土採掘坑と考えられるものがある。

これらの遺構は2号住居跡と2号土坑の2基だけが台地の北端に位置し他は台地の南半に分布し、台地中央部には遺構は存在していない。平安時代の遺構は台地に沿ってさらに東西に延びると推定される。

洞Ⅲ遺跡の平安時代の遺構は須恵器生産工人集落である近接する藪田・藪田東遺跡と同時期であり、出土遺物や遺構の内容からも密接な関係にある集落址と考えられる。

中・近世の遺構としては掘立柱建物94軒、柱列16列、溝3条（他に現在の水路に平行した近代の溝1条もある。）、井戸2基、土坑40基が確認された。また、遺物としては16・17世紀を中心とした陶磁器類が多く出土しており、舶載青磁類も数多く出土している。他には石臼・石鉢・砥石・法篋印塔・板碑等の石製品や、羽口等の土製品、銭貨・煙管・小柄等の金属製品等があり、掘立柱建物群に伴う生活用具が数多く出土している。

掘立柱建物は調査区の全面に拡がって確認された。建物群は溝や調査区中央を東西に横切り小川城で通ずる道によって区画され、特に南半の建物群は激しく重複している。掘立柱建物は確認された柱穴の数からするとさらに多くの建物があったと推定され、中世から近世にかけて連綿と居住していたものと考えられる。

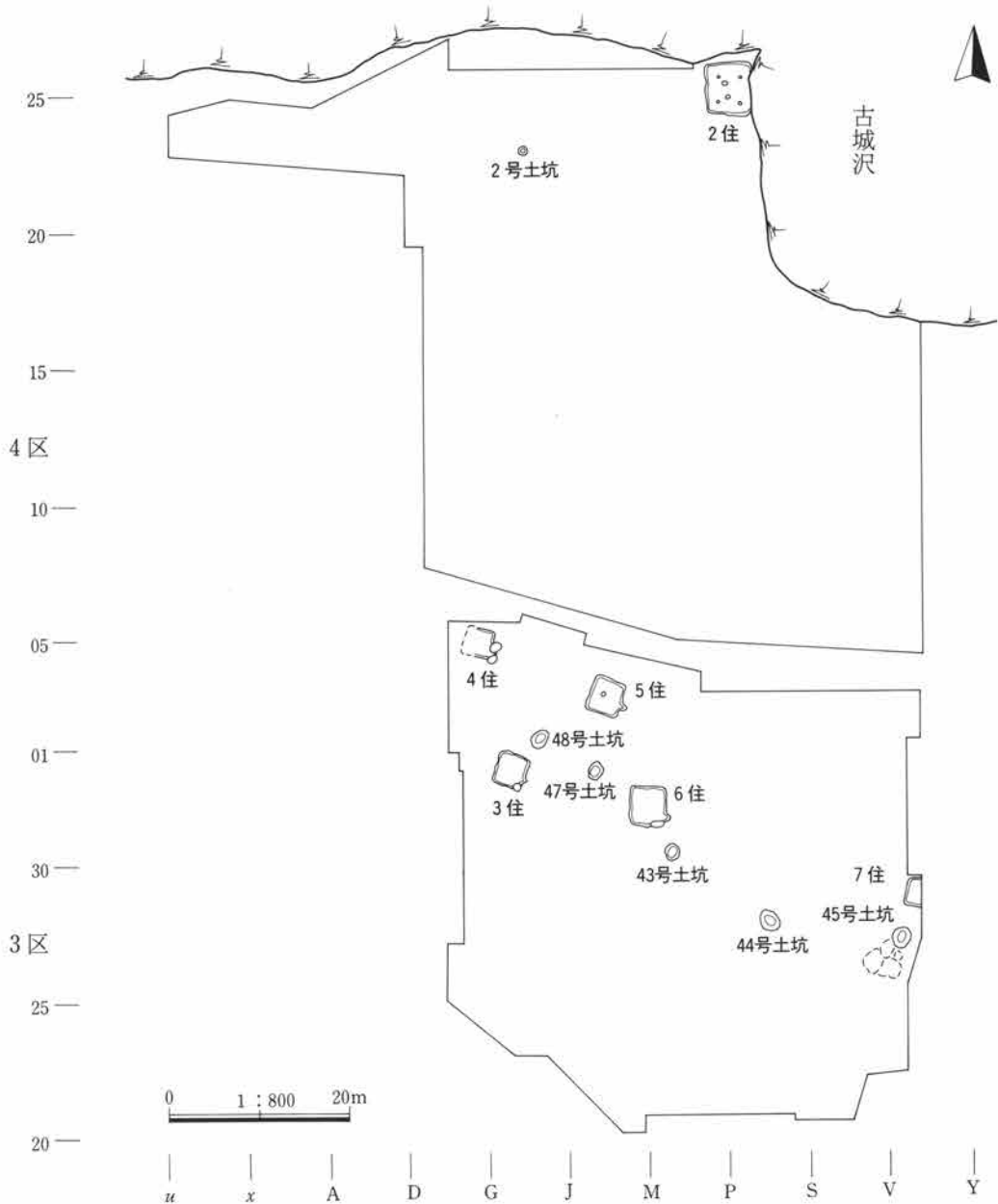
確認された溝は掘立柱建物群と密接な関係にあり、北半にある1号溝は南北に走向し北半建物群を2分している。台地中央部をL字状に走る2号溝は中世に位置付けられ、小川城築城以前の居館址の溝と考えられ掘立柱建物の中には中世居館址に伴うものもあると考えられる。また調査区南端を東西に走向する3号溝は谷地と台地との境界を走向している。

洞Ⅲ遺跡は段丘崖を境界にして小川城二の丸に接し、时期的にも小川城の推移と平行する部分があり、一連の地形にある小川城のなんらかの外郭に相当する遺跡であり、掘立柱建物の多くは小川城の外郭を構成する建物とみられる。また、小川城築城以前の中世居館址は地形および地割等から1町四方程度の規模が推定される。

## 第2節 平安時代の遺構と遺物

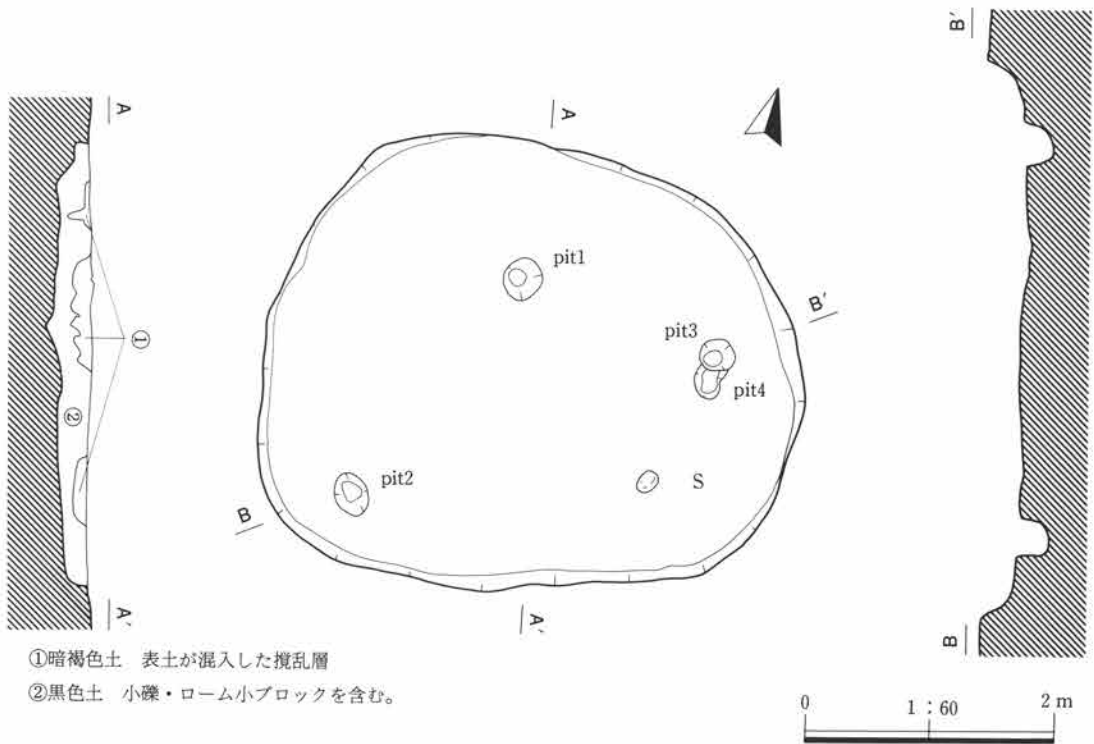
### 1 住居跡

平安時代の住居跡として番号を付けた遺構は7基あるが、内2基は後世の遺物が出土したり住居跡としての根拠がなく中・近世に属する遺構であった。5軒の住居跡は9世紀～10世紀前半に比定され粘土採掘坑も周辺に分布しており、藪田・藪田東遺跡と同様に須恵器生産工人の集落と考えられる。



第97図 洞Ⅲ遺跡平安時代遺構分布図





第98図 1号住居跡

### 1号住居跡（第98図、図版83-1）

4区U-01に位置し72・74号掘立柱建物と重複する。平面形は不整楕円形をなす。規模は長軸4.33m、短軸3.50mで長軸方向はN-78°-Eを示す。

覆土は自然に埋没した様相を示し、底面はわずかに凸凹のある皿状をなし4本の柱穴があるがこれは掘立柱建物の柱穴である。遺物としては平安時代の杯・甕の小片が10点ほど出土しているが、縄文時代の剝片や舶載青磁碗片も出土した。

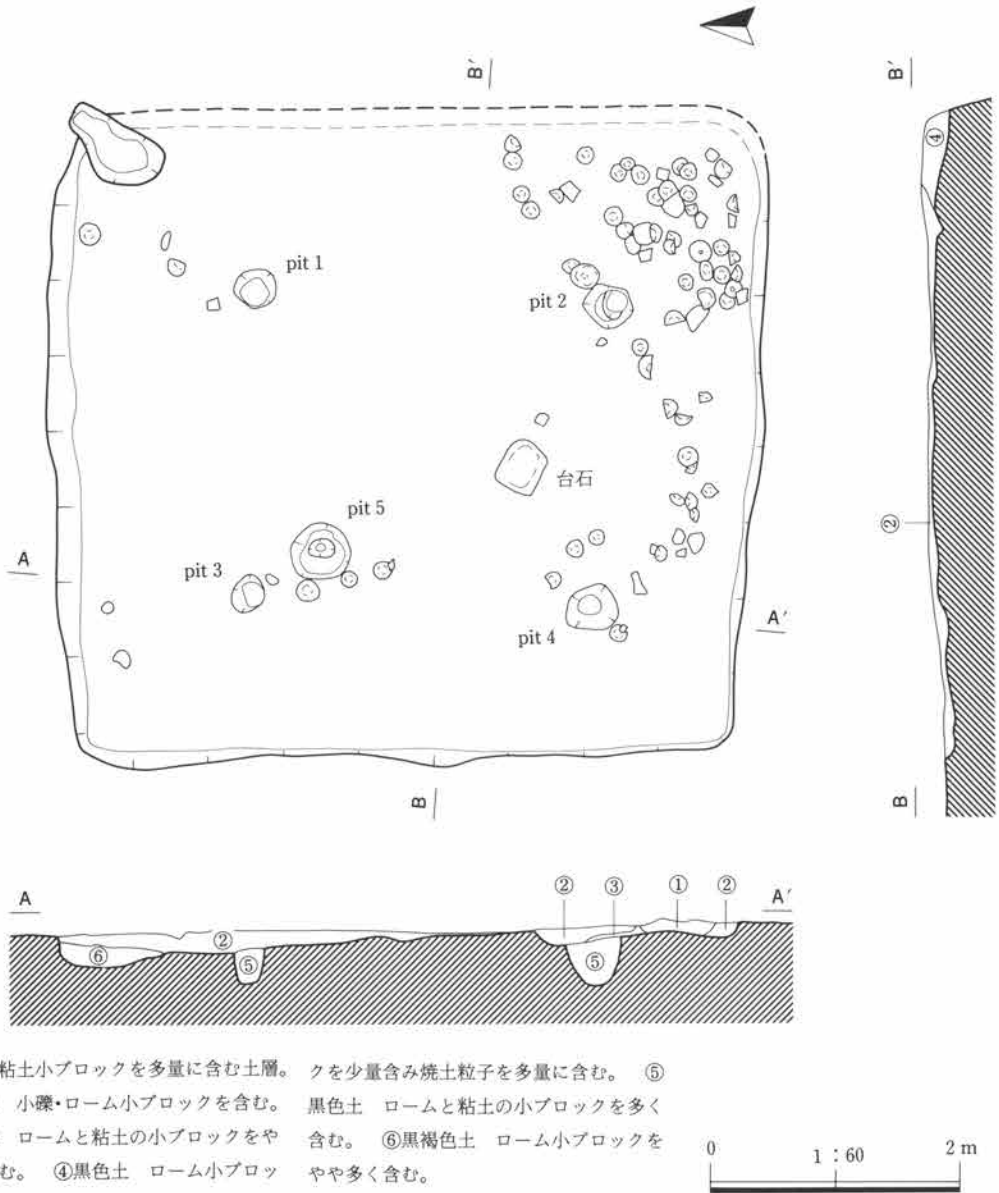
本遺構は平面形や内部の状況、出土遺物からも古代の住居跡としては不自然であり、中・近世の土坑と判断される。

### 2号住居跡（第99図、図版80-1・83-2）

調査区北東端の4区P-25に位置し、東辺は古城沢の浸食により周壁が崩落している。平面形は方形と推定され、規模は南北軸5.70m、東西軸は現状で5.60mで南北軸はほぼ北を指している。

確認面であるローム層への掘り込みが浅く覆土も10cm前後の堆積状態を確認しただけで、周壁も直に掘り込まれた同様の高さを確認しただけである。

床面はやや凸凹しており周壁に沿った部分は軟弱であるが中央部は固く締っていた。周溝はなくpit1～4の4本の支柱穴が対角線上にある。4本の支柱穴は円形をなし径24cm～40cm、深さ27cm～40cmである。北西隅にあるpit3に近接して中央寄りにあるpit5は径46cm、深さ27cmで2段に掘り込まれておりロクロピットの可能性がある。カマドは東壁にあったと推定されるが遺存していない。貯蔵穴は



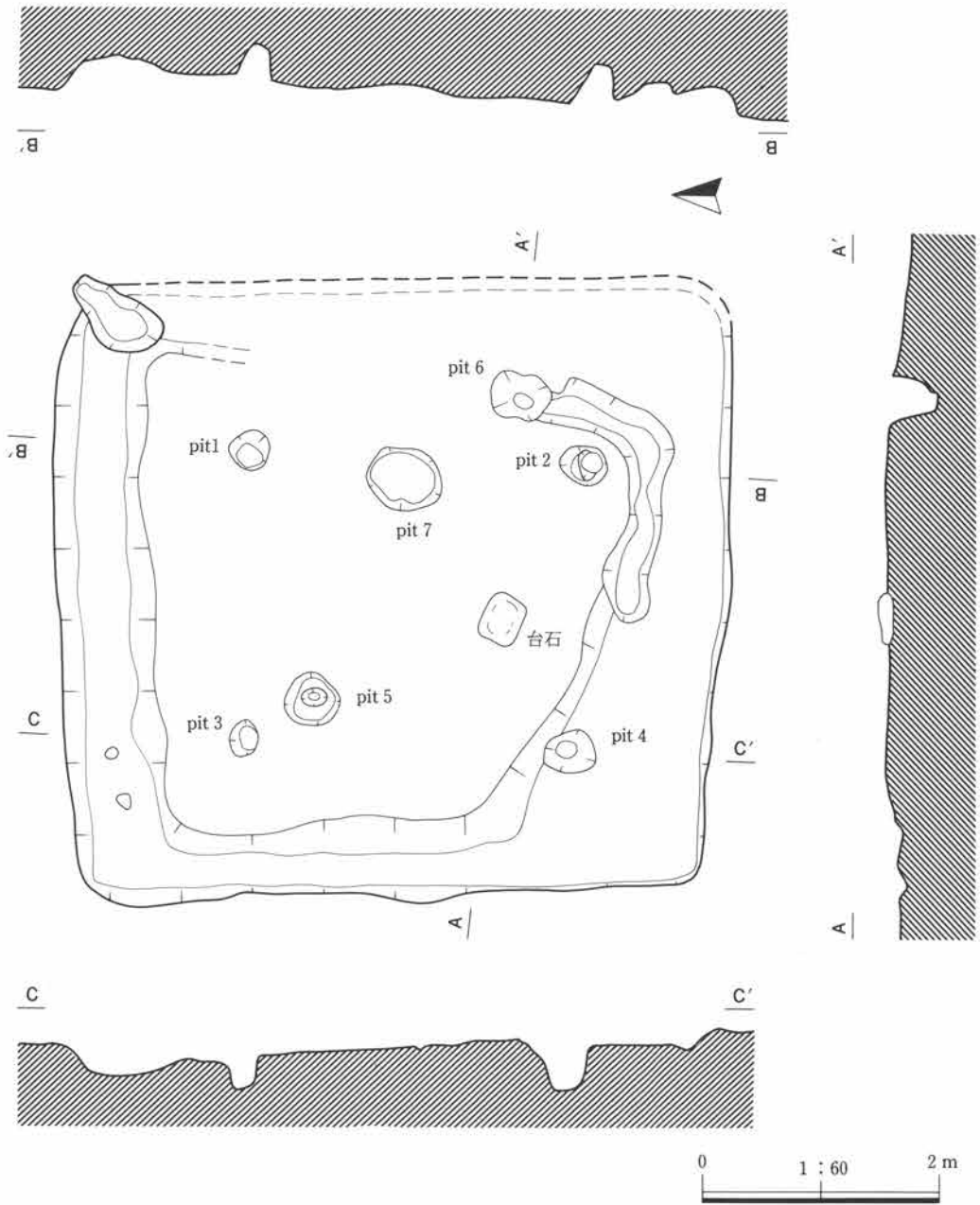
第99図 2号住居跡

未検出である。

本住居跡は周壁に沿った部分を幅65cm～85cm、深さ24cmほど溝状に掘り窪めた掘形があり、中央部分もローム面が凸凹しており張り床されていた可能性がある。また、pit 1と2の中間の位置に楕円形を呈する47cm×62cm、深さ10cmの掘り込み (pit 6) があり、pit 2の近接して北東の位置に円形を呈する径45cm、深さ40cmの掘り込み (pit 7) もある。pit 6・7は床面下の掘り込みである。

なお、中央やや南壁寄りの床面上には34cm×40cm、厚さ10cmの扁平な河原石が据えられており、作業用の台石の可能性はある。

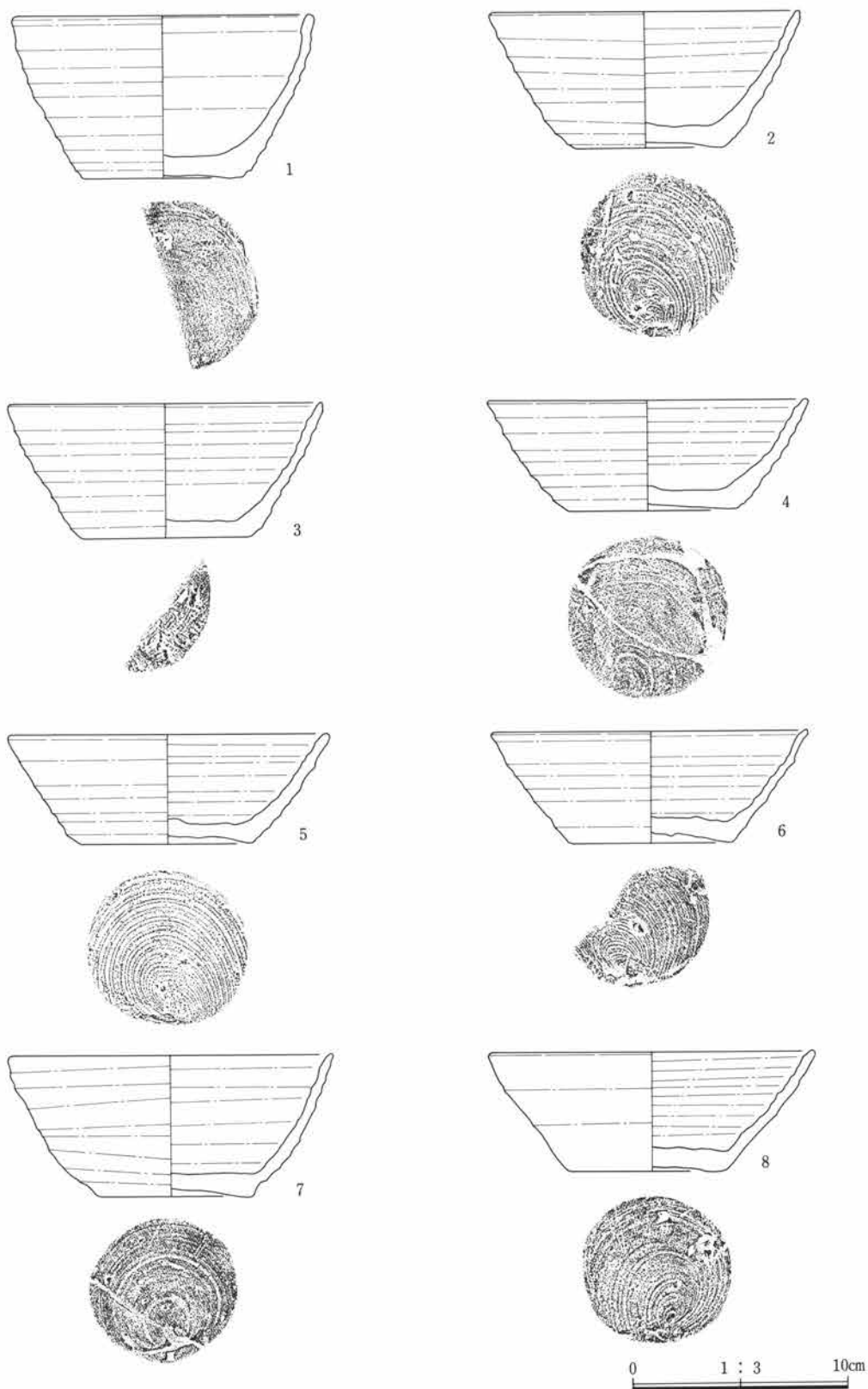
本住居跡からは多量の土器が出土しておりドットによる遺物取り上点数は916点であり、覆土一括取り上げを含めると1,000点を越える点数となる。



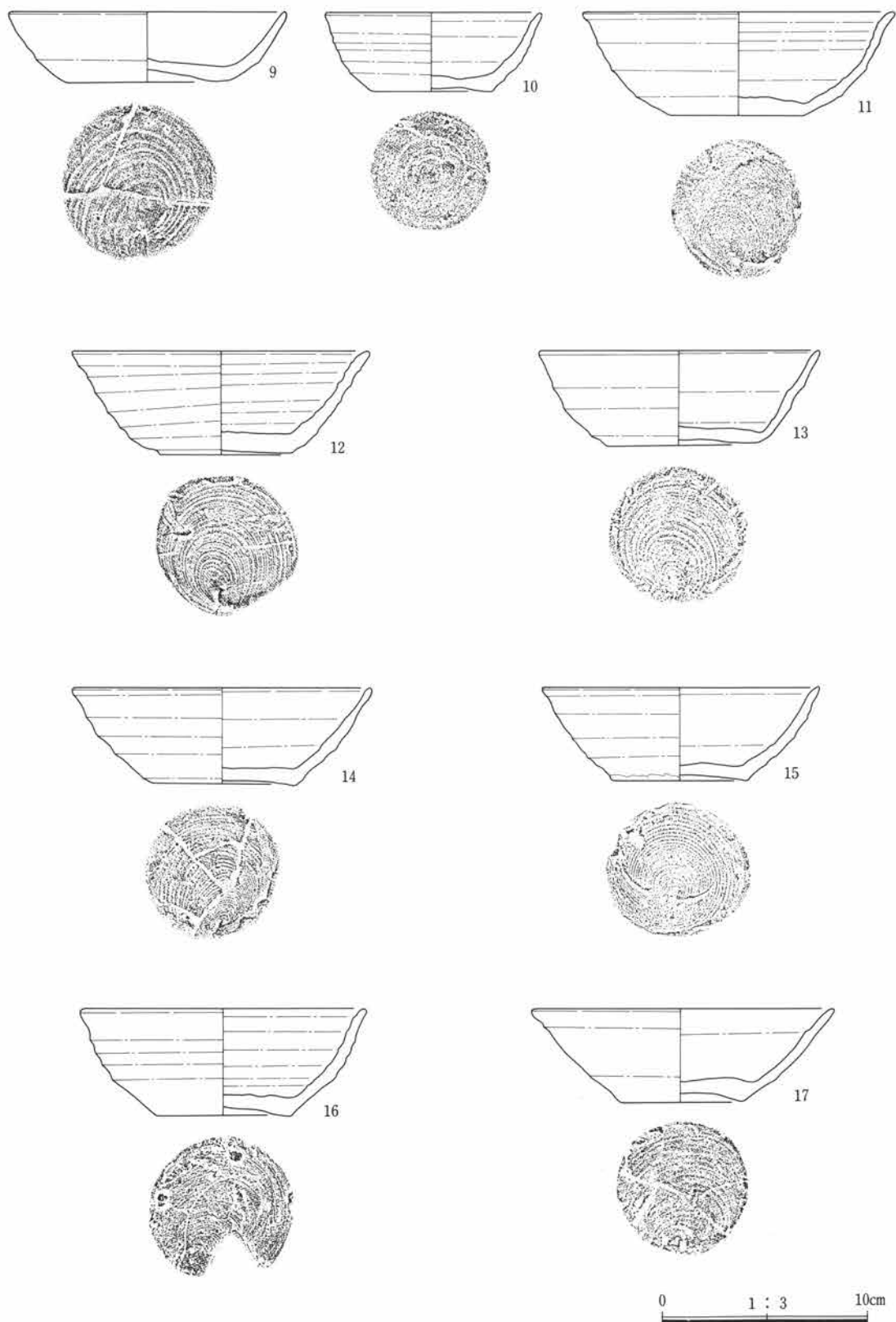
第100図 2号住居跡掘形

遺物は周壁に沿って出土する傾向にあり中央部分は少ない。特に南壁に沿った部分は遺物が多く、南東隅は杯や椀・蓋の完形が多い。

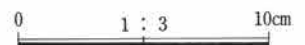
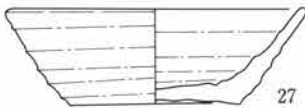
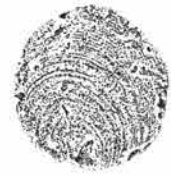
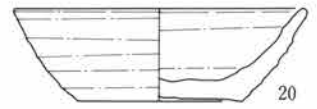
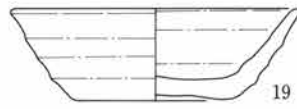
出土した遺物は杯・椀が圧倒的に多く、蓋・広口甕・鉢等の須恵器と土師器甕・小型甕等がある。また、極めて小型で壺を模した特殊な土器も出土している。他に高台椀様の円面硯が南東隅から出土し、長楕円形をなす磨石状の石器が北東隅から出土した。本住居跡は出土遺物により9世紀後半に位置づけられるものである。



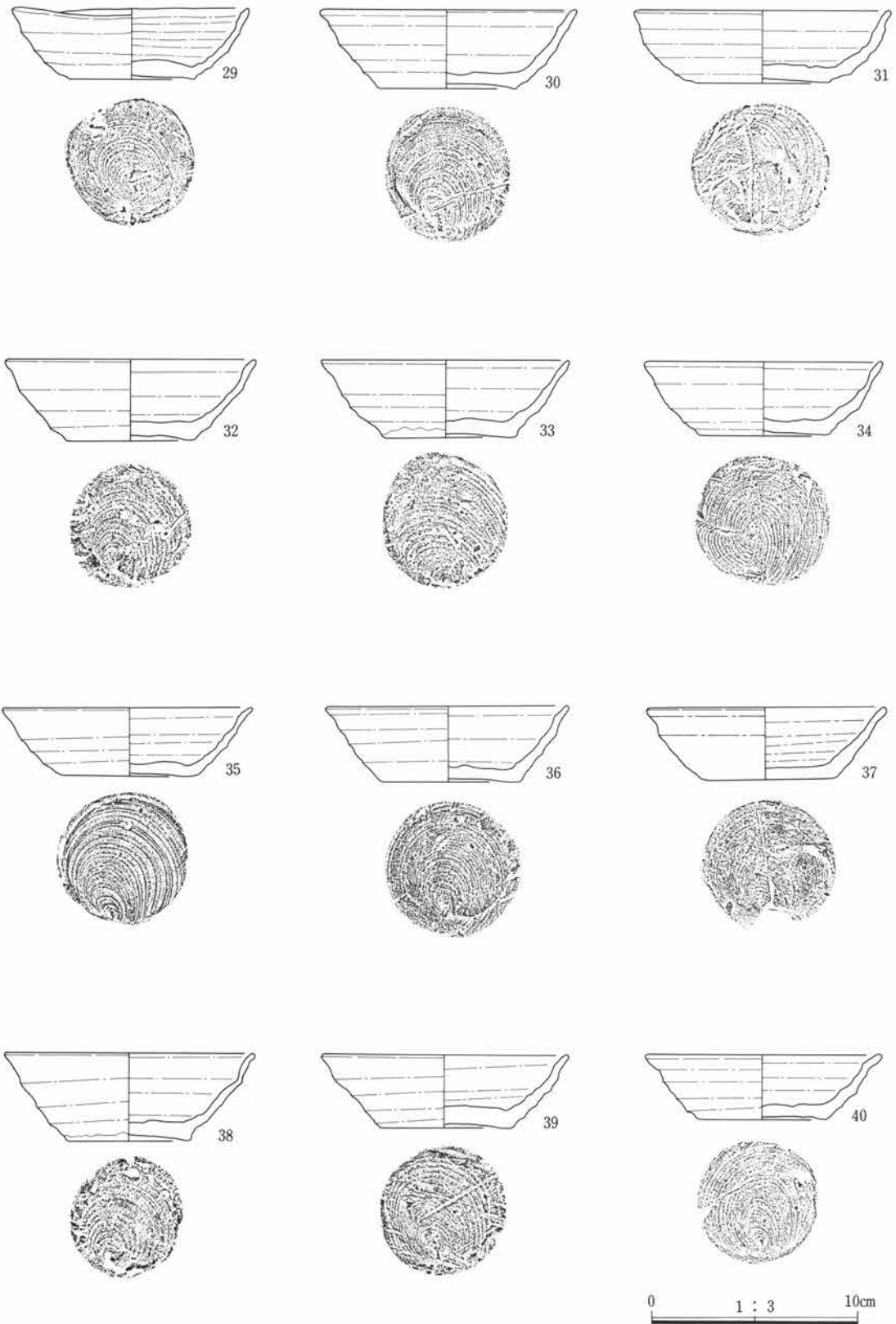
第101図 2号住居跡出土遺物 (1)



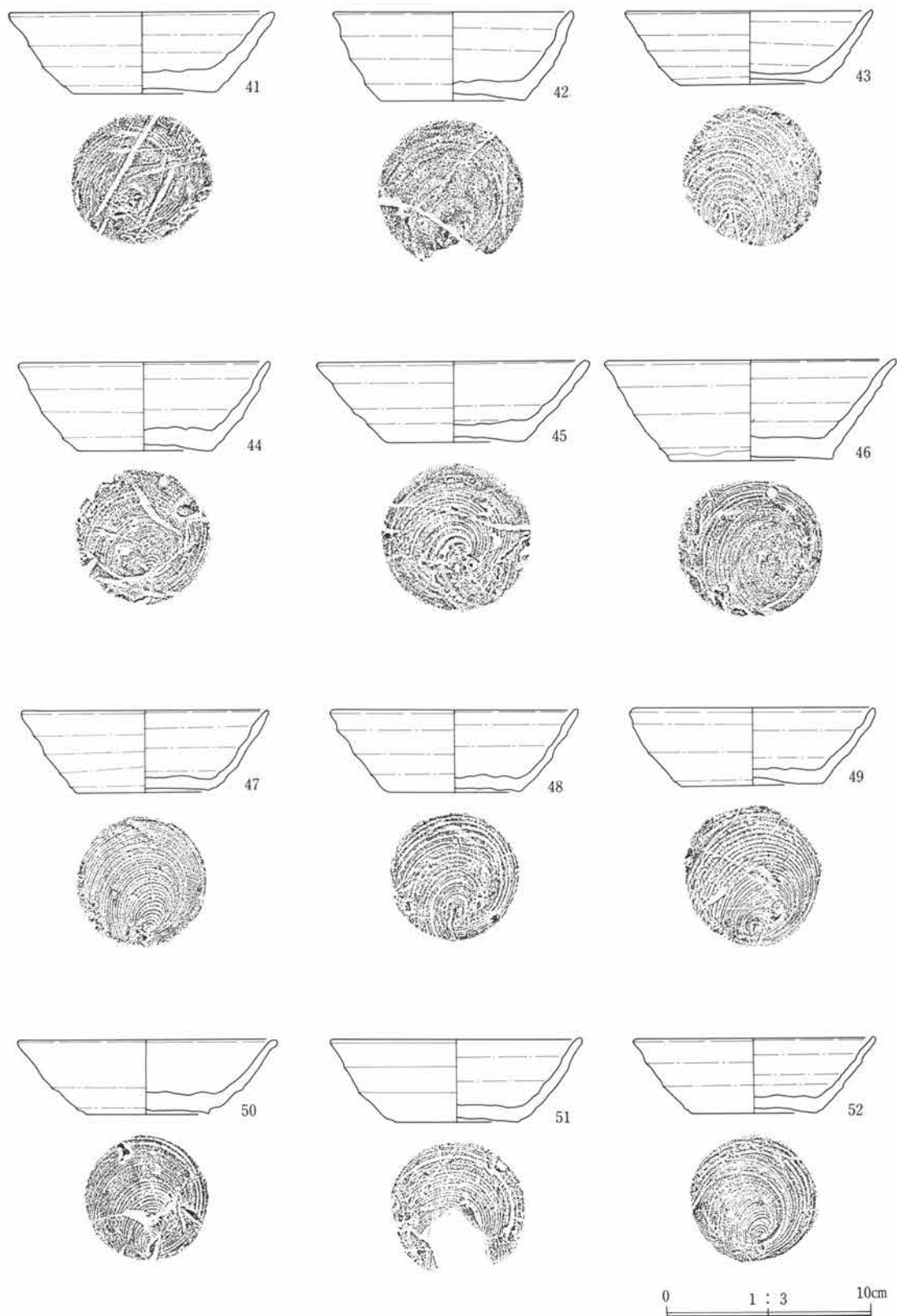
第102図 2号住居跡出土遺物 (2)



第103図 2号住居跡出土遺物 (3)

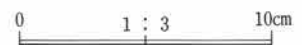
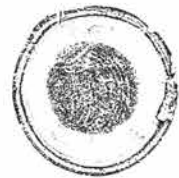
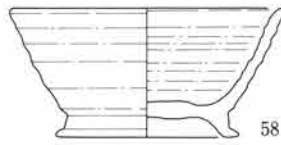
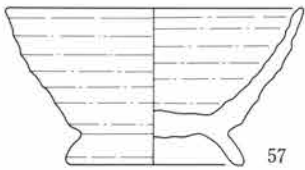
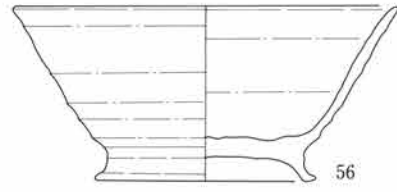
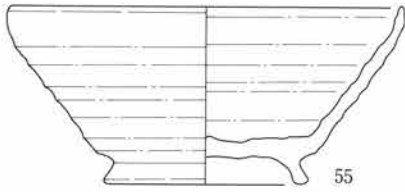
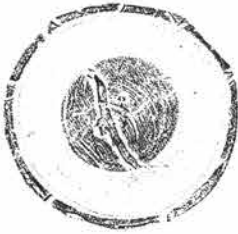
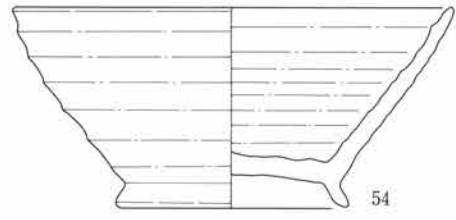
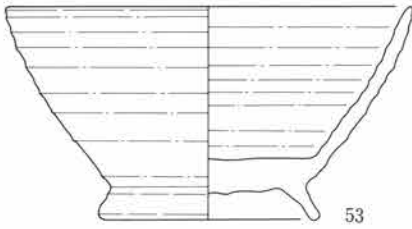


第104図 2号住居跡出土遺物 (4)

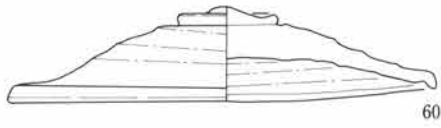


第105図 2号住居跡出土遺物 (5)

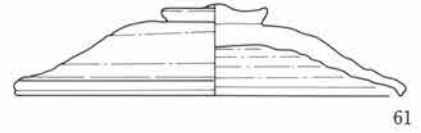




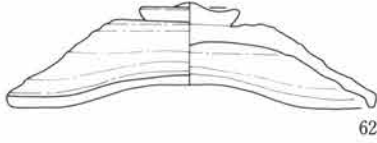
第106図 2号住居跡出土遺物 (6)



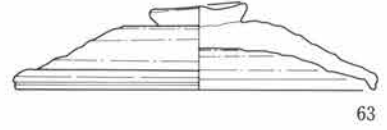
60



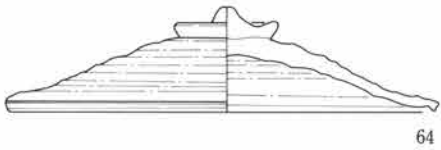
61



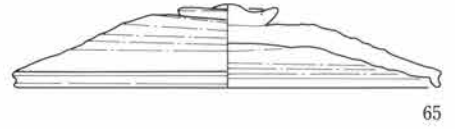
62



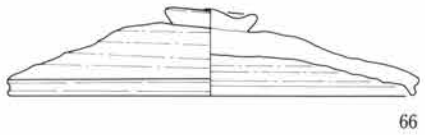
63



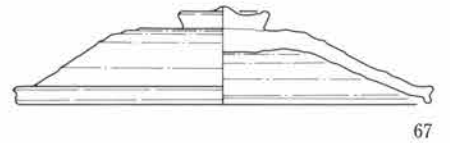
64



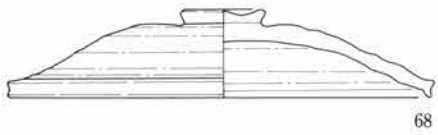
65



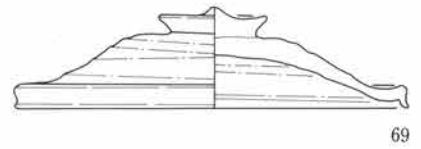
66



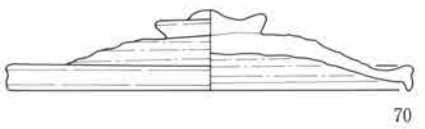
67



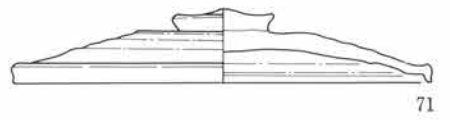
68



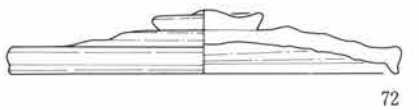
69



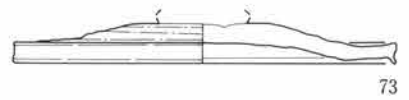
70



71



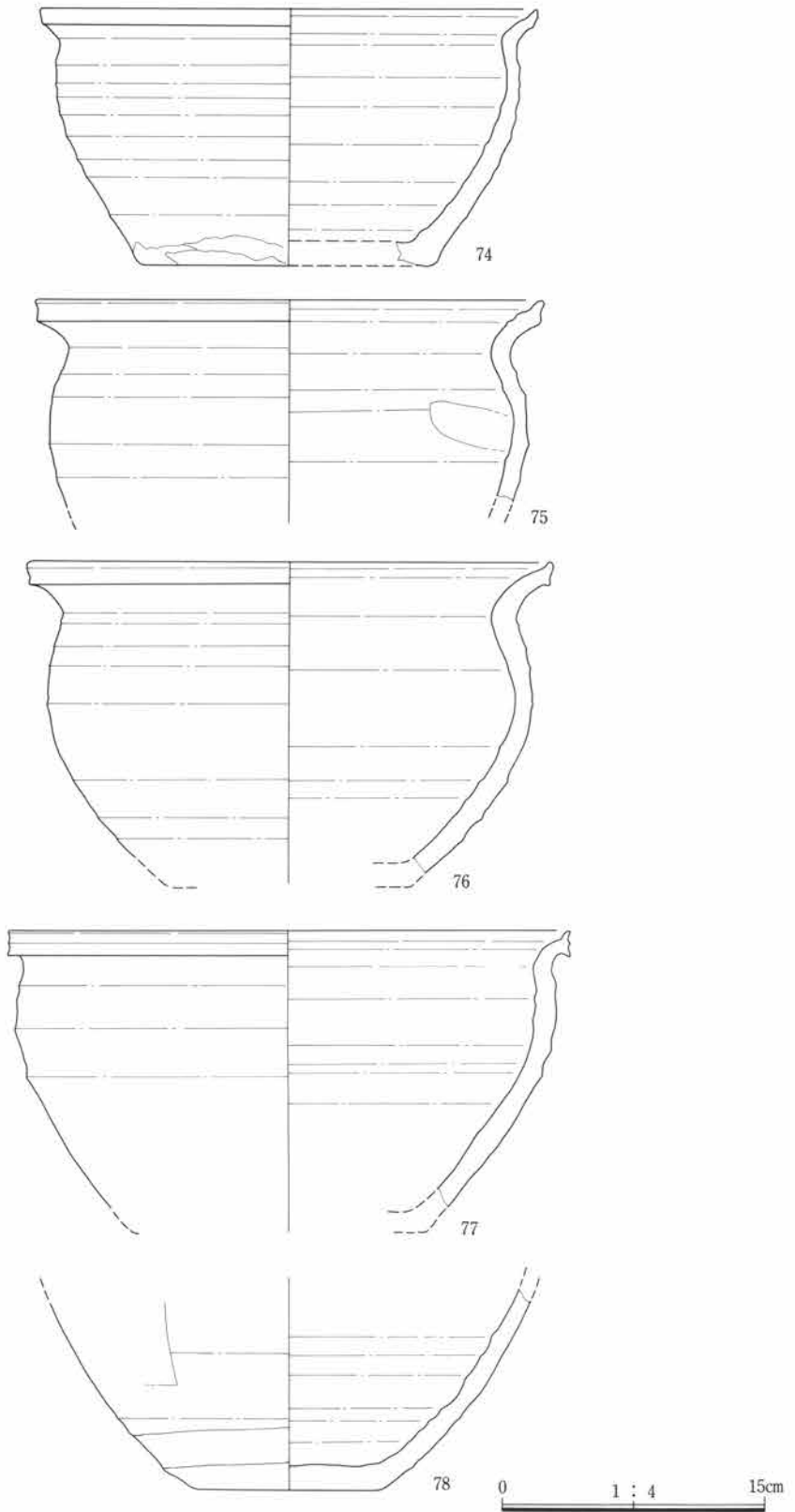
72



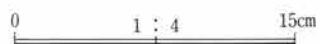
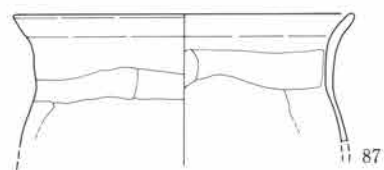
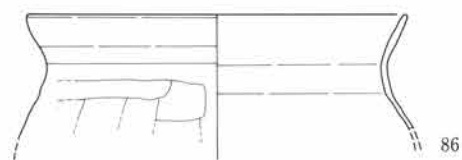
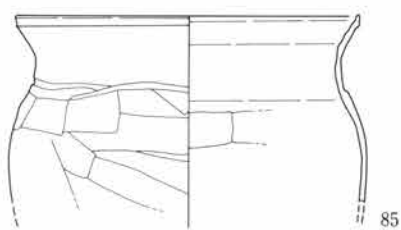
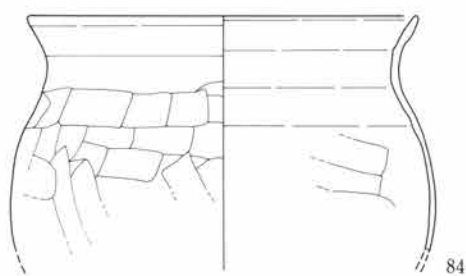
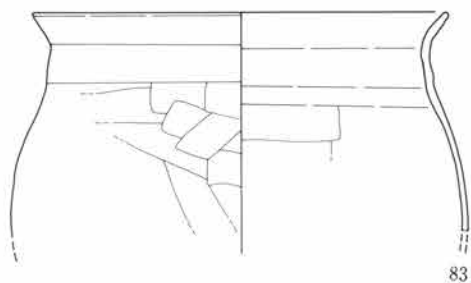
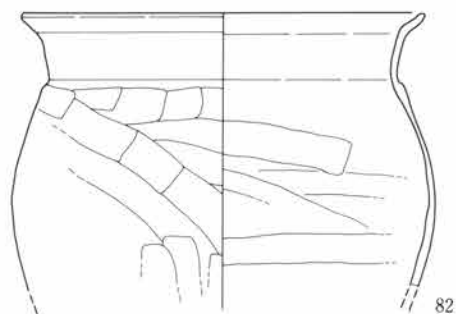
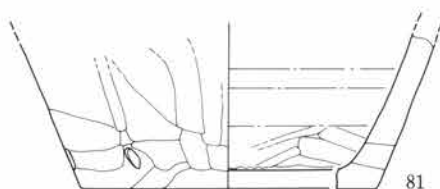
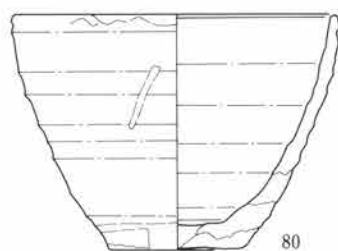
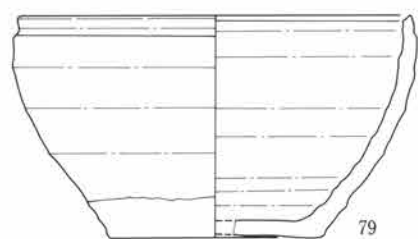
73



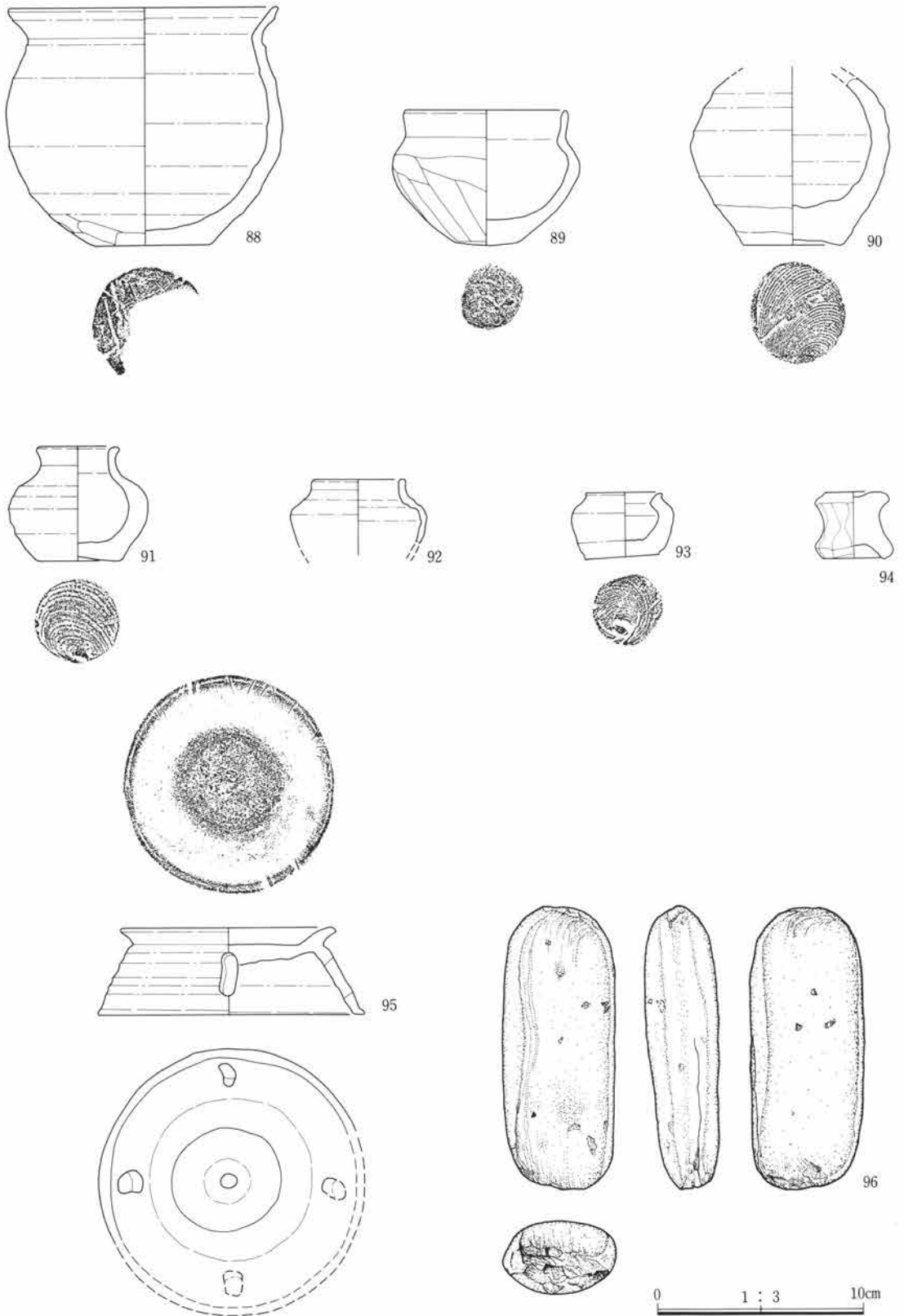
第107図 2号住居跡出土遺物 (7)



第108図 2号住居跡出土遺物 (8)



第109図 2号住居跡出土遺物 (9)



第110図 2号住居跡出土遺物 (10)

### 3号住居跡（第111図、図版80-2・83-3）

3区H-33に位置し44~48号掘立柱建物に切られている。平面形はやや南北軸が長いがほぼ方形に近く、規模は長軸3.57m、短軸3.34mで長軸方向はN-18°-Eである。

覆土はやや乱れた様相を示し、確認面であるローム層への掘り込みが浅いため住居南半の壁の残存状態は不良で、北壁では壁高10cmを計る。

床面は平坦でロームと黒褐色土の混土からなる張り床とみられるが全体的に軟弱である。周溝は西壁中央寄りに部分的に確認されU字状をなし幅20cm、深さ3cm~5cmである。住居内には11本の柱穴があるが本住居跡のものと判断されるものはなく掘立柱建物に帰属するものである。

カマドは東壁やや南寄りにあり壁外で突出し、地山を利用した焚口の両袖は住居内へ張り出している。焚口幅90cm、奥行46cmで焼けはやや弱い。貯蔵穴は南東隅にありわずかに壁外へせり出ている。平面形は不整形円で断面形は丸底状をなす。規模は径82cm、深さ30cmである。

本住居跡の床面下には径が1m前後で深さ20cm~30cmの円形をなす落ち込みが6基あり、カマド前に2基、北壁に沿って3基、南西隅に1基があり、北西隅の落ち込みからは土器片や礫片が出土した。

出土遺物はカマドと貯蔵穴、北西隅寄りに多く、須恵器杯と土師器甕等が出土した。また、河原石を利用した砥石と磨石状の石器が住居北半より出土した。本住居跡の時期は9世紀後半に位置付けられる。

### 4号住居跡（第113図、図版81-1・83-4）

4区G-04に位置し40・75・76号掘立柱建物に切られ、また、2号溝によって住居西半部が切られ北壁部分が攪乱されているため、全容は把握できない。

平面形は方形をなすとみられ、やや歪みを持っている。現状の規模は南北軸3.37m、東西軸2.90mである。南北軸方位はN-10°-Eである。

周壁は良好な所で10cm程度が確認されただけで、覆土も薄く確認されただけである。床面は遺存状態が悪く軟弱である。周溝は検出されず、柱穴も掘立柱建物に帰属するものである。

カマドの掘形と思われる落ち込みが東壁中央にある。平面形は不整形楕円形をなし、1.40m×1.30mの規模で焼土小ブロックを含む黒褐色土が堆積していた。

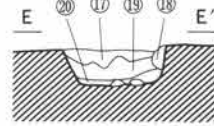
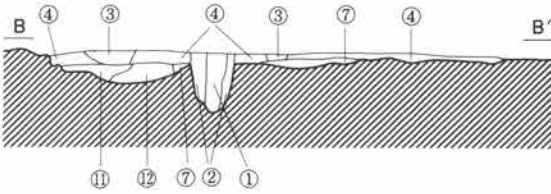
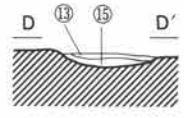
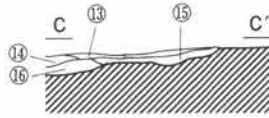
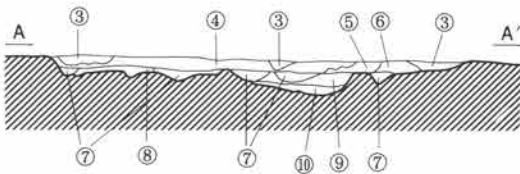
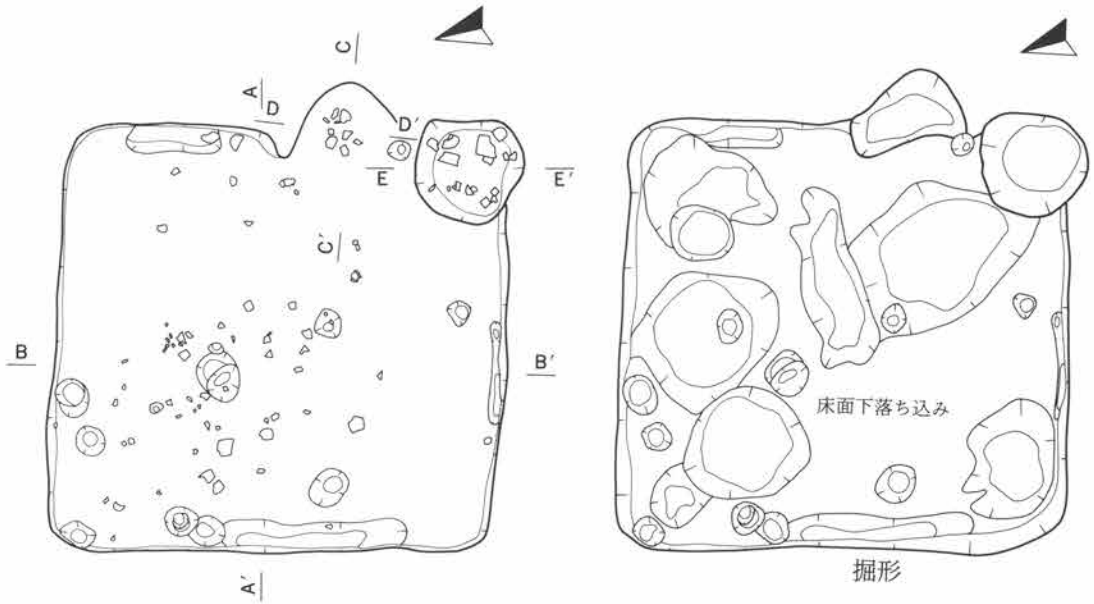
貯蔵穴が南東隅にあり、この部分の周壁はやや張り出している。平面形は不整形楕円形をなし、規模は103cm×85cm、深さ7cmで断面形は皿状をなし、礫や土器片が出土した。

遺物は杯を中心としてほとんどが貯蔵穴より出土した。本住居跡の時期は出土遺物により9世紀後半に位置付けられる。

### 5号住居跡（第115図、図版81-2・83-5）

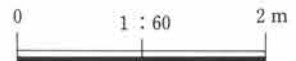
4区K-02に位置し、掘立柱建物の柱穴によって切られている。平面形は隅丸方形をなす。規模は長軸4.00m、短軸3.60mで長軸方向はN-17°-Eである。

壁は確認面であるローム層への掘り込みが浅く5cm前後の高さが確認されただけで、覆土も薄く確認されただけである。床面は平坦でやや固く締っていた。周溝は東壁中央部の一部で確認され、幅15

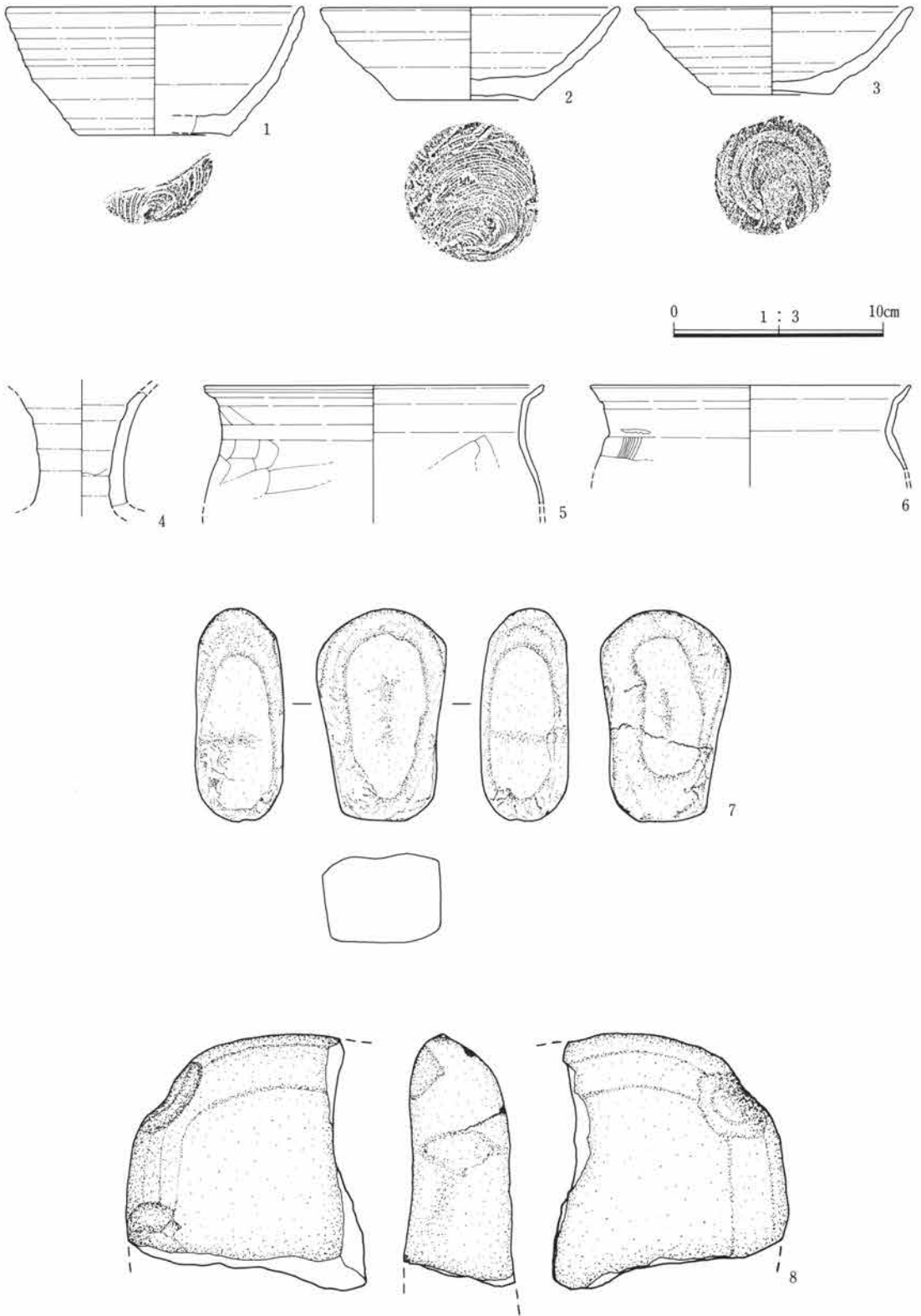


- ①黒色土 ローム小ブロックを少量含む。①②は柱穴の覆土。  
 ②黒褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。  
 覆土  
 ③黒褐色土 ローム小ブロックを極少量含む。  
 ④黒褐色土 ローム小ブロックと焼土粒子をやや多く含む。  
 ⑤灰黄褐色土 ロームと焼土の混土層。  
 ⑥褐色土 ローム小ブロックを多く含む焼土を少量含む。  
 掘形  
 ⑦黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。  
 ⑧ロームと黒色土の混土層。  
 ⑨褐色土 ロームと焼土の小ブロックを少量含む。  
 ⑩黒褐色土 ローム小ブロックを多く含む。

- ⑪暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。  
 ⑫黒褐色土 ローム小ブロックを極少量含む。  
 カマド  
 ⑬黒褐色土 ロームと焼土の粒子を少量含む。  
 ⑭黒褐色土 ローム小ブロックと炭火物を少量含む。  
 ⑮明褐色土 ロームと焼土の粒子を多量に含む。  
 ⑯黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。  
 貯蔵穴  
 ⑰黒褐色土 ロームと焼土の小ブロックを少量含む。  
 ⑱褐色土 周壁が崩落した土層で焼土粒子が混入している。  
 ⑲暗褐色土 焼土粒子を多量に含む。  
 ⑳暗褐色土 ローム小ブロックと炭化物を少量含む。

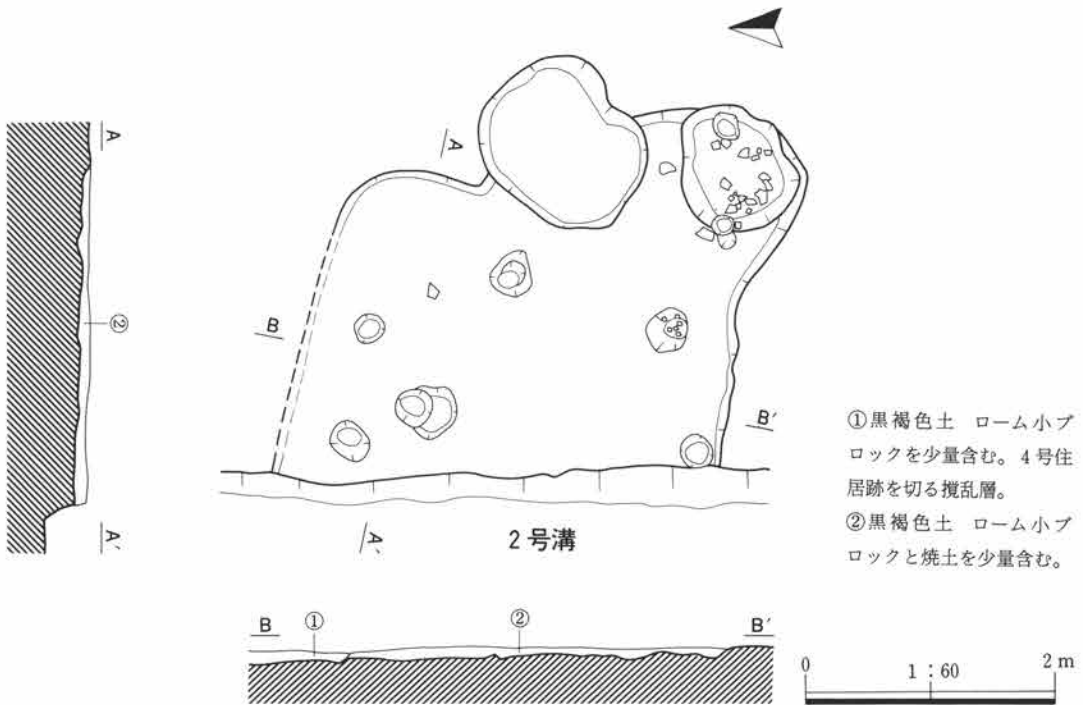


第111図 3号住居跡

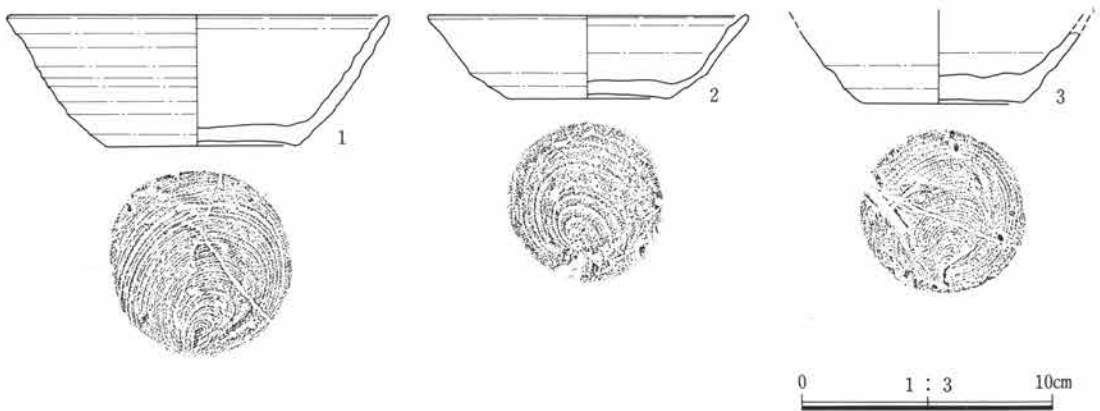


第112図 3号住居跡出土遺物





第113図 4号住居跡



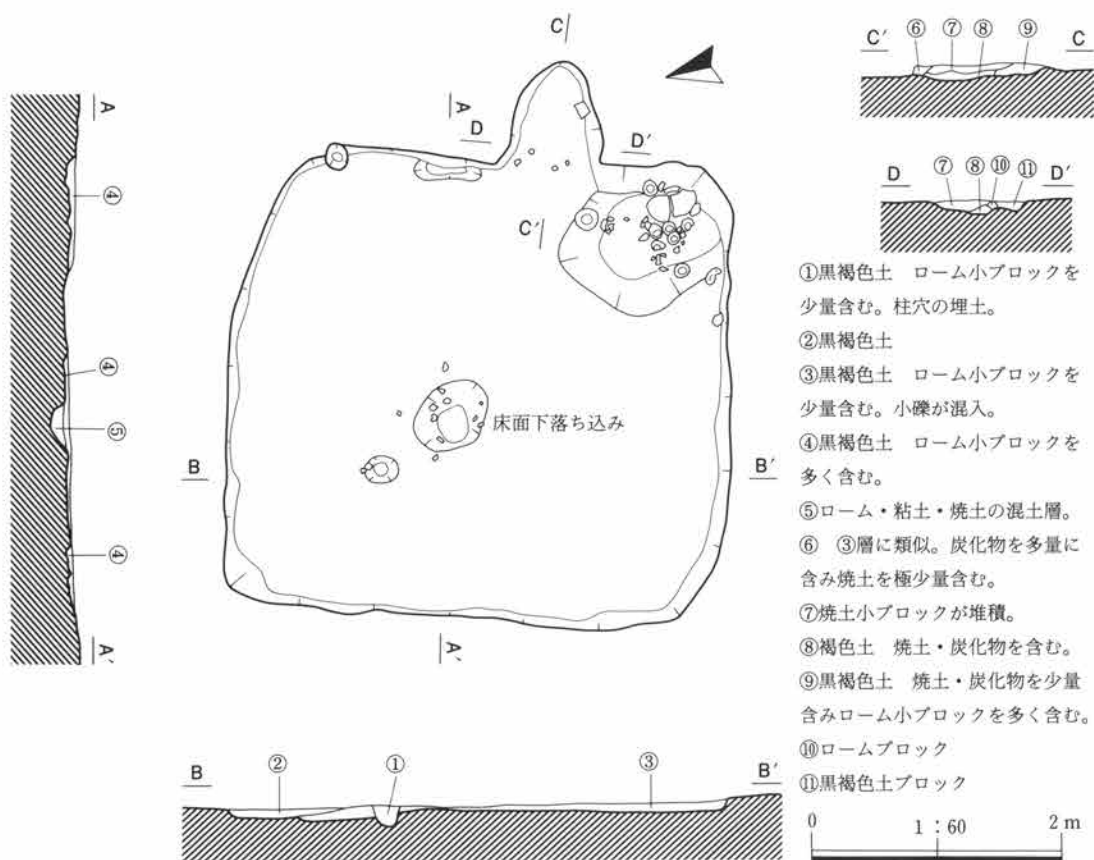
第114図 4号住居跡出土遺物

cm、深さ4cmでU字状をなしていた。住居からは3本のpitが確認されたが、北東隅の壁に位置するpitと、北西隅寄りにあるpitは本住居跡を切る掘立柱建物の柱穴である。また、中央部寄りにある径56cm、深さ14cmのpitは床面下の落ち込みである。

カマドは東壁中央のやや南寄りに位置し壁外へ張り出している。焚口幅、奥行ともに82cmを計る。カマド内部は良く焼けており、焼土がカマド前から貯蔵穴部分まで堆積していた。

貯蔵穴は南東隅にあり、平面形は不整楕円形で断面形は丸底状をなす。規模は1.32m×0.95m、深さ12cmである。

遺物は貯蔵穴を中心に出土した。貯蔵穴からは杯の完形や大片が数多く出土し蓋の完形も出土した。カマドからは土師器甕の小片が数点出土しただけである。中央部近くにある床面下の落ち込みからは



第115図 5号住居跡

杯の小片が10点近く出土した。また覆土中からは小型の特殊甕が出土した。本住居跡は出土遺物により9世紀後半に位置付けられる。

### 6号住居跡 (第117図、図版82-1・83-6)

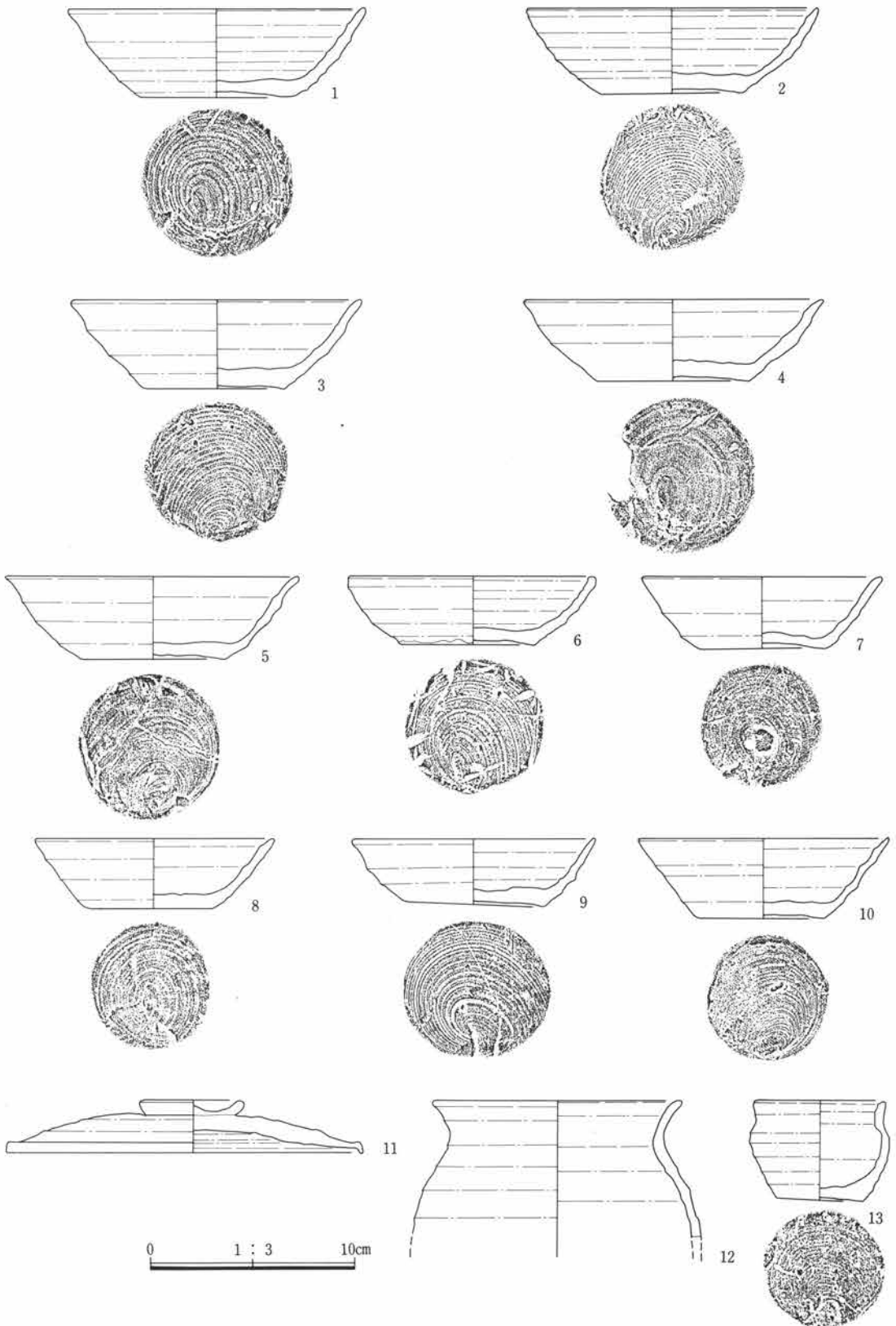
3区L-32に位置し51・60・64・69号掘立柱建物と11号土坑によって切られている。また、確認面が浅く遺存状態があまり良くなく、北壁の大半も攪乱されている。

平面形は南北にやや長い隅丸方形をなし、規模は長軸4.38m、短軸4.00mで長軸方向はほぼ南北である。

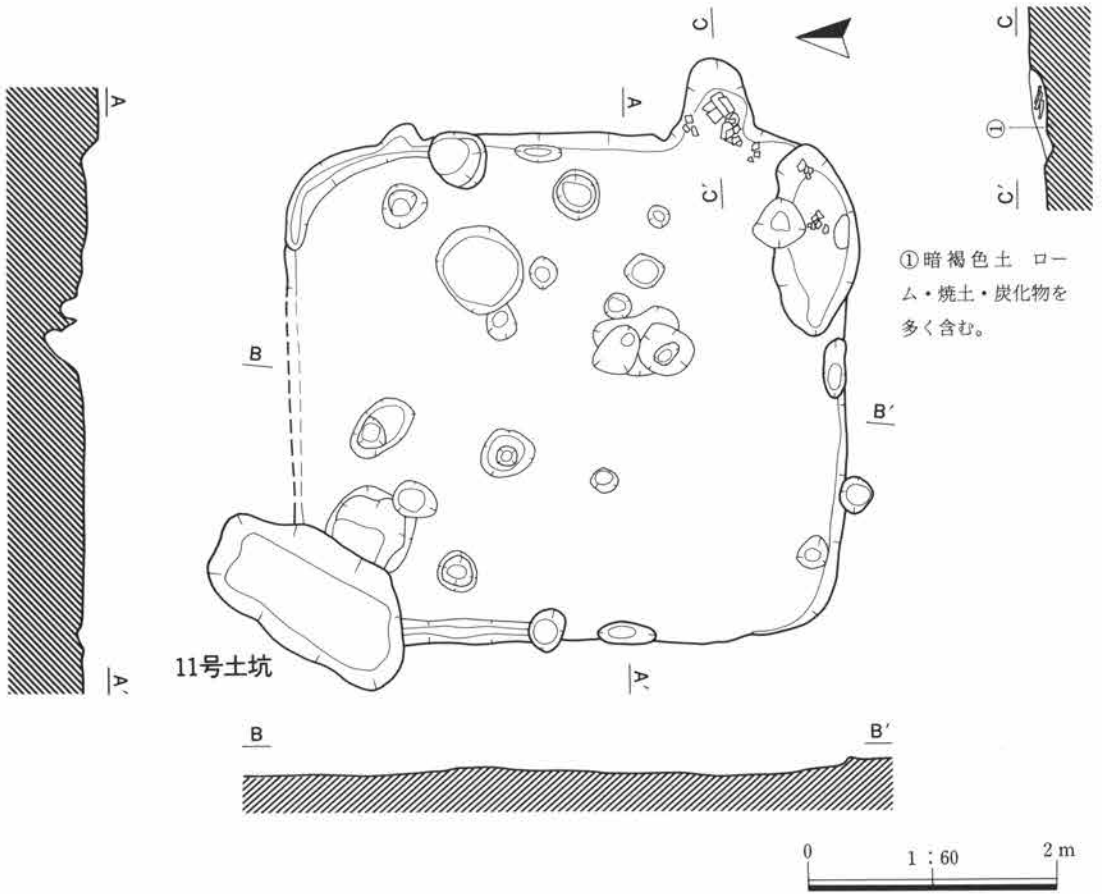
壁は遺存状態の良好な部分で10cm前後が確認されただけで、覆土も極めて薄く確認しただけである。床面は平坦であるが軟弱である。住居内で確認された多数の柱穴は掘立柱建物に帰属する柱穴と考えられるが、ロクロピットと思われる柱穴が北西隅寄りにある。周溝は北東隅と東壁の一部、西壁の一部で確認され、幅は20cm前後で深さは3cm～5cmと浅い。

カマドは東壁南寄りにあり壁外へ張り出している。焚口幅60cm、奥行68cmで良く焼けていた。貯蔵穴は南東隅の南壁に沿った位置にあり、平面形は長楕円形をなし規模は150cm×68cm、深さ10cmで皿状に窪んでいた。

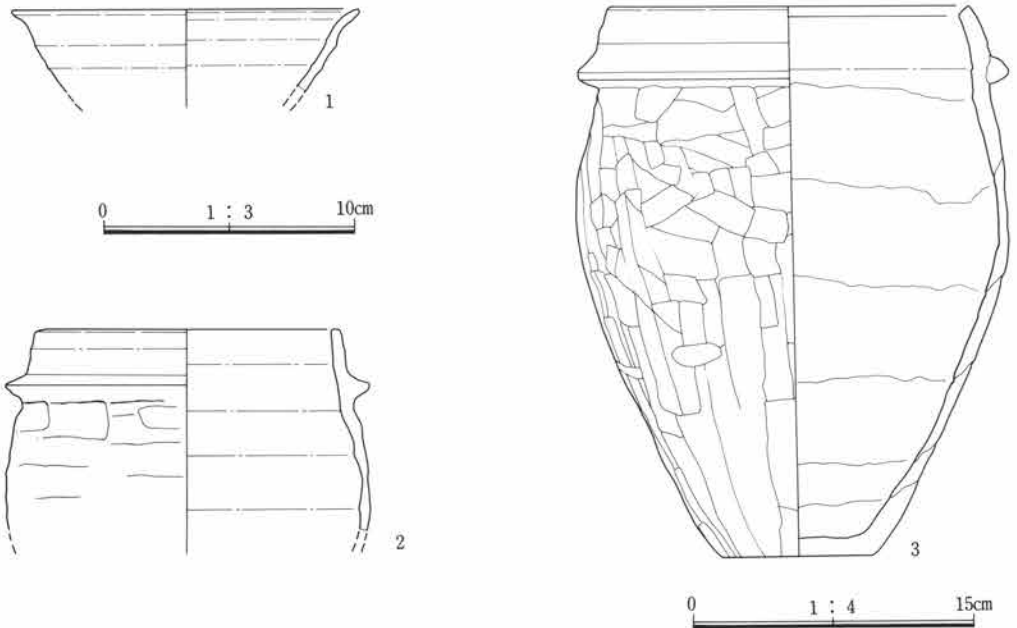
遺物はカマドと貯蔵穴だけに確認され、カマドからは杯の大片と羽釜のほぼ完形各1点が出土し、



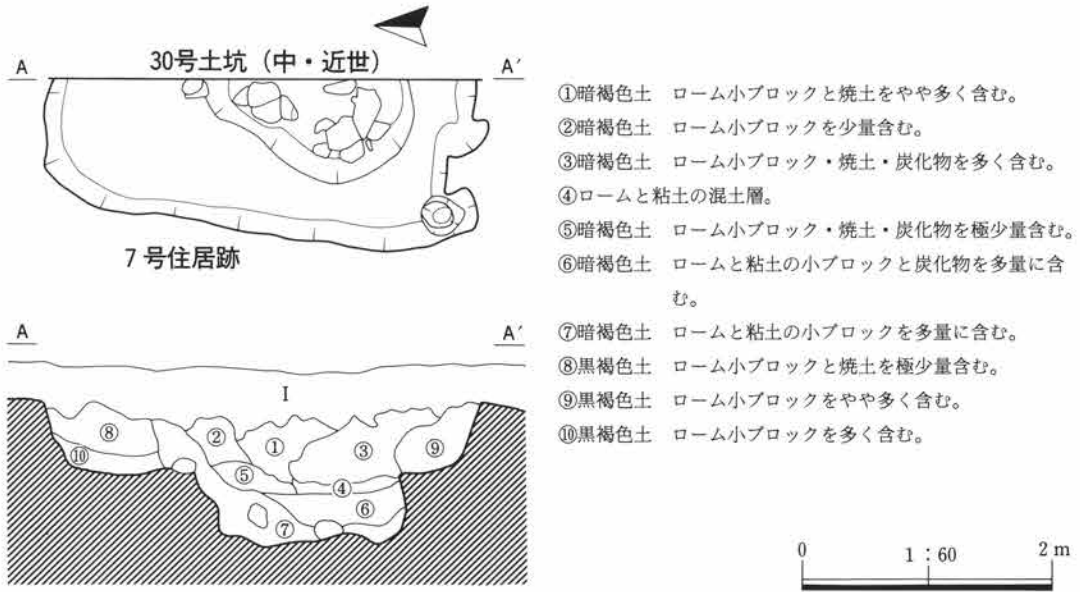
第116図 5号住居跡出土遺物



第117図 6号住居跡



第118図 6号住居跡出土遺物



第119図 7号住居跡・30号土坑

貯蔵穴からは羽釜の大片が出土した。本住居跡は10世紀前半に位置付けられる。

### 7号住居跡 (第119図、図版82-2)

3区W-29に位置し東半は調査区外に延びるため全容は不明である。また、中央部を30号土坑によって切られている。

平面形は方形をなすとみられ、規模は南北軸3.25mを計る。周壁は直に掘り込まれ45cmの高さがある。床面は平坦で他の付属の遺構はない。覆土中からは杯や羽釜の小片が数点出土しただけである。

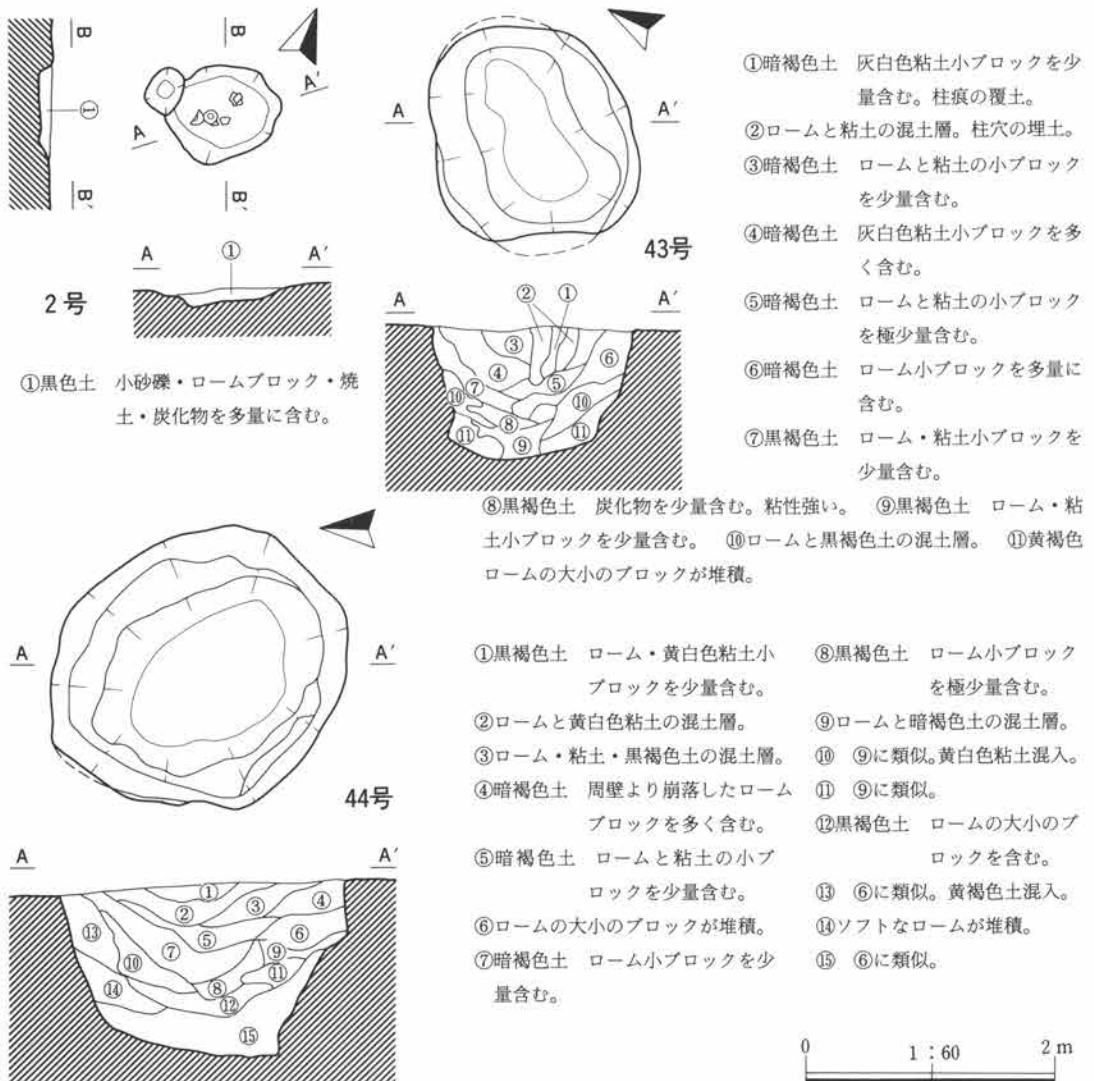
本遺構は全容が不明であり、断面形や30号土坑のあり方からみて住居跡として認定しえるかどうか疑わしい。

## 2 土坑

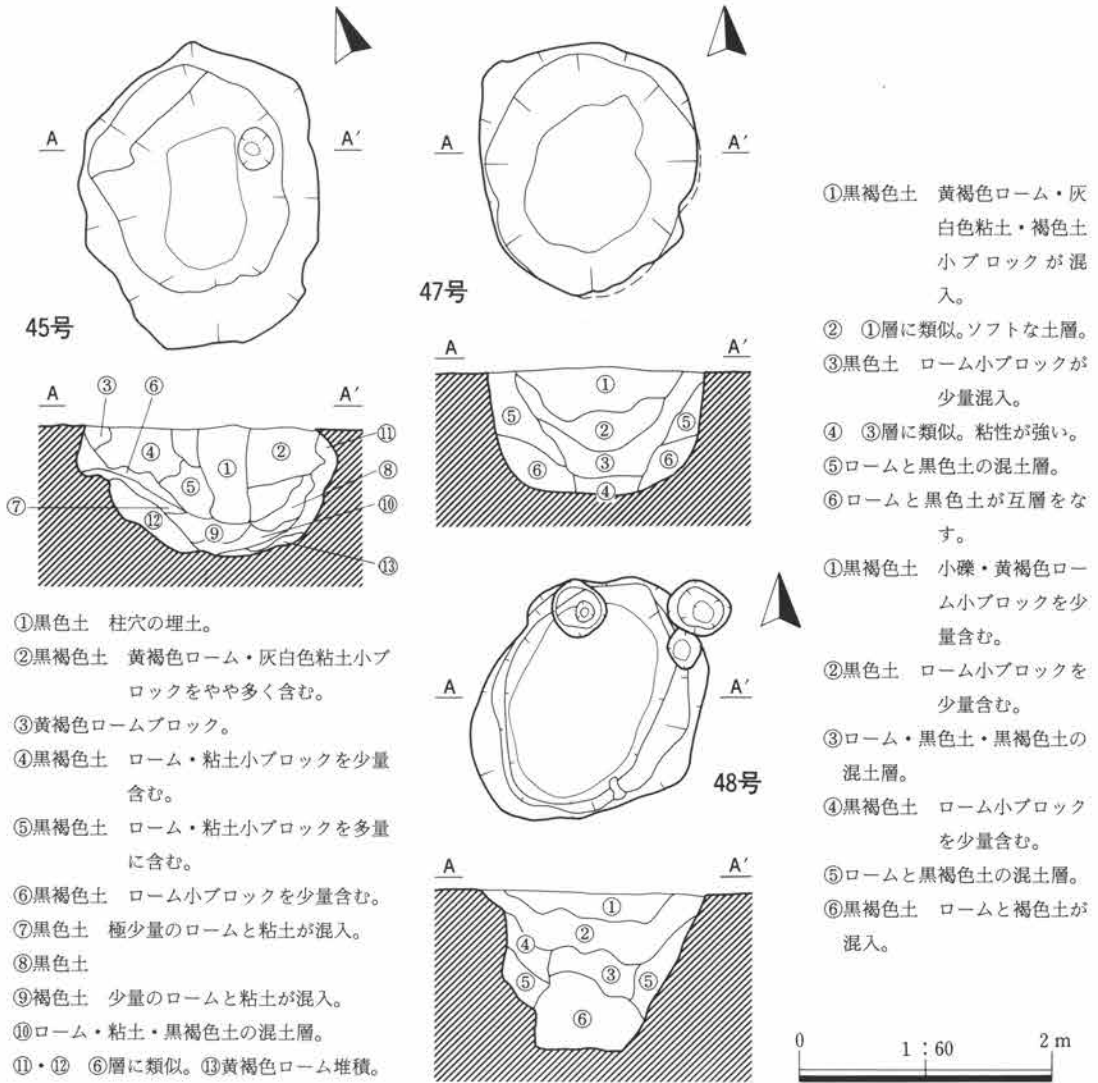
平安時代の土坑としては6基があるが2号土坑だけが台地の北端に位置し、他は台地の周辺に位置している。2号土坑は墓坑的性格と考えられるのに対し、周辺の5基の土坑は伴出遺物はないが藪田・藪田東遺跡で検出された粘土採掘坑と形態・覆土が類似している。また、45号土坑周辺はロームが乱れており粘土採掘坑がさらに存在した可能性がある。

### 2号土坑（第120図、図版83-7）

4区H-22に位置し柱穴によって切られている。平面形は楕円形で断面形は皿状をなす。規模は0.90m×0.75m、深さ0.20mで長軸方向はN-48°-Eを示す。覆土は焼土・炭化物・ロームブロックを多く含み一挙に埋没した様相を示す。また、9世紀後半の杯3個体、土師器甕1個体、10世紀前半の高



第120図 2・43・44号土坑



第121図 45・47・48号土坑

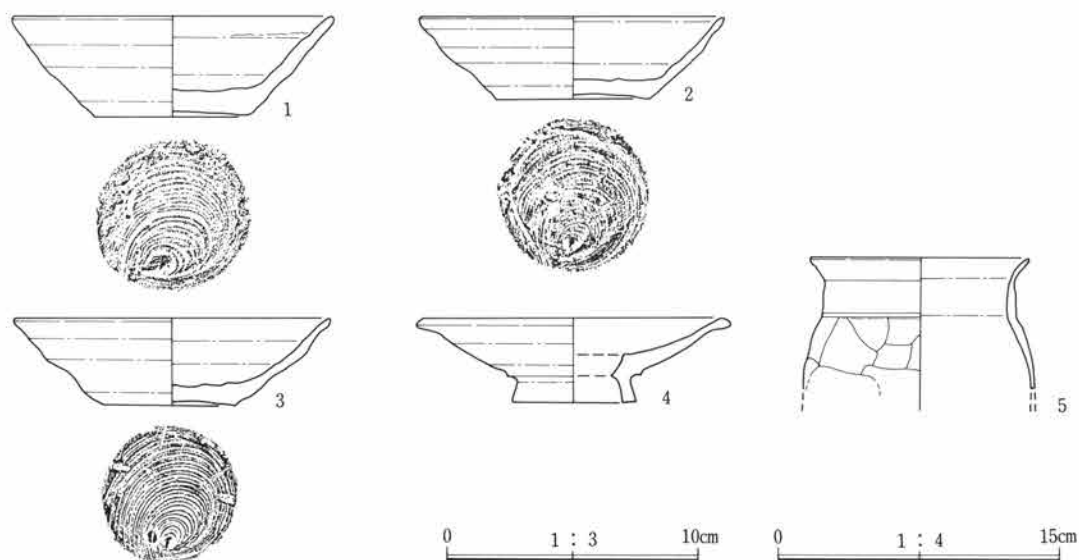
台付皿1個体が出土した。本土坑は墓坑的性格を有していると考えられる。

#### 43号土坑 (第120図)

3区N-20に位置し柱穴によって切られている。平面形は楕円形で断面形はU字状をなす。規模は1.66m×1.55m、深さ1.02mで長軸方向はN-60°-Eを示す。覆土は黄褐色ローム・灰白色粘土・黒褐色土がブロックで混じり合い互層をなしており、周辺の遺跡で確認された粘土採掘坑独特の堆積状態を示している。出土遺物なし。

#### 44号土坑 (第120図)

3区Q-27に位置している。平面形は不正楕円形で断面形は段のあるU字状をなす。規模は2.53m×2.12m、深さ1.38mで長軸方向はN-30°-Wを示す。覆土は43号土坑と同様にローム・粘土・黒褐色土のブロックの混土層が互層をなしている。43号土坑と同様に粘土採掘坑と考えられる。出土遺物なし。



第122図 2号土坑出土遺物

45号土坑 (第121図)

3区V-27に位置し柱穴によって切られている。平面形は不整楕円形で断面形は周壁が外湾するU字状をなす。規模は2.36m×1.87m、深さ1.00mで長軸方向はN-15°-Eを示す。覆土は43・44号土坑と同様で形態からも粘土採掘坑と考えられる。出土遺物なし。

47号土坑 (第121図、図版83-8)

3区K-33に位置する。平面形は不整楕円形で断面形はU字状をなす。規模は1.20m×0.90m、深さ1.00mで長軸方向はN-7°-Eを示す。覆土は43~45号土坑と同様。粘土採掘坑と考えられる。出土遺物なし。

48号土坑 (第121図)

4区I-01に位置し44~46・52・54号掘立柱建物の柱穴によって切られている。平面形は不整楕円形で断面形は段のあるV字状をなす。規模は2.10m×1.65m、深さ1.24mで長軸方向はN-8°-Eを示す。覆土・形態等43~45・47号と同様で粘土採掘坑と考えられる。出土遺物なし。



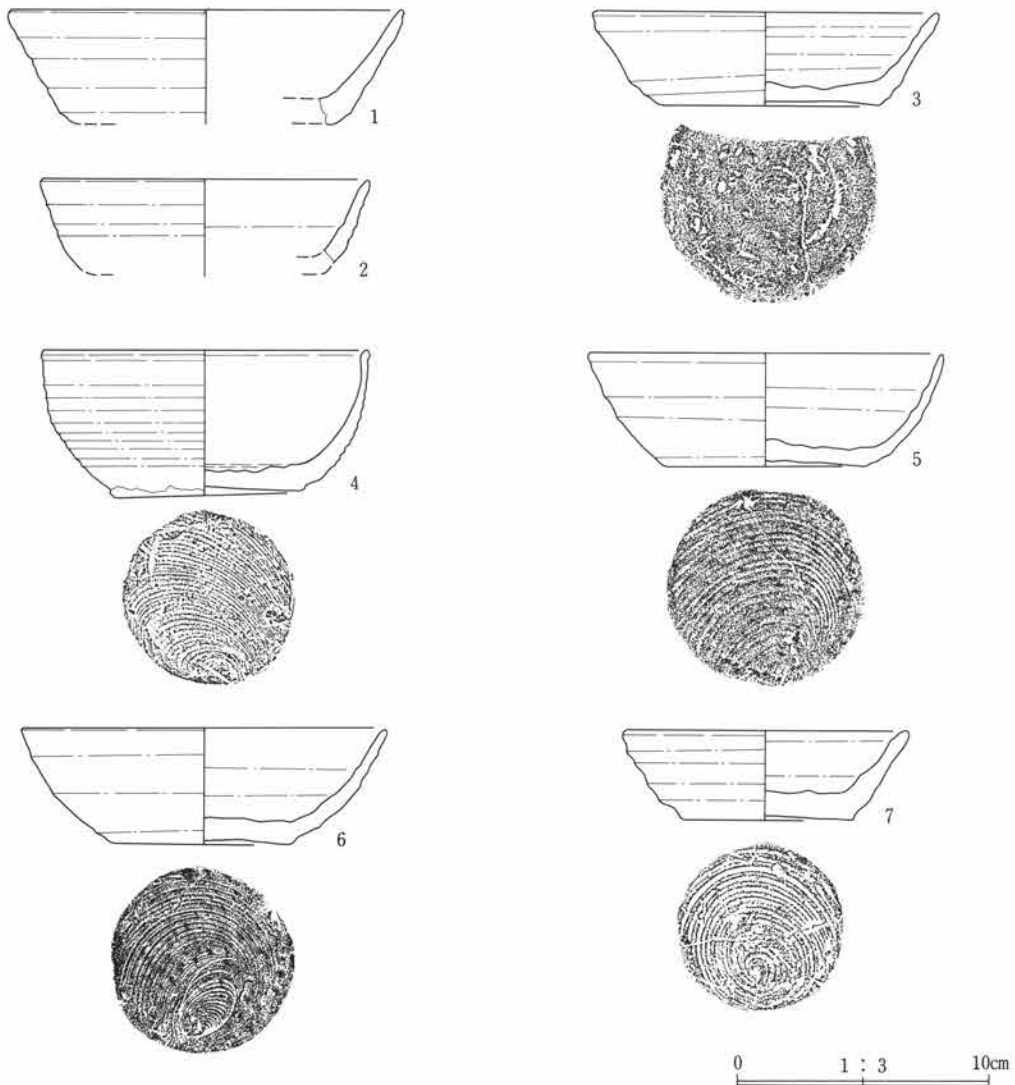
## 3 グリット出土の遺物 (第123～125図、図版91-6・108-2・109～111)

本項の遺物は試掘時および遺構確認時のものと、台地周辺を走る現在の水路に平行する近代の水路(図版90-4)から出土したものを含む。

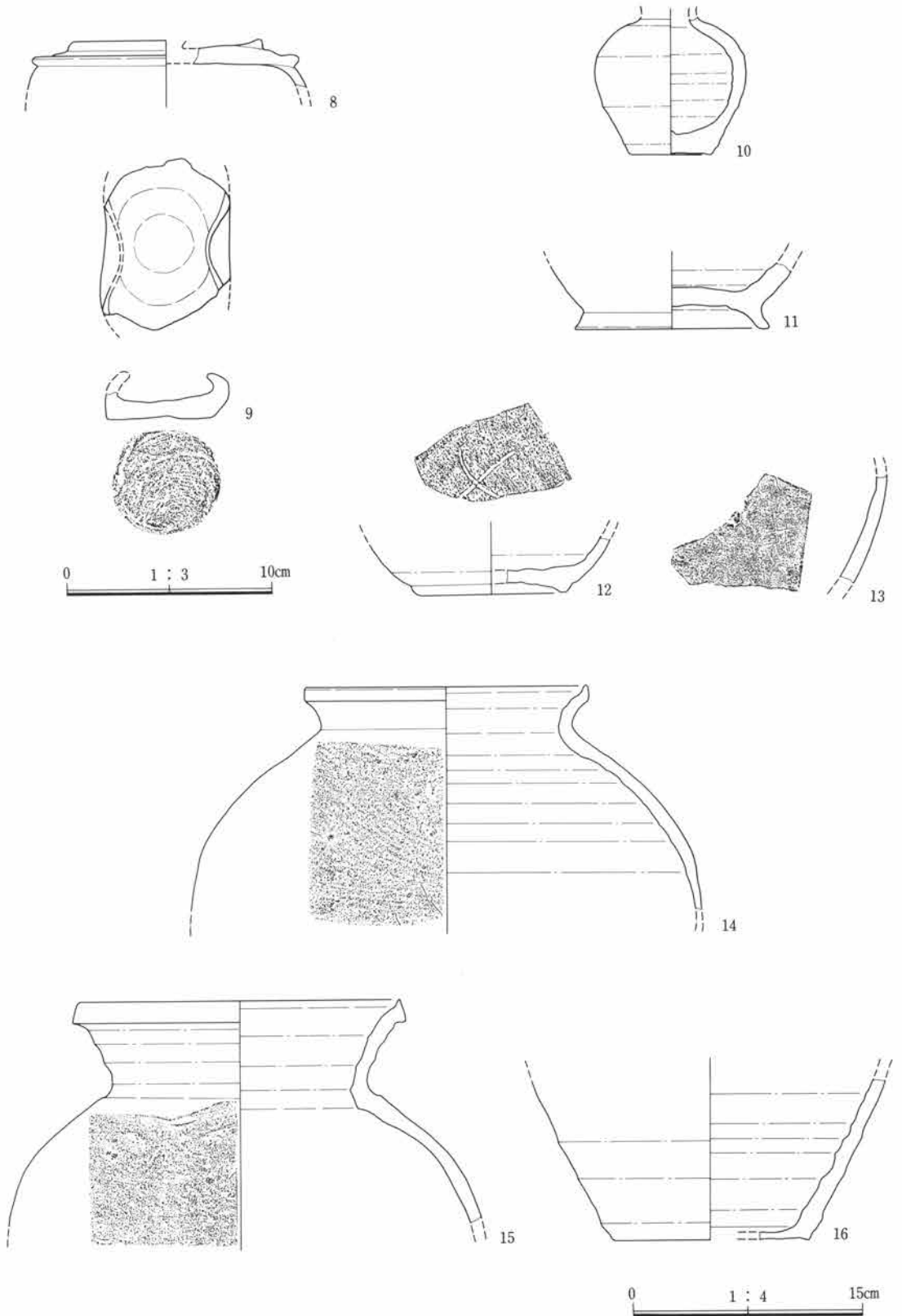
時期としては8世紀後半～10世紀前半で、8世紀後半の特徴を持つ第123図1・2・8は沢入窯産と考えられる。他の9世紀～10世紀前半の遺物は洞III遺跡の存続期間と合致する。

第123図12・13の器面には「×」や「井」の線刻があり窯印かと思われる。22～24は月夜野窯址群の中で北に位置する真沢・須磨窯等で確認されている脚付羽釜の破片があり、20・21の羽釜と胎土も異なり搬入されそのものと推定される。25は鳥頭を模した蓋の鈕と考えられる特異な土器である。

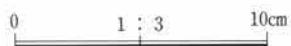
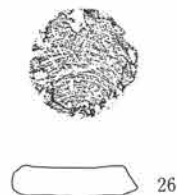
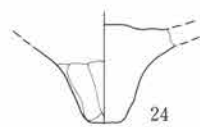
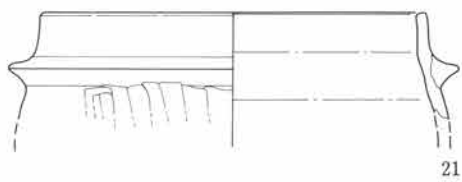
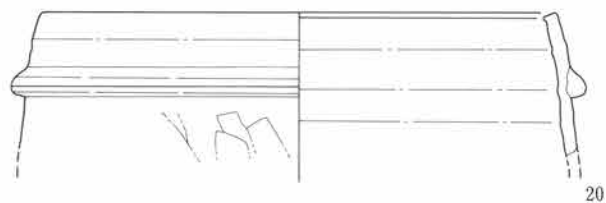
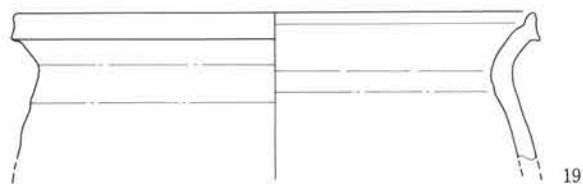
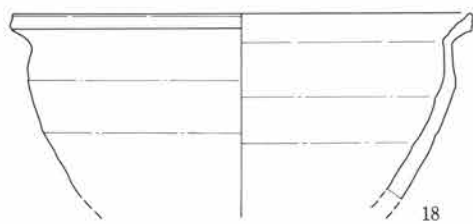
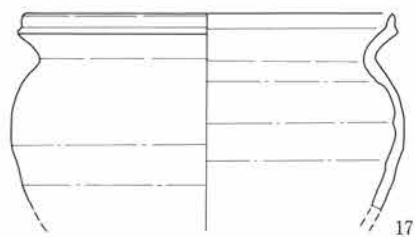
また、中世の2号溝の覆土に混入して少量の平安時代の土器が出土しているが、うち1点は壺形の灰釉陶器片であり当地域では希有なものである。



第123図 グリット出土遺物(1)



第124図 グリット出土遺物(2)



第125図 グリット出土遺物（3）

### 第3節 中・近世の遺構と遺物

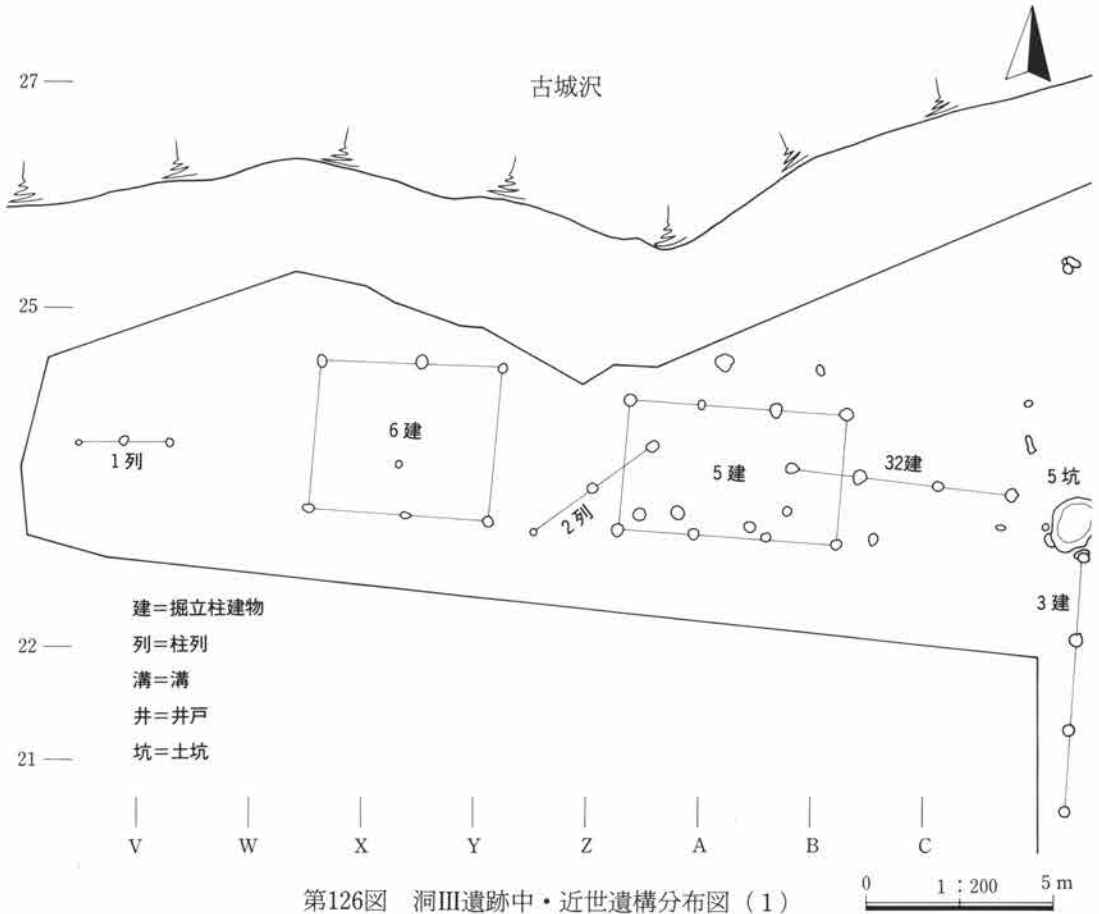
#### 1 掘立柱建物

##### 1号掘立柱建物（第133図、図版84-1）

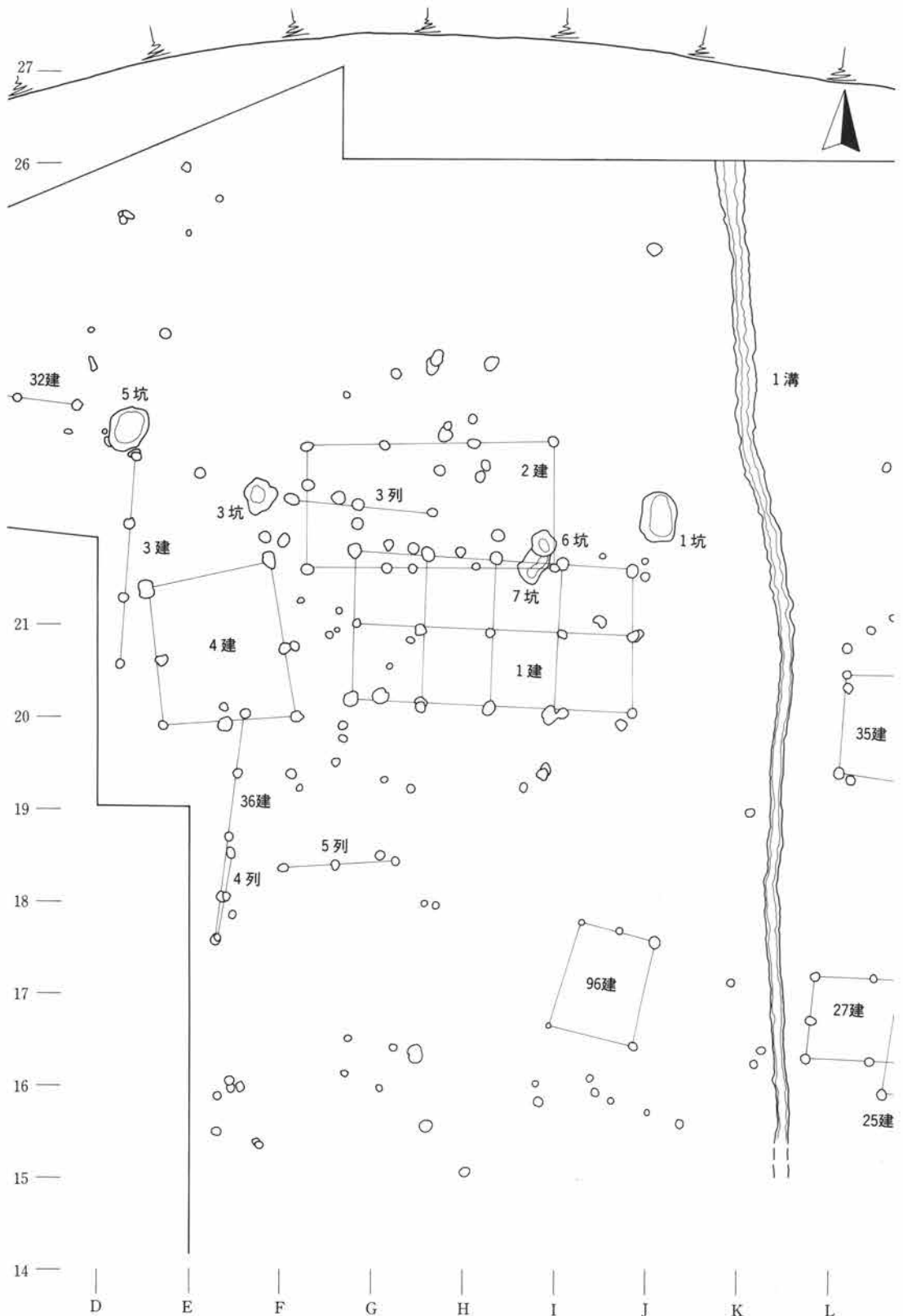
4区H-21に位置し、2号掘立柱建物、6号土坑と重複する。棟方向は東西で方位はN-91°-Eを示す。構造は桁行4間、梁行2間で、束柱のある総柱の建物である。柱間は桁行が比較的等間である。梁行東側の柱間は55cmの差を生じているが、規模としての桁行北辺が9.10m、南辺9.28m、梁行東辺が4.49m、西辺4.69mと20cm前後の差となっている。面積42.2㎡である。柱穴は円形か楕円形で柱痕は不明。南西隅の柱穴は根石を埋設する。遺物は出土しなかった。

##### 2号掘立柱建物（第134図、図版84-1）

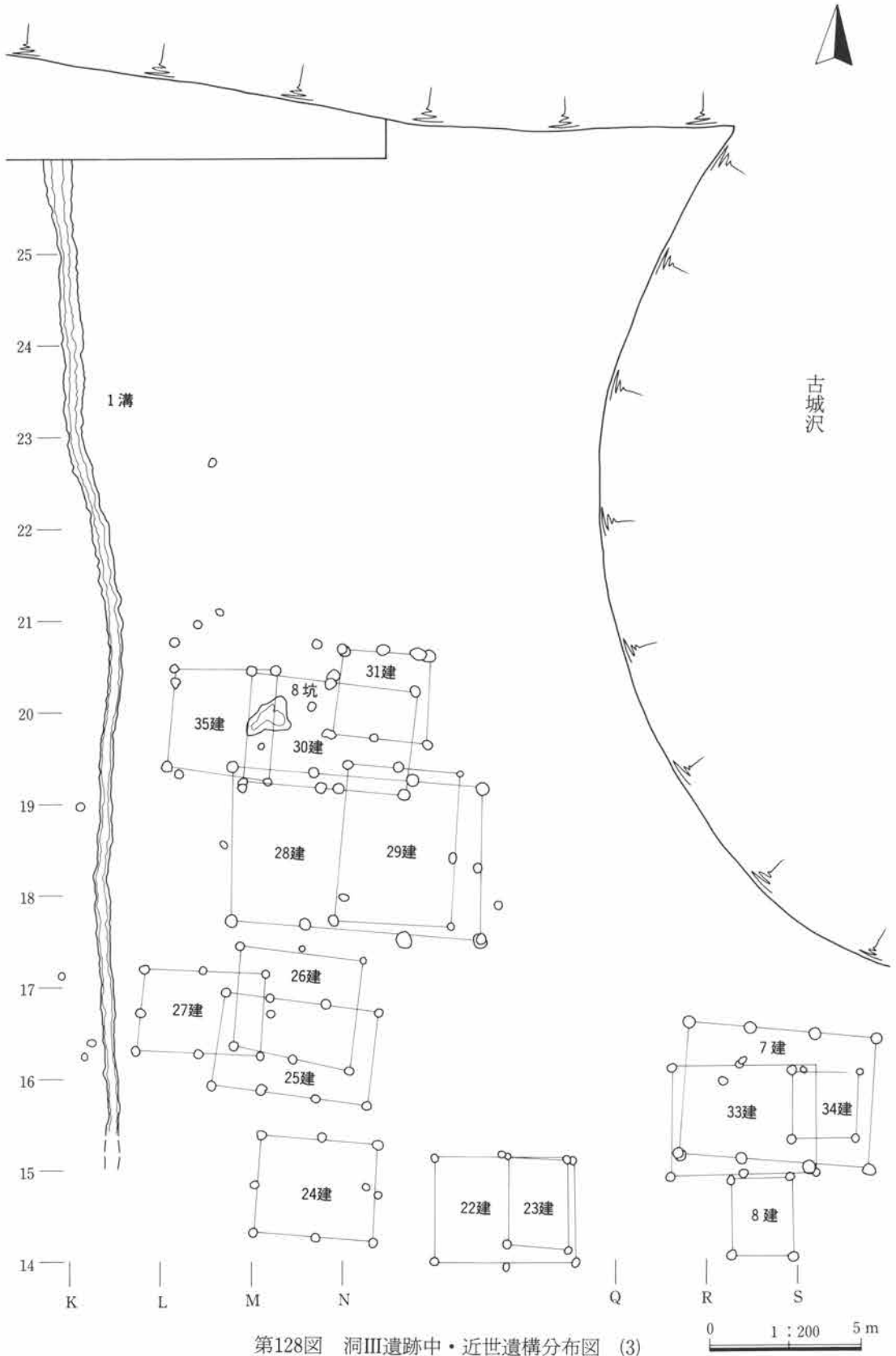
4区G-22に位置し、1号掘立柱建物と3号柱列、2・6・7号土坑と重複する。棟方向は東西で方位はN-87°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で、梁行の柱間にわずかに差があり、西1間が東1間よりも7cmほど短くなっている。規模は桁行8.07m、梁行4.04mで桁行がほぼ梁行の2倍の数値を示し、面積32.6㎡である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。



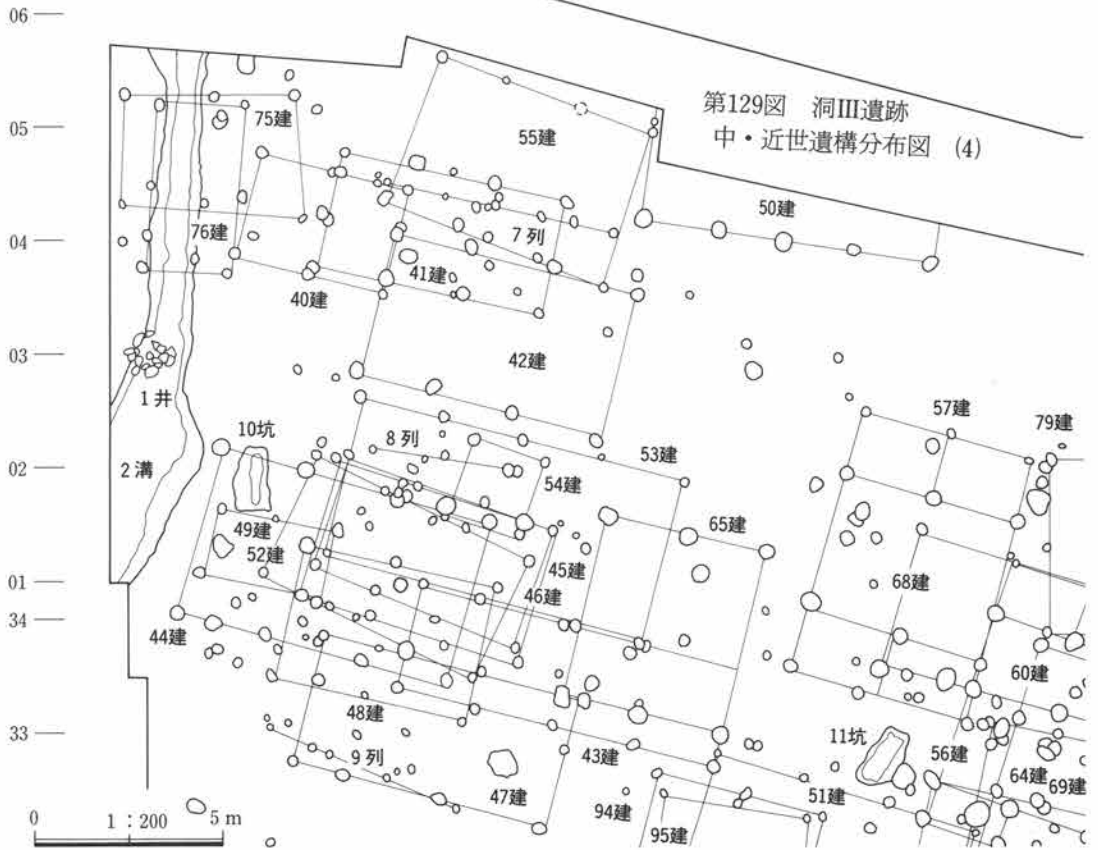
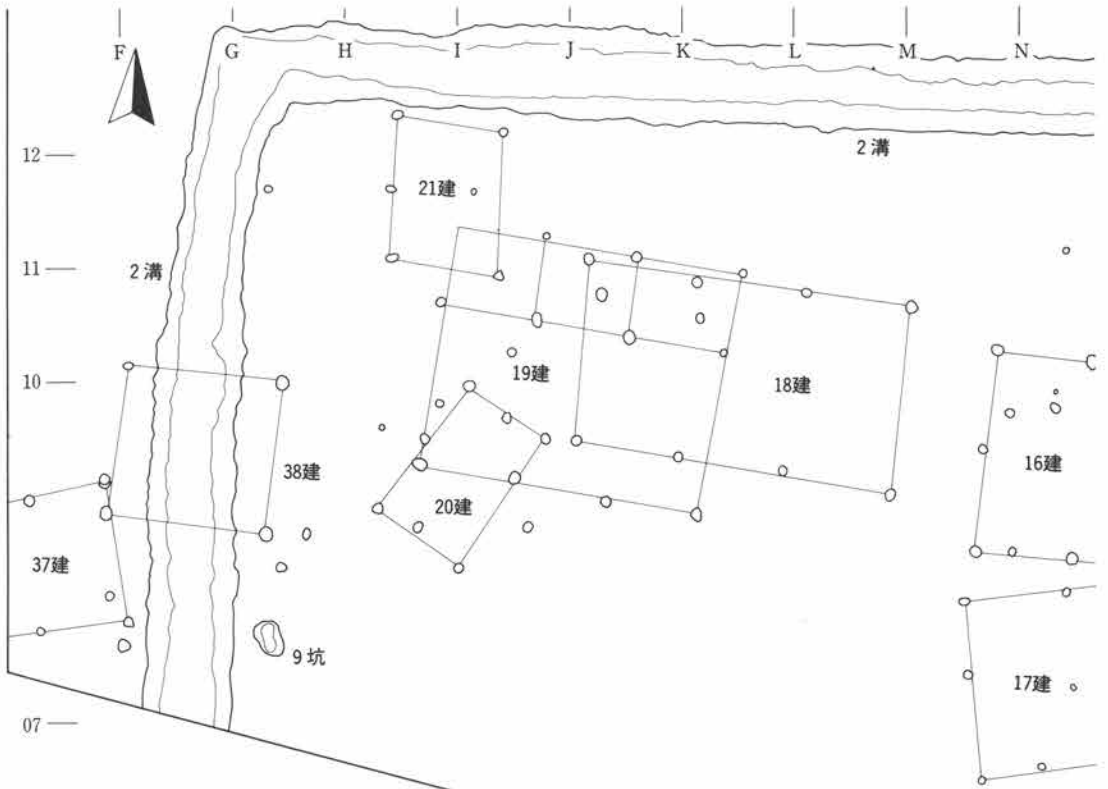
第126図 洞III遺跡中・近世遺構分布図（1）



第127図 洞III遺跡中・近世遺構分布図 (2)



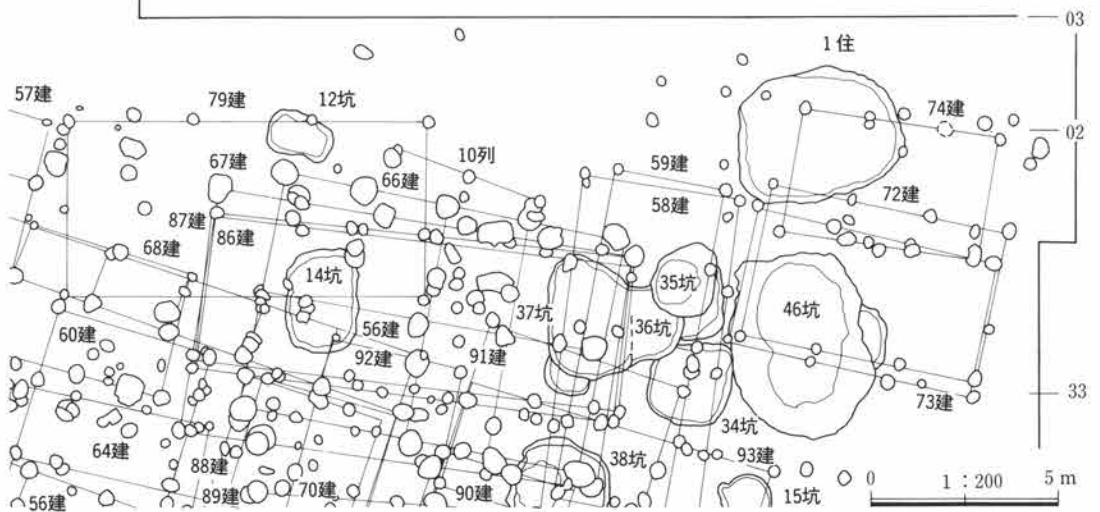
第128図 洞III遺跡中・近世遺構分布図 (3)



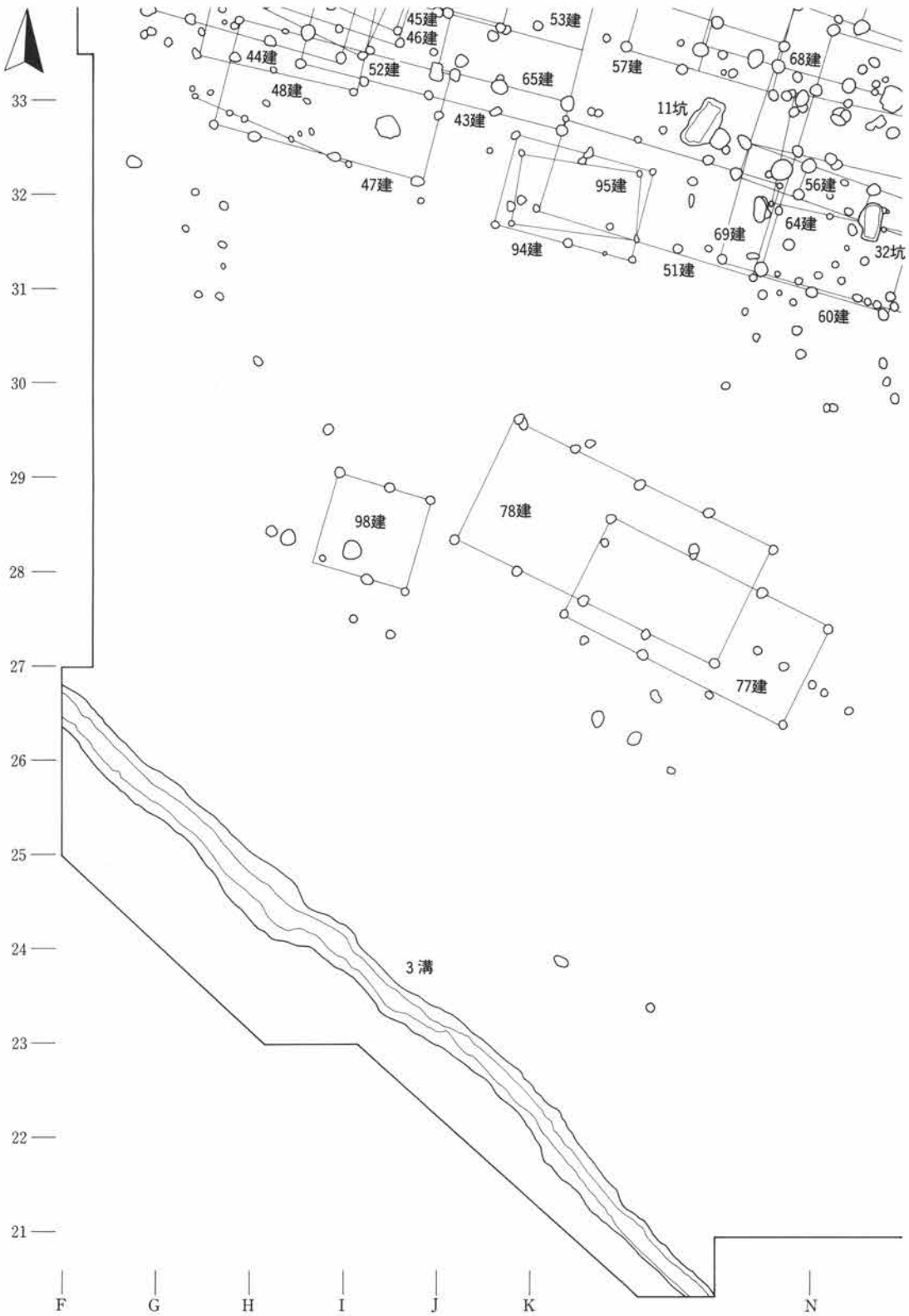
第129図 洞III遺跡  
中・近世遺構分布図 (4)



第130図 洞III遺跡中・近世遺構分布図 (5)

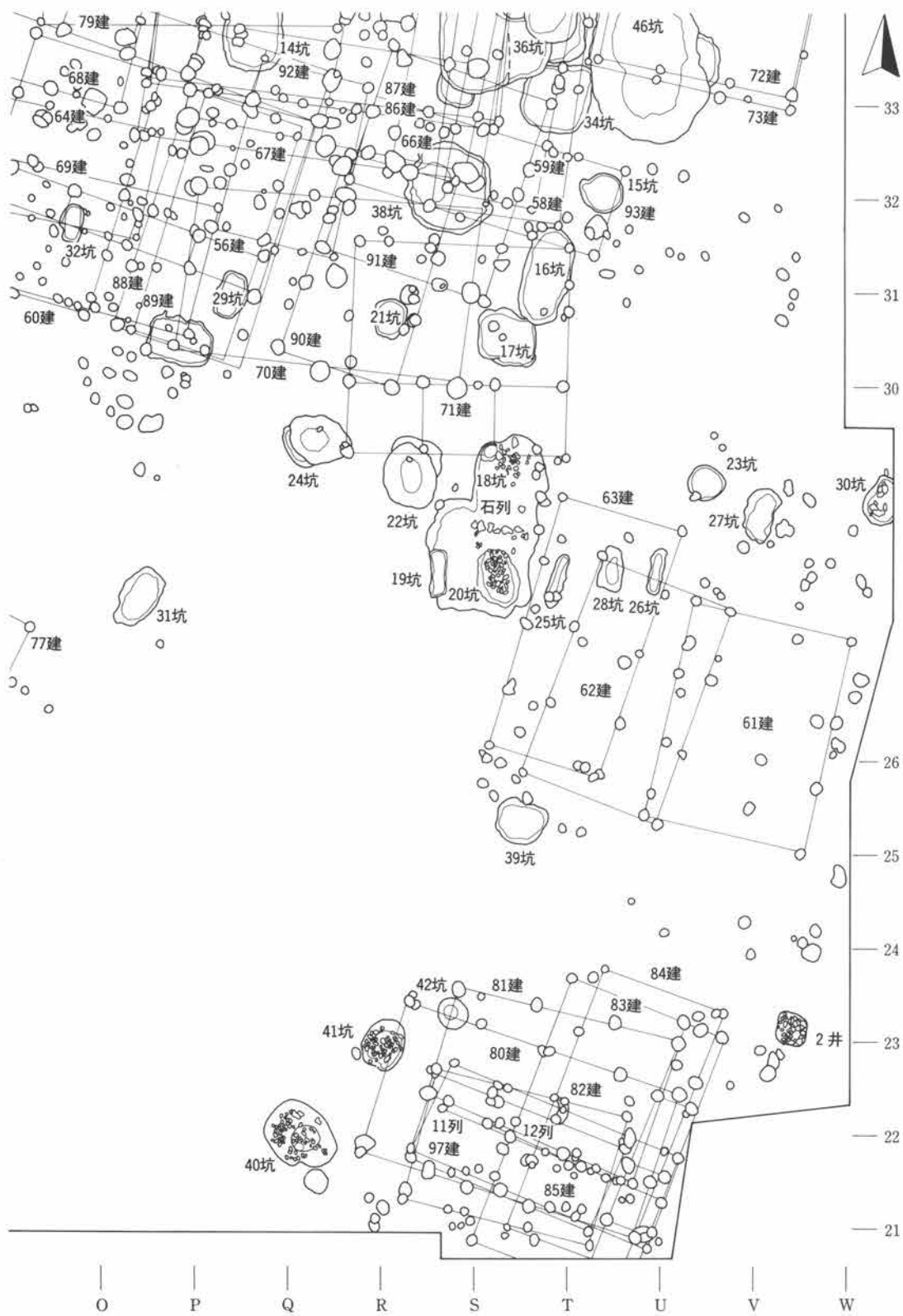






第131図 洞Ⅲ遺跡中・近世遺構分布図 (6)

0 1 : 200 5 m



第132图 洞III遺跡中・近世遺構分布图 (7)

**3号掘立柱建物**（第188図、図版84-1）

4区D-21に位置する。柱間を3間確認しただけの柱列である。方位はN-3°-Eで、柱間は南1間がやや短くなっており、規模は6.67mである。柱穴は円形で出土遺物はない。

**4号掘立柱建物**（第134図、図版84-1）

4区E-20に位置し、南方で36号柱列と重複する。棟方向は南北で方位はN-12°-Wを示す。構造は桁行2間、梁行2間の総柱の建物である可能性が考えられ、歪みを持つ。桁行が東辺2間が西辺2間より51cmほど長くなっている。規模は桁行4.69m、梁行4.28m、面積20.1m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か楕円形で、西桁行の柱穴2カ所に根石を埋設する。出土遺物はない。

**5号掘立柱建物**（第135図、図版84-2）

4区A-23に位置し、2号柱列と32号掘立柱建物が重複する。棟方向は東西で方位N-92°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で、柱間はほぼ等間である。規模は桁行5.89m、梁行3.48m、面積20.5m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

**6号掘立柱建物**（第135図、図版84-2）

4区X'-23に位置する。棟方向は東西で方位N-92°-Eで5号掘立柱建物と同一である。構造は桁行2間、梁行1間でわずかに歪みを持つ。桁行中央の柱穴は中央東寄りに位置し、柱間に33cm~54cmほどの差がある。規模は桁行4.91m、梁行3.98m、面積19.6m<sup>2</sup>である。柱穴は楕円形気味で柱痕は不明。出土遺物はない。

**7号掘立柱建物**（第136図、図版85-1）

4区R-15に位置し、33・34号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N-92°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間でほぼ等間である。桁行の柱間は北辺で最大17cm、南辺で37cmの差がある。規模は桁行6.30m、梁行4.32m、面積27.2m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で、南桁行と北桁行東隅の柱穴には小礫が詰められていた。据え方は12cm~20cm前後の円形である。出土遺物はない。

**8号掘立柱建物**（第136図、図版85-1）

4区R-14に位置する。棟方向は南北で方位N-4°-Wを示す。構造は桁行1間、梁行1間で僅かに歪みを持つ。柱間は桁行が17cm、梁行が6cmの差が生じている。規模は桁行2.53m、梁行2.03m、面積5.1m<sup>2</sup>である。柱穴は円形気味で柱痕は不明。据え方は13cm~16cm径の円形である。出土遺物はない。

**9号掘立柱建物**（第137図、図版87-1）

4区U-5に位置し、10号掘立柱建物、6・39号柱列と重複する。棟方向は東西で方位N-97°-Eを示す。構造は桁行4間、梁行1間でわずかに歪みを持つ。柱間は桁行北辺で最大48cm、南辺27cm、梁行が17cmの差を生じている。規模は桁行8.19m、梁行4.14m、面積33.9m<sup>2</sup>である。柱穴は円形気味で柱痕は不明。据え方は14cm~22cm径の円形で炭化物を含む黒褐色土の埋土であった。出土遺物はない。

**10号掘立柱建物**（第137図、図版87-1）

4区T-6に位置し、9・12・14号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N-95°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行がほぼ等間であるが、梁行は東辺より西辺が27

cmほど短い。規模は桁行7.65m、梁行4.77m、面積36.5㎡である。柱穴は一部に歪む形状のものがあるが大半は円形である。据え方は10cm～18cm径の円形である。出土遺物はない。

**11号掘立柱建物**（第138図、図版86—2・87—1）

4区V—10に位置し、調査区内でその全容を明確にできなかった。棟方向は東西と考えられ、方位N—82°—Eを示す。構造は桁行2間以上、梁行1間である。柱間は検出された北辺の桁行では2.25m前後で差は少ない。規模は桁行7.65m以上、梁行4.11mである。柱穴は円形気味で柱痕は不明。出土遺物はない。

**12号掘立柱建物**（第138図、図版86—2・87—1）

4区S—6に位置し、9・10・13・14号掘立柱建物の4軒と6号柱列と重複する。棟方向は東西で方位はN—99°—Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間でわずかに歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で最大21cm、南辺で23cmの差が生じ、梁行は東辺の方が西辺より9cmほど長い。規模は桁行6.33m、梁行4.72m、面積29.9㎡である。柱穴は円形で、据え方に位置する一段深い掘り方を大半が持つ。出土遺物はない。

**13号掘立柱建物**（第139図、図版86—2・87—1）

4区Q—7に位置し、12・14・16・17号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位はN—104°—Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で最大54cm、南辺で54cmの差があり、南辺の全長が北辺より27cm長く、梁行は東辺の方が西辺より16cmほど長い。規模は桁行8.57m、梁行5.26m、面積45㎡である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

**14号掘立柱建物**（第140図、図版86—2・87—1）

4区S—8に位置し、10・12・13号掘立柱建物と重複する。棟方向は南北で方位はN—3°—Eを示す。構造は桁行3間、梁行2間で歪みを持つ。柱間は桁行の東西辺がほぼ同じ数値を示すが、梁行は南辺が北辺より16cmほど長い。南辺中央の柱穴は柱間中央より東寄りで55cmほど入り込む。当建物に付随する可能性が考えられる。規模は桁行8.15m、梁行4.44m、面積36.2㎡である。柱穴は円形か楕円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

**15号掘立柱建物**（第140図、図版86—2・87—1）

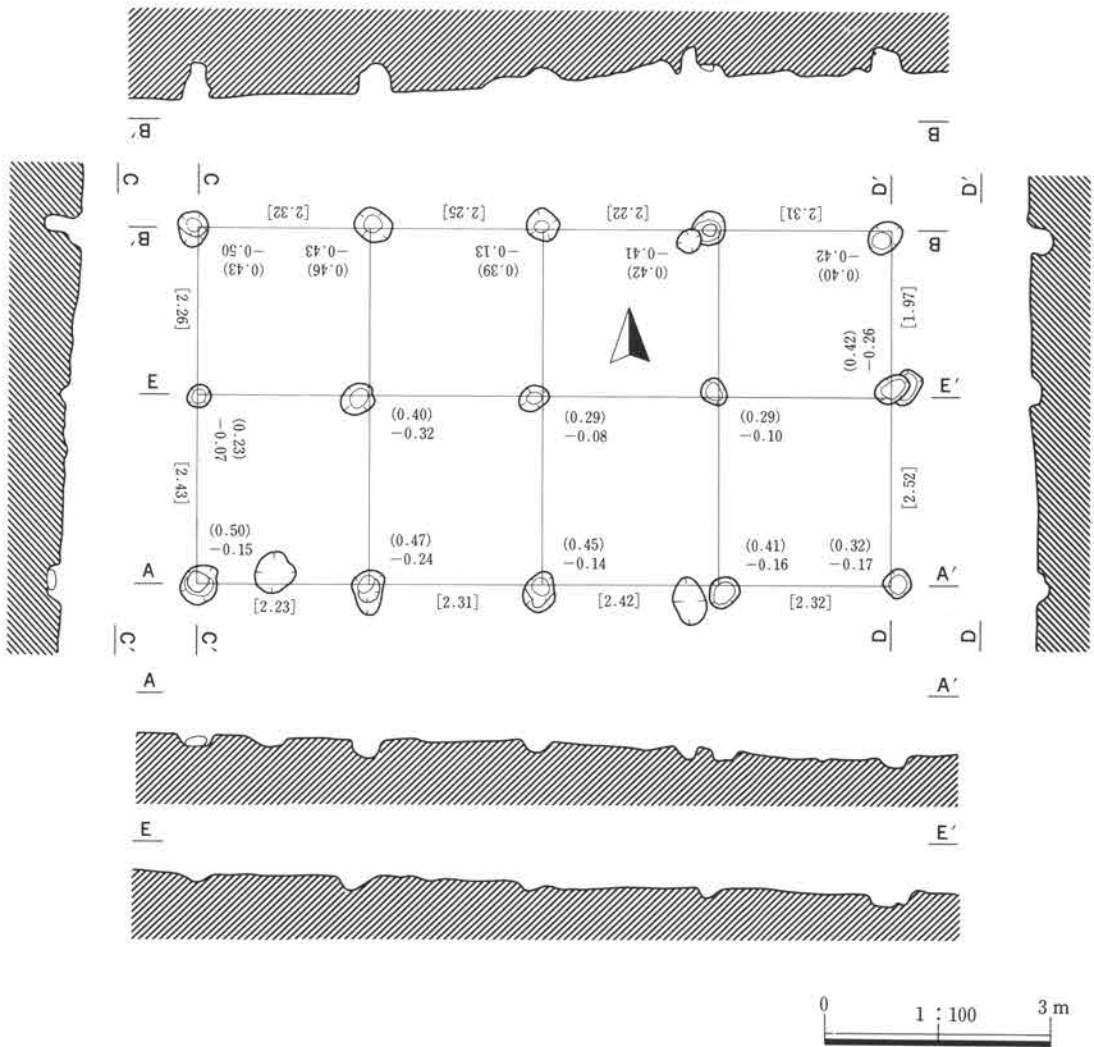
4区R—10に位置する。棟方向は東西で方位はN—80°—Eを示す。構造は桁行1間、梁行1間で東庇を付す。規模は桁行2.15m前後、梁行1.65m前後、庇の張り出し0.7mほどで面積4.6㎡である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

**16号掘立柱建物**（第139図、図版86—2・87—1）

4区N—9に位置し、13・17号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位はN—93°—Eを示す。構造は桁行3間、梁行2間で歪みを持つ。柱間は桁行の中央1間が3.30m以上で東西両端間が2.48m～2.65mを測り、南辺の全長が北辺より16cmほど長い。梁行の柱間は西辺がほぼ同じ数値であるが、東辺は13cmほどの差があり、全長も31cmほど西辺が長い。規模は桁行8.53m、梁行5.30m、面積45.2㎡である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

**17号掘立柱建物**（第141図、図版86—2・87—1）

4区O—7に位置し、13・16号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位はN—81°—Eを示す。



第133図 1号掘立柱建物

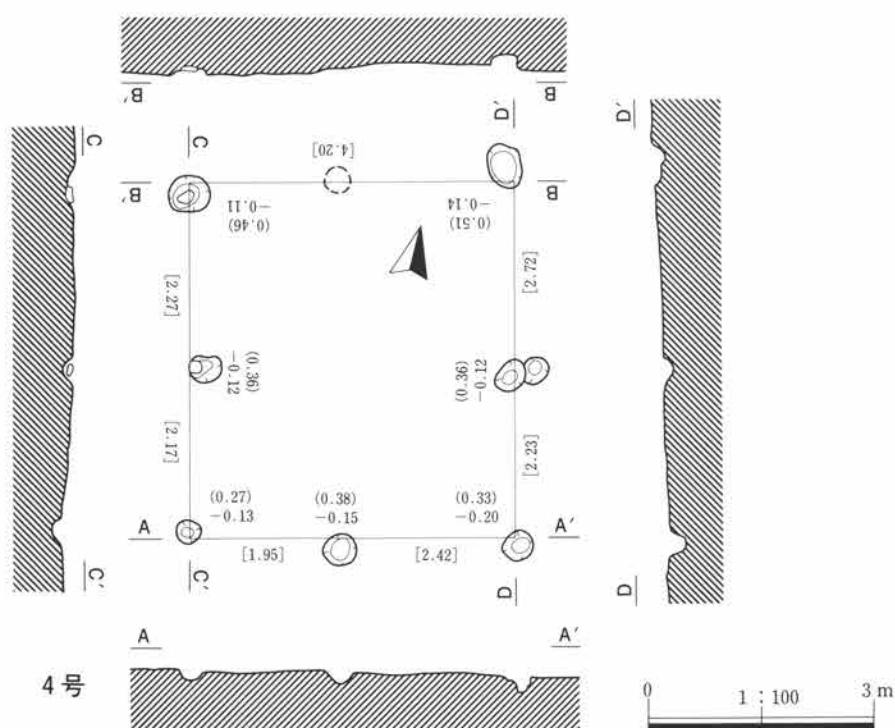
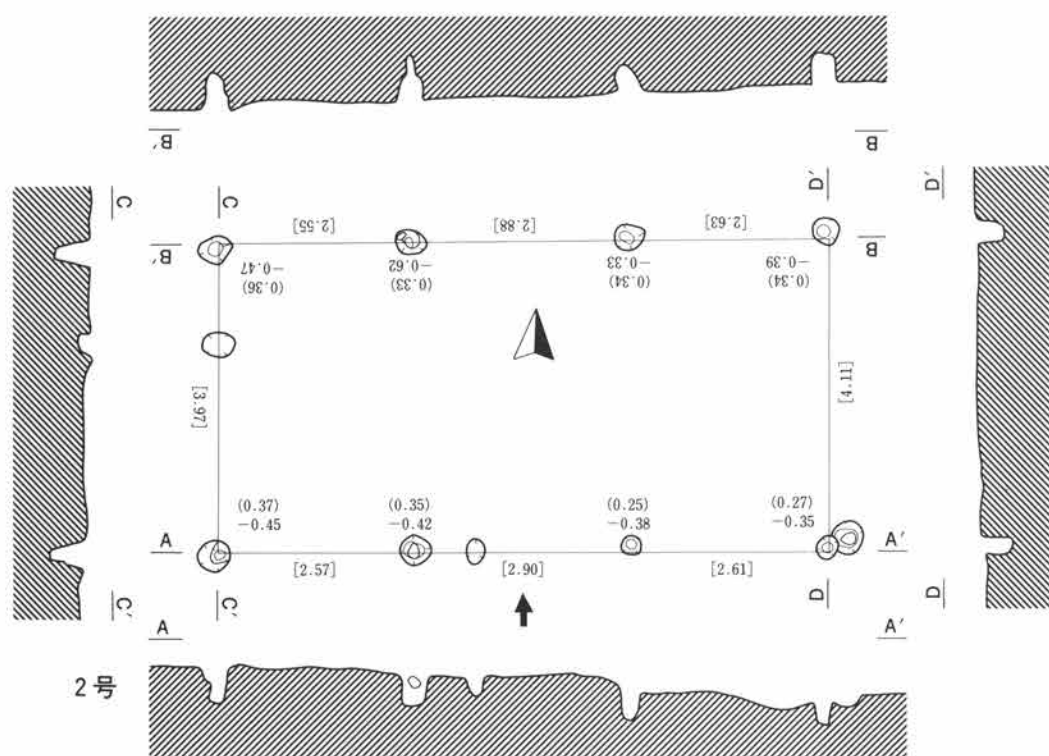
構造は桁行3間、梁行2間である。柱間は桁行の南辺に1ヵ所検出できなかった柱穴を除き、ほぼ等間で全長もほぼ等しい。梁行の中央柱穴は東西とも桁行より直交するラインより突出する。規模は桁行8.26m、梁行4.66m、面積38.4㎡である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。桁行南辺の検出できなかった柱穴付近は入り口部であろうか？

#### 18号掘立柱建物（第141図、図版86-1）

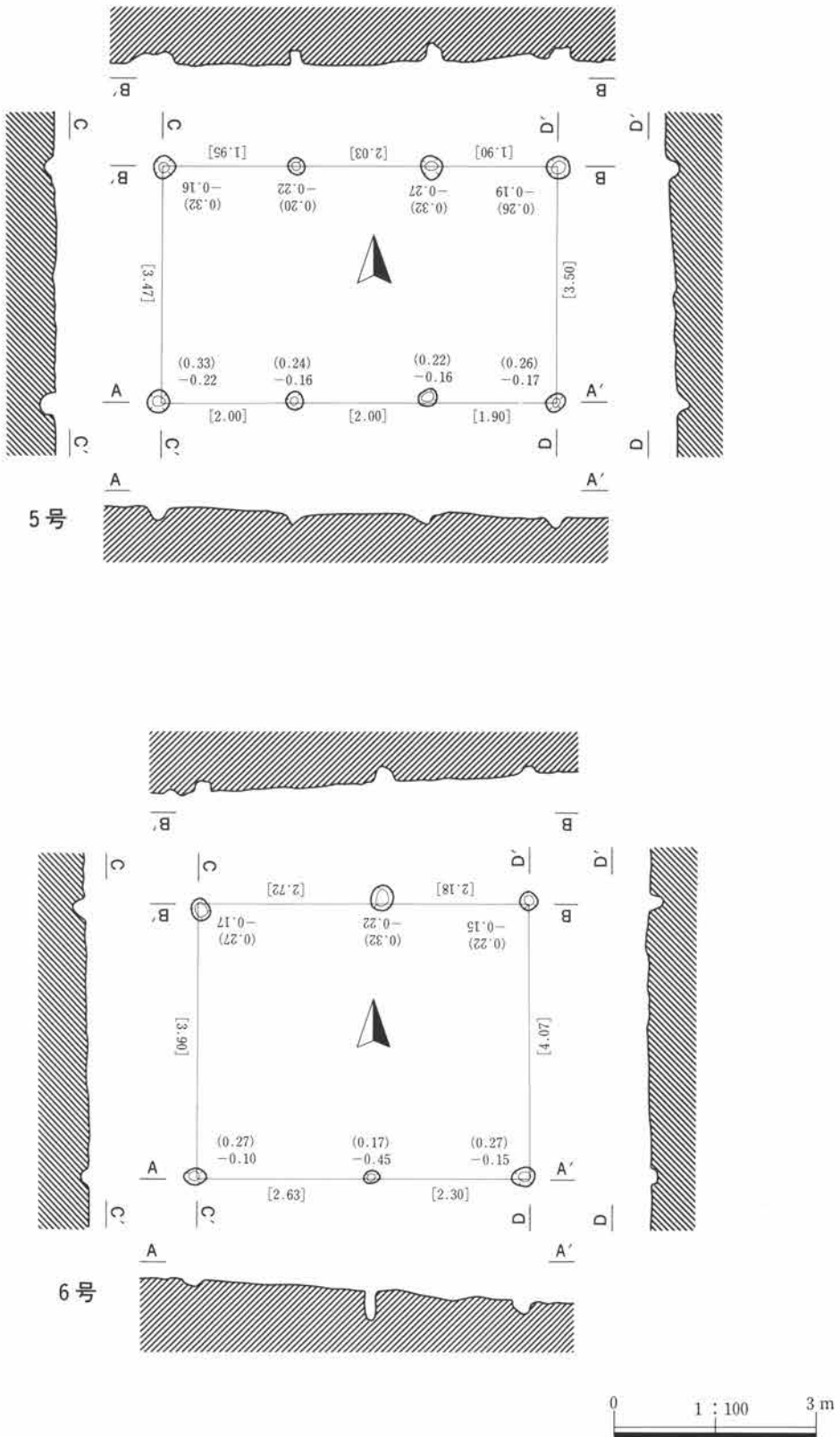
4区K-9に位置し、19号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N-97°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間でやや歪みを持つ。柱間は桁行の南北辺ともほぼ等間で、梁行は東辺が西辺より20cmほど長い。規模は桁行8.65m、梁行4.89m、面積42.2㎡である。柱穴は円形で、11cm~15cm径を測る円形の据え方が確認された。出土遺物はない。

#### 19号掘立柱建物（第142図、図版86-1）

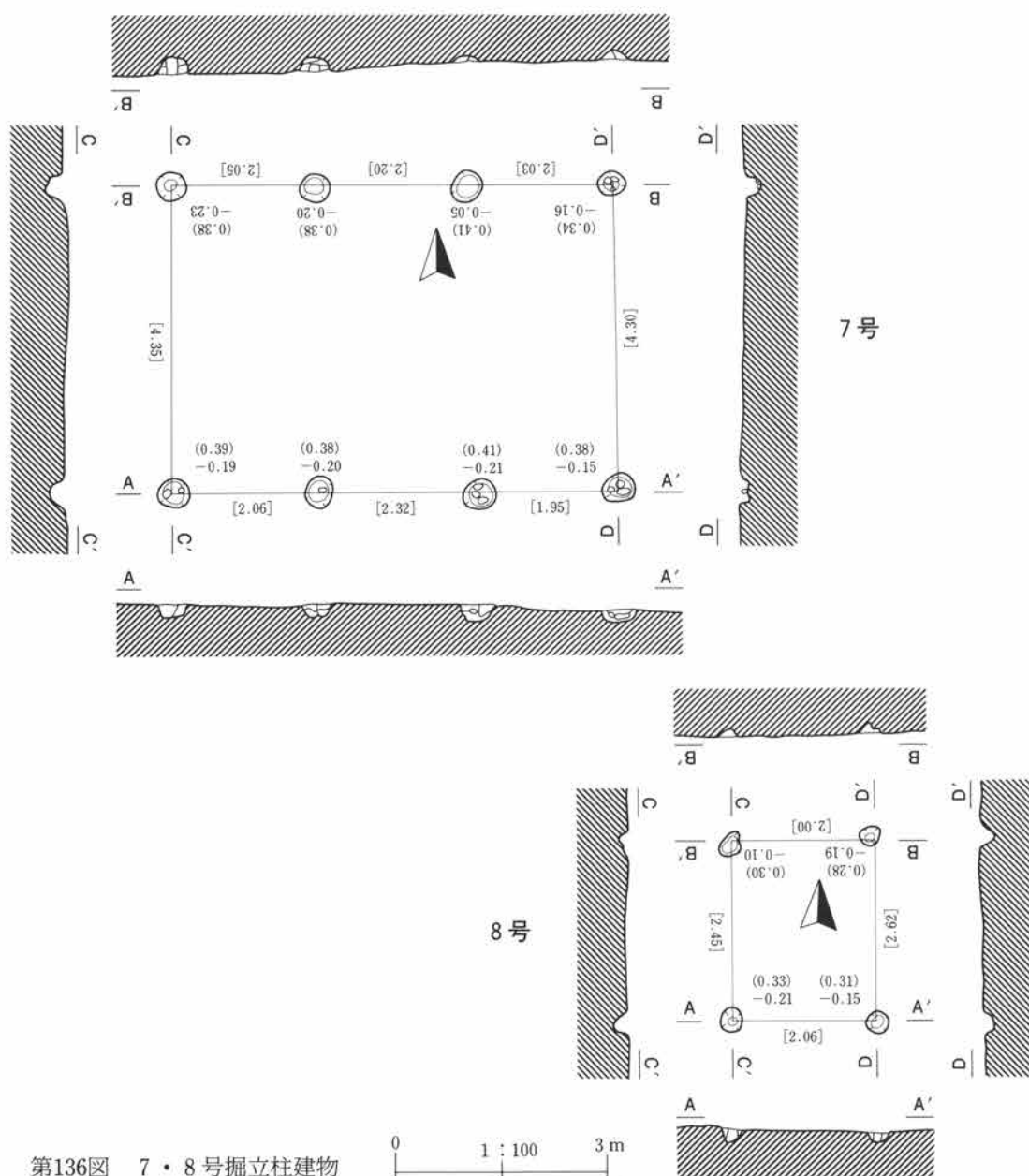
4区I-9に位置し、18・20・21号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N-97°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で、北側に2間×1間の庇を付す。柱間は桁行の南北辺ともほぼ等間であ



第134図 2・4号掘立柱建物



第135図 5・6号掘立柱建物



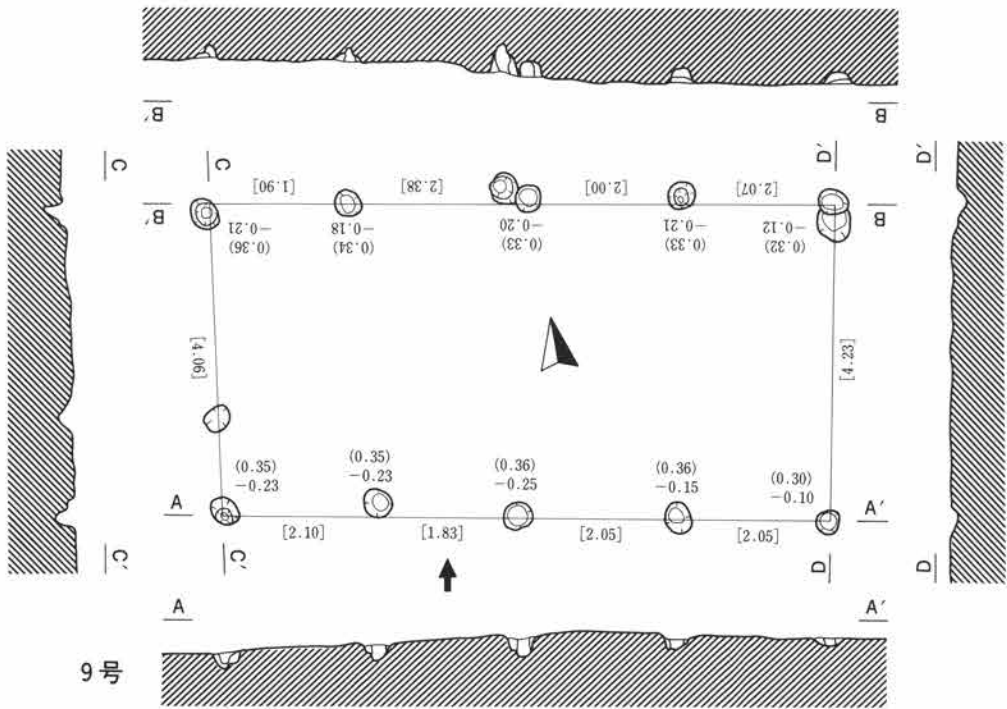
第136図 7・8号掘立柱建物

る。梁行もほぼ同じ数値を示す。北庇は北辺の桁行より直交して2.15m~2.20m張り出す。北辺の桁行西隅より直交する庇の柱穴は検出できなかった。規模は桁行7.67m、梁行6.49m、北庇を3間×1間として面積49.7㎡である。柱穴は円形か楕円形気味で桁行南辺西隅の柱穴は根石を埋設する。14cm~20cm径を測る円形の据え方を確認する。出土遺物はない。

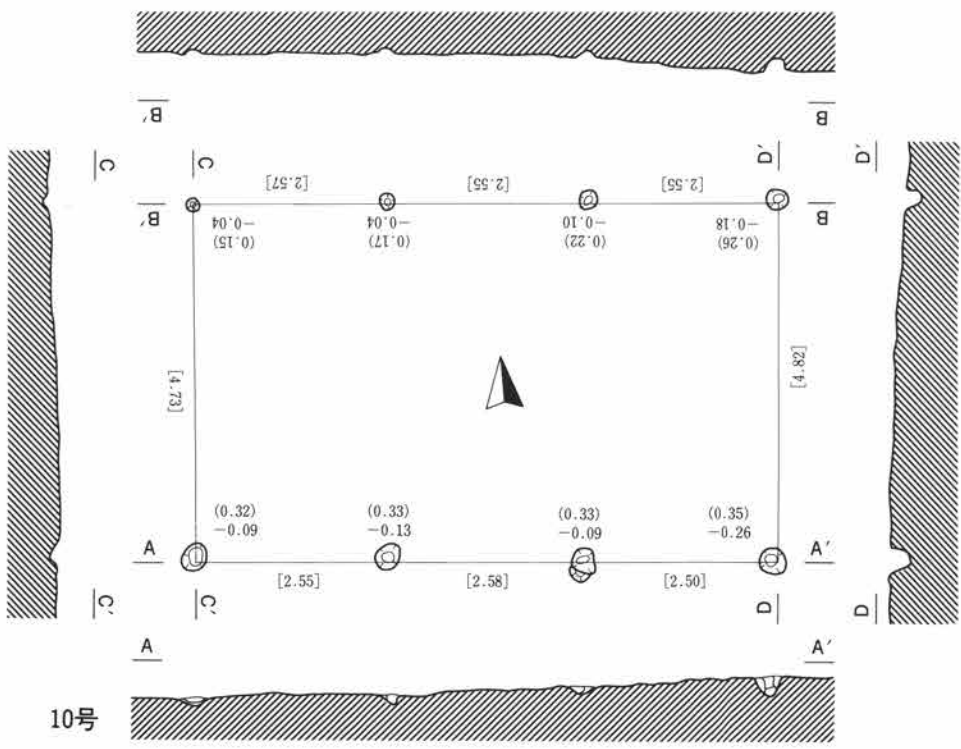
20号掘立柱建物 (第142図、図版86-1)

4区I-9に位置し、19号掘立柱建物と重複する。棟方向は南北で方位N-33°-Eを示す。構造は桁行2間、梁行2間で歪みを持つ。桁行の柱穴は東辺中央部が検出できなかった。梁行の南北中央の柱穴が入り込み、南辺が20cmほど北辺より長い。規模は桁行4.08m、梁行2.60m、面積10.6㎡である。柱穴は円形である。据え方は9cm~15cmの円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

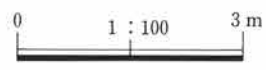




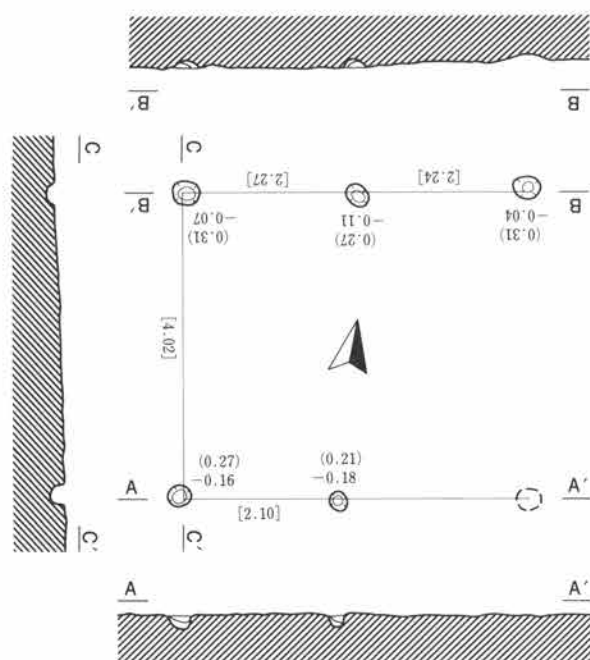
9号



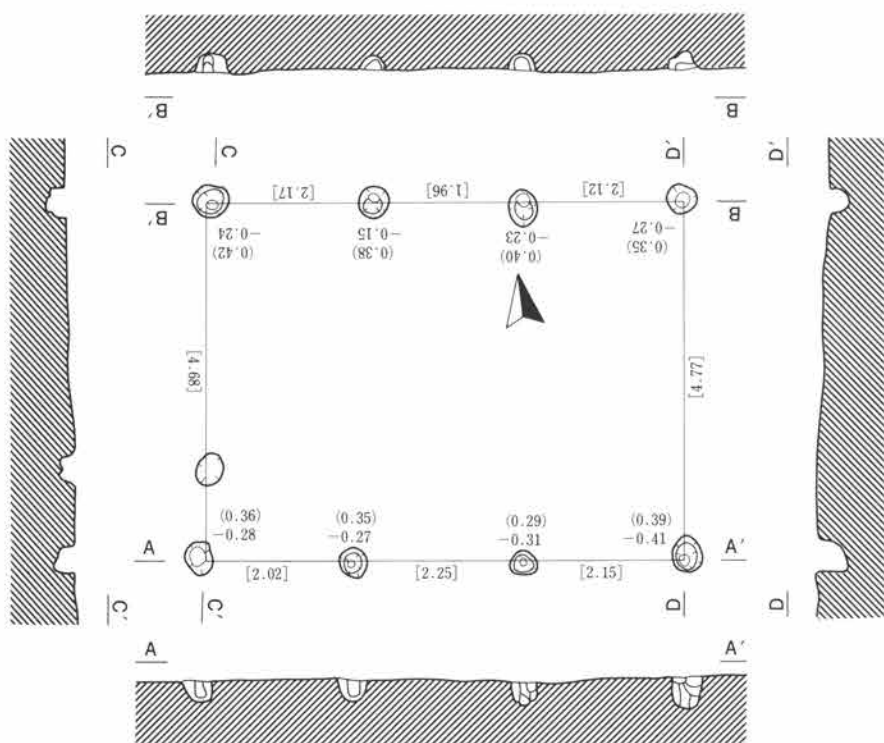
10号



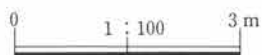
第137図 9・10号掘立柱建物



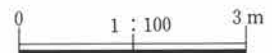
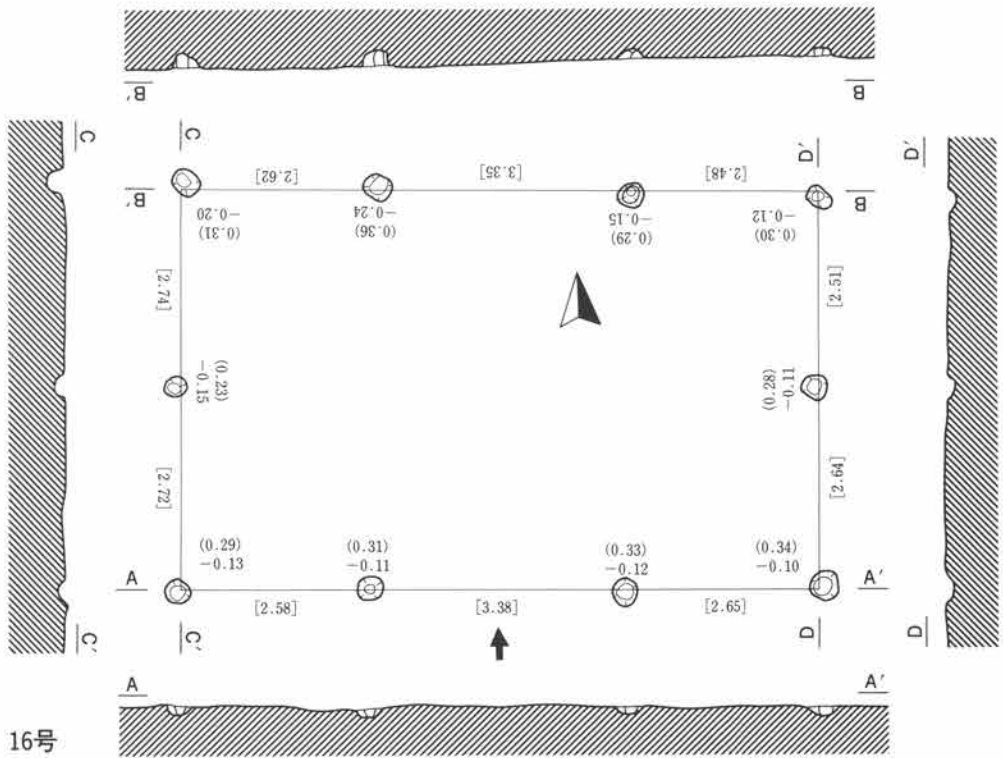
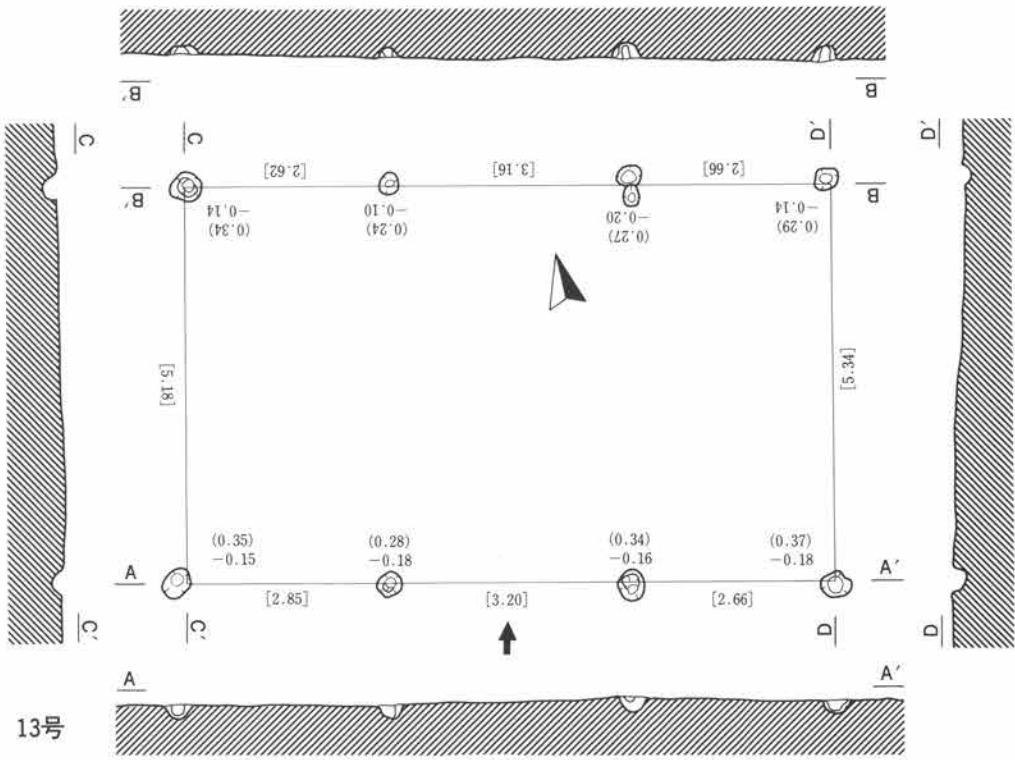
11号



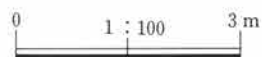
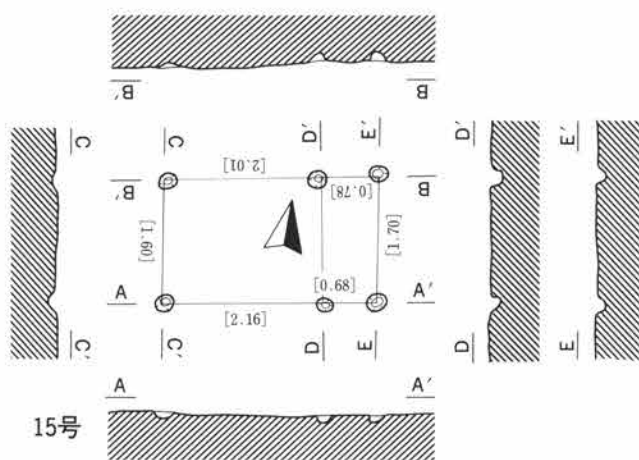
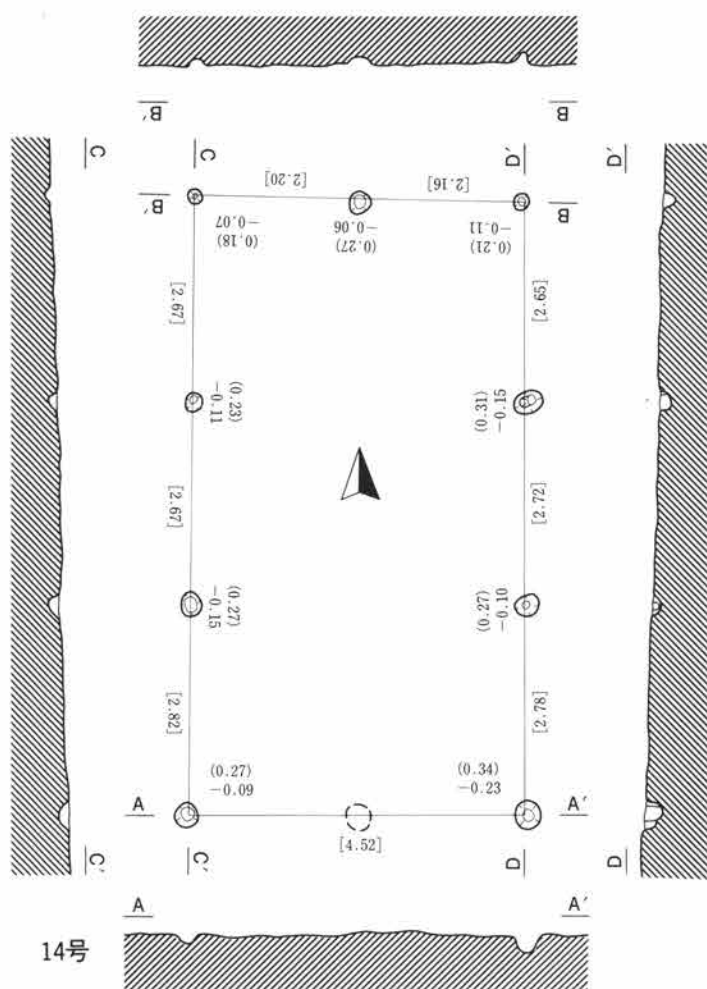
12号



第138図 11・12号掘立柱建物



第139図 13・16号掘立柱建物



第140図 14・15号掘立柱建物

**21号掘立柱建物**（第143図、図版86—1）

4区H—11に位置し、19号掘立柱建物と重複する。棟方向は南北で方位N±0を示す。構造は桁行2間、梁行1間で歪みを持つ。桁行の東辺中央部柱穴が検出できなかった。桁行は西辺が東辺より11cmほど長く、梁行の柱間はほぼ等間である。規模は桁行3.77m、梁行2.81m、面積10.6㎡である。柱穴は円形気味で、柱痕は不明。出土遺物はない。

**22号掘立柱建物**（第143図、図版85—1）

4区O—14に位置し、23号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N—87°—Eを示す。構造は桁行が2間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺で24cm、南辺で9cmの差があり、南北辺とも中央の柱穴が直交するラインより突出する位置にある。梁行は東辺が西辺より11cmほど短い。規模は桁行4.64m、梁行3.37m、面積15.6㎡である。柱穴は楕円形気味のものが多く、据え方は9cm～13cmの円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

**23号掘立柱建物**（第143図、図版85—1）

4区P—14に位置し、22号掘立柱建物と包括されて重複する。棟方向は南北で方位N—2°—Wを示す。構造は桁行、梁行1間でやや歪みを持つ。柱間は桁行の東西辺が4cm、梁行の南北辺が9cmの差である。規模は桁行2.94m、梁行1.99m、面積5.8㎡である。柱穴は円形気味で柱痕は不明。出土遺物はない。

**24号掘立柱建物**（第144図、図版85—1）

4区M—14に位置する。棟方向は東西で方位N—91°—Eを示す。構造は桁行、梁行2間である。柱間は桁行の北辺で18cm、南辺で15cmの差があり、北辺中央の柱穴が僅かに突出する。全長では南辺が11cmほど長い。梁行の柱間はほぼ等間である。規模は桁行3.93m、梁行3.14m、面積12.3㎡である。柱穴は円形で、据え方は10cm～17cm径の円形を呈している。出土遺物はない。

**25号掘立柱建物**（第144図、図版85—1）

4区M—16に位置し、26・27号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N—95°—Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺で最大40cm、南辺で22cmの差が生じ、南辺の全長が北辺より11cm長い。梁行はほぼ等間である。規模は桁行5.10m、梁行3.09m、面積15.7㎡である。柱穴は円形で、据え方は12cm～16cm径の円形である。柱痕は不明。出土遺物はない。

**26号掘立柱建物**（第145図、図版85—1）

4区M—16に位置し、25・27号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N—97°—Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の南北辺ともほぼ等間であるが、北辺が南辺より22cmほど長い。梁行は西辺が東辺より27cmほど短い。桁行北辺の中央柱穴が突出する。規模は桁行3.97m、梁行3.41m、面積13.5㎡である。柱穴は円形で、据え方は12cm～16cm径の円形を呈している。出土遺物はない。

**27号掘立柱建物**（第145図、図版85—1）

4区L—16に位置し、25・26号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N—90°—Eを示す。構造は桁行、梁行2間で僅かに歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で8cm、南辺で7cmの差があり、北辺が11cmほど南辺より短い。梁行の東辺中央の柱穴が突出し、東辺で16cm、西辺で11cmの差があるが辺の

全長はほぼ同じ。規模は桁行4.07m、梁行2.63m、面積10.7㎡である。柱穴は円形で、据え方は15cm前後の径の円形を呈している。出土遺物はない。

**28号掘立柱建物**（第146図、図版85—1）

4区M—18に位置し、29・30・35号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N—92°—Eを示す。構造は桁行3間、梁行2間で僅かに歪みを持つ。柱間は桁行中央1間が長く、北辺で両端と60cm～99cm、南辺では93cm～104cmの差があるが、全長では近似値である。梁行の柱間は東辺で23cm、西辺で9cmの差である。梁行中央の柱穴は東辺では入り込み、西辺では突出する。規模は桁行8.18m、梁行4.96m、面積40.5㎡である。柱穴は円形を呈し、据え方は15cm～24cm前後の径の円形を呈している。出土遺物はない。

**29号掘立柱建物**（第146図、図版85—1）

4区M—18に位置し、28・30号掘立柱建物と重複する。棟方向は南北で方位N—2°—Eを示す。構造は桁行2間、梁行2間と考えられ、歪みを持つ。桁行の西辺中央部と梁行の南辺中央部の柱穴は検出されなかった。柱間は桁行東辺で46cmの差があり、全長では西辺が10cmほど長い。梁行は南辺が15cmほど北辺より長い。規模は桁行5.05m、梁行3.70m、面積18.7㎡である。柱穴は円形か楕円形である。柱痕は不明。出土遺物はない。

**30号掘立柱建物**（第147図、図版85—1）

4区M—19に位置し、28・29・31・35号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N—93°—Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で17cm、南辺で23cmの差があり、北辺の全長が南辺より18cm長い。梁行は東辺が西辺より28cm短い。規模は桁行5.38m、梁行3.56m、面積19.1㎡である。柱穴は円形気味で、据え方は15cm～20cm径の円形を呈している。出土遺物はない。

**31号掘立柱建物**（第147図、図版85—1）

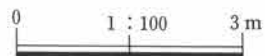
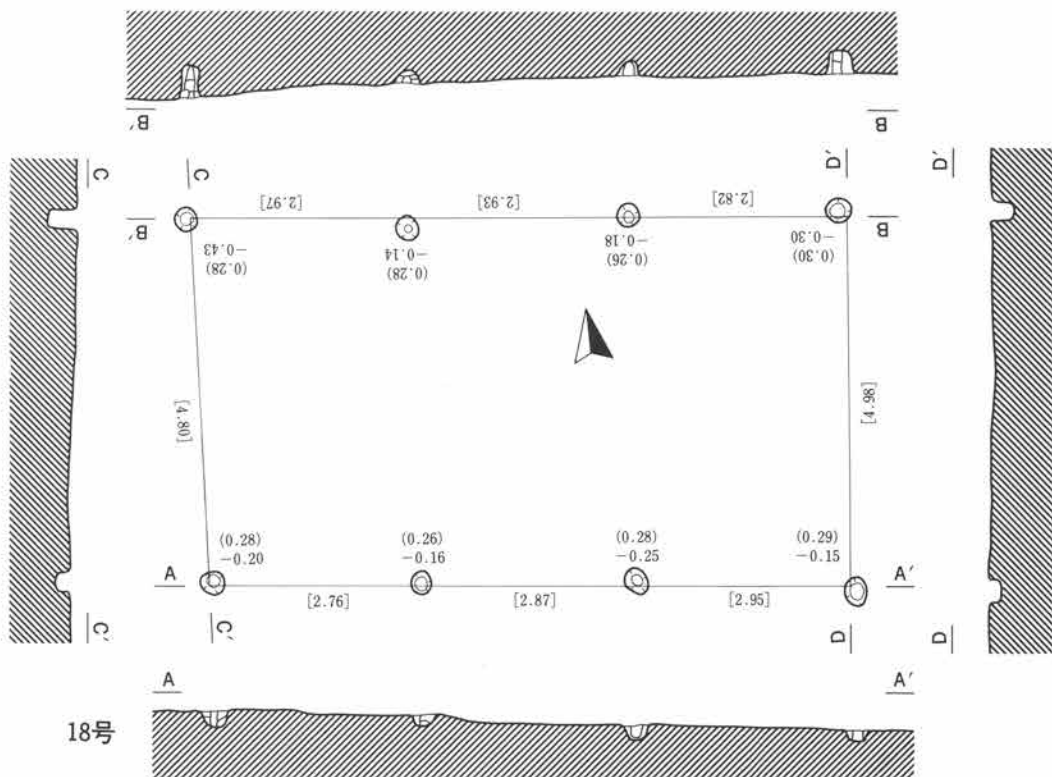
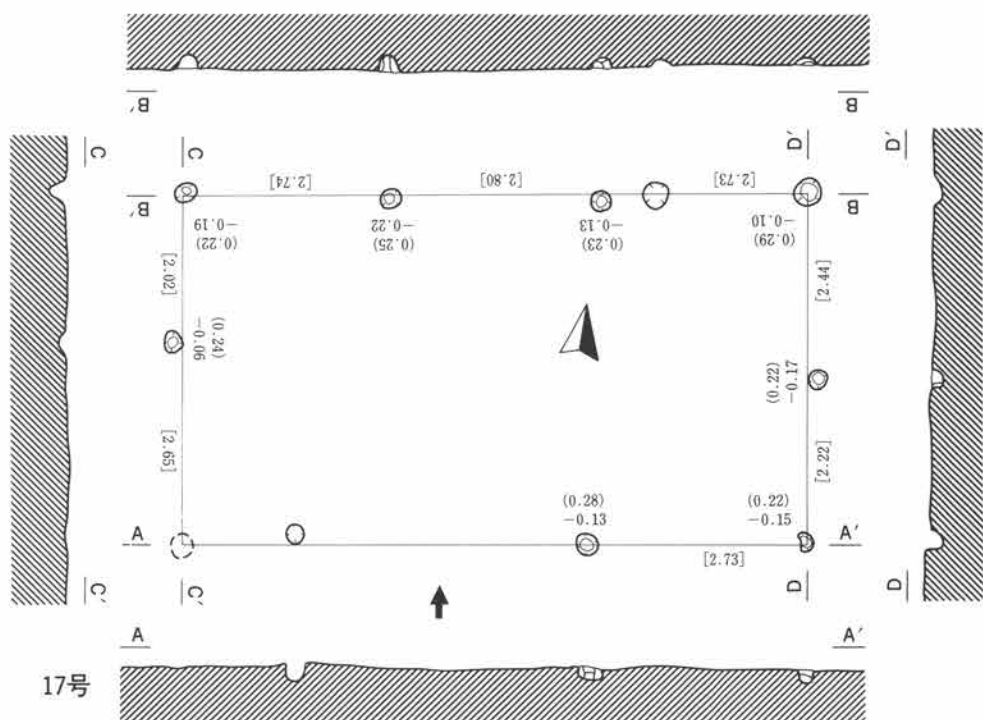
4区N—20に位置し、30号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N—93°—Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で28cm、南辺で36cmの差があり、南辺の全長が北辺より28cmほど長い。梁行は東辺が15cmほど西辺より長い。規模は桁行3.02m、梁行2.92m、面積8.8㎡である。柱穴は円形気味で、桁行南辺中央柱穴を除いて据え方は16cm～20cm径の円形を呈している。出土遺物はない。

**32号掘立柱建物**（第188図、図版85—1）

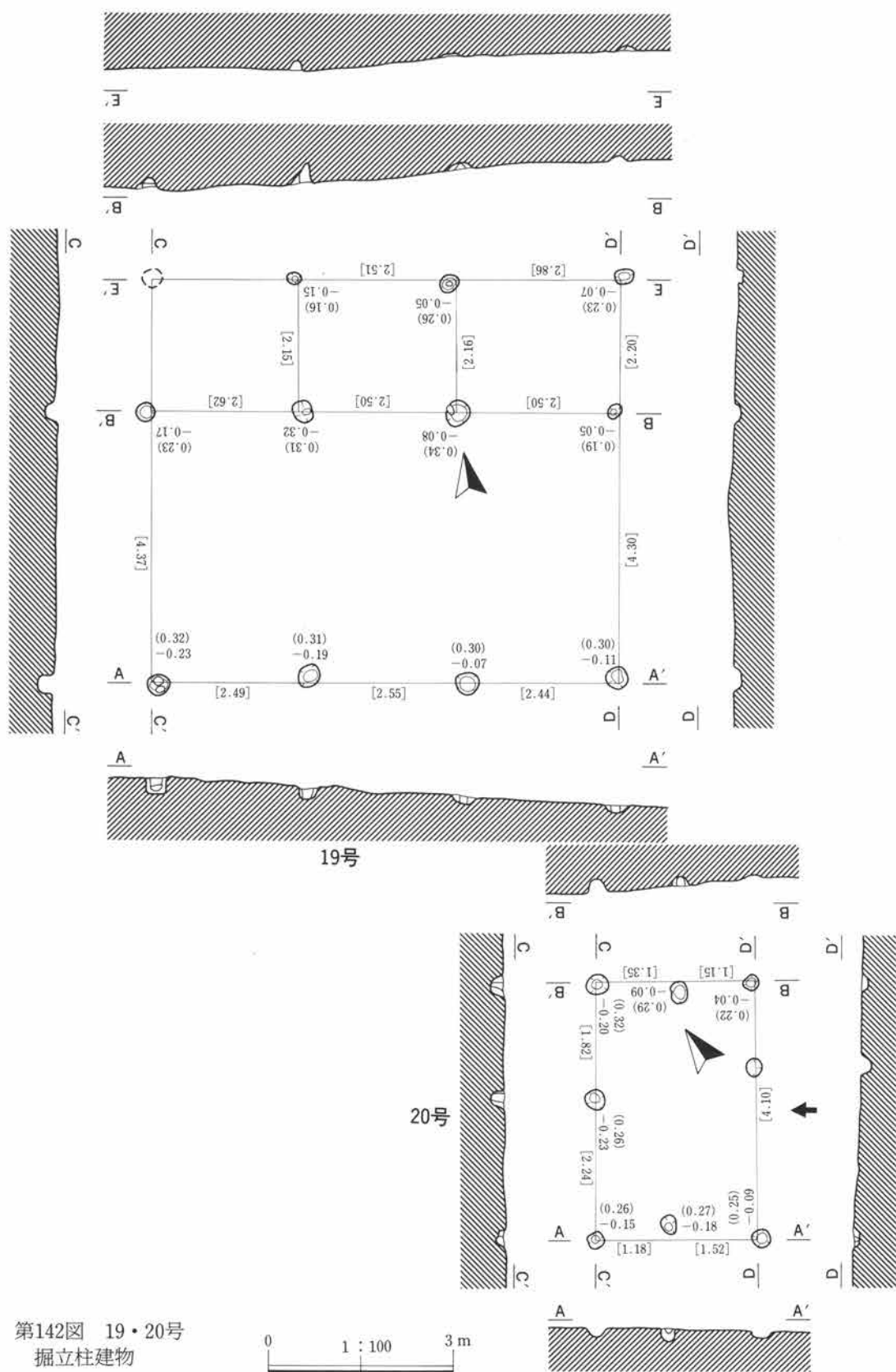
4区B—23に位置し、5号掘立柱建物と重複する掘立柱建物であれば棟方向は東西で方位N—88°—Eを示す。柱間は中央1間が長く、両端がやや短い。規模は5.95mである。柱穴は円形か楕円形気味で、根石を埋設する個所がある。出土遺物はない。

**33号掘立柱建物**（第148図、図版85—1）

4区R—15に位置し、7・8・34号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N—86°—Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間と考えられる。桁行北辺の東隅柱穴は検出できなかった。桁行の北辺で30cm、南辺で7cmの差がある。規模は桁行4.76m、梁行3.49m、面積16.6㎡となろう。柱穴は円形で部分的に据え方が看取される。出土遺物はない。

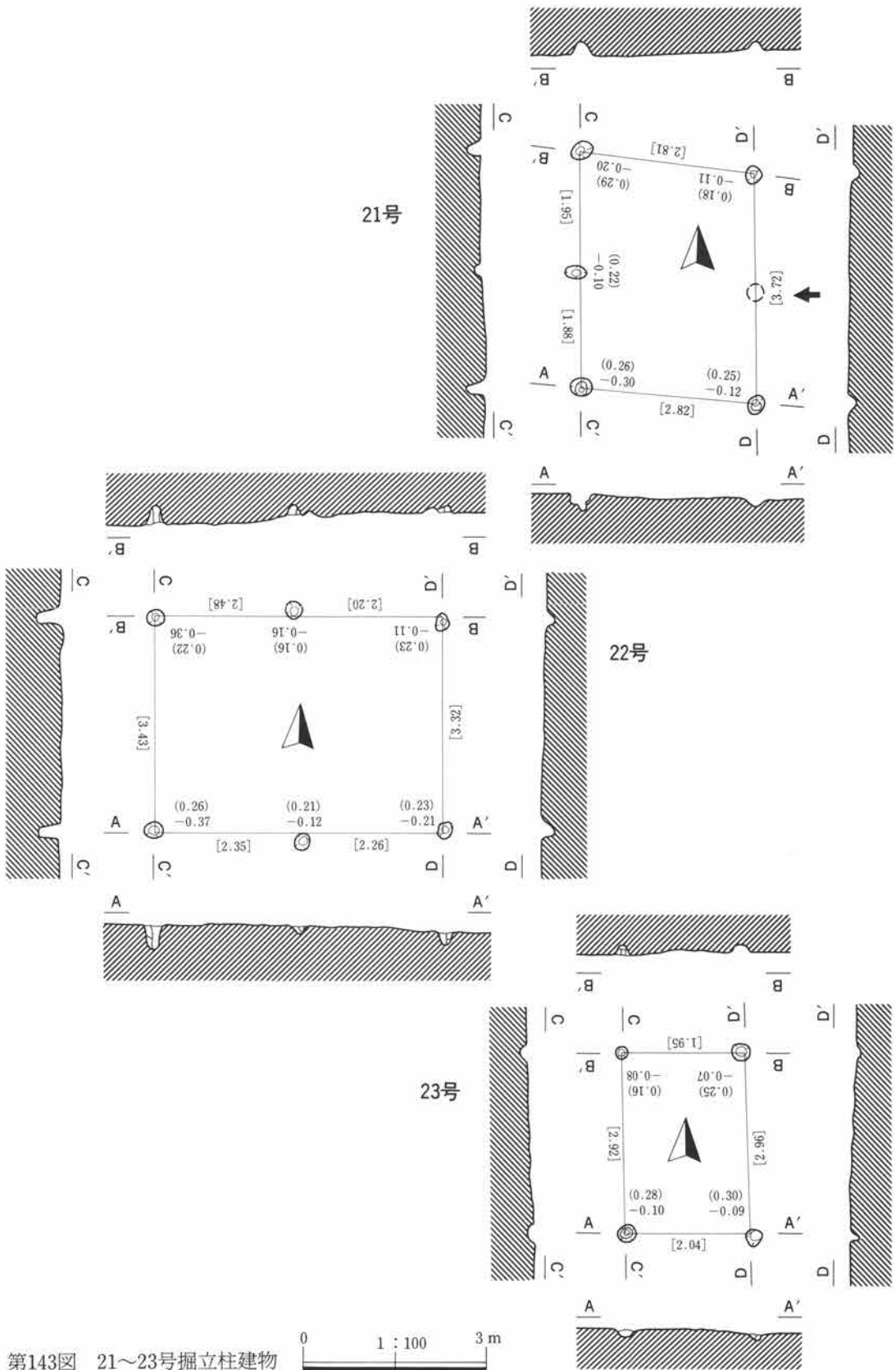


第141図 17・18号掘立柱建物

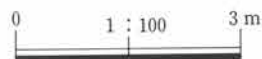
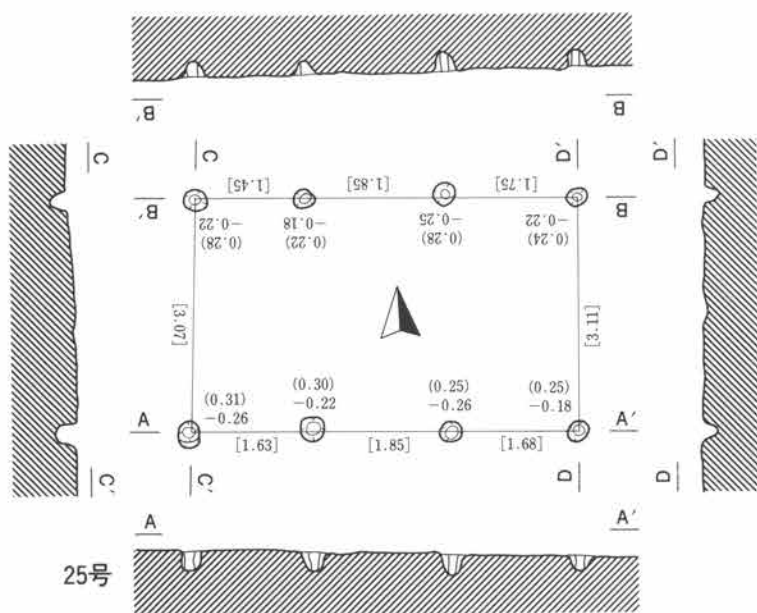
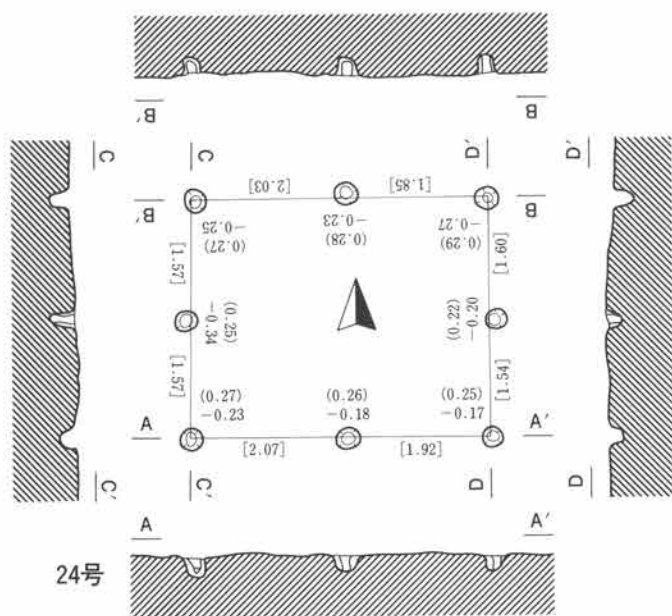


第142図 19・20号  
掘立柱建物

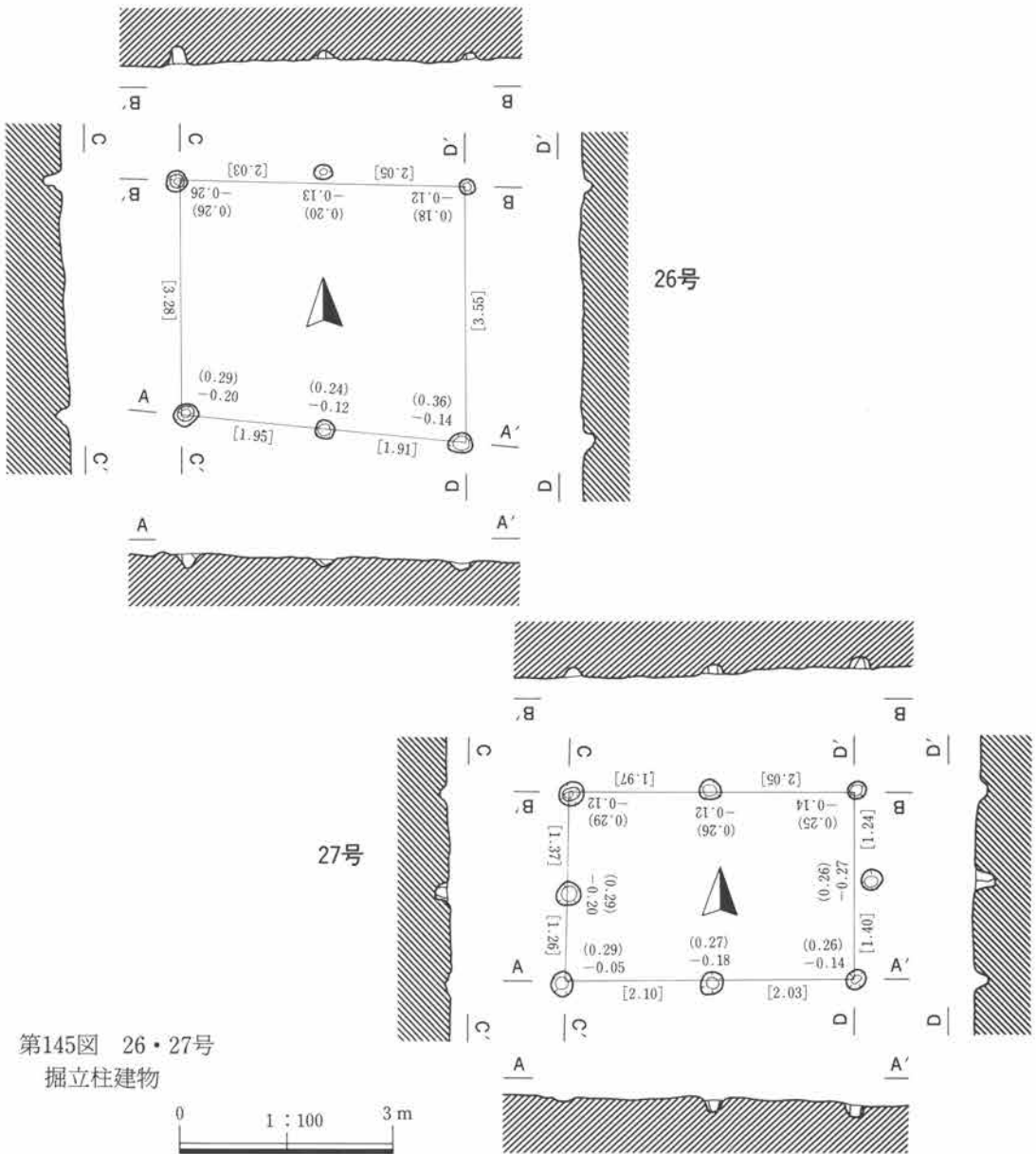




第143図 21～23号掘立柱建物



第144図 24・25号掘立柱建物

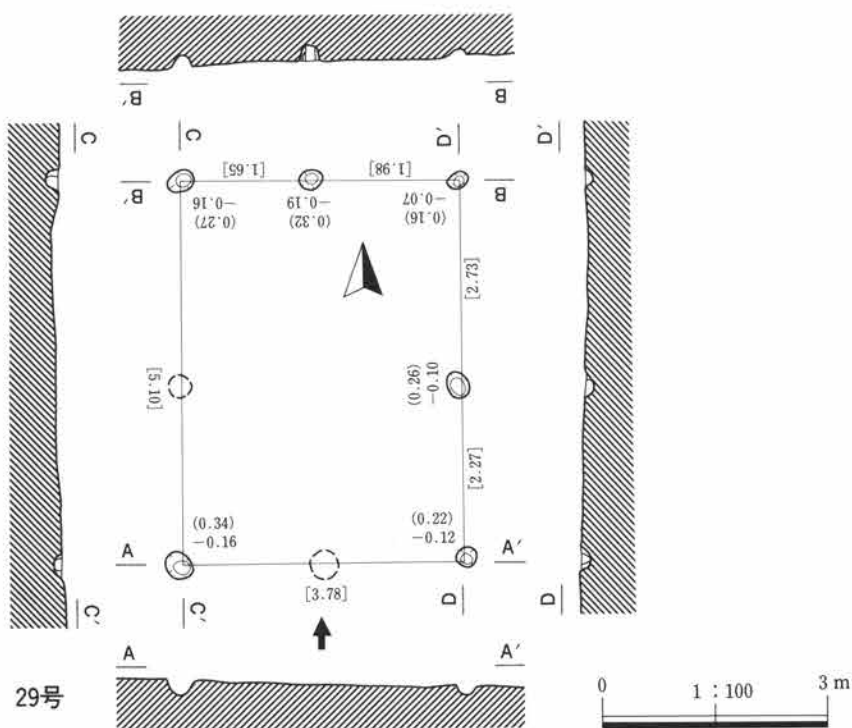
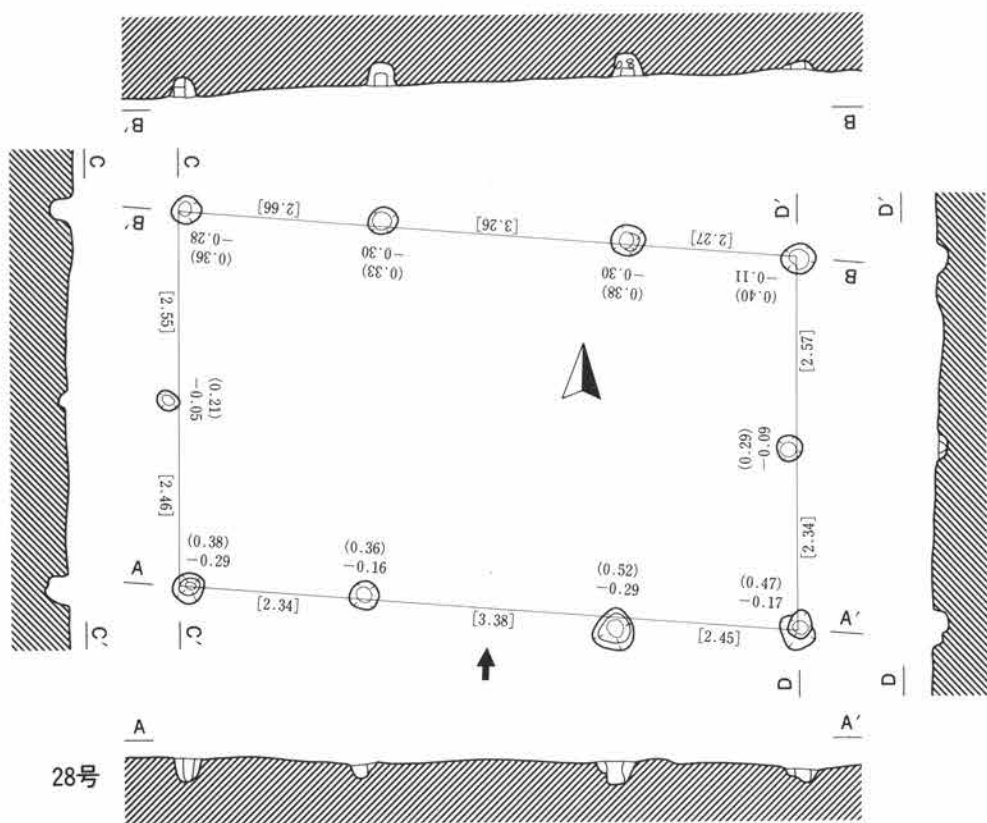


34号掘立柱建物（第148図、図版85-1）

4区S-15に位置し、7・33号掘立柱建物と重複する。棟方向は南北で方位N-3°-Wを示す。構造は桁行、梁行1間と考えられるが北東隅の柱穴が検出できなかった。規模は桁行2.30m、梁行2.10m、面積4.8m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か楕円形で、南東隅の柱穴で角柱の使用を考えさせる掘り方が残る。出土遺物はない。

35号掘立柱建物（第148図、図版85-1）

4区L-19に位置し、28・30号掘立柱建物と重複する。棟方向は南北で方位N-1°-Wを示す。構造は桁行、梁行1間で歪みを持つ。規模は桁行3.56m、梁行3.10m、面積11m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。



第146图 28・29号掘立柱建物

**36号掘立柱建物**（第188図、図版85—2）

4区E-18に位置し、4号掘立柱建物、4号柱列と重複する。柱間3間が確認された柱列で、方位N-5°-Eである。柱間は2m前後のほぼ等間である。規模は5.99mである。柱穴は円形で根石を埋設するものが2ヵ所ある。出土遺物はない。

**37号掘立柱建物**（第149図、図版91—3）

4区E-8に位置し、38号掘立柱建物と重複する。棟方向は明確を欠き、西方に伸びる可能性がある。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

**38号掘立柱建物**（第149図、図版91—3）

4区F-9に位置し、37号掘立柱建物、2号溝と重複する。棟方向は東西で方位N-93°-Eを示す。構造は桁行、梁行1間で僅かに歪みを持つ。桁行の北辺が南辺より15cmほど短い。規模は桁行4.17m、梁行3.97m、面積16.5m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

**39号掘立柱建物**（第188図、図版87—1）

4区U-5に位置し、9号掘立柱建物と重複する。現状では建物か柱列か判断できないが、柱列として扱う。柱間は2間が確認され、方位N-98°-Eである。柱間は東1間が西1間より44cm長く、規模は4.26mである。柱穴は円形で出土遺物はない。

**40号掘立柱建物**（第150図、図版88—1）

4区G-4に位置し、41・42・55・75号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N-102°-Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間で僅かに歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で33cm、南辺で5cmの差があるが全長は近似値である。梁行は東辺が西辺より10cmほど長い。規模は桁行4.09m、梁行2.87m、面積11.7m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で柱痕は不明。桁行南辺の中央柱穴で41号掘立柱建物の柱穴が一部重なり、41号が40号より先行する建物であることが判明した。出土遺物はない。

**41号掘立柱建物**（第150図）

4区H-4に位置し、40・42・55号掘立柱建物、7号柱列と重複する。棟方向は東西で方位N-100°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で僅かに歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で最大17cm、南辺で5cmほどの差で比較的等間に近く、全長でも近似値を示す。梁行は東辺が10cmほど西辺より短い。規模は桁行6.06m、梁行3.11m、面積18.8m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で、据え方は15cm～20cm前後径の円形を呈する。柱痕は不明。出土遺物はない。

**42号掘立柱建物**（第151図、図版88—2）

4区I-3に位置し、40・41・55号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N-103°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺で最大37cm、南辺で32cmの差があるが全長では近似値である。梁行は東西辺がほぼ等間である。規模は桁行6.56m、梁行3.85m、面積26m<sup>2</sup>である。柱穴は円形気味で、据え方は10cm～17cm径の円形である。3ヵ所ほど小礫を伴う。また、1本の柱穴には石臼が据えられていた。柱痕は不明。40号よりも新しい建物である。

**43号掘立柱建物**（第151図、図版88—3）

3区J-33に位置し、3号住居跡、6号土坑、44・45・46・48・52・53・65号掘立柱建物と重複し、柱穴の切り合いより、53号より43号が後出の建物と判明した。棟方向は東西で方位N-102°-Eを示す。

す。構造は桁行4間、梁行1間でやや歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で最大78cmと差があるが南辺は12cmと差は少なくまとまる。梁行は北東隅の柱穴を欠くが西辺が東辺よりやや長めであろう。規模は桁行8.59m、梁行2.73m、面積23.4㎡である。柱穴は円形か楕円形気味で柱痕は不明。出土遺物はない。

**44号掘立柱建物（第152図）**

4区H-1に位置し、7・10号土坑、3号住居跡、43・45～49・52・53号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-102°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間でやや歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で最大20cm、南辺で12cmの差があるが全長は近似値である。梁行は東辺が西辺より31cmほど短い。規模は桁行7.40m、梁行4.40m、面積32.6㎡である。柱穴は円形で、据え方は9cm～20cm径の円形を呈す。出土遺物はない。

**45号掘立柱建物（第152図）**

4区H-1に位置し、43・44・46・48・52・54号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N-109°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で最大22cm、南辺で45cmの差があるが全長では近似値である。梁行は東辺が西辺より20cmほど長い。規模は桁行5.74m、梁行3.15m、面積18.3㎡である。柱穴は円形か歪む楕円形で、据え方は7cm～20cm径の円形を呈する。出土遺物はない。

**46号掘立柱建物（第153図、図版88-4）**

4区H-1に位置し、43～45・48・52～54号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-105°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間でやや歪みを持つ。45号の北辺桁行東1間の柱穴2ヵ所を46号と共有する状態である。柱間は桁行の北辺で最大29cm、南辺で30cmの差があり、全長では北辺が南辺より14cmほど長く、梁行は東辺が西辺より15cmほど短い。規模は桁行5.99m、梁行3.62m、面積21.7㎡である。柱穴は円形で、据え方は15cm～18cm径の円形である。出土遺物はない。

**47号掘立柱建物（第153図）**

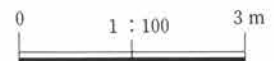
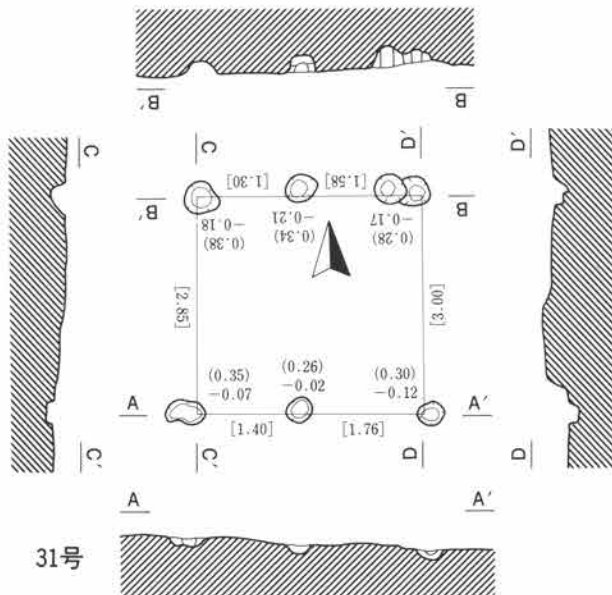
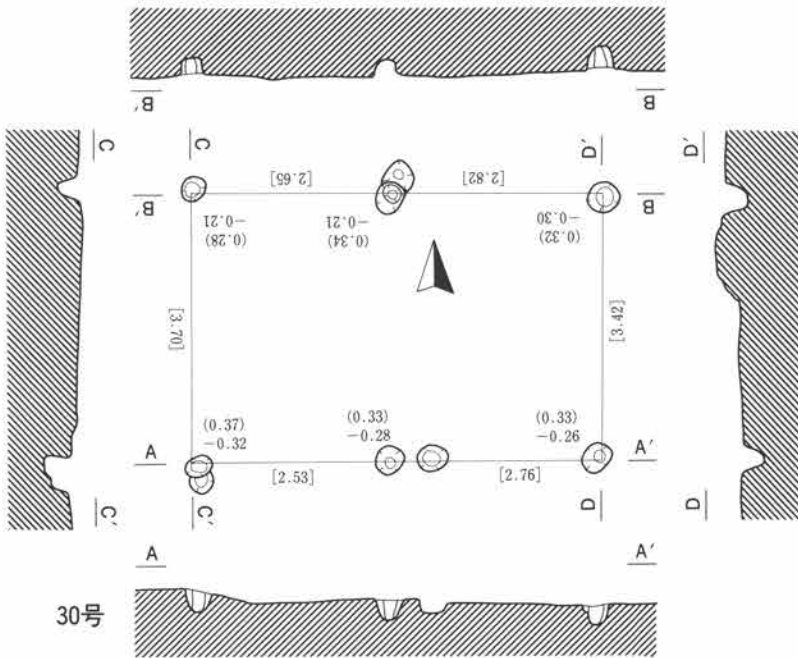
3区H-33に位置し、43・44・48号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-103°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の両辺が西より東に連れて長くなり、北辺で最大1.43m、南辺では1.46mの差があり、全長は北辺が南辺より41cmほど長い。梁行は東辺が西辺より14cm長い。規模は桁行6.92m、梁行3.53m、面積24.4㎡である。柱穴は円形か楕円形気味で、据え方は13cm～20cm径の円形である。出土遺物はない。

**48号掘立柱建物（第154図）**

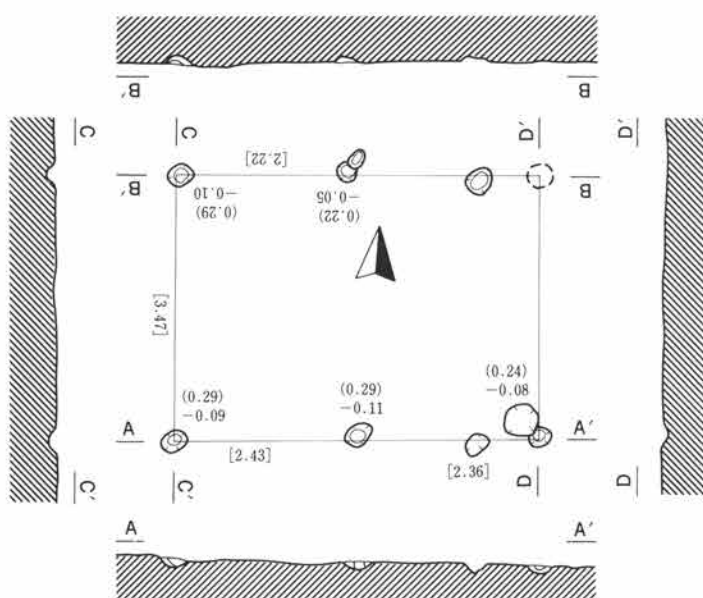
3区H-33に位置し、43～47・49・52・53号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-101°-Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間で僅かに歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で40cm、南辺で9cmの差があり、梁行は東辺が西辺より19cmほど長い。規模は桁行5.17m、梁行3.59m、面積18.6㎡である。柱穴は円形か楕円形気味で、北西隅の柱穴は礎を伴う。柱痕は不明。出土遺物はない。

**49号掘立柱建物（第154図）**

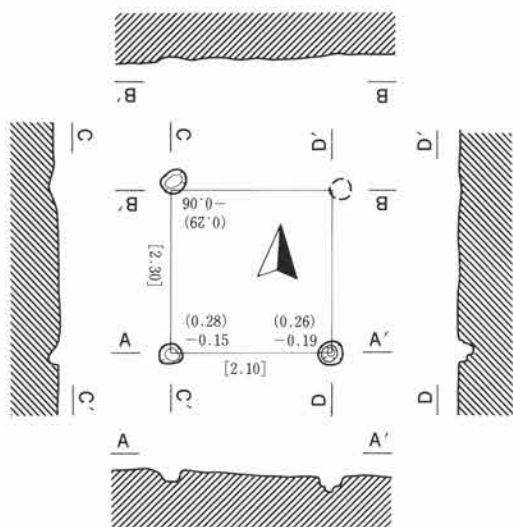
4区G-1に位置し、44～46・48・52号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-99°-Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で25cm、南辺で20cmの差がある



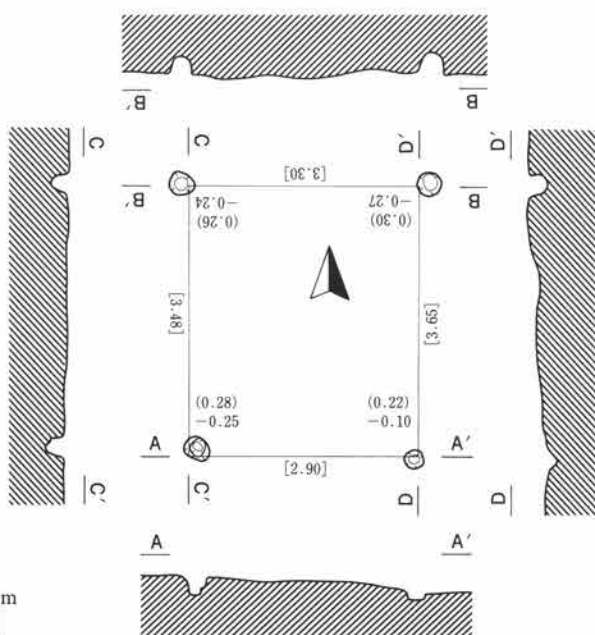
第147図 30・31号掘立柱建物



33号

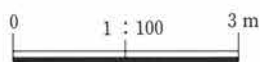


34号

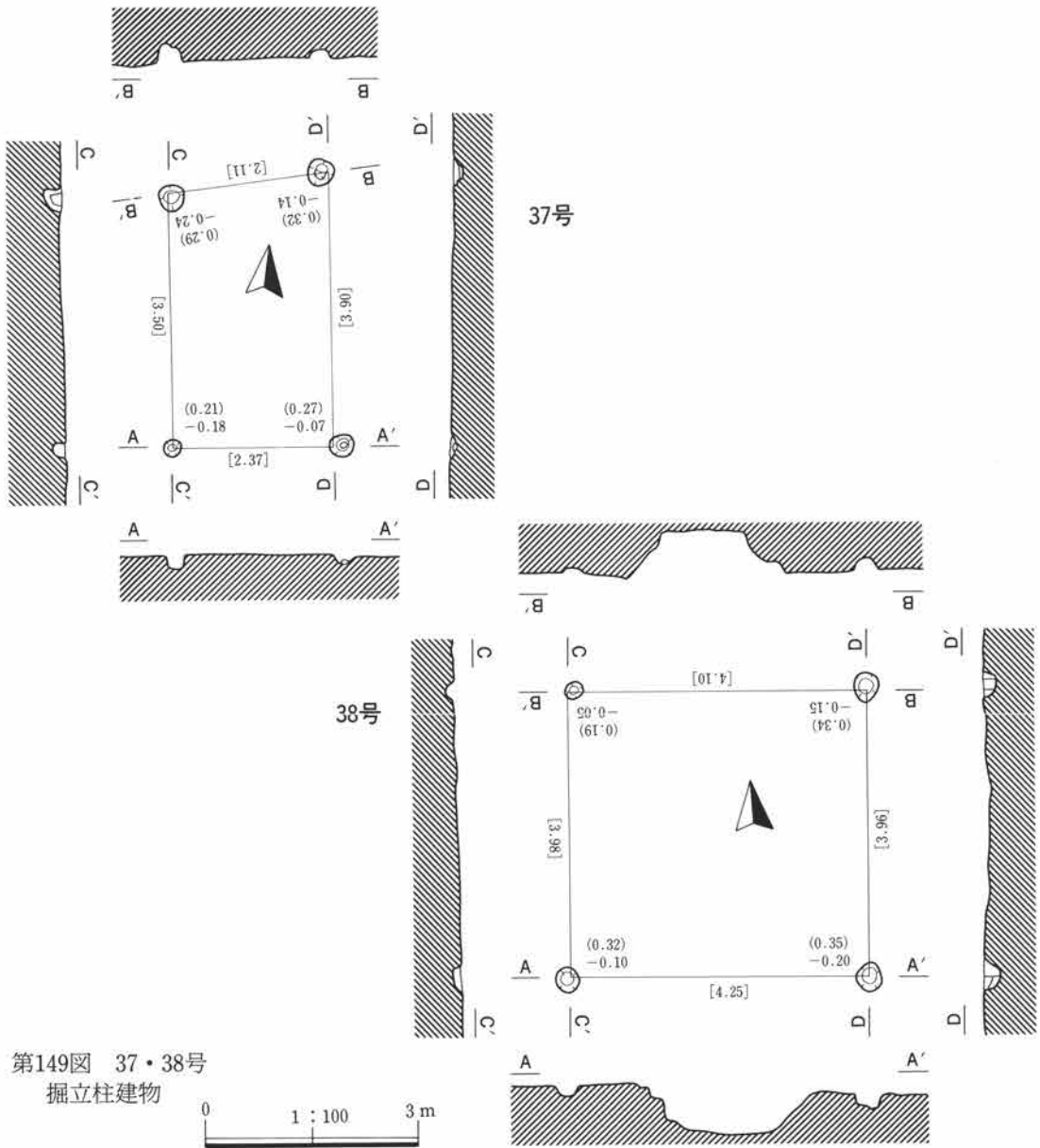


35号

第148図 33~35号  
掘立柱建物



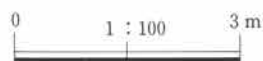
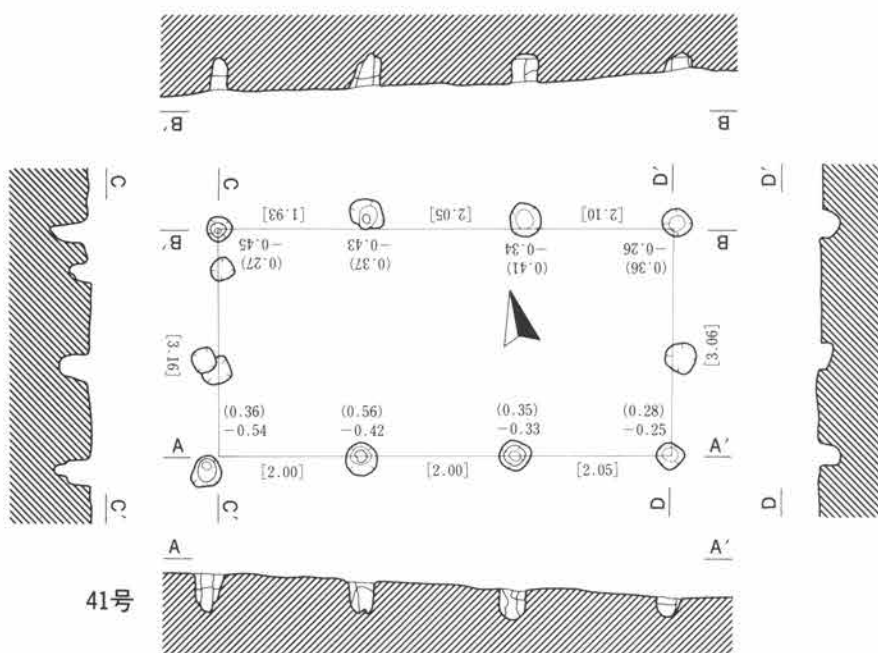
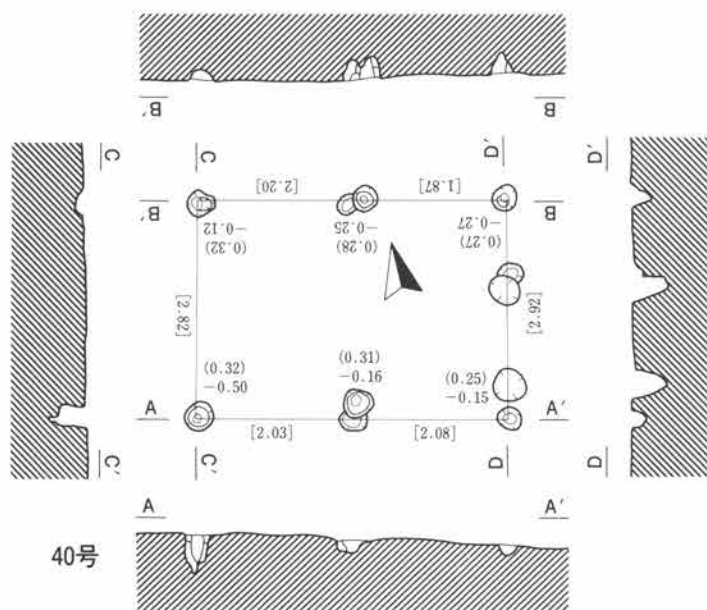




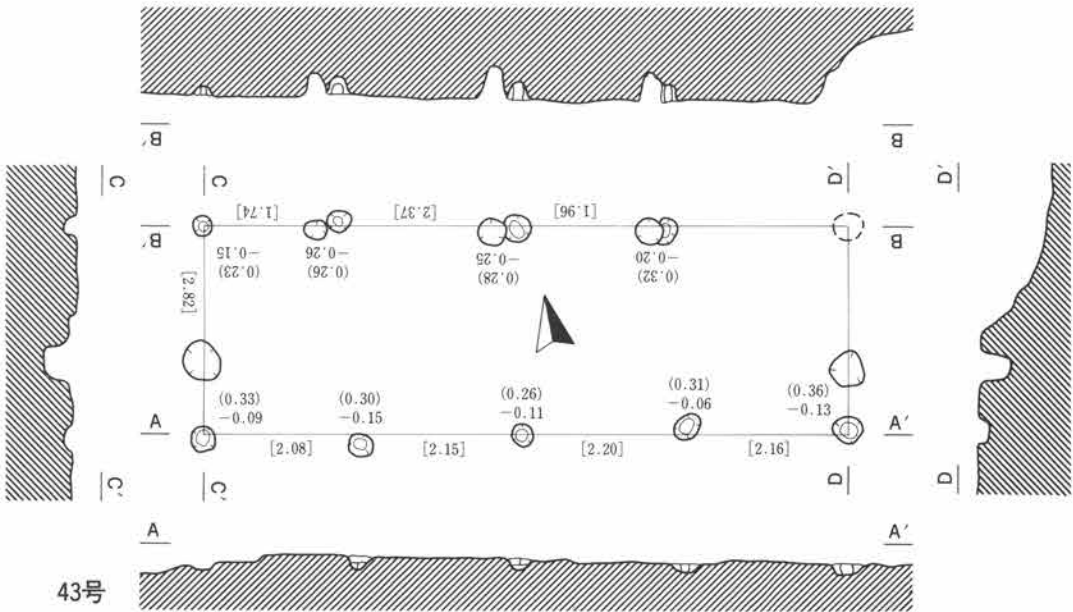
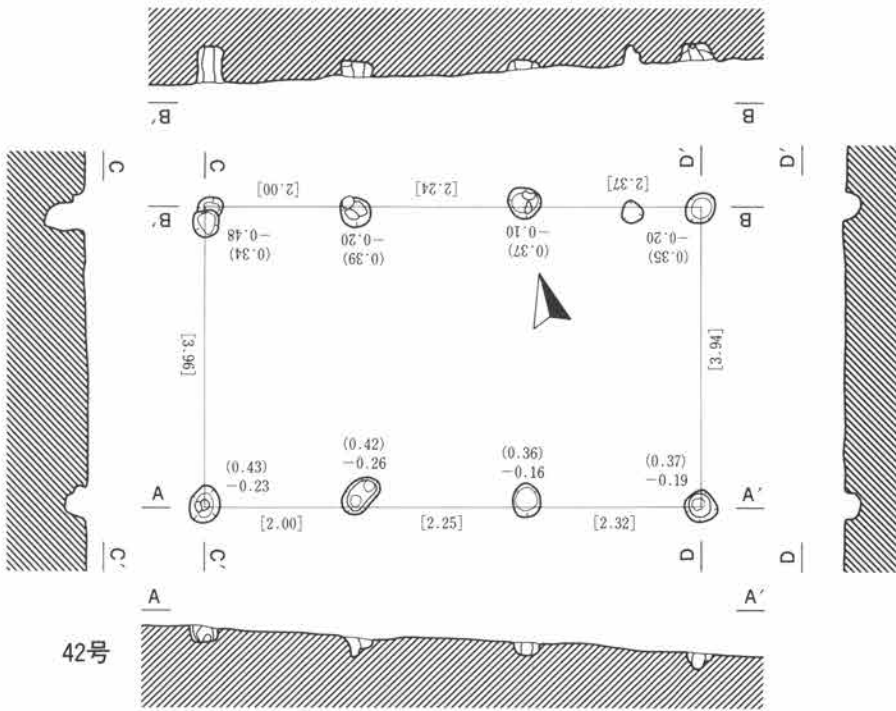
が全長では近似値である。梁行は東辺が西辺より21cmほど長い。規模は桁行3.14m、梁行1.84m、面積5.8㎡である。柱穴は桁行の南辺中央が突出する。形状は円形か歪んだ楕円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

#### 50号掘立柱建物 (第154図)

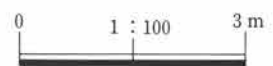
4区K-4に位置し、41・42・55・75・76号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N-97°-Eを示す。構造は桁行の南辺と梁行の西辺一部が検出されたにすぎないため、全容は把握できなかった。柱間は桁行の南辺で最大19cmの差がある。規模は桁行7.65m、梁行2.55m以上となろう。柱穴は円形か楕円形気味で、南辺の3ヵ所に根石が埋設されている。出土遺物はない。

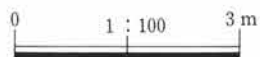
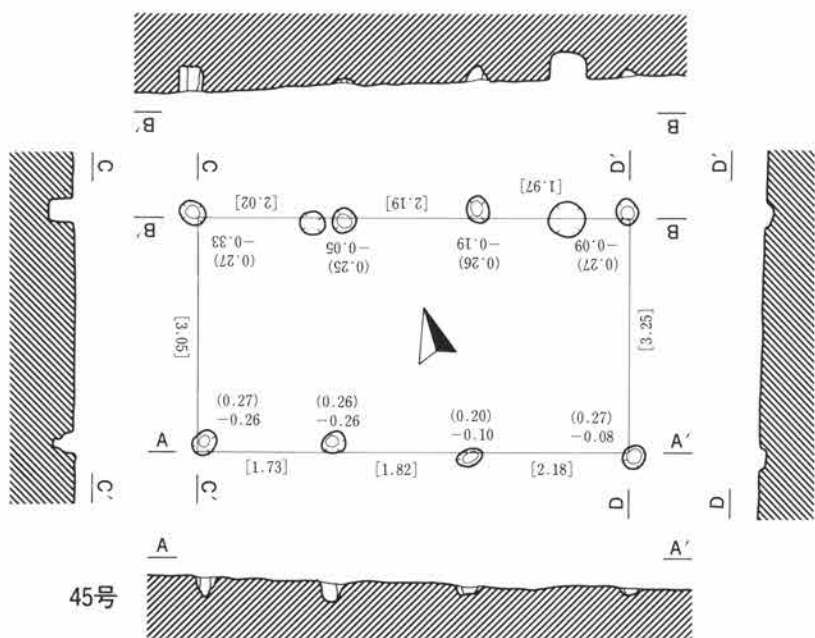
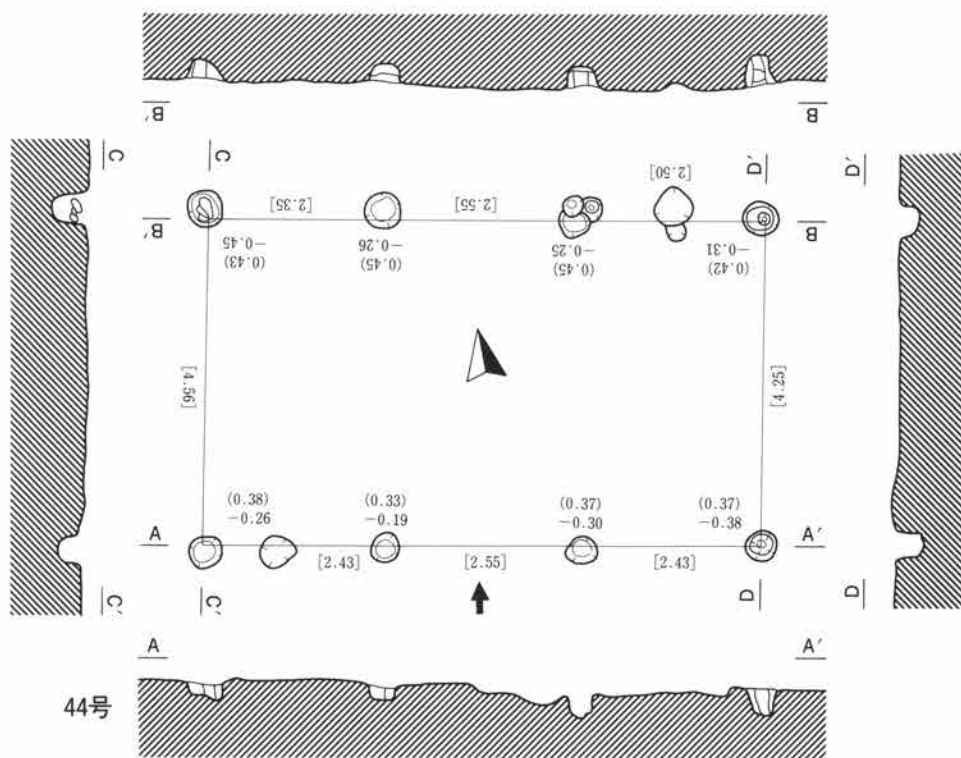


第150图 40・41号掘立柱建物



第151図 42・43号掘立柱建物





第152图 44・45号掘立柱建物

**51号掘立柱建物**（第155図）

3区K-32に位置し、60・64・69・94・95号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-105°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間でやや歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で両端1間が中央1間より16cm短く、南辺は東側部が7cmほど長く、全長では北辺が南辺より14cm短い。梁行は東辺が西辺より10cm長い。規模は桁行7.20m、梁行3.05m、面積21.9m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

**52号掘立柱建物**（第155図）

4区H-1に位置し、43~49・53・54号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-114°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺で最大45cm、南辺で54cmの差があるが全長は近似値である。梁行は等間である。規模は桁行6.23m、梁行3.40m、面積21.1m<sup>2</sup>である。柱穴は円形気味で、部分的に据え方と考えられる一段深い掘り込みを持つ柱穴がある。出土遺物はない。

**53号掘立柱建物**（第156図、図版88-5）

4区I-1に位置し、43~46・48・52・54・65号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-103°-Eを示す。構造は桁行4間、梁行1間でやや歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で最大21cm、南辺は89cmと差があり、全長では北辺が南辺より31cmほど長い。梁行は東辺が西辺より10cmほど長い。規模は桁行8.77m、梁行4.35m、面積38.1m<sup>2</sup>である。柱穴は円形気味で、確認された据え方は12cm~18cm径の円形である。出土遺物はない。

**54号掘立柱建物**（第156図）

4区I-1に位置し、45・46・53号掘立柱建物等と重複する。構造は桁行、梁行ともに1間で南庇を付すのであろうか？南庇を建改えしているのか？前者であれば、棟方向は南北で方位N-13°-Eを示し、柱間は桁行の南北辺が等間で、梁行は東辺が西辺より13cmほど短く、30cm強ほど張り出す庇を付す。後者では、歪みを持つ構造で梁行に20cmほどの差がでる。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

**55号掘立柱建物**（第157図、図版88-6）

4区I-4に位置し、40~42・50号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-109°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の南辺で最大30cmの差があり、全長は北辺が南辺より25cm短い。梁行は東辺が西辺より30cm長い。規模は桁行6.12m、梁行4.15m、面積25.4m<sup>2</sup>である。柱穴は北辺の桁行で1ヵ所検出できなかった。形状は円形か歪んだ円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

**56号掘立柱建物**（第158図）

3区O-33に位置し、60・64・66~69・79・86~89・92号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-107°-Eを示す。構造は桁行5間、梁行1間で南北庇を付し、僅かに歪みを持つ。柱間は桁行の南北辺、庇の南北辺とも30cm内の差で比較的近似値である。梁行も東辺と西辺の差が少ない。庇の梁行は西方から東方に連れて長くなる。規模は桁行10.86m、梁行7.27m、面積79m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か楕円形気味で、確認できた据え方は12cm~23cm径の円形を呈している。根石を埋設する柱穴が多い。出土遺物はない。56号は上記の庇を付す建物と桁行5間、梁行1間の建物を建改えた可能性も

ある。

**57号掘立柱建物**（第159図、図版88—7）

3区P—33に位置し、56・68号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N—106°—Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間で南北に庇を付す。柱間は桁行の北辺でほぼ等間に近いが、南辺は29cmの差があり、北辺が南辺より11cmほど短い。北側庇部の柱間は北辺桁行とほぼ同じ数値を示すが、南側庇部は104cmの差がある。梁行の柱間は東辺が西辺より40cmほど長い。規模は桁行7.06m、梁行4.72m、面積33.3m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で、確認できた据え方13cm～20cm径の円形である。出土遺物はない。

**58号掘立柱建物**（第160図）

3区S—33に位置し、59・66・67・86・87・93号掘立柱建物等と重複する。棟方向は南北で方位N—6°—Eを示す。構造は桁行4間、梁行1間で僅かに歪みを持つ。柱間は桁行の東辺で最大23cm、西辺26cmの差がある。全長は東辺が西辺より16cmほど長い。梁行は北辺が南辺より11cmほど短い。規模は桁行8.97m、梁行4.17m、面積37.4m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か楕円形で、根石を埋設するもの、小礫を柱の周囲に伴うものがある。据え方は10cm～22cm径の円形である。出土遺物はない。

**59号掘立柱建物**（第161図、図版88—8）

3区S—33に位置し、58・66・67・86・87・93号掘立柱建物等と重複する。棟方向は南北で方位N—8°—Eを示す。構造は桁行4間、梁行1間で僅かに歪みを持つ。柱間は桁行の東辺で最大42cm、西辺で69cmの差があり、全長では東辺が西辺より16cmほど長い。梁行は北辺が南辺より13cmほど長い。規模は桁行8.81m、梁行2.86m、面積25.2m<sup>2</sup>である。柱穴は円形気味で、据え方は12cm～20cm径の円形である。出土遺物はない。

**60号掘立柱建物**（第162図、図版89—1）

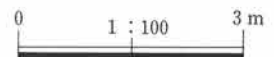
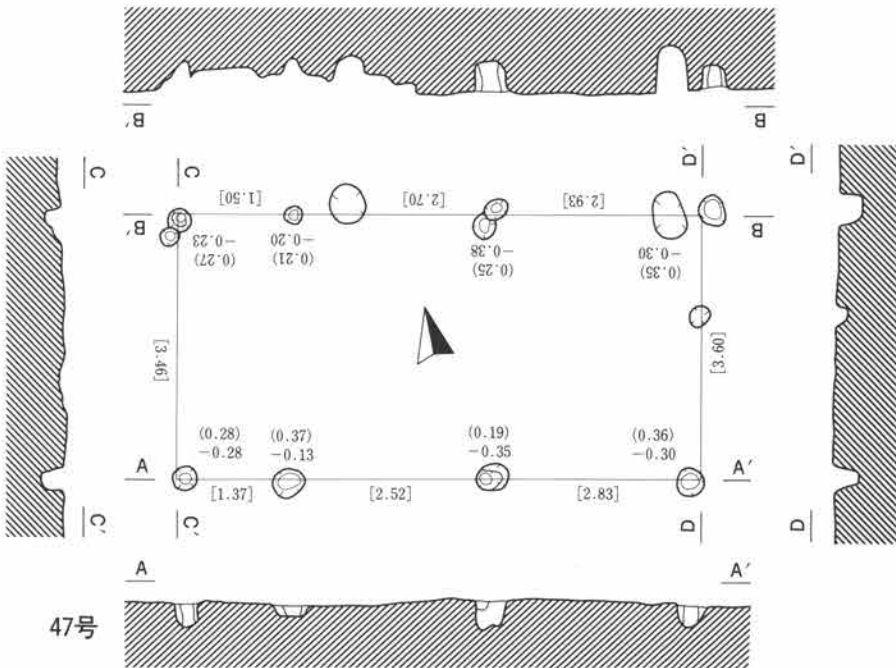
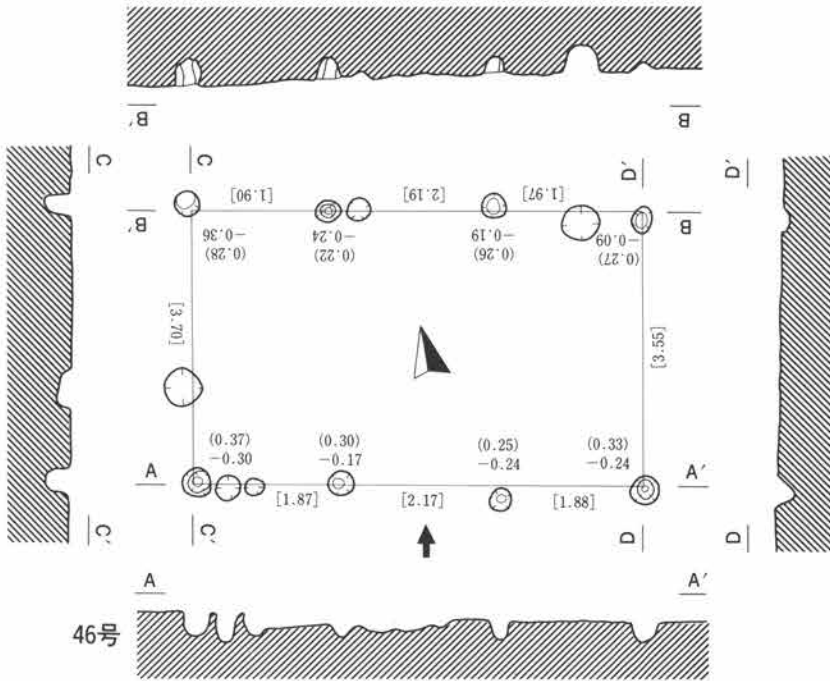
3区N—32に位置し、51・56・64・66・67・69号掘立柱建物等と重複する。棟方向は南北で方位N—15°—Eを示す。構造は桁行4間、梁行1間で僅かに歪みを持つ。柱間は桁行の両辺が2m前後で比較的等間で、梁行は等間である。規模は桁行8.06m、梁行4.25m、面積34.2m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か楕円形気味で柱痕は不明。青磁稜花皿片が出土。

**61号掘立柱建物**（第163図）

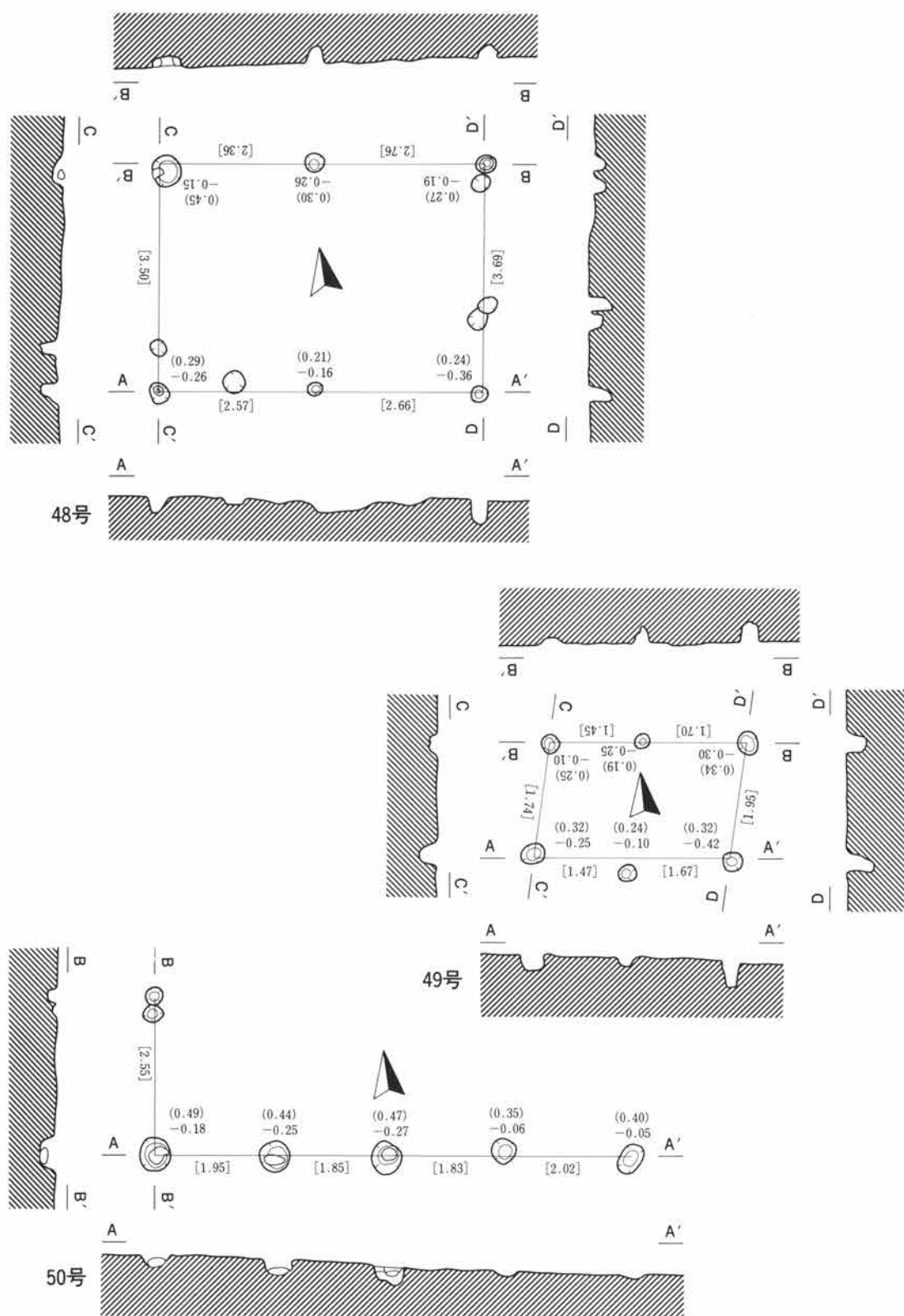
3区V—26に位置し、西方で62号掘立柱建物と重複する。棟方向は南北で方位N—12°—Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間でやや歪みを持つ。柱間は桁行の東辺で最大24cm、西辺で15cmの差があり、全長では東辺が西辺より20cmほど長い。梁行は南北辺が近似値を表す。規模は桁行7.12m、梁行5.21m、面積37.0m<sup>2</sup>である。柱穴は南東隅が検出できなかった。形状は円形か円形気味で柱痕は不明。景徳元寶1点出土。

**62号掘立柱建物**（第164図、図版89—2）

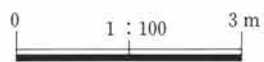
3区T—26に位置し、61・63号掘立柱建物と重複する。棟方向は南北で方位N—17°—Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の東辺で最大25cmの差があるが、西辺はほぼ等間である。全長は東辺が西辺より17cmほど短い。梁行は北辺より南辺が24cmほど長い。規模は桁行7.32m、梁行4.58m、面積33.5m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か楕円形気味で、確認できた据え方は13cm～18cm径の円形である。出土遺物はない。



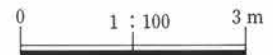
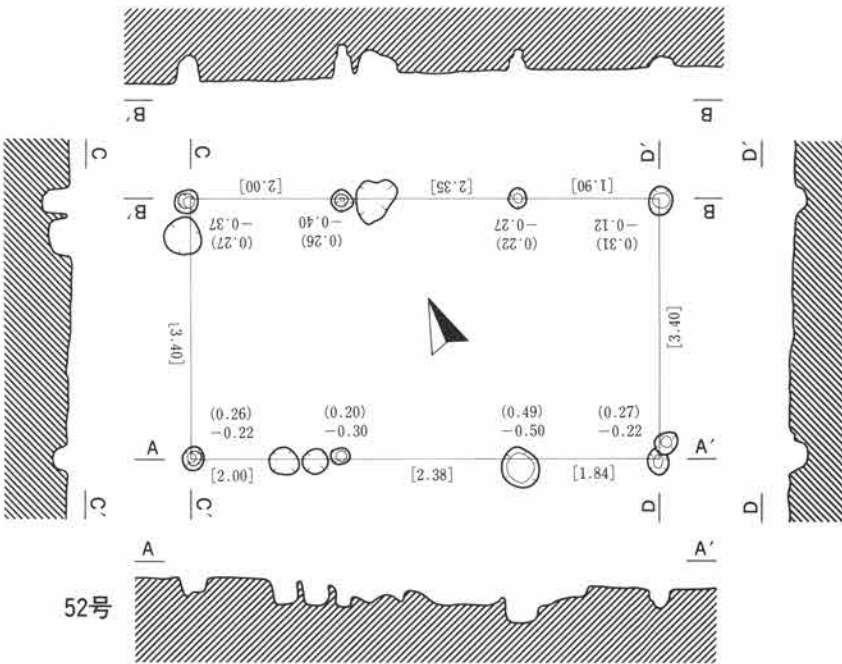
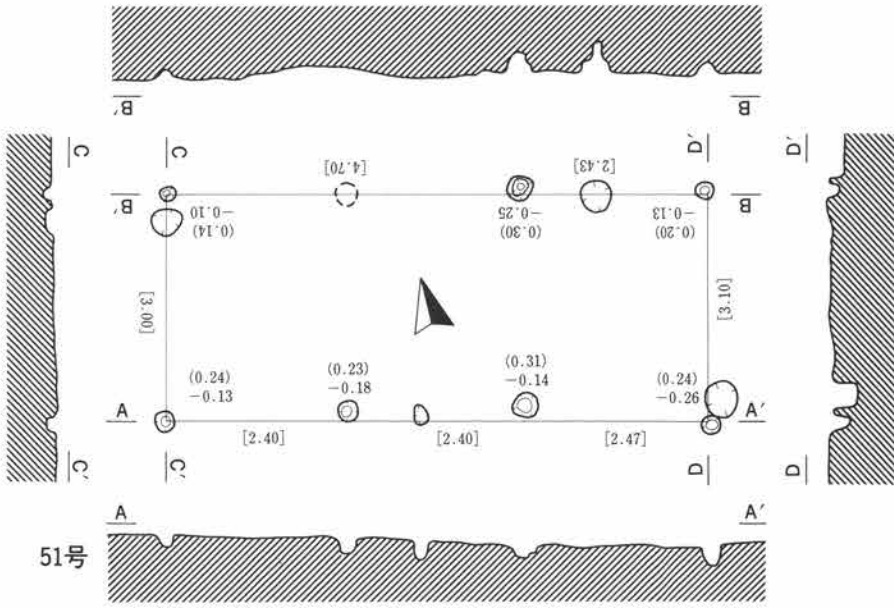
第153図 46・47号掘立柱建物



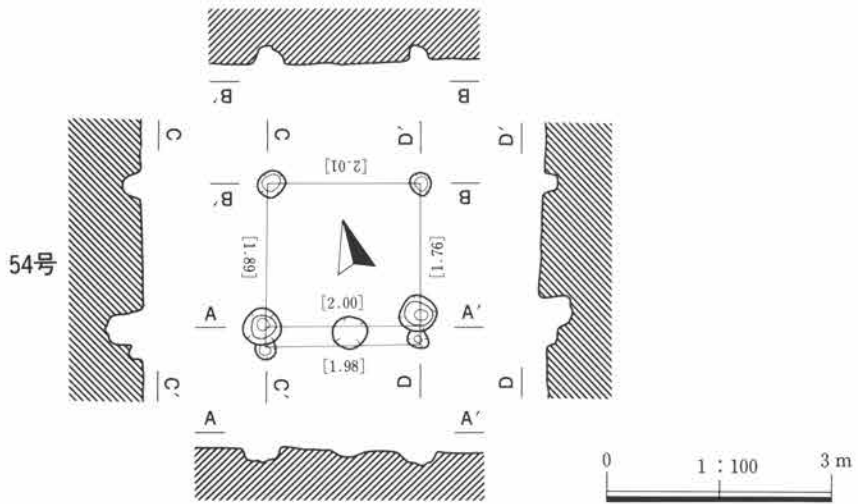
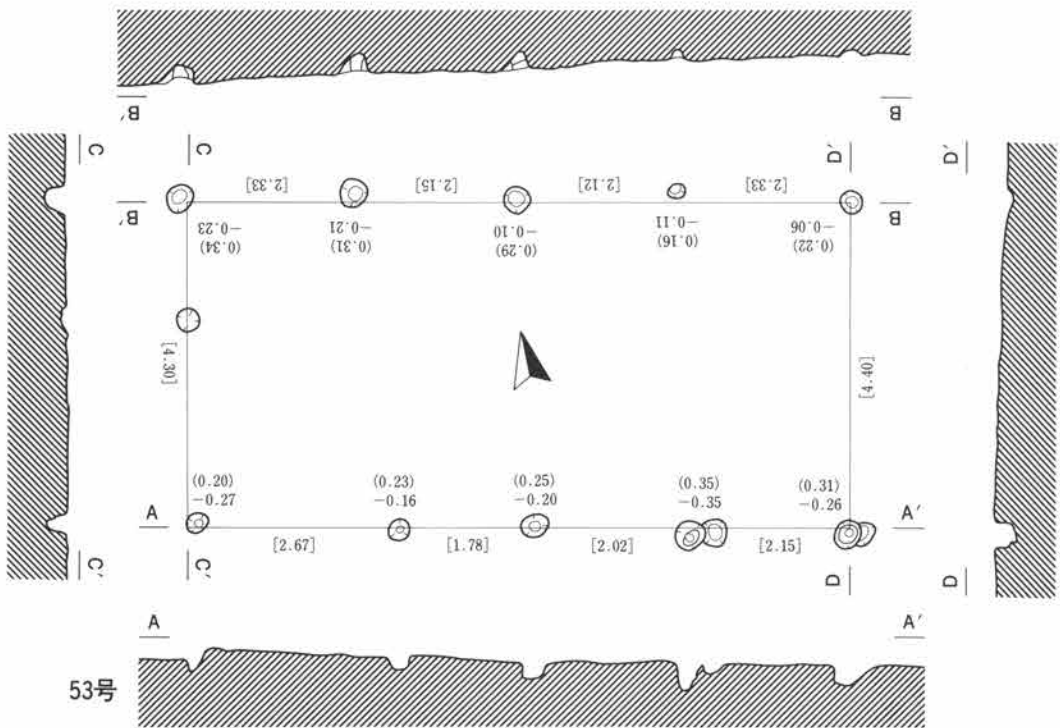
第154図 48~50号掘立柱建物







第155図 51・52号掘立柱建物



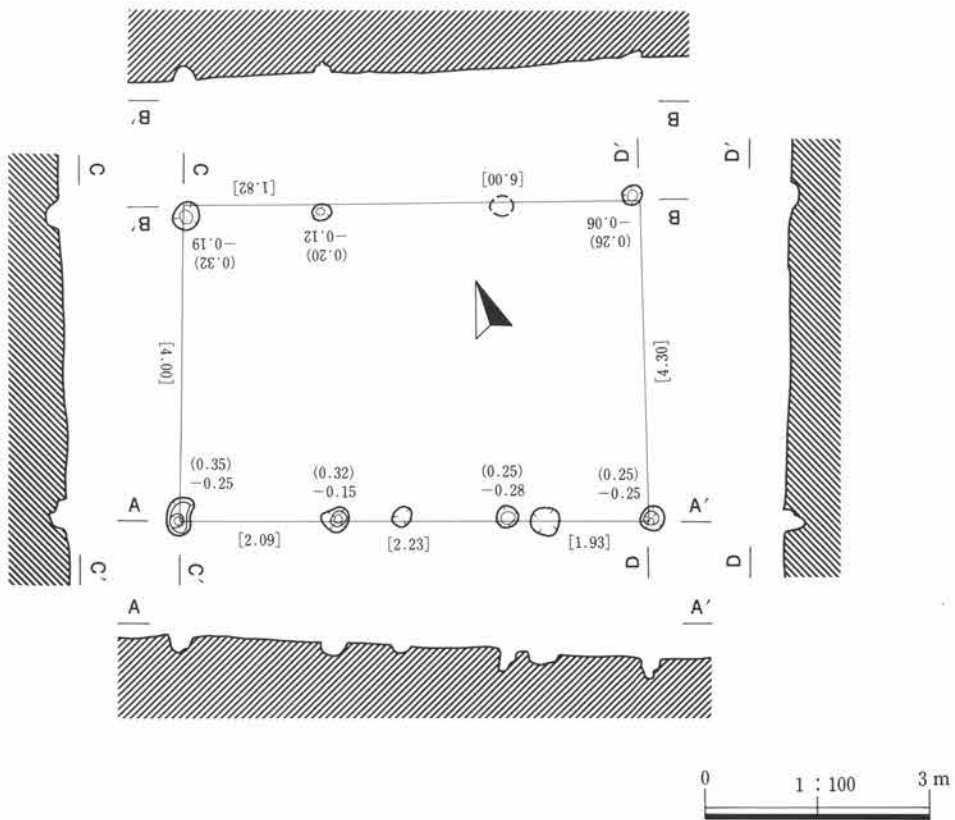
第156図 53・54号掘立柱建物

63号掘立柱建物 (第165図)

3区T-27に位置し、62号掘立柱建物等と重複する。棟方向は南北で方位N-16°-Eを示す。構造は桁行4間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の東辺で最大40cm、西辺で27cmの差があり、梁行は北辺が南辺よりも34cmほど長い。規模は桁行8.30m、梁行3.88m、面積32.2m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か楕円形で、確認できた据え方は13cm~20cm径の円形である。出土遺物はない。

64号掘立柱建物 (第166図)

3区N-32に位置し、56・60・69号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-99°-Eを示す。



第157図 55号掘立柱建物

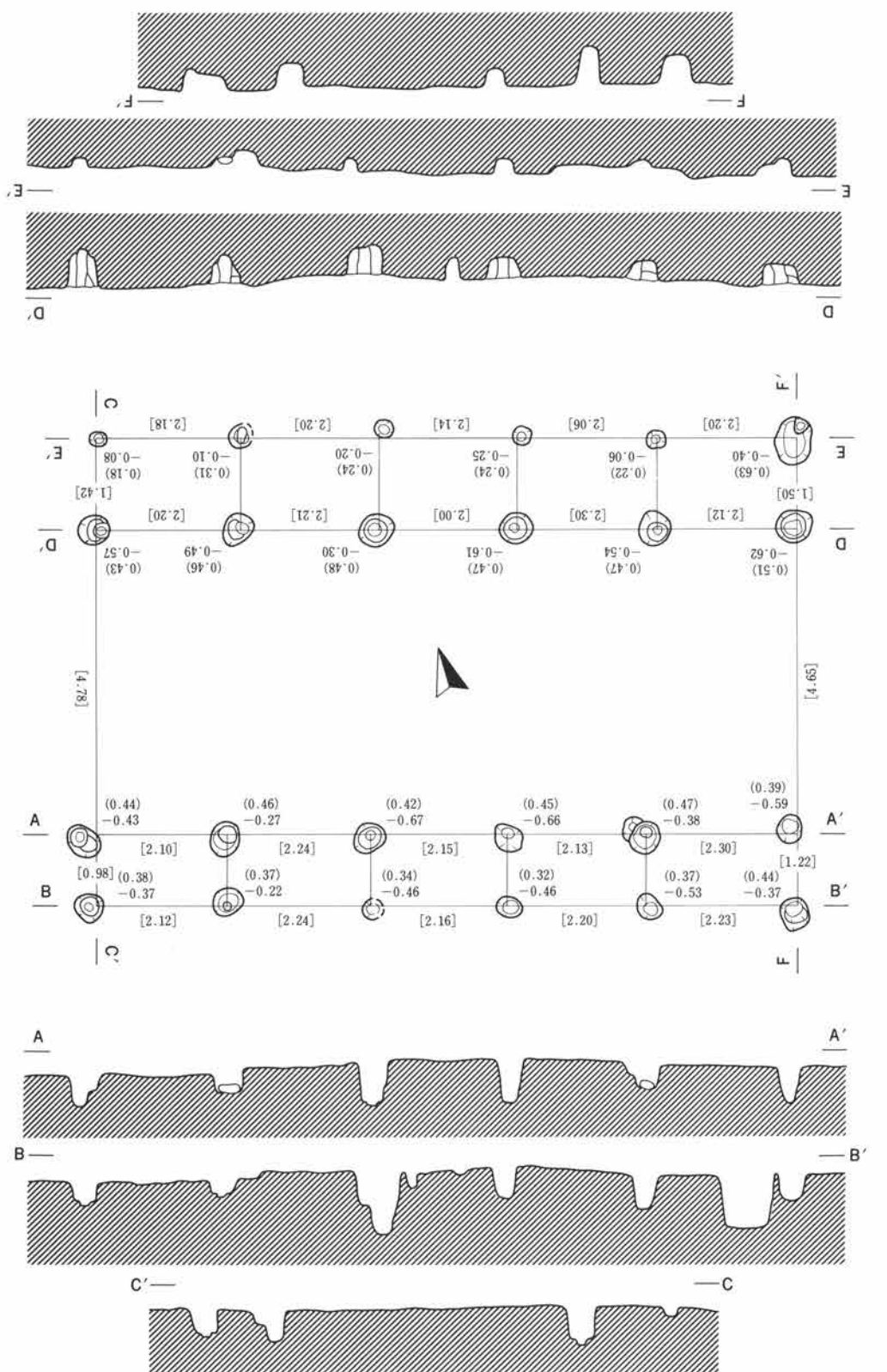
す。構造は桁行3間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺で最大12cm、南辺で26cmと比較的少ない差である。梁行は東西辺ともに近似値である。規模は桁行5.41m、梁行3.53m、面積19.0m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か円形気味で、据え方は11cm～16cm径の円形である。出土遺物はない。

#### 65号掘立柱建物（第166図、図版89-3）

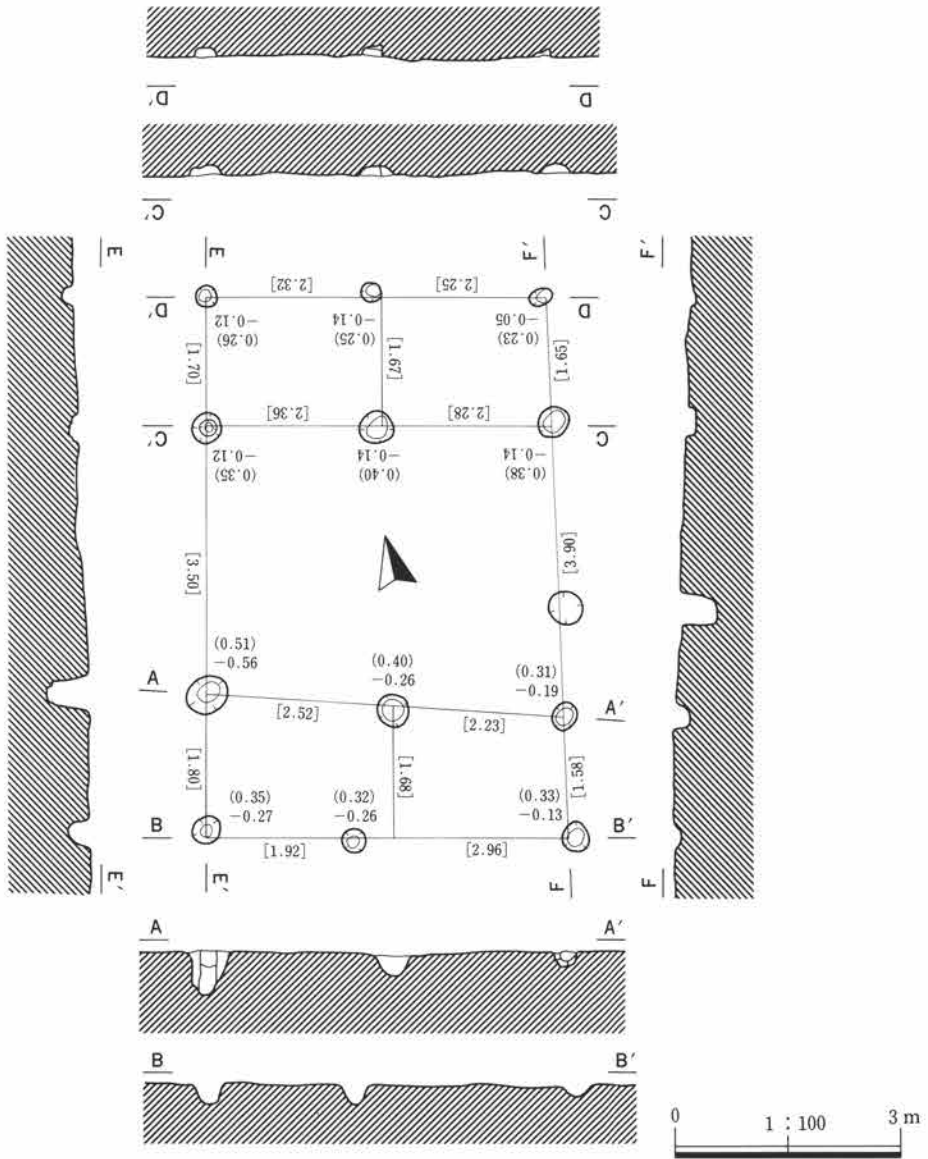
3区K-33に位置し、43・47・53号掘立柱建物等と重複する。棟方向は南北で方位N-12°-Eを示す。構造は桁行1間、梁行2間である。柱間はほぼ等間である。規模は桁行4.97m、梁行4.35m、面積21.6m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か歪んだ楕円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

#### 66号掘立柱建物（第167図）

3区Q-33に位置し、56・58・59・67・79・91・92号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-98°-Eを示す。構造は桁行4間、梁行2間で束柱がある総柱の建物である。柱間は桁行の北辺で最大28cmの差がある。南辺は西2間を入り口部とし、両端の柱穴より1.4m隔てて小柱穴を2ヵ所設ける。梁行の全長は東西辺ほぼ同じであるが、各柱間は東辺で15cm、西辺で62cmの差がある。束柱は棟通りに2ヵ所設ける。規模は桁行9.06m、梁行6.21m、面積56.2m<sup>2</sup>である。柱穴は入り口部に付随すると思われる柱穴以外は50cm以上の径を測る円形か楕円形で、大半が根石を埋設する。桁行の北辺柱穴で柱痕が僅かに残存した。出土遺物はない。



第158图 56号掘立柱建物



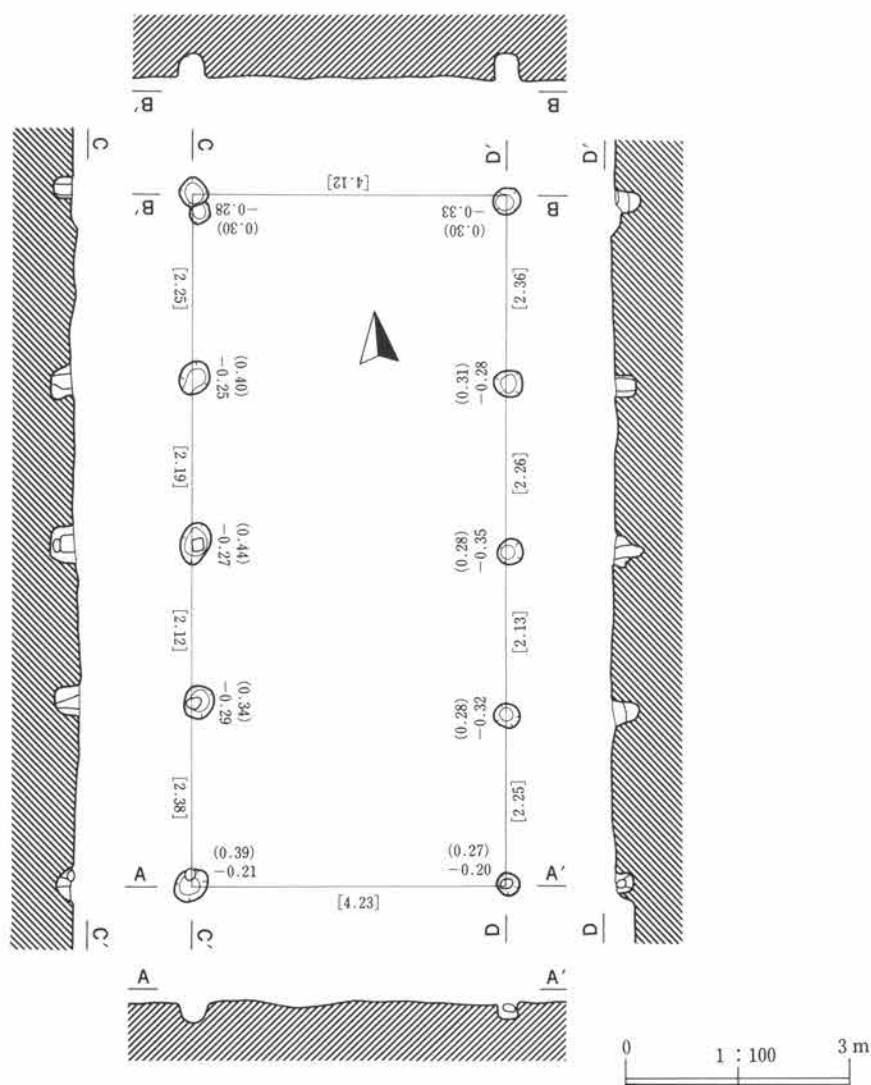
第159図 57号掘立柱建物

67号掘立柱建物（第168図、図版89—4）

3区Q—33に位置し、56・58・59・64・86・87号の掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N—96°—Eを示す。構造は桁行5間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺で最大21cm、南辺で8cmの差がある。梁行は東辺が西辺より13cmほど短い。規模は桁行11.09m、梁行6.33m、面積70.2m<sup>2</sup>である。柱穴は桁行の南辺西隅より2間目が検出されなかったが入り口部と考えられる。形状は円形、歪んだ楕円形で、確認できた据え方は15cm～24cm径の円形である。出土遺物はない。

68号掘立柱建物（第169図）

3区M—33に位置し、56・57・79号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N—104°—Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で最大68cm、南辺で14cmの差がある。



第160図 58号掘立柱建物

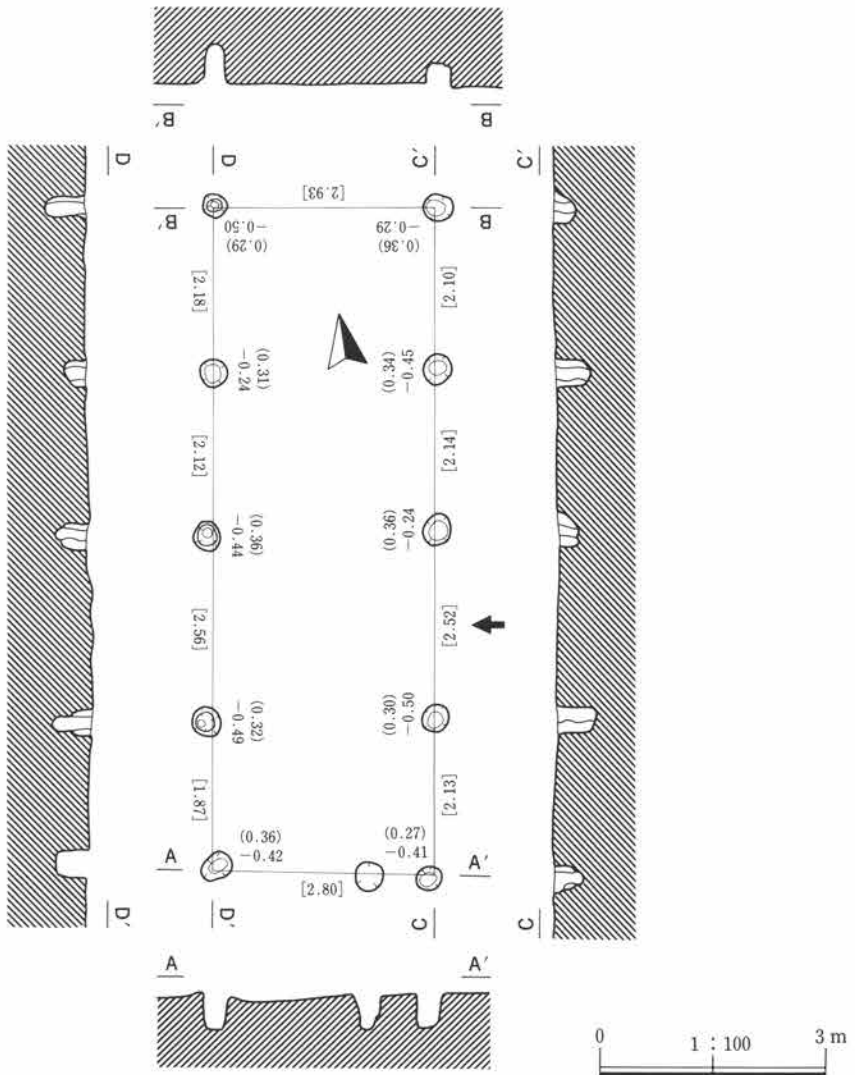
梁行は東辺が西辺より58cmほど短い。規模は桁行7.09m、梁行3.53m、面積25㎡である。柱穴は円形を呈し、桁行北辺に根石を埋設する個所がある。出土遺物はない。

**69号掘立柱建物 (第169図)**

3区N-31に位置し、56・60・64号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-101°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の北辺がほぼ等間であるが、南辺は最大31cmの差がある。全長では北辺が南辺より26cmほど長い。梁行は東辺が西辺より23cm長い。規模は桁行8.99m、梁行4.02m、面積36.1㎡である。柱穴は円形か楕円形で、確認できた据え方は10cm~13cm径の円形である。出土遺物はない。

**70号掘立柱建物 (第170図、図版89-8)**

3区Q-3に位置し、56・58・71・90号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-93°-Eを示す。構造は桁行2間、梁行2間の総柱で歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で32cm、南辺で17cm、棟通

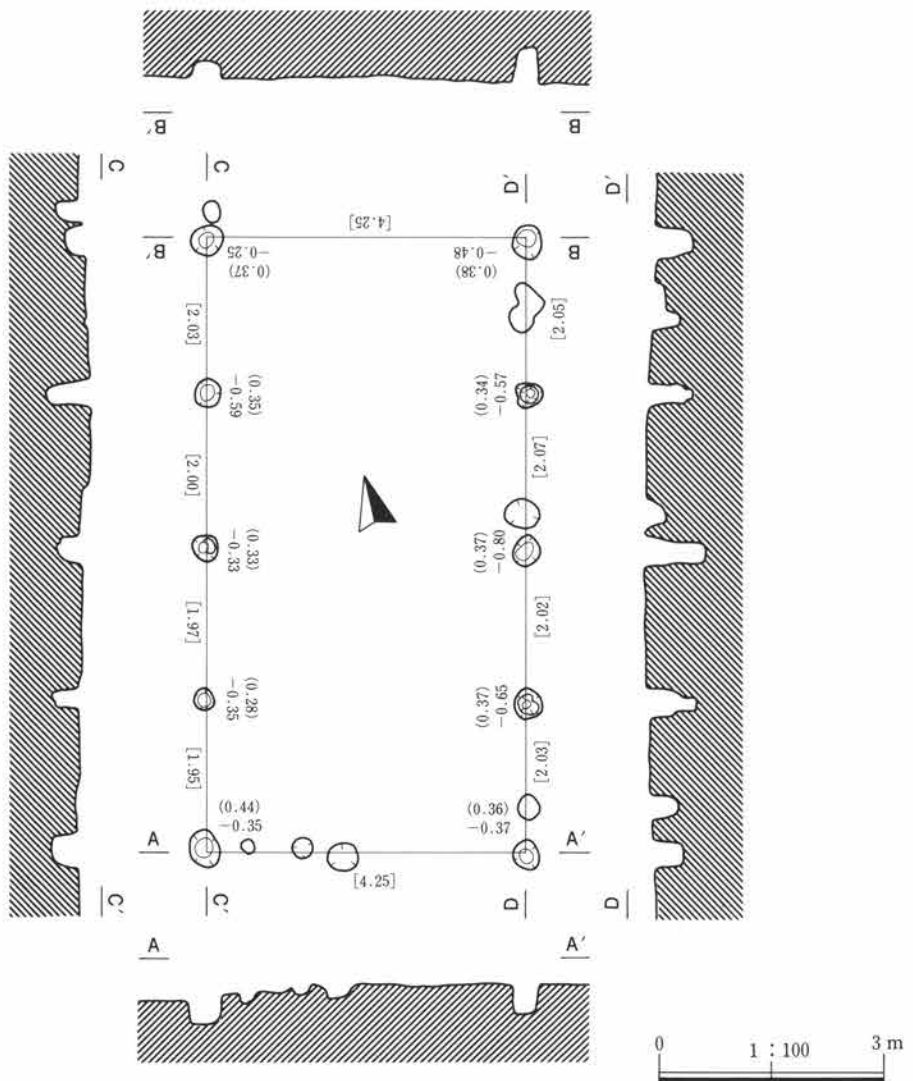


第161図 59号掘立柱建物

りで27cmの差がある。梁行の柱間は東辺で35cm、西辺で33cm、全長では東辺が西辺より87cmほど長い。規模は桁行9.21m、梁行5.57m、面積51.3m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か歪んだ楕円形で、確認できた据え方は18cm～26cm径の円形である。小礫を伴う柱穴が4ヵ所存在した。寛永通寶が出土。

71号掘立柱建物 (第171図)

3区R-30に位置し、70・90・91・93号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-89°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行2間で南庇を付す。柱間は桁行の北辺で最大19cm、南辺で8cmと比較的等間であるが底部は最大42cmの差である。全長では北辺より底部が45cmほど長い。梁行は東辺で45cm、西辺で23cmの差である。底部は等間に近い数値を示している。規模は桁行6.95m、梁行6.77m、面積47m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か楕円形気味で根石を埋設するもの、小礫を伴うものもある。柱痕は不明。出土遺物はない。



第162図 60号掘立柱建物

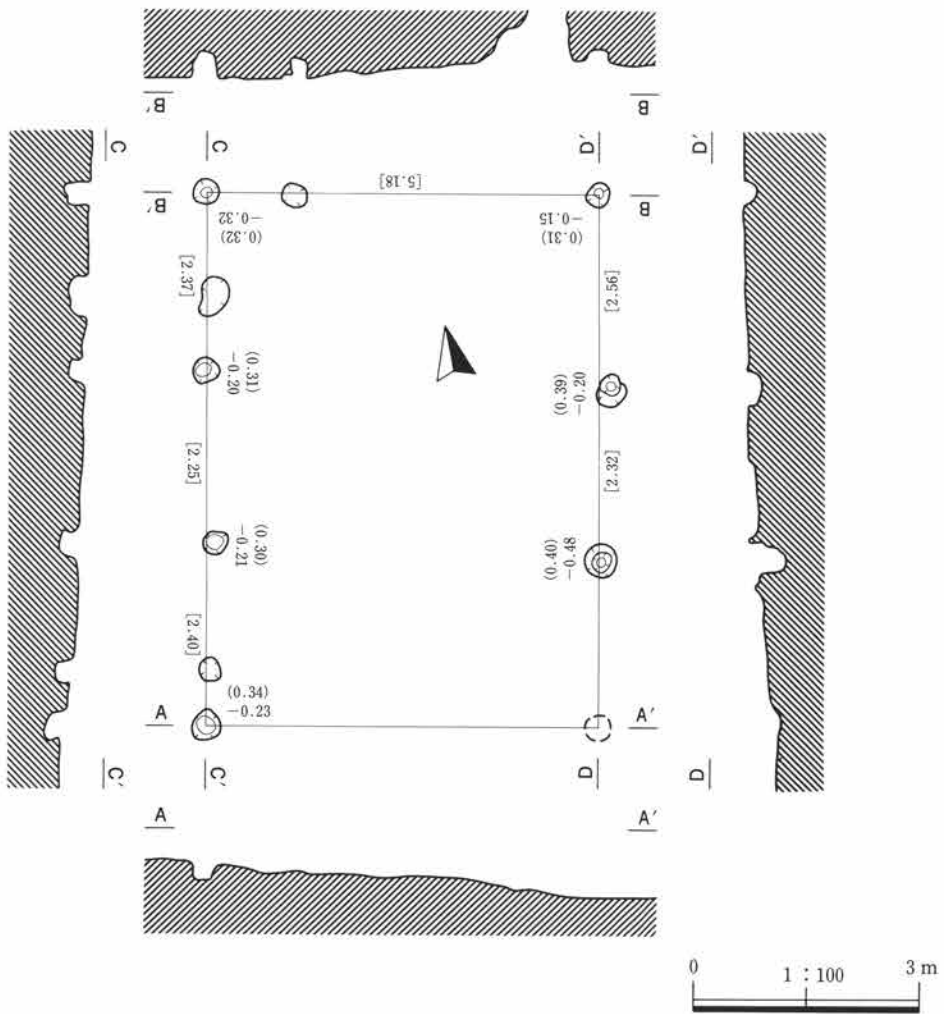
72号掘立柱建物 (第172図、図版89-5)

3区U-33に位置し、73・74号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-98°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺で比較的等間であるが、南辺は西側1間の柱穴が明確を欠くために詳細は不明。梁行は東辺が西辺より10cmほど短くなろう。規模は6.32m、梁行4.11m、面積25.9m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か楕円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

73号掘立柱建物 (第172図)

3区U-33に位置し、72・74号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-99°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺で最大22cmの差がある。南辺は72号と同様に西側1間の柱穴を明確にできなかった。梁行の柱間は東辺が西辺より52cmほど短くなろう。規模は桁行6.48m、梁行3.78m、面積24.4m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か円形気味で柱痕は不明。出土遺物はない。





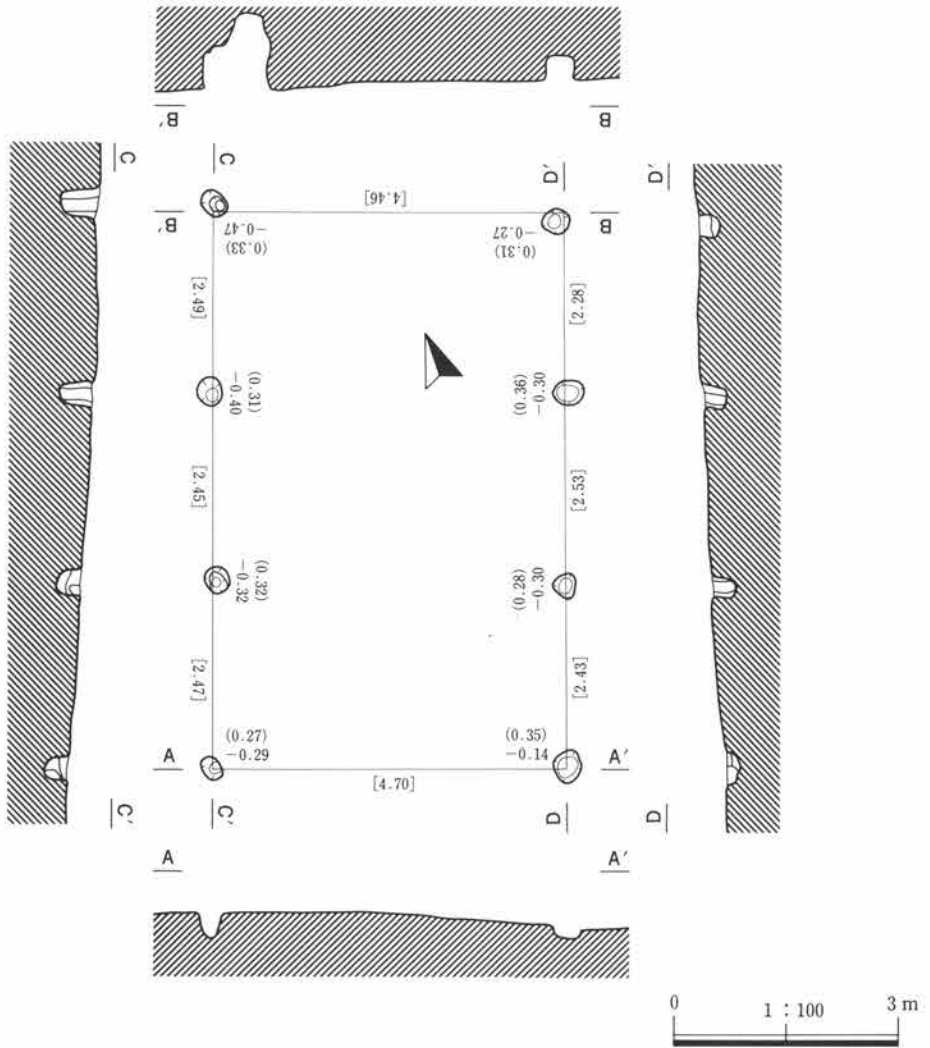
第163図 61号掘立柱建物

## 74号掘立柱建物 (第173図、図版89—6)

4区U-1に位置し、72・73号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-96°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺東側柱穴が検出できなかったため、明確を欠くが南辺と似る状態と考えられる。南辺は中央1間が両端より18cmほど長い。梁行の柱間は東辺が西辺より16cmほど短い。規模は5.18m、梁行3.29m、面積17㎡である。柱穴は円形か楕円形で部分的に据え方と考えられる一段深い掘り込みを有するものもある。出土遺物はない。

## 75号掘立柱建物 (第173図、図版89—7)

4区F-4に位置し、40・76号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-89°-Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で23cm、南辺で38cmの差があり、北辺が南辺より25cm短い。梁行の柱間は東辺が西辺より47cm長い。規模は桁行4.65m、梁行2.96m、面積13.8㎡である。柱穴は円形か楕円形気味で柱痕は不明。出土遺物はない。



第164図 62号掘立柱建物

76号掘立柱建物 (第174図、図版89-7)

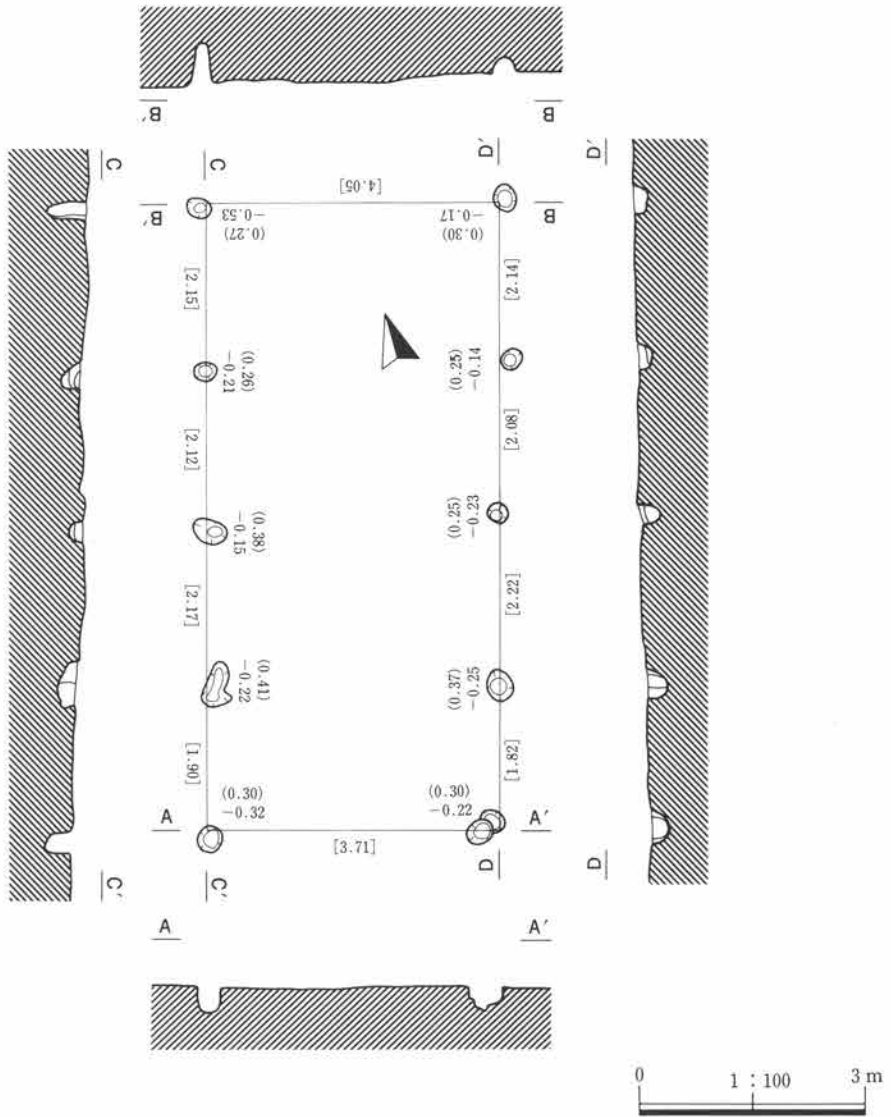
4区F-4に位置し、40・75号掘立柱建物、2号溝と重複する。棟方向は南北で方位 $N-5^{\circ}-E$ を示す。構造は桁行2間、梁行1間でやや歪みを持つ。柱間は桁行の東辺で22cm、西辺で9cmの差があり、東辺が西辺より13cm長い。梁行の柱間は北辺と南辺が近似値を示す。規模は桁行4.41m、梁行2.27m、面積 $10m^2$ である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

77号掘立柱建物 (第174図)

3区L-27に位置し、78号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位 $N-114^{\circ}-E$ を示す。構造は桁行3間、梁行1間でやや歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で最大63cm、南辺で47cmの差があり、北辺が南辺より34cm短い。梁行の柱間はほぼ等間である。規模は7.71m、梁行3.41m、面積 $26.2m^2$ である。柱穴は円形で柱痕は不明。

78号掘立柱建物 (第175図、図版90-4)

3区K-28に位置し、77号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位 $N-113^{\circ}-E$ を示す。構造は

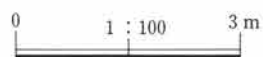
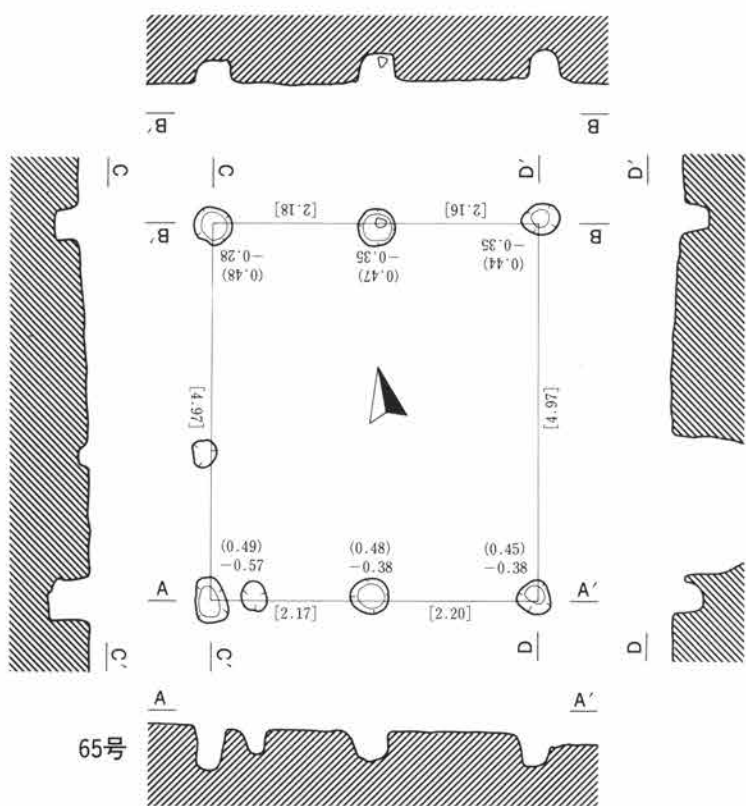
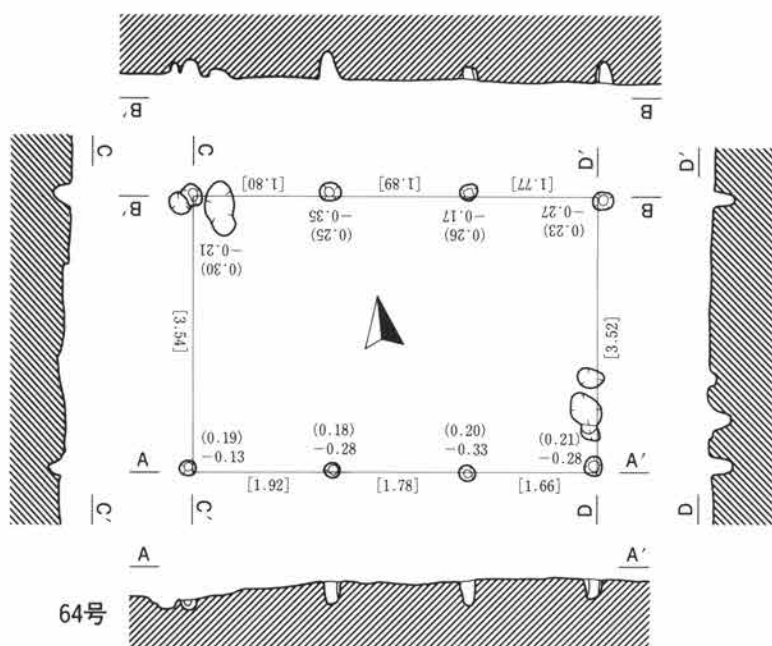


第165図 63号掘立柱建物

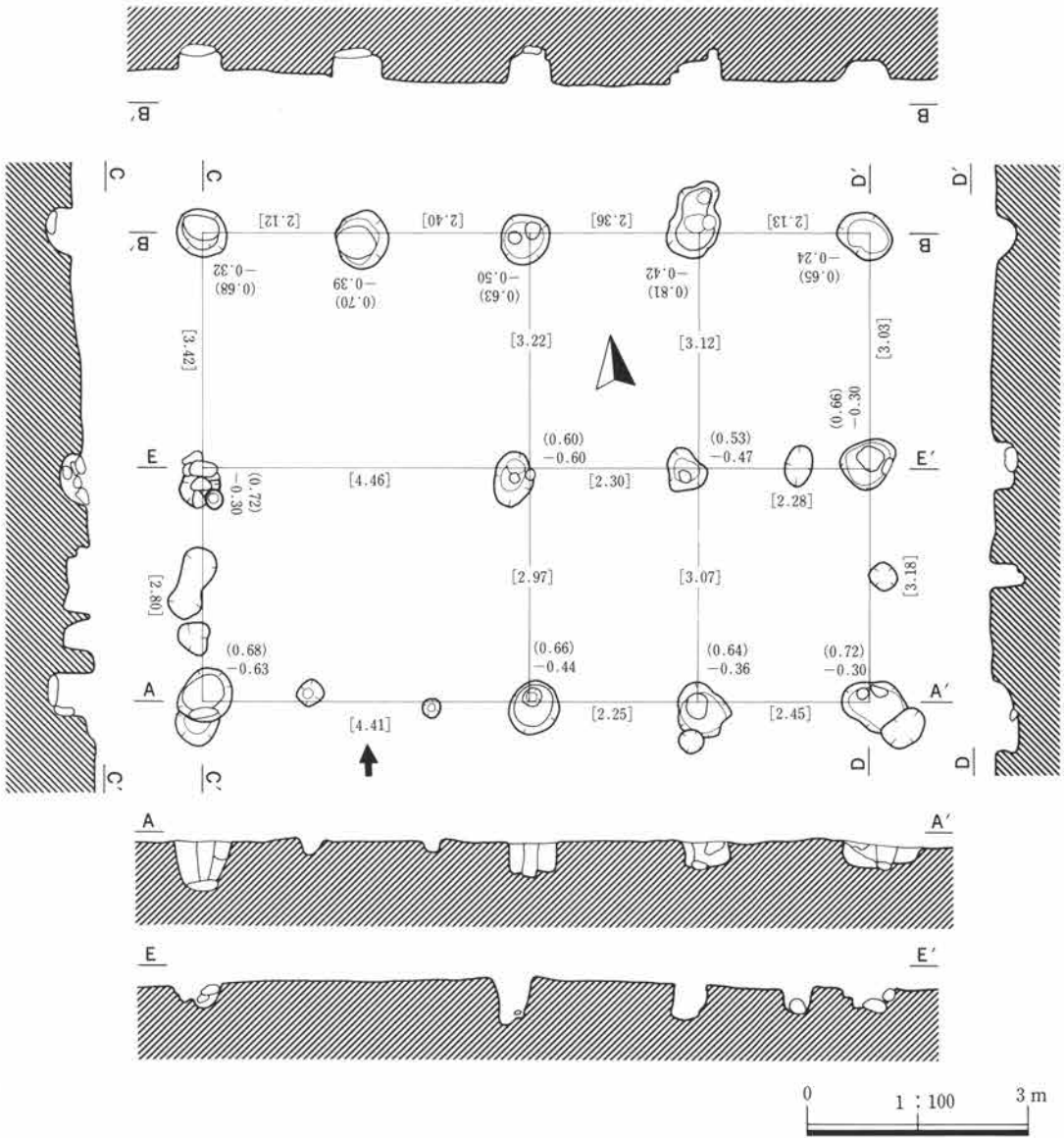
桁行4間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺で最大29cm、南辺で8cmであるが南北辺とも近似値の全長である。梁行の柱間は東辺が西辺より18cmほど短い。規模は桁行9.23m、梁行4.19m、面積38.6㎡である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

79号掘立柱建物（第175図）

3区O-1を位置し、56・66～68・86・87号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-88°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行2間である。柱間は桁行の北辺で最大7cm、南辺で23cmの差で比較的等間に近く、全長も両辺とも近似値を示す。梁行の柱間は西辺で13cmの差であるが東辺では1.23mの差を生じ、東辺が西辺より24cm長い。規模は桁行9.57m、梁行4.65m、面積44.5㎡である。柱穴は円形かやや楕円形気味で柱痕は不明。出土遺物はない。



第166図 64・65号掘立柱建物



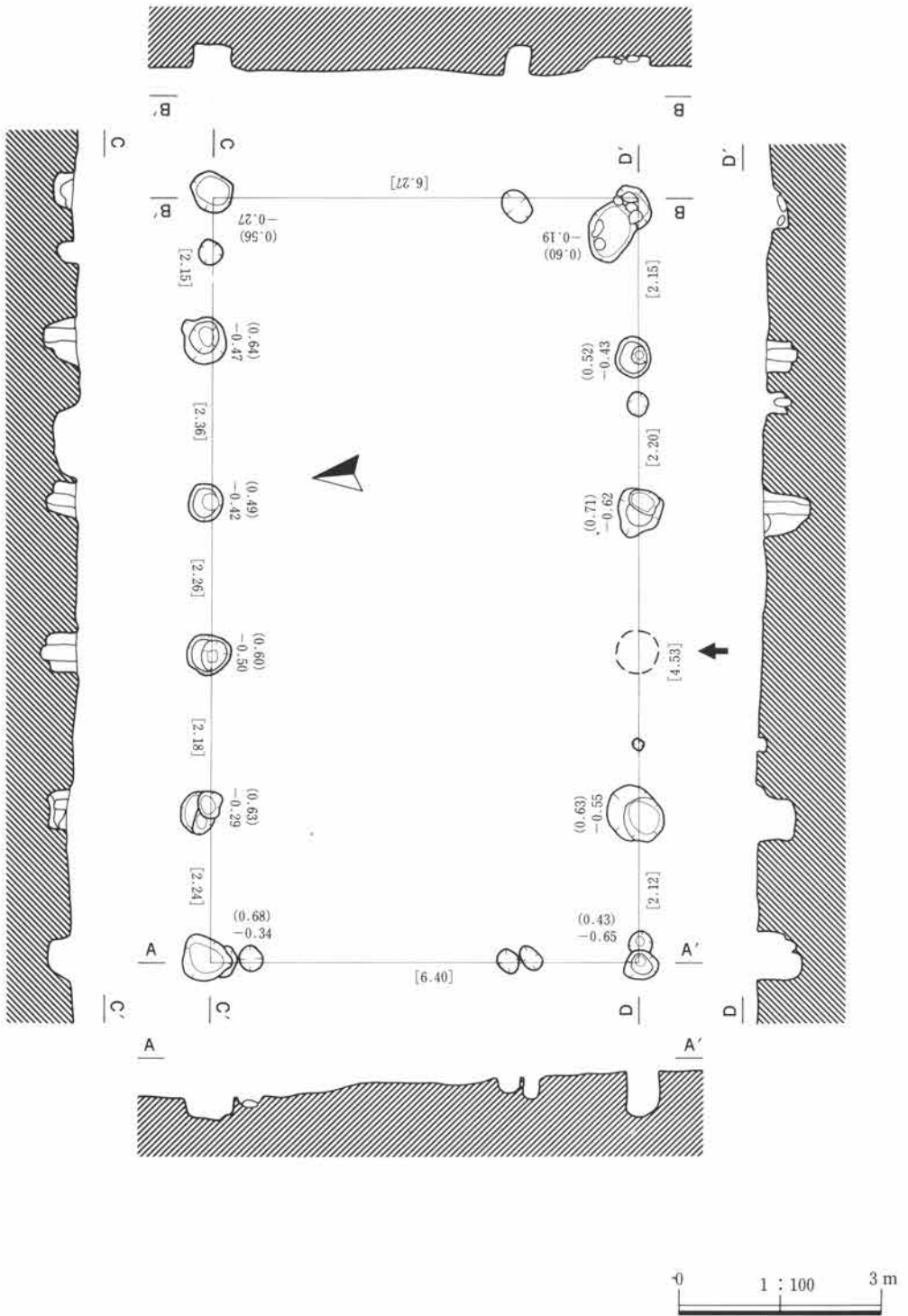
第167図 66号掘立柱建物

80号掘立柱建物 (第176図、図版87-2)

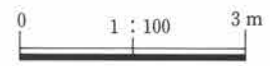
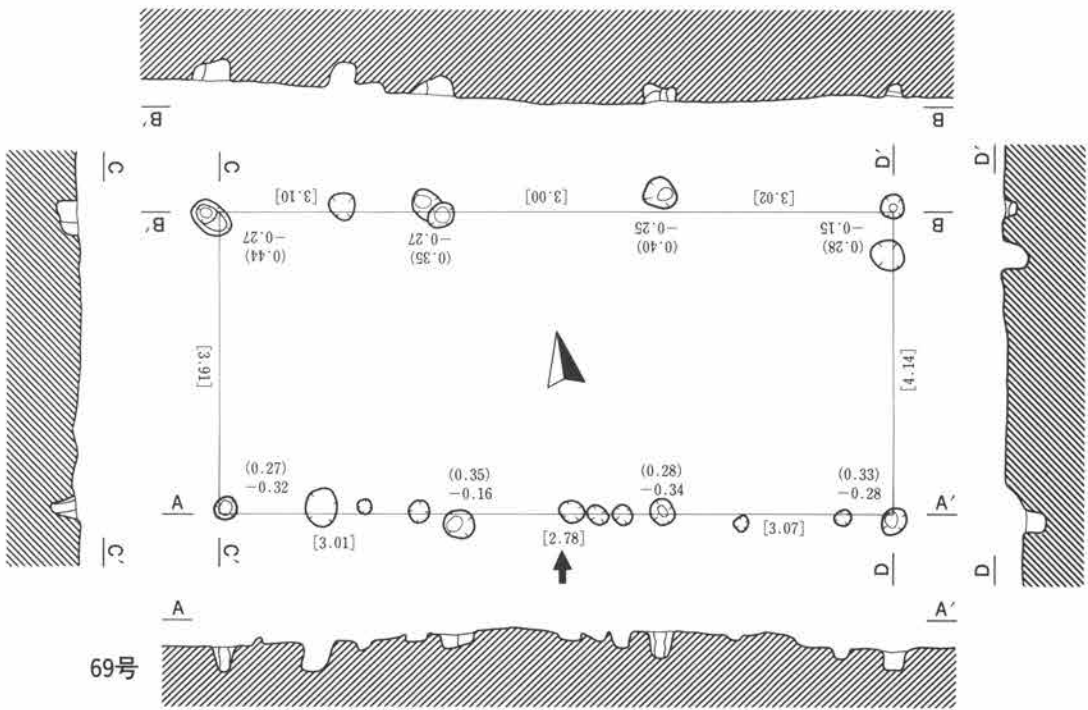
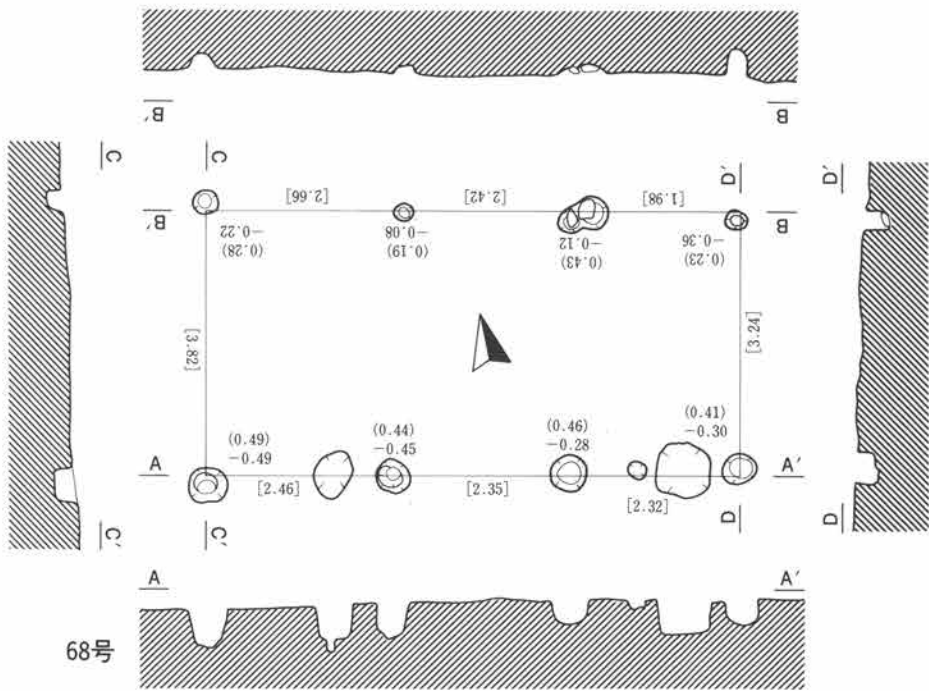
3区S-22に位置し、81~85・97号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-105°-Eを示す。構造は桁行4間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺で最大55cm、南辺で45cmの差があり、北辺が南辺より13cmほど短い。梁行の柱間は東辺が西辺より26cm短い。規模は桁行9.24m、梁行4.97m、面積45.9m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で西辺の梁行柱穴に13cm~15cm径の柱痕が残存する。出土遺物はない。

81号掘立柱建物 (第176図、図版87-2)

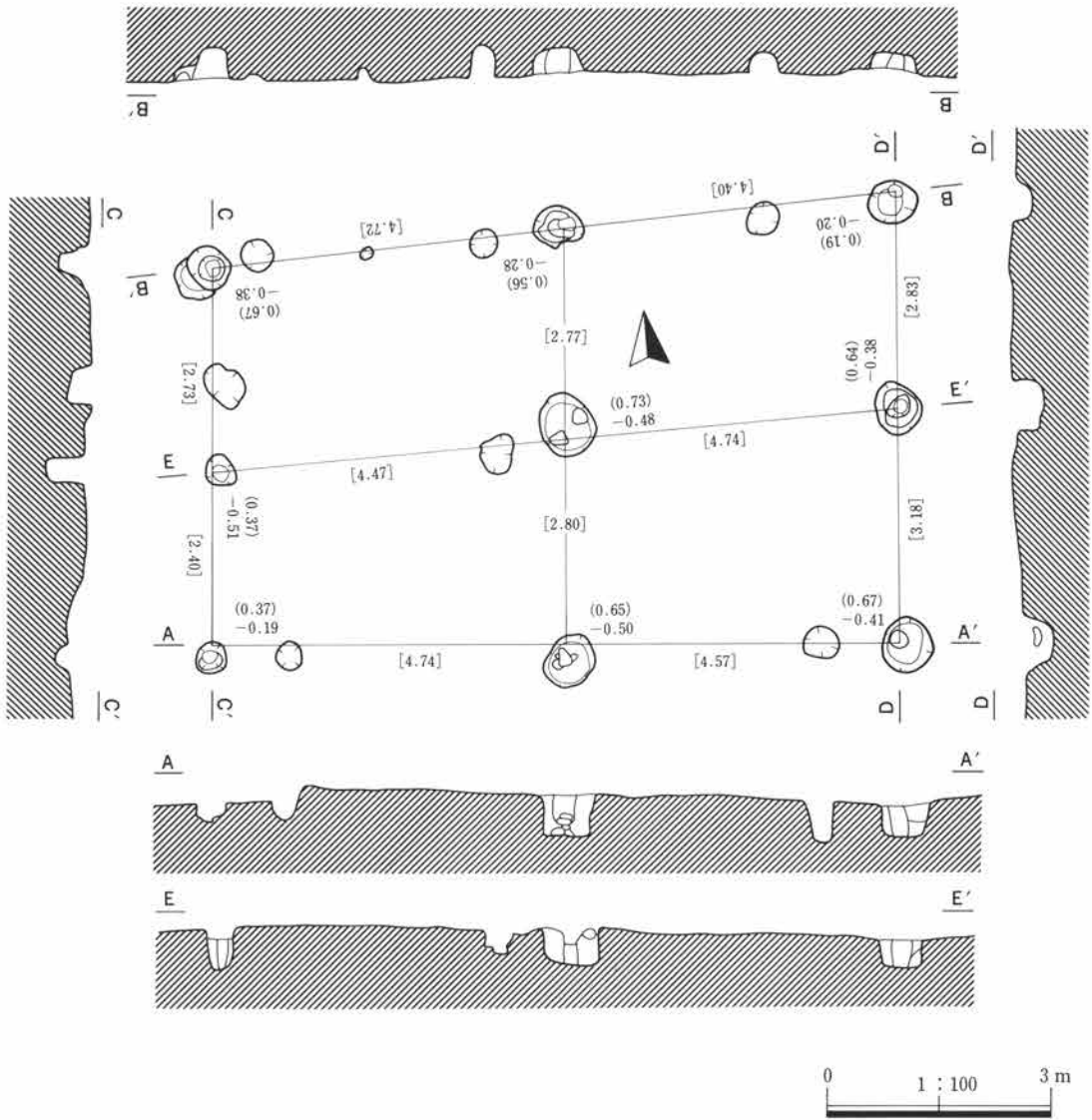
3区S-22に位置し、80・82~85・97号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-111°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の北辺で最大51cm、南辺で17cmの差があるが全長は同じ数値である。梁行の柱間は東辺が西辺より1.28mも長い。規模は桁行7.20m、梁行



第168図 67号掘立柱建物



第169図 68・69号掘立柱建物



第170図 70号掘立柱建物

4.10m、面積29.5㎡である。柱穴は円形か楕円形気味で桁行の北辺に柱痕が残存する。出土遺物はない。

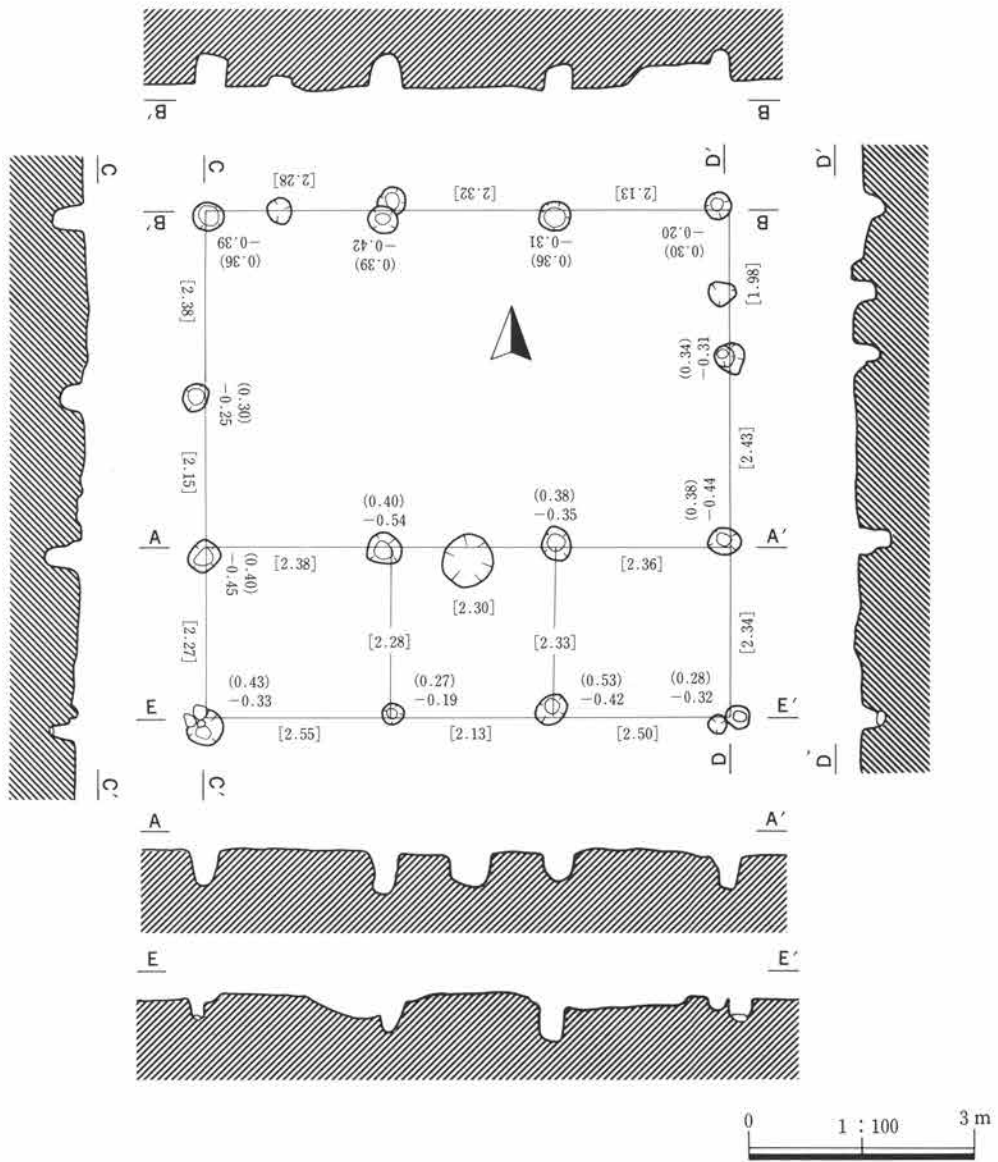
82号掘立柱建物（第177図、図版87-2）

3区S-21に位置し、80・81・83～85・97号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N-101°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺で最大38cmの差があるが、南辺は等間に近い。北辺は南辺より11cmほど長い。梁行の柱間は東西辺ほぼ等間である。規模は桁行6.24m、梁行4.34m、面積27㎡である。柱穴は円形か楕円形気味で柱痕は不明。出土遺物はない。

83号掘立柱建物（第178図、図版87-2）

3区T-22に位置し、80～82・84・85・97号掘立柱建物等と重複する。棟方向は南北で方位N-18°-Eを示す。構造は桁行4間、梁行1間で東庇を付す。柱間は桁行の東辺で最大47cm、西辺で60cmの



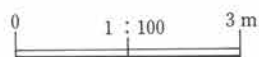
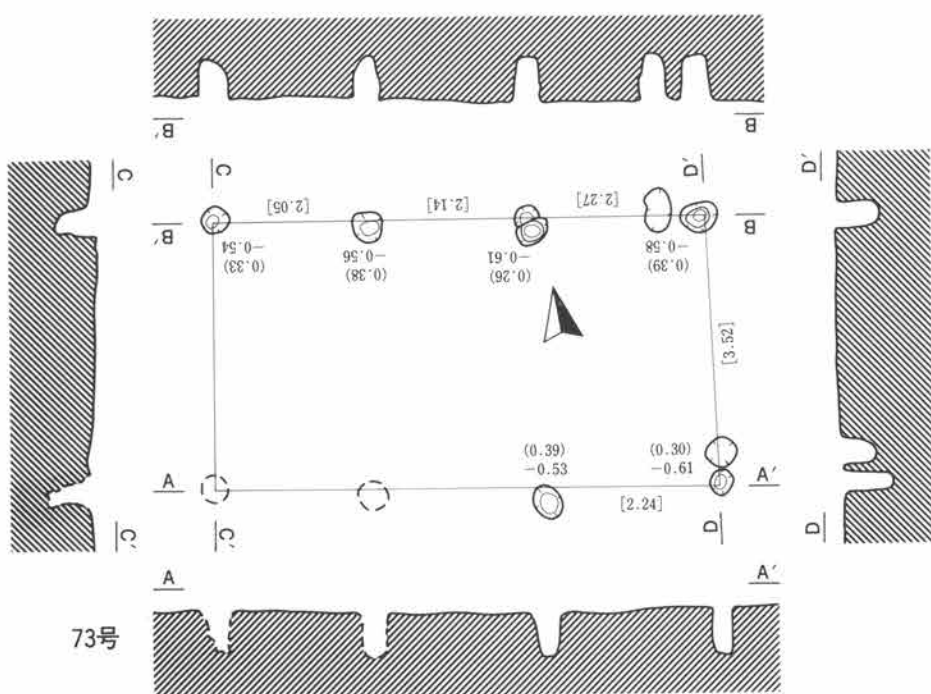
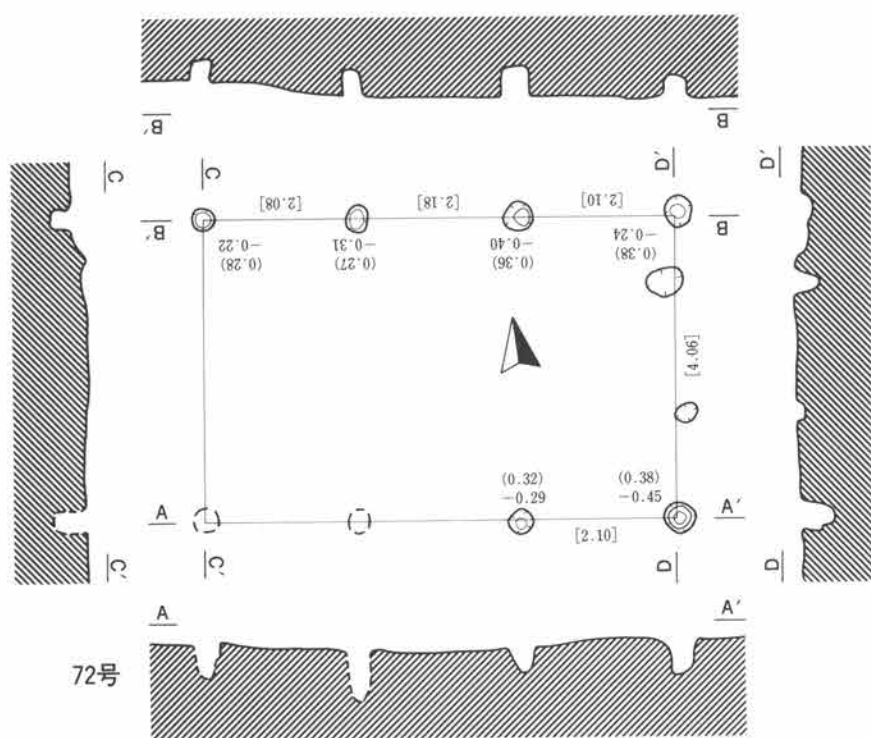


第171図 71号掘立柱建物

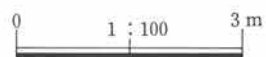
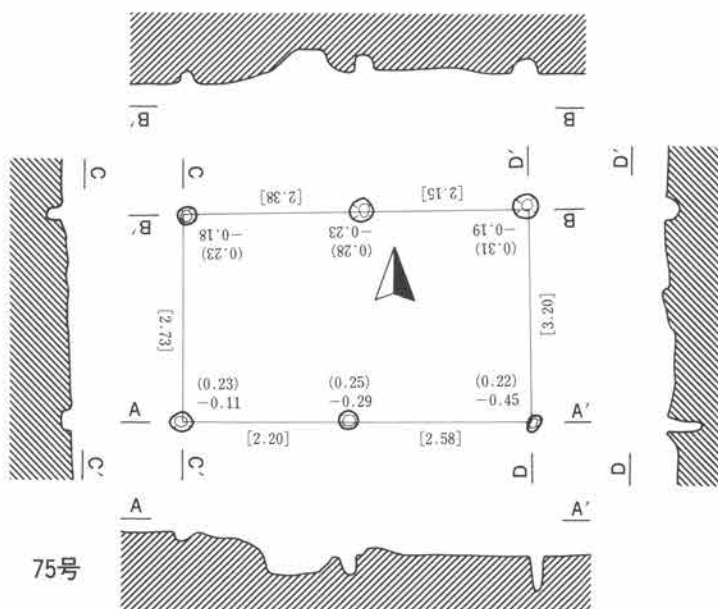
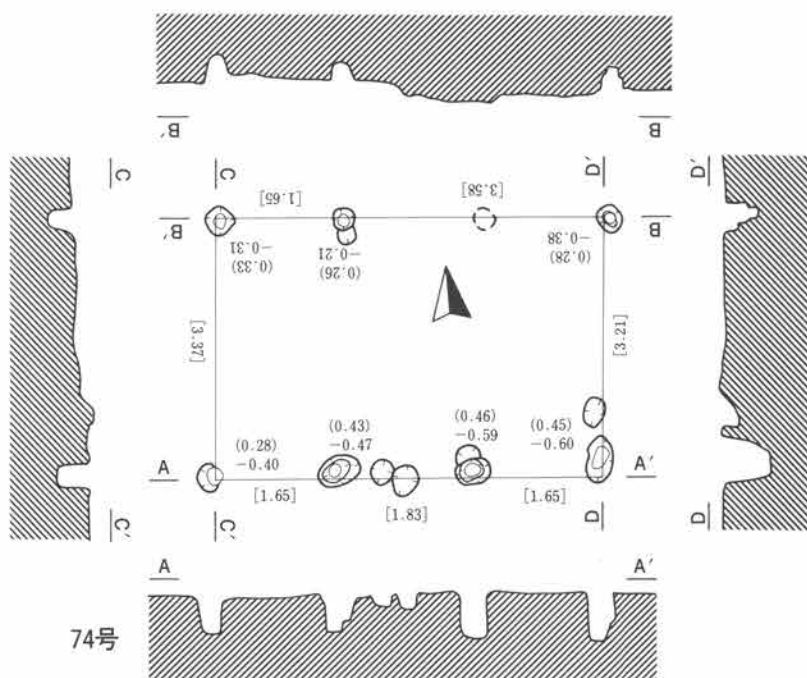
差があり、東辺が西辺より12cmほど短い。底部の柱間は南方に連れて短くなり最大50cmの差がある。梁行の柱間は北辺が南辺より6cm短い。底部は1.40mほどの等間である。規模は桁行8.77m、梁行5.28m、面積46.3m<sup>2</sup>である。柱穴は南東隅を検出できなかったが、ほぼ円形で部分的に据え方と考えられる一段深い掘り込みを有するものもある。出土遺物はない。

84号掘立柱建物 (第179図、図版87-2)

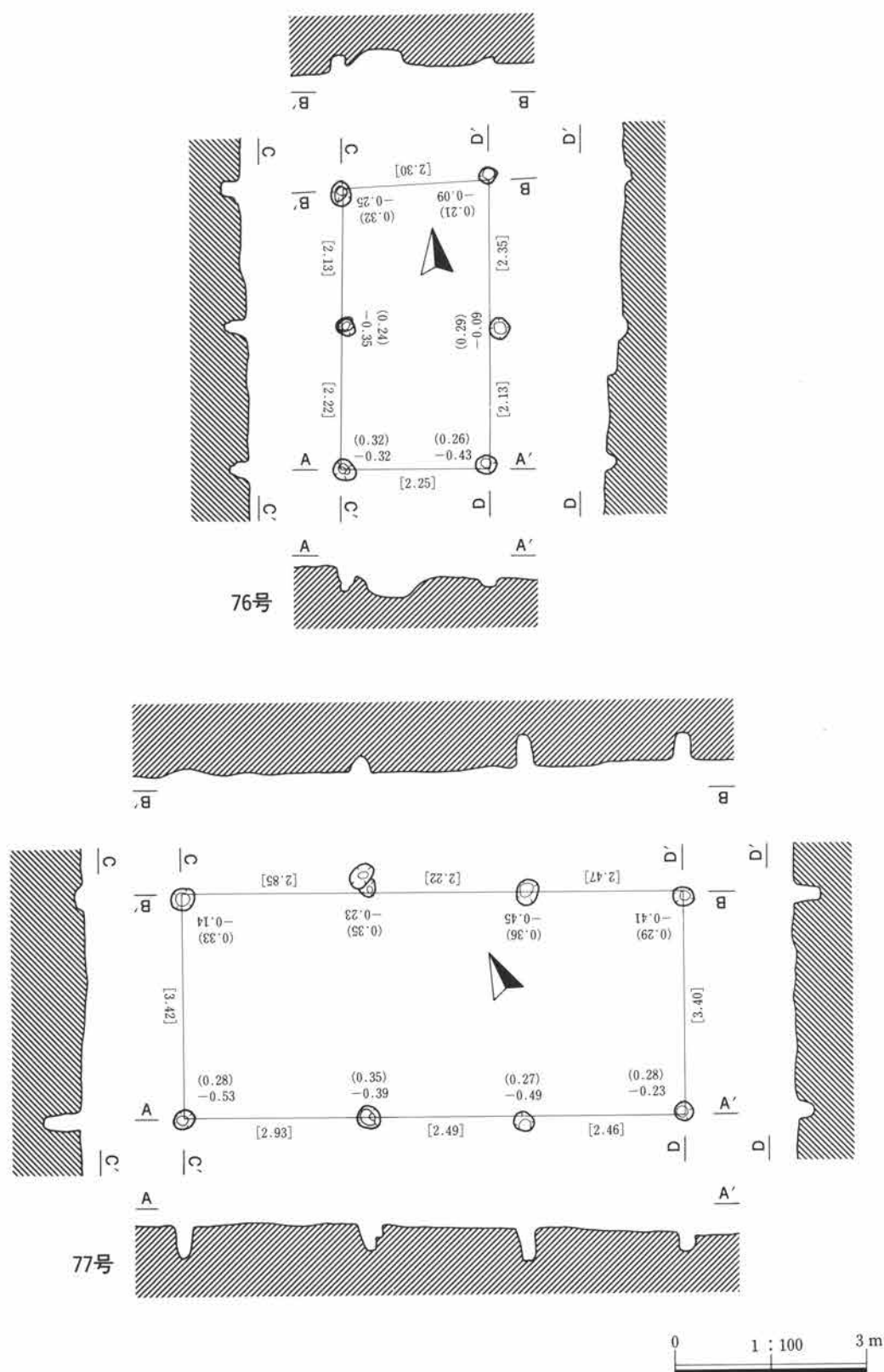
3区T-22に位置し、80~83・85・97号掘立柱建物等と重複する。棟方向は南北で方位N-18°-Eを示す。構造は桁行4間、梁行1間である。柱間は桁行の東辺で南1間が明確を欠く。西辺は最大13cmの差で比較的等間である。梁行の柱間も近似値を示すであろう。規模は桁行8.79m、梁行4.05m、面積35.6m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。



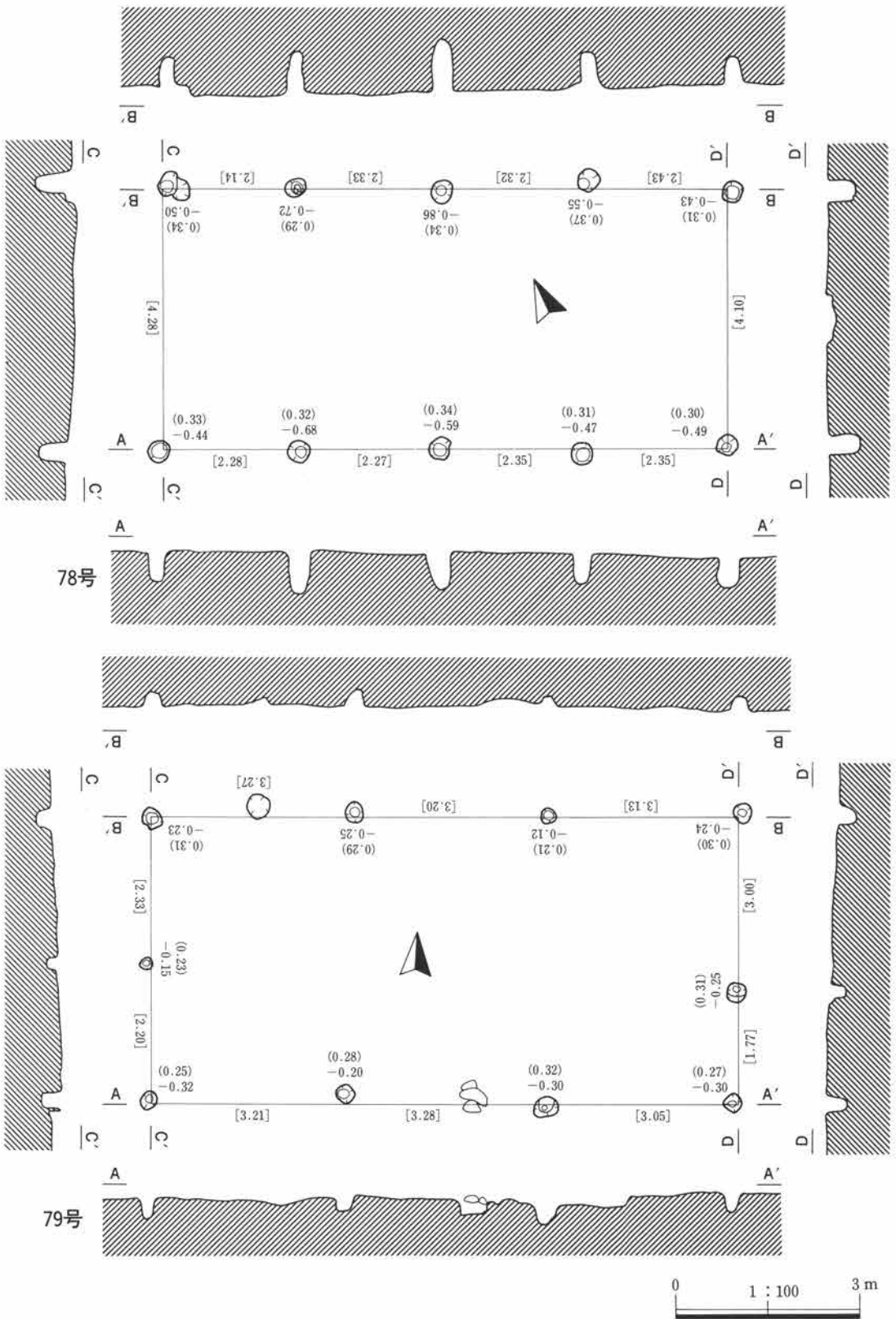
第172図 72・73号掘立柱建物



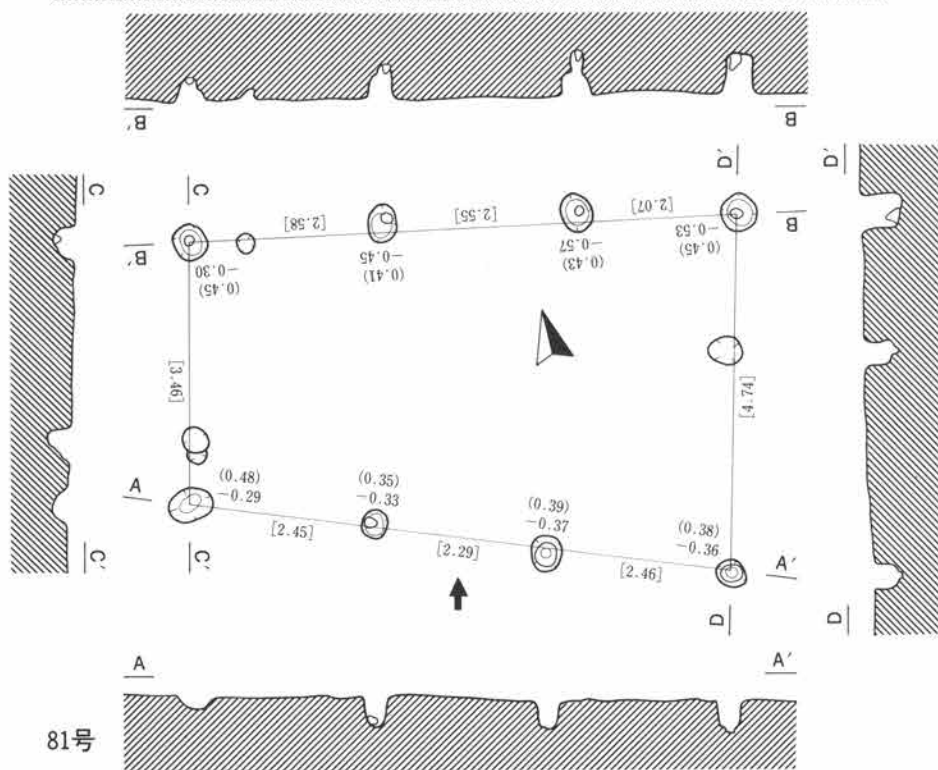
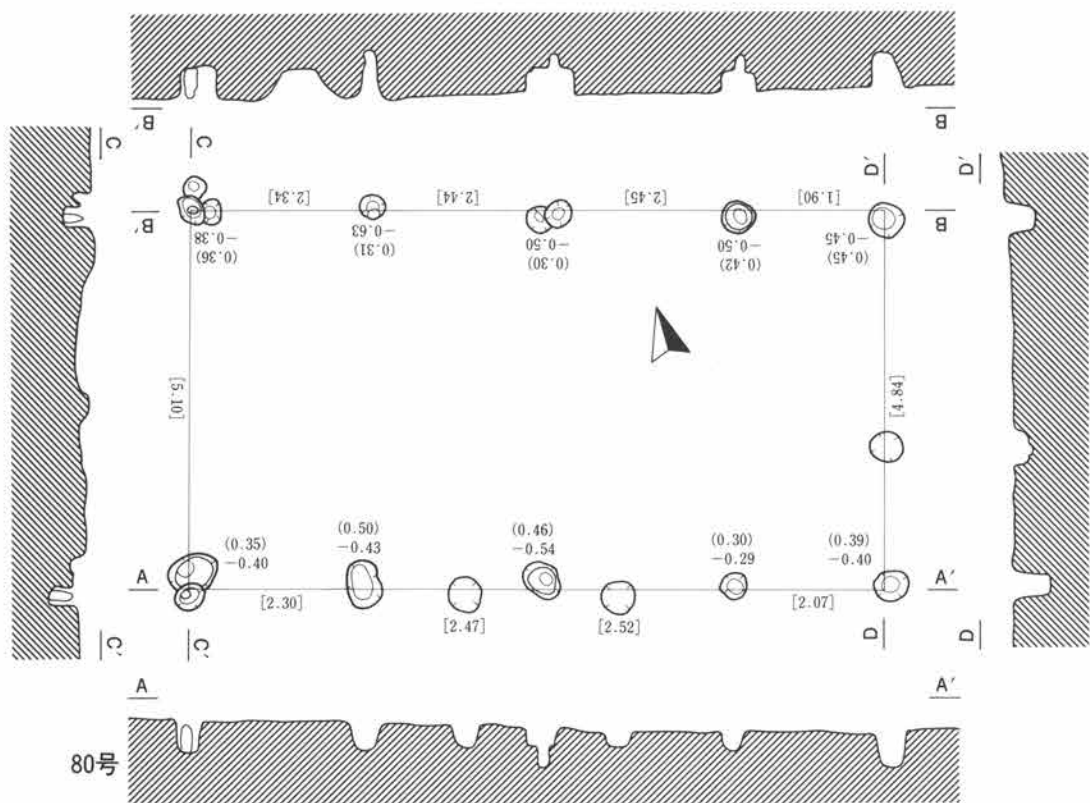
第173図 74・75号掘立柱建物



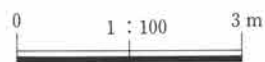
第174图 76・77号掘立柱建物

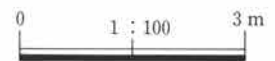
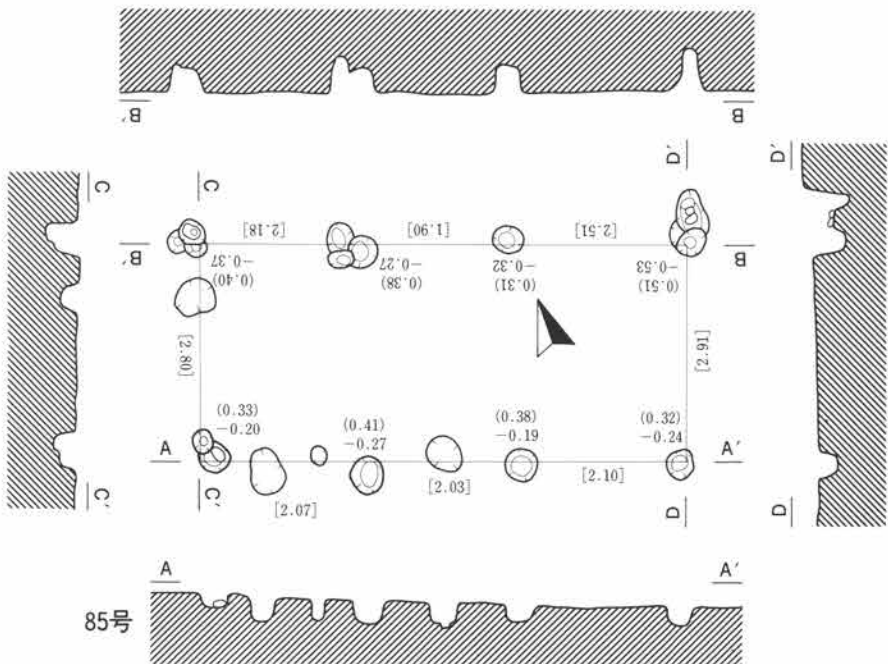
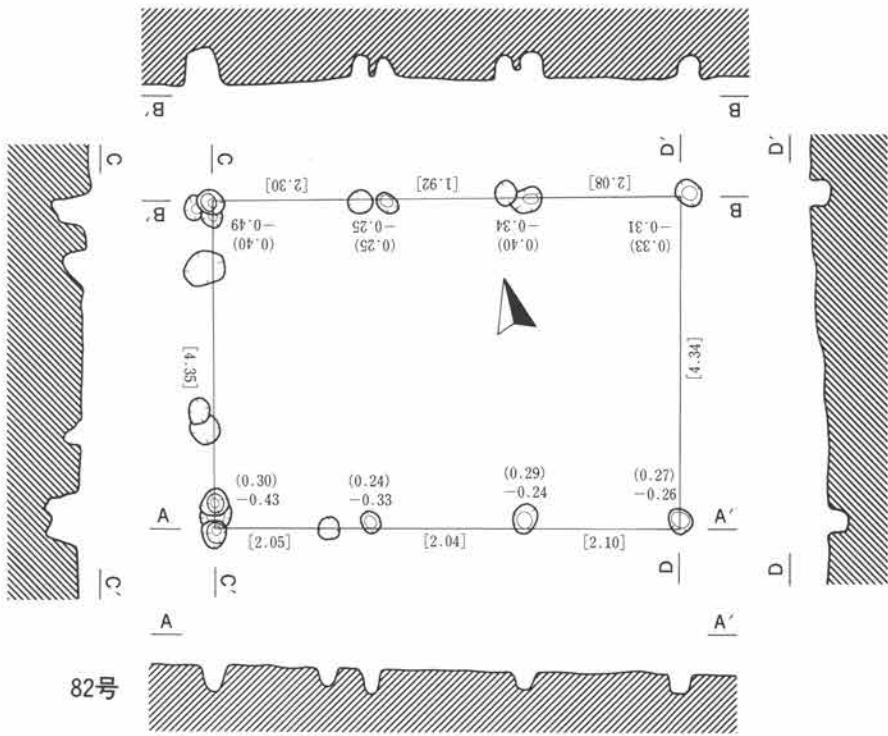


第175図 78・79号掘立柱建物



第176图 80・81号掘立柱建物

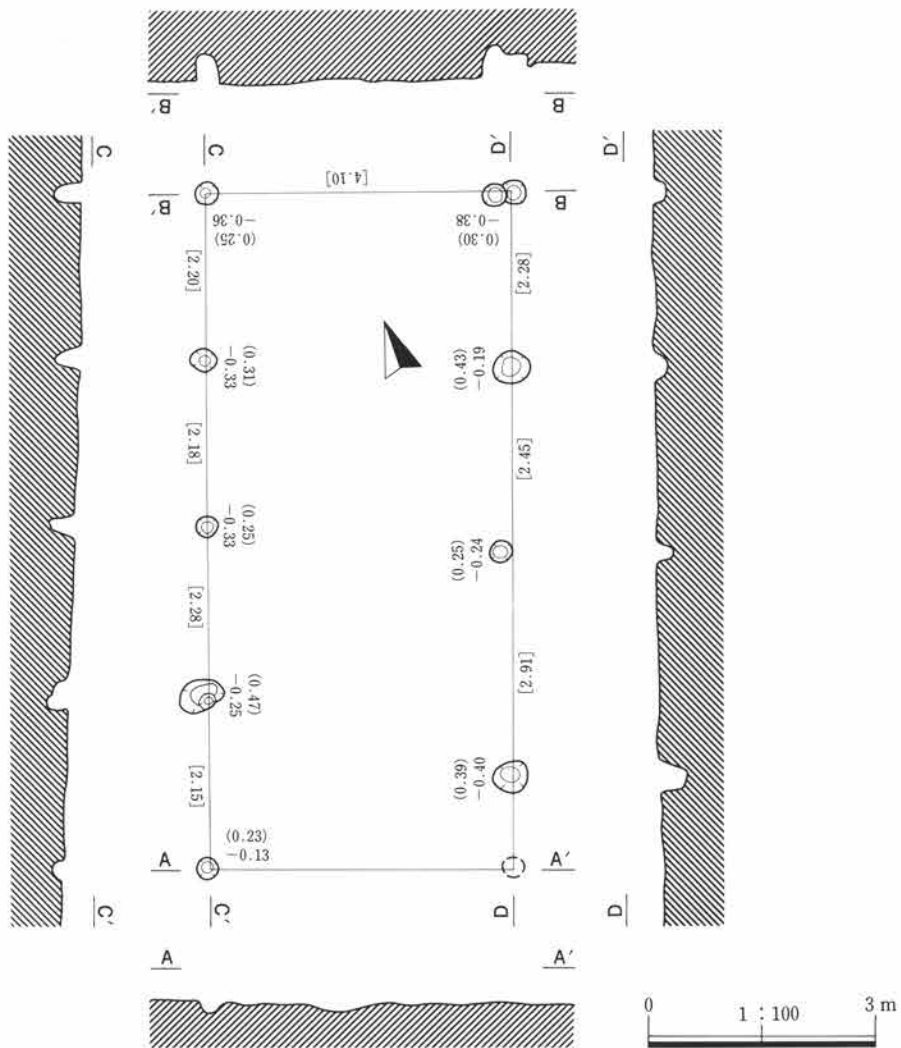




第177図 82・85号掘立柱建物







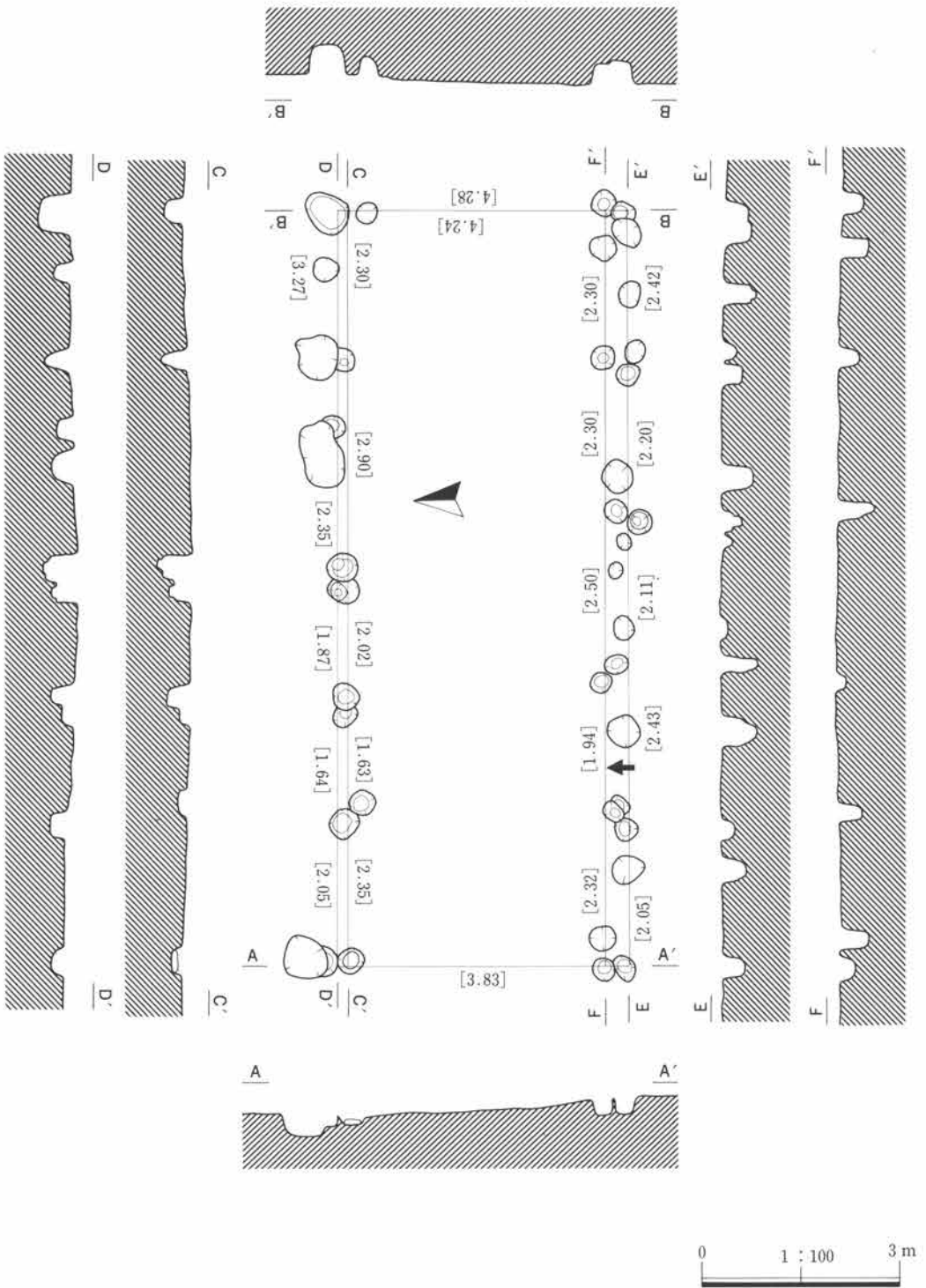
第179図 84号掘立柱建物

## 87号掘立柱建物 (第180図)

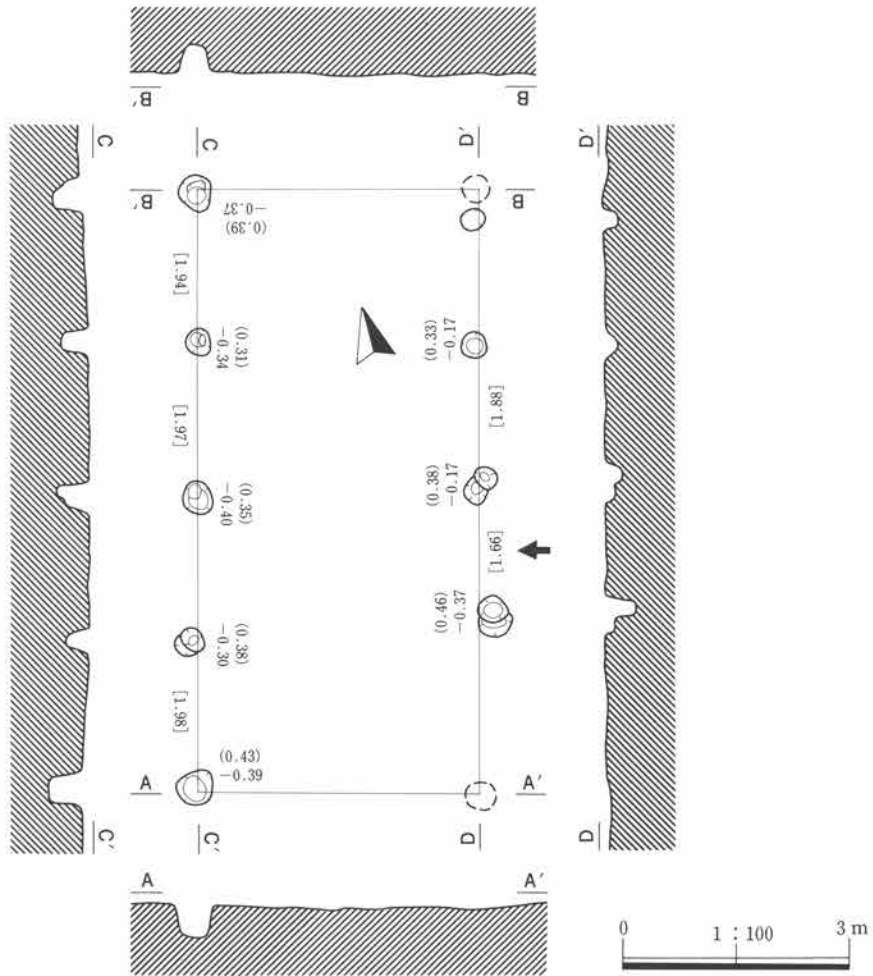
3区Q-33に位置し、86号と同様の重複関係である。棟方向は東西で方位N-94°-Eを示す。構造は桁行5間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺で最大1.61m、南辺で56cmの差があり、北辺が南辺より18cm短い。梁行の柱間は東辺が西辺より37cm長い。規模は桁行11.27m、梁行4.03m、面積45.4㎡である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

## 88号掘立柱建物 (第181図)

3区P-31に位置し、56・57・66・67・70・89・92号掘立柱建物等と重複する。棟方向は南北で方位N-14°-Eを示す。構造は桁行4間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の東辺北隅が明確を欠くが、西辺はほぼ等間である。梁行の柱間は北辺が南辺より27cmほど短くなる。規模は桁行7.85m、梁行3.76m、面積29.5㎡である。柱穴は円形か楕円形で柱痕は不明。出土遺物はない。



第180図 86・87号掘立柱建物



第181図 88号掘立柱建物

**89号掘立柱建物 (第182図)**

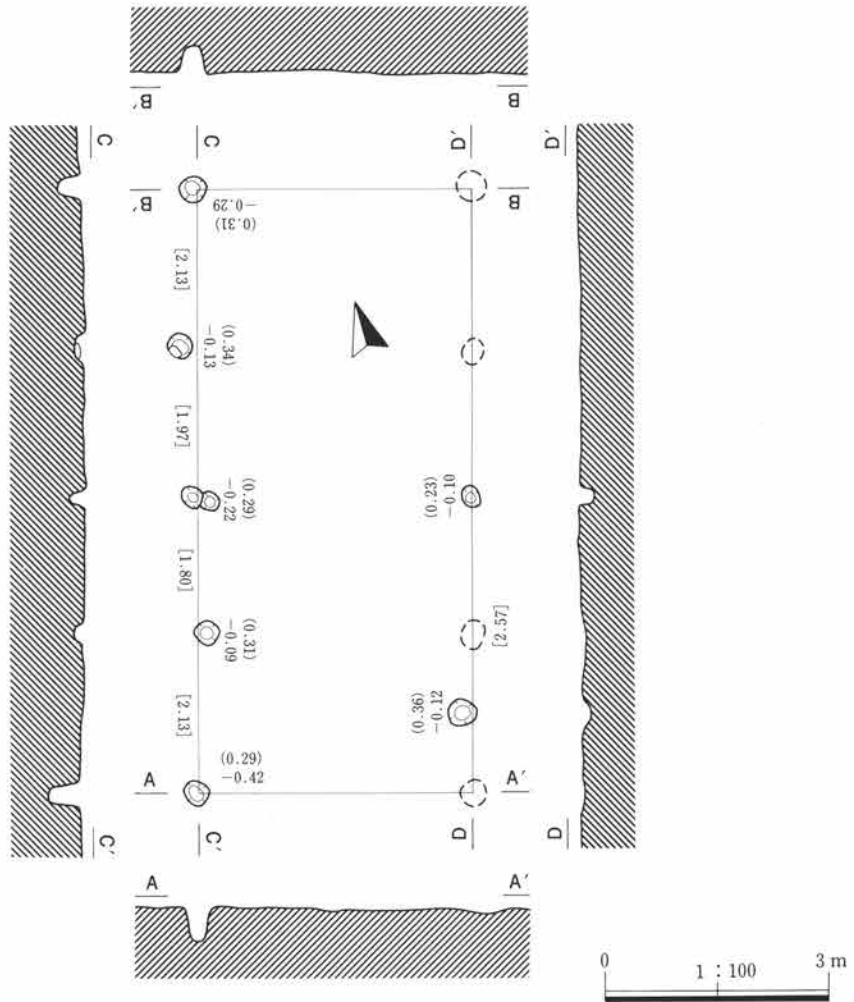
3区P-31に位置し、88号と同様の重複である。棟方向は南北で方位N-16°-Eを示す。構造は桁行4間、梁行1間となろう。柱間は88号と同じく桁行の東辺が明確を欠く。西辺は最大33cmの差である。梁行の柱間は南北辺とも近似値を示す。規模は桁行8.05m、梁行3.65m、面積29.3m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

**90号掘立柱建物 (第183図)**

3区Q-31に位置し、58・59・66・67・70・71・93号掘立柱建物等と重複する。棟方向は南北で方位N-18°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間である。柱間は桁行の東辺で最大19cm、西辺で14cmとほぼ等間である。梁行の柱間は南北辺が等しくなろう。規模は桁行6.57m、梁行3.97m、面積26m<sup>2</sup>である。柱穴は北東隅が明確でないが円形かやや歪んだ円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

**91号掘立柱建物 (第184図)**

3区R-32に位置し、58・59・66・67・70・71・86・87・90号掘立柱建物等と重複する。棟方向は南北で方位N-18°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間でやや歪みを持つ。柱間は桁行の東辺で最



第182図 89号掘立柱建物

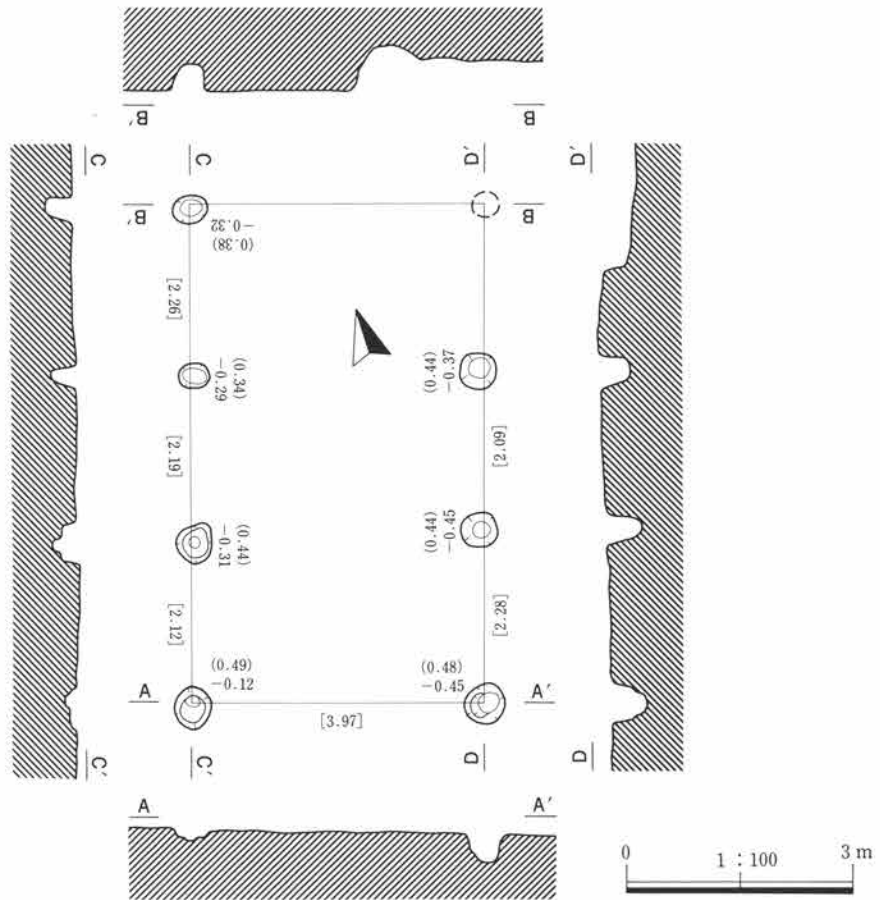
大1.03m、西辺で13cmの差があり、東辺が西辺より33cmほど短い。梁行の柱間は近似値である。規模は桁行6.78m、梁行5.49m、面積37.2m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か円形気味で柱痕は不明。出土遺物はない。

92号掘立柱建物 (第185図)

3区Q-32に位置し、56・66・67・70・88~91号掘立柱建物等と重複する。棟方向は南北であろう。方位はN-15°-Eを示す。構造は桁行3間、梁行1間で歪みを持つ。柱間は桁行の東辺で最大25cm、西辺で40cmの差があり、東辺が西辺より11cmほど短い。梁行の柱間はほぼ等間である。規模は桁行4.03m、梁行3.94m、面積15.9m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か歪んだ楕円形気味で柱痕は不明。出土遺物はない。

93号掘立柱建物 (第185図)

3区R-32に位置し、58・59・66・67・70・71・86・87・90・91号掘立柱建物等と重複する。棟方向は東西で方位N-104°-Eを示す。構造は桁行4間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺で最大76cmで、南辺は西側1間の柱穴1ヵ所が検出できなかったが、北辺は南辺より19cm長い。梁行の柱間は東辺が西辺より15cmほど長い。規模は桁行8.34m、梁行2.87m、面積23.9m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で柱痕



第183図 90号掘立柱建物

は不明。出土遺物はない。

#### 94号掘立柱建物 (第186図)

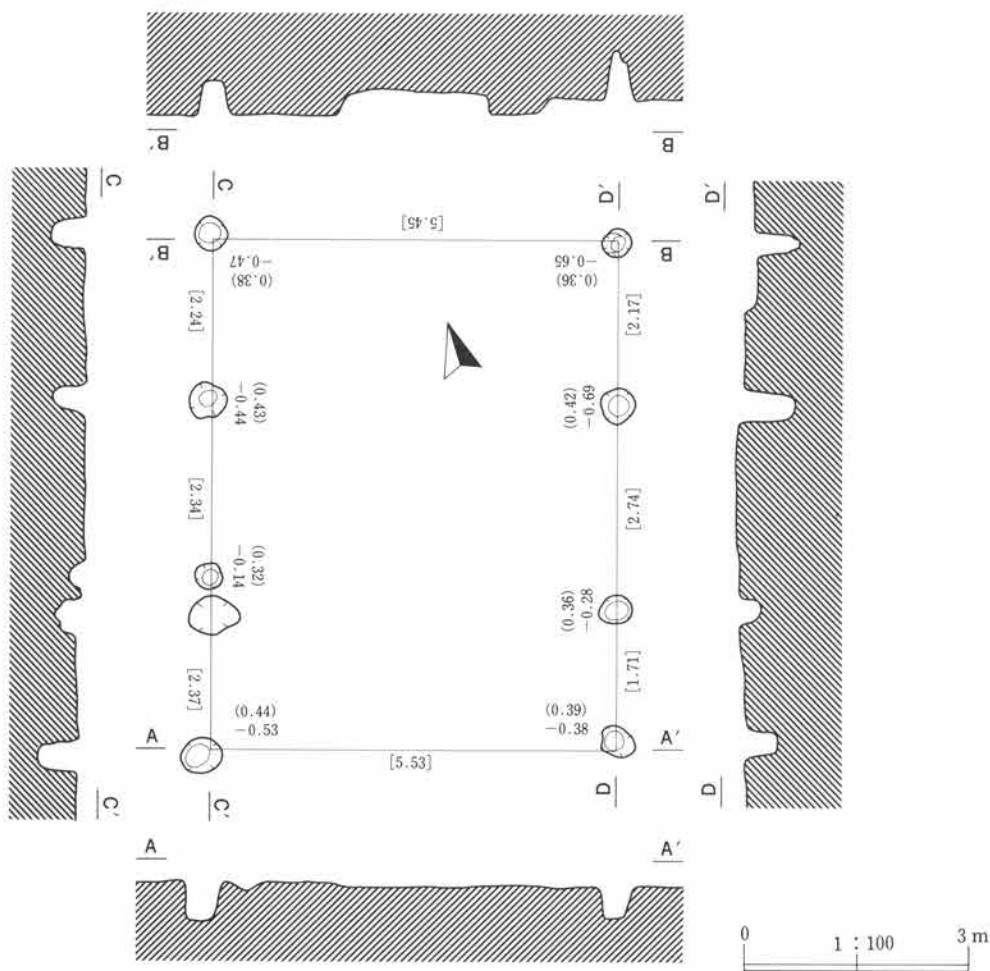
3区L-32に位置し、51・95号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N-102°-Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺で34cm、南辺で10cmの差があるが全長はほぼ同じである。梁行の柱間もほぼ等間である。規模は桁行4.51m、梁行2.96m、面積13.3m<sup>2</sup>である。柱穴は円形かやや歪んだ楕円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

#### 95号掘立柱建物 (第186図)

3区L-32に位置し、51・94号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N-96°-Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間と考えられる。柱間は桁行の北辺でほぼ等間、南辺の中央柱穴が検出できなかった。北辺は南辺より20cmほど短い。梁行の柱間は東辺が西辺より21cm短い。規模は桁行3.92m、梁行2.16m、面積8.4m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

#### 96号掘立柱建物 (第187図、図版85-2)

4区I-17に位置し、棟方向は南北で方位N-13°-Eを示す。構造は桁行1間、梁行2間でやや歪みを持つ。柱間は桁行の東辺が西辺より8cmほど短い。梁行の柱間は北辺がほぼ等間で、南辺は中央の柱穴が検出できなかった。規模は桁行3.39m、梁行2.65m、面積9m<sup>2</sup>である。柱穴は円形で柱痕は



第184図 91号掘立柱建物

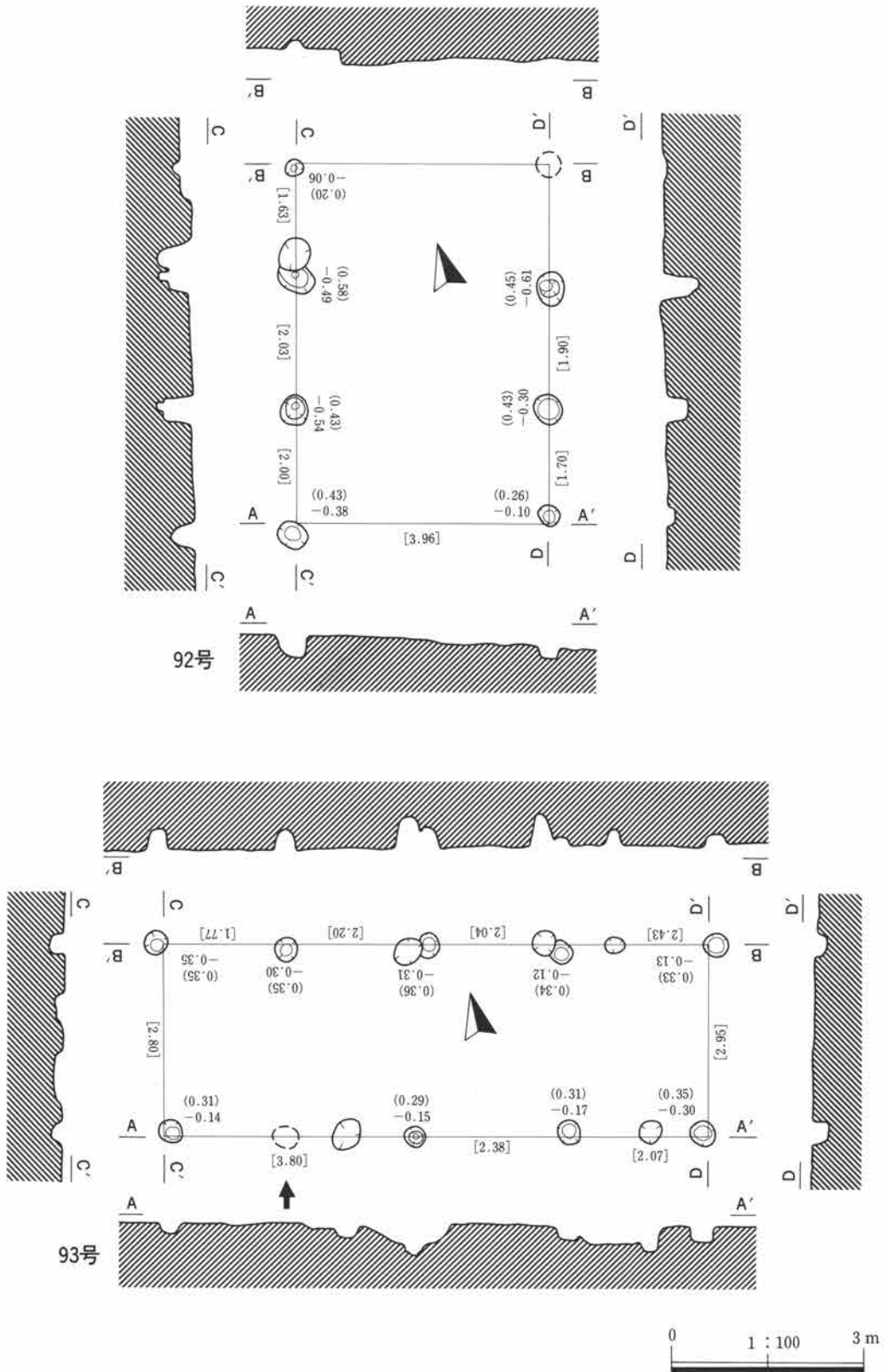
不明。出土遺物はない。

97号掘立柱建物（第187図、図版87-2）

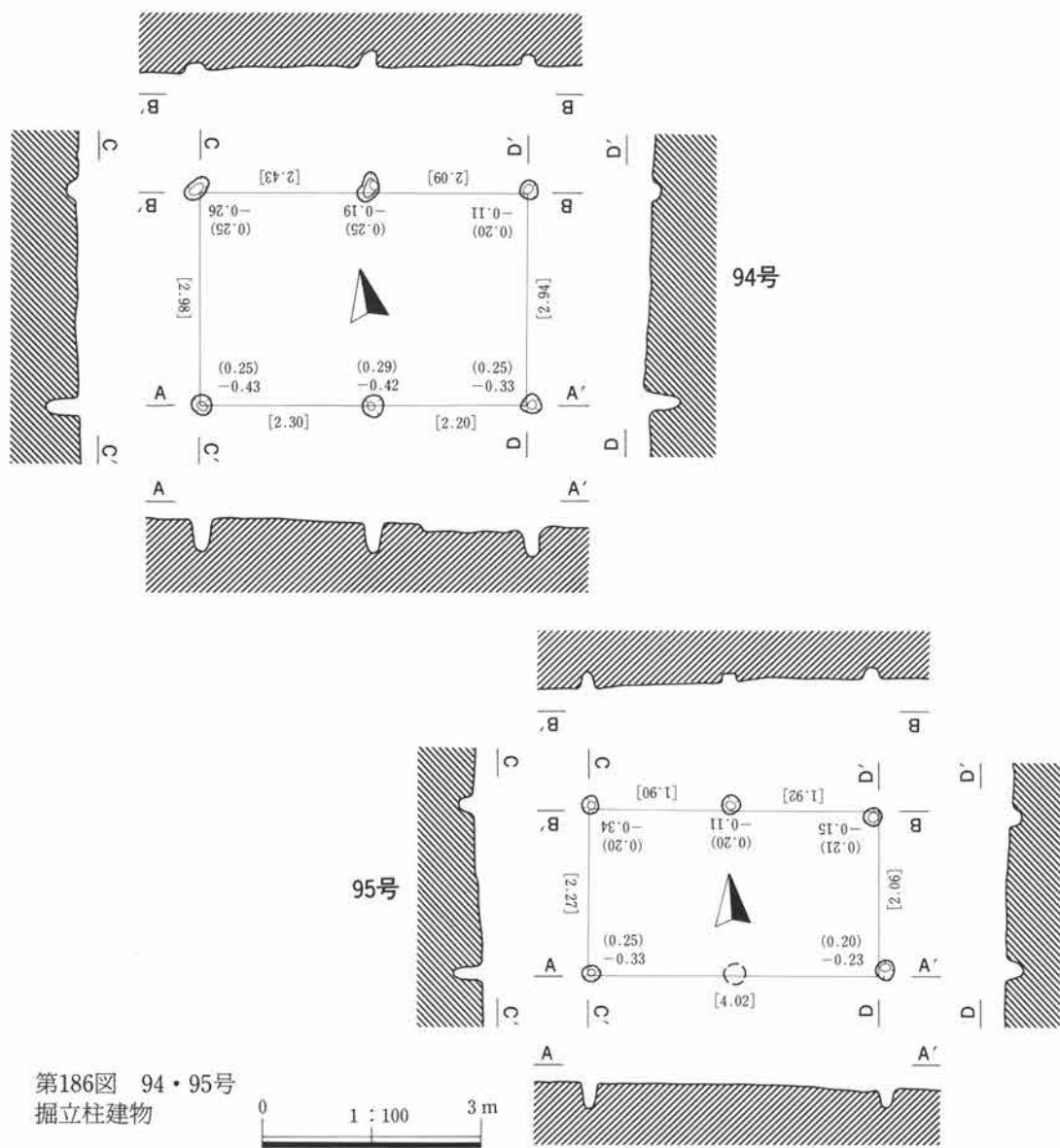
3区R-22に位置し、80～85号掘立柱建物と重複する。棟方向は東西で方位N-110°-Eを示す。構造は桁行2間、梁行1間である。柱間は桁行の北辺で9cm、南辺で11cmの差で北辺が南辺より18cmほど短くなる。梁行の柱間は東辺が西辺より8cmほど短い。規模は桁行3.94m、梁行3.14m、面積12.3m<sup>2</sup>である。柱穴は南東隅が検出できなかった。形状は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

98号掘立柱建物（第187図）

3区I-28に位置し、棟方向は南北で方位N-14°-Eを示す。構造は桁行1間、梁行2間である。柱間は桁行の東西辺はほぼ等間である。梁行の柱間は北辺で18cm、南辺で41cmの差がある。規模は桁行3.05m、梁行2.99m、面積9.1m<sup>2</sup>である。柱穴は円形か円形気味で柱痕は不明。出土遺物はない。



第185図 92・93号掘立柱建物



第186図 94・95号  
掘立柱建物

1号柱列 (第188図、図版84-2)

4区U'-23に位置する。柱間2間が確認され、方位はN-80°-Eである。柱間はほぼ等間で、規模は2.44mである。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

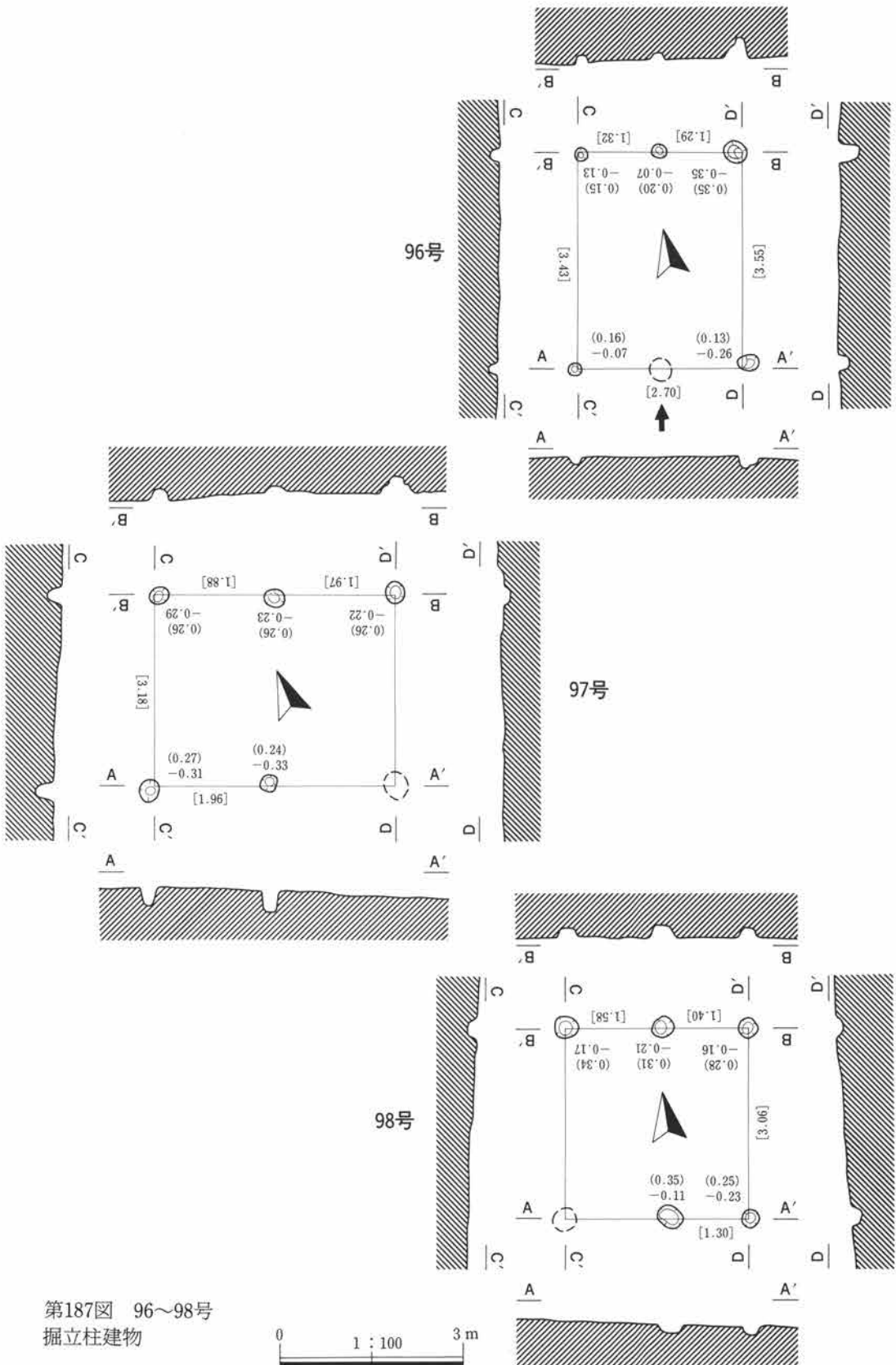
2号柱列 (第188図、図版84-2)

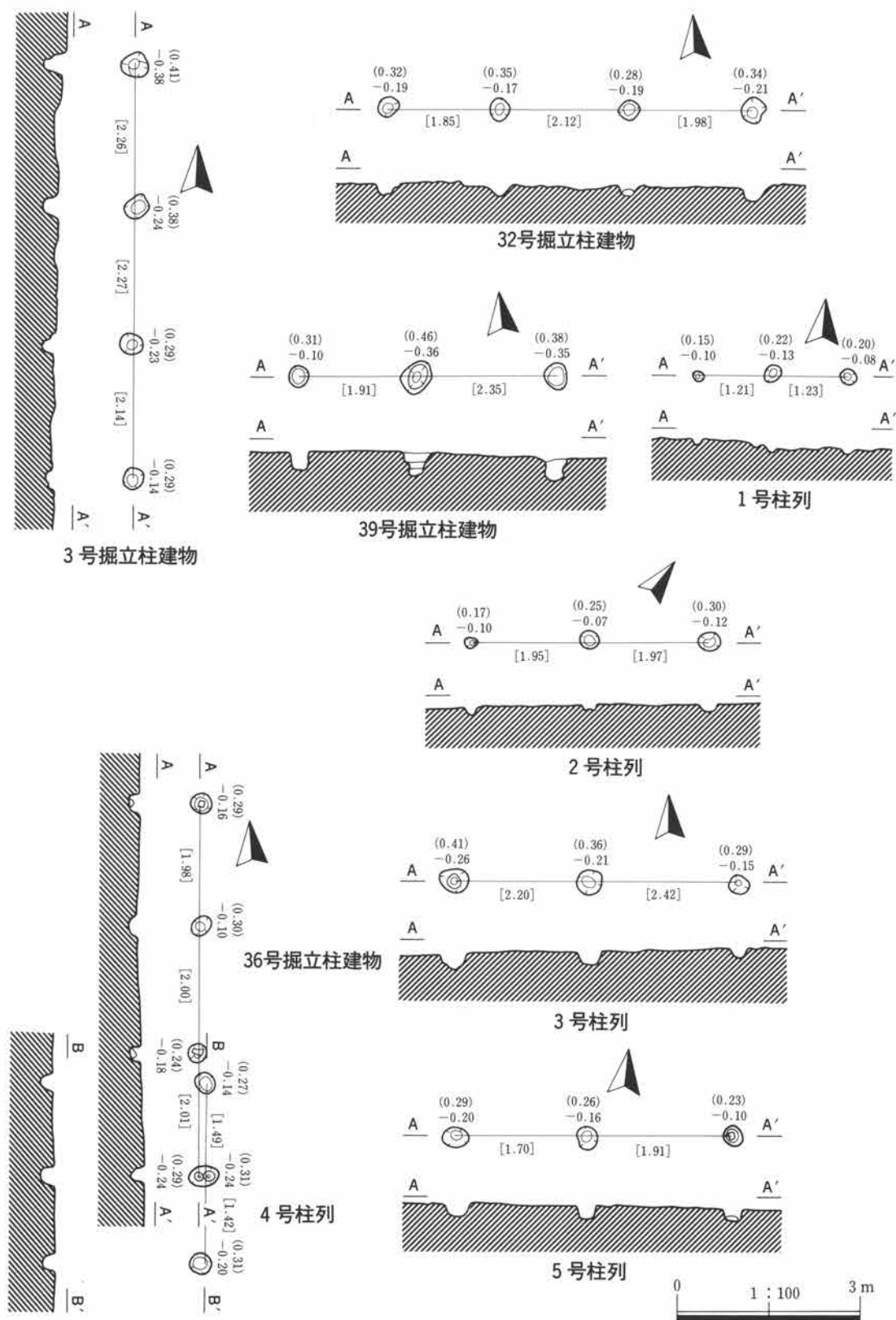
4区Y'-23に位置し、5号掘立柱建物と重複する。柱間2間が確認され、方位はN-45°-Eである。柱間はほぼ等間で、規模は3.92mである。柱穴は円形か楕円形気味で柱痕は不明。出土遺物はない。

3号柱列 (第188図)

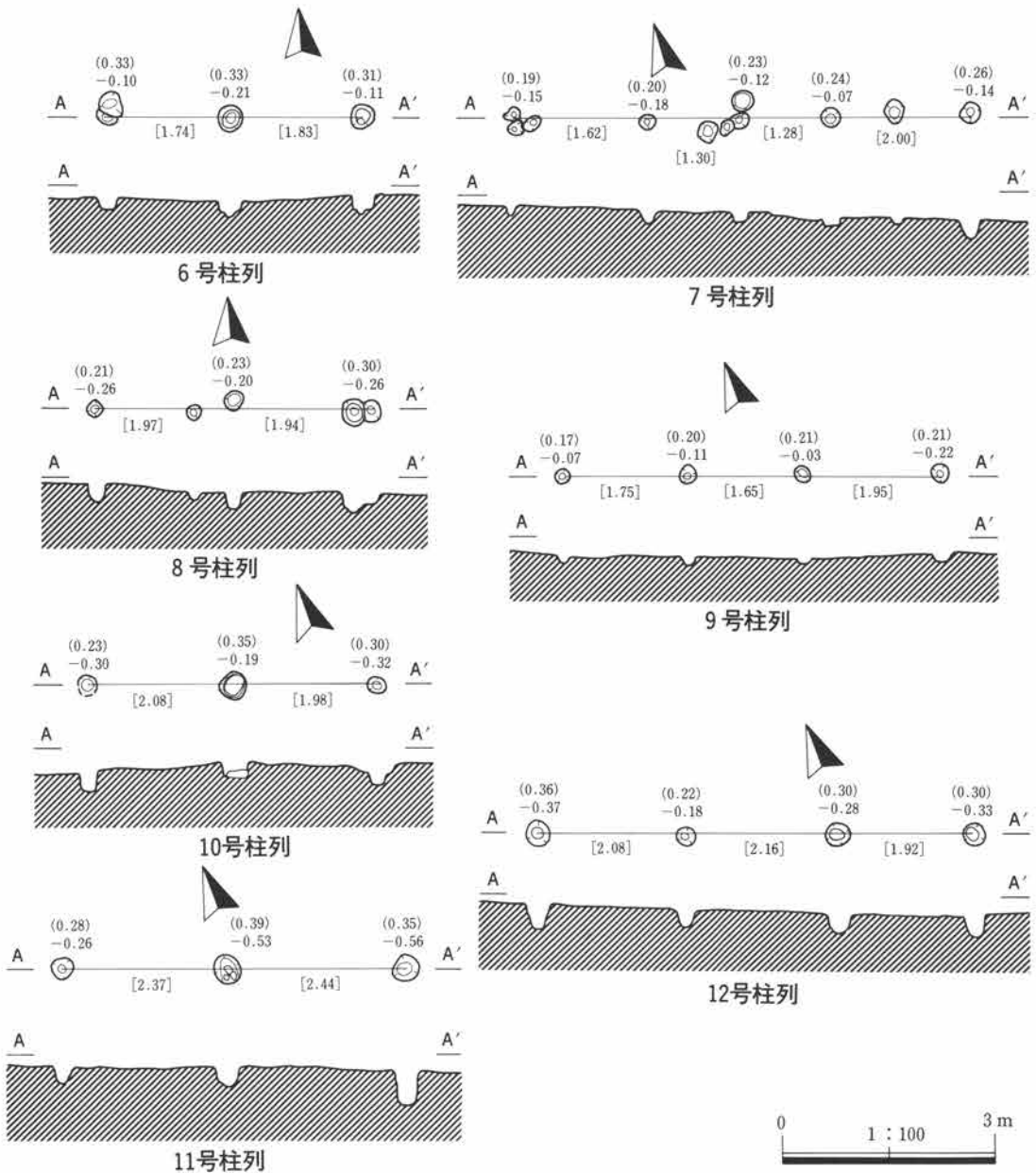
4区F-22に位置し、2号掘立柱建物と重複する。柱間2間が確認され、方位はN-91°-Eである。規模は4.62mである。柱穴はほぼ円形で柱痕は不明。出土遺物はない。







第188图 3·32·36·39号掘立柱建物、1~5号柱列



第189図 6～12号柱列

4号柱列 (第188図、図版85-2)

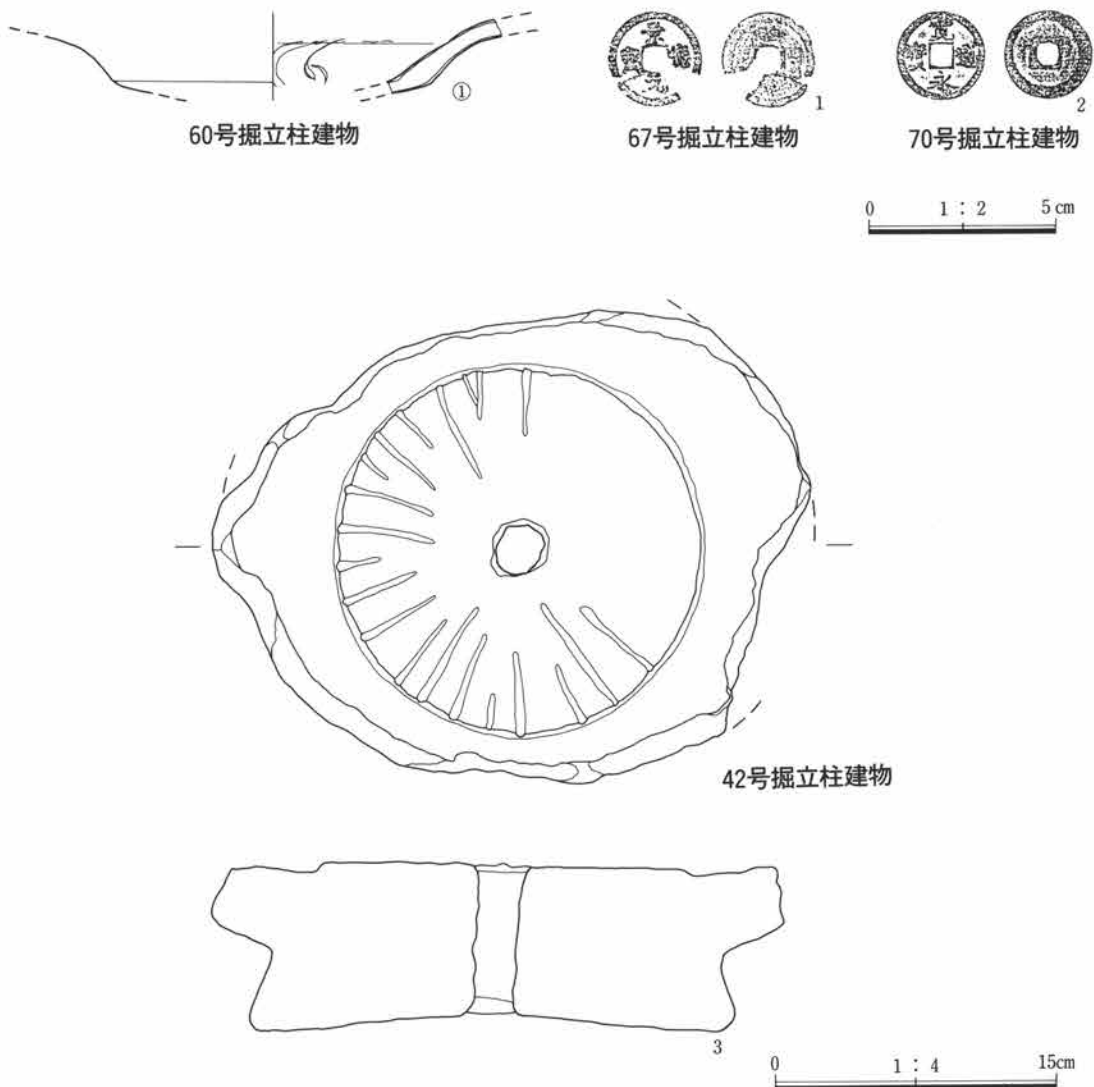
4区E-17に位置し、SB36号と重複する。柱間2間が確認され、方位はN-7°-Eである。柱間はほぼ等間で、規模は2.91mである。柱穴は円形か楕円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

5号柱列 (第188図、図版85-2)

4区F-18に位置する。柱間2間が確認され、方位はN-84°-Eである。柱間は東1間が21cm長く、規模は3.61mである。柱穴はやや楕円形気味で東方柱穴は小礫を伴っている。出土遺物はない。

6号柱列 (第189図、図版87-1)

4区U-5に位置し、9・10号掘立柱建物と重複する。柱間2間が確認され、方位はN-96°-Eで



第190図 掘立柱建物出土遺物

ある。柱間は、東1間がやや長く1.83mで規模は3.57mである。柱穴は円形気味で出土遺物はない。

**7号柱列 (第189図)**

4区I-4に位置し、41・55号掘立柱建物と重複する。柱間4ないし5間が確認され、方位はN-101°-Eである。柱間は4間の場合に最大72cm、5間の場合には70cmの差がある。規模は6.20mである。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

**8号柱列 (第189図)**

4区H-2に位置し、53・54号掘立柱建物と重複する。柱間2間が確認され、方位はN-95°-Eである。柱間はほぼ等間である。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

**9号柱列 (第189図)**

4区H-32に位置し、47号掘立柱建物と重複する。柱間3間が確認され、方位はN-112°-Eである。柱間は最大30cmの差がある。規模は5.35mである。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

10号柱列 (第189図)

4区Q-1に位置し、79号掘立柱建物と重複する。柱間2間が確認され、方位はN-108°-Eである。柱間は等間に近く、規模は4.06mである。柱穴は円形で中央の柱穴には根石を埋設する。出土遺物はない。

11号柱列 (第189図、図版87-2)

3区T-21に位置し、12号柱列、80~85・97号掘立柱建物と重複する。柱間は2間なのか3間なのか明確でないが、3間であれば東隅の柱穴は12号柱列と共有する。方位はN-110°-Eである。2間ではほぼ等間で、規模は4.81mである。3間であれば東1間が長く、規模は7.64mである。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

12号柱列 (第189図、図版87-2)

3区T-21に位置し、11号柱列と同様の重複である。柱間は3間と考えられ、方位N-112°-Eである。柱間は東1間がやや短く、規模は6.16mである。柱穴は円形で柱痕は不明。出土遺物はない。

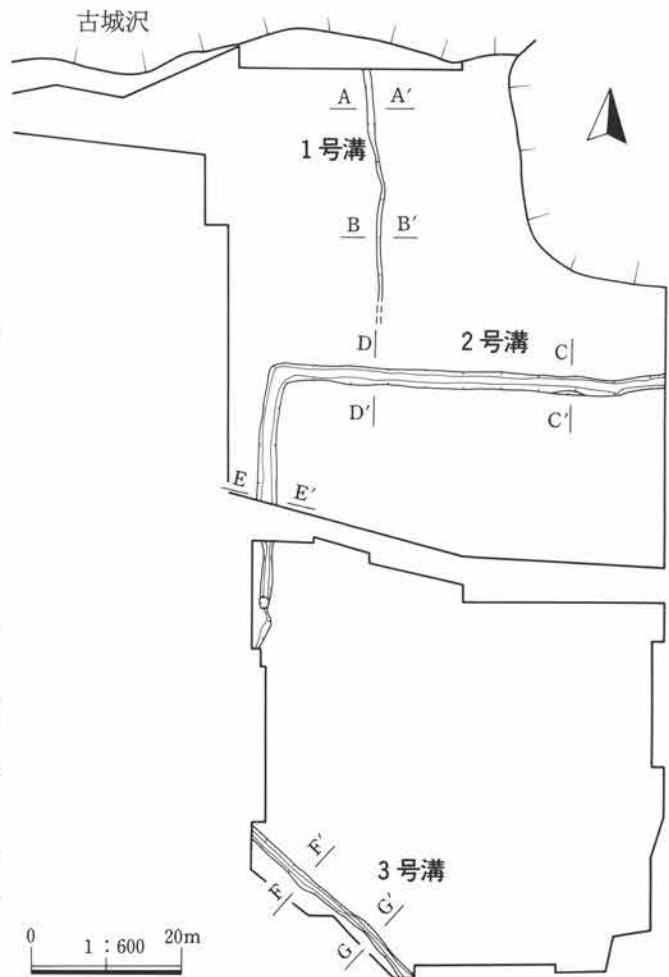
2 溝

1号溝 (第192図、図版85)

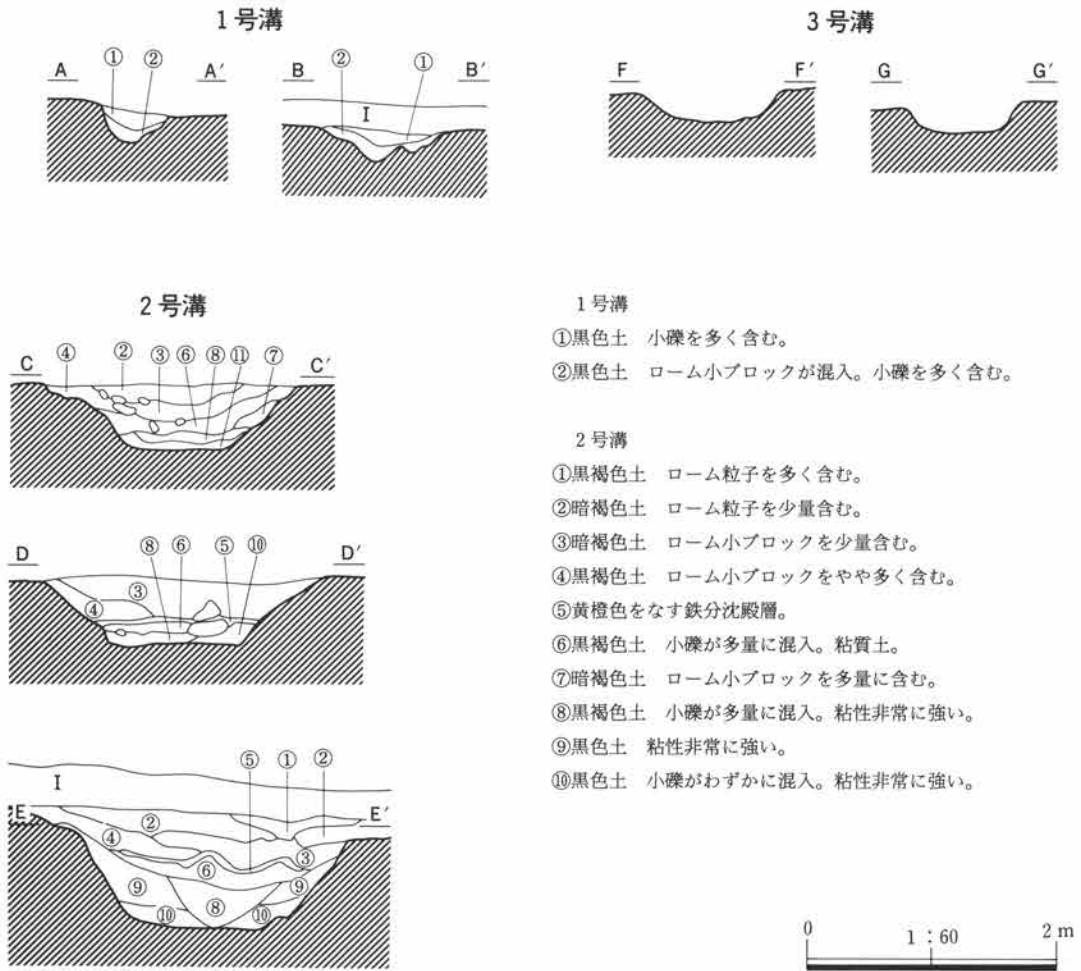
4区M-15~4区L-25に位置し、やや蛇行して南北に27mほど検出された。走向はN-6°-Eで上端幅27cm~64cm、下端幅10cm~42cm、深さ5cm~12cmである。断面形は浅いU字状をなし、台地北面を横断し、建物群を区画し、古城沢へ落ち込む。遺物は出土しなかった。

2号溝 (第192図、図版90・91)

4区F-1~4区G-13に北走し、直角に折れて4区W-12に東走する。走向はN-1°-E~N-89°-Eで上端幅1.58m~2.35m、下端幅0.6m~1.45m、深さ35cm~76cmである。断面形は逆台形状を呈し、台地面を鍵字状に走向し、建物群を大きく区画している。南北走向で38・75・76号掘立柱建物を重複し、覆土上部には大量の礫が混入している。75・76号掘立柱建物との重複箇所付近の覆土上部より湿美か



第191図 溝位置図

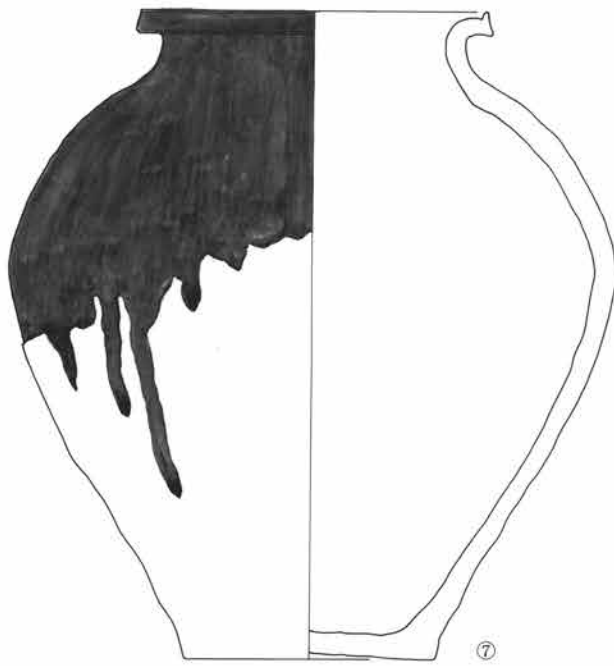
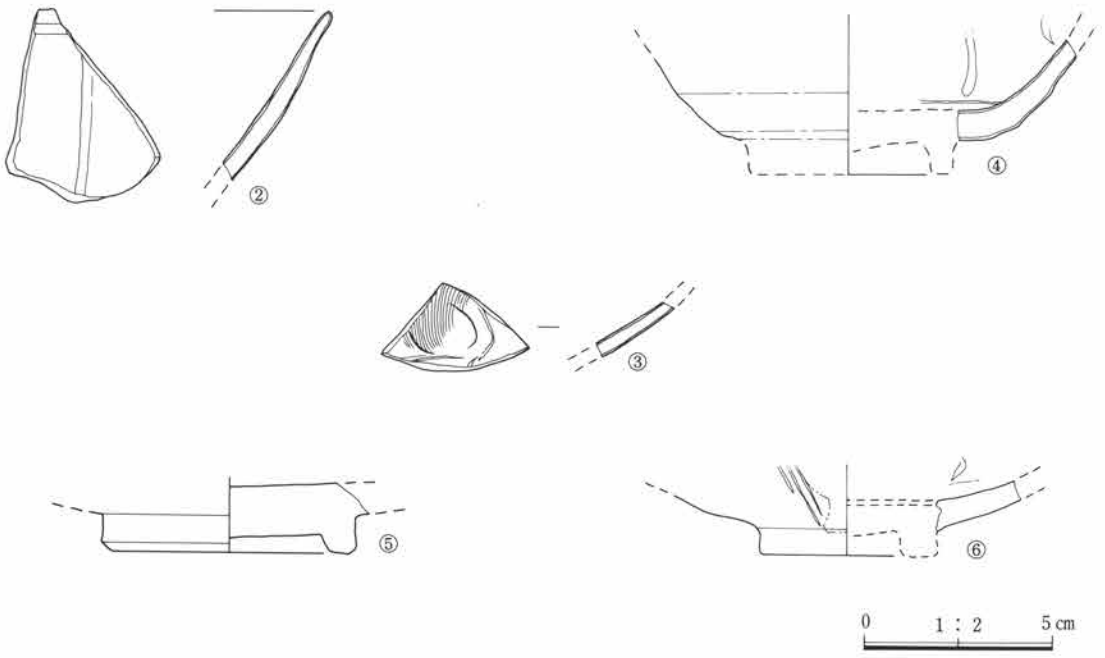


第192図 溝断面図

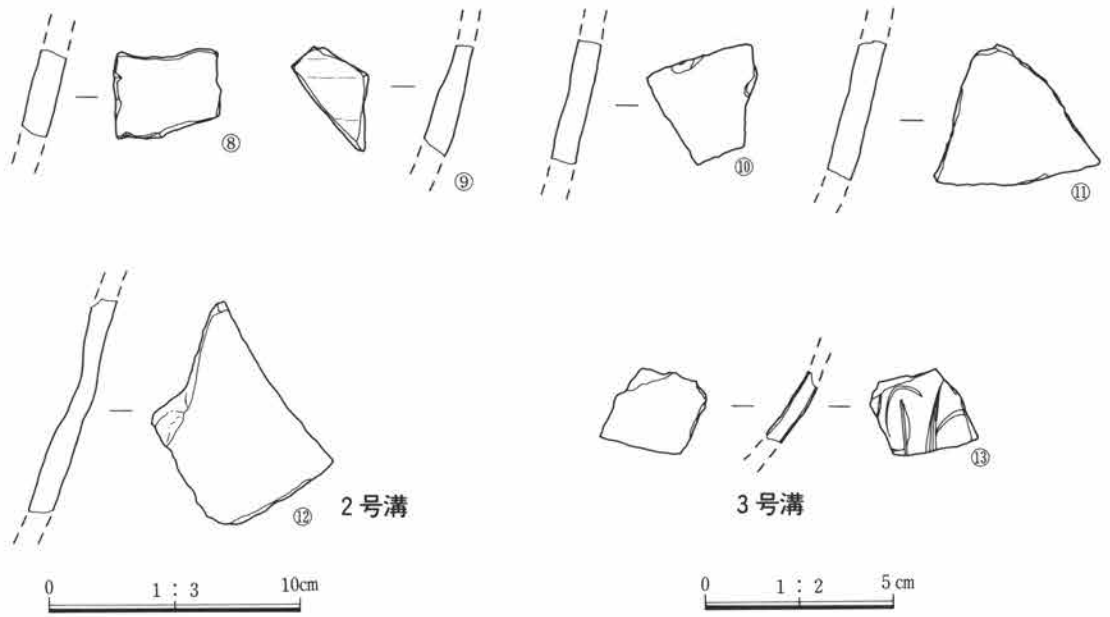
常滑系の甕片が出土。その他に13~14cの龍泉窯系の青磁片、石臼・石鉢等の石製品、平安時代の土器片が多く出土した。

3号溝 (第192図、図版90-3)

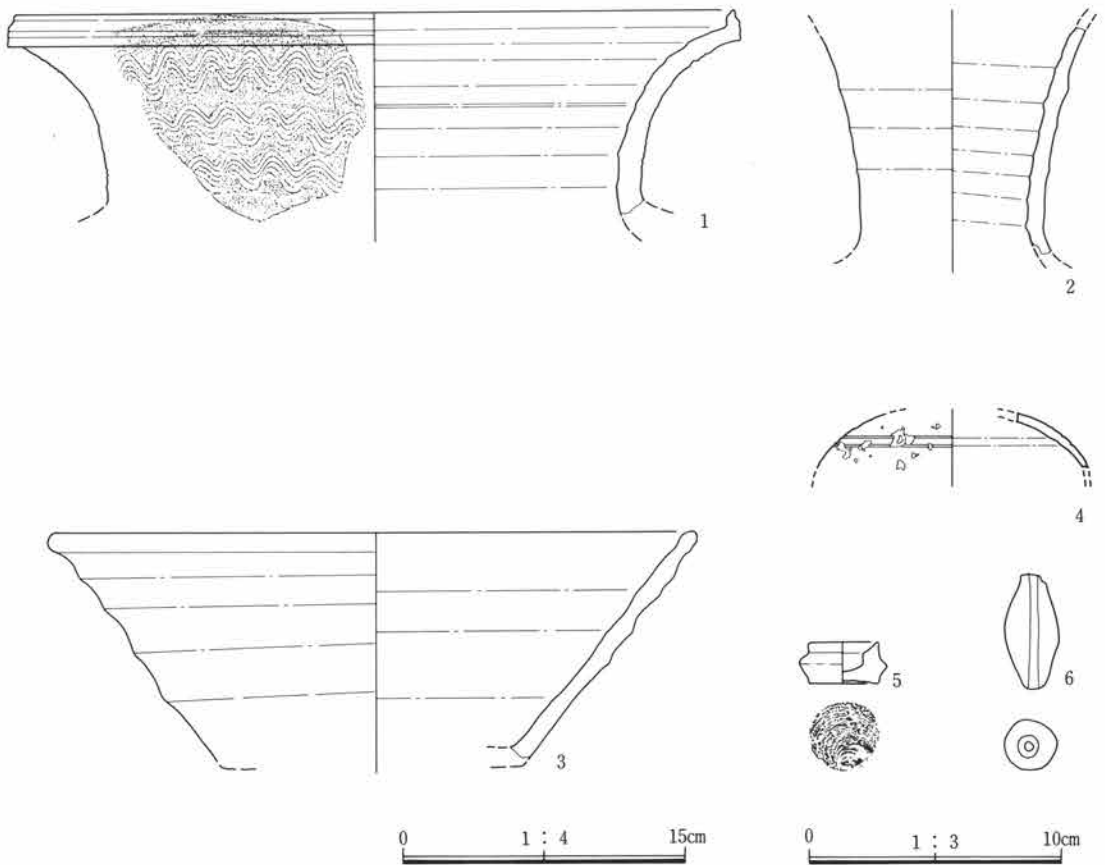
3区F-26~3区L-19に位置し、N-130°-Eでやや屈曲しながら走向する。規模は30mほど検出され上端幅77cm~120cm、下端幅31cm~52cm、深さ10cm~52cmである。断面形は浅い皿状に近い形状を呈する。台地の南傾斜面を台地の走向と平行して走る。本溝以南は谷地部となり、遺構は検出されない。13cの龍泉窯系の磁器片、平安時代の土器片が出土した。



第193図 2号溝出土遺物



第194図 2・3号溝出土遺物



第195図 2号溝出土の平安時代遺物



### 3 井戸

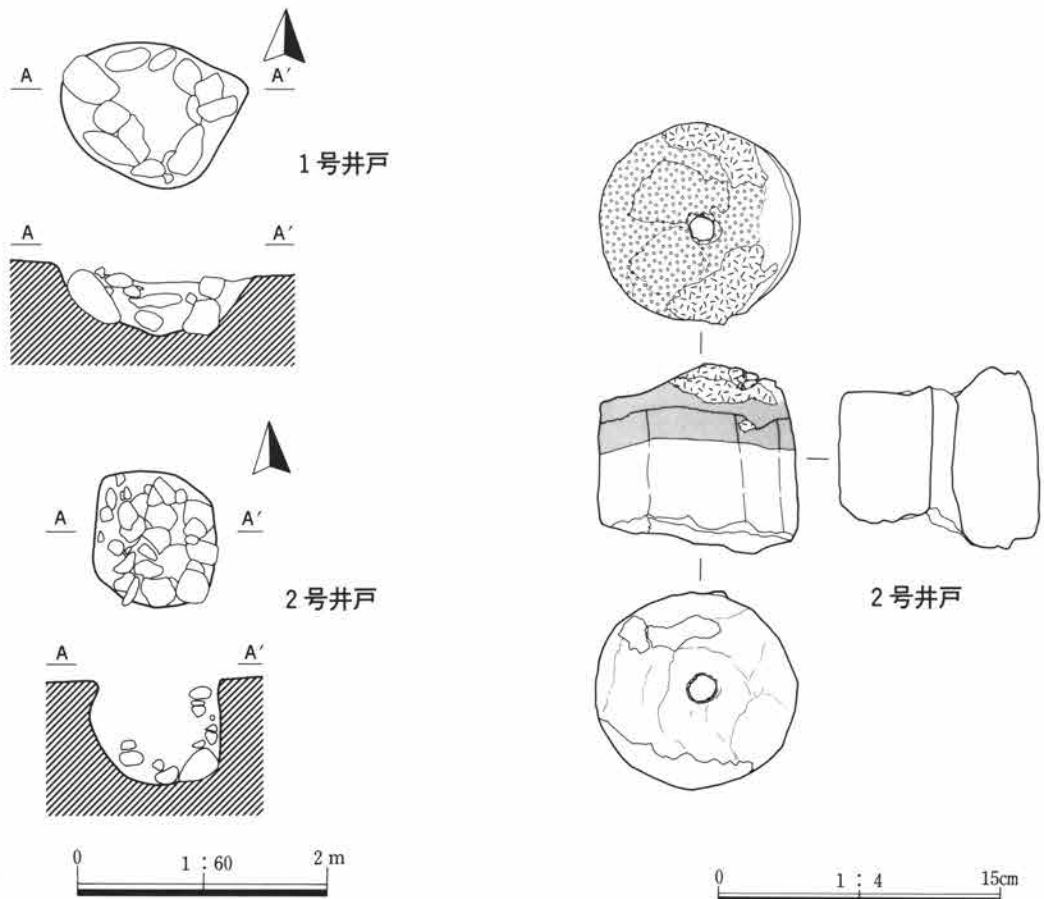
井戸は2基確認され調査区南半の東端と西端にそれぞれ位置している。掘立柱建物の軒数に比して極めて少ない数である。

#### 1号井戸（第196図、図版91-7）

4区G-02に位置し2号溝を切って構築されている。不整形円形をなす石組井戸で底面部分を検出。掘形は不整形円形で石組は底面より円礫を積み上げている。石組基部は円礫を縦に用いて円形に組み、2段目は円礫を平積みにして積み上げている。覆土中には石組上部の礫が多量に混入している。石組の上端は現状で0.85m×0.75m、下端は0.65m×0.60mである。掘形上端は1.38m×1.09m、下端は1.08m×0.97mで深さは0.52mである。遺物は出土しなかった。

#### 2号井戸（第196図、図版91-8）

3区V-23に位置する。方形の石組井戸で石組の約 $\frac{1}{2}$ が崩落している。掘形は隅丸方形で石組は円礫を用いて底面より平積みで積み上げている。石組上端は現状で0.57m×0.50m、下端は0.30m×0.28mである。掘形上端は1.07m×0.97mで深さは0.84mである。羽口1点が覆土中より出土した。



第196図 1・2号井戸、2号井戸出土遺物

## 4 土坑

40基の土坑が検出されたが時期の確定できなかった土坑も含んでいる。分布状態は掘立柱建物と同様に調査区の南半で多く検出された。なお、33号は欠番である。

### 1号土坑 (第197図)

4区I-23に位置する。平面形は隅丸長方形で断面形は丸味のある箱状をなす。規模は1.60m×1.15m、深さ0.22m、長軸方向はN-3°-Wを示す。覆土は一挙に埋没した様相を示し、上部より馬歯片が出土した。馬を埋葬したものと考えられる。

### 3号土坑 (第197図)

4区F-22に位置する。平面形は不整形で断面形は擂鉢状をなす。規模は1.17m×0.99m、深さ0.45mである。出土遺物なし。

### 4号土坑 (第197図)

4区C-22に位置し西半は調査区外となる。平面形は不明で断面形はU字状をなす。規模は現状で長軸1.12m、深さ0.45mである。平安時代の杯口縁部小片1点が出土。

### 5号土坑 (第197図、図版92-1)

4区D-23に位置し柱穴と重複する。平面形は不整楕円形で断面形は丸味のある浅い箱状をなす。規模は1.48m×1.17m、深さ0.27mで長軸方向はN-5°-Eを示す。10世紀代の椀と羽釜の小片が数点出土した。

### 6号土坑 (第197図)

4区H-21に位置し7号土坑に切られる。平面形は不整長楕円形と推定され断面形はU字状をなす。規模は現状で1.00m×0.70m、深さ0.25mで長軸方向はN-58°-Wを示す。出土遺物なし。

### 7号土坑 (第197図)

4区H-21に位置し6号土坑を切る。平面形は不整円形で断面形は擂鉢状をなす。規模は0.82m×0.75m、深さ0.30mである。出土遺物なし。

### 8号土坑 (第197図)

4区M-20に位置する。平面形は不整形で断面形は段のある擂鉢状をなす。規模は1.74m×0.95m、深さ0.35mで長軸方向はN-32°-Eを示す。縄文前期の土器片1点が出土。

### 9号土坑 (第197図)

4区T-07に位置する。平面形は楕円形で断面形は皿状をなす。規模は1.00m×0.65m、深さ0.18mで長軸方向はN-39°-Wを示す。出土遺物なし。

### 10号土坑 (第197図、図版92-6)

4区G-01に位置する。平面形は不整隅丸長方形で断面形は箱状をなす。規模は1.67m×0.88m、深さ0.92mで長軸方向はほぼ南北である。出土遺物なし。

### 11号土坑 (第197図)

3区L-32に位置し柱穴と重複する。平面形は隅丸長方形で断面形は箱状をなす。規模は1.70m×

0.91m、深さ1.00mで長軸方向はN-32°-Eを示す。出土遺物なし。

#### 12号土坑 (第198図)

4区P-01に位置し柱穴と重複する。平面形は隅丸長方形で断面形は丸味のある箱状をなす。規模は1.78m×1.10m、深さ0.20mで長軸方向はN-77°-Wを示す。出土遺物なし。

#### 13号土坑 (第198図)

3区O-30に位置し69・70号掘立柱建物の柱穴によって切られている。平面形は隅丸長方形で断面形は箱状をなす。規模は2.10m×1.37m、深さ0.33mで長軸方向はN-80°-Wを示す。覆土中より聖宋元寶1点が出土。

#### 14号土坑 (第198図、図版92-7)

3区P-33に位置し柱穴によって切られている。平面形は隅丸長方形で断面形は箱状をなす。規模は2.37m×1.89m、深さ0.46mで長軸方向はN-4°-Wを示す。出土遺物なし。

#### 15号土坑 (第198図、図版92-2)

3区T-32に位置する。平面形は円形で断面形は箱状をなす。規模は径1.22m、深さ0.18mである。出土遺物なし。

#### 16号土坑 (第198図、図版92-8)

3区S-31に位置し柱穴および17号土坑と重複するが前後関係不明。平面形は長楕円形で断面形は箱状をなす。規模は3.07m×1.53m、深さ0.26mで長軸方向はN-11°-Eを示す。10世紀代の羽釜片5点が出土。

#### 17号土坑 (第198図)

3区S-30に位置し柱穴と重複する。平面形は隅丸長方形で断面形は皿状をなす。規模は1.90m×1.81m、深さ0.12mで長軸方向はN-88°-Eを示す。摩滅した平安時代の土器が少量出土。

#### 18号土坑 (第199図、図版93-3)

3区S-29に位置し柱穴と重複する。平面形は明確でなく大小の礫が楕円形に上面を覆っている断面形は皿状をなす。規模は推定で2.10m×1.40m、深さ0.22mである。祥符通寶1点と17世紀代の唐津および美濃系の陶磁器3点出土。

#### 19号土坑 (第199図)

3区R-27に位置する。平面形は隅丸長方形で断面形は箱状をなす。規模は1.47m×0.44m、深さ0.48mで長軸方向はN-3°-Wを示す。出土遺物なし。

#### 20号土坑 (第199図、図版93-4)

3区S-27に位置する。平面形は楕円形で断面形は箱状をなす。規模は1.94m×1.33m、深さ0.98mで長軸方向はN-20°-Wを示す。土坑の上部は大小の礫で覆われており宝篋印塔の塔身の破片が出土した。

18~20号土坑周辺はロームが一段低く掘り下げられており、18号土坑と20号土坑の間には偏平な礫を並べた石列が走っている。石列は距離約2mにわたりほぼ東西に走っている。

#### 21号土坑 (第200図、図版92-3)

3区R-30に位置し柱穴と重複している。平面形は不整円形で断面形は皿状をなす。規模は1.23m

×1.11m、深さ0.13mである。出土遺物なし。

22号土坑（第200図）

3区R-29に位置し柱穴と重複する。平面形は不整楕円形で断面形は丸味のある逆台形をなす。規模は2.25m×1.80m、深さ0.37mで長軸方向はN-2°-Eを示す。出土遺物なし。

23号土坑（第200図、図版92-4）

3区U-28に位置し柱穴と重複する。平面形は円形で断面形は箱状をなす。規模は径1.03m、深さ0.20mである。出土遺物なし。

24号土坑（第200図、図版93-8）

3区Q-29に位置し71号掘立柱建物の柱穴を切る。平面形は不整楕円形で断面形はU字状をなす。規模は2.24m×1.63m、深さ0.43mで長軸方向はN-85°-Wを示す。覆土中より美濃系の山茶碗片1点と染付小片2点が出土した。

25号土坑（第200図）

3区S-27に位置し柱穴と重複する。平面形は長楕円形で断面形は箱状をなす。規模は1.76m×0.42m、深さ0.78mで長軸方向はN-15°-Eを示す。出土遺物なし。

26号土坑（第200図）

3区T-27に位置する。平面形は長楕円形で断面形は箱状をなす。規模は1.48m×0.38m、深さ0.82mで長軸方向はN-7°-Eを示す。出土遺物なし。

27号土坑（第200図）

3区V-28に位置する。平面形は不整楕円形で断面形は丸味のある箱状をなす。規模は1.70m×0.95m、深さ1.05mで長軸方向はN-17°-Eを示す。出土遺物なし。

28号土坑（第200図）

3区T-28に位置し62号掘立柱建物の柱穴に切られる。平面形は不整楕円形で断面形はU字状をなす。規模は1.33m×0.70m、深さ1.00mで長軸方向はN-6°-Eを示す。覆土中より剥片1点と平安時代須恵器甕の口縁片2点が出土した。

29号土坑（第201図）

3区P-30に位置する。平面形は隅丸長方形で断面形はU字状をなす。規模は1.43m×0.97m、深さ0.83mで長軸方向はN-17°-Eを示す。出土遺物なし。

30号土坑（第119図、図版82-2）

3区W-28に位置し7号住居跡を切る。東半は調査区外となり不明。平面形は不明で断面形は段のあるU字状をなす。規模は現状で長軸1.42m、深さ1.02mである。覆土中に大小の礫が多量に混入。羽口1点と鉄滓1点が出土。

31号土坑（第201図、図版92-5）

3区O-27に位置する。平面形は不整楕円形で断面形はU字状をなす。規模は1.95m×1.22m、深さ0.78mで長軸方向はN-27°-Eを示す。出土遺物なし。

32号土坑（第201図）

3区N-31に位置し柱穴と重複する。平面形は隅丸長方形で断面形は箱状をなす。規模は1.22m×

0.70m、深さ1.00mで長軸方向はN-5°-Eを示す。出土遺物なし。

#### 34号土坑（第201図）

3区S-33に位置し30号掘立柱建物の柱穴に切られる。平面形は隅丸方形で断面形は箱状をなす。規模は2.19m×2.18m、深さ0.20mである。10世紀代の羽釜の小片が出土。

#### 35号土坑（第202図、図版93-1）

3区S-33に位置し36号土坑と柱穴によって切られている。平面形は不整楕円形で断面形は段のある挿鉢状をなす。規模は2.08m×1.63m、深さ0.70mで長軸方向はN-21°-Eを示す。出土遺物なし。

#### 36号土坑（第202図、図版93-1）

3区S-33に位置し35・37号土坑を切り柱穴によって切られている。平面形は隅丸長方形で断面形は箱状をなす。規模は2.48m×2.04m、深さ0.37mで長軸方向はN-87°-Eを示す。出土遺物なし。

#### 37号土坑（第202図、図版93-1）

3区R-33に位置し36号土坑と柱穴によって切られている。平面形は不整隅丸長方形で断面形は箱状をなす。規模は3.20m×2.13m、深さ0.33mで長軸方向はN-5°-Wを示す。出土遺物なし。

#### 38号土坑（第202図、図版93-2）

3区R-32に位置し58・59・66・70号掘立柱建物の柱穴によって切られている。平面形は不整円形で断面形は段のある挿鉢状をなす。規模は2.88m×2.70m、深さ0.60mである。出土遺物なし。

#### 39号土坑（第202図）

3区S-25に位置する。平面形は不整楕円形で断面形は丸味のある箱状をなす。規模は1.60m×1.30m、深さ0.25mで長軸方向はN-79°-Wを示す。出土遺物なし。

#### 40号土坑（第203図、図版93-5）

3区S-21に位置する。平面形は不整楕円形で断面形は下半が円筒状で上半がラップ状に開く。規模は2.36m×1.92m、深さ0.72mで長軸方向はN-54°-Wを示す。土坑の上部は大小の礫で覆われている。17世紀代美濃系の陶器片4点と羽口6点、鉄滓1点、石臼1点が出土。

#### 41号土坑（第203図、図版93-6）

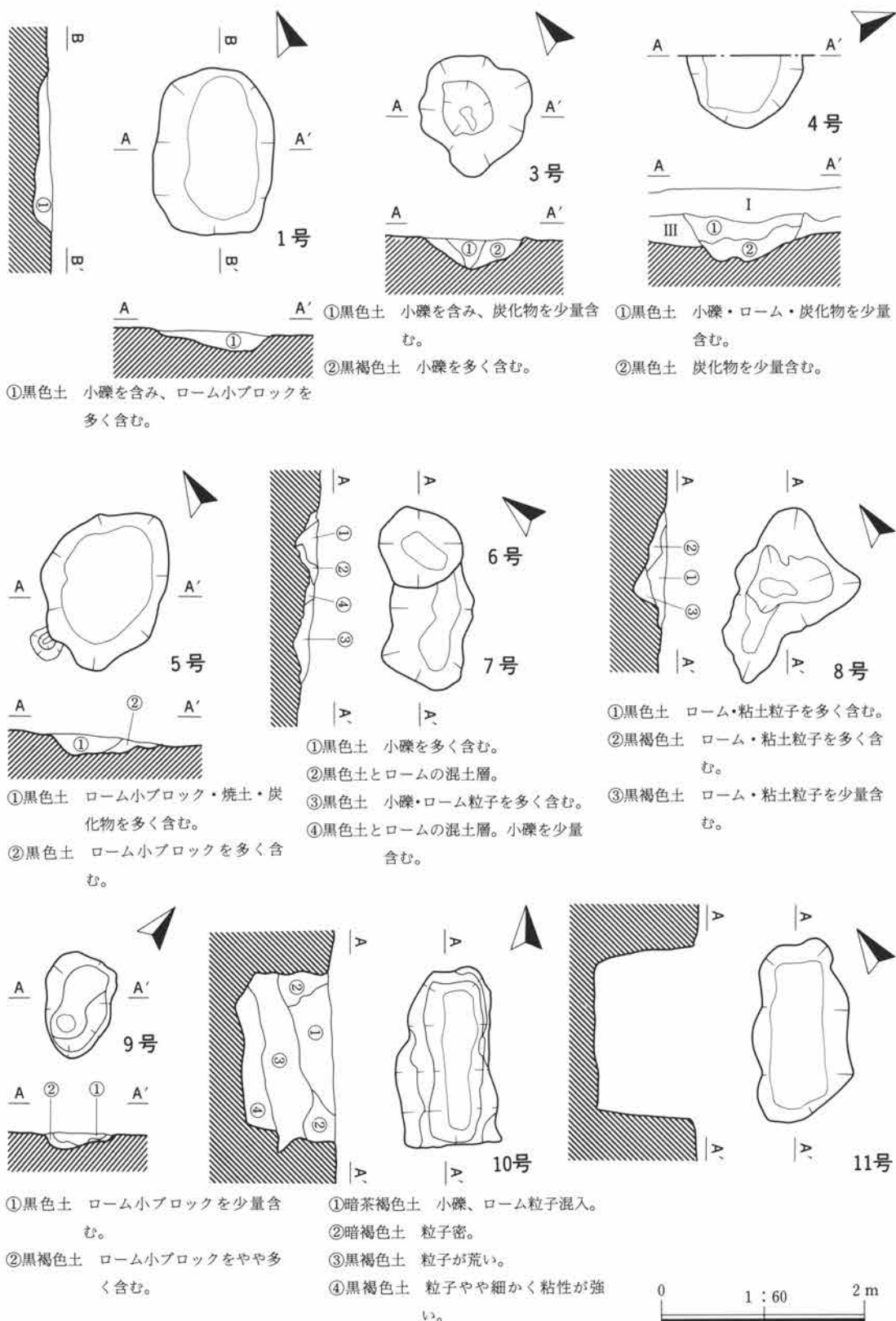
3区R-22に位置する。平面形は不整楕円形で断面形は浅いU字状をなす。規模は1.65m×1.35m、深さ0.25mで長軸方向はN-24°-Eを示す。土坑内を大小の礫で覆っている。砥石1点、石臼2点、石鉢1点が出土。

#### 42号土坑（第203図）

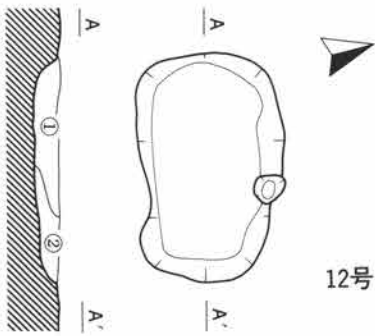
3区R-23に位置する。平面形は円形で断面形は浅いU字状をなす。規模は径1.00m、深さ0.37mである。土坑内に小礫が多く混入。

#### 46号土坑（第203図、図版93-7）

3区T-33に位置し柱穴に切られている。平面形は不整楕円形で断面形は丸味のある箱状をなす。規模は3.78m×2.30m、深さ1.20mで長軸方向はN-7°-Eを示す。舶載青磁碗片や16・17世紀代の陶器片が出土。他に石臼・石鉢・板碑片等が出土。

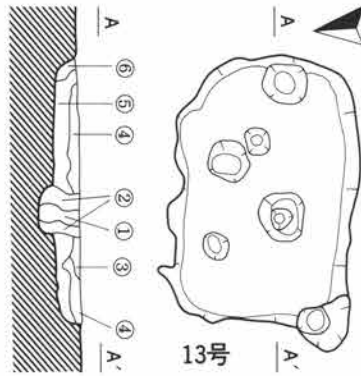


第197図 1・3～11号土坑



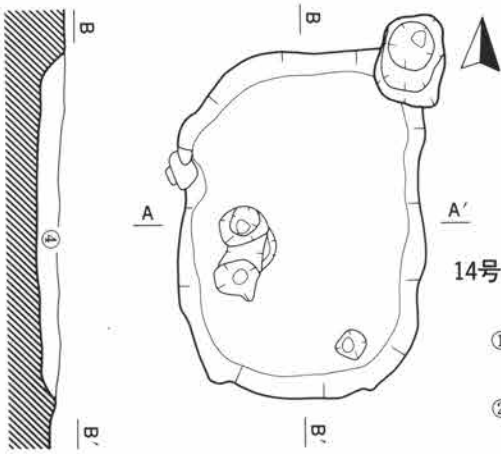
12号

- ①黒褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
- ②黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。



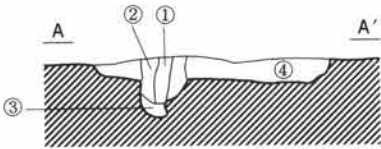
13号

- ①暗褐色土
- ②暗褐色土 ロームブロックと焼土が混入。
- ③暗褐色土 焼土粒混入。
- ④暗褐色土 ローム小ブロックを含む。
- ⑤暗褐色土 ロームの大小のブロックを含む。
- ⑥暗褐色土 ロームブロックと炭化物が混入。



14号

- ①暗褐色土 焼土・炭化物が混入。
- ②暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- ③黒褐色土 固く締っている。
- ④暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
- ⑤暗褐色土 焼土・炭化物が混入。柱痕の覆土。
- ⑥黒色土 ローム粒子を少量含む。
- ⑦黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- ⑧灰褐色土ブロック
- ⑨⑩は柱穴の埋土。
- ⑪暗黒褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
- ⑫暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。

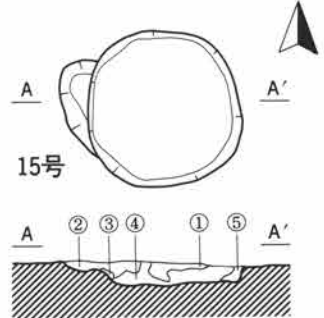


16号土坑

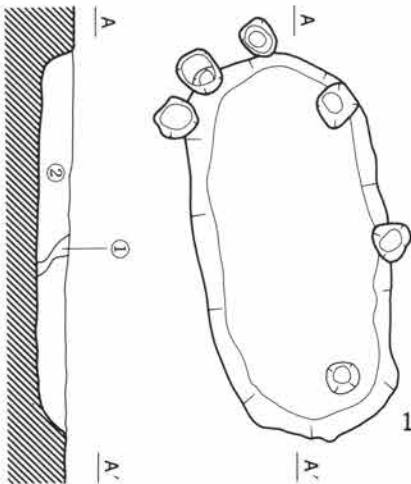
- ①暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。木根による攪乱か？。
- ②黒褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。

17号土坑

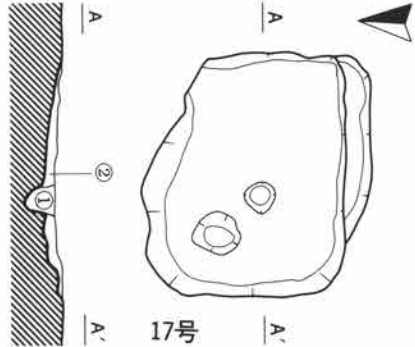
- ①暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。柱穴の埋土。
- ②褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。



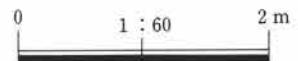
15号



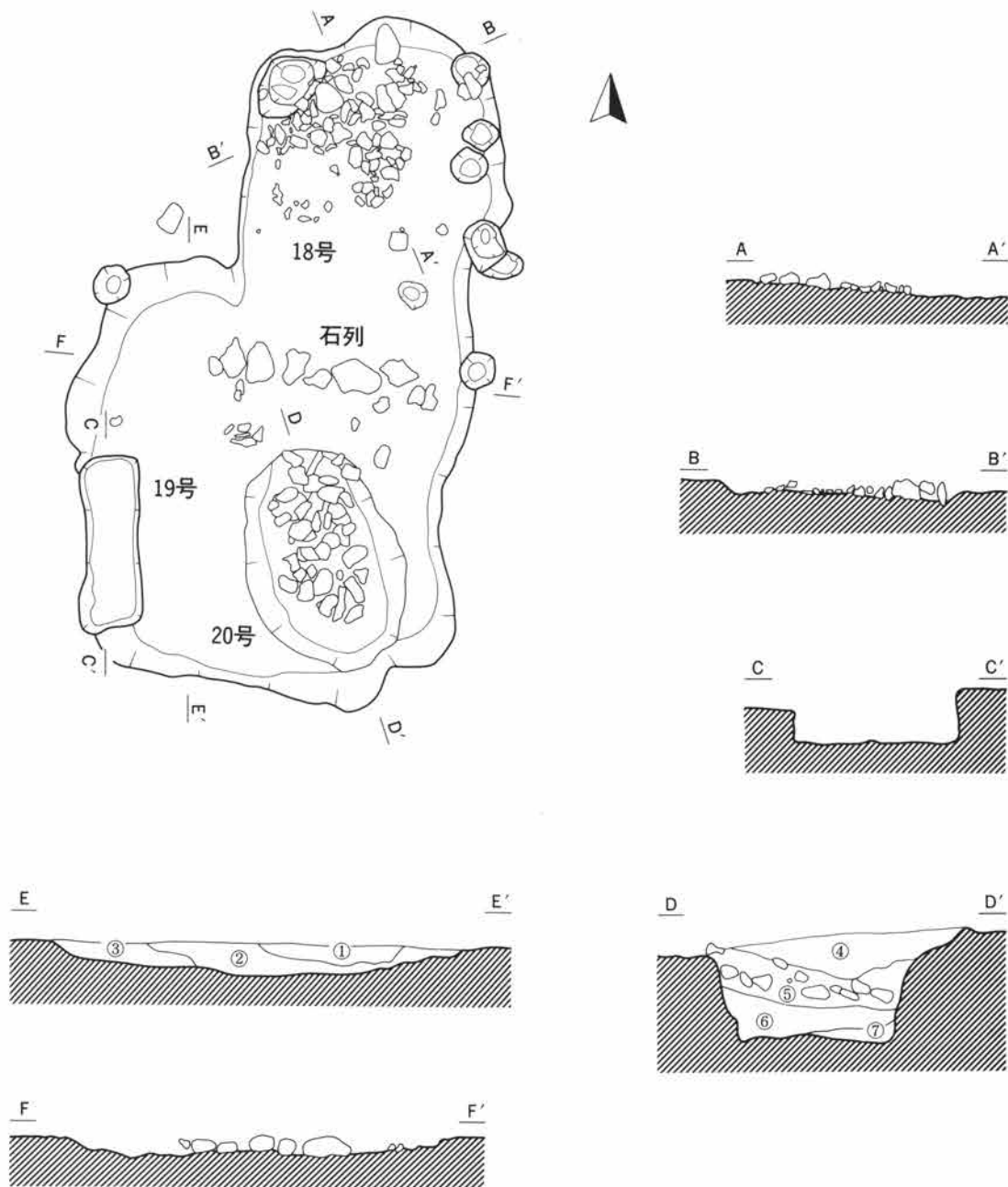
16号



17号



第198図 12~17土坑

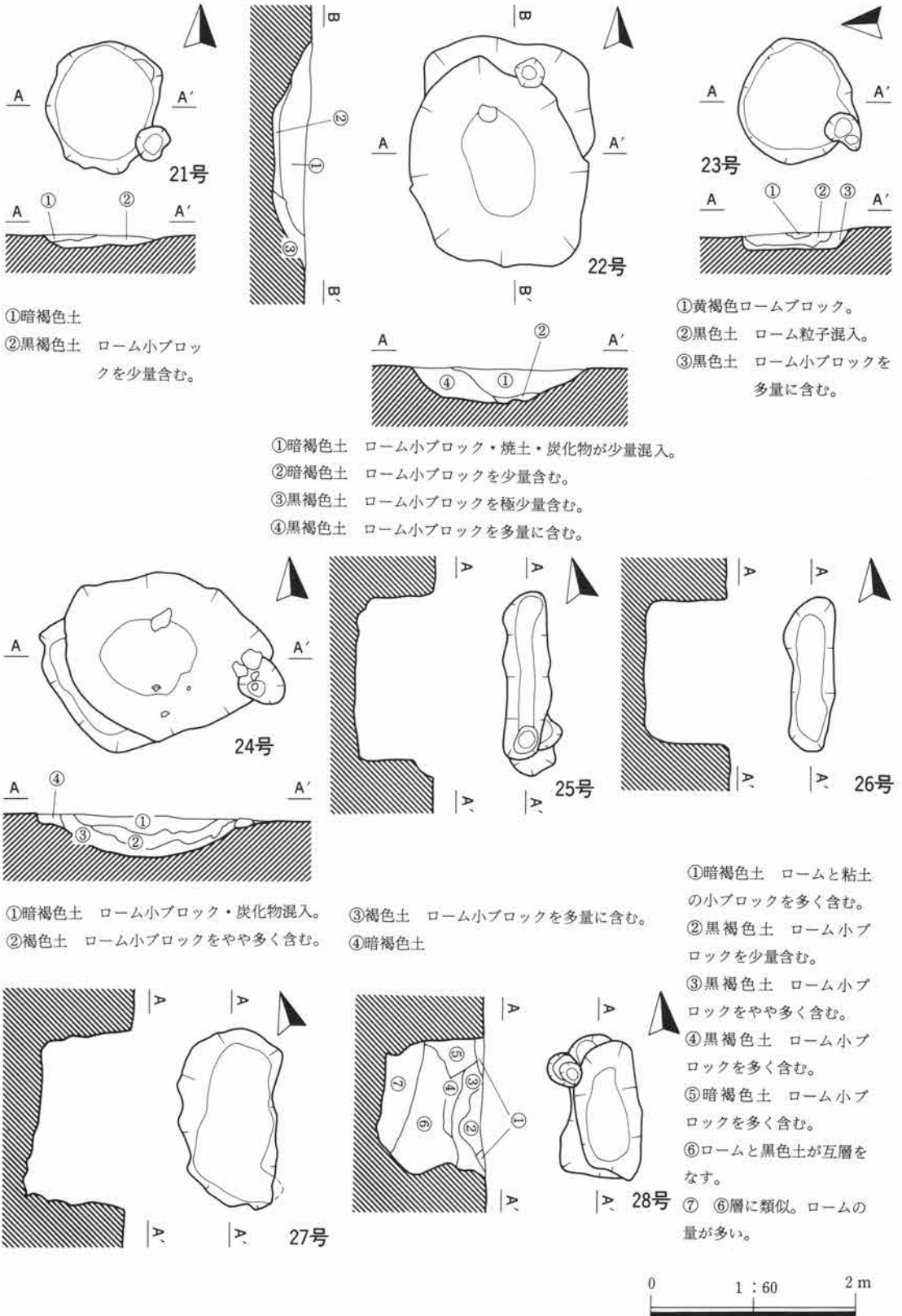


- |       |                       |       |                     |
|-------|-----------------------|-------|---------------------|
| ①暗褐色土 | ローム小ブロックを多く含む。        | ⑤暗褐色土 | ローム小ブロックを多量に含む。     |
| ②暗褐色土 | ローム小ブロックを少量含む。        | ⑥明褐色土 | ロームと粘土の小ブロックを多量に含む。 |
| ③暗褐色土 | ローム小ブロックを多量に含む。       | ⑦黒褐色土 | ローム小ブロックを少量含む。      |
| ④暗褐色土 | ローム小ブロック・粘土・炭化物を少量含む。 |       |                     |

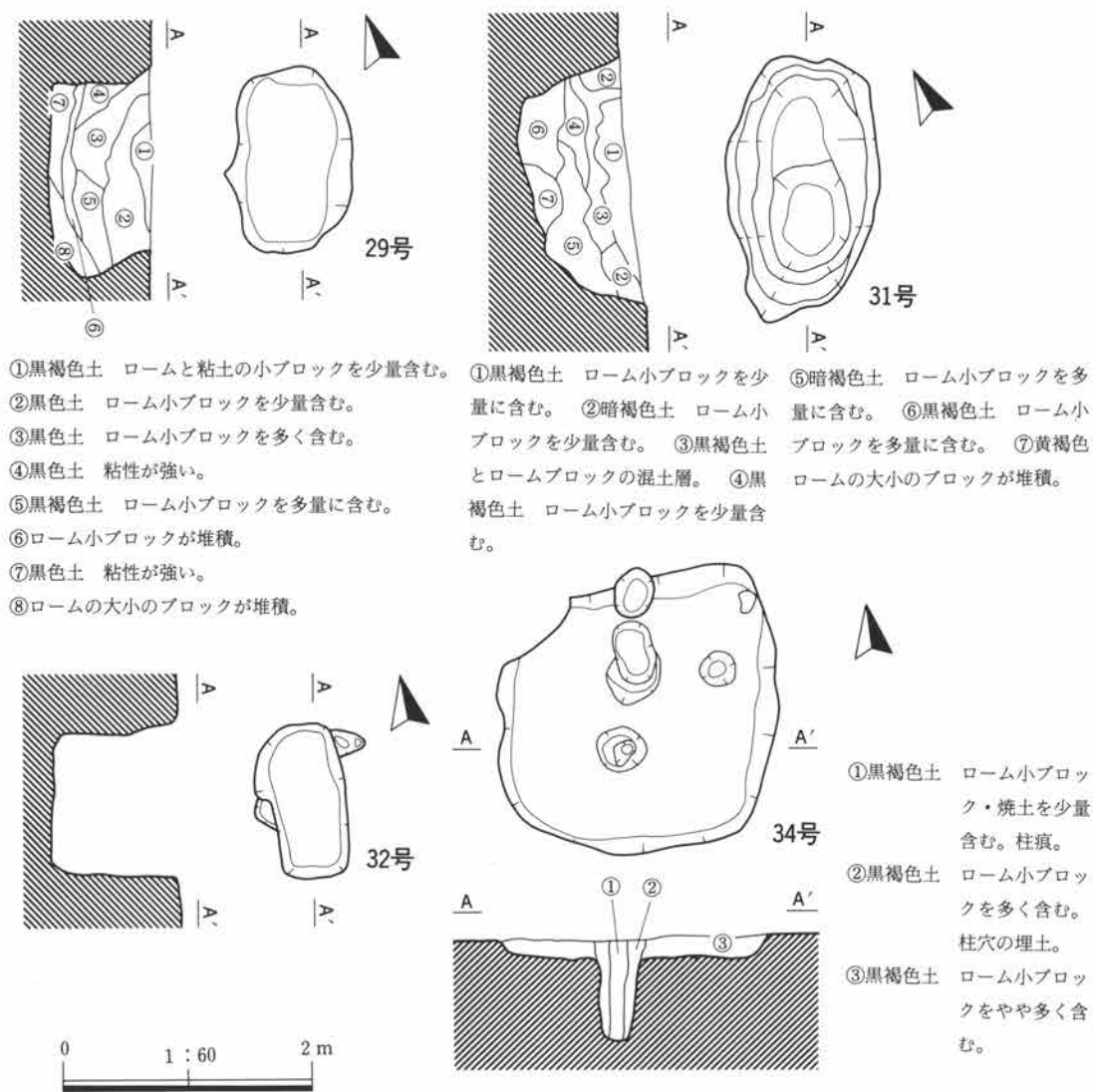
0 1 : 60 2 m

第199図 18~20号土坑





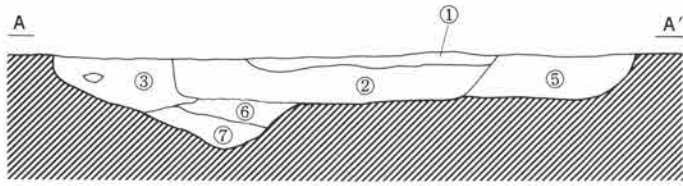
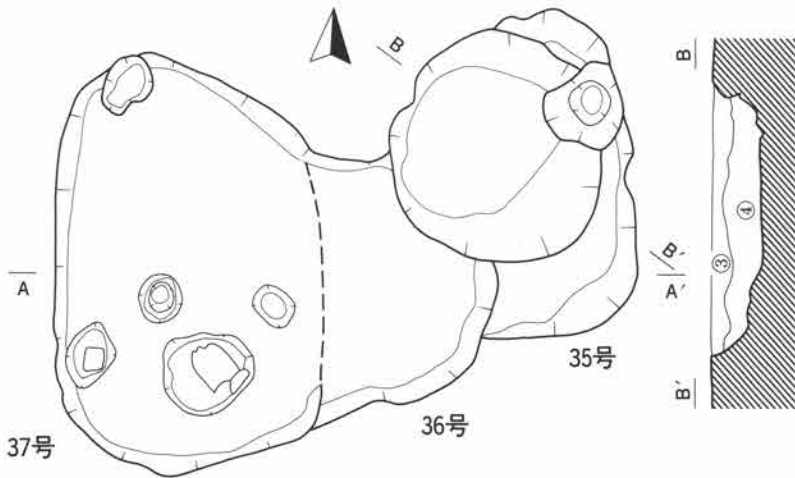
第200図 21~28号土坑



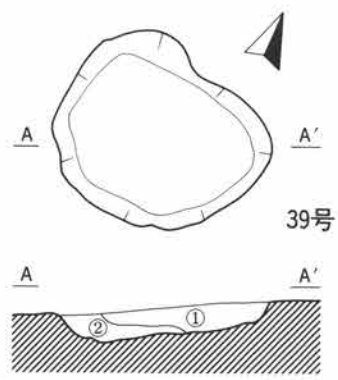
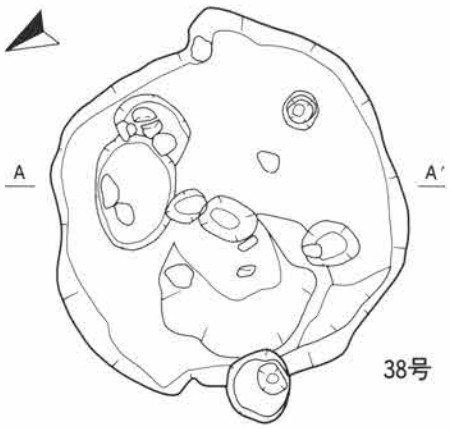
第201図 29・31・32・34号土坑

### 5 グリット出土遺物 (第209~212図、図版121~123)

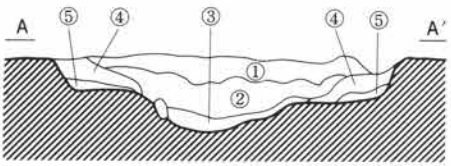
本遺跡の試掘時や遺構確認時において第209~212図に代表される中・近世の遺物が出土した。グリットからは13・14世紀の舶載青磁碗の小片が多く出土し本遺跡の特性を表わしている。また、真鍮製の小柄も出土した。他に近世の陶磁器類や石鉢、煙突、銭貨等が出土しており、掘立柱建物群に伴出するものと考えられる。



- ①暗褐色土 ロームと粘土の小ブロックを多く含む。
- ②暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
- ③黒褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。
- ④黒褐色土 ロームと粘土の大ブロックを多く含む。
- ⑤黒色土 ローム小ブロックを少量含む。
- ⑥黒褐色土 ロームと粘土の大ブロックを少量含む。
- ⑦黒色土 ローム小ブロックを多く含む。



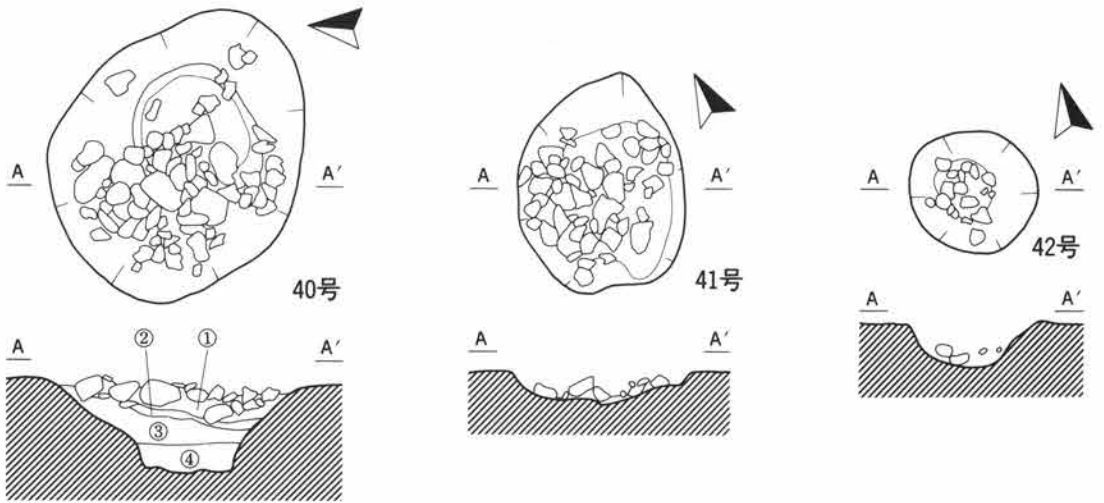
- ①黒褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
- ②黒褐色土 ローム小ブロック・炭化物を多量に含む。



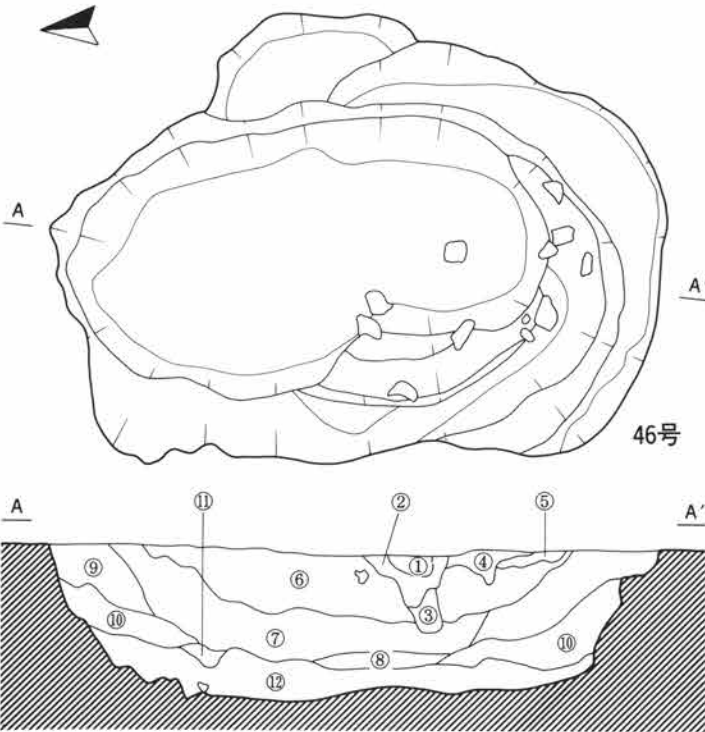
- ①黒褐色土 小礫・ローム小ブロック・炭化物を少量含む。
- ② ①と同様。固く締め暗色を帯びる。
- ③黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- ④黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- ⑤黒褐色土 ロームと粘土の小ブロックを多量に含む。



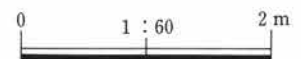
第202図 35～39号土坑



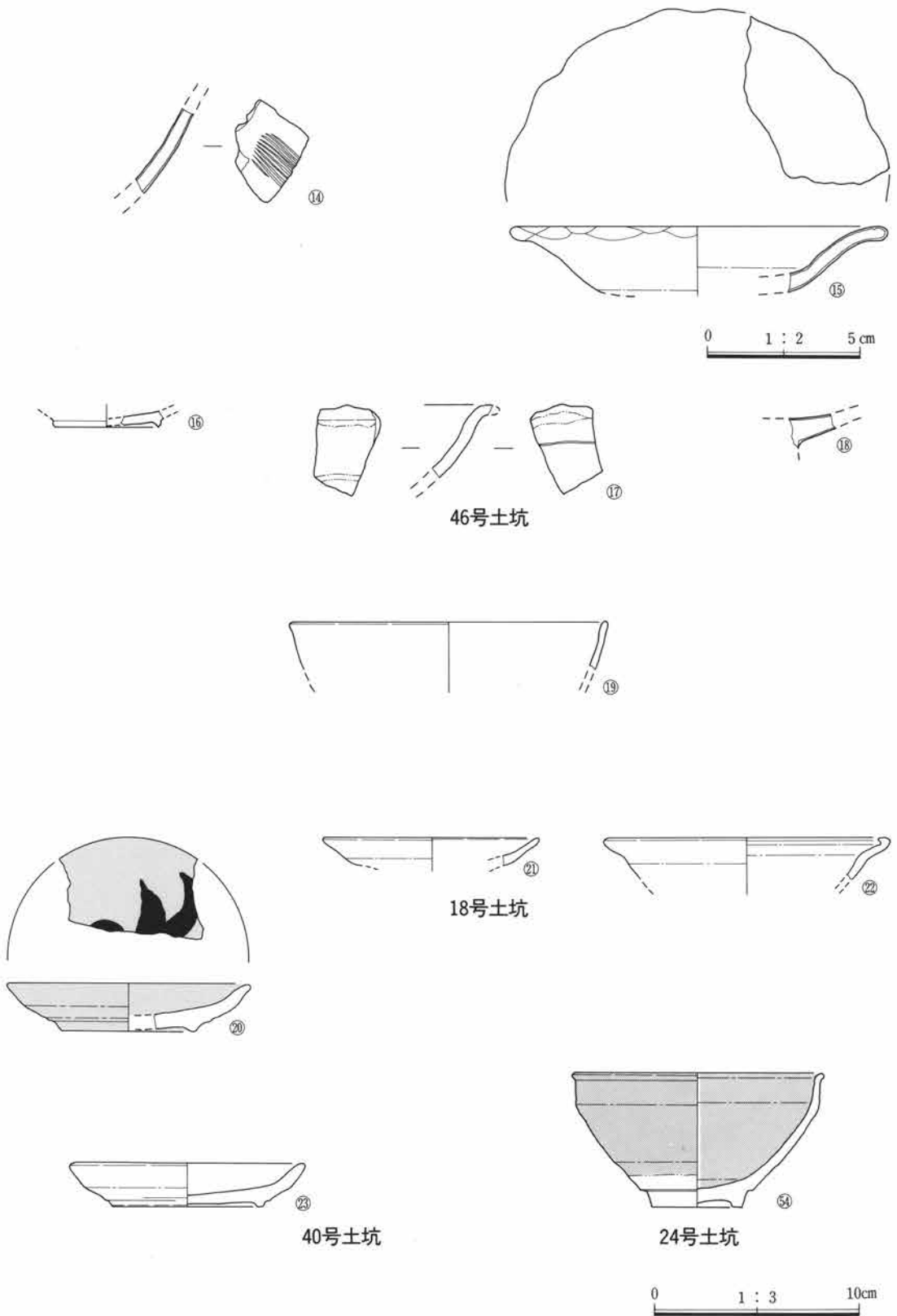
- ①黒褐色土 粘性が強い。
- ②茶褐色砂礫層
- ③黒褐色土 小礫・ローム・粘土小ブロックを多量に含む。
- ④黒褐色土 砂礫を少量含む。



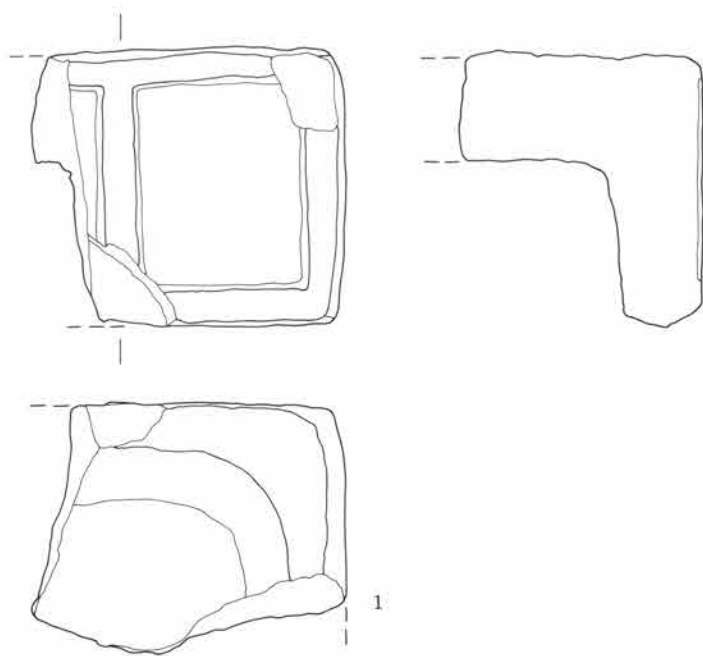
- ①暗褐色土 ローム小ブロック・焼土を少量含む。①～③は柱穴の埋土。
- ②暗褐色土 ローム小ブロック・焼土・炭化物をやや多く含む。
- ③黒褐色土 ローム小ブロック・焼土・炭化物をやや多く含む。
- ④褐色土 ローム小ブロック・焼土・炭化物を極少量含む。
- ⑤ロームと褐色土の混土层。
- ⑥黒褐色土 ローム小ブロックと焼土を極少量含む。
- ⑦黒褐色土 粘性が強い。
- ⑧暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
- ⑨黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- ⑩暗褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。
- ⑪黒褐色土 粘性強く、ローム小ブロックを少量含む。
- ⑫黒褐色土 粘性強く、上面に鉄分沈着。



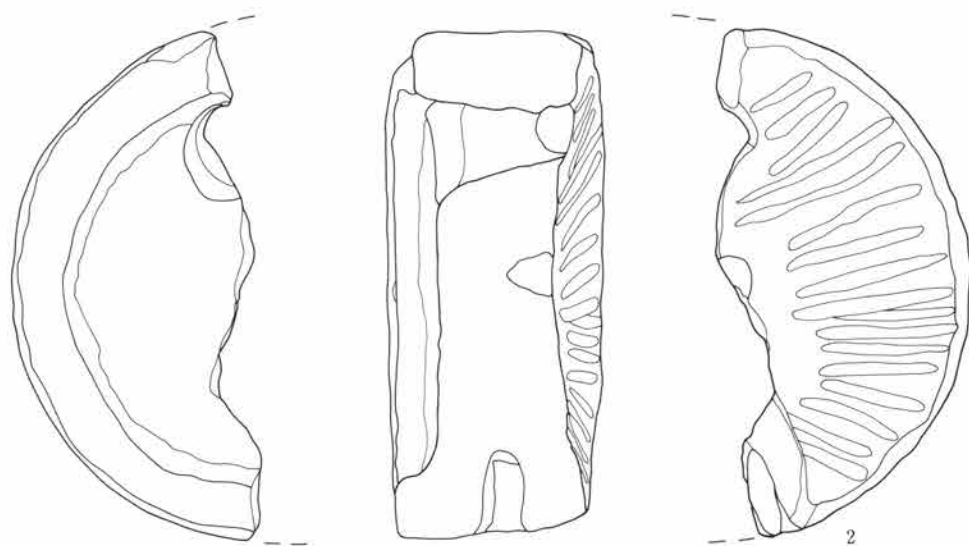
第203図 40～42・46号土坑



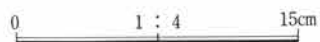
第204図 土坑出土遺物 (1)



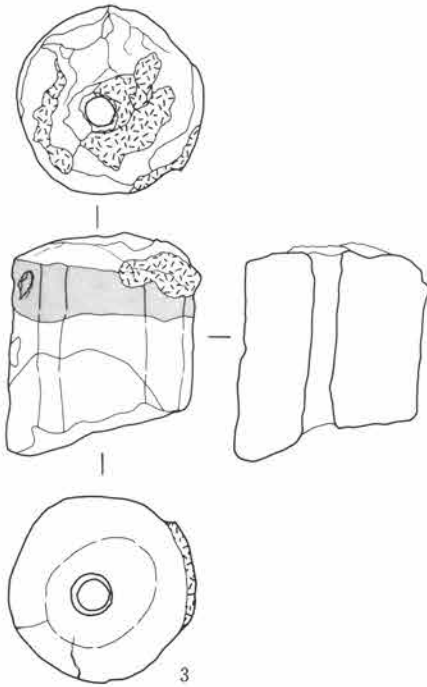
20号土坑



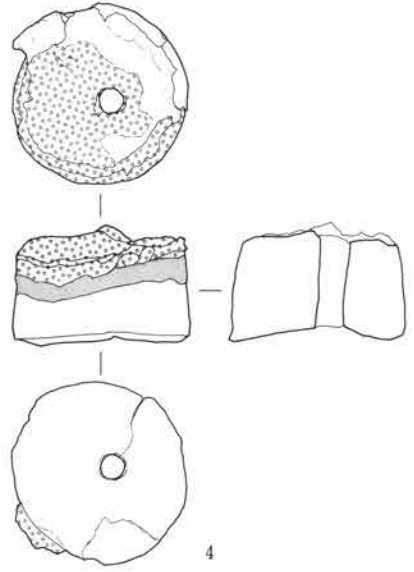
40号土坑



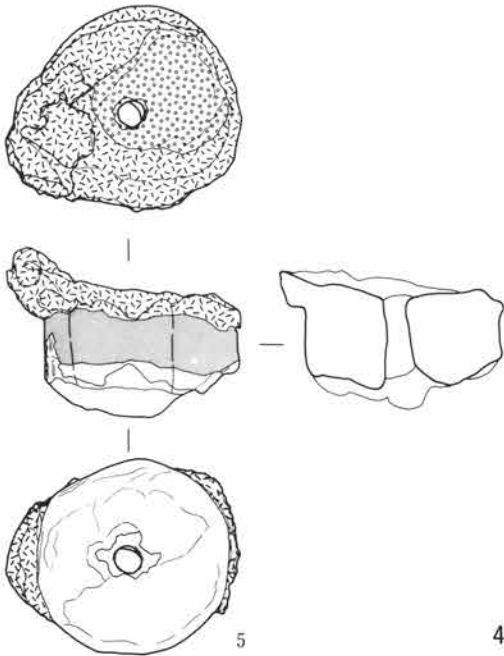
第205図 土坑出土遺物 (2)



3  
30号土坑

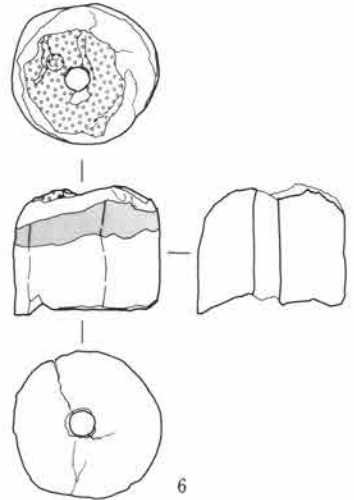


4

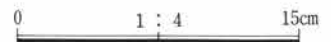


5

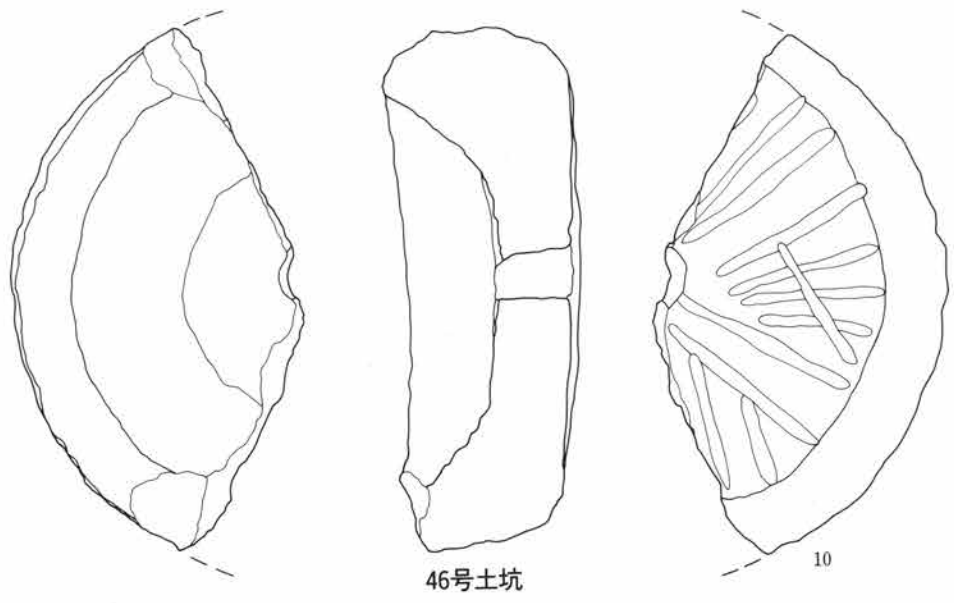
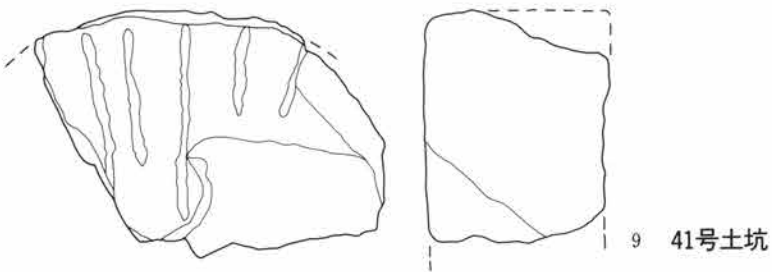
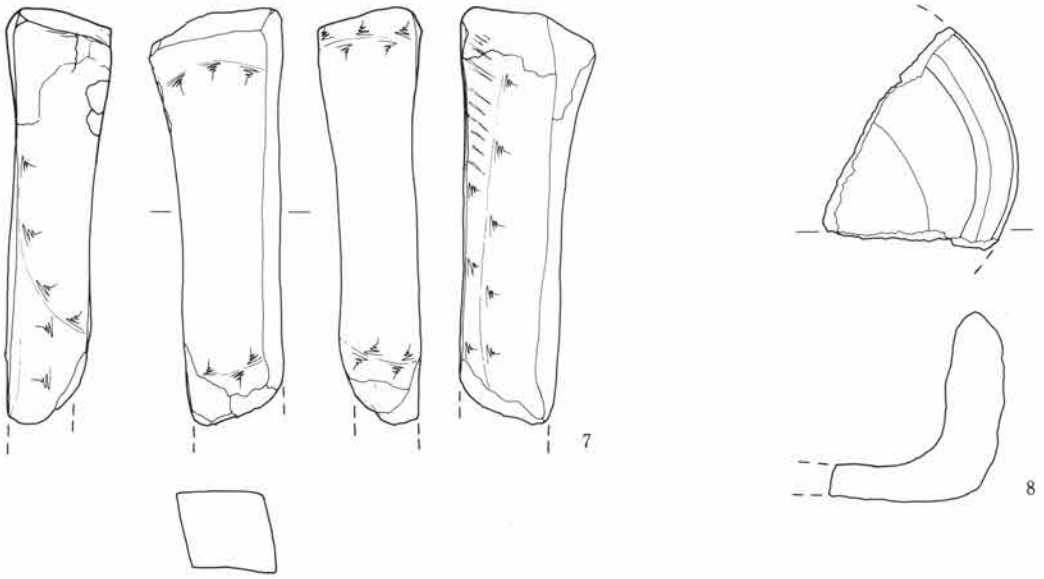
40号土坑



6

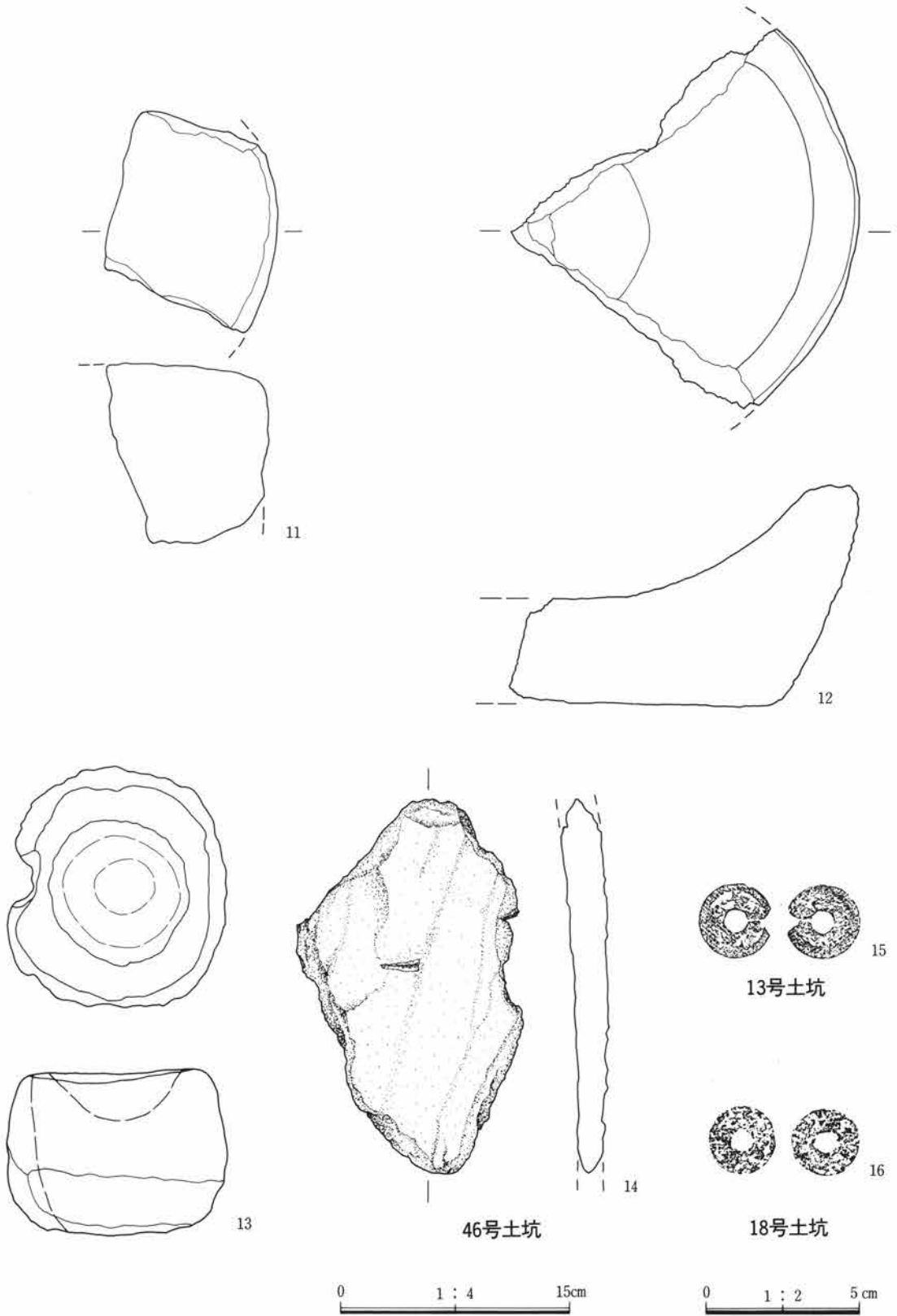


第206図 土坑出土遺物 (3)

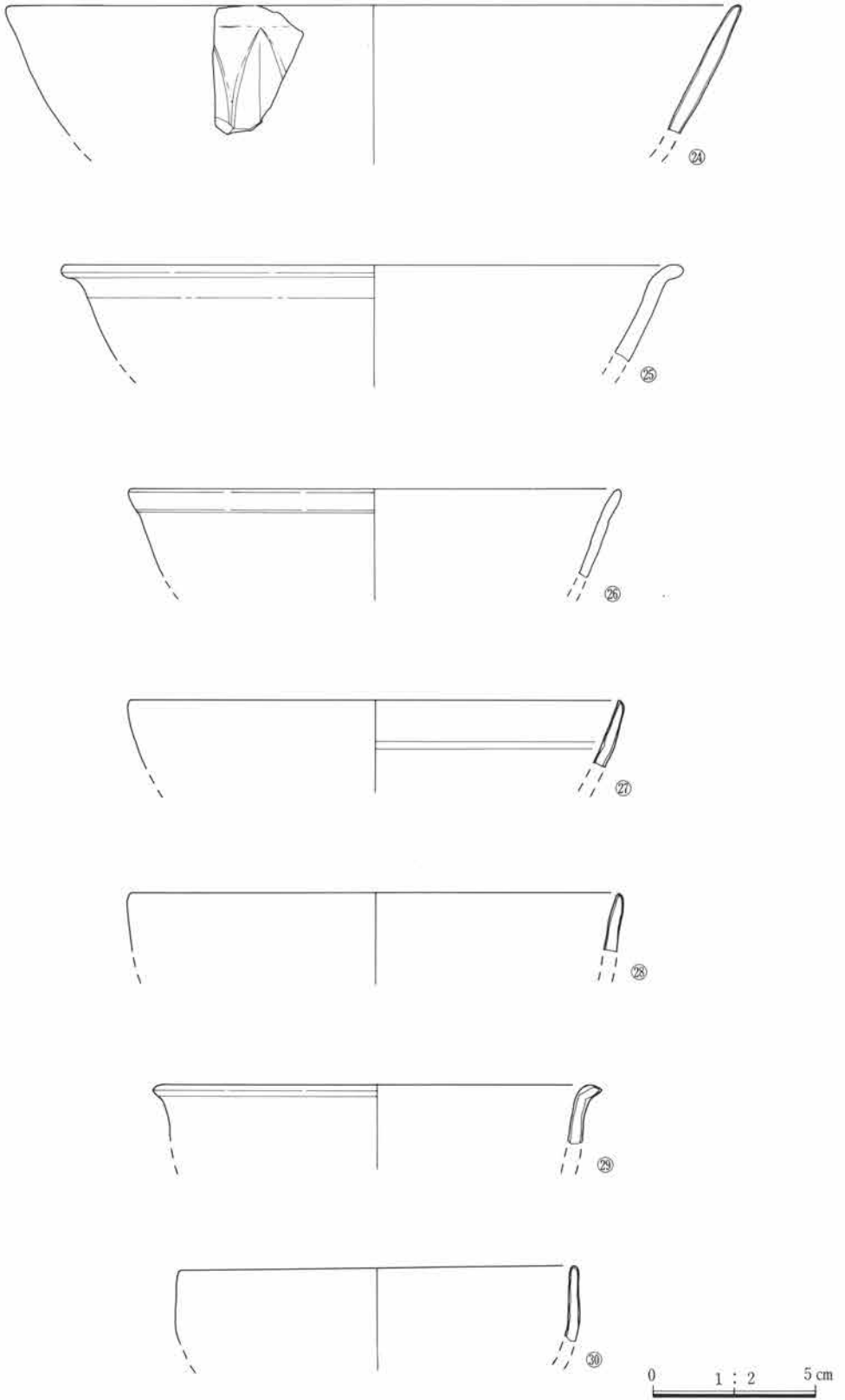


第207図 土坑出土遺物 (4)

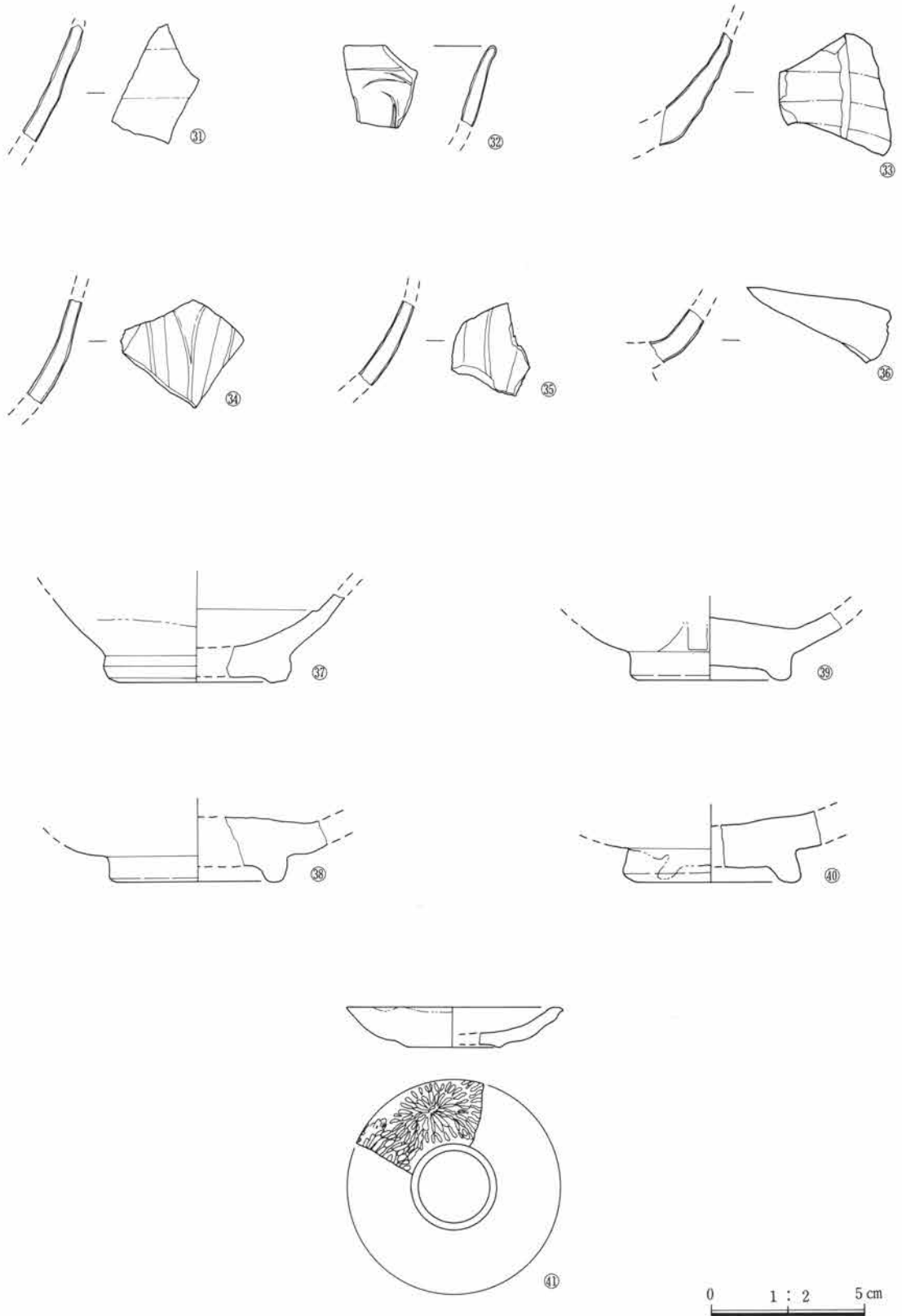




第208図 土坑出土遺物 (5)

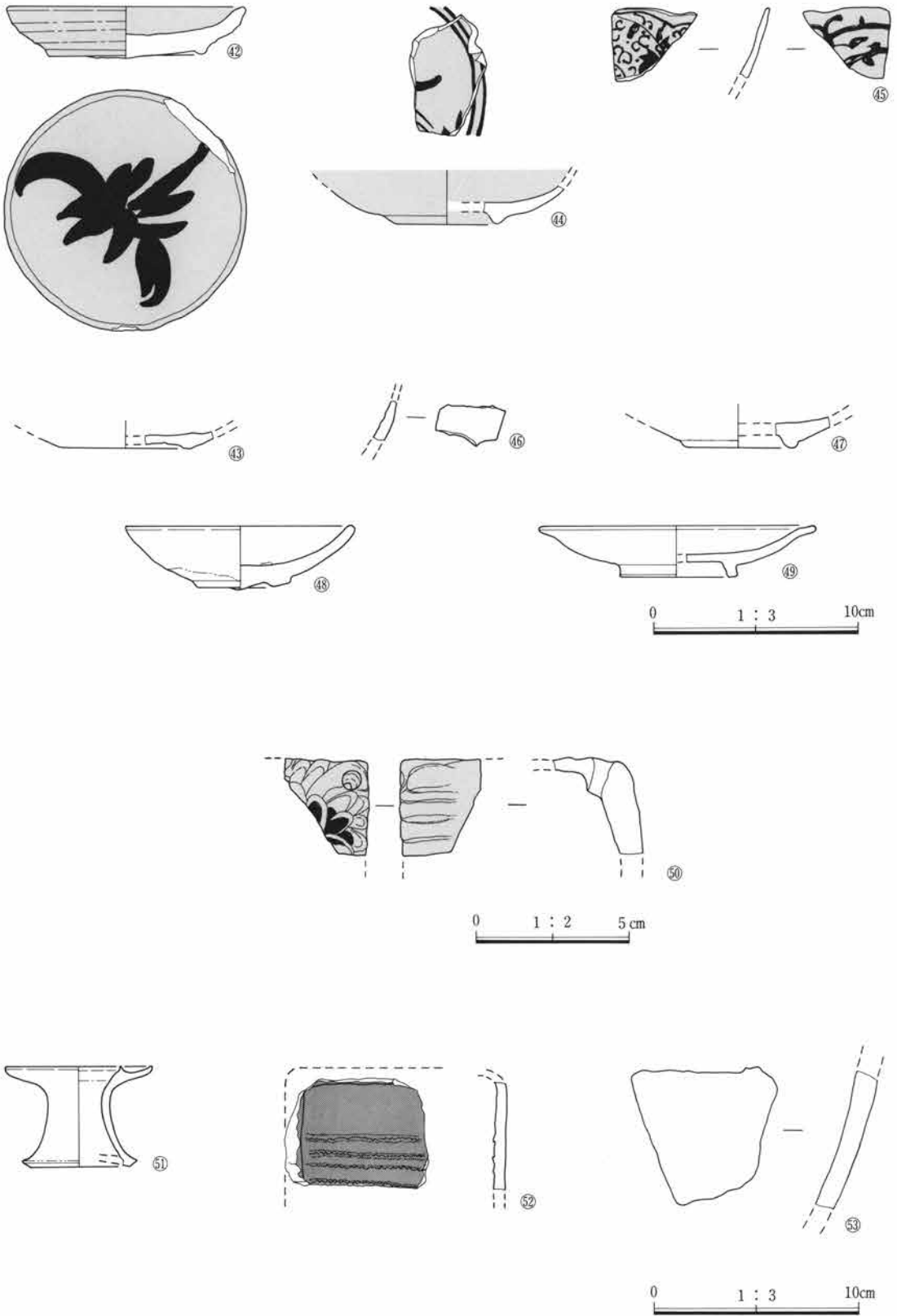


第209図 グリット出土遺物 (1)

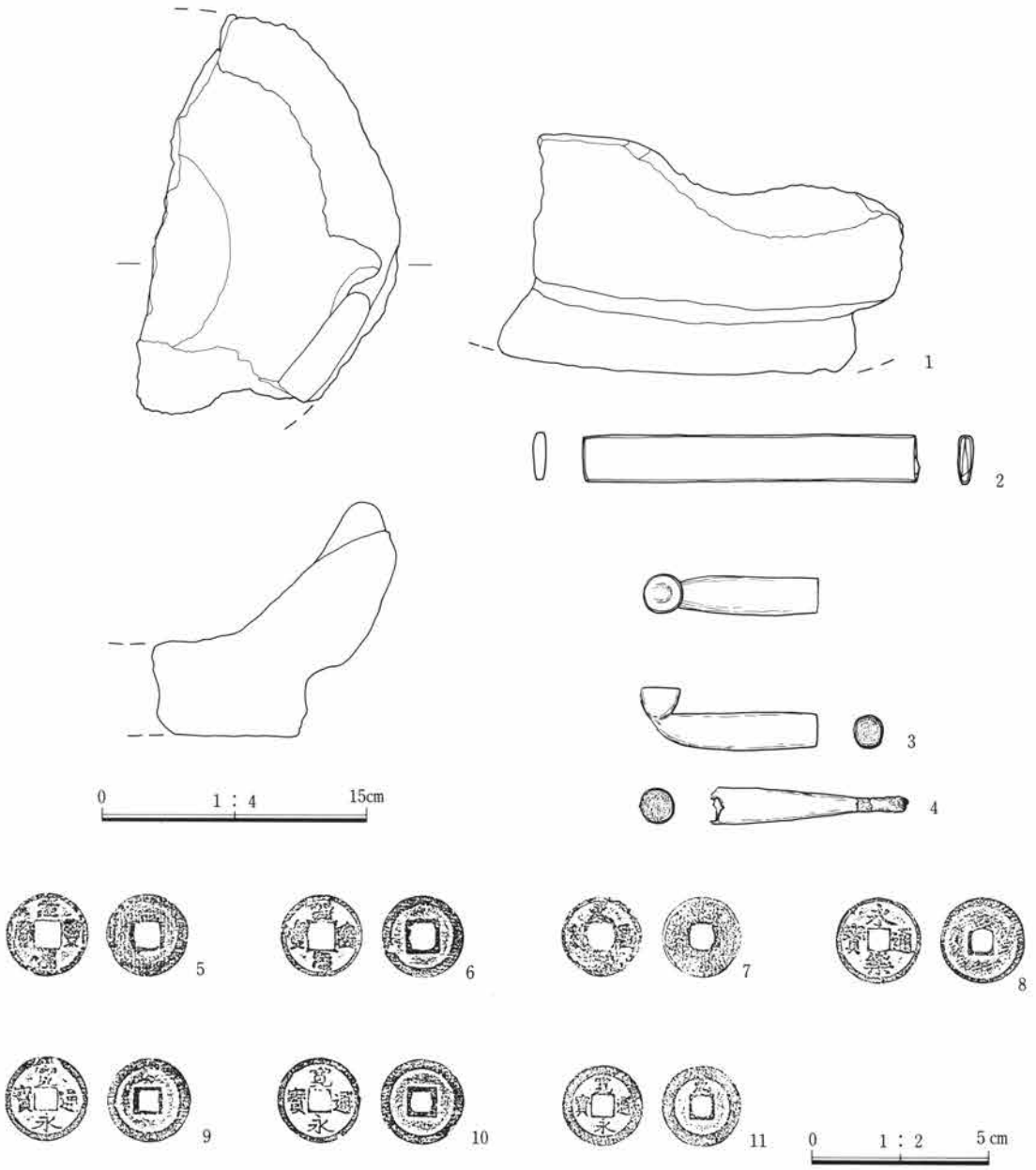


0 1 : 2 5 cm

第210図 グリット出土遺物 (2)



第211図 グリット出土遺物 (3)



第212図 グリット出土遺物 (4)

## 第5表 洞Ⅲ遺跡遺物観察表

## 1 平安時代

## ① 2号住居跡出土遺物（第101～110図、図版94～103）

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
1	須恵器杯	南東隅床面 No556	① $\frac{1}{2}$ ②14.0 ③7.0 ④7.5	砂粒、石英粒、黒色・白色鉍物粒子含む。還元軟質。灰色～にぶい橙色。	底部内面は平坦で中央が突起している。体部下半は直線的に立ち上がり、上半は内湾気味となる。口縁部はわずかに外反する。	底部右回転系切り無調整。体部内面丁寧なナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部内面重ね焼き痕あり。
2	須恵器杯	南東隅床面 No565	①略完形 ②15.0 ③7.1 ④5.5	細砂粒、石英粒、白色鉍物粒子含む。還元やや軟質。外面灰白色。内面灰色～黒褐色。	底部内面は平坦で中央が突起している。体部下半は直線的に立ち上がり、上半は内湾気味となり、口縁部はそのまま外向する。	底部右回転系切り無調整。底部内面強いナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部内外面に細かいロクロ線残す。体部内面に重ね焼き痕、重ね痕あり。
3	須恵器杯	南東隅覆土 No574・611	① $\frac{1}{4}$ ②(14.4) ③(6.0) ④6.2	細砂粒、石英鉍物粒子少し含む。還元。灰白色。	底部内面は平坦で、体部下半は直線的に立ち上がり、上半は内湾気味となり、口縁部そのまま外向する。	底部右回転系切り無調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部内外面共に細かいロクロ線残す。
4	須恵器杯	北東隅床面—西壁中央床面 No76・78・108・109	①略完形 ②14.8 ③7.7 ④5.1	砂粒、石英粒、白色鉍物粒子含む。還元軟質。外面灰色～黒褐色、内面にぶい橙色～黒褐色。	底部内面はやや平坦で中央が突起している。体部は丸みを持って立ち上がり口縁部はそのまま外向する。	底部右回転系切り無調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部内外面共にロクロ線残す。体部内面重ね焼き痕あり。底部側面にわずかな絞り込みがみられる。
5	須恵器杯	北東隅床面近 No88	①略完形 ②14.8 ③8.0 ④5.0	砂粒、白色鉍物粒子含む。還元硬質。灰褐色。	底部内面は平坦で中央が突起している。体部はわずかに丸みを持って立ち上がり、上半は直線的に開き、口縁部はそのまま外向する。	底部右回転系切り無調整。底部内面強いナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部内外面共に明瞭なロクロ線残す。体部内面に重ね焼き痕あり。底部側面にわずかな絞り込みがみられる。
6	須恵器杯	北西隅床面近 No1	① $\frac{1}{2}$ ②(14.6) ③7.6 ④5.1	小石、石英粒、白色鉍物粒子少し含む。還元やや軟質。灰褐色。	底部内面は平坦である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。	底部右回転系切り無調整。底部内面強いナデ調整。口縁部外面強いヨコナデ調整。体部内外面共にロクロ線残す。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
7	須恵器 杯	南東隅床 面近 No564・ 569・852・ 864	①略完形 ② 15.0 ③7.0 ④6.5	石英粒、褐色・白色 鉍物粒子含む。酸化 硬質。にぶい橙色。	底部内面は平坦で、体部下半 はわずかに丸みを持って立ち 上がり、上半は直線的に開き 口縁部はそのまま外向する。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面強いナデ調整。口縁部 外面ヨコナデ調整。体部内外 面共にロクロ線明瞭に残す。 底部側面にわずかな絞り込み がみられる。
8	須恵器 杯	南東隅掘 形 No771	①略完形 ② 15.0 ③6.6 ④5.5	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鉍物粒子含む。 酸化やや硬質。にぶ い黄橙色。	底部内面は平坦で、体部下半 は直線的に立ち上がり、上半 は丸みを持ち、口縁部はわず かに外反する。	底部左回転糸切り無調整。底 部内面強いナデ調整。口縁部 内外面ヨコナデ調整。体部内 面細かいロクロ線残す。
9	須恵器 杯	北西隅床 面 No12	① $\frac{1}{2}$ ②(13. 6) ③6.8 ④3.4	石英粒、黒色・白色 鉍物粒子を含む。還元 やや軟質。淡黄色。	底部内面は平坦で、体部から 口縁部はわずかに丸みを持って 開き、口縁部はそのまま外 向する。	底部左回転糸切り無調整。底 部から口縁部内外面丁寧なナ デ調整。ロクロ線不明瞭。
10	須恵器 杯	西壁中央 床面 No 8	① $\frac{1}{2}$ ②(10. 6) ③6.0 ④3.9	石英粒、褐色・白色 鉍物粒子含む。還元 軟質。灰白色。	底部内面は丸みを持ち、体部 は膨らみを持って立ち上り、 口縁部はわずかに外反する。	底部回転糸切り後、右回転の ヘラ切り調整を施す。底部～ 体部内面丁寧なナデ調整。口 縁部内外面共にヨコナデ調整。 底部側面にわずかな絞り込み がみられる。重ね焼き痕あり。
11	須恵器 杯	覆土	① $\frac{1}{2}$ ②(15. 2) ③6.6 ④5.0	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鉍物粒子含む。 還元軟質。にぶい橙 色。	底部内面は平坦で、緩く大き く体部は丸みを持って立ち上 がり、口縁部は外反する。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面強いナデ調整。口縁部 外面強いヨコナデ調整。体部 内面細かいロクロ線残す。
12	須恵器 杯	南東隅床 面近 No613・ 836・837・ 856	①略完形 ② 14.6 ③6.0 ④5.0	石英粒、褐色鉍物粒 子少し含む。還元軟 質。外面褐灰色～に ぶい橙、内面灰黄色。	底部内面は平坦で、体部は丸 みを持ち立ち上がり、口縁部 は緩く外反する。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面強いナデ調整。口縁部 内外面共にヨコナデ調整。体 部内外面共に明瞭なロクロ線 残す。重ね焼き痕あり。
13	須恵器 杯	南東隅床 面—南壁 中央床面 近 No537・ 785	①略完形 ② 14.0 ③7.0 ④4.5	砂粒を少し含む。還 元やや硬質。灰白色。	底部内面は平坦で、体部下半 は丸みを持って立ち上がり、 上半は直線的に開き、口縁部 は外反する。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面強いナデ調整。口縁部 内外面共にヨコナデ調整。底 部側面わずかに絞り込みがみ られる。

## 洞III遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
14	須恵器杯	南壁中央床面近 No.389・402・825	①略完形 ②14.6 ③7.6 ④4.7	石英粒、褐色・白色 鈹物粒子含む。還元軟質。外面灰黄色、内面にぶい橙色。	底部内面は平坦で、体部下半はやや直線的に立ち上がり、上半は丸みを持つ。口縁部は外反する。	底部左回転糸切り無調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部内外面共にロクロ線不明瞭である。底部側面に絞り込みがみられる。体部内面重ね焼き痕あり。
15	須恵器杯	南東隅床面 No.558	①略完形 ②13.4 ③6.6 ④4.5	砂粒、石英粒子少し含む。還元やや硬質。灰色。	底部は平坦で、体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	底部右回転糸切り無調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。糸切りは二度抜の感あり。底部側面バリ付着。
16	須恵器杯	南東隅床面近—南壁中央床面近 No.443・636・646	①½ ②(14.0) ③6.4 ④5.2	小石、白色鈹物粒子含む。還元硬質。灰白色。	底部内面は平坦で、体部下端は直線的に立ち上がり、上半は内湾気味となる。口縁部外反する。	底部右回転糸切り無調整。底部内面強いナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部内外面にロクロ線不明瞭に残す。
17	須恵器杯	南東隅床面近 No.851	①¾ ②14.8 ③6.0 ④4.5	石英粒、褐色・白色 鈹物粒子含む。還元軟質。外面灰黄色、内面にぶい橙色。	底部内面は平坦で、体部下半は直線的に立ち上がり、上半は丸みを持つ。口縁部は外反する。	底部左回転糸切り無調整。底部内面強いナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。ロクロ線不明瞭。
18	須恵器杯	南東隅覆土 No.274	①略完形 ②12.0 ③7.0 ④4.6	小石、石英粒、白色 鈹物粒子含む。還元硬質。暗灰色。	底部内面は平坦で、中央がわずかに突起する。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。No.18～No.28は同様の器形で、かつ底部と体部の器壁の厚さに差がなく、厚い。	底部右回転糸切り無調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。底部側面わずかに絞り込みがみられる。内外面燻し。
19	須恵器杯	東壁中央床面近 No.203	①略完形 ②11.4 ③6.2 ④3.6	石英粒、褐色・白色 鈹物粒子含む。還元軟質。外面黒褐色、内面にぶい赤褐色。	底部内面はわずかに平坦で中央が突起する。体部下半は丸みを持ち直線的に立ち上がる。口縁部そのまま外向する。	底部右回転糸切り無調整。底部～体部内面丁寧なナデ調整。体部内外面共にロクロ線残す。外面燻し。
20	須恵器杯	南東隅床面 No.225	①略完形 ②11.6 ③6.6 ④3.6	砂粒、石英粒、白色 鈹物粒子含む。還元軟質。外面黒褐色、内面褐灰色～黄灰色。	底部内面は平坦で中央がわずかに突起する。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	底部右回転糸切り無調整。底部～体部内面丁寧なナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部外面ロクロ線残す。体部内面重ね焼き痕あり。外面と内面上半燻し。



番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
21	須恵器 杯	東壁中央 覆土 No205	①略完形 ② 12.0 ③7.0 ④3.6	小石、白色鉍物粒子 含む。還元やや軟質。 外面暗灰色～灰黄色、 内面灰黄色。	底部内面は平坦で中央がわず かに突起する。体部は丸みを 持って立ち上がり、口縁部は わずかに外反する。	底部右回転糸切り無調整。口 縁部内外面共にヨコナデ調 整。底部内面回転クロ線明 瞭に残す。底部側面にわずかに 絞り込みがみられる。底部 内面焼成時のヒビ割れ、重ね 焼き痕あり。外面燻し。
22	須恵器 杯	南東隅床 面 No571	①完形 ② 12.0 ③6.4 ④3.8	砂粒、石英粒、白色 鉍物粒子含む。還元 やや軟質。暗灰色。	体部下端は直線的に立ち上 がり、上半は丸みを持つ。口縁 部は外反する。	底部右回転糸切り無調整。内 面丁寧なナデ調整。外面体部 中位強いヨコナデ調整。口縁 直下に一条のクロ線残す。 内外面共に燻し。
23	須恵器 杯	覆土	①略完形 ② 11.4 ③6.0 ④3.8	砂粒、石英粒、白色 鉍物粒子を含む。還 元。外面灰色～灰白 色、内面灰色。	底部内面は平坦で、体部下 半は丸みを持って立ち上がり、 上半は直線的に開き、口縁部 はそのまま外向する。	底部右回転糸切り無調整。底 部～体部内面丁寧なナデ調 整。口縁部内外面共にヨコナ デ調整。底部側面に絞り込み がみられる。
24	須恵器 杯	西壁中央 掘形 No765	①% ②13.4 ③7.2 ④3.7	褐色・白色鉍物粒子 含む。還元軟質。外 面黒褐色、内面灰褐 色。	底部内面は平坦で、体部は直 線的に開き立ち上がり、口縁 部はそのまま外向する。	底部右回転糸切り無調整。口 縁部内外面共にヨコナデ調 整。体部内外面共にクロ線 不明瞭。底部側面にわずかに 絞り込みがみられる。内面に 重ね焼き痕あり。外面燻し。
25	須恵器 杯	南東隅掘 形 No776	①略完形 ② 12.0 ③7.0 ④3.5	砂粒、石英粒、白色 鉍物粒子含む。還元 軟質。黒褐色。	底部内面平坦で中央がわず かに突起する。体部直線的に立 ち上がり、口縁部はそのまま 外向する。	底部右回転糸切り無調整。底 部～体部内外面共に丁寧なナ デ調整。底部側面に絞り込み がみられる。内外面共に燻し。
26	須恵器 杯	南東隅覆 土 No629	①完形 ② 11.6 ③6.6 ④3.5	砂粒、石英粒、白色 鉍物粒子含む。還元 やや軟質。外面暗灰 色、内面暗灰～灰黄 色。	底部内面は平坦で、中央がわ ずかに突起している。体部は 直線的に立ち上がり、口縁部 はそのまま外向する。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面強いナデ調整。体部内 面丁寧なナデ調整。底部側面 に絞り込みがみられる。内面 重ね焼き痕あり。
27	須恵器 杯	北壁中央 床面 No25	①略完形 ② 12.0 ③6.8 ④3.8	砂粒、褐色・白色鉍 物粒子含む。還元軟 質。外面黒褐色、内 面にぶい橙色。	体部は直線的に立ち上がり、 口縁部はそのまま外向する。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面ナデ調整。口縁部内面 ヨコナデ調整。体部内外面共 にクロ線残す。重ね焼き痕 あり。外面燻し。

## 洞III遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
28	須恵器杯	南壁中央床面近 No329・794・798	①% ②(11.6) ③6.6 ④3.2	小石、褐色・白色鈹物粒子含む。還元。外面暗灰色、内面暗灰～灰黄色。	体部は直線的に立ち上がり口縁部はわずかに外反する。	底部右回転糸切り無調整。底部内面強いナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部内外面共にロクロ線残す。内面重ね焼き痕あり。外面燻し。
29	須恵器杯	南東隅床面近 No239・278・584・637	①略完形 ②11.4 ③6.0 ④3.4	砂粒、黒色鈹物粒子含む。還元硬質。灰色。	体部は膨らみを持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。焼成時の歪みを持つ。	底部右回転糸切り無調整。底部内面強いナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部内面細かいロクロ線明瞭に残す。
30	須恵器杯	南西隅床面 No474	①% ②(12.4) ③6.6 ④3.5	砂粒、石英粒、白色鈹物粒子含む。還元軟質。外面灰褐色、内面灰白色。	底部内面は平坦で、体部はわずかに丸みを持って立ち上がる。口縁部はそのまま外向する。	底部右回転糸切り無調整。底部内面ナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。
31	須恵器杯	南壁中央床面 No409	①% ②(12.4) ③6.6 ④3.5	砂粒、褐色・白色鈹物粒子含む。還元軟質。外面灰褐色、内面灰色。	底部内面は平坦で、体部は内湾気味に丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反する。	底部右回転糸切り無調整。底部内面強いナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部内外面共にロクロ線残す。底部側面に絞り込みがみられる。内面重ね焼き痕あり。外面燻し。
32	須恵器杯	南東隅床面近 No612	①略完形 ②12.0 ③6.0 ④3.9	小石、褐色鈹物粒子少し含む。還元硬質。灰白色。	底部内面は平坦である。体部下半は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに丸みを持って外反する。	底部右回転糸切り無調整。底部内面強いナデ調整。口縁部外面強いヨコナデ調整。口縁直下に一条の強いロクロ線あり。底部側面わずかに絞り込みがみられる。
33	須恵器杯	南東隅床面 No277	①略完形 ②12.6 ③6.5 ④3.8	砂粒、黒色鈹物粒子少し含む。還元硬質。外面灰白色、内面灰白色～灰黄色。	底部内面は平坦で、体部はわずかに丸みを持って立ち上がり、口縁部は外向する。	底部右回転糸切り無調整。底部内面強いナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。内面重ね焼き痕あり。底部側面バリ付着。
34	須恵器杯	南西隅床面近 No462	①略完形 ②11.4 ③6.4 ④3.6	石英粒、褐色・白色鈹物粒子含む。酸化硬質。にぶい橙色～黒褐色。	底部内面平坦で中央がわずかに突起する。体部は膨らみを持って立ち上がり、口縁部外反する。	底部右回転糸切り無調整。底部～体部内面丁寧なナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。重ね焼き痕あり。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
35	須恵器 杯	南壁中央 床面 No667・ 809・874	①略完形 ② 12.0 ③7.0 ④3.6	砂粒、白色鉍物粒子 含む。還元。外面灰 褐色、内面褐灰色。	体部は丸みを持って立ち上が り、口縁部は外反する。口縁 部内外面燻し。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面強いヨコナデ調整。内 外面共にロクロ線残す。底部 側面わずかに絞り込みがみら れる。
36	須恵器 杯	南壁中央 床面 No791	①略完形 ② 11.8 ③6.8 ④3.6	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鉍物粒子含む。 還元軟質。外面褐灰 色、内面にぶい黄橙 色。	底部内面は平坦で、体部下半 は直線的に立ち上がり、口縁 端部は丸みを持って強く外反 する。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面強いナデ調整。口縁部 外面強いヨコナデ調整。体部 外面ロクロ線残す。重ね焼き 痕あり。外面燻し。
37	須恵器 杯	北西隅覆 土 No16・18	①略完形 ② 11.6 ③6.0 ④3.5	砂粒、石英粒、白色 鉍物粒子含む。還元 軟質。外面灰色～灰 白色、内面灰色。	底部内面は平坦である。体部 下半は直線的に立ち上がり、 口縁部は丸みを持って強く外 反する。	底部右回転糸切り無調整。口 縁部外面強いヨコナデ調整。 体部内面細かいロクロ線残 す。外面重ね焼き痕あり。口 縁直下に一条のロクロ線残 す。
38	須恵器 杯	南東隅覆 土 No275	①略完形 ② 12.0 ③6.0 ④4.2	小石、黒色・白色鉍 物粒子含む。還元軟 質。にぶい橙色～灰 色。	底部内面は平坦で、体部下半 は膨らみを持ち直線的に立ち 上がり、口縁端部は丸みを持 って強く外反する。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面強いナデ調整。口縁部 内外面共に強いヨコナデ調 整。口縁直下に一条の強いロ クロ線あり。底部側面バリ付 着。
39	須恵器 杯	南東隅床 面近 No557 (No15と 重なっ ている。)	①完形 ② 12.0 ③6.4 ④3.5	小石、石英粒、褐色・ 白色鉍物粒子含む。 還元軟質。外面黒褐 色、内面灰黄褐色。	底部内面は平坦で、体部下半 は直線的に立ち上がり、口縁 端部は丸みを持って強く外反 する。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面強いナデ調整。口縁部 外面強いヨコナデ調整。体部 内外面共にロクロ線残る。底 部内面焼成時のヒビ割れあ り。外面燻し。
40	須恵器 杯	南西隅床 面 No464	①略完形 ② 13.6 ③6.0 ④3.1	小石、石英粒、白色 鉍物粒子少し含む。 還元硬質。灰白色。	底部内面は平坦で、体部は直 線的に立ち上がり、口縁部は 強く外反する。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面強いナデ調整。口縁部 内外面共に強いヨコナデ調 整。底部側面わずかに絞り込 みがみられる。
41	須恵器 杯	南壁中央 床面近 No722	①略完形 ② 13.0 ③7.0 ④3.9	砂粒、石英粒、白色 鉍物粒子少し含む。 還元軟質。灰褐色～ 灰黄色。	底部内面は平坦で、1.1cmと厚 く、体部は直線的に立ち上 がり、口縁部は外反する。	底部左回転糸切り無調整。底 部内面強いナデ調整。体部内 外面共にロクロ線わずかに残 す。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
42	須恵器 杯	南西隅床 面―北東 隅床面近 No82・755	①略完形 ② 11.8 ③7.0 ④4.3	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鉍物粒子含む。 酸化硬質。におい黄 橙色。	底部内面平坦で、体部はわず かに膨らみを持ち直線的に立 ち上がり、口縁部はわずかに 外反する。	底部左回転糸切り無調整。底 部内面ナデ調整。口縁部内外 面ヨコナデ調整。体部内外面 ロクロ線わずかに残す。
43	須恵器 杯	南東隅床 面 No280	①略完形 ② 12.0 ③7.0 ④3.5	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鉍物粒子含む。 還元軟質。外面暗灰 色、内面暗灰黄褐色。	底部内面中央わずかに突起す る。体部下半やや丸みを持っ て立ち上がり、上半は直線的 に開き、口縁部そのまま外向 する。	底部左回転糸切り無調整。口 縁部内外面共にヨコナデ調 整。体部外面ロクロ線明瞭に 残す。底部側面わずかに絞り 込みがみられる。内面燻し。
44	須恵器 杯	南東隅床 面 No544	①略完形 ② 12.2 ③6.6 ④4.3	砂粒、石英粒、黒色 鉍物粒子含む。還元 軟質。灰色～灰白色。	底部内面は平坦で、1.0cmと厚 く、体部は直線的に立ち上が り、口縁部はわずかに外反す る。	底部左回転糸切り無調整。底 部内面ナデ調整。口縁部内外 面共にヨコナデ調整。体部内 外面共にロクロ線わずかに残 す。重ね焼き痕あり。
45	須恵器 杯	南壁中央 床面近 No821	①略完形 ② 13.2 ③6.8 ④3.9	石英粒、褐色・白色 鉍物粒子少し含む。 還元やや軟質。灰白 色。	底部内面は平坦で、体部は直 線的に立ち上がり、口縁部は そのまま外向する。	底部左回転糸切り無調整。底 部～体部内外面共に丁寧なナ デ調整。ロクロ線不明瞭、外 面に重ね焼き痕あり。
46	須恵器 杯	南東隅床 面 No834	①略完形 ② 14.2 ③8.0 ④4.8	砂粒、石英粒、黒色・ 白色鉍物粒子含む。 還元軟質。外面黒褐 色、内面灰黄色。	底部内面平坦で、1.2cmと厚 く、体部は直線的に立ち上が り、口縁部は外反する。	底部左回転糸切り無調整。底 部内面強いナデ調整。口縁部 内外面共にヨコナデ調整。内 外面共にロクロ線わずかに残 す。重ね焼き痕あり。
47	須恵器 杯	南東隅覆 土 No627	①略完形 ② 12.0 ③6.5 ④4.0	小石、石英粒、白色 鉍物粒子少し含む。 還元やや軟質。黒褐 色。	底部内面平坦で、体部は直線 的に立ち上がり、口縁部はそ のまま外向する。	底部左回転糸切り無調整。底 部内面強いナデ調整。口縁部 内面ヨコナデ調整。底部側面 に絞り込みがみられる。
48	須恵器 杯	南壁中央 床面近 No648・ 650・662・ 689	①略完形 ② 12.0 ③6.6 ④4.0	砂粒、白色鉍物粒子 含む。還元やや軟質。 灰色～灰白色。	底部内面は平坦で、体部下半 は直線的に立ち上がり、上半 は丸みを持ち、口縁部はその まま外向する。	底部回転糸切り無調整。底部 内面ナデ調整。口縁部内外面 共にヨコナデ調整。体部内外 面共にロクロ線わずかに残 す。重ね焼き痕残す。
49	須恵器 杯	南東隅覆 土 No270	①略完形 ② 12.0 ③7.0 ④3.8	小石、黒色粒少し含 む。還元硬質。灰色。	底部内面は平坦で、体部はわ ずかに膨らみを持って内湾気 味に立ち上がり、口縁部はそ のまま外向する。	底部左回転糸切り無調整。底 部～体部内外面共にナデ調 整。ロクロ線わずかに残す。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
50	須恵器 杯	南東隅掘 形 No840	①略完形 ② 12.8 ③6.0 ④3.6	砂粒、白色鉍物粒子 含む。還元軟質。外 面黒褐色、内面灰白 色、黒褐色。	底部内面は平坦で、体部わず かに丸みを持ち立ち上がり、 口縁部はわずかに外反する。	底部左回転糸切り無調整。底 部内面、体部内外面共に丁寧 なナデ調整。ロクロ線不明瞭。 底部側面に絞り込みがみられ る。内面重ね焼き痕あり。
51	須恵器 杯	中央床面 -北西隅 床面近 No7・36・ 714	①略完形 ② 12.2 ③6.0 ④4.0	砂粒、黒色・白色鉍 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	底部内面は平坦で、体部は膨 らみを持って立ち上がり、口 縁部は外反する。	底部左回転糸切り無調整。底 部内面ナデ調整。口縁部内外 面共にヨコナデ調整。体部内 外面共にロクロ線わずかに残 す。
52	須恵器 杯	北東隅床 面 No497	①完形 ② 11.8 ③6.2 ④3.6	砂粒、石英粒子少し 含む。還元軟質。灰 色～灰白色。	底部内面平坦で、体部は直線 的に立ち上がり、口縁部は外 反する。	底部左回転糸切り無調整。底 部～体部内面丁寧なナデ調 整。口縁部内外面共にナデ調 整。底部側面にわずかな絞り 込みあり。重ね焼き痕あり。
53	須恵器 高台椀	南東隅床 面 No832	①½ ②(16. 2) ③8.8 ④8.4	砂粒、石英粒、白色 鉍物粒子含む。還元 軟質。外面暗灰黄色、 内面にぶい黄橙色。	底部内面は平坦で、底部には 「ハ」の字状に開き、端部の 平坦な高台が付く。体部下端 にわずかに弱い稜を持って直 線的に立ち上がり、上半は内 湾気味となる。口縁部はその まま外向する。	底部左回転糸切り無調整。貼 付け高台時に糸切り痕周辺強 くナデ消す。高台付け部強い ナデを施す。体部内外面共に 細かいロクロ線明瞭に残す。 外面燻し。
54	須恵器 高台椀	南東隅掘 形-南壁 中央床面 近 No377・ 548・771	①½ ②(17. 4) ③(9.2) ④7.9	石英粒、褐色・白色 鉍物粒子含む。酸化 やや硬質。外面黒褐 色、内面にぶい橙色。	底部内面は平坦で、底部には 「ハ」の字状に開き、端部の平 坦な高台が付く。体部下端に 弱い稜を持って直線的に立ち 上がり、上半は内湾気味とな る。口縁部わずかに外反する。	底部左回転糸切り無調整。貼 付け高台時に糸切り痕周辺ナ デ消す。高台貼付け部内外面 共に強いナデを施す。体部内 面に細かいロクロ線明瞭に残 す。
55	須恵器 高台椀	南東隅床 面 No855	①½ ②(15. 8) ③(8.2) ④7.0	砂粒、石英粒、白色 鉍物粒子含む。還元 軟質。外面灰黄色、 内面灰白色。	底部内面は平坦で、底部には 「ハ」の字状に開き、端部の 平坦な高台が付く。体部下端 に稜を持って直線的に立ち上 がり、上半は強く内湾する。	底部左回転糸切り無調整。貼 付け高台時に糸切り痕周辺ナ デ消す。底部内面、体部内外 面にロクロ線明瞭に残す。外 面燻し。
56	須恵器 高台椀	南東隅床 面近 No248	①¼ ②(15. 2) ③(8.8) ④6.9	細砂粒、黒色・白色 鉍物粒子少し含む。 還元軟質。灰色。	底部内面は平坦で、底部には 「ハ」の字状に開き、端部を 強く掴み出した平坦な高台が 付く。体部下端にわずかに稜 を持ち直線的に立ち上がる。 口縁部はわずかに外反する。	底部右回転糸切り無調整。貼 付け高台時に糸切り周辺ナデ 消す。高台部外面強いナデ調 整。底部～体部内面丁寧なナ デ調整。底部外面焼成時のヒ ビ割れあり。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
57	須恵器 高台椀	南東隅床 面 No641	①略完形 ② 11.8 ③7.0 ④6.2	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鈹物粒子少し含 む。還元やや軟質。 灰色。	底部には端部が丸く「ハ」の 字状に開き高台が付く。体部 下端は稜を持ち直線的に立ち 上がり、上半は内湾気味とな る。口縁部はわずかに外反す る。	底部右回転系切り、貼付け高 台時に糸切り痕丁寧にナデ消 す。高台付け部強いナデ調整。 底部内外面共に強いナデ調 整。体部内外面共に細かいロ クロ線残す。
58	須恵器 高台椀	覆土	①¼ ②(11. 8) ③7.2 ④(5.1)	小石、石英粒、白色 鈹物粒子含む。還元 硬質。灰白色。	底部内面は平坦で、底部には 「ハ」の字状に開き、端部を 強く掴み出した平坦な高台が 付く。体部下端わずかに稜を 持って直線的に立ち上がる。 口縁部そのまま外向する。	底部右回転系切り、貼付け高 台時に糸切り痕丁寧にナデ消 す。高台部外面強いナデ調整。 口縁部内外面共にヨコナデ調 整。体部内外面共に細かいロ クロ線明瞭に残す。
59	須恵器 高台椀	西壁中央 床面近 No728・ 729	①略完形 ② 10.6 ③7.2 ④5.2	小石、白色鈹物粒子 少し含む。還元やや 硬質。外面灰色～灰 白色、内面灰色。	底部内面は平坦で、底部には 「ハ」の字状に開き、端部を 強く掴み出した平坦な高台が 付く、体部下端わずかに膨ら みを持って直線的に立ち上が る。口縁部丸みを持って外反 する。	底部右回転系切り、貼付け高 台時に糸切り痕丁寧にナデ消 す。高台部外面強いナデ調整。 底部内面強いナデ調整。口縁 部内外面共に強いヨコナデ調 整。
60	須恵器 蓋	南東隅覆 土 No633	①略完形 ② 17.1 ③3.8 ④4.0	小石、白色鈹物粒子 を含む。還元軟質。 灰色～灰黄色。	ボタン状つまみで中央がわず かに突起する。天井部は高く 斜めで、口縁部は緩やかに大 きく開き、端部は垂直に下向 し断面は丸みのある三角形状 をなす。	つまみナデ調整。天井部はロ クロ成形後ケズリ調整。つま みを貼付け時にケズリ部をナ デ調整。口縁部丁寧にヨコ ナデ調整。口縁部内外面共に ロクロ線残す。
61	須恵器 蓋	覆土 No62・79	①略完形 ② 15.6 ③3.6 ④4.2	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鈹物粒子含む。 還元軟質。黒褐色～ にぶい橙色。	ボタン状つまみで中央が突起 する。天井部は高く平坦で、 口縁部は直線的に開き、端部 は垂直に下向き断面は丸みの ある三角形状をなす。	つまみナデ調整。天井部磨耗 し成形は不鮮明である。口縁 部丁寧にヨコナデ調整。口 縁部内面細かいロクロ線残す。
62	須恵器 蓋	西壁中央 床面 No486	①完形 ② 14.8 ③4.2 ④4.0	石英粒、黒色・白色 鈹物粒子少し含む。 還元硬質。灰白色。	ボタン状つまみで中央がわず かに突起する。天井部は高く 平坦で、口縁部は直線的に開 き、端部は垂直に下向き、断 面は丸みのある三角形状をし ている。焼成時の歪みがある。	つまみナデ調整。天井部はロ クロ成形後ケズリ調整。つま みを貼付け時にケズリ部をナ デ調整。口縁部丁寧にヨコ ナデ調整。口縁部内外面共に ロクロ線わずかに残す。内面 につまみ部の重ね痕あり。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
63	須恵器 蓋	No240	①完形 ②14.5 ③3.3 ④3.9	小石、石英粒、白色 鉱物粒子含む。還元 硬質。灰色～灰白色。	ボタン状つまみで、中央がわずかに突起する。天井部は高く平坦である。口縁部は直線的に開き、端部は垂直に下向き断面は丸みのある「く」の字状をなす。	つまみナデ調整。天井部はロクロ成形後ケズリ調整。口縁端部丁寧なヨコナデ調整。口縁部内外面共にロクロ線を残す。椀の高台部大の重ね痕あり。重ね焼き痕あり。
64	須恵器 蓋	南東隅床 面近 No281	①完形 ② 16.8 ③3.7 ④4.0	砂粒、白色鉱物粒子 含む。還元硬質。灰 色～灰白色。	ボタン状つまみで中央が大きく突起している。天井部は斜めで、口縁部は緩やかに大きく開き、端部寄り平坦となる。端部は垂直に下向き、小さく爪み出し、断面は三角形状をなす。	つまみナデ調整。天井部はロクロ成形後ケズリ調整。つまみを貼付け時にケズリ部をナデ調整。口縁端部強いヨコナデ調整。口縁部内外面共に強いロクロ線残す。重ね焼き痕あり。
65	須恵器 蓋	南西隅床 面近 No479・ 481	①% ②(17. 0) ③3.3 ④4.0	石英粒、黒色・白色 鉱物粒子少し含む。 還元軟質。灰白色。	ボタン状つまみで中央がわずかに突起する。天井部は平坦で、口縁部は直線的に開き、端部は垂直に下向き断面は丸みのある「く」の字状をなす。	つまみナデ調整。天井部はロクロ成形後ケズリ調整。つまみ貼付け時に雑なナデ調整を施す。口縁端部強いヨコナデ調整。口縁部内外面共にロクロ線残す。
66	須恵器 蓋	覆土 No24・ 520・885	①% ②(16. 4) ③3.4 ④3.7	小石、石英粒子少し 含む。還元硬質。灰 色～灰白色。	ボタン状つまみで中央がわずかに突起する。天井部はやや平坦で、口縁部は直線的に開き、端部は垂直に下向き断面は丸みのある「く」の字状をなす。	つまみナデ調整。天井部はロクロ成形後ケズリ調整。つまみを貼付け時にナデ調整。ナデ調整時に工具による沈線あり。口縁端部強いヨコナデ調整。口縁部内外面共にロクロ線残す。重ね焼き痕あり。
67	須恵器 蓋	覆土	①% ②(16. 8) ③3.9 ④3.6	砂粒、石英粒、白色 鉱物粒子少し含む。 還元硬質。灰色～灰 白色。	ボタン状つまみで中央が突起する。天井部は高く平坦で、口縁部は直線的に開き裾部はわずかに内湾気味となる。端部は垂直に下向き断面は「く」の字状をなす。	つまみナデ調整。天井部ロクロ成形後ナデ調整。つまみを貼付け時にケズリ部をナデ調整。口縁端部強いヨコナデ調整。口縁部内外面共にロクロ線残す。椀の高台部大の重ね痕あり。重ね焼き痕あり。
68	須恵器 蓋	南西隅床 面近 No320・ 634・635・ 882	①% ②(17. 0) ③3.5 ④3.4	砂粒子含む。還元硬 質。灰白色。	ボタン状つまみで中央がわずかに突起する。天井部は平坦で、口縁部直線的に開き、端部は垂直に下向き断面は「く」の字状をなす。	つまみナデ調整。天井部はロクロ成形後ケズリ調整。つまみを貼付け時にナデ調整。口縁部、端部強いヨコナデ調整。口縁部内外面共にロクロ線残す。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
69	須恵器 蓋	南西隅床 面近 No408	① $\frac{1}{4}$ ②(15.6) ③4.0 ④4.2	砂粒、黒色・白色鉍物粒子含む。還元やや軟質。灰色。	ボタン状つまみで中央が突起し、天井部は平坦で、口縁部は直線的に開き、裾部はわずかに内湾気味となる。端部は「く」の字状に強く抓み出している。	つまみナデ調整。天井部はロクロ成形後ケズリ調整。口縁裾部、端部強いヨコナデ調整。ケズリ調整とロクロ成形の境に明瞭なロクロ線残す。口縁部内外面共にロクロ線残す。
70	須恵器 蓋	南東隅床 面 No213・ 519	①略完形 ②16.2 ③3.2 ④4.2	砂粒、石英粒、黒色・白色鉍物粒子含む。還元軟質。灰黄褐色～にぶい黄橙色。	ボタン状つまみで中央が突起し、天井部はやや低く平坦で口縁部は直線的に開き、裾部は内湾気味となる。端部は「く」の字状に強く抓み出している。	つまみナデ調整。天井部はロクロ成形後ケズリ調整。口縁裾部、端部強いヨコナデ調整。ケズリ調整とロクロ成形の境に明瞭なロクロ線残す。口縁部内外面ロクロ線残す。
71	須恵器 蓋	覆土	① $\frac{1}{2}$ ②(16.6) ③2.9 ④4.0	砂粒、黒色・白色鉍物粒子含む。還元硬質。灰白色。	ボタン状つまみで中央が突起する。天井部はやや低く平坦で、口縁部は直線的に開き、裾部は平坦である。端部は垂直に下向き、小さく抓み出して断面は三角形をなす。	つまみナデ調整。天井部ロクロ成形後ナデ調整。つまみを貼付け時にケズリ部をナデ調整。口縁端部ヨコナデ調整。口縁部内外面共にロクロ線残す。椀の高台部大の重ね痕あり。
72	須恵器 蓋	覆土 No348・ 360・586・ 692	① $\frac{1}{2}$ ②15.6 ③2.5 ④4.4	小石、石英粒、白色鉍物粒子含む。酸化やや硬質。にぶい橙色。	ボタン状つまみで中央が突起し、天井部は低く平坦で口縁部まで至る。裾部はわずかに内湾気味となる。端部は「く」の字状に強く抓み出している。	つまみナデ調整。天井部はロクロ成形後ケズリ調整。口縁裾部、端部強いヨコナデ調整。口縁部内外面共にロクロ線残す。
73	須恵器 蓋	南東隅床 面 No298	①略完形 ②(15.2) ③— ④(1.5)	砂粒、黒色・白色鉍物粒子含む。還元硬質。灰白色。	つまみは剥落している。天井部は低く平坦で、口縁部は直線的に開き、裾部は平坦面を大きく持つ。端部は垂直に下向き断面は「く」の字状をなす。	天井部ロクロ成形後ナデ調整。つまみを貼付け時にケズリ部をナデ調整。口縁端部強いヨコナデ調整。口縁部内外面共にロクロ線残す。重ね焼き痕薄く残す。
74	須恵器 広口甕	北西隅床 面近 No 1	① $\frac{1}{4}$ ②(30.6) ③(18.6) ④14.4	砂粒、石英粒、白色鉍物粒子含む。還元硬質。灰色。	底部は平底で、胴部下半は直線的に立ち上がり、上半はやや膨らみを持つ。頸部は短かく強く内湾し、口縁端部は直立し、上方へ強く抓み出している。	底部不規則なケズリ。胴部内外面共にロクロナデ。頸部から口縁部強いヨコナデ調整。胴部内外面共にロクロ線残す。底部側面にバリ付着。



番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
75	須恵器 広口甕	南東隅床 面近—南 西隅床面 近 No227・ 760	①口縁～胴部 小片 ②27.2 ③ — ④ —	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鉍物粒子含む。 還元軟質。にぶい橙 色。	胴部は膨らみ、頸部は短かく 丸みを持って「く」の字状に 大きく外反し、口縁端部は直 立し上下に掴み出し、断面が やや「く」の字状をなす。	胴部内外面共にロクロナデ。 頸部から口縁部強いヨコナデ 調整。胴部内外面共にロクロ 線残す。
76	須恵器 広口甕	南東隅床 面 No210	①口縁～胴部 小片 ②28.0 ③ — ④ —	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鉍物粒子含む。 還元軟質。にぶい橙 色。	胴部は膨らみ、頸部は短かく 丸みを持って大きく内湾す る。口縁端部は直立し上下に 掴み出し、断面がやや「く」 の字状をなす。	胴部下端はケズリ調整。胴部 中位から上はロクロナデ。頸 部から口縁部ヨコナデ調整。
77	須恵器 広口甕	南東隅覆 土 No339	①口縁～胴部 小片 ②(34. 0) ③ — ④ —	砂粒、白色鉍物粒子 含む。還元軟質。灰 色～灰白色。	肩部がやや大きく膨らみ最大 径を持つ。頸部は短かく丸み を持って大きく内湾する。口 縁端部は強く上下につまみ出 し直立した端部中位に一本の 稜線が走る。	胴部外面平行叩き後スリ消 す。胴部内面押圧後、ヘラ状 工具でナデ調整。頸部から口 縁部強いヨコナデ調整。頸部 辺に重ね焼き痕あり？
78	須恵器 広口甕	南壁中央 床面—覆 土 No382・ 430	①胴部～底部 1/3 ② — ③ 10.6 ④ —	砂粒、黒色・白色鉍 物粒子含む。還元や や軟質。外面灰黄色、 内面にぶい黄橙色。	底部平底で、胴部はやや膨ら みを持って立ち上がる。	胴部下端ケズリ調整。胴部内 外面共にロクロナデ。輪積痕 あり。
79	須恵器 鉢	南壁中央 床面—南 西隅床面 No483・ 797	①1/3 ②(21. 0) ③11.0 ④11.7	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鉍物粒子含む。 還元軟質。灰色～灰 黄色。	底部は平底で、胴部下半は直 線的に立ち上がり上半は膨ら みを持ち、内湾気味となる。 口縁部はわずかに屈曲し、端 部は平坦で内側へ斜めに切れ 込んでいる。	底部不規則なケズリ後ナデ調 整。胴部下端ケズリ調整。胴 部内外面共にロクロナデ。口 縁端部ヨコナデ調整。胴部内 外面共にロクロ線残す。
80	須恵器 鉢	東壁中央 床面 No130	①口縁～底部 小片 ②(17. 5) ③(7.2) ④12.3	砂粒、石英粒子含む。 還元軟質。にぶい黄 橙色。	底部は平底で、胴部はやや丸 みを持って立ち上がり、口縁 部寄りはずかに内湾気味と なる。口縁端部は平坦である が、口縁外面へ粘土を押し出 している。	底部外面雑なケズリ調整。胴 部下半は不規則なケズリ調 整。上半ロクロナデ。胴部内 面ロクロナデ。口縁部内外面 共に雑なヨコナデ調整。
81	須恵器 甌	南東隅覆 土 No285	①底部～胴部 下位 ② — ③ (15.6) ④ —	砂粒、黒色鉍物粒子 含む。還元やや軟質。 外面灰白色、内面灰 色。	底面は平坦で約2cmの幅を残 し、大きく開口する。胴部は 直線的に立ち上がる。胴部と 底部の境には径1.2cmの小孔 が約5cmの間隔で対をなし、 斜めに貫通している。	底面ケズリ調整。胴部下端外 面ケズリ調整。胴部外面平行 叩き後ナデ調整。胴部内面ナ デ調整。

洞III遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
82	土師器 甕	南東隅掘 形 No.778	①口縁～胴部 小片 ②(21. 2) ③— ④—	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鈹物粒子含む。 酸化やや硬質。赤褐 色。	器壁0.2～0.4cmで、胴部はわ ずかに膨らみを持ち、頸部は やや丸みを持った「コ」の字 状をなし、口縁部は外反する。	胴部外面ケズリ調整。胴部内 面ヘラナデ調整。頸部～口縁 部強いヨコナデ調整。
83	土師器 甕	覆土	①口縁～胴部 小片 ②(22. 0) ③— ④—	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鈹物粒子含む。 酸化。赤褐色。	器壁0.4cmで、胴部はやや膨ら みを持ち、頸部はわずかに丸 みを持った「コ」の字状をな し、口縁部は大きく外反する。	胴部外面ケズリ調整。胴部内 面不規則なナデ調整。頸部～ 口縁部強いヨコナデ調整。
84	土師器 甕	覆土	①口縁～胴部 小片 ②(20. 6) ③— ④—	砂粒、褐色・白色鈹 物粒子含む。酸化。 赤褐色。	器壁0.4cmで、胴部は膨らみを 持ち、頸部は丸みのある「コ」 の字状をなし口縁部は外反す る。	胴部外面ケズリ調整。胴部内 面不規則なナデ調整。頸部～ 口縁部強いヨコナデ調整。
85	土師器 甕	南東隅床 面近 No.258・ 644	①口縁～胴部 小片 ②(18. 0) ③— ④—	褐色・白色鈹物粒子 含む。酸化硬質。赤 褐色。	器壁は0.4cmで、胴部は膨ら み、頸部は丸みを持った「コ」 の字状をなし、口縁部は外反 し、端部は直立気味となりや や薄くなる。	胴部外面ケズリ調整。頸部～ 口縁部内外面共に強いヨコナ デ調整。
86	土師器 甕	南東隅床 面 No.605	①口縁～胴部 小片 ②(20. 0) ③— ④—	石英粒、褐色・白色 鈹物粒子含む。酸化。 赤褐色。	器壁は0.4cmで、胴部はわずか に膨らみ、頸部は丸みを持った 「コ」の字状をなし、口縁 部は大きく外反し、端部はや や薄くなる。	胴部外面ケズリ調整。頸部～ 口縁部内外面共に強いヨコナ デ調整。
87	土師器 甕	南東隅床 面近 No.568	①口縁～胴部 小片 ②(18. 0) ③— ④—	砂粒、褐色・白色鈹 物粒子含む。酸化。 赤褐色。	器壁0.3～0.5cmで、胴部はわ ずかに膨らみを持ち、頸部は 丸みを持った「コ」の字状を なし、口縁部は大きく外反す る。	胴部外面ケズリ調整。胴部内 面ナデ調整。頸部～口縁部内 外面共にヨコナデ調整。
88	須恵器 小型甕	南東隅掘 形 No.572・ 775・777	①½ ②13.2 ③(5.6) ④11.5	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鈹物粒子含む。 酸化硬質。にぶい橙 色。	底部平底で、胴部は丸みを持 って立ち上がり、中位に最大 径を持つ。頸部は丸みのある 「く」の字状をなし、口縁部 は内湾気味に外向する。	ロクロ成形。底部外面ケズリ 調整。胴部内外面共にロクロ ナデ。口縁部内外面共にヨコ ナデ調整。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
89	土師器 小型甕	覆土	①½ ②(8.0) ③3.0 ④6.5	砂粒、石英粒、褐色・白色鉱物粒子含む。酸化硬質。にぶい橙色。	底部やや不安定の平底で、胴部下半は直線的に開き、上半は大きく張りを持ち最大径をなす。頸部は丸みのある「く」の字状をなし、口縁部は直立気味にわずかに外向する。	底部回転糸切り後ケズリ調整。胴部ロクロ成形後縦方向のケズリを施す。口縁部内外面共にヨコナデ調整。
90	須恵器 小型甕	南東隅掘形-南壁中央床面近 No801・876	①½ ②— ③3.5 ④—	砂粒、白色鉱物粒子含む。還元硬質。灰白色。	底部平底で2.0cmと厚く、胴部下半は直線的に立ち上がり上半は丸みを持ち最大径をなす。	底部右回転糸切り無調整。胴部下半ロクロ成形後回転ケズリを施す。口縁部欠損。
91	須恵器 特殊小型短頸壺	南壁中央床面 No741	①略完形 ②4.0 ③4.0 ④5.5	石英粒、黒色・白色鉱物粒子少し含む。還元硬質。灰色～灰黄色。	底部平底で、胴部下半やや膨らみを持って立ち上がり、上半で大きく張り、最大径を持つ。肩部は内傾し、頸部は内向気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、端部は平坦となる。	底部右回転糸切り無調整。胴部ロクロナデ。肩部～口縁部内外面共にヨコナデ調整。口縁端部一部欠損。
92	須恵器 特殊小型短頸壺	覆土	①口縁～胴部½ ②4.6 ③— ④—	黒色・白色鉱物粒子含む。還元。灰白色。	胴部上半で大きく張りを持ち、肩部は丸みを持って内傾し、口縁部は短かく直立する。端部はやや丸みを持つ。	ロクロ成形。肩部～口縁部内外面共にヨコナデ調整。胴部下半欠損。
93	須恵器 特殊小型短頸壺	南東隅床面 No252	①完形 ②3.7 ③3.6 ④3.3	砂粒、石英粒、白色鉱物粒子含む。還元。灰白色。	底部は平底で、胴部下半はやや膨らみを持って立ち上がり、上半で張りをもち最大径をなす。肩部は丸みを持って内傾し、口縁部は短かく端部は外反する。	底部左回転糸切り無調整。肩部～口縁部内外面共にヨコナデ調整。
94	土師器 不明	南壁中央床面 No824	①完形 ②3.0 ③3.0 ④3.2	褐色・白色鉱物粒子含む。酸化硬質。黄橙色。	小型で鼓状の形状をなす。上端は皿状に抓み出し、中位は括れ、下端は多角形をなし、底面は平坦で、中央が抉れ込んでいる。	手捏ふうで、上面ナデ、中位は工具と手でナデた感あり。底部は不整形にケズリ調整。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
95	須恵器 硯	南東隅床 面近 No860	①完形 ② 10.4 ③13.0 ④4.2	灰白色。	高台付椀の形態技法を利用し、円面硯様に作成したものであるが硯面はあまり磨れておらず、墨痕もない。脚部は直線的に開き、端部は平坦で外方向へ鋭角に掴み出している。脚部には角の丸い長方形をなす透かしが対をなして、4窓開いている。縁部外面は、体部から丸みを帯びた「く」の字状に大きく外反し、内面はやや丸みのある緩やかな傾斜となっている。	ロクロ成形。脚部内面ナデ調整。外面はロクロ線残す。端部は強いヨコナデ調整。縁部及び硯面共に丁寧なナデを施す。
番号	器種	出土位置	特 徴			
96	敲石	北東隅床 面 No495	黒色頁岩。長さ13.5cm、幅5.3cm、厚さ3.4cm、重さ420g。偏平で長楕円形をなし、表裏面ともやや磨れている。両端部には打撃痕が多数認められ、一方の端部は打撃によりヒビが入っている。用途は明確ではないが、端部を使用して固い物質を打ち砕いたものと思われる。			

## ② 3号住居跡出土遺物 (第112図、図版104)

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
1	須恵器 杯	カマド前 床面 No40	① $\frac{1}{2}$ ②(14. 2) ③(7.2) ④6.1	砂粒、褐色・白色鉱物粒子含む。還元軟質。黒褐色。	底部内面は平坦で、体部下半は直線的に立ち上がり、上半は内湾気味となる。口縁部はそのまま外向する。	底部左回転糸切り無調整。体部内面丁寧なナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部外面細かいロクロ線残す。底部側面わずかに絞り込みがみられる。内外面燻し。
2	須恵器 杯	貯蔵穴	① $\frac{1}{2}$ ②(14. 2) ③6.2 ④4.4	小石、石英粒、褐色・白色鉱物粒子含む。還元軟質。にぶい橙色～にぶい褐色。	底部内面はやや平坦である。体部下半は外反気味に立ち上がり、上半は丸みを持つ。口縁部はわずかに外反する。	底部左回転糸切り無調整。底部～体部内外面共に丁寧なナデ調整。口縁部外面ヨコナデ調整。
3	須恵器 杯	中央床面 近 No32	① $\frac{1}{2}$ ②(13. 2) ③5.8 ④4.1	砂粒、石英粒、褐色・白色鉱物粒子を含む。還元軟質。にぶい橙色～褐色。	底部内面は丸底で、体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	底部右回転糸切り後、再度粘土を足し刷毛工具でナデた感あり。底部～体部内面丁寧なナデ調整。体部外面ロクロ線残す。底部側面わずかに絞り込みがみられる。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
4	須恵器 長頸壺	北西隅床 面 No14	①頸部のみ ②— ③— ④—	石英粒、褐色粒含む。 還元軟質。灰褐色。	頸部径は4.5cmで緩く立ち上 がり開く。	ロクロ成形。頸部内外面ロク ロ線残す。内面に粘土巻き上 げ痕あり。
5	土師器 甕	貯蔵穴	①口縁～胴部 小片 ②(21. 8) ③— ④—	石英粒、褐色・白色 鉱物粒子含む。酸化 やや硬質。赤褐色。	器壁0.4cmで、胴部やや膨らみ を持ち、頸部は丸みのある 「コ」の字状をなし、口縁部 は外反する。端部に沈線が1 条走る。	胴部外面ケズリ調整。胴部内 面ナデ調整。頸部～口縁部強 いヨコナデ調整。
6	土師器 甕	覆土	①口縁～胴部 小片 ②(20. 4) ③— ④—	石英粒、褐色・白色 鉱物粒子含む。酸化。 赤褐色。	器壁0.4cmで、胴部やや膨らみ を持ち、頸部は丸みのある 「コ」の字状をなし、口縁部 は外反する。	胴部外面ケズリ調整。頸部～ 口縁部強いヨコナデ調整。
番号	種類	出土位置	特 徴			
7	砥石	北東隅床 面	砂岩。長さ13.3cm、幅8.2cm、厚さ5.5cm、重さ940g、河原石の円礫を使用。表表面は中央部が皿状に磨れている。両側面はほぼ全面を使用、平坦で内湾気味となっている。			
8	磨石	北西隅床 面	花崗岩。偏平な河原石を使用。2面が大きく割れている。表面は石皿状に内湾し、やや磨れている。			

## ③ 4号住居跡出土遺物 (第114図、図版105)

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
1	須恵器 杯	貯蔵穴 No12・13	①略完形 ② 15.0 ③7.5 ④5.2	砂粒、白色粒子含む。 還元やや軟質。黄褐 色。	底部内面平坦で、体部直線的 に立ち上がり、口縁部わずか に外反する。	底部左回転糸切り無調整。底 部～体部内面丁寧なナデ調 整。口縁部内外面共にヨコナ デ調整。体部外面細かいロク ロ線残す。底部側面にわずか に絞り込みがみられる。内外 面燻し。
2	須恵器 杯	貯蔵穴 No11	①½ ②(12. 8) ③6.4 ④3.3	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鉱物粒子含む。 酸化硬質。黒褐色～ にぶい橙色。	底部内面平坦で、体部下半は 直線的に大きく開き、中位で 稜を持って屈曲し、上半も直 線的に立ち上がる。口縁部は そのまま外向する。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面強いナデ調整。口縁部 内外面共に強いヨコナデ調 整。中位に強いロクロ線残す。 底部側面にわずかに絞り込み がみられる。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
3	須恵器 杯	貯蔵穴 No.2	①口縁部欠 ②— ③6.3 ④—	石英粒、褐色・白色 鈳物粒子含む。還元 軟質。外面灰黄色、 内面黒褐色。	底部内面平坦で、体部わずかに膨らみを持って立ち上がる。	底部左回転糸切り無調整。底部内面強いナデ調整。底部側面に絞り込みがみられる。内面燻し。

## ④ 5号住居跡出土遺物 (第116図、図版105~107)

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
1	須恵器 杯	貯蔵穴 No.17	① $\frac{1}{2}$ ②13.4 ③7.0 ④4.3	褐色・白色鈳物粒子 含む。還元軟質。黒 褐色。	底部内面は平坦で、体部は丸みを持って開き、口縁部は緩やかに外反する。	底部右回転糸切り無調整。底部内面丁寧なナデ調整。体部内外面共にロクロナデ。口縁部内外面共にヨコナデ調整。底部側面わずかに絞り込みがみられる。
2	須恵器 杯	貯蔵穴 No.4・9・ 20	①略完形 ② 14.2 ③7.0 ④4.1	石英粒、褐色・白色 鈳物粒子含む。還元 軟質。外面黄灰色、 内面にふい橙色。	底部内面は平坦で、体部は膨らみを持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	底部左回転糸切り無調整。体部内外面共にロクロナデ。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部内外面にロクロ線残す。
3	須恵器 杯	貯蔵穴 No.15	① $\frac{1}{2}$ ②14.0 ③7.0 ④4.3	砂粒、石英粒、白色 粒含む。還元軟質。 灰黄色。	底部内面は平坦で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部緩やかに外反する。	底部左回転糸切り無調整。底部内面～体部内外面共にナデ調整。口縁部内外面共に強いヨコナデ調整。体部内外面にロクロ線をわずかに残す。
4	須恵器 杯	貯蔵穴 No.18	① $\frac{1}{2}$ ②(14. 6) ③7.4 ④3.9	小石、石英粒、白色 鈳物粒子含む。還元 軟質。灰黄色～灰褐 色。	底部内面は平坦で、体部下半は直線的に立ち上がり、上半は丸みを持つ。口縁部は緩やかに外反する。	底部右回転糸切り無調整。底部内面～体部内外面共にナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。重ね焼き痕あり。
5	須恵器 杯	覆土	① $\frac{1}{2}$ ②14.2 ③7.0 ④4.0	石英粒、褐色・白色 鈳物粒子含む。還元 やや軟質。灰白色。	底部内面は平坦で、体部は膨らみを持って開き、口縁部は緩やかに外反し、端部は薄くなる。	底部左回転糸切り無調整。底部内面～体部内外面丁寧なナデ調整。ロクロ線わずかに残す。
6	須恵器 杯	貯蔵穴 No.2	①完形 ②12. 0 ③7.1 ④ 3.3	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鈳物粒子含む。 還元軟質。にふい橙 色。	底部内面は丸底で、体部は膨らみを持ち、口縁部はやや外反し、肥厚する。	底部右回転糸切り無調整。体部内外面共にロクロナデ。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部内外面ロクロ線明瞭に残す。底部側面に絞り込みがみられる。粘土バリ付着。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
7	須恵器 杯	貯蔵穴 No23	① $\frac{1}{2}$ ②11.6 ③6.0 ④3.5	石英粒、褐色・白色 鉱物粒子少し含む。 還元軟質。黒褐色～ にぶい黄橙色。	底部内面は平坦で、体部は直 線的に立ち上がり、口縁部は わずかに外反する。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面～体部内外面丁寧なナ デ調整。口縁部ヨコナデ調整。 体部内外面共にロクロ線わず かに残す。底部側面に絞り込 みがみられる。重ね焼き痕あ り。底部に粘土のたまり付着。
8	須恵器 杯	貯蔵穴 No19	①完形 ②11. 6 ③6.0 ④3.4	小石、石英粒、褐色・ 白色鉱物粒子含む。 還元軟質。灰白色～ 灰褐色。	底部内面は平坦で、体部は直 線的に立ち上がり、口縁部わ ずかに外反する。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面、体部内外面共に丁寧 なナデ調整。口縁部内外面共 にヨコナデ調整。底部側面わ ずかに絞り込みがみられる。 重ね焼き痕あり。
9	須恵器 杯	貯蔵穴 No16	①略完形 ② 11.8 ③7.0 ④3.3	砂粒、白色鉱物粒子 含む。還元軟質。灰 褐色～灰黄色。	底部内面は平坦で、体部は膨 らみを持って立ち上がり、口 縁部は緩やかに外反する。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面ナデ調整。口縁部内外 面共にヨコナデ調整。体部内 外面共にロクロ線明瞭に残 す。重ね焼き痕あり。
10	須恵器 杯	貯蔵穴 No14	①略完形 ② 12.0 ③6.0 ④3.9	石英粒、白色鉱物粒 子含む。還元やや硬 質。外面灰褐色、内 面灰白色。	底部内面は平坦で、体部は直 線的に立ち上がり、口縁部は そのまま外向する。	底部左回転糸切り無調整。底 部内面～体部内外面丁寧なナ デ調整。口縁部内外面共にヨ コナデ調整。ロクロ線わずか に残す。重ね焼き痕あり。外 面燻し。
11	須恵器 蓋	貯蔵穴 No24	①完形 ②17. 3 ③2.6 ④5.0	砂粒、白色鉱物粒子 少し含む。還元硬質。 灰色。	中くぼみつまみで中央がわず かに突起する。天井部は低く 平坦で、口縁部は緩やかに大 きく開き、端部寄りは平坦と なる。端部は垂直に下向き、 小さく掴み出し、断面は三角 形状をなす。	つまみナデ調整。天井部はロ クロ成形後ケズリ調整。つま みを貼付けた時にケズリ部を ナデ調整。口縁端部強いヨコ ナデ調整。内面回転ロクロ線 明瞭に残す。
12	須恵器 甕	貯蔵穴 No13	①口縁～胴部 小片 ②(16. 6) ③— ④—	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鉱物粒子含む。 酸化軟質。にぶい赤 褐色。	胴部上半は膨らみを持ち、頸 部は緩やかに括れ、口縁部は 大きく外反し、端部はわずか に肥厚する。	胴部内外面共にロクロナデ。 口縁部内外面共にヨコナデ調 整。
13	須恵器 小型甕	覆土	①略完形 ② 8.6 ③5.6 ④6.3	石英粒、褐色・白色 鉱物粒子含む。還元 軟質。にぶい橙色。	底部は平底で、胴部は直線的 に立ち上がり、肩部は張りを持 ち、最大径をなす。頸部は 短かく外反し、口縁部は外向 する。	底部右回転糸切り無調整。胴 部下端ロクロ成形後回転ケズ リを施す。口縁部内外面～内 面ヨコナデ調整。底部側面粘 土バリ付着。

## ⑤ 6号住居跡出土遺物 (第118図、図版107)

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
1	須恵器 杯	カマド No.3	①口縁～体部 小片 ②(13. 8) ③— ④—	石英粒、褐色・白色 鉾物粒子含む。酸化 やや硬質。にぶい黄 橙色。	体部はやや膨らみを持ち、口 縁部は外反し、肥厚する。	ロクロ成形。体部ロクロ線明 瞭に残す。口縁部内外面強い ヨコナデ調整。
2	須恵器 羽釜	貯蔵穴 No.6	①口縁～胴部 小片 ②(17. 2) ③— ④—	石英粒、白色鉾物粒 子含む。還元やや軟 質。灰褐色～灰白色。	胴部上半はわずかに膨らみを 持ち、口縁部は直立し、端部 は平坦である。突帯断面は三 角形状をなす。	胴部は突帯までヨコ方向への ヘラケズリ調整。胴部内面ナ デ調整。口縁部内外面共にヨ コナデ調整。
3	須恵器 羽釜	カマド No.1・2	①% ②19.2 ③8.0 ④29. 0	小石、白色鉾物粒子 含む。還元軟質。灰 白色。	底部は平底で、胴部下半は直 線的に立ち上がり、上半に最 大径を持ち、径は23cmである。 上半は内湾気味となる。口縁 部は内湾し、端部は内側へ斜 めに切り込んでいる。突帯断 面は丸みを持った三角形状を なす。	底部ケズリ調整後ナデを施 す。胴部外面下半は上方向へ のヘラケズリ、上半はヨコ方 向へのヘラケズリ調整を施 す。胴部内面ナデ調整。口縁 部内外面共にヨコナデ調整。 胴部に輪積痕明瞭に残す。

## ⑥ 2号土坑出土遺物 (第122図、図版108)

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
1	須恵器 杯	No.6・7	①略完形 ② 13.8 ③6.2 ④4.0	砂粒、石英粒、黒色・ 白色鉾物粒子含む。 還元軟質。黒褐色～ 灰黄色。	底部内面は平坦で、体部は直 線的に開き立ち上がり、口縁 部はそのまま外向する。	底部左回転糸切り無調整。底 部内面～体部内外面丁寧なナ デ調整。体部内外面共にロク ロ線残す。
2	須恵器 杯	No.5	①略完形 ② 12.1 ③6.0 ④3.3	小石、長石粒、黒色・ 白色鉾物粒子含む。 還元やや軟質。黒褐 色～灰黄色。	底部内面は平坦で、体部下半 は直線的に立ち上がり、上半 はわずかに膨らみを持つ。口 縁部はそのまま外向する。	底部左回転糸切り無調整。底 部内面ロクロナデ。体部内面 丁寧なナデ調整。底部外面に 焼成時のヒビ割れと工具によ る沈線あり。
3	須恵器 杯	No.12	①% ②12.6 ③5.2 ④3.5	砂粒、石英粒、白色 鉾物粒子含む。還元 軟質。黒褐色～灰黄 色。	底部内面は丸底で中央がわず かに突出する。体部は直線的 に立ち上がり、口縁端部はそ のまま外向し、口縁直下に一 条のロクロ線残す。	底部左回転糸切り無調整。体 部内面口縁直下に強いヨコナ デ調整。口縁部外面強いヨコ ナデ調整。



番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
4	須恵器 皿	No.3	① $\frac{1}{4}$ ②(12.5) ③(5.0) ④3.3	石英粒、褐色・白色鉍物粒子含む。酸化硬質。外面褐色～橙色、内面橙色。	底部には「ハ」の字状に外向する高台が付く。体部はわずかに膨らみを持って大きく開き、口縁部は外反する。	ロクロ成形。高台貼付け部強いヨコナデ調整。体部内外面丁寧なナデ調整。口縁部外面強いヨコナデ調整。
5	土師器 甕	No.4	①口縁～胴部小片 ②(11.6) ③— ④—	砂粒、褐色・白色鉍物粒子含む。酸化やや硬質。外面にふい橙色、内面にふい褐色。	器壁は厚さ0.3cmで、胴部はわずかに膨らみを持ち、頸部はやや丸みを持った「コ」の字状をなし、口縁部は外反する。	胴部外面ケズリ調整。胴部内面ナデ。頸部～口縁部内外面強いヨコナデ調整。

## ⑦ グリット出土遺物 (第123～125図、図版108～111)

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
1	須恵器 杯	表採	①口縁～体部小片 ②(15.6) ③— ④—	砂粒子含む。還元硬質。灰白色。	体部は直線的に開き、口縁部そのまま外向する。	体部内面丁寧なナデ調整。体部外面ロクロナデ。口縁部内外面共にヨコナデ調整。外面自然釉付着。
2	須恵器 杯	表採	①口縁～体部小片 ②(13.2) ③— ④—	細砂粒、黒色・白色鉍物粒子含む。還元硬質。灰白色。	体部直線的に開き、口縁部わずかに外反する。	体部内外面共にロクロナデ。口縁部内外面共にヨコナデ調整。体部内外面にロクロ線わずかに残す。内面自然釉付着。
3	須恵器 杯	水路	① $\frac{1}{8}$ ②(13.8) ③8.5 ④3.7	小石、白色鉍物粒子含む。還元硬質。灰白色。	底部内面は平坦で体部は直線的に開く。口縁部はわずかに膨らみを持ち、やや外反する。	ロクロ右回転後、底部外面～周縁部に回転ヘラ調整。底部内面はロクロナデ。体部内外面共に丁寧なナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。
4	須恵器 杯	3区M-31 第II層	①略完形 ②13.0 ③7.0 ④5.5	砂粒、石英粒、白色鉍物粒子含む。還元軟質。灰黄色～黒褐色。	底部内面は丸みを持つ。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁端部が小さく外反する。	底部右回転糸切り無調整。底部内面～体部内面丁寧なナデ調整。口縁部内外面共に強いヨコナデ調整。体部外面細かいロクロ線明瞭に残す。底部側面に絞り込みがみられる。
5	須恵器 杯	水路	①略完形 ②14.0 ③8.0 ④4.5	長石粒、褐色・白色鉍物粒子含む。還元軟質。外面黒褐色、内面暗灰色。	底部内面は丸みを持ち中央がわずかに突起している。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はそのまま外向する。	底部左回転糸切り無調整。底部～体部内外面共に丁寧なナデ調整。口縁部内外面共にヨコナデ調整。底部側面にわずかに絞り込みがみられる。底部に焼成時のヒビ割れあり。

## 洞III遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
6	須恵器 杯	水路	①% ②14.4 ③7.0 ④4.6	石英粒、褐色～白色 鉱物粒子含む。酸化 硬質。にぶい橙色。	底部内面は平坦で、体部は丸 みを持って立ち上がり、口縁 部はわずかに外反する。	底部左回転糸切り無調整。底 部内面～体部内外面共にナデ 調整。口縁部内外面共にヨコ ナデ調整。底部側面に絞り込 みがみられる。
7	須恵器 杯	4区Q- 09 第II 層	①略完形 ② 11.4 ③7.0 ④3.5	小石、石英粒、白色 鉱物粒子含む。還元 軟質。黒褐色。	底部1.1cmと厚く内面は平坦 で、体部は直線的に開く。口 縁部わずかに外反する。	底部右回転糸切り無調整。底 部内面強いナデ調整。体部内 外面共にナデ調整。口縁部内 外面共にヨコナデ調整。内外 面燻し。
8	須恵器 蓋	表採	①天井部～口 縁部小片 ②— ③— ④—	細砂粒、白色鉱物粒 子含む。還元硬質。 灰色。	天井部から口縁部にかけての 小片である。天井部は平坦で 口縁部は緩やかに広がり、端 部は丸みを持って垂直に下向 する。天井部と口縁部の境と 裾部の2ヶ所に突帯があり、 断面は丸みのある直角三角形 をなす。外面に自然釉付着。	ロクロ成形右回転。表裏面共 にナデ調整。天井部から口縁 裾部の突帯まで一気に引き出 し、中央の突帯と口縁端部は 貼付け後引き出し。
9	須恵器 耳皿	3区I- 20 第III 層	①略完形 ② (6.0×8.4) ③5.6 ④2.2	砂粒、白色鉱物粒子 含む。還元軟質。灰 黄色～にぶい橙色。	土器の周縁端部を欠損。耳部 は底部直上より折り曲げている。 底部には孔はない。	底部左回転糸切り後無調整。 底部内面ナデ調整。体部ナデ 調整。摩滅している。
10	須恵器 小型壺	4区G- 09 第II 層	①底部～胴部 % ②— ③5.2 ④—	砂粒、白色鉱物粒子 含む。還元硬質。暗 灰色。	底部は平底で、1.3cmと厚い。 胴部下半は直線的に立ち上が り、中位に最大径を持ち径9. 8cmで、肩部は丸みを持って内 傾する。口縁部は欠損。胴部 外面わずかに自然釉付着。	左回転のロクロ成形。底部～ 胴部内面ロクロナデ。外面は 不規則なナデ調整。肩部外面 ナデ調整。胴部内面ロクロ線 残す。
11	須恵器 壺	4区E- 11 第II 層	①底部～胴部 小片 ②— ③(12.4) ④—	石英粒、黒色・白色 鉱物粒子含む。還元 硬質。灰色。	底部には「ハ」の字状に開く 高台が付き、端部をわずかに 掴み出している。胴部下端は 直線的に立ち上がる。底部内 外面自然釉付着。	ロクロ成形。底部内外面共に 高台貼付け時に強いヨコナデ 調整。胴部内外面共にロクロ ナデ。
12	須恵器 高台椀	水路	①底部～胴部 小片 ②— ③(7.0) ④—	砂粒、黒色・白色鉱 物粒子含む。還元硬 質。灰白色。	底部内面に「×」の字状の窯 印と思われるヘラ記号があ る。	ロクロ成形。高台貼付け時に ナデ調整。底部内面に棒状工 具で線刻。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
13	須恵器 甕	水路	①胴部小片 ② — ③ — ④ —	小石、石英粒、白色 鉍物粒子含む。還元 やや軟質。灰白色。	甕の胴部片である。側面に 「井」の字状の窯印と思われ るへら記号がある。	胴部内外面共にナデ調整。胴 部に鋭利な工具で縦→横の順 で線刻。
14	須恵器 甕	水路	①口縁～胴部 上半½ ②20. 4 ③ — ④ —	小石、黒色・白色鉍 物粒子含む。還元硬 質。灰色。	胴部は丸みを持ち、頸部は短 かく丸みを持って「く」の字 状に外反し、口縁端部は直立 し上方に強く掴み出している。	胴部外面平行叩き後ナデ調 整。胴部内面押え後ナデ調整。 頸部～口縁部ヨコナデ調整。 胴部外面～口縁内面自然釉付 着。
15	須恵器 大甕	4区表採	①口縁～胴部 小片 ②(20. 8) ③ — ④ —	細砂粒、石英粒子少 し含む。還元やや軟 質。灰黄色。	肩部は大きく張り、最大径を 持つと思われる。頸部は「く」 の字状に大きく外反し、口縁 端部は直立し上下に強く掴み 出している。	胴部外面平行叩き後ナデ調 整。胴部内面押え後ナデ調整。 頸部～口縁部強いヨコナデ調 整。
16	須恵器 甕	表採	①底部～胴部 小片 ② — ③ (13.0) ④ —	砂粒、黒色・白色鉍 物粒子少し含む。還 元硬質。灰白色。	底部は胴部に比して0.6cmと 薄い平底である。胴部は直線 的に大きく開く。内面に自然 釉付着。	底部ケズリ後不規則なナデ調 整。胴部内外面共にロクロナ デ。胴部下端ヨコ方向のケズ リ調整。胴部に成形時の工具 痕あり。
17	須恵器 甕	水路	①口縁～胴部 小片 ②(20. 0) ③ — ④ —	砂粒、黒色・白色鉍 物粒子含む。還元硬 質。灰白色。	胴部上半で張りを持ち、最大 径をなす。頸部は丸みのある 「く」の字状をなし、大きく 外反する。口縁端部は強く上 方に掴み出し、直立した端部 中位に一本の沈線が走る。	胴部内外面共にロクロナデ。 頸部～口縁端部内外面共に強 いヨコナデ調整。胴部外面上 半～内面頸部まで自然釉付 着。胴部内外面ロクロ線明瞭 に残す。
18	須恵器 甕	水路	①口縁～胴部 小片 ②(24. 4) ③ — ④ —	小石、石英粒、黒色・ 白色鉍物粒子含む。 還元硬質。灰色。	肩部に張りを持ち、頸部は短 かく丸みを持って「く」の字 状に外反する。口縁端部は直 立し上下にわずかに掴み出し ている。	胴部ロクロナデ。頸部～口縁 内外面共にヨコナデ調整。
19	須恵器 広口甕	表採	①口縁～胴部 小片 ②(27. 6) ③ — ④ —	砂粒、石英粒、褐色・ 白色鉍物粒子含む。 還元軟質。外面灰白 色、内面にふい橙色。	胴部やや張りを持ち、頸部は 短かく丸みを持って「く」の 字状に外反し、口縁端部は直 立し上下に強く掴み出してい る。	胴部内外面共にロクロナデ。 頸部～口縁部強いヨコナデ調 整。
20	須恵器 羽釜	3区表採	①口縁～胴部 小片 ②(27. 0) ③ — ④ —	褐色・白色鉍物粒子 少し含む。酸化硬質。 にふい黄橙色。	胴部は直線的で、口縁部はわ ずかに内傾し、端部は平坦で ある。突帯断面は丸みを持つ 三角形をなす。	胴部外面不規則なケズリ調 整。突帯直下から口縁部内外 面共にヨコナデ調整。輪積痕 あり。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
21	須恵器 羽釜	4区表採	①口縁～胴部 小片 ②(20. 4) ③一 ④一	石英粒、黒色・白色 鉱物粒子少し含む。 還元やや軟質。灰白 色。	胴部はやや膨らみを持つ。口 縁部は直立し、端部は平坦で ある。突帯断面は三角形状を なす。	胴部は突帯まで縦上方向へ一 気にヘラケズリ、胴部内面は ナデ調整。口縁部内外面共に ヨコナデ調整。
22	須恵器 脚付羽 釜	表採	①底部小片 ②一 ③一 ④一	砂粒、石英粒、白色 鉱物粒子含む。酸化 硬質。にぶい橙色。	脚を欠いているが、支脚の付 く羽釜の底部片である。底部 外面は斜めで、内面は丸みを 持ち、胴部下端は斜めに立ち 上がる。	底部外面はヨコ方向へのケズ リ調整。胴部外面は下方向へ のケズリ調整。
23	須恵器 脚付羽 釜	3区K- 01 第I 層	①脚のみ 長さ-5.0 端径-3.7	砂粒、石英粒、白色 鉱物粒子含む。還元 やや軟質。黒褐色。	脚付羽釜の支脚で、円筒状を なす。厚さ1.2cmの平坦な底部 と接合している。	脚の下半ケズリ後ナデ調整。 上半は底部との接合のため粘 土を貼付けナデ調整。
24	須恵器 脚付羽 釜	4区O- 11 第II 層	①脚のみ% 長さ-5.0 端径-1.8	石英粒、褐色・白色 鉱物粒子含む。酸化 やや軟質。にぶい橙 色。	脚付羽釜の支脚で逆台形をな し、底部との接合部は丸みを 持つ。厚さ1.4cmでやや丸みを おびた底部と接合する。	脚の下半ケズリ調整。上半は 底部との接合のため粘土を貼 付けナデ調整。
25	須恵器 鳥形土 器	水路	鳥頭部の高さ 7.4 頸部径4. 7 接続部高さ 1.7 接続部径 3.2	細砂粒、白色鉱物粒 子含む。還元硬質。 灰白色。	鳥の頸部を模した土器で、下 部に接続部が取り付く。大型 の蓋の紐として、作成された ものであろうか？下嘴は先端 部を欠損するが、頸部から鋭 角に屈曲し、直線的に延びる ものと思われる。上嘴は長さ 2.8cm、幅2.5cmと頸部に比し て大きく、猛禽類の様に鋭ど く内湾している。下嘴と上嘴 の間は2.5mmあり、明瞭な隙間 を作っている。上嘴の上部先 端寄りには一対の細長い鼻孔 が表現されている。また、上 嘴と頸部の境は段を付け明確 に区分している。頭部上嘴は、 後頭部まで冠毛状に細長く隆 起している。目は径1.1cmと大 きく、円錐状に突起し、瞳孔 も表現されている。頸部下 端は、鋭角に切り込まれている。 接続部は円筒状をなし、下端 がやや内傾している。	嘴部はケズリ出し後ナデ調 整。鼻孔鋭利な工具で切り込 む。頭部上端は冠毛状に掴み 出しナデ調整。目は竹管状の 工具で押圧。頸部ケズリ後ナ デ調整。接続部は頭部と一体 のもので、頸部下半をケズリ 出し後ナデ調整。全体的に丁 寧な作りで、細部もリアルに 表現している。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
26	須恵器 土製円盤	4区表採	①完形 径— 4.5×4.8 厚 さ—1.1	褐色・白色鉱物粒子 少し含む。還元硬質。 灰色。	土器の底部を利用。周縁部を 打ち欠き、円盤状に成形して いる。用途不明。	左回転糸切り後無調整の底部 の周辺を雑に打ち欠いてい る。

## 2 中・近世

## ① 洞III遺跡出土陶磁器 (第190・193・194・204・209～211図、図版112～114・116・121・122)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
①	磁器 稜花皿 青磁釉	掘立—60 柱穴覆土	胴部片	灰色 軟質 淡緑色	内面に劃花文あり。体部上半が端反りとなる。	龍泉窯系 15・16C
②	磁器 碗 青磁釉	2号溝 覆土	口縁部小片	淡灰色 軟質 くすんだ淡緑色	内外面に施釉。内面に劃花文あり。釉に細貫入あり。	龍泉窯系 13C
③	磁器 碗 青磁釉	2号溝 覆土	体部小片	灰色 並 くすんだ淡緑色	内外面に施釉。内面に劃花文あり。釉に透明感が強い。	龍泉窯系 13C
④	磁器 碗 青磁釉	2号溝 覆土	体部小片	淡灰色 軟質 淡青緑色	内外面に施釉。内面に劃文あり。発色はよい。	龍泉窯系 14C
⑤	磁器 碗 青磁釉	2号溝 表採	底部小片	灰色 軟質 くすんだ淡緑色	高台端～裏を除いて施釉。見込み劃花文あり。酸化気味で高台裏が褐色となる。	龍泉窯系 13C
⑥	磁器 碗 青磁釉	2号溝 覆土	体部小片	淡灰色 硬質 淡褐色	外面の体部下半を除き施釉。内面に劃文、外面に猫掻文があり、いわゆる珠光青磁。	龍泉窯系 13C
⑦	陶器 甕 焼締	2号溝 覆土	口径 (18.6) 底径 (13.4) 器高 34.1	灰色 硬質 自然釉	体部上半に自然釉がかかり、器表面は酸化気味。内面に紐作痕、指の圧痕があり、外面に手等による擦と撫痕あり。	東海地方産 13C後半
⑧	陶器 大甕 焼締	2号溝 覆土	胴部小片	白色鉱物粒多い 並 酸化気味	内面に指の圧痕あり。器表面は酸化気味。	常滑 中世

## 洞III遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
⑨	陶器 壺か 焼締	2号溝 覆土	胴部小片	緻密 硬質 還元気味	内面に自然釉がかかる。外面に削り目あり。 内面の曲率からすれば筋壺のような型態が推定される。	渥美 13・14C
⑩	陶器 大甕 焼締	2号溝 覆土	胴部小片	白色鉱物粒多い 硬質 還元気味	内面に擦痕あり。還元気味。	渥美か 常滑 中世
⑪	陶器 大甕 焼締	2号溝 覆土	胴部小片	細砂微 硬質 酸化気味	内面に紐作り痕あり。外面は酸化気味である。	渥美か 常滑 中世
⑫	陶器 大甕 焼締	2号溝 覆土	胴部小片	細砂微 硬質 酸化気味	内面に紐作り痕あり。外面は酸化気味である。	渥美か 常滑 中世
⑬	磁器 碗 青磁釉	3号溝 覆土	体部小片	淡灰色 軟質 くすんだ緑色	内外面に施釉。内面に劃花文あり。	龍泉窯系 13C
⑭	磁器 碗 青磁釉	5号井戸 覆土	体部小片	淡灰色 軟質 くすんだ緑色	内外面に施釉。内面に劃花文、外面に猫掻文あり、いわゆる珠光青磁である。釉に貫入が生じている。	龍泉窯系 13C
⑮	磁器 稜花皿 青磁釉	5号井戸 覆土	口径 (12.4) 器高 (2.1)	灰色 軟質 くすんだ緑色	内外面に施釉。口縁下面に劃花文あり。全面に大まかな貫入あり。	龍泉窯系 15・16C
⑯	陶器 皿 灰釉	5号井戸 覆土	底部小片	淡灰色 軟質 淡黄緑色	内外面に施釉。高台裏にトチン痕あり。	美濃 16C
⑰	陶器 皿 灰釉、鉄絵	5号井戸 覆土	口縁部小片	淡灰色 硬質 淡緑色、褐色	端折皿の体部片。内外に鉄絵あり。端折部に灰釉がかかる。5号井戸の年代傍証資料。	美濃・瀬戸 17C初頭
⑱	磁器 皿 透明釉	5号井戸 覆土	体部下位片	白色 硬質 青味がかかる	内外面に施釉。釉調は気泡が少なく透明感が強い。5号井戸年代傍証資料。	伊万里 17C
⑲	陶器 碗 長石釉	18号土坑 覆土	口縁部小片	淡灰色 硬質 淡褐色	内外面施釉。細貫入あり。年代傍証資料。	唐津 17C

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
⑳	陶器 皿 長石釉鉄絵	18号土坑 覆土	口径 (12.0) 高台径 (6.6) 器高 2.4	黄灰色 軟質 淡灰色、褐色	内外面施釉。見込み部に鉄絵あり。年代決定傍証資料。	美濃 17C前半
㉑	陶器 皿 灰釉	18号土坑 覆土	口縁部小片	灰色 軟質 淡黄緑色	内外面施釉。年代傍証資料。	美濃、瀬戸 17C前半
㉒	陶器 皿 長石釉	40号土坑 覆土	口縁部小片	灰色 軟質 淡灰色	内外面に施釉。年代傍証資料。	美濃 17C前半
㉓	陶器 皿 長石釉	40号土坑 覆土	口径 (11.6) 高台径 (7.4) 器高 2.1	灰色 軟質 淡灰色	内外面施釉。年代傍証資料。	美濃 17C前半
㉔	磁器 碗 青磁釉	4区J-11	口縁部小片	灰色 並 淡い青緑色	内外面に施釉。釉掛けは厚い。外面に鎗手蓮弁の劃花文あり。発色はよい。	龍泉窯系 13C
㉕	磁器 碗 青磁釉	表採	口縁部小片	灰色 並 くすんだ青緑色	口縁部を外反させる。内外面に施釉。わずかながら貫入が生じる。	龍泉窯系 14C
㉖	磁器 碗 青磁釉	4区G-07	口縁部小片	灰色 硬質 淡いオリーブ色	内外面施釉。口縁部外面下に折返し口縁状のきざみを施す。内面に劃花文あり。	龍泉窯系 13C
㉗	磁器 碗 青磁釉	表採	口縁部小片	灰色 並 淡いオリーブ色	透明感の強い青磁釉を内外に施す。内面に劃文あり。口縁部は紫口状を呈する。	龍泉窯系 13C
㉘	磁器 碗 青磁釉	1号住居 覆土	口縁部小片	灰色 並 くすんだオリーブ	内外面施釉。	龍泉窯系 13C
㉙	磁器 碗 青磁釉	1号住居 覆土	口縁部小片	淡灰色 軟質 淡緑色	外面に鎗手蓮弁あり。内外面は厚く施釉され貫入が入る。発色はすこぶるよい。	龍泉窯系 14C
㉚	磁器 碗 青磁釉	1号住居 覆土	口縁部小片	淡灰色 並 くすんだオリーブ	内外面に施釉。釉は厚く発色は白磁に近い。	龍泉窯系 13C

## 洞III遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
③①	磁器 碗 青磁釉	3区U- 26	口縁部小片	灰色 軟質 くすんだオリーブ	内外面施釉。細かな貫入あり。	龍泉窯系 13C
③②	磁器 碗 青磁釉	4区O- 20	口縁部小片	灰色 軟質 くすんだオリーブ	内外面施釉。内面に劃花文あり。	龍泉窯系 13C
③③	磁器 碗 青磁	4区Q- 17	体部小片	灰色 軟質 くすんだオリーブ	内外面に施釉あり。外面に大まかな劃文による蓮弁あり。	龍泉窯系 14C
③④	磁器 碗 青磁釉	4区S- 12	体部小片	灰色 軟質 淡い青緑色	内外面に施釉。外面に鑄手蓮弁の劃花文あり。	龍泉窯系 13C
③⑤	磁器 碗 青磁釉	4区K- 20	体部小片	灰色 軟質 くすんだオリーブ	内外面に施釉。外面に鑄手蓮弁の劃花文あり。貫入あり。	龍泉窯系 13C
③⑥	磁器 碗 青磁釉	3区G- 26	体部小片	灰色 軟質 淡い青緑色	内外面に施釉。内面に劃文あり。	龍泉窯系 13C
③⑦	磁器 碗 青磁釉	4区J- 5	底部～体部下 位小片	灰色 軟質 淡い灰色	外面体部下半から底部を除き施釉。内面に劃文あり。	龍泉窯系 13C
③⑧	磁器 碗 青磁釉	4区I- 05	底部～体部下 位小片	淡灰色 軟質 淡い青緑色	高台端部から底を除き施釉。発色がよい。	龍泉窯系 14C
③⑨	磁器 碗 青磁釉	4区G- 16	底部～体部下 位小片	灰色 軟質 淡い青緑色	高台端部から裏を除き施釉。体部外面に蓮弁の痕跡あり。発色はよい。	龍泉窯系 13C
④⑩	半磁器 碗 青磁釉	表採	底部小片	灰色 軟質 くすんだオリーブ	高台端部～裏を除き施釉。	龍泉窯系 13・14C
④⑪	磁器 小皿 白磁	4区S- 12	口径 (7.0) 底径 (3.0) 器高 1.3	白色 硬質 透明	内面のみ施釉。口縁端部は鋭く削られる。成形は型押、外面始唐草の印文あり。	中国製か伊 万里 16・17C



番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
④②	陶器 皿 長石釉鉄絵	4区P- 15	口径 11.6 高台径 7.6 器高 2.4	淡褐色 並 黒褐色、灰色	高台裏を除き施釉。体部外面に篋削りあり。 内面に鉄絵あり。	美濃 17C前半
④③	陶器 皿 灰釉	4区T- 16	底部小片	淡灰色 軟質 淡黄緑色	見込み中央が蛇の目となり上方が施釉される。 碁笥底で高台端部に重ね焼痕あり。	美濃 16C後半
④④	磁器 皿 染付	3区K- 1	高台径 (4.8) 器高 (1.7)	白色 軟質 淡青色	内面に染付を施す。高台端部を除き淡青乳濁 した施釉。高台端部に砂付着。やや酸化気味。 碁笥底で生掛ける。初期伊万里。	伊万里 17C前半
④⑤	磁器 皿 染付	表採	口縁部小片	白色 硬質 青色	内外面施釉。内外面に唐草文あり。	伊万里 18C後半
④⑥	磁器 皿 青白磁釉	4区L- 20	体部小片	白色 軟質 淡い乳濁青色	染付部分はないが釉調から初期伊万里と考え られる。	伊万里 17C前半
④⑦	磁器 皿 染付	3区S- 24	底部小片	白色 軟質 呉須淡青色	高台端部を除き施釉。内面に呉須による施釉 文あり。高台端部に砂の付着あり。初期伊万 里。	伊万里 17C初頭
④⑧	陶器 皿 灰釉	4区E- 16	口径 (11.2) 高台径 (4.5) 器高 3.0	灰色 並 くすんだオリーブ	体部外面下方～高台を除き施釉。内面に4ヶ 所の目跡あり。	唐津 17C
④⑨	磁器 皿 白磁釉	4区T- 9	口径 (13.6) 高台径 (6.0) 器高 2.5	白色 軟質 白色	高台端部を除き施釉。形態は端折皿。口縁端 部に縄目状のきざみがあり、鉄釉が口鏝とし て施される。	製作地不詳 17C
⑤⑩	磁器 水滴 染付	表採	墨部小片	白色 硬質 呉須青色	型押成形による型物。外面に施釉。上面に染 付と水滴の小孔あり。	伊万里系 年代不詳
⑤⑪	半磁器 乗燭 淡灰褐色	3区K- 1	口径 (7.2) 底径 (4.8) 器高 4.9	灰色 軟質 淡灰褐色	見込み中央に受がある。釉は底面裏及び内面 下方を除き施釉。釉境はやや酸化気味。	製作地不詳 18C
⑤⑫	陶器 卸し板 鉄釉	3区K- 29	卸し面小片	灰色 硬質 茶色	型押による成形で裏面に布目痕あり。裏面に トチン痕あり。表面のみ施釉。表面に刺突に よる卸し目あり。	製作地不詳 18・19C

洞III遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
㉔	陶器 大甕 焼締	4区U-7	胴部小片	灰色 並 酸化気味	内面に擦痕、外面に横撫あり。器表面はやや酸化気味。	渥美 13・14C
㉕	陶器 天目茶碗 鉄釉	24号土坑 覆土	口径 (12.2) 高台径 4.4 器高 6.5	淡灰色 硬質 黒褐色	体部外面を除き内外面に施釉。削り出し高台。	美濃 17・18C

② 掘立柱建物出土遺物 (第190図、図版112)

番号	種類	出土位置	特徴
1	銭貨	67号掘立柱建物	景德元寶。銅製。年代 北宋。景德元年 1044年。
2	銭貨	70号掘立柱建物	寛永通寶。銅製。
3	石白	42号掘立柱建物	安山岩。柱穴の底面に据えられていた。下白で受皿が部分的に破損している。台部は径25.8cm、高さ4.2cmで台形状をなし、底面は上底状となっている。受皿は現状で32cm×25cm厚さ4.4cmで突起が付いている。白部は径19.6cm、高さ0.5cmで、摩滅が著じるしく、ふくみもほとんどない。目の断面は「V」字状をなし、分画は不明。芯棒孔は径2.7cmである。

③ 2号溝出土遺物 (第193～195図、図版113・114)

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
1	須恵器 大甕	2号溝	①口縁部小片 ②(38.8) ③—④—	小石、黒色・白色鈹物粒子含む。還元硬質。灰色。	口縁部大きく外反し、口縁端部は直立し上方に強く掴み出し、端部中位に2本の沈線が走る。	口縁部強いヨコナデ調整。口縁直下に5本1単位のクシ描波状文を3段に施す。内面にロクロ線明瞭に残す。
2	須恵器 長頸壺	2号溝	①頸部小片 ②—③— ④—	砂粒、黒色・白色鈹物粒子少し含む。還元硬質。灰色。	頸部径は10.0cmで、下半は直線的に立ち上がり、上半は外反気味となる。	ロクロ成形。頸部ロクロナデ調整。
3	須恵器 鉢	2号溝	①½ ②34.3 ③—④—	砂粒、石英粒、白色鈹物粒子含む。還元硬質。灰白色。	底部欠損。胴部直線的に大きく開き、口縁端部は外反し、肥厚する。	胴部外面ロクロ成形後下端回転ケズリ調整。胴部内面ロクロ成形後下端ケズリ調整。上半は丁寧なナデ調整。口縁外面直下強いヨコナデを施す。中世の所産の可能性あり。

番号	器種	出土位置	法量 cm	胎土・焼成・色調	器形の特徴	成形・調整の特徴・その他
4	須恵器 甕	2号溝	①小片 ②—③— ④—	密である。黒色鉱物 粒子少し含む。還元 硬質。灰色。	肩部のみ残存で丸みを持って 張り、外面に淡緑色の釉が付 着。二本の沈線が走る。	ロクロ成形後内外面共に丁寧 なヨコナデ調整。
5	須恵器 特殊 小型甕	2号溝	①完形 ② 2.8 ③2.8 ④1.7	細砂粒、白色鉱物粒 子含む。還元やや軟 質。灰褐色。	極めて小型で、壺を押しつぶ した様な特殊な土器である。 底部は器高に比べて大きく平 底である。胴部は「く」の字 に屈曲している。口径部も器 高に比べ底部と同様に大き く、外面は直立し、内面は斜 めに切れ込んでいる。内部は 器高の1/2で止まっており浅 い。	底部右回転系切り無調整。胴 部下端回転ナデ調整。口縁部 内外面共にヨコナデ調整。
6	須恵器 土 錘	2号溝	①完形 長さ 4.5 最大径 2.1 孔径0.4 重さ16g	石英粒、白色鉱物粒 子含む。還元やや軟 質。灰白色。	紡錘形をなし小型のものであ る。	指頭押え成形。端部平坦に切 り落とし、一部に指紋が見ら れる。

④ 2号井戸出土遺物 (第196図、図版115-1)

番号	種類	出土位置	特 徴
1	羽 口	2号井戸 覆 土	土製品。基部一部欠損。酸化焙焼成で胎土には砂粒を多量に含む。多面体をなし、両端部とも平坦である。長さ8.4cm、径10.5cm、孔径1.5cmである。先端部はガラス質状に溶出し発泡している。先端部から1.5cmは側面が2次火熱により還元状態となっており、灰色に変色している。

⑤ 土坑出土遺物 (第205~208図、図版115・117~120)

番号	種類	出土位置	特 徴
1	宝篋印塔	20号土坑 覆 土	安山岩。台座の断片と思われる。高さ14.5cm、推定幅24cmである。正面は幅約2.0cmの輪郭をもって2区をなす。内部は隅丸方形内に内ぐりされていたものと思われる。輪郭内部および上面と側面はきれいに磨かれ、他の面はハツリのままで一部にその痕跡を留めている。内部に鉄錆が付着しており、納入物との関係が推定される。
2	石 臼	40号土坑 覆 土	安山岩。上臼で半分が割れている。径推定27cm、高さ11.6cmである。目は6分角と思われるが乱れており、断面は丸溝状をなす。ふくみは2.6cmである。中心に円錐状をなす芯棒受けがあり、供給口は上端が大きく、下端が小さくなっている。側面には隅丸方形をなすと思われる挽手穴がある。

## 洞III遺跡 遺物観察表

番号	器種	出土位置	特 徴
3	羽口	30号土坑 覆土	土製品。酸化焰焼成で胎土に砂粒、小石を多量に含む。基部欠損。丸みを帯びた四角形をなし、先端部は平坦である。先端部はガラス質状に溶出し発泡しており、鉄滓が部分的に付着している。先端部から1.0cm～2.8cmは側面が2次加熱により還元状態となっており、灰色をなしている。
4	羽口	40号土坑 覆土	土製品。完形。酸化焰焼成で胎土には砂粒を多量に含む。円形をなし、両端部ともやや斜めの面となっている。長さ5.8cm、径9.4cm、孔径1.4cmである。先端部はガラス質状に溶出し発泡している。先端部より1.8cm～1cmは2次加熱により還元状態となっており、灰色に変色している。
5	羽口	40号土坑 覆土	土製品。基部欠損。酸化焰焼成で胎土には砂粒、小石を多量に含む。丸みを帯びた多面体をなし、先端部は平坦である。長さは現状で6.7cm、径0.3cm、孔径1.4cmである。先端部はガラス質状に溶出し発泡し、周縁に鉄滓が多量に付着している。先端部から3.0cmほどは側面が2次加熱により還元状態となっており、灰色に変色している。
6	羽口	40号土坑 覆土	土製品。基部欠損。酸化焰焼成で胎土には砂粒を多量に含む。丸みを帯びた多面体をなし、先端部はやや斜めの面となっている。長さは現状で6.8cm、径7.8cm、孔径1.3cmである。先端部はガラス質状に溶出し発泡している。先端部から2.0cm～1.0cmは側面が2次加熱により還元状態となっており、灰色に変色している。
7	砥石	41号土坑 覆土	砂岩。端部欠損。現状の長さ16.4cm、幅5.3cm、高さ4.2cmの長方形をなしやや糸巻状をなす。4面を使用。4面とも内湾し利手側に片減りしており、断面が歪んだ菱形をなす。
8	石鉢	41号土坑 覆土	安山岩。小片。推定径18.5cm、高さ10.0cmである。底面は平坦で側面丸みを持って直立し、内面も同様である。底面はきれいに磨かれ、側面はハツリ痕がそのまま残り、端部から内面はやや磨かれている。
9	石白	41号土坑	安山岩。下白の小片である。目の断面は丸溝状をなし、分角は不明。芯棒孔の痕跡があり、底面は上底状でハツリ痕が明瞭に残る。
10	石白	46号土坑 覆土	安山岩。下白の破片である。推定径30.2cm、高さ16.0cmである。目は6分角と思われ、断面は丸溝状をなし、ふくみは0.5cmである。台部内面は大きくえぐれ込み、中心に芯棒孔が見られる。
11	石白	46号土坑 覆土	安山岩。小片で上下も不明。摩耗が激しく目も磨り減っている。
12	石鉢	46号土坑 覆土	安山岩。弱の破片である。推定径31.6cm、高さ14.4cmである。内面は丸底状をなし、良く磨かれている。上縁は磨かれており、側面と底部はハツリ痕が残る。
13	不明	46号土坑 覆土	安山岩。小型の石鉢状をなす。径14.2cm×15.3cm、高さ10.8cmである。上面中央が円形で丸底状に挟られており、敲き潰したような打撃痕が見られる。上縁は磨かれ、側面と底部はハツリ痕が残る。側面には幅3.5cm、深さ2.0cmの溝状の切り込みがあり、下方に向かってやや開いている。
14	板碑	46号土坑 覆土	緑泥片岩。現状で長さ24.2cm、幅14.8cm、厚さ2.7cmで、紀銘・年号等が不明であるが板碑の破片と思われる。

番号	器種	出土位置	特	徴
15	銭貨	13号土坑 床面	銅製。聖宋元寶（真）。年代 北宋 建中靖国元年 1098年。	
16	銭貨	18号土坑 覆土	銅製。祥符通寶。年代 北宋 大中祥符2年 1009年。	

## ⑥グリット出土遺物（第212図、図版123）

番号	種類	出土位置	特	徴
1	石鉢	表採	安山岩。台の付いた石鉢の¼ほどの破片である。上縁推定径26.0cm、台部推定22.5cm、高さ13.0cmである。台部は台形状の断面をなし、鉢部は稜を持ってやや丸みを持ちながら立ち上がり、上縁は平坦である。内面底部は平坦で、周壁は丸みを持って広がっている。上縁には片口状の窪みがある。全面が良く磨られている。	
2	小柄	3区Q- 22 I層	真鍮製。長さ9.5cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm。内部に小刀の茎が入っている。表面は石目仕立、裏面は時雨ヤスリ仕立てで左上となっている。接口はロウ付けにより、板金上に「一」状の金を接合。長さに比べ幅が狭く、やや時代が遡ると思われる。無銘。	
3	煙管 (雁首)	4区G- 11 I層	銅製。火皿は径1.0cm、高さ0.7cmで台形状をなす。首部は長さ4.8cm、径0.9cmで直線的である。内部に羅字の木質が残存している。	
4	煙管 (吸口)	3区O- 14 II層	銅製。両端部を欠損する。現状の長さ5.6cm、羅字との接合部径1.0cm、吸口部径0.4cmである。羅字との接合部は直線的で、吸口に向かって緩やかに括れて行く。	
5	銭貨	4区S- 07 I層	銅製。天聖通寶（真）。年代 北宋 天聖元年 1023年。	
6	銭貨	3区V- 22 I層	銅製。熙寧元寶（篆）。年代 北宋 熙寧元年 1068年。	
7	銭貨	表採	銅製。元豐通寧（篆）。年代 北宋 元豐元年 1078年。	
8	銭貨		銅製。永樂通寶。年代 明 永樂六年 1408年。	
9~ 11	銭貨		銅製。寛永通寶。9は表採。10は4区S-07 I層出土。	



## 第IX章 ま と め

### 1 洞III遺跡の掘立柱建物群

#### 1 分 布

検出された掘立柱建物遺構は、調査区東西ではその広がりが続くと考えられ、北方は古城沢、南方の3号溝間に検出された。その分布は、単独の8軒を除いて重複、複合重複、複合連鎖重複の状態であり、台地をL字状に折れて東方に流下する2号溝によって大きく二分される。2号溝の北方部と西方部に22軒、溝との重複3軒、南方部に69軒が分布する。2号溝の北方部は1号溝によって東西に区画され、東方部に15軒、西方部に7軒が存在する。2号溝の南方部は、調査区のほぼ中央を東西に流れる水路(以後水路)で南北に区分され、北方部に18軒、南方部に50軒を数え、総数の72%を占める。水路部分は未調査であるが帯状の空白地域となるであろう。

#### 2 重複と新旧関係

単独の8軒を除いて86軒が掘立柱建物同士重複関係にある。2号溝の北方部と西方部では6軒が単独で検出され、1号溝東方部で単独2軒、2軒の重複1箇所、3軒の複合重複2箇所、5軒の複合連鎖重複があり、西方部では単独4軒、2軒の重複2箇所が存在した。

2号溝の南方部では、水路北方部で単独2軒(11号を含む)、4軒と7軒の複合連鎖重複がある。水路南方部では単独1軒のみで、2軒の重複、3軒・6軒・8軒・11軒・25軒の複合連鎖重複があり、56号建物は14軒と複合重複する。

これらの重複、複合連鎖重複は、長期にわたる地域の繁栄を示す結果で、56号で見られる様に14期の時代が存在した事を示している。こうした時代の推移から生じた建物の重複の新旧関係を導き出すには柱穴の切り合いを明確に把握する事でも解明できる。調査結果より5例の新旧関係を掌握したのみであった。1号溝東方部では、33号→7号、22号→23号である。33号と7号は桁行2間×梁行1間と桁行3間×梁行1間の重複で、7号が6°東へ傾いている。22号と23号は、棟方向東西で桁行2間×梁行1間の22号と南北棟で桁行、梁行1間の23号が重複し、棟方位が90°差である。東西棟と南北棟が90°前後差で重複するものは、33号と34号、28号と29号に見られる。

2号溝南方部では41号→40号→42号、53号→43号、83号→80号の3例で、41号・40号・42号は桁行3間×梁行1間→桁行2間×梁行1間→桁行3間×梁行1間の複合重複で、棟方向は3軒共に東西で棟方位差は僅かに2°である。53号と43号は桁行4間×梁行1間の重複で、棟方位差は僅かに1°である。83号と80号は、棟方向南北で桁行4間×梁行1間の83号と棟方向東西で桁行4間×梁行1間の重複である。

#### 3 棟方向

棟方向を東西と南北に規制すると、東西棟68軒、南北棟26軒である。2号溝の北方、西方、重複部



第213図 洞Ⅲ遺跡掘立柱建物分布図



では東西棟18軒、南北棟8軒を数える。東西棟同士は単独4軒、2軒の重複3箇所、3軒の複合重複2箇所、2号溝コーナー部北方に空白部がある。南北棟同士は重複がなく、2号溝の北方部に散在する。2号溝の南方部では東西棟49軒、南北棟19軒である。水路北方部は東西棟10軒、南北棟3軒で東西棟同士は15号と11号を除いて、2軒の重複と6軒の複合連鎖重複が東西に広がる。水路南方部は東西棟40軒、南北棟15軒を数え、東西棟同士の重複は2軒1箇所、3軒の複合重複1箇所、5軒・6軒・10軒・16軒の複合連鎖重複がある。南北棟同士の重複は単独3軒、2軒の重複1箇所、3軒・7軒の複合連鎖重複があり、東方寄りて南北に広がる。

棟方向	掘立柱建物番号	合計	比率
東西棟	1・2・5・6・7・9・10・11・12・13・15・16・17・18・19・22・24・25・26・27・28・30・31・33・37・38・40・41・42・43・44・45・46・47・48・49・50・51・52・53・54・55・56・57・64・66・67・68・69・70・71・72・73・74・75・77・78・79・80・81・82・85・86・87・93・94・95・97 (柱列 32・39建、1・3・5～12列)	68 軒 (12軒)	68/94 =72% 80/110 =73%
	4・8・14・20・21・23・29・34・35・58・59・60・61・62・63・65・76・83・84・88・89・90・91・92・96・98 (柱列 3・36建、2・4列)	26 軒 (4軒)	26/94 =28% 30/110 =27%
柱列を含めた総建物数110軒中、棟方向が確認できた建物は94軒である。			

第6表 洞III遺跡掘立柱建物の棟方向分類表

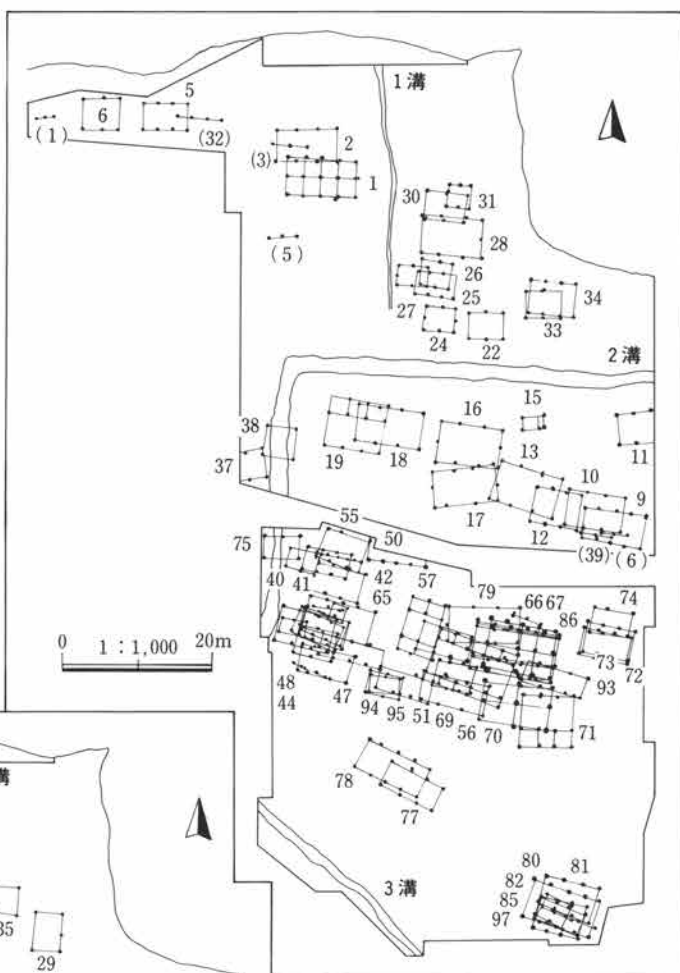
#### 4 棟方位

棟方位の確認できる94軒の建物は、棟方向を東西と南北の規制により大別できるが、それぞれの棟方位により細別が可能である。南北棟I類は、4号のN-12°-W~20号のN-33°-E間に位置し、55°の広がりである。I類は4種に細分されるが主体は8号のN-4°-W~83・84・90・91号のN-18°-E間の22°範囲で、59号と61号間の空白部によってa、b種に区分し、4号をa'種、20号をb'種とする。

東西棟II類は、37号のN-77°-E~52・77号のN-114°-E間に位置し、37°の広がりである。II類は、a種N-77°~90°-E、b種N-91°~99°-E、c種N-100°-E、d種N-106°~114°-Eの4種に細分した。

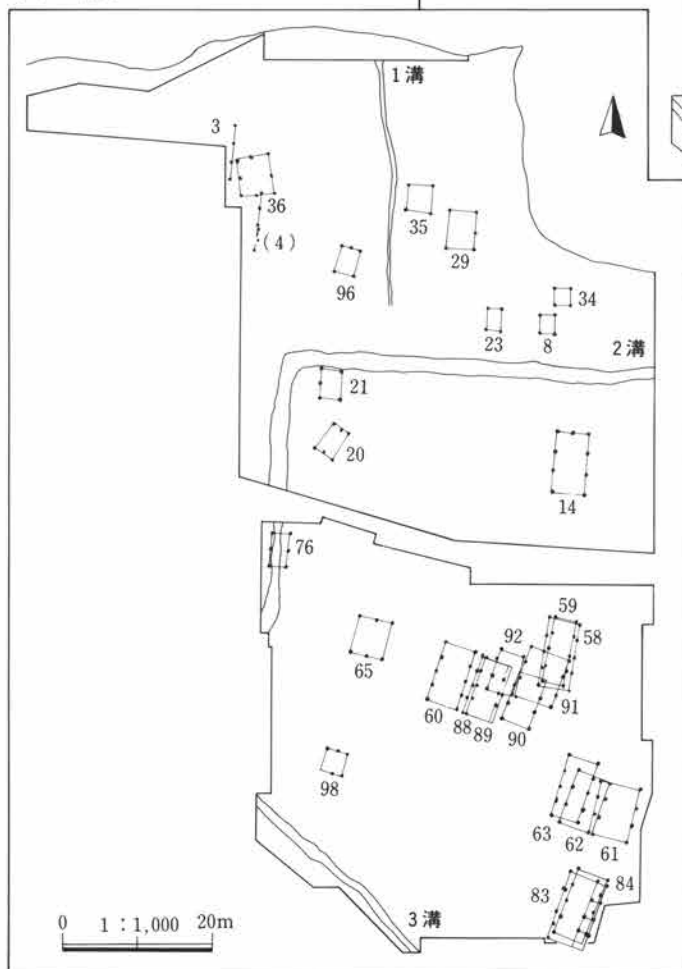
I類26軒は2号溝北側流路と水路部に空間を設けて環状に広がり、調査区南東方向に集中する。a、a'種11軒は2号溝北方部と周辺に位置し、水路南方部では58号・59号の2軒である。b、b'種15軒は96号の1軒を除いて2号溝の南方で、大半が調査区の南東方向寄りに位置する。

II類68軒は全体に散在して広がる。a種11軒は調査区南方部を除いて点在し、b種29軒も調査区南方部にはなく、2号溝北方部と2号溝と重複11軒、水路北方部6軒、水路南方部12軒の分布で、1号溝の東方部では5軒が南北に連なり、水路北方部では3軒、南方部では3軒、5軒の複合連鎖重複が見られる。c種18軒は総てが2号溝の南方に位置し、水路北方部と調査区南東隅の3軒を除いて水路南方部西寄りに集中して東西に広がる。d種10軒は水路南方部のみに位置する。

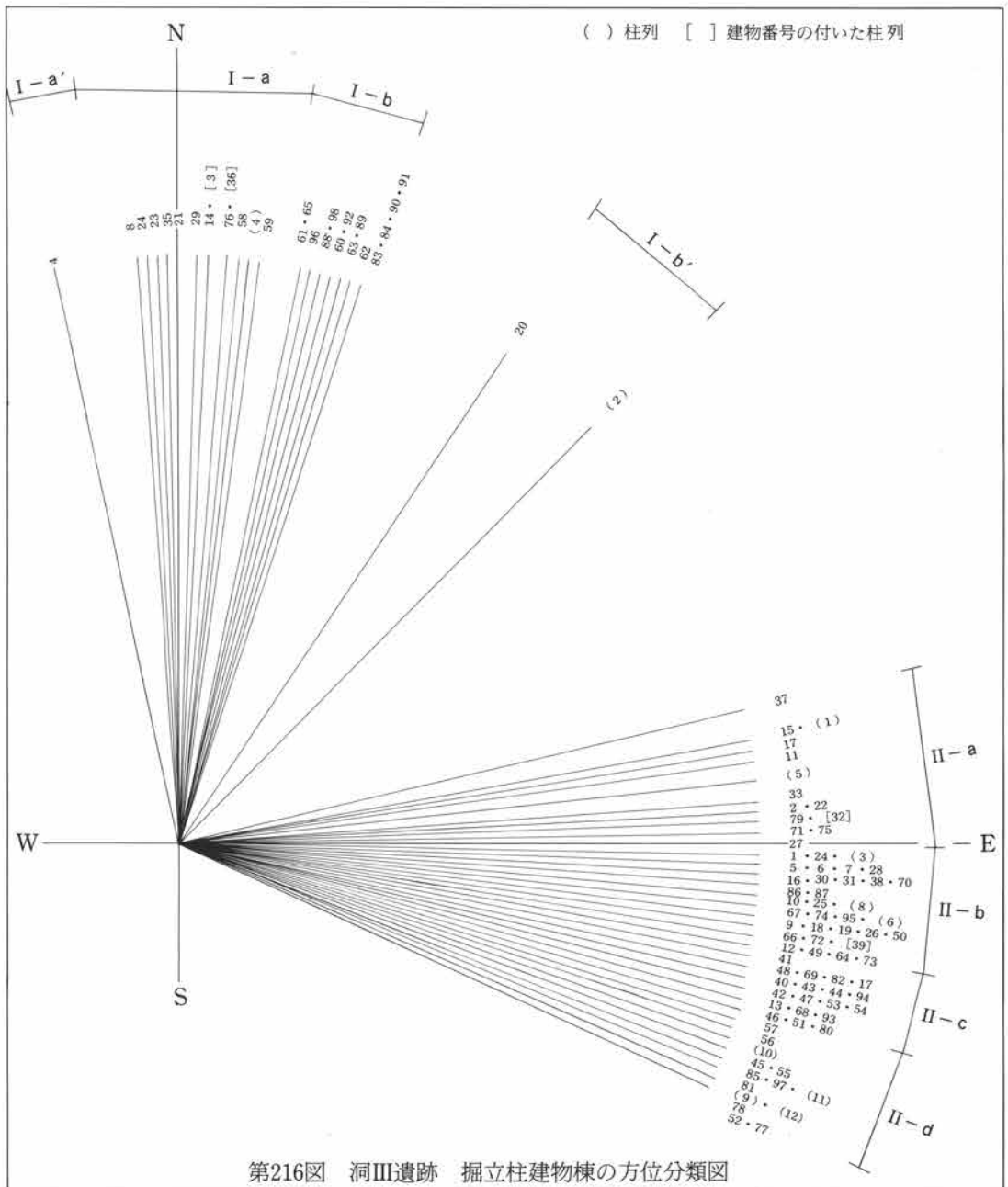


第214図 洞Ⅲ遺跡掘立柱建物  
東西棟

( ) 柱列



第215図 洞Ⅲ遺跡掘立柱建物  
南北棟



棟方向	棟方向細別	掘 立 柱 建 物 番 号	合 計
南北棟 I 類	a 種	8・14・21・23・24・29・35・58・59・76・〔3・36〕・(4)	13 軒
	a' 種	4	1 軒
	b 種	60・61・62・63・65・83・84・88・89・90・91・92・96・98	14 軒
	b' 種	20・(2)	2 軒
東西棟 II 類	a 種	2・11・15・17・22・27・33・37・71・75・79・〔32〕・(1・5)	14 軒
	b 種	1・5・6・7・9・10・12・16・18・19・24・25・26・28・30・31・38・49・50・64・66・67・70・72・73・74・86・87・95・〔39〕・(3・6・8)	33 軒
	c 種	13・40・41・42・43・44・46・47・48・51・53・54・68・69・80・82・93・94・(7)	19 軒
	d 種	45・52・55・56・57・77・78・81・85・97・(9・10・11・12)	14 軒
I-a 類はN-4°-W~N-8°-E、I-a'類はN-12°-W、I-b類はN-12°~18°-E、I-b'類はN-33°~45°-E、 II-a類はN-77°~90°-E、II-b類はN-91°~99°-E、II-c類はN-100°~105°-E、II-d類はN-106°~114°-E。 [ ] は建物番号の付いた柱列。( ) は柱列。合計は建物・柱列を合せた総数。			

第7表 洞III遺跡掘立柱建物の棟方位分類表

### 5 構造と柱間の規模

建物の桁行と梁行の規模によって、9通り(A~I)に分類され、東柱を持つ総柱の建物、庇を付すものも存在する。

A類 桁行1間×梁行1間の建物

8・15・23・34・35・38・54号の7軒で、東西棟3軒、南北棟5軒で、15号が東庇、54号が南庇を付すのか、建改なのか？

B類 桁行1間×梁行2間の建物

65・96・98号の3軒で、総てが南北棟である。

C類 桁行2間×梁行1間の建物

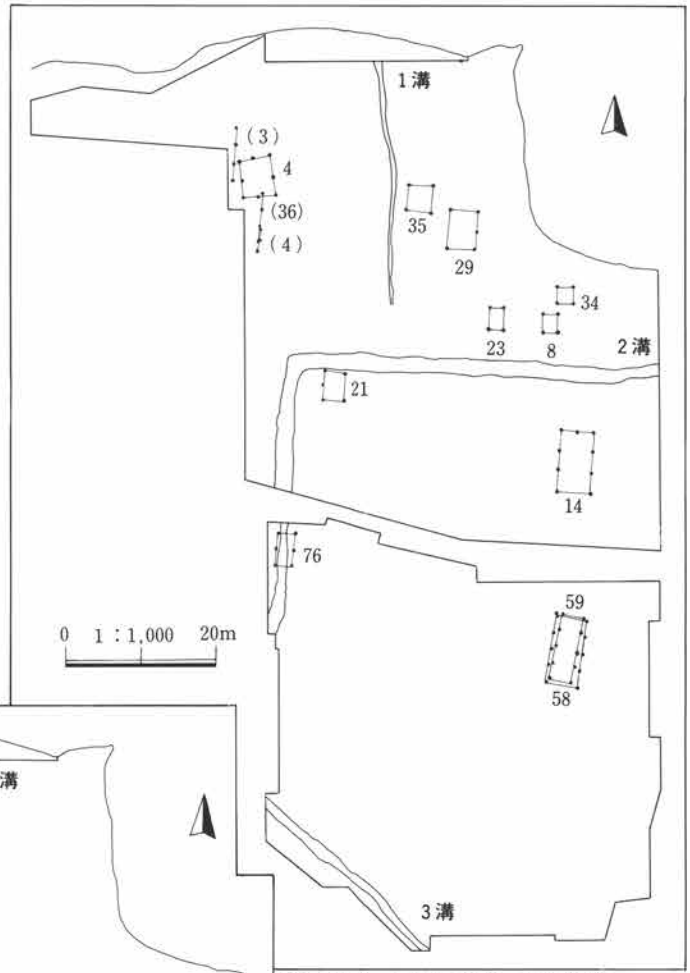
6・21・22・26・30・31・33・40・48・49・57・75・76・94・95・97号の16軒で、東西棟14軒、南北棟2軒で、57号が南北両庇を付す。

D類 桁行2間×梁行2間の建物

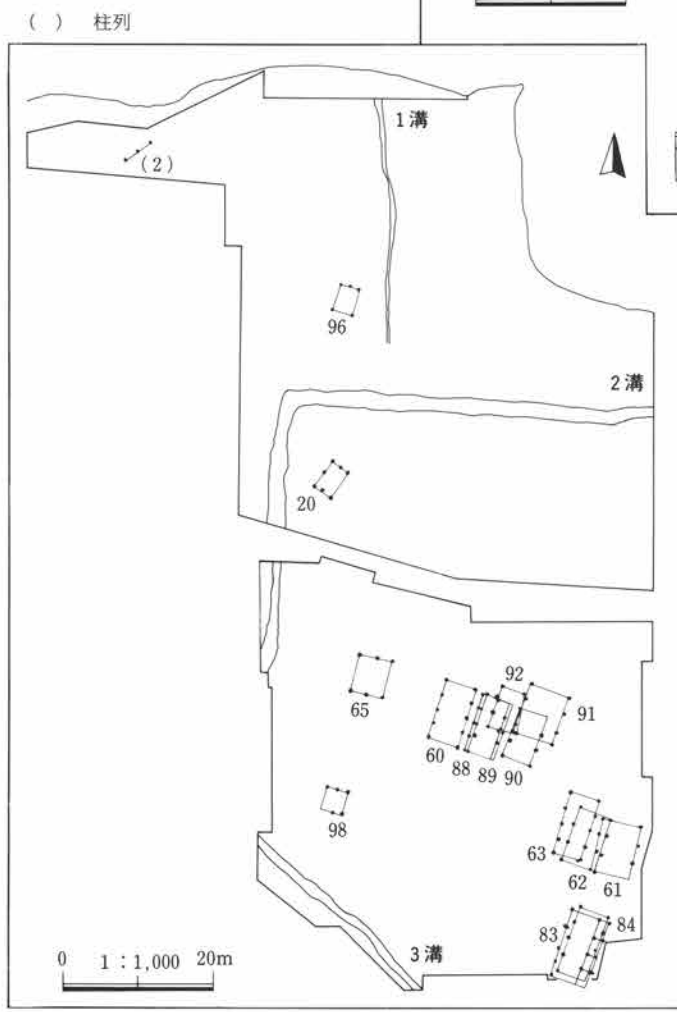
4・20・24・27・29・70号の6軒で、東西棟3軒、南北棟3軒で、4・70号が総柱の建物である。

E類 桁行3間×梁行1間の建物

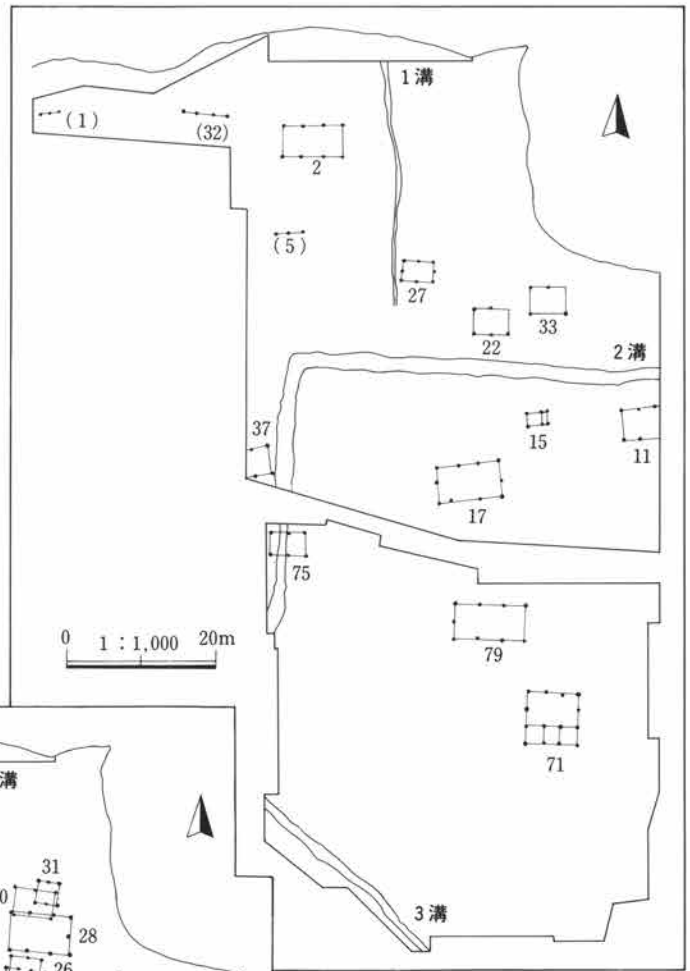
2・5・7・10・12・13・18・19・25・41・42・44・45・46・47・51・52・55・61・62・64・68・69・72・73・74・77・81・82・85・90・91・92号の33軒で、東西棟28軒、南北棟5軒で、19号が北



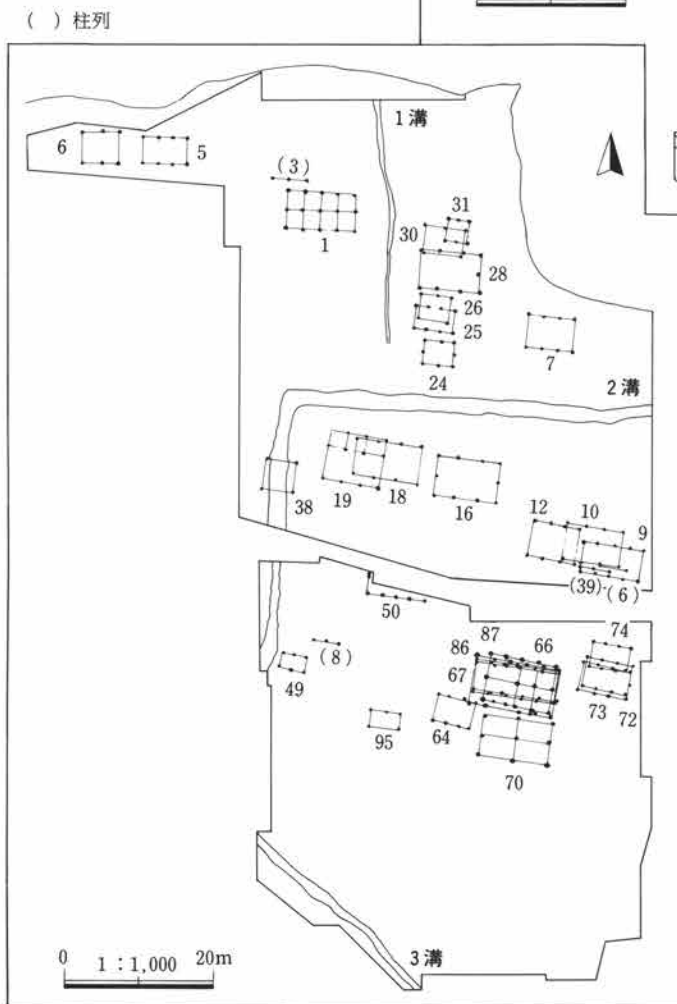
第217図 洞III遺跡掘立柱建物  
棟方位分類 I-a・a'類



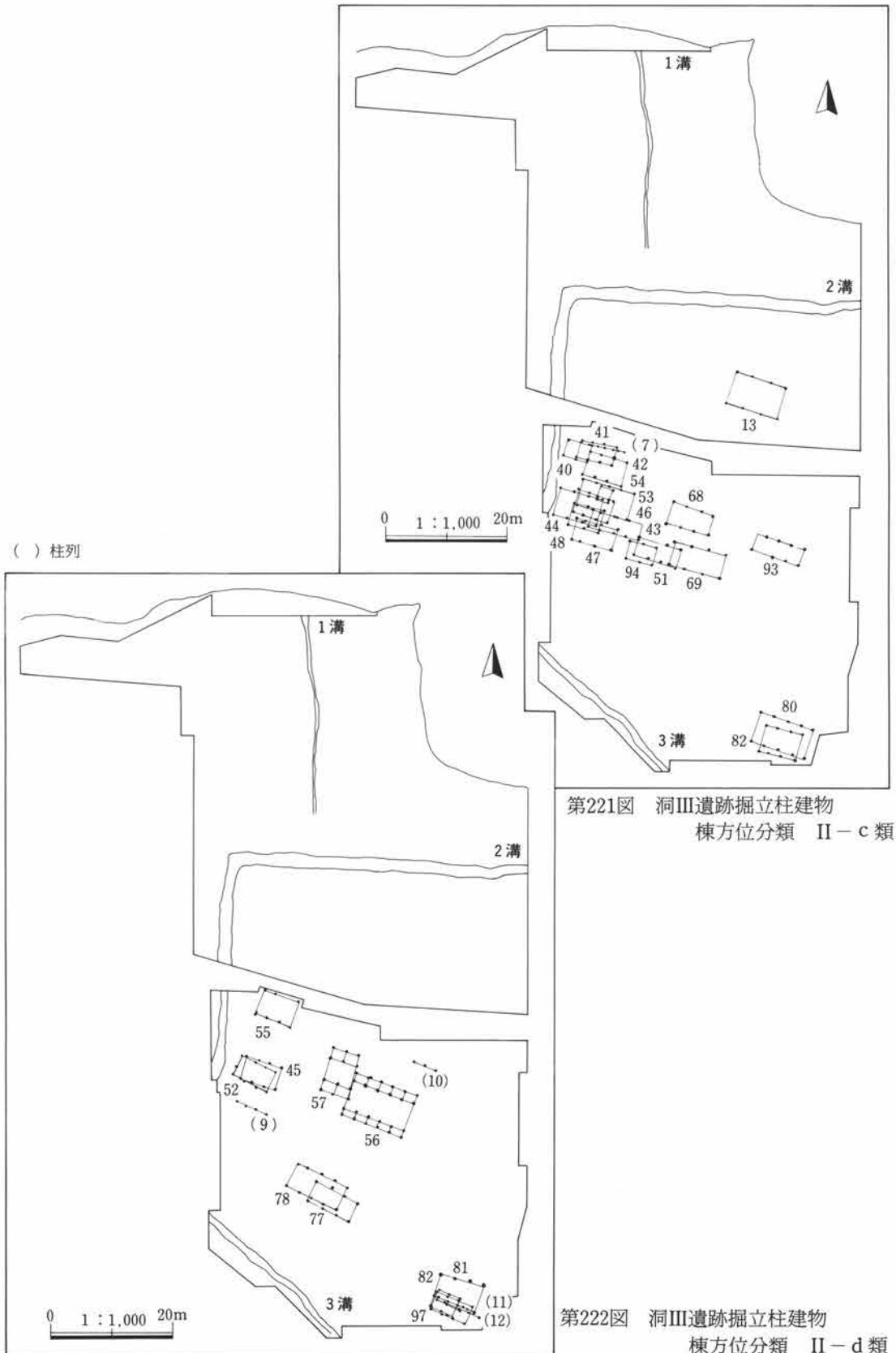
第218図 洞III遺跡掘立柱建物  
棟方位分類 I-b・b'類

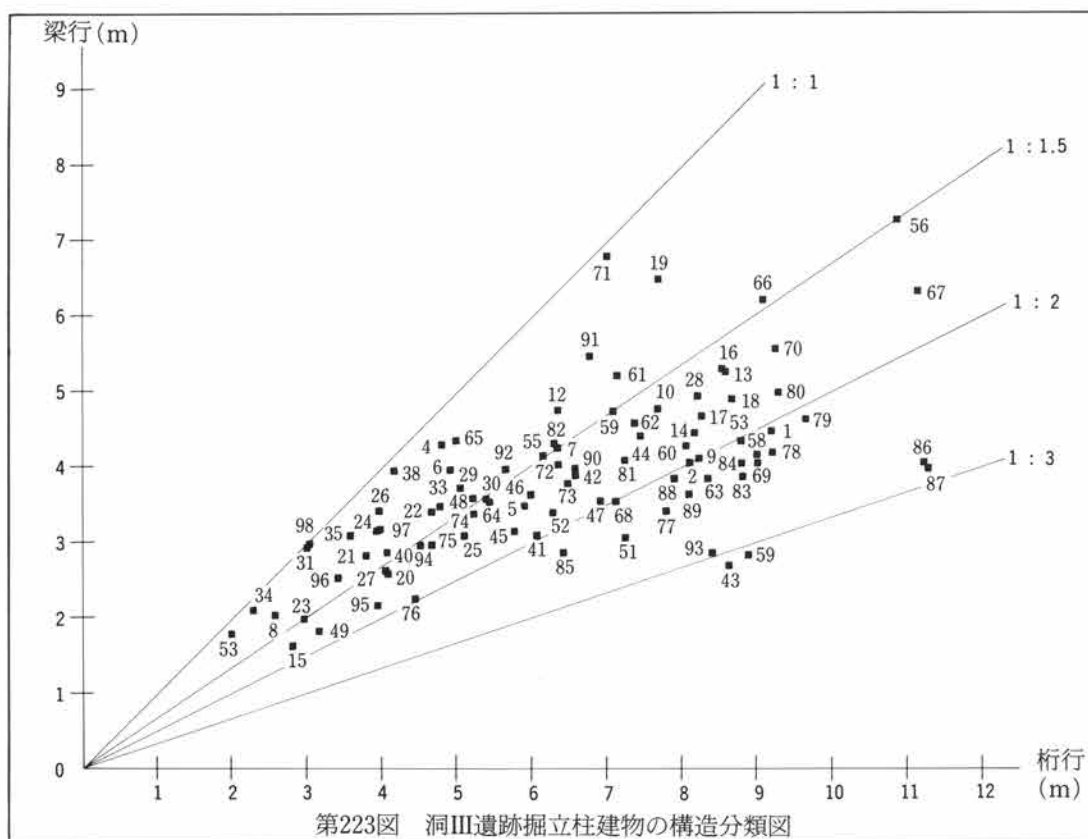


第219図 洞Ⅲ遺跡掘立柱建物  
棟方位分類 II-a類



第220図 洞Ⅲ遺跡掘立柱建物  
棟方位分類 II-b類





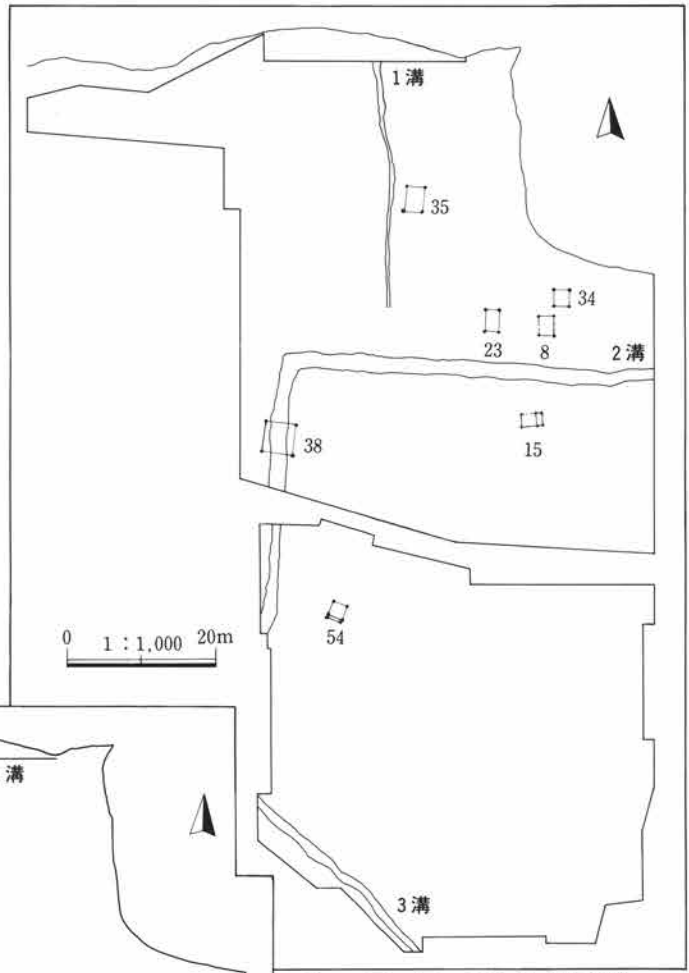
第223図 洞III遺跡掘立柱建物の構造分類図

分類	桁行	梁行	掘立柱建物番号	合計	比率
A類	1間	1間	8・15・23・34・35・38・54	7軒	8%
B類	1間	2間	65・96・98	3軒	3%
C類	2間	1間	6・21・22・26・30・31・33・40・48・49・57・75・76・94・95・97	16軒	17%
D類	2間	2間	4・20・24・27・29・70	6軒	7%
E類	3間	1間	2・5・7・10・12・13・18・19・25・41・42・44・45・46・47・51・52・55・61・62・64・68・69・72・73・74・77・81・82・85・90・91・92	33軒	36%
F類	3間	2間	14・16・17・28・71・79	6軒	7%
G類	4間	1間	9・43・53・58・59・60・63・78・80・83・84・88・89・93	14軒	15%
H類	4間	2間	1・50?・66	3軒	3%
I類	5間	1間	56・67・86・87	4軒	4%

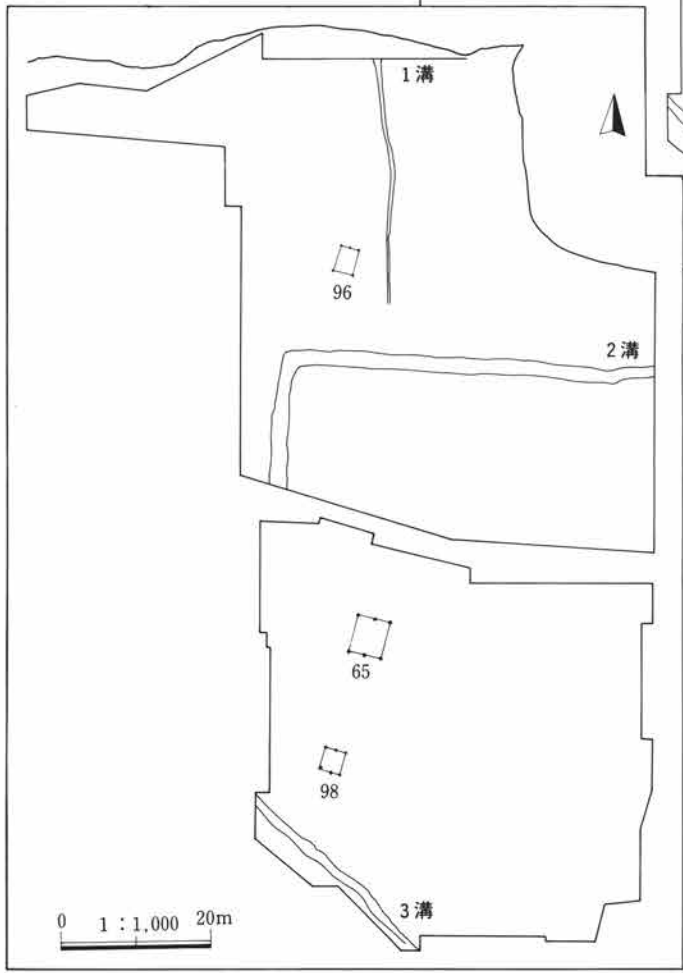
柱列を含めた総建物数110軒中、構造が確認できた建物は92軒である。

第8表 洞III遺跡掘立柱建物の構造分類表

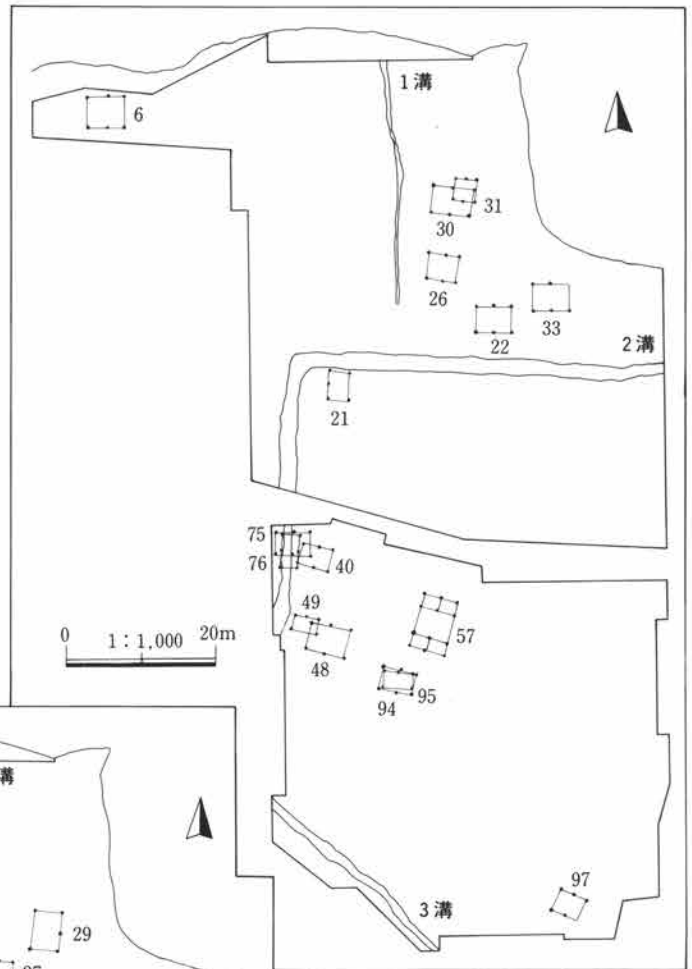




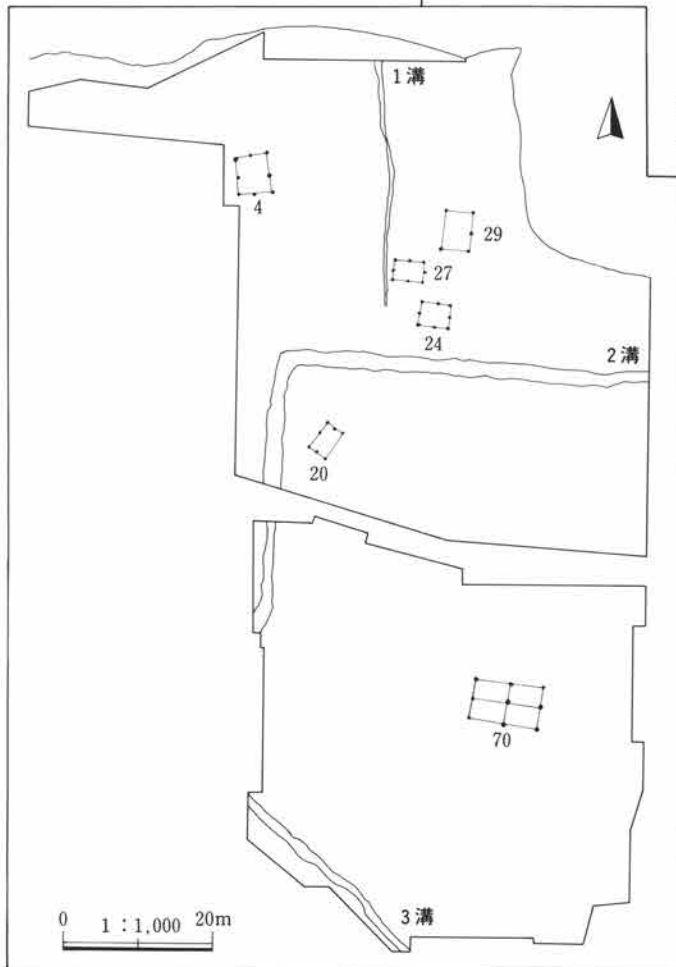
第224図 洞III遺跡掘立柱建物  
構造分類 A類



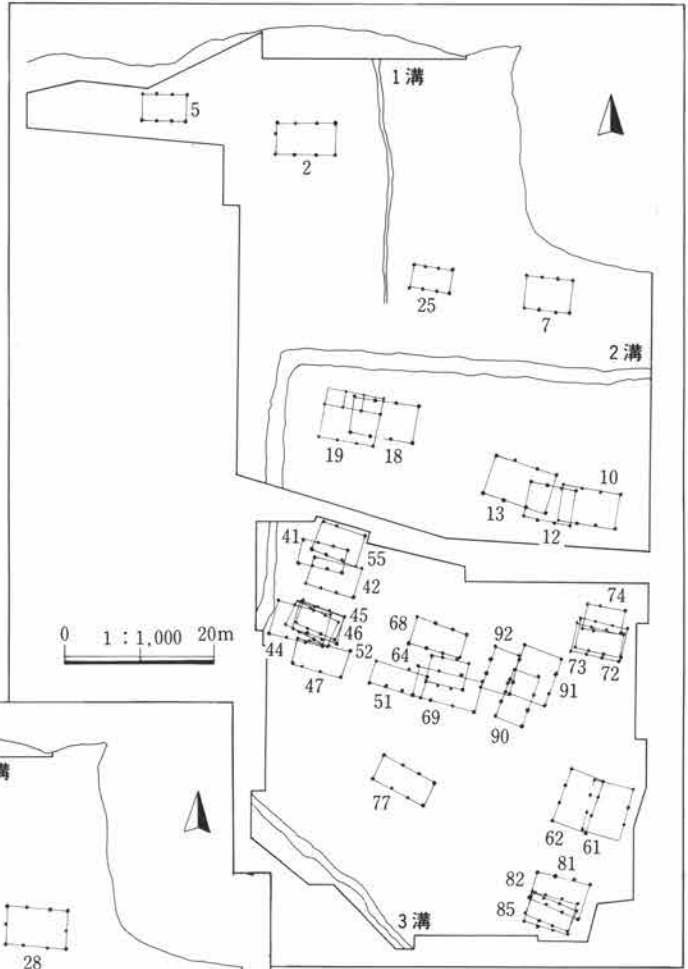
第225図 洞III遺跡掘立柱建物  
構造分類 B類



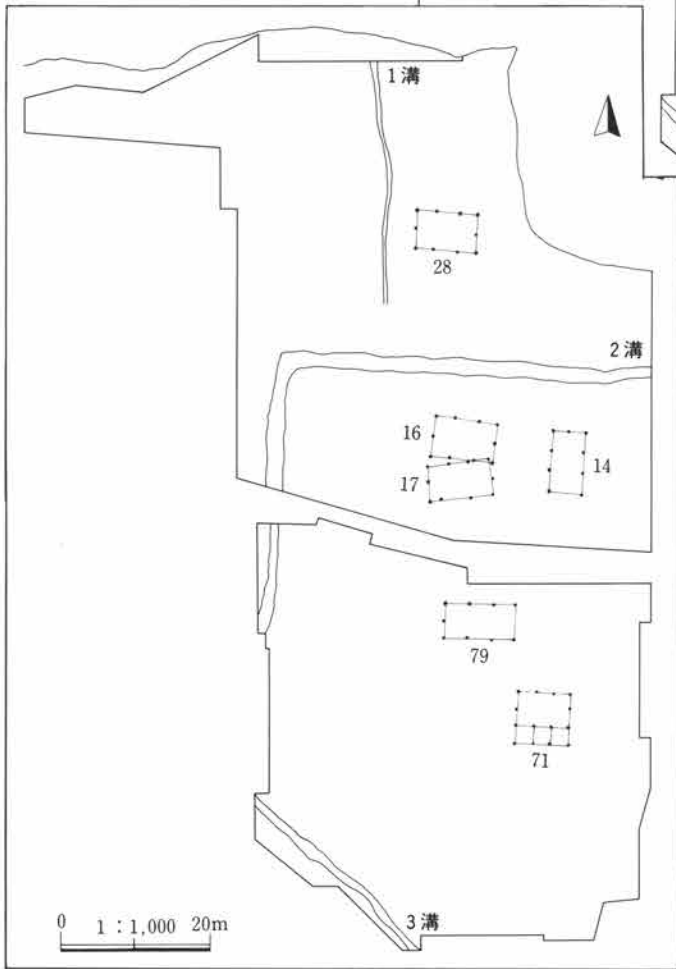
第226図 洞III遺跡掘立柱建物  
構造分類 C類



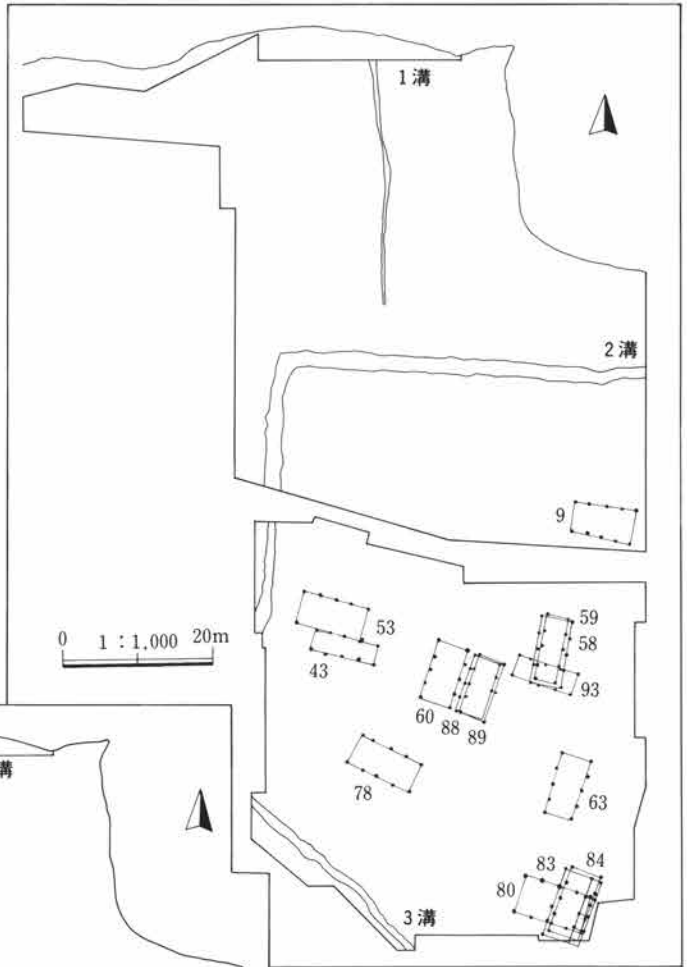
第227図 洞III遺跡掘立柱建物  
構造分類 D類



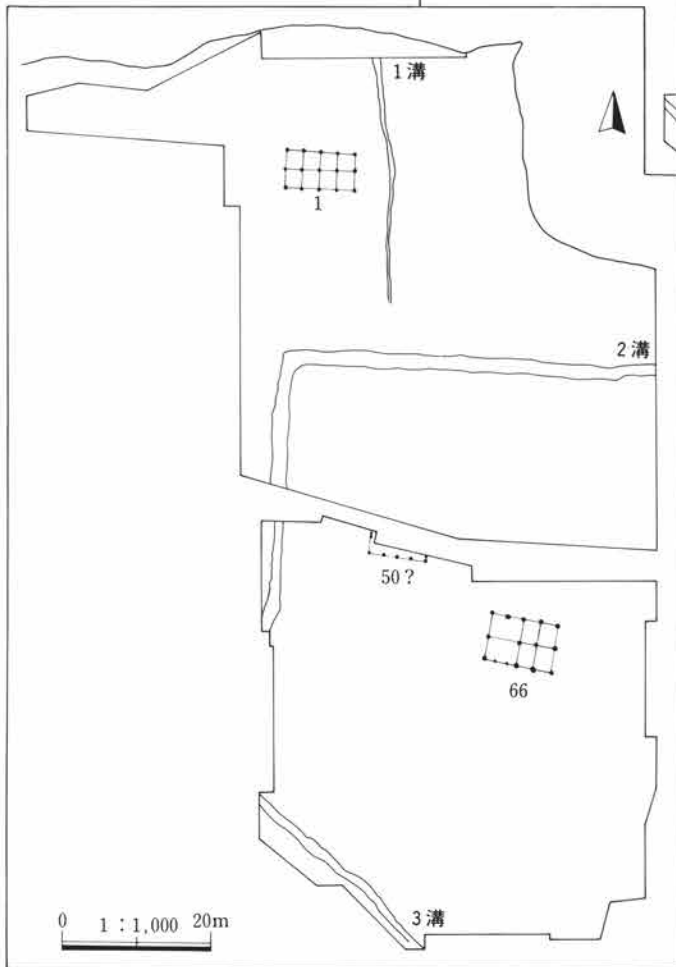
第228図 洞III遺跡掘立柱建物  
構造分類 E類



第229図 洞III遺跡掘立柱建物  
構造分類 F類



第230図 洞Ⅲ遺跡掘立柱建物  
構造分類 G類



第231図 洞Ⅲ遺跡掘立柱建物  
構造分類 H類

底を付す。

F類 桁行3間×梁行2間の建物  
14・16・17・28・71・79号の6軒  
で、東西棟5軒、南北棟1軒で、  
71号が南庇を付す。

G類 桁行4間×梁行1間の建物  
9・43・53・58・59・60・63・78・  
80・83・84・88・89・93号の14軒  
で、東西棟6軒、南北棟8軒で、  
83号が東庇を付す建物である。

H類 桁行4間×梁行2間の建物  
1・50?・66号の3軒で、総てが  
東西棟であり、1号と66号が総柱  
の建物である。

I類 桁行5間×梁行1間の建物  
56・67・86・87号の4軒で、総て  
が東西棟で、56号が南北両庇を付  
す建物である。

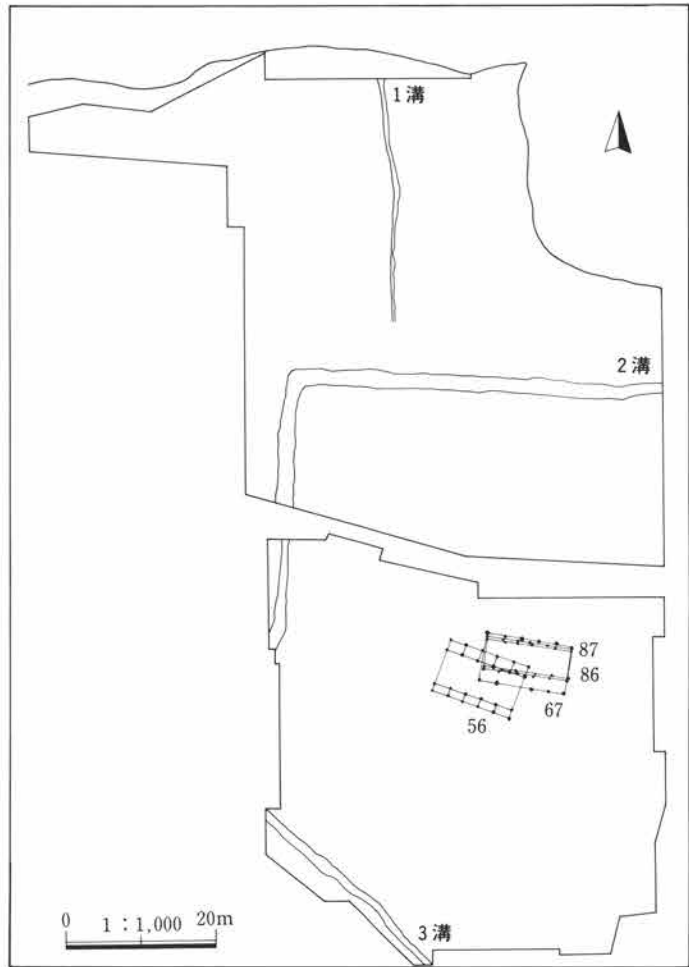
A～I類に分類できるのは92軒  
で、A類は2号溝の北方部で1号溝  
の東方部に3軒、2号溝との重複1  
軒、2号溝南方部で2軒が分布し、  
比較的重複関係も少なく、孤立性が高い場所に存在する。柱間は、桁行1間に対して梁行1間の比率  
が0.6～0.95と短い。

B類は2号溝の北方部で1号溝の西方部に1軒、2号溝の南方部で水路南方部に2軒と散在し、65  
号を除き、単独である。柱間は、桁行1間が梁行1間の2倍以上の長さである。

C類は21・76号の南北棟を除き東西棟で、2号溝の北方部で1号溝の東方部に5軒、西方部に1軒、  
2号溝の南方部に10軒を数える。南北棟2軒は2号溝と重複するものと隣接するものである。全体に  
その分布は環状気味で、2号溝の南方部に所在するものほど重複度が高い。柱間は、桁行1間に対し  
て梁行1間が等倍～2倍間の長さである。

D類は2号溝の北方部で1号溝の東方部に3軒と集中し、西方部に1軒、2号溝の南方部で2軒が  
分布する。70号を除いて重複度は低い。柱間は、桁行1間に対して梁行1間が半分～等倍の長さであ  
る。

E類は全体の35%を占める。その分布は2号溝の北方部で4軒、南方部では29軒で、水路北方部に  
5軒、南方部に24軒が広がる。2号溝の北方部は散点するが、南方部では、重複、連鎖重複が多く見  
られ、集中度も増している。南北棟は2号溝の南方部のみに重複して分布する。柱間は、桁行1間に



第232図 洞III遺跡掘立柱建物 構造分類 I類

対して梁行1間が等倍以上～2倍以上と様々である。

F類は28号を除き2号溝の南方部に分布し、調査区のほぼ中央を通過するMラインより東側に位置し、中核的存在である。柱間は、桁行1間より梁行1間がやや短い。

G類は2号溝の南方部のみに分布し、水路北方部で1軒、南方部で13軒である。東西棟は環状を呈して分布するが、南北棟はF類と似てMラインより東側に分布する。柱間は、桁行1間より梁行1間が、等倍以上～2倍以上と様々である。

H類は1・66号が明確で、1号は2号溝の北方部で1号溝の西方部に位置し、周辺の核的存在であろうか。66号は2号溝の南方中央付近に位置し、特殊な構造を持つ中心的存在であろう。柱間は桁行より梁行がやや長い。

I類は、4軒が2号溝の南方部中央付近に位置し、中核的存在である。柱間は、桁行1間より梁行1間が2倍前後と長く、67号は3倍弱と特に長い。

## 6 面積別分類

面積が確定できるものは、総数91軒である。最小面積が54号の4.3㎡～最大面積は56号の79㎡間に集約される。

5㎡単位での分類では、0～25㎡（I・II類）まで順次軒数が増加して21㎡～25㎡間でピークの14軒に達し、26㎡～45㎡（III類）間は8軒～10軒で推移し、46㎡～80㎡（IV類）では徐々に減じて51㎡～80㎡では散在する。I類は23軒を数え、東西の棟方向14軒は散在して分布するが25・26・27号と40・75・76号と三軒が複合重複する個所もある。南北棟9軒は散点し、桁行が1間の建物8軒、2間のもの14軒、3間のもの1軒で、2間のもものが集中し桁行が梁行の等倍～2倍の建物である。

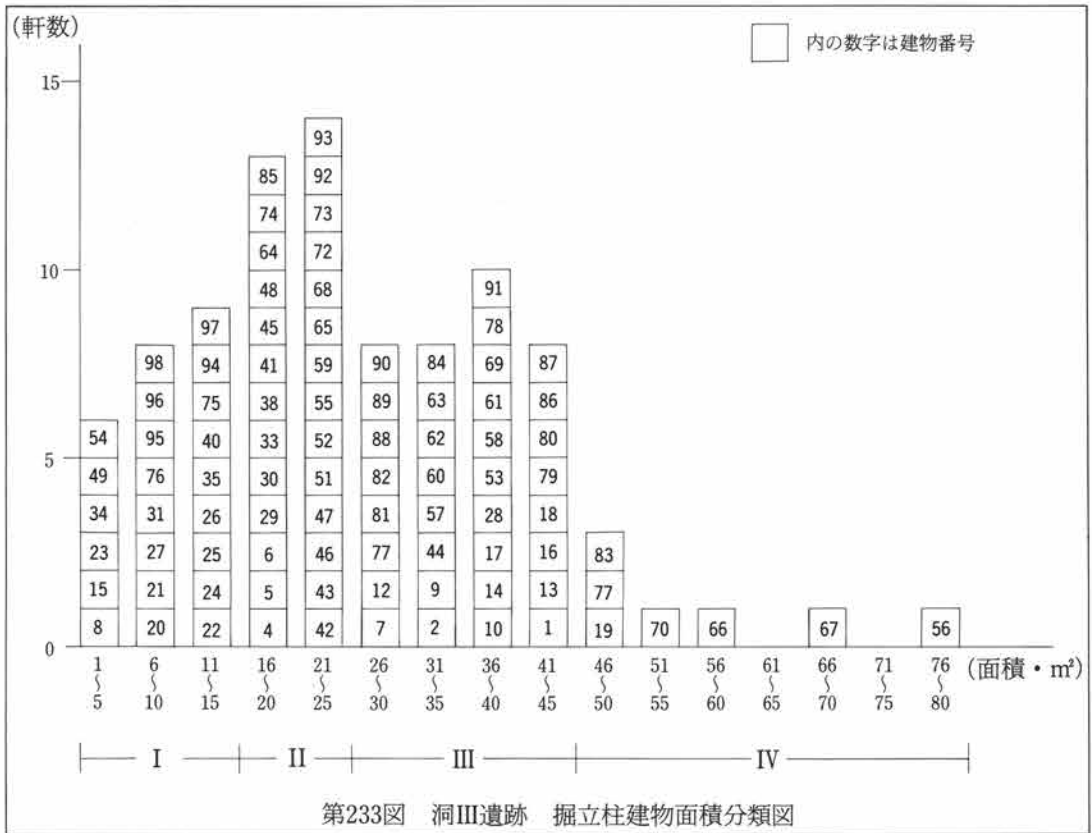
II類は27軒を数え、3区31～4区05内に集中し、2号溝北方部にも点在する。棟方向は22軒が東西、南北は5軒である。桁行が1間の建物2軒、2間のもの6軒、3間のもの14軒、4間のもの5軒で3間のもものが集中し、梁行の等倍～3倍以上の建物と様々である。

III類は34軒を数え、2号溝の北方部では点在するが南方部は重複して集中する。棟方向は22軒が東西で、南北は12軒である。桁行が1間の建物はなく、2間のもの（総柱の建物）が1軒、3間のもものが21軒、4間のもの7軒と増え、新たに5間のもものが2軒加わり、3間のもものが主体を占める。桁行が梁行の1.5～2倍のもものが集中するが、86・87号の様に3倍に近いものもある。

IV類は7軒で、2号溝の南方部に在り、5軒が3区28～4区01付近に集中している。棟方向は83号を除いて東西で、桁行が2間（総柱の建物）のもの1軒、3間のもの2軒、4間のもの2軒、5間のもの2軒である。桁行が梁行の等倍～2倍以上のものである。

## 小 結

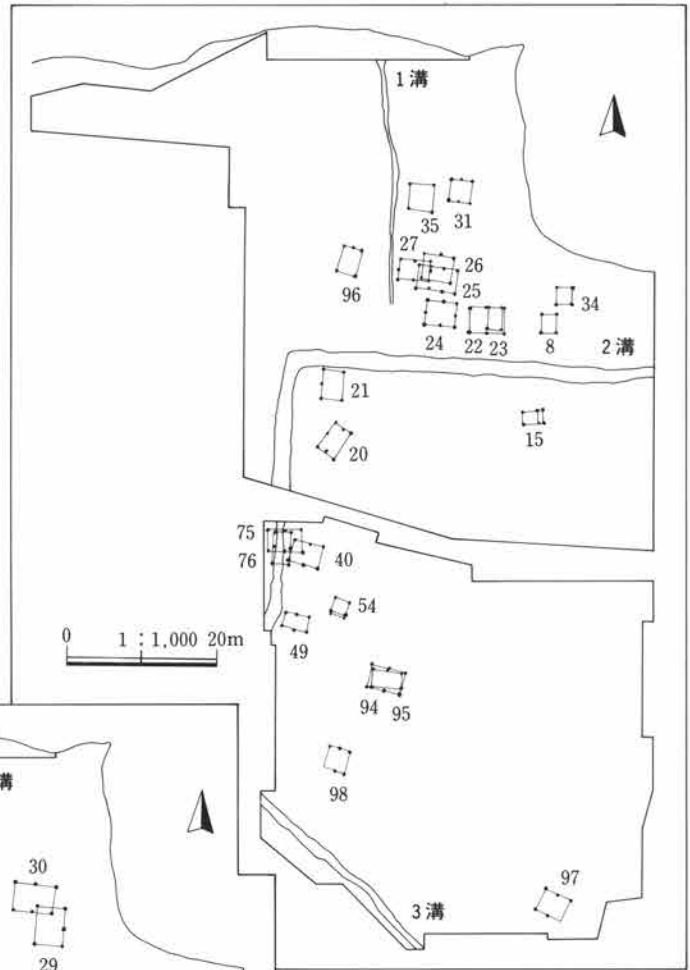
掘立柱建物の分布は、古城沢と南方の埋没谷にほぼ並走する3号溝間にあり、その間を1・2号溝によって区分されるが、中央部を南方に流下する水路部分に空白地域が存在する可能性がある。小川城址の調査で<sup>注1</sup>検出された現農道下の道路址が当地区にもつづいていた事を暗示させる。重複と新旧関係では、概報で<sup>注2</sup>須田氏が記す様に中世～近世にかけて相当長期にわたる時期の建築技法が重なり、複



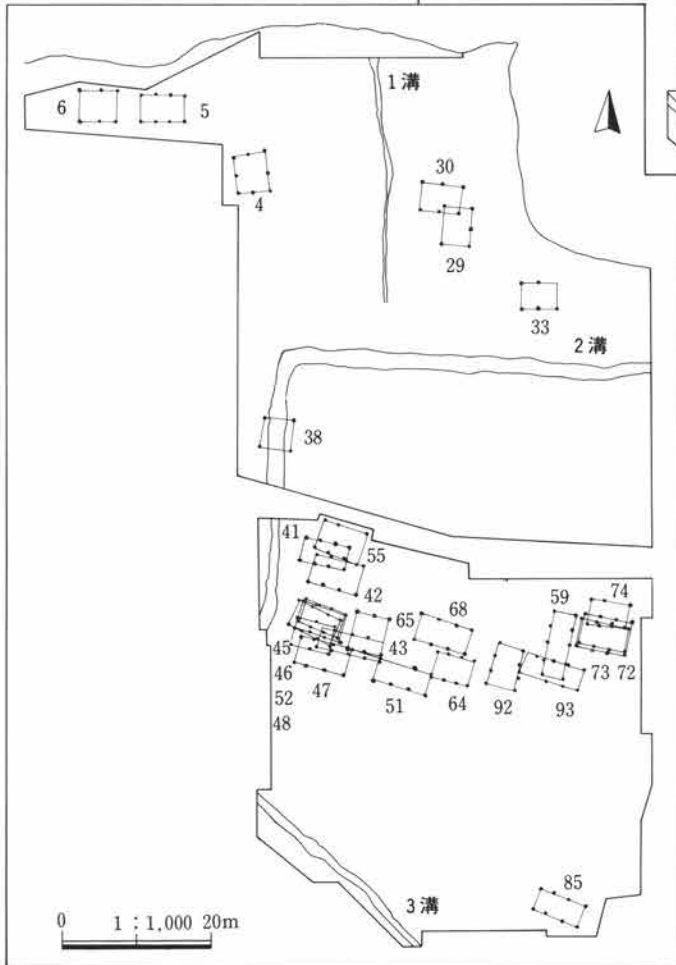
分類	面積	掘立柱建物番号	合計	比率
I	1~15㎡	8・15・20・21・22・23・24・25・26・27・31・34・35・40・49・54・75・76・94・95・96・97・98	23 軒	25%
II	16~25㎡	4・5・6・29・30・33・38・41・42・43・45・46・47・48・51・52・55・59・64・65・68・72・73・74・85・92・93	27 軒	30%
III	26~45㎡	1・2・7・9・10・12・13・14・16・17・18・28・44・53・57・58・60・61・62・63・69・77・78・79・80・81・82・84・86・87・88・89・90・91	34 軒	37%
IV	46~80㎡	19・56・66・67・70・71・83	7 軒	8%

柱列を含めた総建物数110軒中、建物面積が確認できた建物は91軒である。

第9表 洞III遺跡掘立柱建物の面積分類表

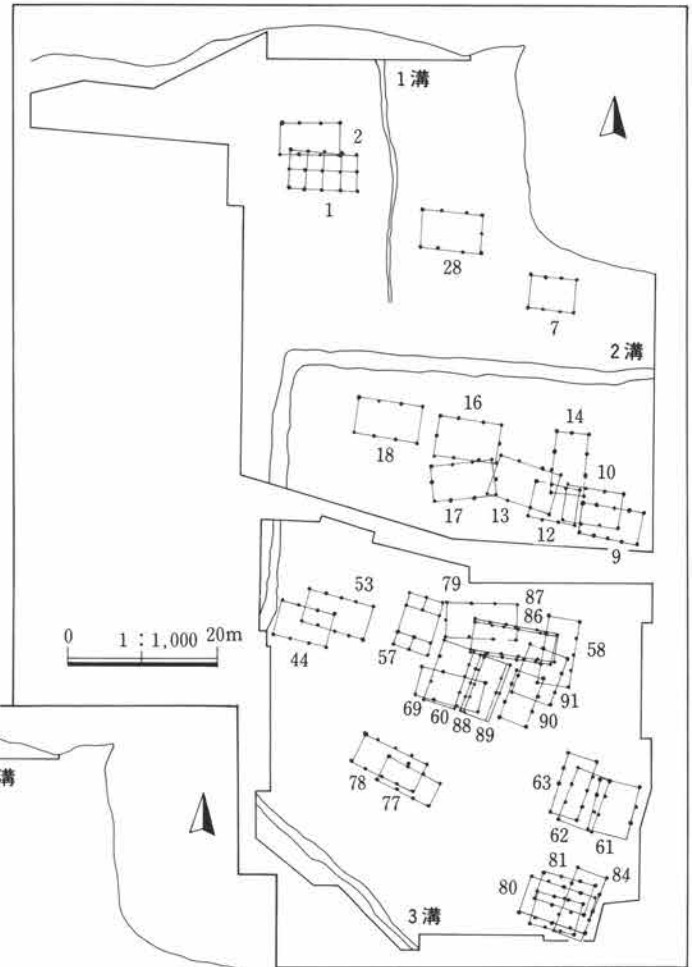


第234図 洞Ⅲ遺跡掘立柱建物  
面積分類 I類



第235図 洞Ⅲ遺跡掘立柱建物  
面積分類 II類





第236図 洞III遺跡掘立柱建物  
面積分類 III類



第237図 洞III遺跡掘立柱建物  
面積分類 IV類

合連鎖重複で多くが検出された。この時間幅に柱穴同士の切り合いより5例の新旧関係を明確にしたのみで、規模、方位等に時代性を見い出す根拠を失う結果となってしまった。棟方向は、東西棟が多く、調査区内のほぼ全域に分布するが、南北棟は東方寄りに多く検出される。棟方位は、8種に細分したが、この細分中には時代性が反映していると考えが明確にしえなかった。構造に於いては梁行が1間、桁行は3間の建物が多く、藪田遺跡<sup>注3</sup>と同様の傾向にあるが、当遺跡では藪田遺跡より軒数も多く、大規模な建物も存在する。

### 小川城址と洞Ⅲ遺跡

沼田氏一族である小川氏の本拠地小川城は、洞Ⅲ遺跡の東方に位置し、国道291号線を挟んで対する。城址は利根川右岸の段丘上に構築され、北に古城沢、南に八幡沢の急峻な谷で挟まれた自然の要害をなす守成堅固の地にある断崖城である。段丘先端部に本丸が位置する後堅固の城構えて、縄張りには、本丸を中心に虎口を防備する形で、二ノ郭、三ノ郭を配置した梯郭式である。

本丸は東西60m、南北25m～30mほどで南辺中央部が三角形に張り出し、最大南北幅40mを測る。北縁部には1m前後の低土居、南辺中央部の張り出し部には櫓台址と推察される高まりが残り、0.7m～1.5mほどの高さである。本丸の東方には2m～3mの段差をもって東西25m、南北30mの小郭を付す。この郭は本丸が直接城外に露呈するのを防ぐ非の役目をする笹郭である。西方に広がる二ノ郭間は上端幅12m～13mを測る空堀りが入り隅状に折りを設け屈曲して廻り、空堀り内の土橋によって本丸と二ノ郭を繋いでいる。土橋の渡橋地点は、本丸の折りより横矢がかかり側射される。土橋の南方に続く空堀りは空堀道の機能も有し、八幡沢へ向う傾斜面に葛折状に搦手道を設けている。

二ノ郭は、本丸の西方と南方を鍵字状に囲む郭で、郭の形状に沿って空堀りが廻り、三ノ郭と区画している。現在は南西部が埋没しているが、その形状を追求できる窪みが残る。当郭の東方郭を南北によぎる国道291号道路改良事業区間内埋蔵文化財発掘調査により、本丸に通じる道路遺構を検出し、現在まで使用されていた農道のほぼ直下に位置する事で、本丸～三ノ郭間を繋ぐ通路が農道下に存在する可能性を示している。この農道は、当遺跡の水路脇に達している。

三ノ郭は、現時点でその存在を明確にできる根拠はないが、国道291号線付近までを城郭内と考えるのが妥当と思われる。

城郭部は台地先端部より国道291号線間に構築されたと考えられるが、当遺跡の西方に聳える味城山も小川城に関係する施設が存在したと推察される。味城山が実城山であれば、根古屋式山城の形態が考えられ、山頂部が詰の城として機能し、当遺跡の山麓地帯に居館施設が存在したのではなかろうか？見城山であれば、小川城が占地する地理的条件により山崎<sup>注1</sup>氏の越後道と中山筋、沼田筋の要路を見張る見張台の機能を有したと考えられる。また下城氏が指摘する藪田遺跡(藪田東遺跡を含め)の報告で、「小川城の創立・推移に直結1、～小川衆の有力地侍の居宅か屋敷」と想定し、相京氏は同時期と考えられる名胡桃城との類似する選地、築城方法に着眼し、古城沢対岸の台地も防禦用の郭を構築していたと想定している。

以上を総合すると、城郭部を国道291号線までの範囲とし、藪田遺跡、洞Ⅰ～Ⅲ遺跡の間に小川城に係わる同時期の遺構が存在し、古城沢対岸、味城山等にも関連遺構が構築されていたのではないかと

推測される。

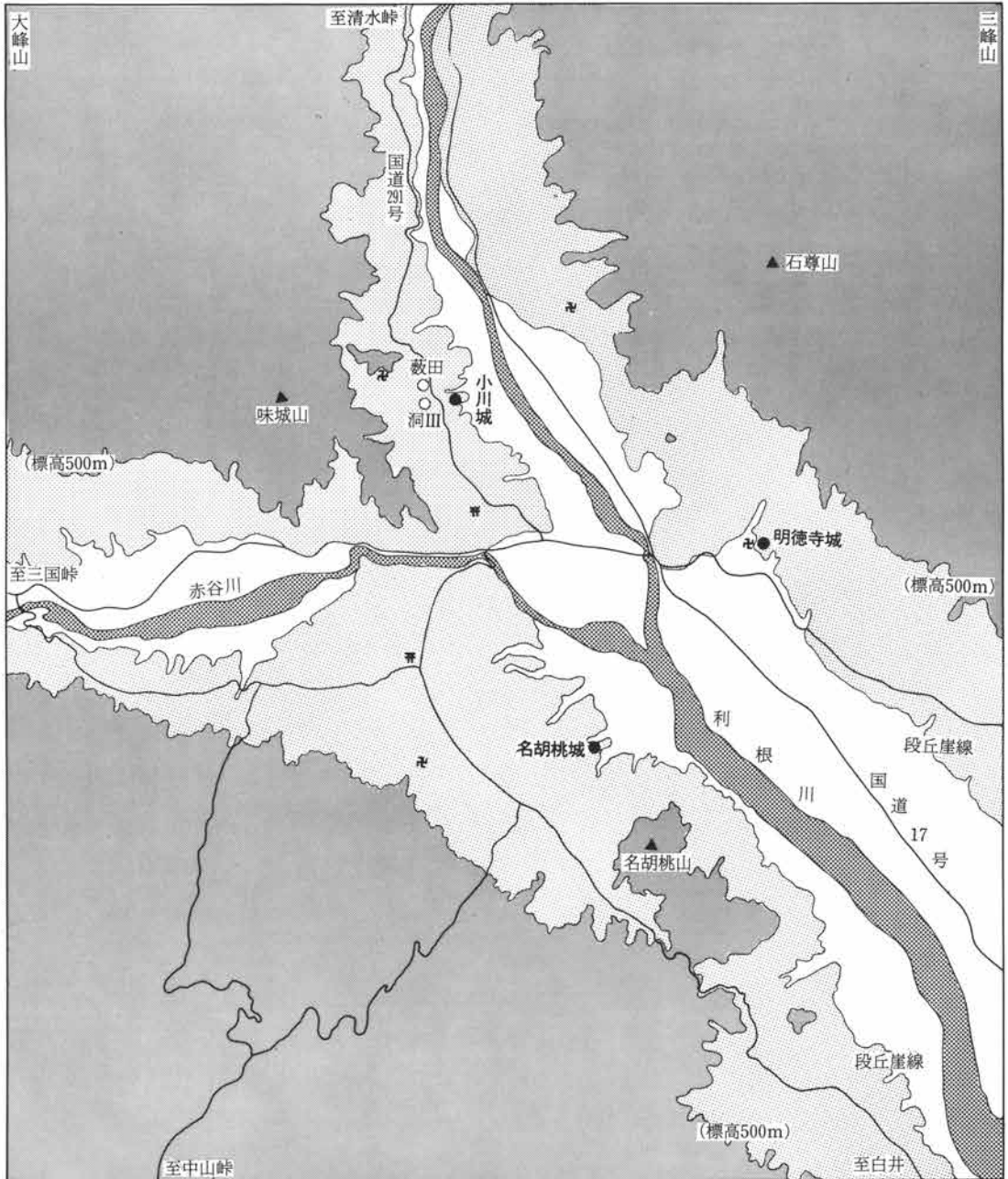
藪田遺跡、洞Ⅰ～Ⅲ遺跡間には中世～近世の麓集落が営まれ、特に洞Ⅲ遺跡は城郭部に直結する重要な台地に位置する為、小川城に係わる有力地侍の居宅か屋敷が構えられていたであろう。

参 考 文 献

注1 中東耕志・相京建史 「小川城址」 1985 (財)群馬埋蔵文化財調査事業団

注2 須田 茂 「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報 VI」 1980 群馬県教育委員会

注3 下城 正・関 晴彦 「上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告 第4集 藪田遺跡」 1985 (財)群馬埋蔵文化財調査事業団



第238図 洞III遺跡周辺の城館分布図 (1:50,000)

## 2 洞I・II・III遺跡出土の中世～近代の陶磁器

### 1 陶・磁器の選択と観察について

#### (1) 陶・磁器の選択について

洞I遺跡の中世～近代陶器の総数は368点で、そのうちドット図個体は99、実測図個体は31であった。洞II遺跡では総数1,791点で、そのうちドット図個体は29、実測図個体は92であった。洞III遺跡では総数553点で、そのうちドット図個体205、実測図個体53であった。これらは調査区内で出土したものを主体にし、排工中からの表採資料も含まれている。その年代幅は鎌倉時代の舶載陶・磁器から近世・近代の長きにわたるものである。

これらの破片をすべて掲載することは整理労力の都合上、実施できず選択を余儀なくされた。そこで中世陶・磁器と考えられる破片はすべてを掲載し、近世遺物は江戸時代前期・中期と考えられる破片のうち稀少性の高い破片についてのみ掲載した。総数は2,970のうち1.6割に当たる176点を抽出し、一括性の高い組合せ、接合率の高い破片も重視した。

#### (2) 観察について

観察に当っては、一率、均当な意識で観察する意図から一覧表を作成した。それが第2-2・①, 3-2・①, 4-2・①表の陶磁器観察一覧である。項目立ては、出土陶・磁器の特徴が現われるよう配慮したつもりである。番号は各遺跡単位で実測図番号と写真番号とが一致し、通番とした。器種は磁器・陶器という焼物種名称と器種・釉種とを併記した。出土位置は主として遺構名称と出土状況を明記したが、近世陶・磁器の場合、一遺構から多く出土した例については最も新しいと思える資料を含めて選択してある。量目の項( )で記入された数値は複元値であり、無い場合は実長である。単位はcmで表した。胎土はその色調を記入した。磁器の場合、胎土の定義は純白でなくてはならないが、磁質の個体の中に灰色から褐色をおびるものまであり、それらについて磁器を焼造する製作意図が認められれば磁器としたが染付陶器の中に磁器に似せた一群があつて、それについては陶器、染付と記入し一区分しなかつた。陶器、染付はこうした一群をさしている。焼成は見た目の焼上りを記述し、釉調は概ねその色調をとらえた。器種、釉調、特徴欄に釉調記述をしたが、その中に砧手、三島手、染付、呉須、飴釉、長石釉、白磁釉など伝統的に呼称されている名称は一般理解のために使用している。備考欄は製作地の推定ないしは作調から見た製作地系統と製作年代を記入した。製作地系統については同定的な意味合いではなく、系統の淵源地をさしている。

### 2 各遺跡の観察結果

#### (1) 洞I遺跡(第42・46・47図)

中国陶磁器は第47図に示した一群がある。青磁は②①・②②の碗類があり、器形から中国元代で龍泉窯系と考えられる。②①の発色は砧手で優れた色調である。明代以降の中国陶・磁片は見られなかつた。また、瀬戸・美濃焼<sup>(4)</sup>などの国産の中世施釉陶器も同様に確認できなかったが僅かながら焼締陶器である常滑焼<sup>(5)</sup>破片が①・②③・②④にある。

江戸時代前期では、美濃・瀬戸焼の一群が大きな割合を占め、⑤の灯火皿、⑬の鎧茶碗、⑲の乗燭

時代	年代	磁器	陶器	軟質陶器	土師質土器	計
中世	13C					
	13C～14C					
	14C	⑳・㉑				2
	14C～15C					
	15C					
	15C～16C					
	16C					
年代不詳	①					1
近世	16C～17C					
	17C	⑩	⑥			2
	17C～18C		㉗・㉘			2
	18C	②・③・④・⑧・⑪・ ⑰・⑱・㉙	⑬・⑰・㉚			11
	18C～19C	⑫・㉕				2
	19C	⑦・⑨		⑮		3
	年代不詳		⑤・㉛・㉜	⑮		4
時代不詳		⑭・㉞・㉟	⑳		4	
実測個体数		16	12	3		31
ドット個体数		54	45			99
総破片数						130

第10表 洞 I 遺跡出土陶磁器集計表

時代	年代	磁器	陶器	軟質陶器	土師質土器	計
中世	13C	④①・④②				2
	13C~14C		②⑨・③⑩・③⑪・③⑫			4
	14C	④③				1
	14C~15C					
	15C					
	15C~16C		⑦⑩・⑦⑪	⑧①		3
	16C		⑤⑤			1
近世	年代不詳	④④・④⑤・④⑦・④⑧		⑧⑩		5
	16C~17C	④⑨・④⑩・④⑪	⑦⑦			4
	17C	①①・④⑤・⑤⑦・⑤⑧・⑥①・⑦③	⑥⑥・⑦⑦・④⑭・⑤⑭・⑤⑮			11
	17C~18C	⑤⑨	③⑨・⑦⑥			3
	18C	⑧⑧・②②・⑥②・⑥③・⑥④・⑥⑤・⑥⑦	⑨⑨・⑩⑩・④⑮・④⑯・④⑰・④⑱・④⑲・⑥⑶・⑥⑷・⑥⑸・⑥⑹			16
	18C~19C	⑥⑩				1
	19C	④④・④⑱		④⑰		3
年代不詳		④⑲・④⑳・④㉑			3	
時代不詳		④⑳	①①・②②・③③・⑤⑤・④⑫・④⑬・④⑭・④⑮・④⑯・④⑰・④⑱・④⑲・④⑳・④㉑・④㉒・④㉓・④㉔・④㉕・④㉖・④㉗・④㉘・④㉙・④㉚・④㉛・④㉜・④㉝・④㉞・④㉟・④㊱・④㊲・④㊳・④㊴・④㊵・④㊶・④㊷・④㊸・④㊹・④㊺・④㊻・④㊼・④㊽・④㊾・④㊿	④⑩・④⑪・④⑫・④⑬・④⑭・④⑮・④⑯・④⑰・④⑱・④⑲・④⑳・④㉑・④㉒・④㉓・④㉔・④㉕・④㉖・④㉗・④㉘・④㉙・④㉚・④㉛・④㉜・④㉝・④㉞・④㉟・④㊱・④㊲・④㊳・④㊴・④㊵・④㊶・④㊷・④㊸・④㊹・④㊺・④㊻・④㊼・④㊽・④㊾・④㊿		35
実測個体数		28	48	16		92
ドット個体数		826	593	228		1,647
総破片数						1,739

第11表 洞II遺跡出土陶磁器集計表

時代	年代	磁器	陶器	軟質陶器	土師質土器	計
中世	13C	②・③・⑤・⑥・⑭・ ⑳・㉔・㉖・㉗・㉙・㉚・	⑦・⑬			19
	13C～14C	④⑩	⑪・⑫・ ⑳・㉔・ ㉖・㉗・ ㉙	⑨・⑬		3
	14C	④・⑤・⑧・ ⑩・⑪				5
	14C～15C					
	15C					
	15C～16C	①・⑮				2
	16C④	⑮・⑳				3
世	年代不詳		⑧・⑩・⑪・⑫			4
近世	16C～17C					
	17C	⑬・⑭・⑮・⑰・⑱・	⑬・⑰・⑱・⑲・⑳・㉑・㉒・ ㉓・㉔・㉕			13
	17C～18C					
	18C	⑮・⑲				2
	18C～19C					
	19C					
	年代不詳		㉖			1
時代不詳	⑳					1
実測個体数		34	19			53
ドット個体数		123	82			205
総破片数						258

第12表 洞III遺跡出土陶磁器集計表

などのほか多くの破片個体が存在する。九州地方を中心とする陶・磁器<sup>(6)</sup>も、少なからず出土している。唐津系は⑳・㉔の鉢類があり、ほか全体量に大きく影響するほどではないが存在し、18世紀初頭前後に集中する。伊万里系磁器は全体的に大きな比重を占め、②・③・④・⑦・⑧・⑨・⑩・⑪・⑫・⑬・⑯・㉔のとおり、碗類が多く、18世紀以降、量的に増加傾向にあるが17世紀の伊万里焼片は微弱であった。

在地製品には軟質陶器があり、⑮・⑯がそれで、近世においては焙烙生産と合わせて製作された香炉・小形甕と考えられ、近代まで用いられた盤状の焙烙と質を同じくする。⑮に叩目状の整形痕が、⑯にカキ目が施文され特徴的である。

出土の組合わせは、10号土坑から小碗・碗・鉢（片口か）など良好な伊万里系磁器の組合わせに伴い軟質陶器の香炉・小形甕が加わる。10号土坑で最も新しい陶・磁器に⑨・⑫の碗があり、19世紀前半頃が考えられ、このことは2点の軟質陶器の製作年代が示唆され、地域にとっては重要な点である。また、灯火皿についても年代観が不明瞭であるが⑤も同様に19世紀前半以前の所産と考えられる。

9号土坑は18世紀代の磁器が主体である。

1号井戸は若干ではあるが18世紀代陶・磁器の組合わせが得られる。

## (2) 洞II遺跡（第79～82・91～95図）

舶載陶・磁器はグリット出土の④①～④⑤がある。④①～④③は青磁で、④①は南宋龍泉窯系と考えられる鐺手蓮弁文碗片である。④②・④③は元代龍泉窯系の碗・大碗である。作調は発色が暗く、秀れない。伊万里系であるのか舶載であるのか判然としないのが青花と白磁である。青花は④②～④⑧の5点で、発色は明染付よりも紫味が強く、光沢もある。伊万里と比較すれば、さらに透明観と呉須は強く、清朝初期の古染付の可能性が高いが、古染付とすれば伝世を除き、発掘調査で得られた資料は極端に少なく、なおの検討を必要としよう。このため観察表中では古染付の焼造地と目される景德鎮窯と伊万里系との両者を併記した。白磁は④⑨～④⑤である。いずれも型押し成形で内面と外面の0線部周辺に白磁釉が施され、④⑨の蛸唐草も型押し施文である。この一群は16・17世紀を主体とする遺構群中から時折り出土すること、施釉が生掛に見えることなどから舶載との考えも捨て難く、伊万里系と招来の可能性を併記した。

国産の中世陶器は、施釉陶器では④⑤に印花文を施した16世紀終来の皿例と、15・16世紀と考えられる④⑩の灰釉梅瓶片の例がある。焼締陶器では渥美焼甕片が④⑨～④⑫に4点見られる。これら中世の一群は多い出土ではないが、近世に至ってその量は急増する。

在地製品に軟質陶器製内耳鍋がある。④⑩・④⑪がそれであり、15・16世紀の所産が考えられ、北毛地域としてはこの段階の概出例が少なく資料例として寄与する例となりうる。

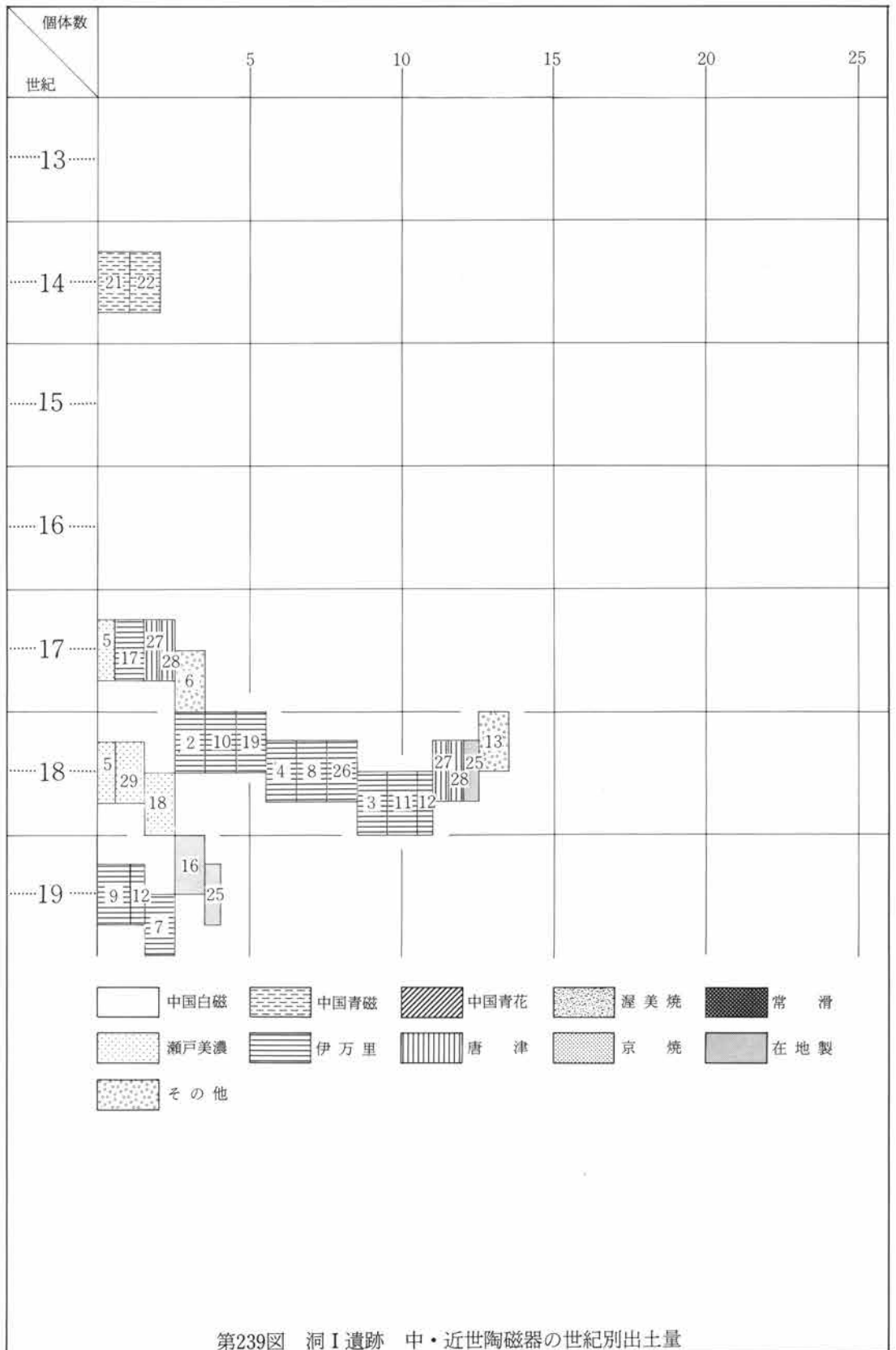
江戸時代前期は、瀬戸・美濃焼では④⑥・④⑦・④⑬・④⑭・④⑮・④⑯・④⑰・④⑱などがある。特に④⑰は、器形を古染付に習った変形向付で使用者の嗜好が窺われる。瀬戸・美濃焼の占める割合は全体の中でも高く前代からの搬路の存続が窺える。

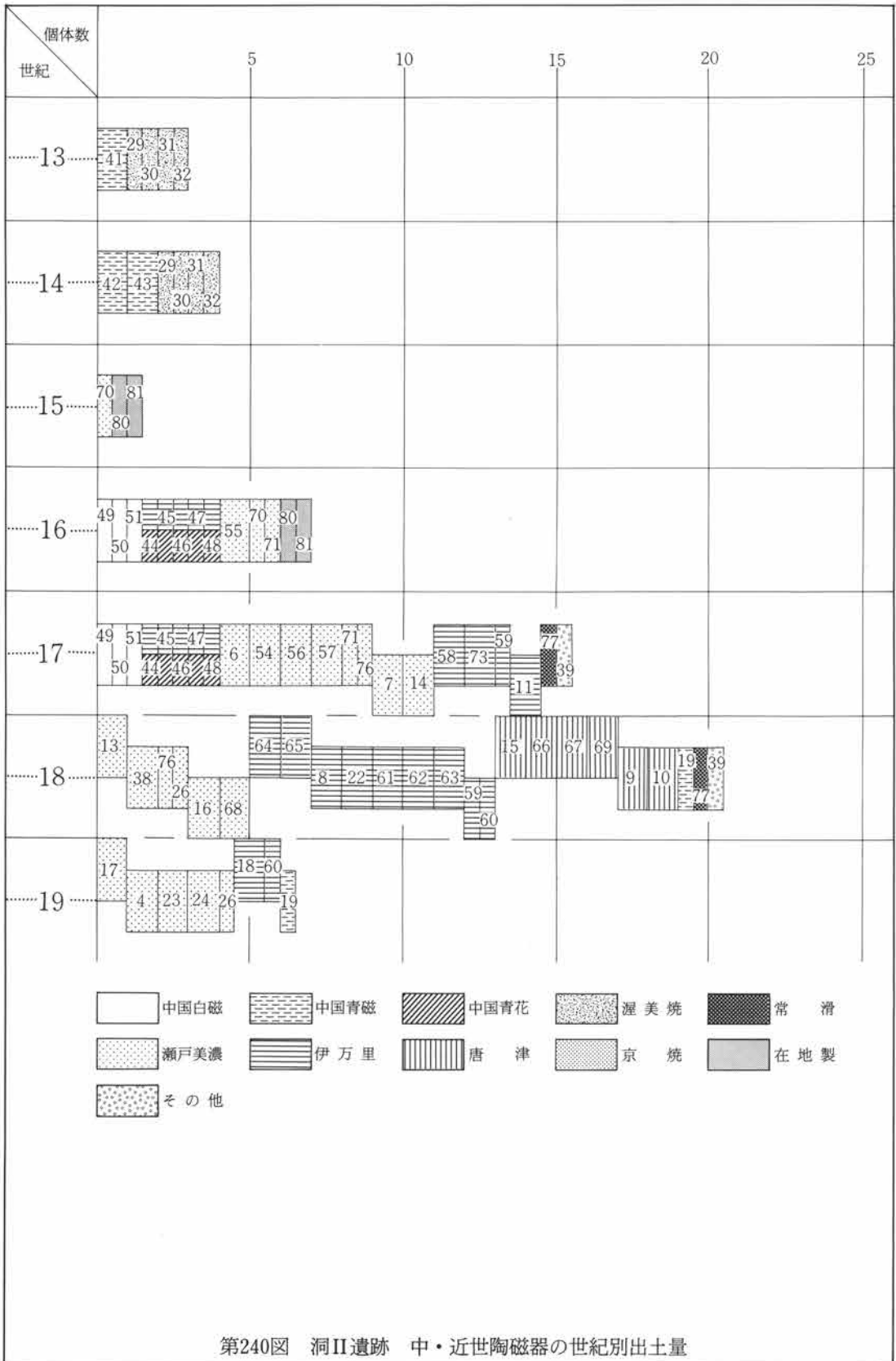
唐津系は④⑨・④⑩に鉢類が見られるが三島手の占める割合はそう多くない。比較的多いのが、陶胎で一部に白化粒掛を行い染付施文した④⑭・④⑮・④⑯・④⑰・④⑱などの陶器で三島手よりはるかに数量は多い。④⑱は大碗で、県下出土のこの種の陶器染付中では最も大器である。

伊万里系では初期伊万里から17世紀後半にかけて④⑳・④㉑・④㉒・④㉓が存在する。④㉓は鶴首の徳利で、

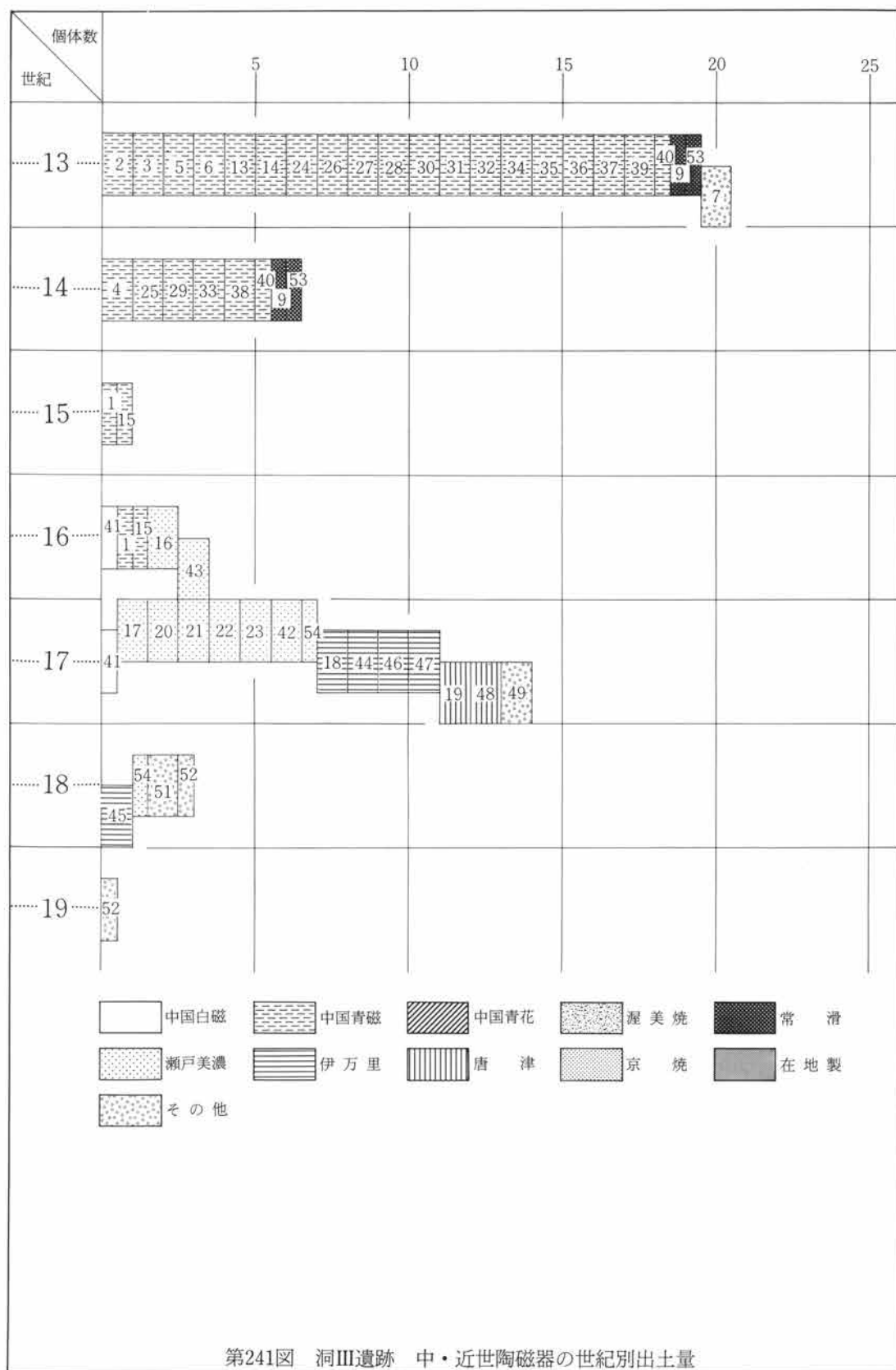








第240図 洞II遺跡 中・近世陶磁器の世紀別出土量



第241図 洞III遺跡 中・近世陶磁器の世紀別出土量

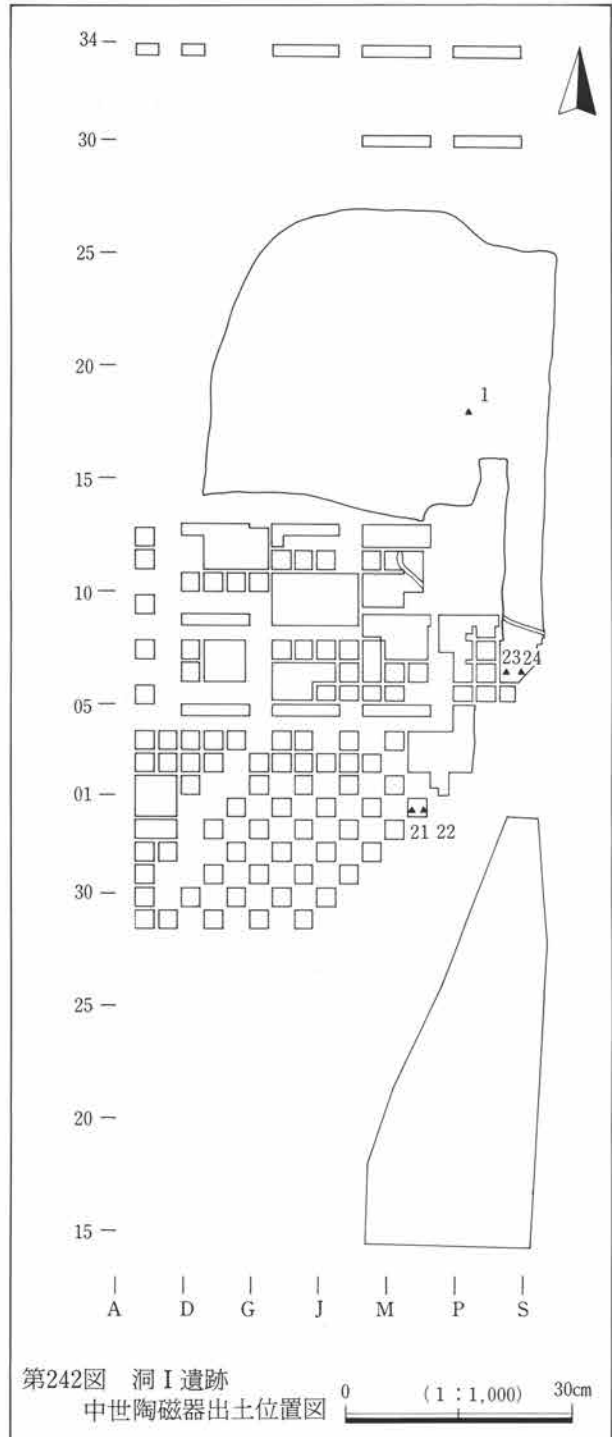
16・17世紀の美濃焼皿、初期伊万里の皿である。18号土坑からは唐津系の碗と17世紀代の美濃焼皿が出土しており、年代観の不明瞭な唐津系にとって1例証が得られる。1号住居跡の覆土から⑳～㉓の青磁碗が出土している。

### 3 各遺跡の消長

洞III遺跡では、掘立建物跡の構築時期が不明瞭であるので本項は、陶・磁器の検討によるアプローチを以て当該の各構築時期を推定せざるを得ない。

遺構の消長を知る必要から第239～241図の作成をした。年代軸を上・下に置き、出土量を左・右に取った。グラフの作成にあたり配慮した点は次のとおりである。扱った幅は掘立柱建物が一般的であった中世から江戸時代前半までとし、年代軸は世紀区分、さらに前・後の細分を行い、場合によっては二世紀にまたがる推定もある。記入は中世陶・磁器についてすべて掲載し信頼性は高いが、17世紀以降は任意抽出であるので信頼性は低いものとならざるを得なかった。記入の拠所は美濃<sup>(4)</sup>・瀬戸<sup>(5)</sup>・常滑<sup>(6)</sup>・伊万里系陶・磁器について、それぞれの変遷観を用い、<sup>(1)</sup><sup>(2)</sup><sup>(3)</sup>船載磁器・唐津焼については編年観が明瞭でないため概括的とならざるを得なかった。このため大まかな年代観とならざるを得なかった個体は、各世紀の中央に置き、二世紀のどちらか属するの判断できなかつた場合には0.5個体づつ各世紀に配分した。

さらに出土位置分布図第242～247図を作成した。ベースは中・近世と考えられる諸遺構である。作成された意図は出土陶・磁器片と諸遺構である。



(1) 洞 I 遺跡の消長

洞 I 遺跡は、中世では前半に中国龍泉窯系青磁 5 片・渥美焼 3 片がある。渥美焼は年代的特徴のない 3 片であるが、その量産に伴う流通時期を思えば中世前半が想定される。この一群に伴う明確な遺構はなく、遺跡地中央の東辺に片寄る傾向が若干あり、僅かながら生活の痕跡はあったものと認めたい。

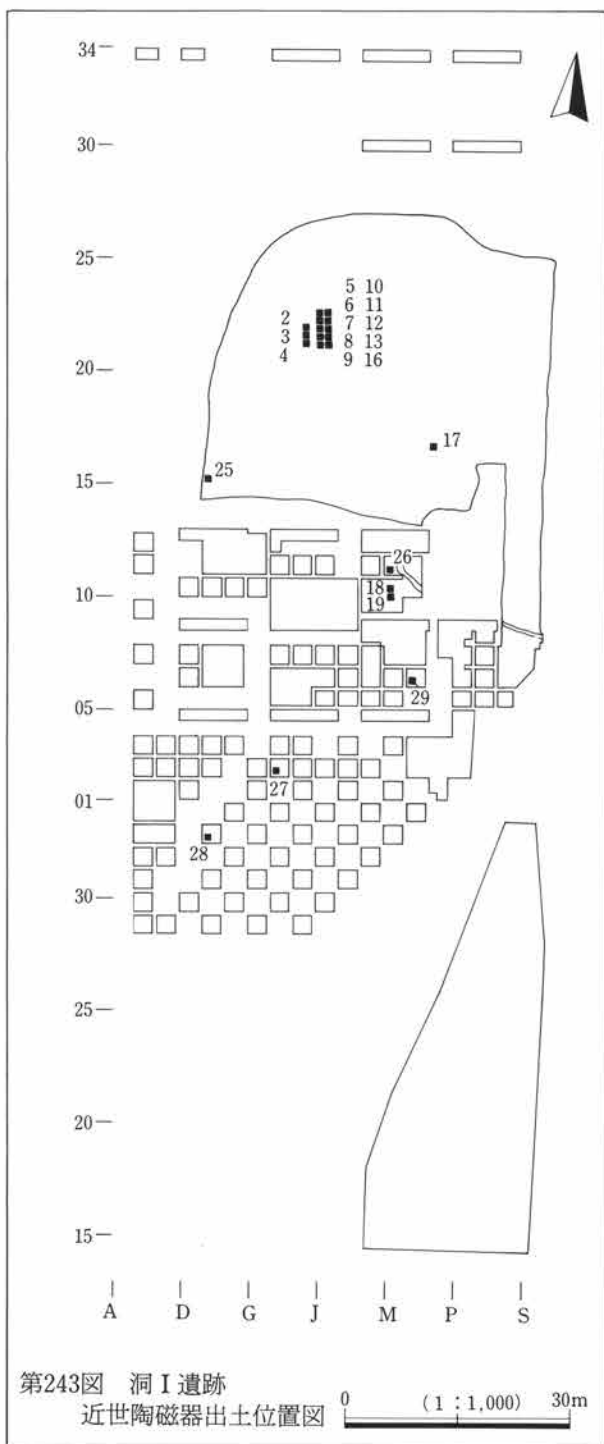
中世後半は、前半か後半に属するか不明瞭な②③・④の常滑焼 2 点を除くと皆無であり、生活の痕跡があったとはし難い。

17世紀は前代と同様に微弱な状況にあり、17世紀の遺構とすべき例もない。活況を呈するのは、18世紀に至ってである。遺構に伴う例では、9号土坑が伊万里系磁器片③から18世紀後半、10号土坑が伊万里系磁器⑫から19世紀初頭、1号井戸が瀬戸系陶器⑮から18世紀後半の年代が得られ、各遺構はその年代と近い頃の構築と考えられ、生活は確実なところ18世紀から認めることができる。

(2) 洞 II 遺跡

洞 II 遺跡は、中世では前半に中国龍泉窯系青磁 3 片・渥美焼 4 片がある。渥美焼は年代的特徴のない破片であるが、量産期にかかわるとすれば中世前半が想定される。この一群は、4 片が 3 号溝埋没土から出土しているが後続の陶・磁片が17世紀まで存在しないことから後代との脈絡は薄い、3号溝の構築当初の所産とは考え難い。また、中世後半に若干の出土が認められ、仮に後半の人々が伝世物を使用し、破損・廃棄の結果、出土したとするには中世後半の絶対量が少な過ぎるので、中世前半に、何んらかの形で生活の一部が洞 II 遺跡までおよんでいたと考えられる。

中世後半に伴う明確な遺構はない。この段階は瀬戸・美濃系 3 片・軟質陶器 2 点の出土があり古染付か伊万里系であるのか不

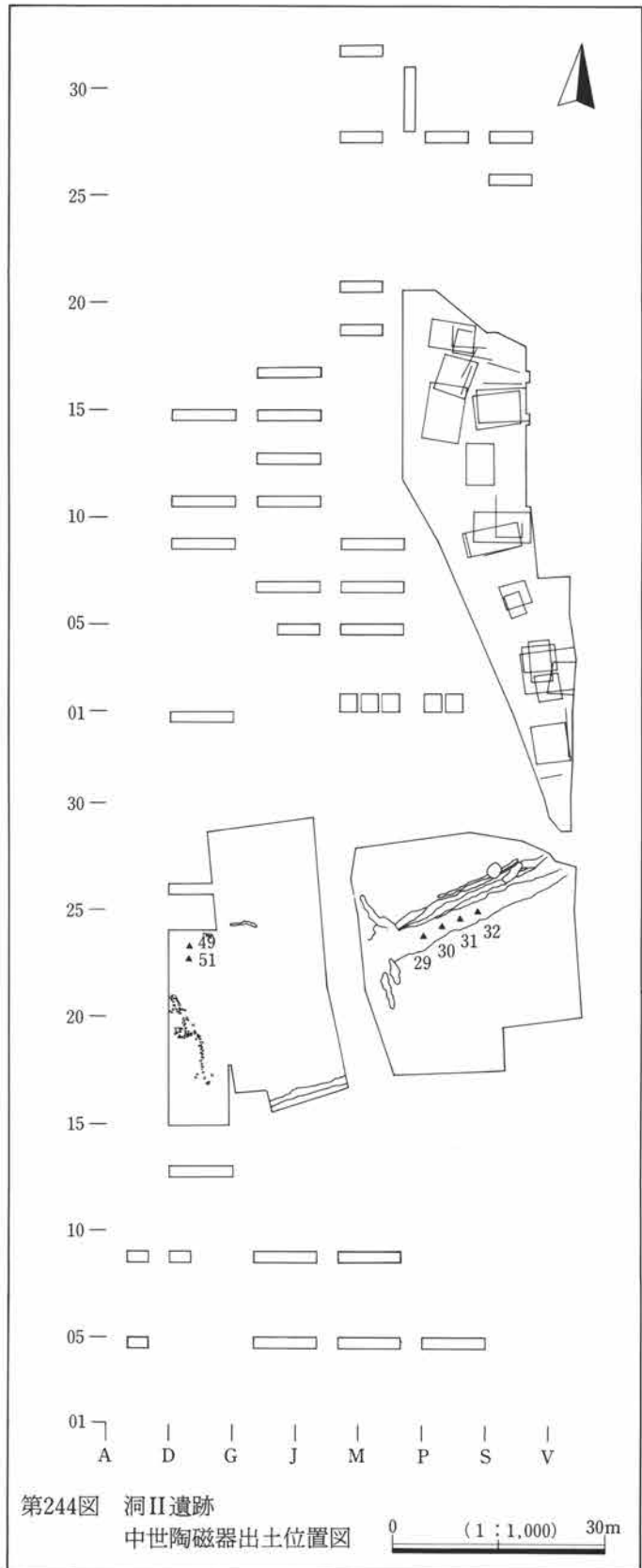


第243図 洞 I 遺跡  
近世陶磁器出土位置図

明瞭な5点と、舶載か伊万里系か不明瞭な3点を除くと個体量は極めて少ないが、軟質陶器の内耳鍋形片が出土しているため、生活の痕跡はあったと認められる。

17世紀から活況を呈し、生活地域に近接していると見なされる。17世紀代では3号溝から⑦の変形向付が、グリット出土であるが稀少性の高い伊万里系磁器⑤⑦～⑤⑨・⑦③が出土し、使用者に特権階層が示唆される。このことは前述した古染付か伊万里系か不明瞭な5点、舶載か伊万里系か不明瞭な3点も使用者に特権階層の存在が考えられ、そのことと直結しうる可能性が高い。17世紀代の陶・磁器は全般的に散在傾向にあるが、それらの一群とあえて関連する遺構を示せば④⑨・⑤⑪が1号井戸周辺から出土している。したがって、その周辺が生活領域であった可能性は僅かながら持たれよう。

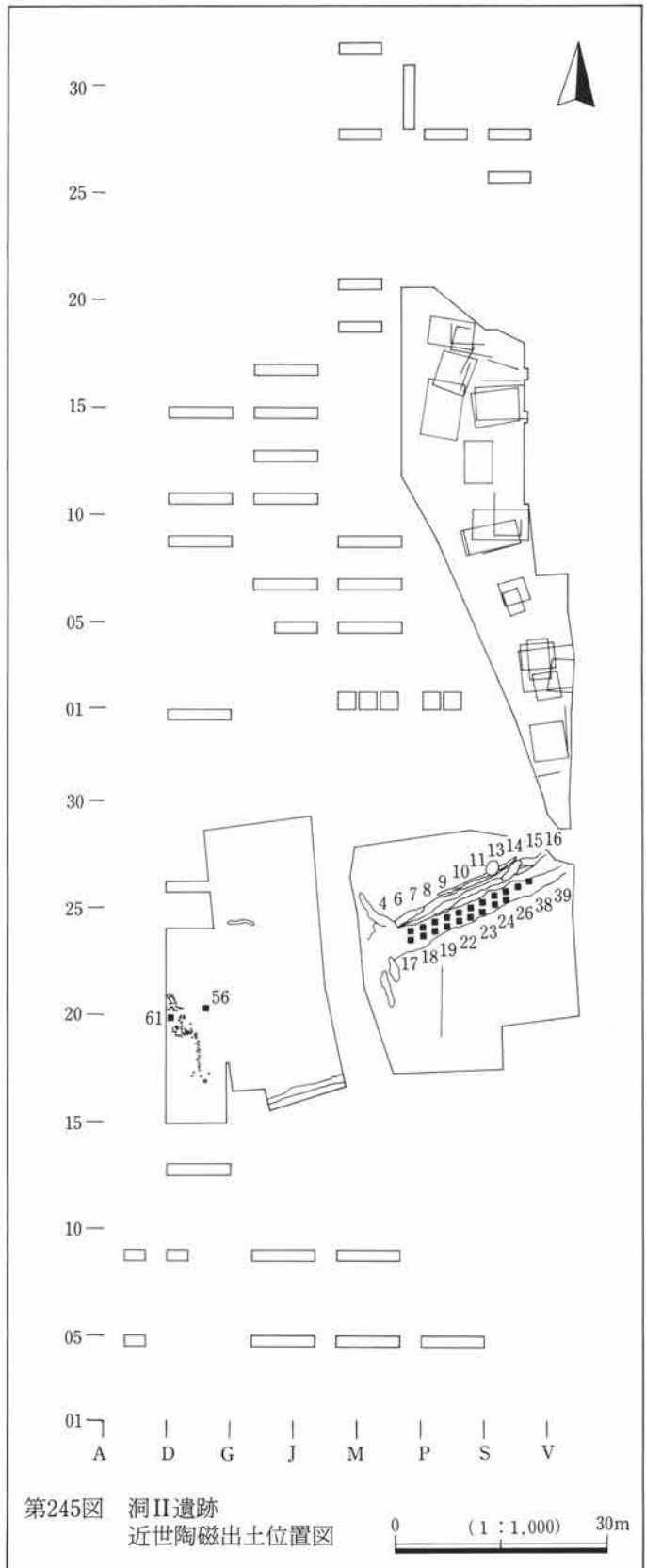
遺構例として3号溝がある。3号溝は、17世紀代の⑥・⑦が存在するものの、18世紀代の陶磁片が主体であり、埋没土上面にして②③・②④の瀬戸系骨蔵器の出土があり、その製作年代である19世紀前半にはほとんど埋没していたことが判るとともに、当時3号溝は空間的に土地利用されていたと類推される。また遺跡内の全体傾向から17世紀代の陶・磁器個体の少ない点考慮すれば、3号溝は18世紀に構築された可能性が極めて高い。掘立建物群については礎石建物へと変換する近世前半までの間



第244図 洞Ⅱ遺跡  
中世陶磁器出土位置図

0 (1 : 1,000) 30m

に構築されたと考えられるが、仮に中世とした場合にはこの掘立柱建物群は生活に伴う建物群と考えられるので、そうした場合、遺物の出土量が少な過ぎるので中世の可能性は薄いと考えられる。その拡張区から直接得られた陶磁器片は皆無であったが、3号溝拡張区の北側で18世紀代の伊万里系皿片1・油壺片1、唐津系染付碗片1、瀬戸・美濃系皿片1、時期不詳の軟質陶器鉢片12が得られ、掘立柱建物群に最も近接した一群である。また、3号溝出土の陶・磁器片は播鉢、片口鉢などをはじめとし、日常生活に直結する遺物類が多く、しかも小破ではなく大片も多かった。このことは生活場所が可成り近接していると類推され、そう考えた場合、掘立柱建物群は18世紀には存在した可能性が僅かながら持たれる。掘立柱建物群は西半が検出され、さらに東方に広がる傾向を持ち、この配置は近接の藪田遺跡で掘立柱建物群を調査した例があり、その際の分布傾向も本例と同様で建物群西裏の出土傾向は皆無に近い状態であり、南前面に廃棄する傾向があった。洞II遺跡例の場合、南側に存在する3号溝の出土陶・磁片がそうした廃棄であったとすれば掘立柱建物の上限が17世紀代に遡る可能性が持たれる。要するに傾向、在り方を通じて検討すると17・18世紀に掘立柱建物が設けられたと考えられる可能性があるのである。小鍛冶では⑤⑥が出土している。17世紀・18世紀の陶



第245図 洞II遺跡  
近世陶磁出土位置図



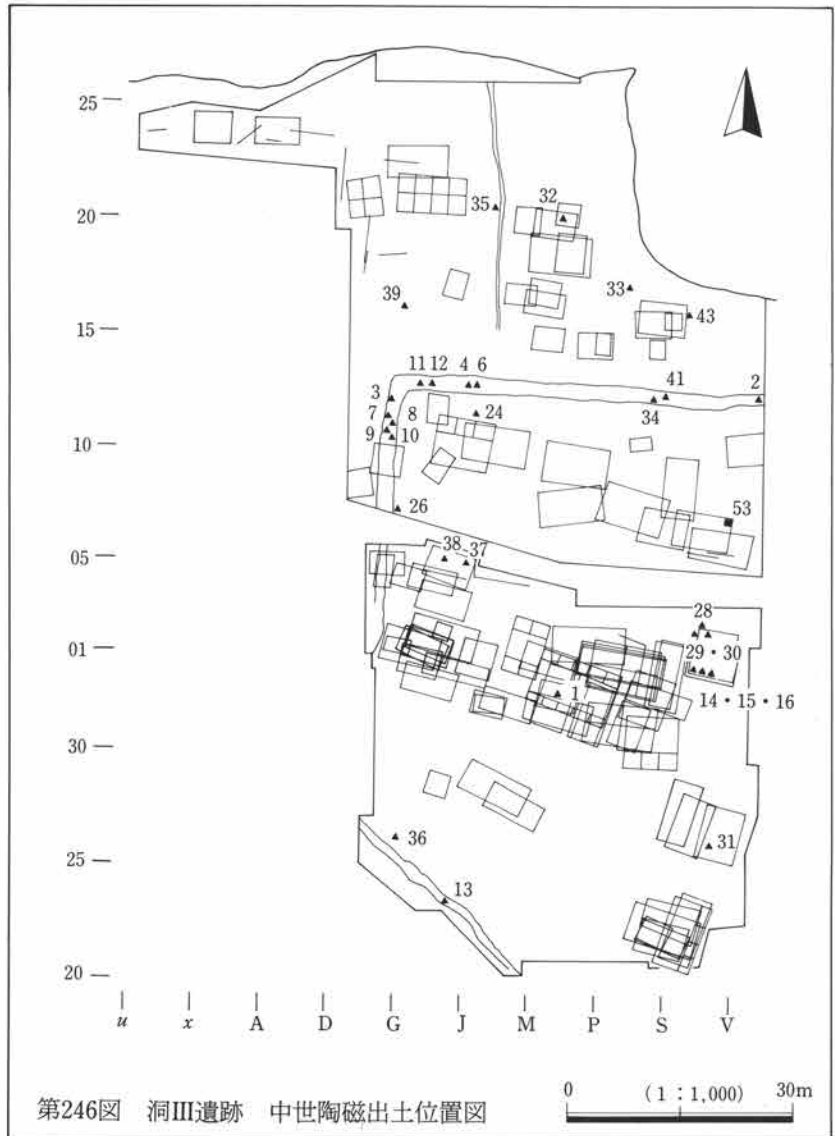
・磁片である。また鉄滓が多量に3号溝から出土しているので18世紀頃の存在と考えられる。

### 3 洞Ⅲ遺跡の消長

洞Ⅲ遺跡は、中世では前半に中国龍泉窯系青磁24片、渥美焼2点、焼締陶器壺1個体がある。第241図では13世紀代に展開期とも言える頂点があり、生活の存在が示唆される。直結する遺構に2号溝がある。13世紀代の青磁鎬手蓮弁文碗片、渥美焼片、焼締陶器壺など12点が出土している。この一群の下限は、青磁碗片4の体部に篋削り調整がなされているので元代龍泉窯系青磁と考えられるが、小片であるので、あるいは13世紀代の青磁碗であるのかもしれない。完器として2号溝から出土した焼締陶器壺⑦は、常滑焼の変遷観に従えば第Ⅲ期に類され13世紀後半から14世紀前半の製作と考えられ、中国陶磁とさほど年代のひらきは生じないので、2号溝は13世紀後半前後に存在したことになる。1住から13・14世紀と考えられる青磁碗⑳～㉓の出土があり、中世前半の遺構の可能性もある。46号土坑は、13世紀の南宋

同安窯系青磁碗片が⑭に、15・16世紀の明代龍泉窯系青磁稜花皿片が出土しているが、17世紀の初期伊万里、唐津系の陶・磁片が伴っているため17世紀頃の構築遺構と推定される。

中世後半は、15世紀代の2点であり、このうち5号井戸から出土した中国明代の青磁稜花皿の大片⑮は共伴関係と大片であることの存在意義において単なる混入ではなく、17世紀代まで伝世し、廃棄された可能性が高い。このため15世紀代はほぼ空白の時代である。16世紀代は5点の出土があるが、⑮・⑯はともに46号土坑から出土

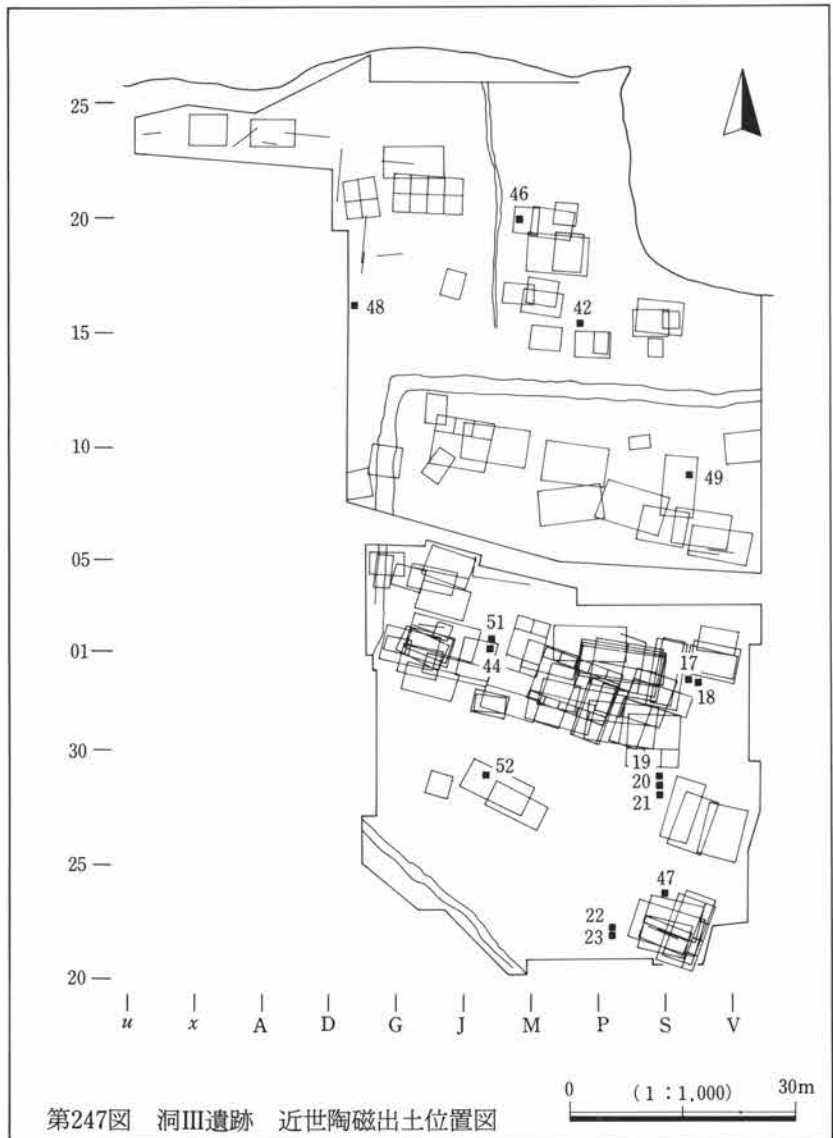


し、17世紀に廃棄された可能性があり、残されたのは3点足らずで空白の時代以降、二たび生活空間となったとするには量的な不足がある。

17世紀代は、二たび生活空間となったためか出土量が増加する傾向にある。16世紀代の遺物量が少ないために、その展開の始まりは、17世紀でもやや後出した時代からであったろうと察せられる。遺構としては、唐津系碗⑨を伴う1号土坑があり、17世紀代と考えられる。18号土坑は鉄絵の美濃焼皿を伴うため17世紀の可能性が高い。40号土坑も17世紀の所産と考えられる。

さて、洞Ⅲ遺跡の主体的遺構である掘立柱建物群については、分布傾向からの判断は困難で、どうしても構築時の年代観が問題点として、残される。まず15世紀は空白の時代と考えられるから除外され、江戸時代中期以降、民家は礎石建物に移行したと考えられるので18世紀後半から19世紀前半以降も除外される。出土量の多い中世前半の陶・磁器片は2号溝を除くと一般的に散布し、あたかも掘立柱建物群と一致するかのように見え、江戸時代前期の一群も出土量は夥多ではなく散在的に分布し、同様の傾向がある。また

構築年代を示唆する遺物に銭貨があり70号掘立から「寛永通宝」1点、67号掘立から中国北宋の「景德元宝」1点が出土しているため、このうち近世に掘立柱建物の存在は確定的である。これらを踏まえて可能性を導き出せば、①当遺跡の掘立柱建物群は、中世前半、江戸時代前半の両者が存在する。②中世陶・磁器片の出土量は近世陶・磁片を上まわり、掘立柱建物は13世紀頃の2号溝を意識した方向性のため、中世前半が主体である。③小遺構の多くが近世であり、それを掘立柱建物に直結した人々の所作とし、寛永通宝が柱穴



から出土した点を重視すれば、主体は近世初頭である。などの考え方が仮想される。この仮想を検討する場合、いくつかの前提を踏まえなければならない。それは次のとおりである。

A 中世前半に掘立柱建物は一般的でない点である。鎌倉時代から南北朝期の陶・磁器資料が多く出土した例に、新田郡尾島町歌舞伎遺跡<sup>(7)</sup>、太田市浜町屋敷内遺跡<sup>(8)</sup>、利根郡月夜野町師遺跡<sup>(9)</sup>などがあるが同期としうる明確な掘立柱建物跡は検出されていない。そのことを大遺構である館跡例から補足すれば、中世前半に前橋市端気町端気遺跡群内の館跡<sup>(10)</sup>、高崎市中尾町村東館跡<sup>(11)</sup>などがあるが、明瞭な形での掘立柱建物跡は未出であった。時代が下って15・16世紀代の高崎市浜川町寺の内館跡<sup>(12)</sup>、同町矢島館跡<sup>(13)</sup>では数多くの掘立柱建物が検出されているので、これら地域の特色として中世前半は建物にあまり掘立柱を用いなかった傾向にある。

B 洞Ⅲ遺跡の遺構など内的所見がある。洞Ⅲ遺跡2号溝は、常滑焼第Ⅲ期に類される完器の壺7が出土し、中世前半の構築として動かせないところである。調査担当によれば2号溝と南側の掘立柱建物11・14～16・18との間には幅約8mで東西に延びる空間地区があり、土塁の存在が示唆され、同様に北側にも6mほどの空間地があり、幅と地勢からして道か小土塁が存在した可能性があったという。さらに2号溝はある区画を周繞しそうな方向性、および土塁の想定から、それは単に土地区分などの意味あいのものでなく、その内側に対しての防禦であり、館と同じ防禦機能が考えられるとされている。この2号溝と重複して38・75・76近接して37・40・52・49・44・48などがあり、2号溝の渡橋施設としては数が多過る点から、むしろ2号溝の機能と関係の薄い異次元の掘立柱建物跡が考えられており、後者の大半は土塁の想定位置にある。さらに掘立柱建物跡は棟世代的な存続が方向性を少しづつ変えながら存在する。たとえば16号はほぼ同規模で17・13号と、10号と39号を考えると、多くの場合、棟世代的な存続が伺え、2号溝と同じ方向性に見える掘立柱建物であっても異次元的可能性が高いとの所見がある。

以上を踏まえると、仮想した①②については、Aのとおり中世前半の掘立柱建物は地域傾向として一般的でなく可能性が薄い。しかし、北毛地域の傾向は藪田遺跡、師遺跡例があるが十分に把握されている訳ではないので、あるいは中世前半の掘立柱建物が含まれているかもしれない。あったとすれば2号溝と方向性の一致する4区の掘立柱建物群のうちのいくつかである。③についてはAの理由と3区掘立柱建物群の一部が2号溝と重複する点、70号掘立柱建物跡から「寛永通宝」が出土していることから、すべてとは言いきれないが3区の掘立柱建物群の大半についてその可能性もたれる。以上を要約すれば掘立柱建物群の多くが江戸時代前半と解釈され、場合によっては4区の掘立柱建物のいくつかに中世前半に構築された可能性もありうるとしておきたい。

#### 4 小川城址、藪田、洞Ⅰ～Ⅲ遺跡出土の中・近世陶磁器

藪田遺跡は古城沢を挟んだ洞Ⅲ遺跡の北延長上にあり、中・近世陶・磁器も本報告と同様の分析がしてある。また小川城址は、洞Ⅲ遺跡から東方約300mの同一台地上にあり、国道291号道路改良に伴い二の丸の一部が発掘調査されている。このため中世末期の城址とそれに伴う時期の建物と陶磁器江戸時代前半の民家建物と陶磁器の有り様を知ることができる。

まず小川城址からは出土量は多くないが存続期である16世紀に伴うと類推される中国時代の龍泉窯系で発色のよい青磁稜花皿片、南京赤絵と見える碗片など稀少性の高い高級な陶磁器片が含まれており、生活域の性格が強い二の丸における什器の有り様の一部と、小地域における階層社会の頂点を感じさせるものがある。

藪田遺跡では小川城址の存続期である16世紀には、屋敷構えの形で掘立柱建物が配され、当時知識人が多用した磁器である中国青花が5点出土し、県内では太田市浜町屋敷内遺跡例9点に次ぐ量であり、使用者にある程度の特権階層が示唆され、知識人の存在も推定される。おそらくは、小川氏に直結した人々の屋敷とその遺物であろう。この屋敷構えの掘立柱建物は小川城址からすると城の外郭線となっている古城沢を挟んだ対岸にあり、城外に居を構えた従目の屋敷の在り方の一部が判る。この例を除くと16世紀代の屋敷構えと、それに伴うと考えられる陶・磁器は少ない。出土したとしても17世紀まで伝世した可能性が考えられた。洞Ⅲ遺跡でも、明代青磁稜花皿と初期伊万里とが出土した46号土坑の例があり、また16世紀代の陶・磁器片が少量出土しても、対応すべき国産の陶・磁器類に組み合わせが得られなかった。たとえば、16世紀の中国青磁を16世紀の人々が用いたとすれば国産陶器類についても、ある一定の割り合いで16世紀の陶器が出土するはずであるがそれほど顕著でない。さらにこのことを裏づけるのは、17世紀代の陶・磁器の中に高級磁器である伊万里焼が含まれる点にある。当時使用し得た人々は、特権的な階層であるため、前代の高級磁器も同様の価値観で使用したと見なされるのである。洞Ⅱ遺跡・洞Ⅲ遺跡の掘立柱建物を営んだ人々や藪田遺跡で17世紀の掘立柱建物に住んだ人々などがそうである。藪田遺跡では15・16世紀に屋敷構えを行った人々は、そのまま18世紀まで後代に継続していったようで、出土陶・磁の出土量、および出土傾向に空白は認められない。洞Ⅱ・Ⅲ遺跡については、17世紀に掘立柱建物を設け居住化を行ったようで18世紀まで後代に受継がれている。17世紀の新たな居住化は陶・磁器からみて江戸時代に至って小川城の管理者となっていた真田伊賀守信澄が城内かその周辺に居を構えたと推定される寛永16年(1639)から明暦3年(1657)の間とどれだけ関連するか判らないが、『小川本城根元記』に綴られた明暦元年(1655)と記された絵図によれば洞Ⅲ遺跡に土地所有者名とは考え難い記入の仕方<sup>95</sup>で4人の名義が、洞Ⅲ遺跡でも4人が記されている。その内容に信憑性があり往時の実態であるならば洞Ⅱ・Ⅲ遺跡地内での掘立柱建物をを用いた居住地化は17世紀前半にあったとし得るし、真田伊賀守信澄が管理していた段階に接するので居住者について、近接した位置関係から真田氏と有縁の人々であったと考えられるであろう。

#### 参 考 文 献

- (1) 亀井明德 「九州出土の宋、元代陶・磁器の分析」『考古学雑誌58巻4号』 1973  
上田秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 No.2』(日本貿易陶磁研究会) 1982
- (2) 森田 勉 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究 No.2』(日本貿易陶磁研究会) 1982
- (3) 小野正敏 「15・16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No.2』(日本貿易陶磁研究会) 1982
- (4) 檜崎彰一 「美濃古陶のながれ」『美濃古陶』 1980
- (5) 赤羽一郎 「常滑」『世界陶磁全集3 日本中世』 1977
- (6) 近世陶磁器の年代観は大橋康二ほか 「肥前陶・磁の変遷と出土分布」『国内出土肥前陶磁』(九州陶磁文化館) 1984による。
- (7) 『歌舞伎遺跡』(群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1982
- (8) 『浜町屋敷内遺跡C地点』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1984
- (9) 『後田遺跡見学会資料』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1985
- (10) 『端気遺跡群I』(前橋市教育委員会) 1983

【端気遺跡群Ⅱ】(前橋市教育委員会) 1985

(1) 『元島名B・吹屋遺跡』(群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1982

(2) 『矢島遺跡』(高崎市教育委員会) 1979

(3) 『寺の内遺跡』(高崎市教育委員会) 1979

(4) 大江正行「村東館址の調査所見とその検討」(1)に同じ。

(5) 調査中に地元の識者が所有しておられた資料を調査担当であった相京建史氏が複写し、その複写を見せていただいた。

### 3 洞Ⅰ・Ⅲ遺跡の平安時代集落について

月夜野古窯跡群は現在のところ県北における唯一、最大の窯跡群であり、その調査・研究は昭和16年の山崎義男氏の洞・真沢の2窯址の調査に始まる。その後、昭和45・46年に井上唯雄氏により洞窯跡の本格的調査が行なわれ、窯構造・年代・背影等について論考を行なった。

これらの調査成果および最近の調査成果は、近年、群馬歴史考古同人会の研究資料<sup>注1</sup>や月夜野町教育委員会の「月夜野古窯跡群」<sup>注2</sup>に集成され、本窯跡群の構成や年代、成立とその背影、出土遺物について考察が加えられた。両資料は現時点での月夜野古窯跡群の実態を最も適確に表わしており、本窯跡群の現状は以下のとおりである。

月夜野古窯跡群は利根川右岸の大峰山東南麓末端の東流する小開析谷に面した裾部に展開しており、現在までに洞A支群、沢入A支群、深沢B・C支群、真沢A支群、水沼A支群、須磨野A支群の7窯支群が南北約2kmの間に確認されており、さらに他の窯支群の存在も予想されている。また、これらの窯跡に関係する工人集落が藪田・藪田東、梨の木平、前中原の各遺跡で確認されている。

本遺跡の開窯は出土瓦等により7世紀末～8世紀初頭と考えられているが、確認されている最古の窯跡は沢入A支群で8世紀中葉に比定されている。また、8世紀後半の窯跡も現在のところ確認されていない。9世紀になると洞A支群があり、10世紀には洞A支群、深沢B・C支群、真沢A支群、水沼A支群、須磨野A支群等がある。そして、本窯跡群の終了は周辺集落の動行から11世紀初頭頃と考えられている。

また、本窯跡群内の各支群は窯跡群内のほぼ中央を東西に流れる深沢を境に、基盤層の差により須恵器の胎土に差異が認められ、時期による分布傾向にも差が表われている。8世紀から9世紀にかけては深沢以南で1地点による拠点的・集中的な分布傾向であるのに対し、10世紀代になると深沢以北へ拡散し散在的な分布傾向を示す。

本窯跡群の生産は窯跡数から10世紀代に最大の生産量を上げたと考えられており、独特な胎土と技法を持つ月夜野古窯跡群の須恵器や瓦は県北山間部一帯へ供給していたとされる。

また、本窯跡群の開窯に際しては上植木・雷電山系の意匠と技法を持つ集団によってなされたと考えられ、沢入A支群の須恵器には東海系の系譜を引く秋間窯跡群の影響が考えられている。その後の洞A支群は沢入A支群からの直接の系譜は見られず、同時期の藪田・藪田東遺跡の工人集落も独特の技法を持つ甕や器種を持ち、9世紀代に新たな工人集団の参入が考えられている。10世紀代の各窯支群は月夜野型羽釜と呼ばれている独特な羽釜を統一的に生産しており、10世紀に入ると存地化・地方化して行ったと考えられている。

月夜野古窯跡は律令体制における古代国家の東国での政治的動行を背影に、東北との強い関連性を

持ち、その設置や集団の移動が行われたものと考えられている。

以上のような変遷をたどる月夜野古窯跡群に近接した洞Ⅰ・Ⅲ遺跡の遺構と遺物は、以下のような特徴を持つ。

洞Ⅰ遺跡は8世紀末～10世紀前半とされる洞A支群のある洞山の裾部にあり、住居跡1軒と粘土採掘坑と考えられる落ち込み、遺物包含層を検出した。これらの遺構は住居跡が9世紀後半、粘土採掘坑と考えられる落ち込みが10世紀前半、遺物包含層は9世紀代を主体とした時期に比定される。

本遺跡の出土須恵器は北にある藪田・藪田東遺跡<sup>注3</sup>の須恵器と器種・器形・技法等多くの点で類似しており密接な関係を窺がわせるが、9世紀代に比定されている黒色土器や須恵器胎土で叩き目のある酸化焙焼成の甕は出土しておらず、藪田・藪田東遺跡の須恵器とは異なる一面も持っている。

洞Ⅰ遺跡は位置や時期、遺構の状況、遺物の出土状態から確定的な証左を欠く部分もあるが、洞A支群に関連した須恵器生産工人の集落と考えられ、周囲に工人集落の拡がりが見込まれる。

洞Ⅲ遺跡は利根川左岸上位段丘面の東西に走る台地上に位置しており、古城沢を挟んで北に藪田・藪田東遺跡がある。

本遺跡の平安時代の遺構としては住居跡5軒、粘土採掘坑5基、墓坑的性格の土坑1基が検出されたが、それぞれの遺構は2・3・4・5号住居跡が9世紀後半、6号住居跡が10世紀前半、土坑が9世紀後半に比定され、粘土採掘坑からは遺物は出土しなかったが、集落変遷のいずれかの時期に相当するものと考えられる。

9世紀後半の住居群のうち2号住居跡だけが台地の北端に位置しており、他は台地の南端にある。

2号住居跡は他の3軒に比べ規模が大きく、特殊な小型甕が出土しており集落内における特異な住居と考えられる。また、2号住居跡で確認されたロクロピットのあり方は藪田・藪田東遺跡でも確認されており、月夜野古窯跡群に関係する工人集落の一特徴である可能性がある。

10世紀前半の住居跡は台地南端にある6号住居跡1軒だけで、調査区内では他の住居跡は見当たらない。藪田・藪田東遺跡も9世紀代を主とする集落であり、10世紀になると小規模化・拡散化の傾向にあり、月夜野古窯跡群の分布傾向を反映しているものと考えられる。

粘土採掘坑は台地南端に点在し、調査区東端において群在する傾向が見込まれる。粘土採掘坑の偏在性は藪田・藪田東遺跡と同様に良質な粘土層の分布を反映していると考えられる。

なお、9世紀から10世紀を通して台地中央部には何らの遺構も存在せず、台地に沿ってさらに拡がると予想される本遺跡の平安時代集落にとって、特定の生活空間が推定される。

洞Ⅲ遺跡の平安時代集落は藪田・藪田東遺跡と同様に、須恵器生産工人の集落として位置付けられる様相を示しているが、出土須恵器は藪田・藪田東遺跡との比較において洞Ⅰ遺跡と同様の傾向を示しており、沢を挟んで藪田・藪田東遺跡とは洞Ⅰ遺跡よりも近接する位置にあるが、工人集団の特性は洞Ⅰ遺跡とより密接な関係にあったと考えられる。

注1 大江正行・中沢 悟 「土器部会研究資料 No.2」群馬県歴史考古同人会 1984

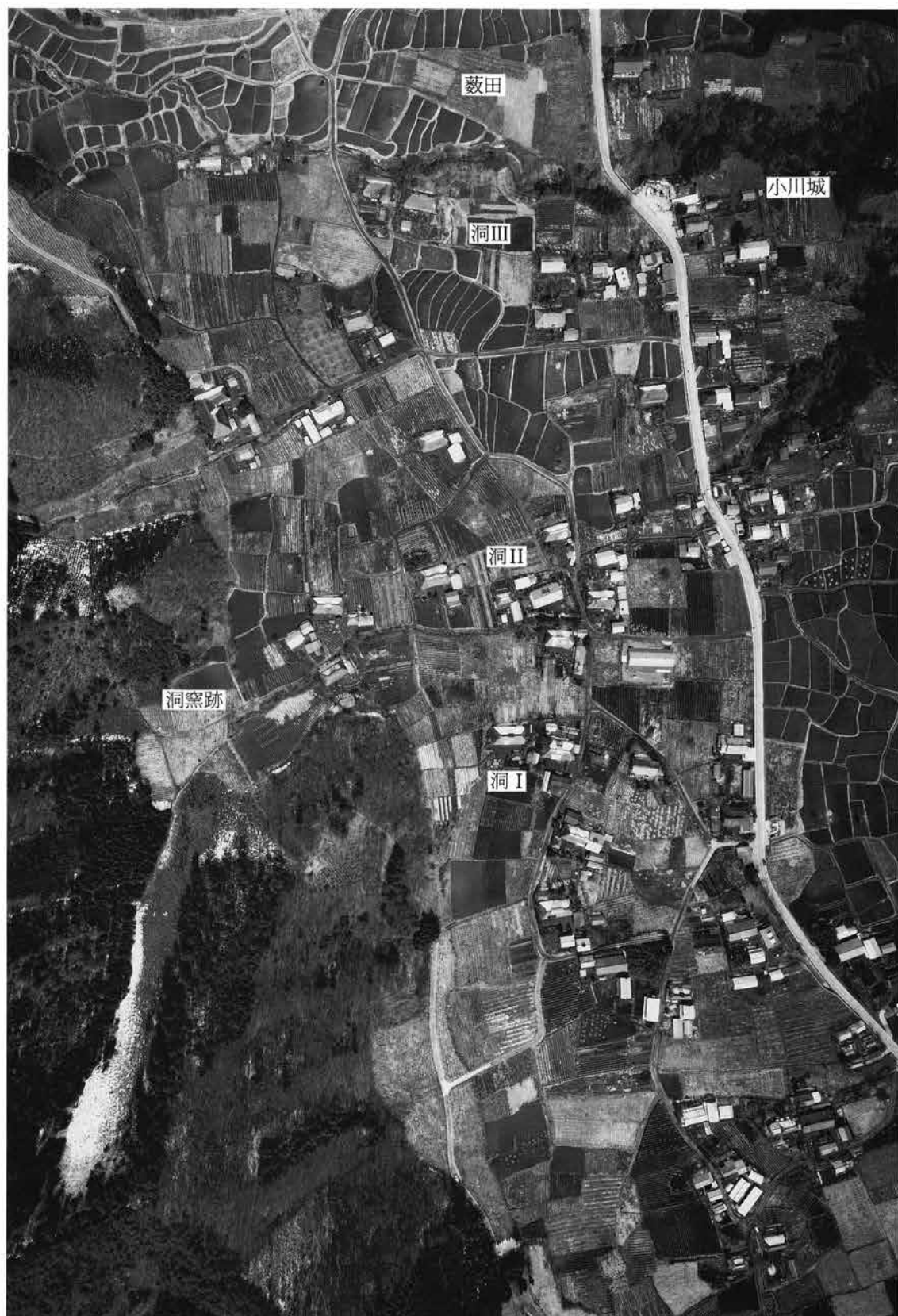
注2 中沢 悟 「月夜野古窯跡群」月夜野町教育委員会 1985

注3 下城 正・関 晴彦 「藪田遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985

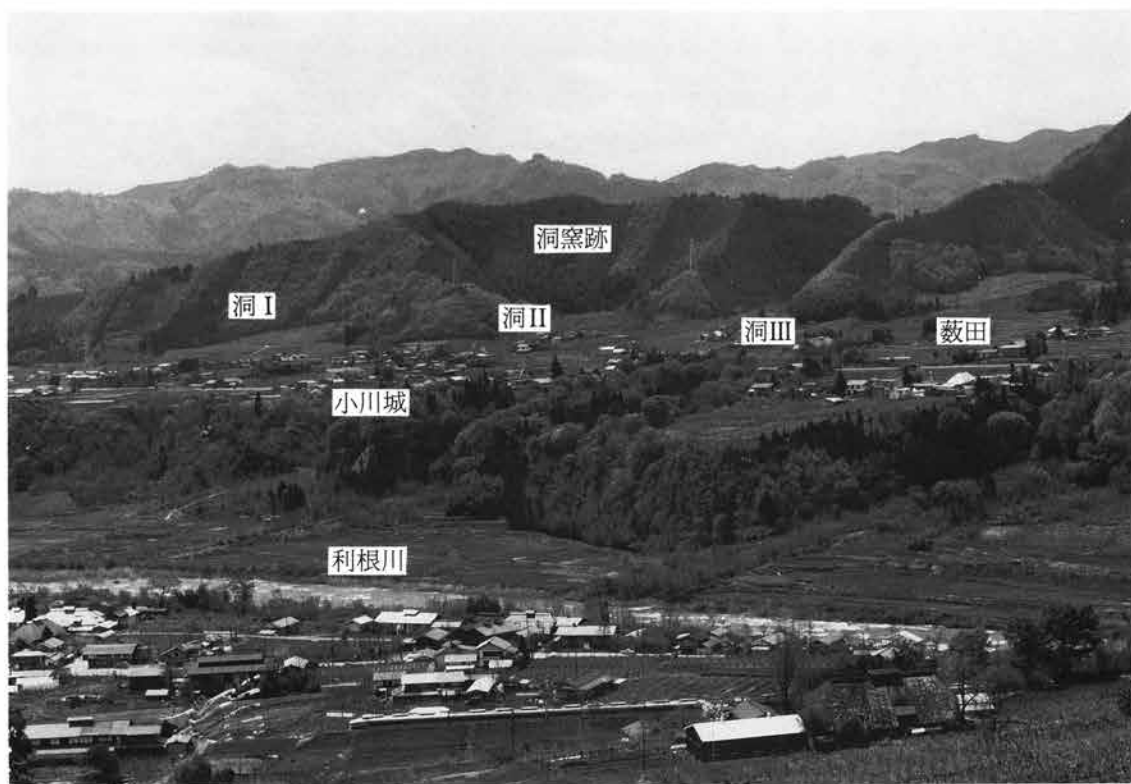
# 洞 I · II · III遺跡



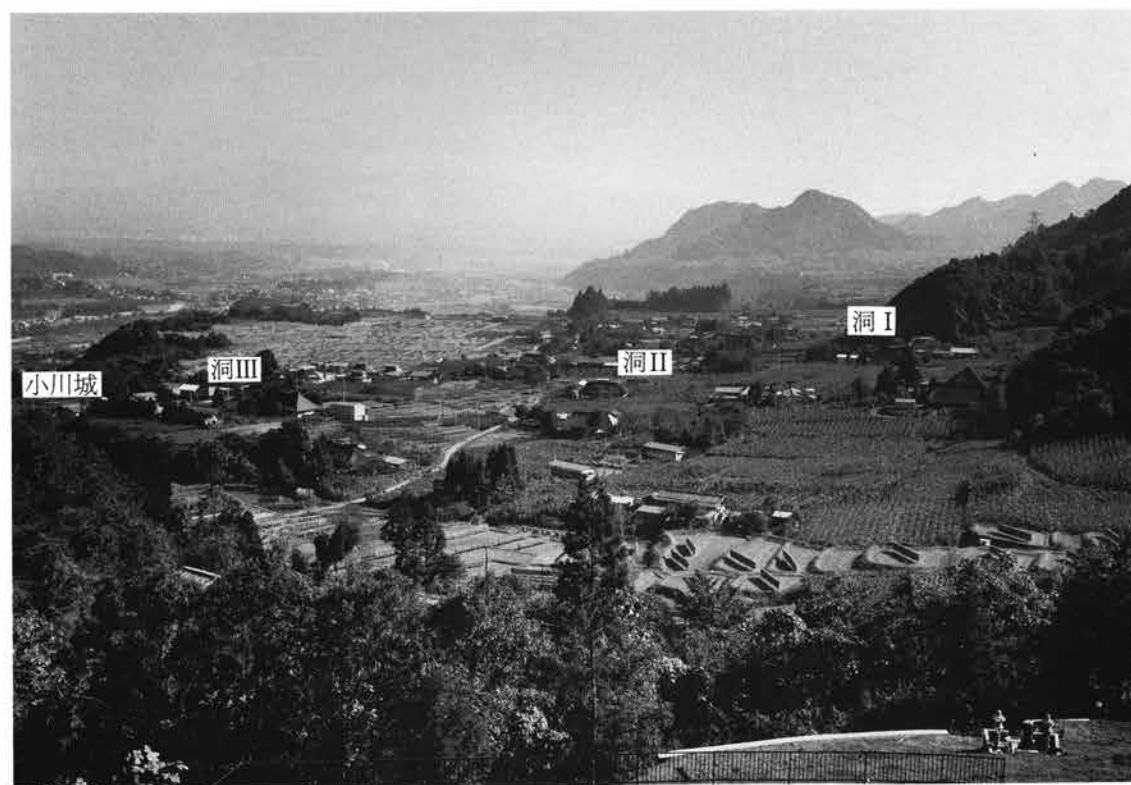




洞 I・II・III遺跡の周辺地形（航空写真、昭和49年撮影、1/4,000）



1 遺跡遠景（北東の利根川対岸より）



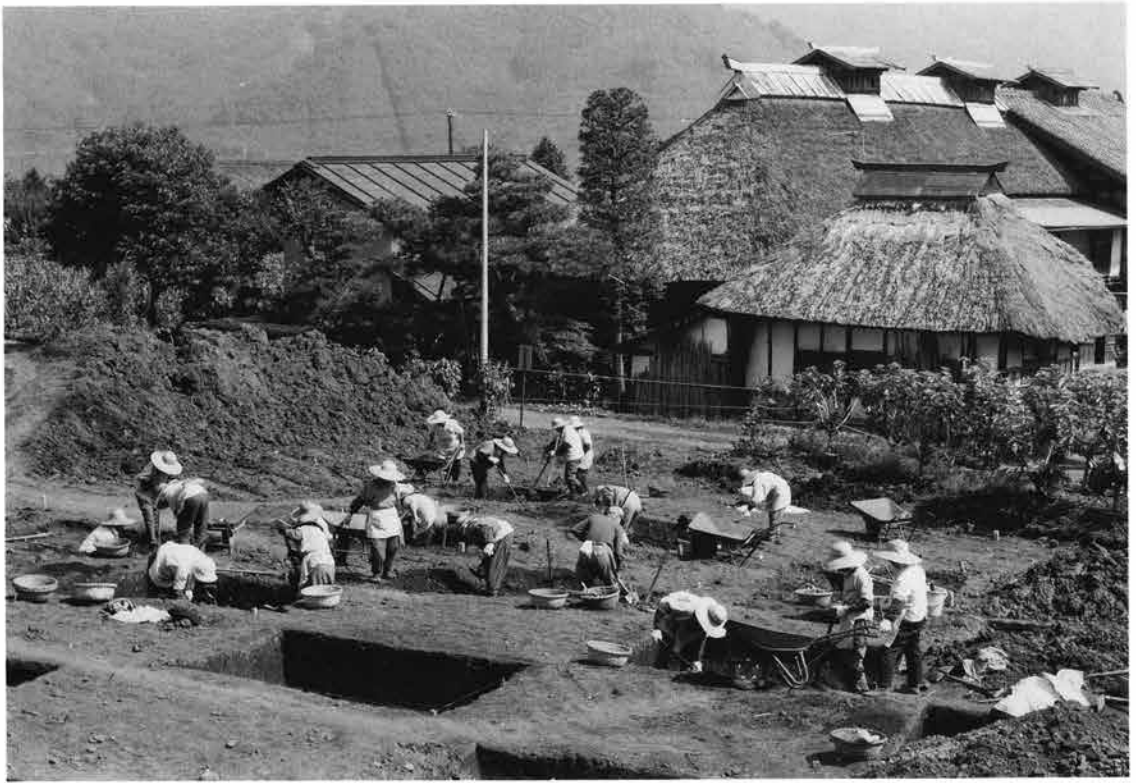
2 遺跡遠景（北西の沢入窯跡のある寺山より）



1 洞I遺跡第1次調査状況（1区南半、南西より）



2 洞II遺跡試掘調査状況（2区北半、北より）

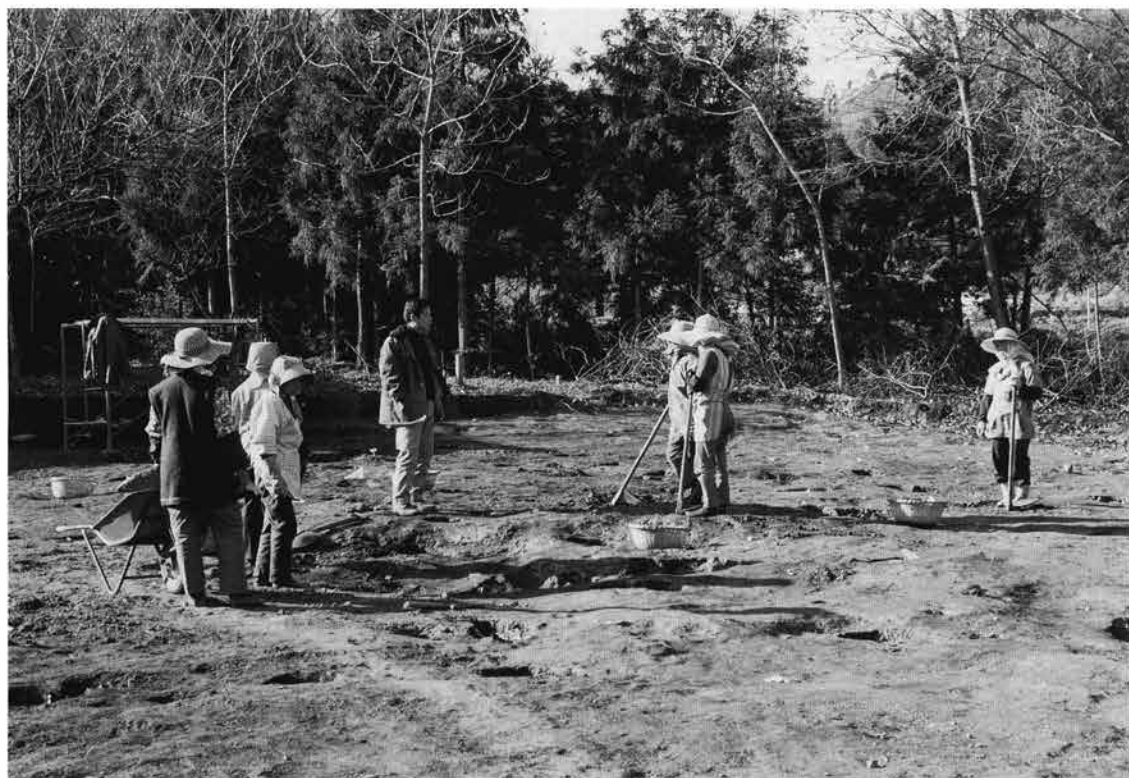


1 洞Ⅰ遺跡調査状況（第1次調査、1～3号土坑周辺、南西より）

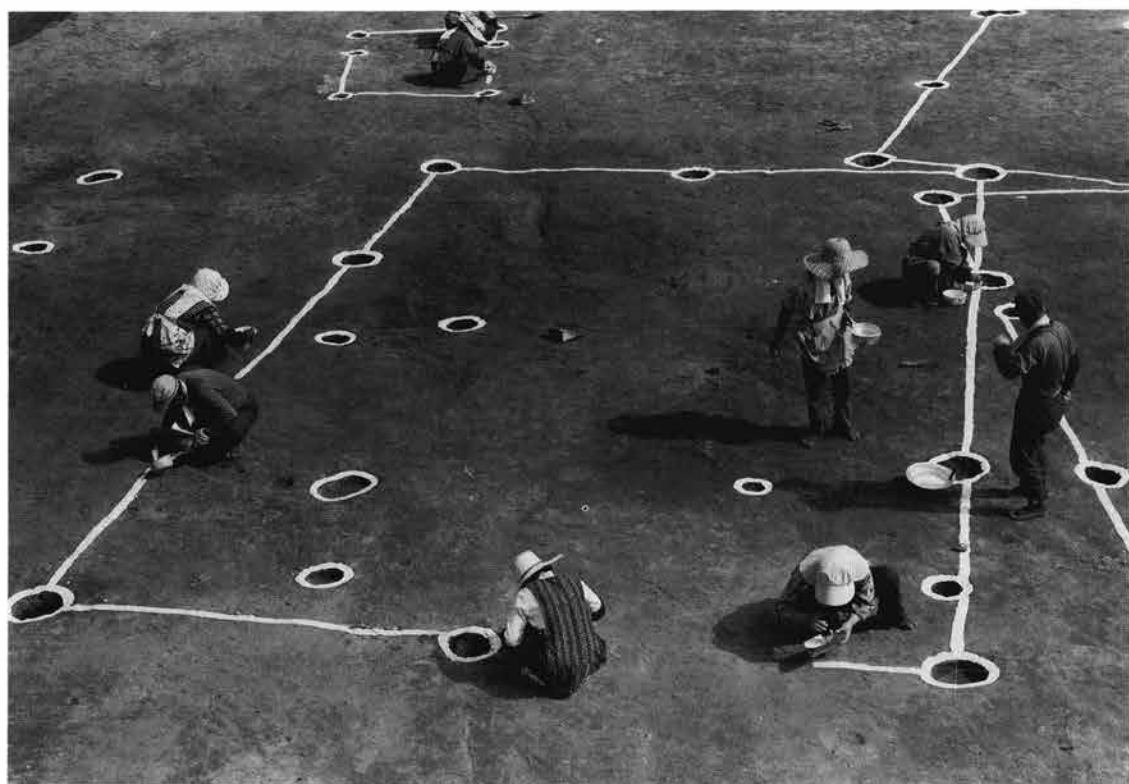


2 洞Ⅱ遺跡調査状況（第2次調査、3号溝、南西より）



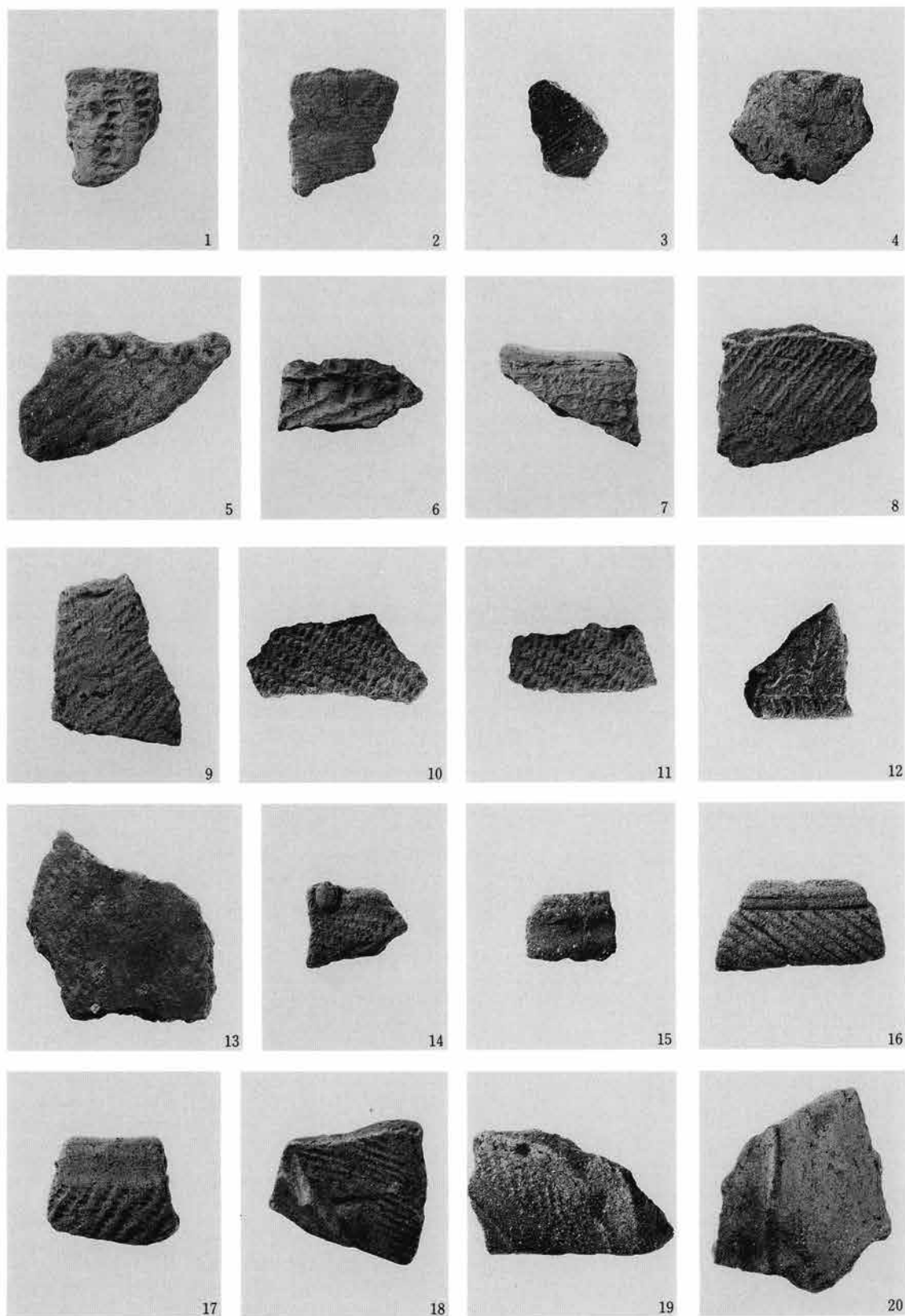


1 洞Ⅲ遺跡調査状況（第1次調査、1号掘立柱建物周辺、東より）

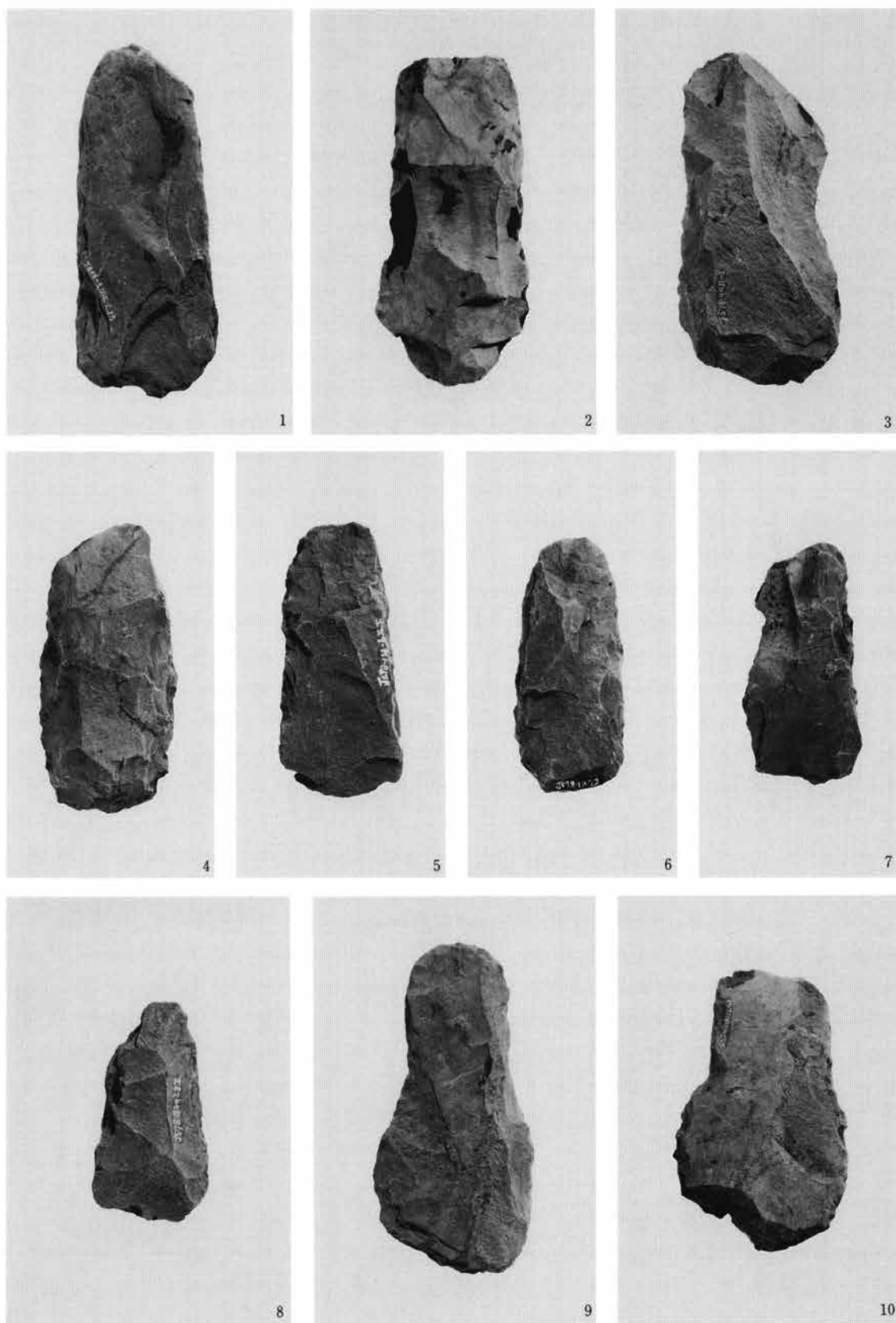


2 洞Ⅲ遺跡調査状況（第2次調査、16号掘立柱建物周辺、西より）

図版 6



縄文土器



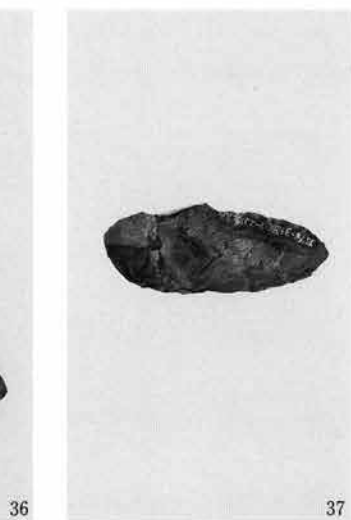
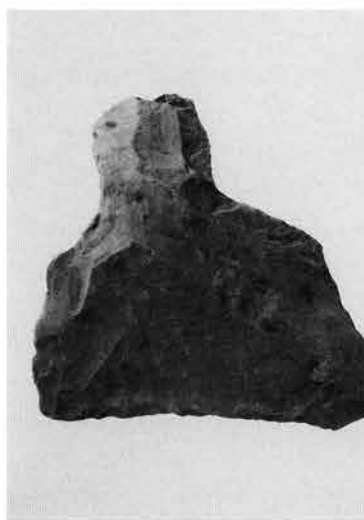
縄文石器 (1)

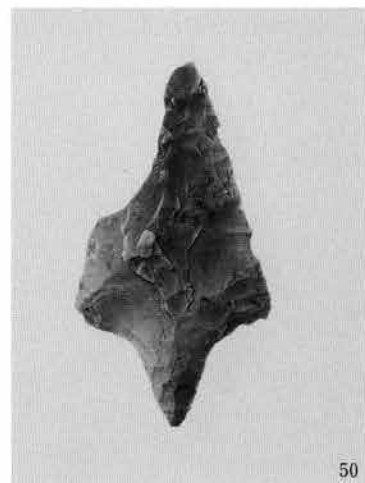
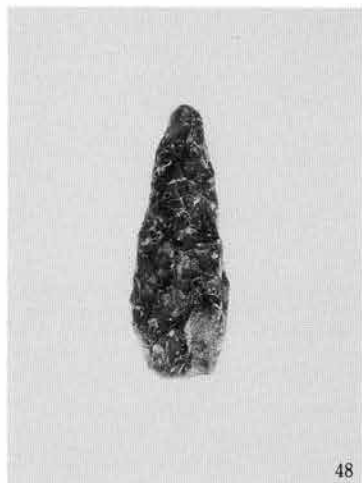
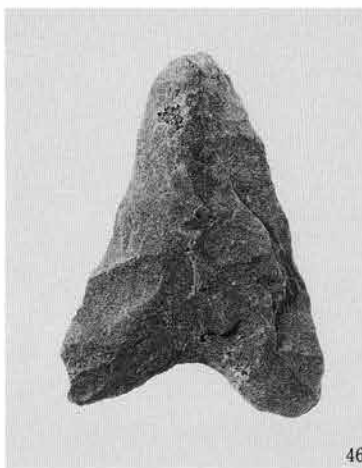
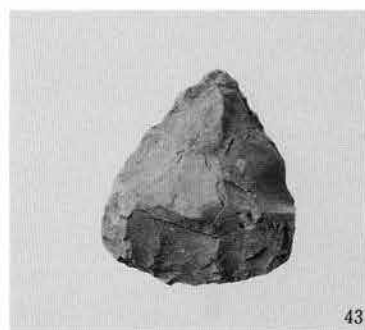
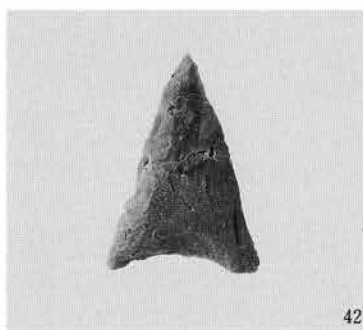
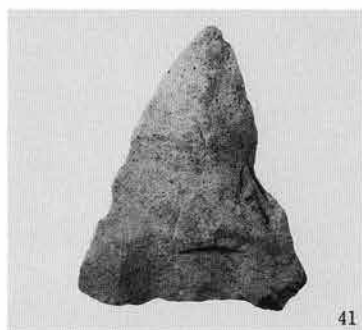
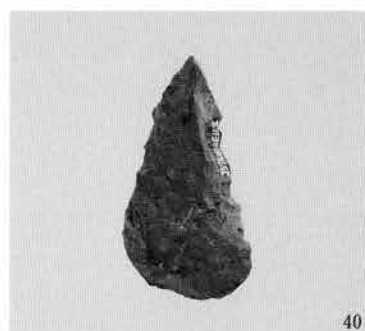


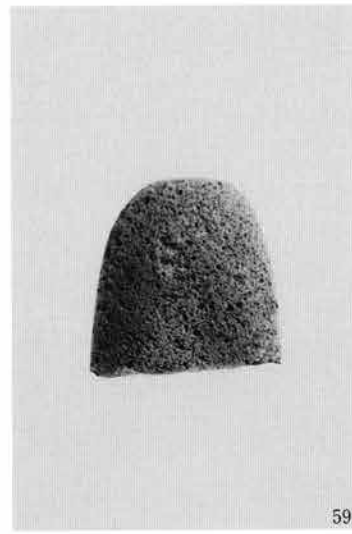
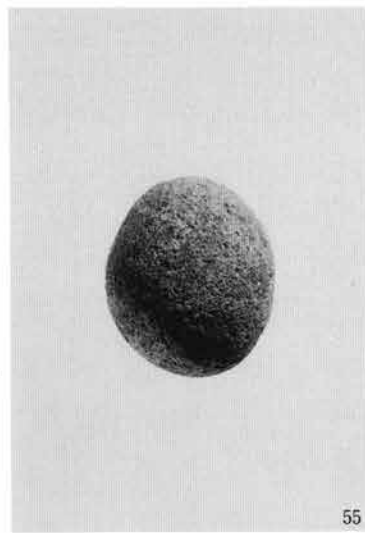
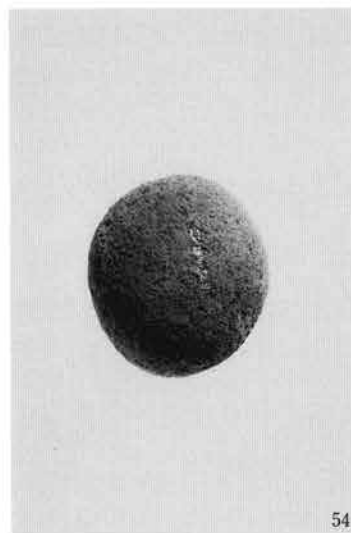
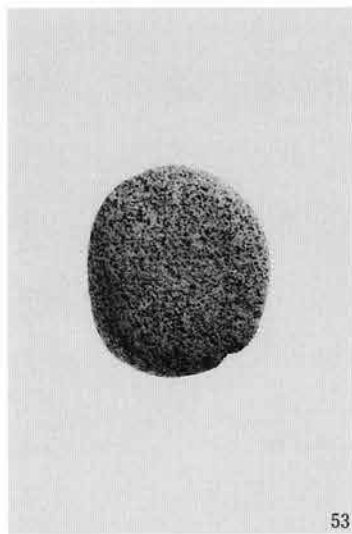
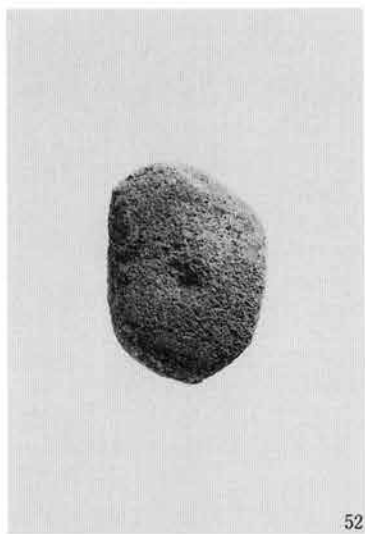
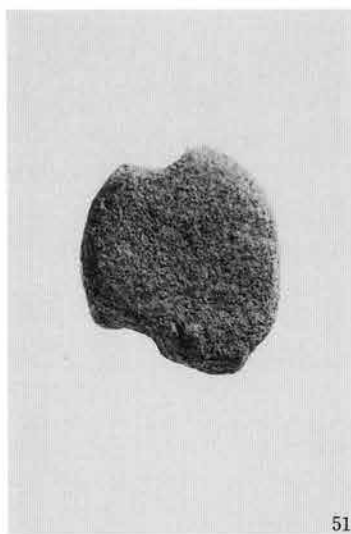




縄文石器 (3)

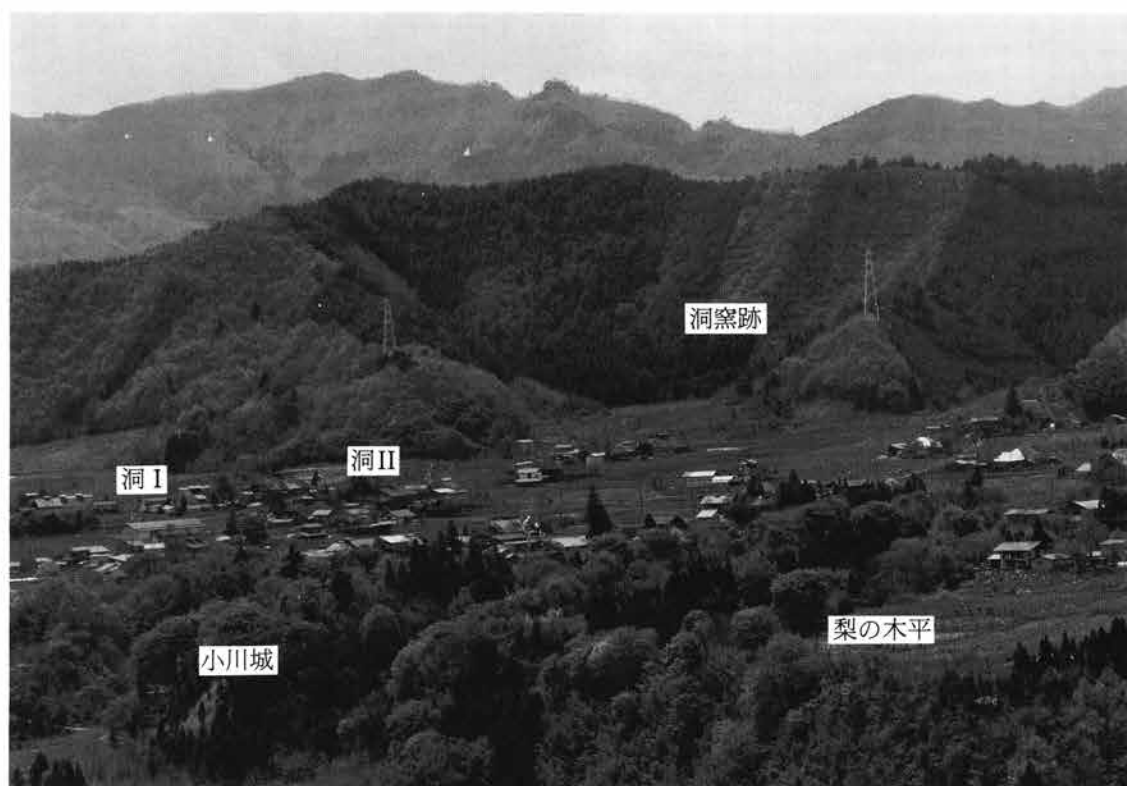




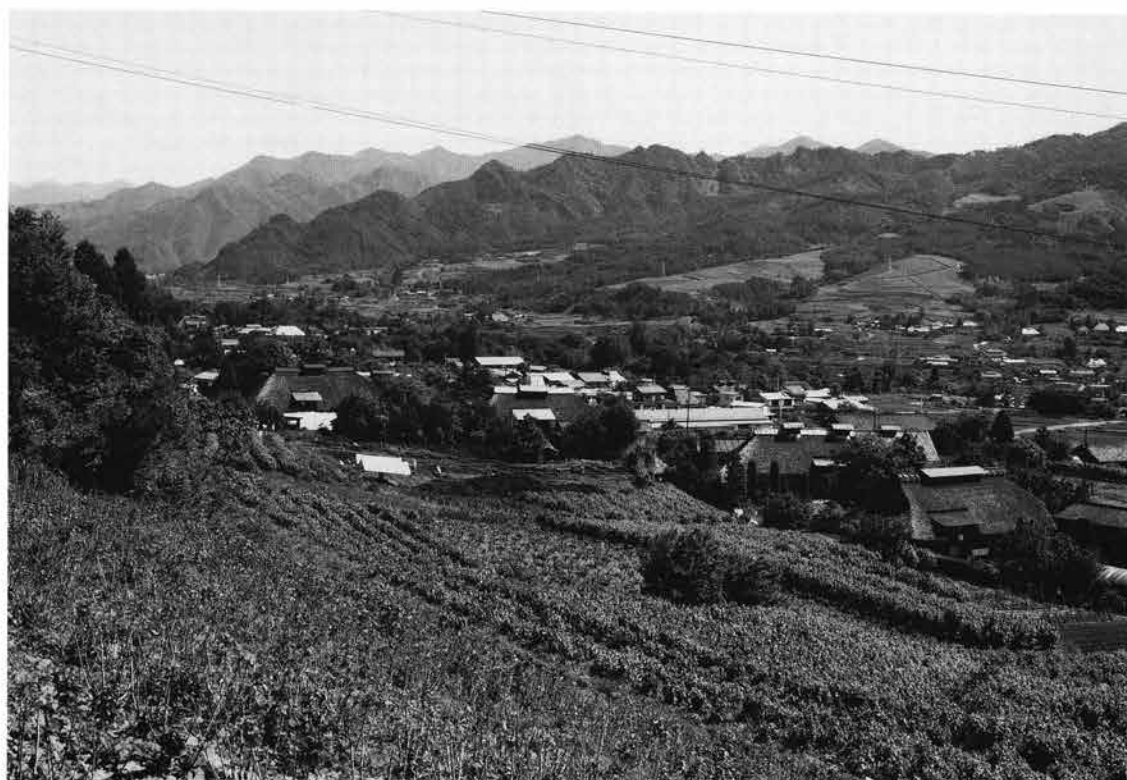


# 洞 I 遺跡





1 洞 I 遺跡遠景 (北東より)



2 洞 I 遺跡近景 (南西より)



1 第1次調査1区南半調査状況（西より）

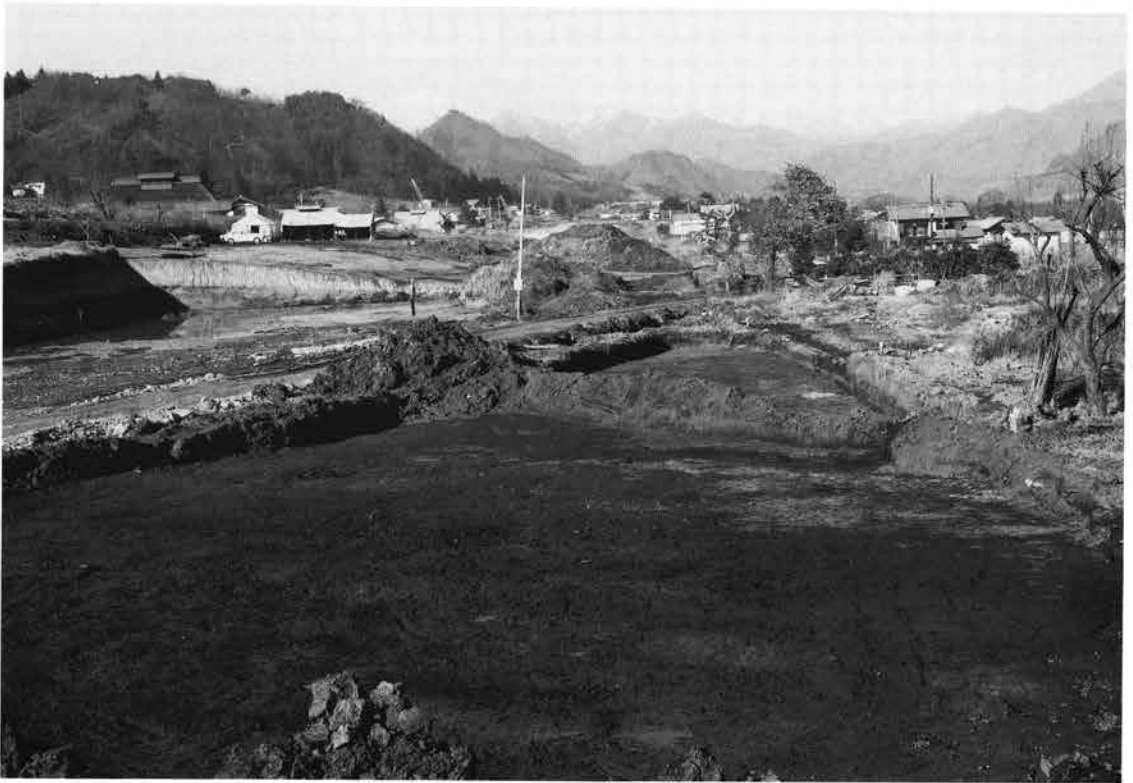


2 第1次調査0区北半から1区南半グリッド設定状況（南より）





1 1区北半全景（南西より）



2 0区南半全景（南より）



1 1号住居跡（北より）



2 1号住居跡遺物出土状態（東より）



1 平安時代遺物包含層全景（南西より）



2 平安時代遺物包含層出土状態（南より）



1 平安時代遺物包含層1区P-03出土状態（北より）



2 1区J-09落ち込み遺物出土状態（北東より）





1 1号溝 (南東より)



2 1号井戸 (中段、南より)



3 2号井戸 (西より)



4 3号井戸 (中段、南より)



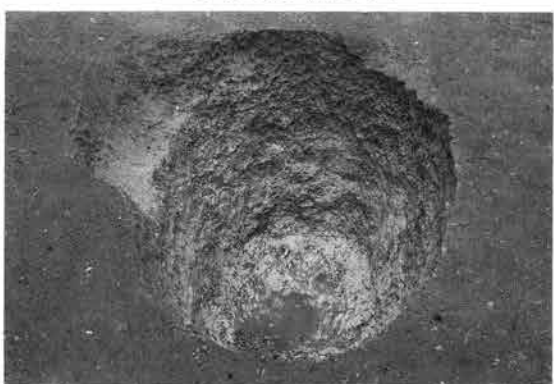
5 1号土坑 (南より)



6 2号土坑 (南より)



7 4号土坑 (北より)



8 5号土坑 (東より)



1 6号土坑 (東より)



2 7号土坑 (南より)



3 8号土坑 (東より)



4 14号土坑 (南より)



5 15号土坑遺物出土状態 (南西より)



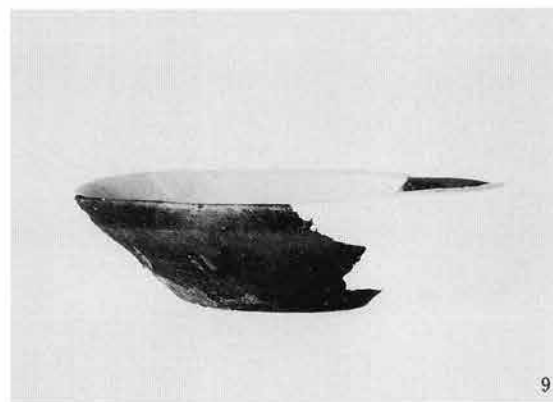
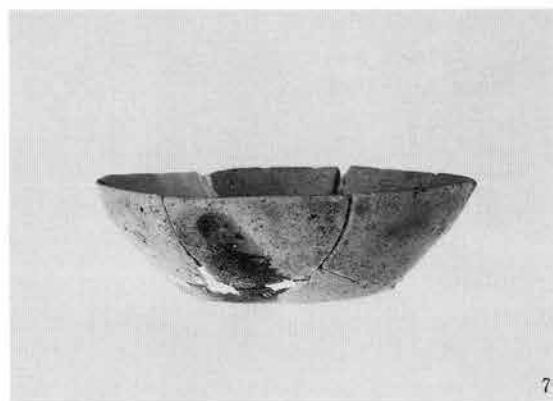
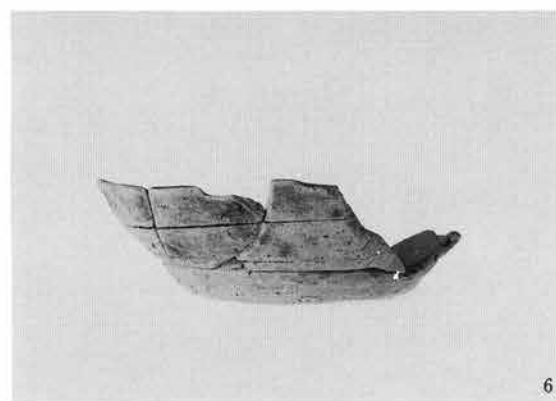
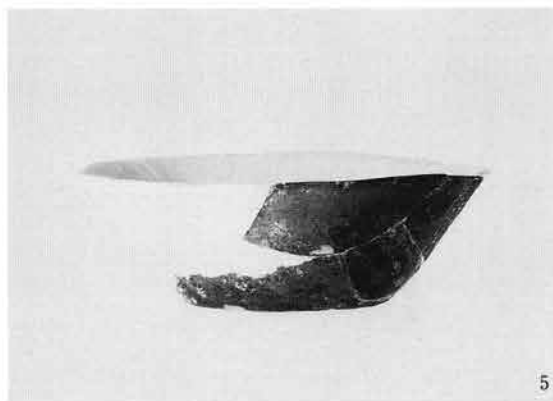
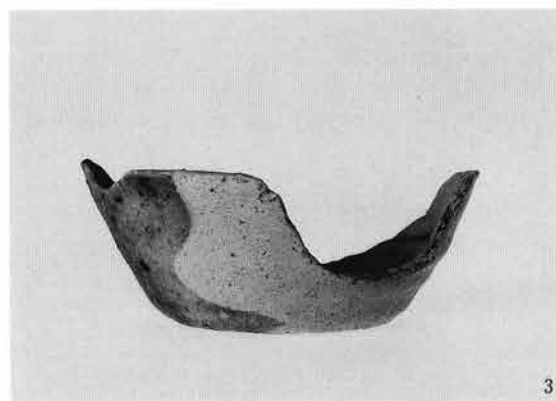
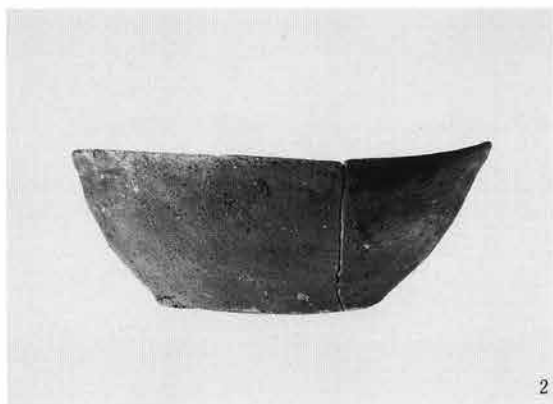
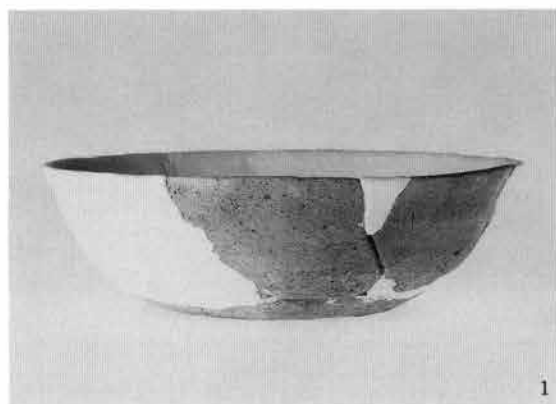
6 15号土坑掘形 (南より)



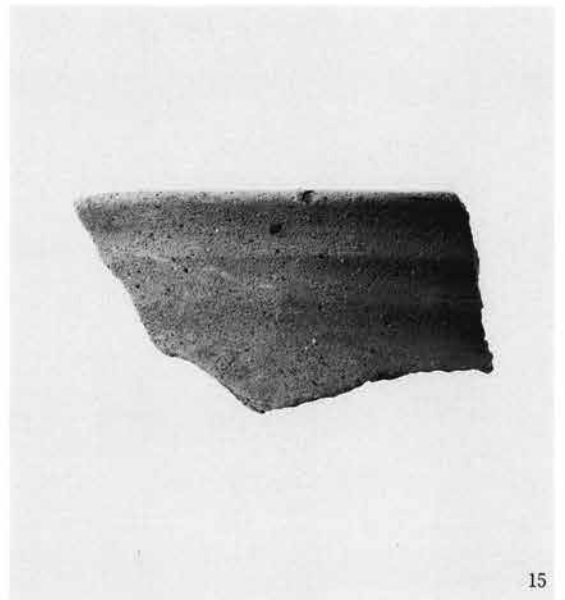
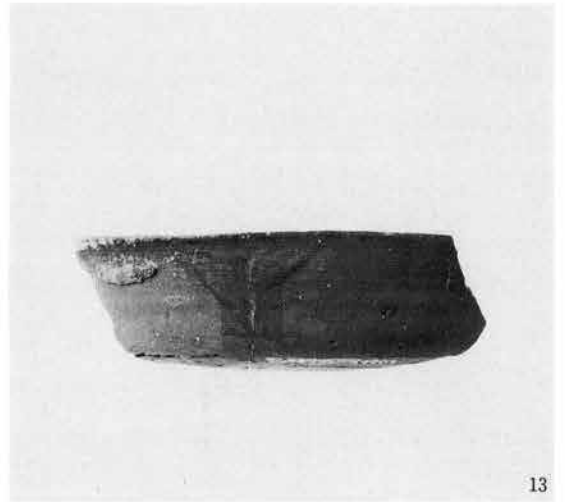
7 16-a・b号土坑 (南より)



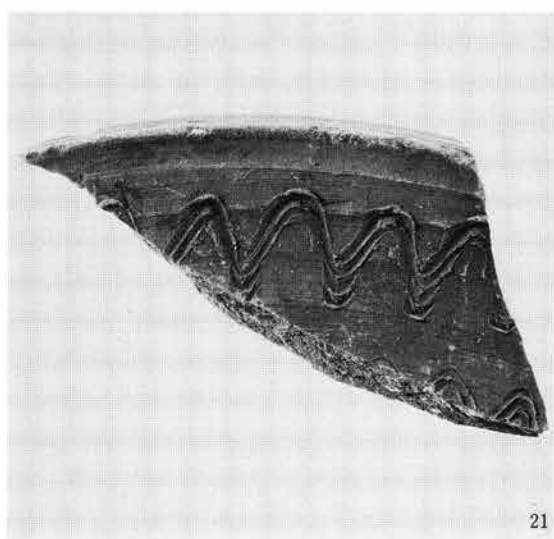
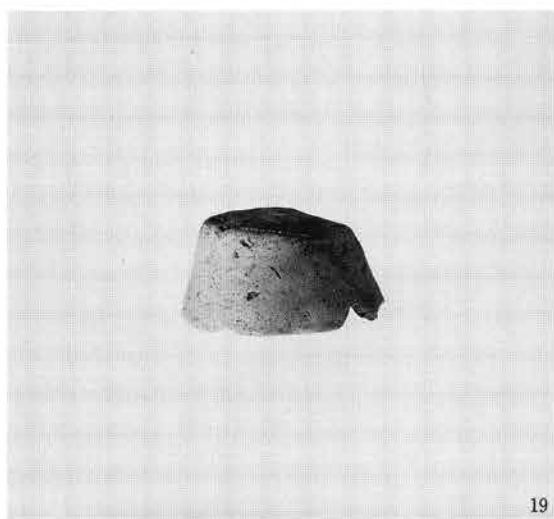
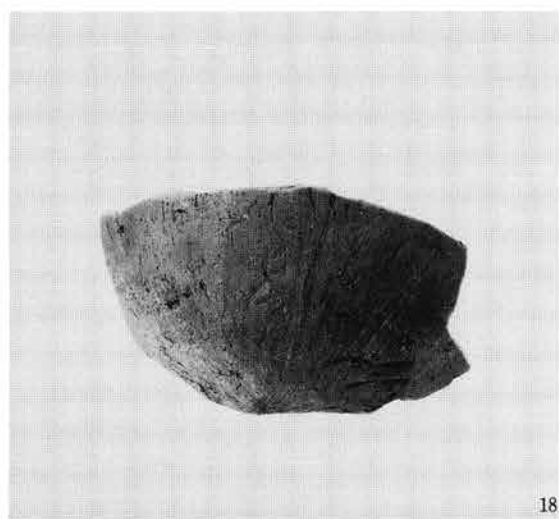
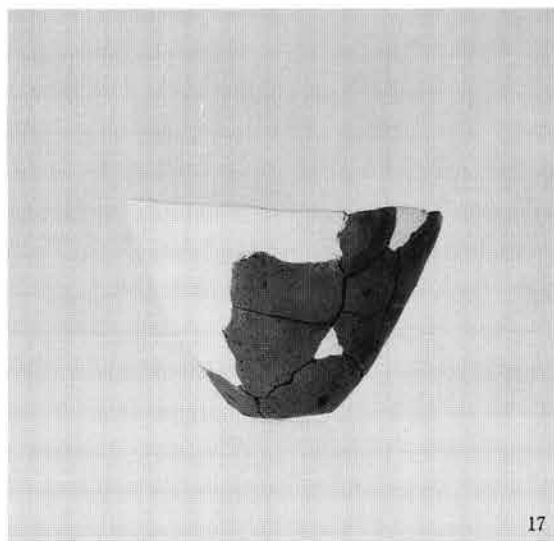
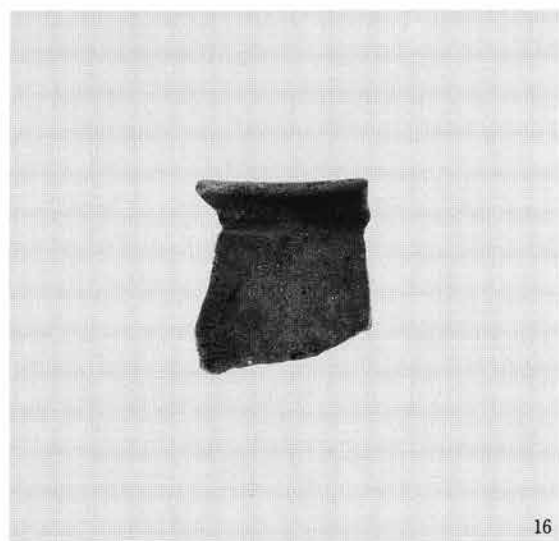
8 18号土坑 (南より)



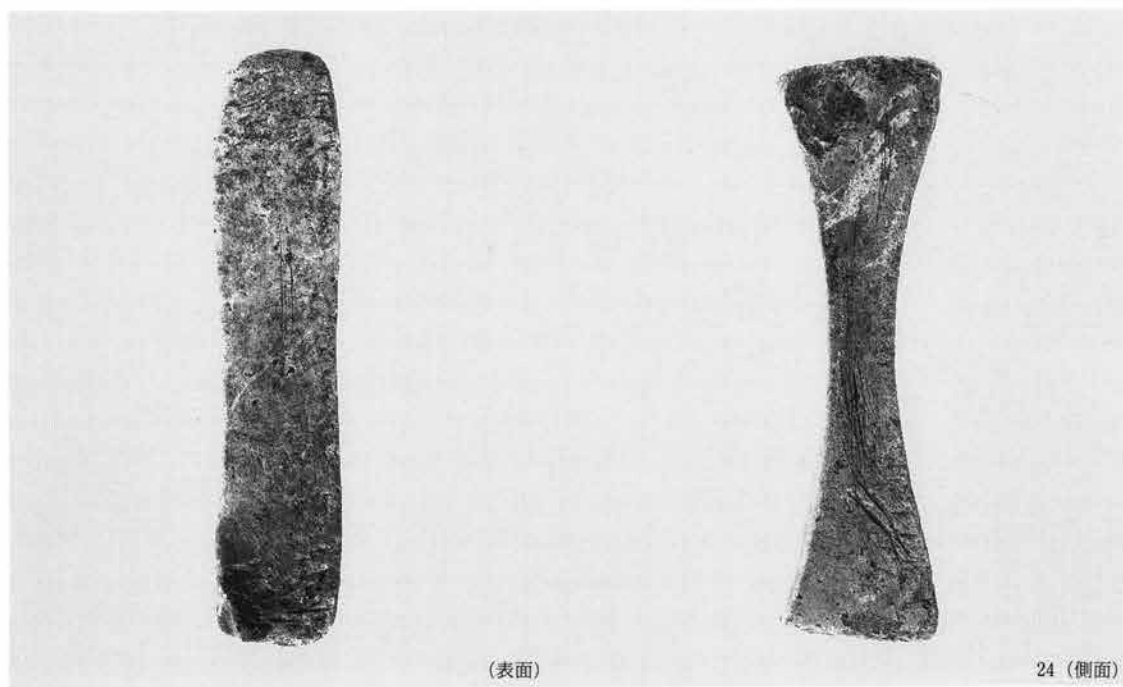
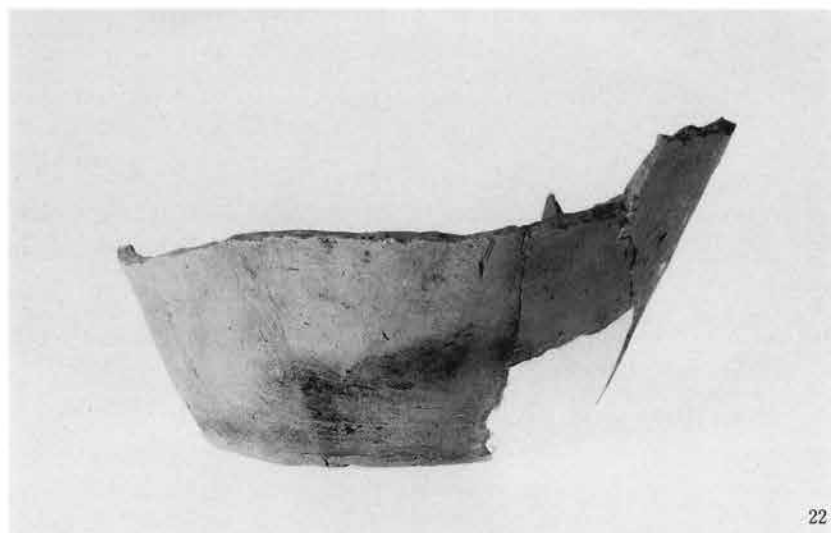
1号住居跡出土遺物 (1)







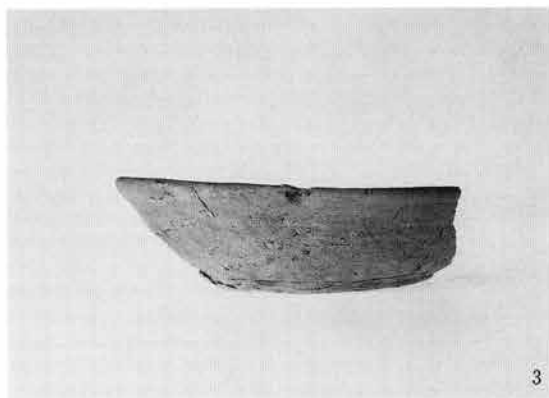
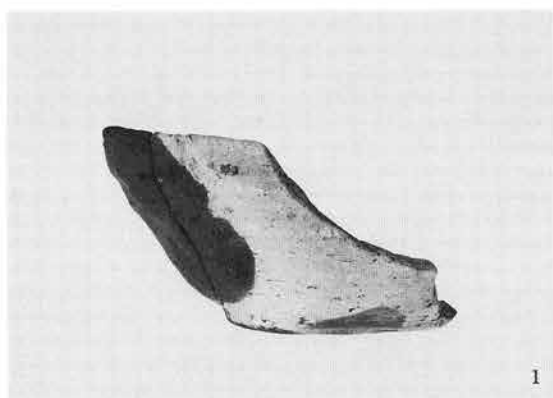
1号住居跡出土遺物 (3)



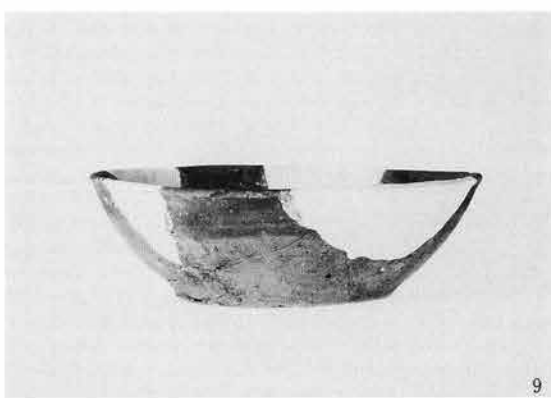
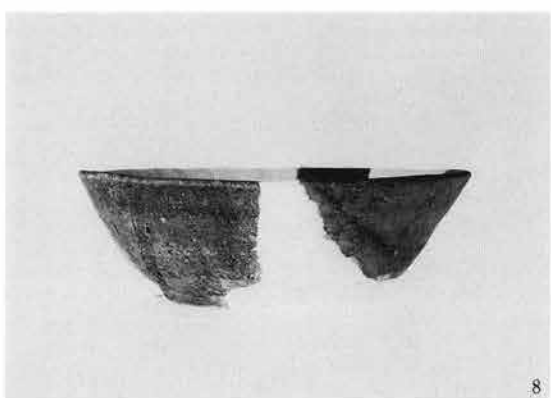
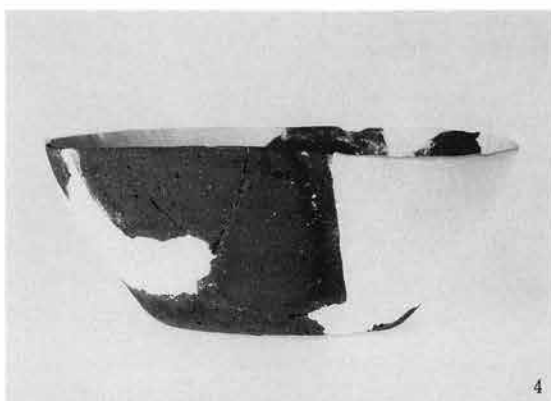
(表面)

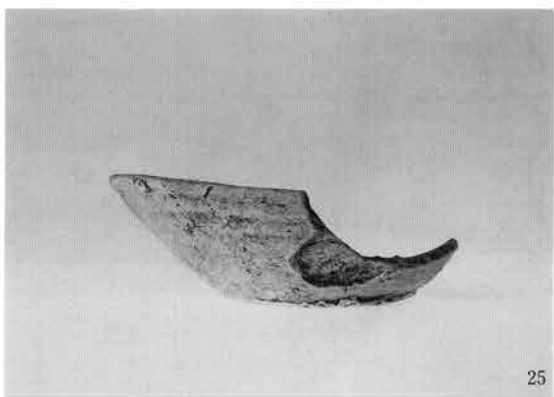
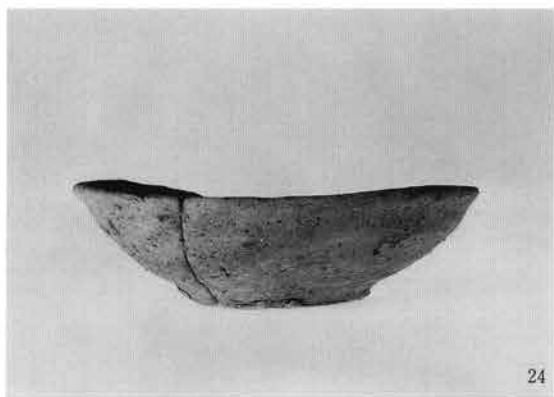
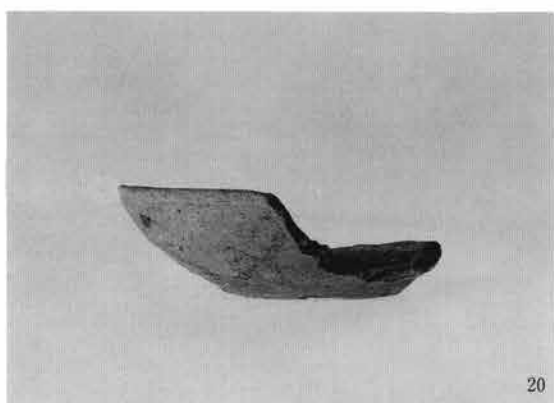
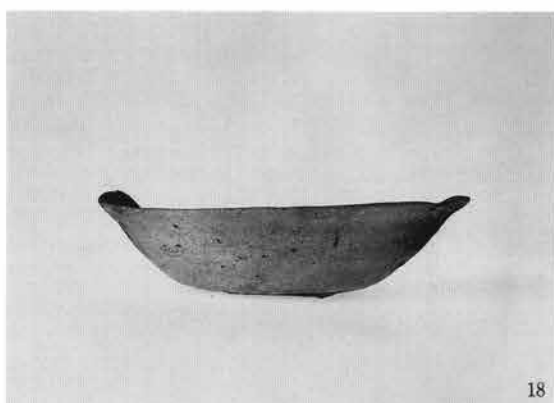
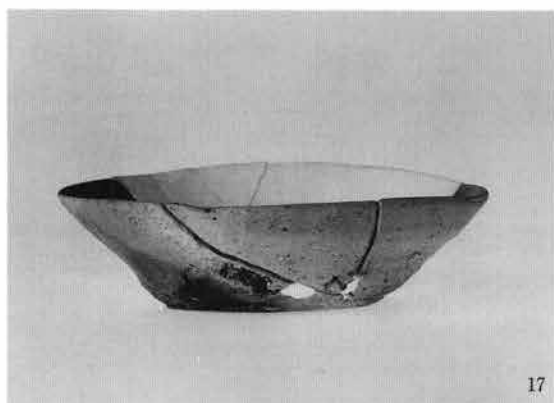
24 (侧面)

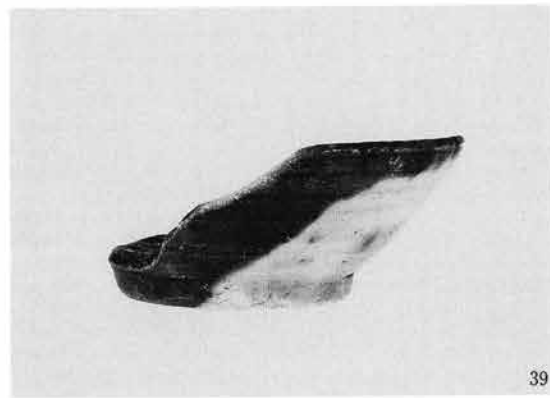
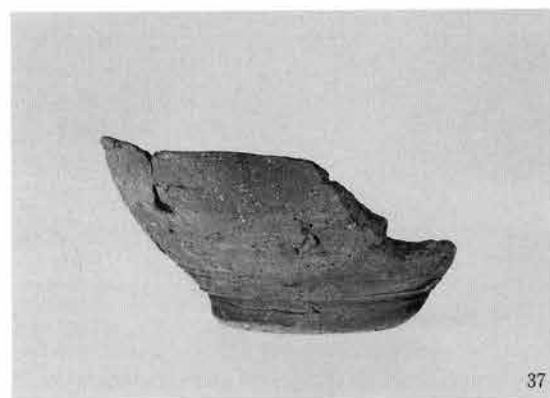
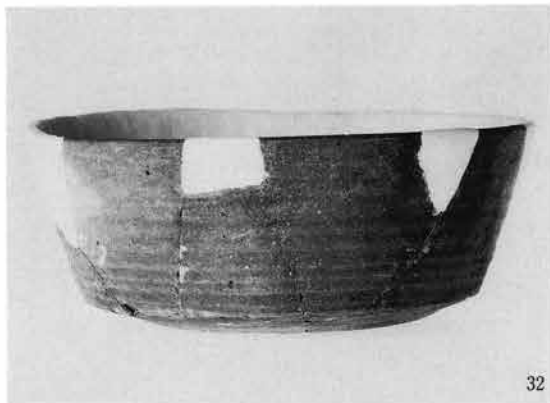
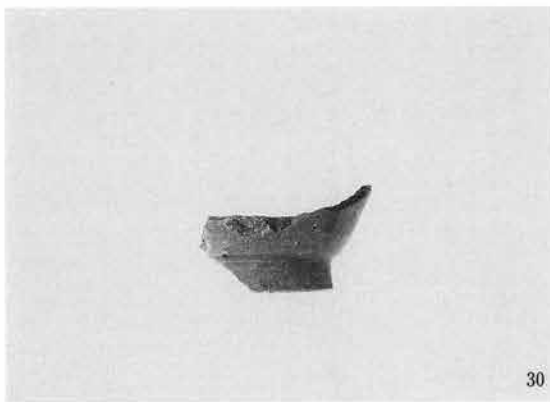
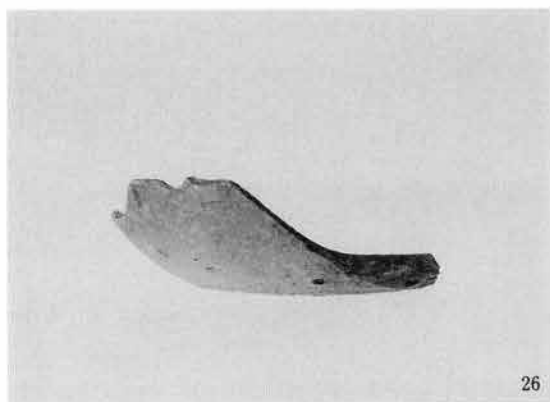
1号住居跡出土遺物 (4)

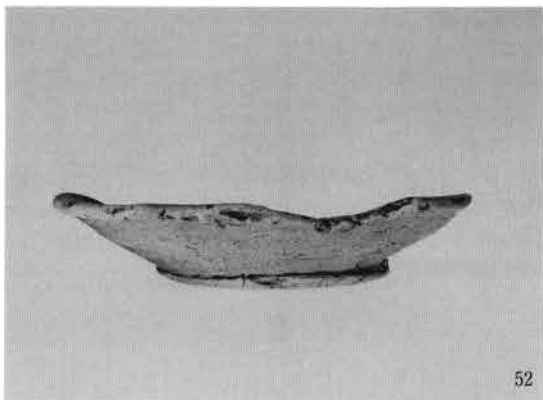
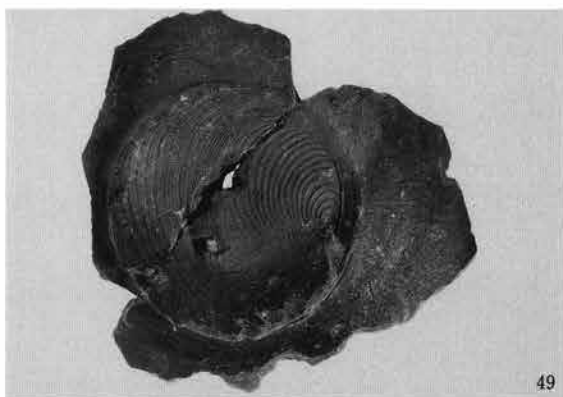
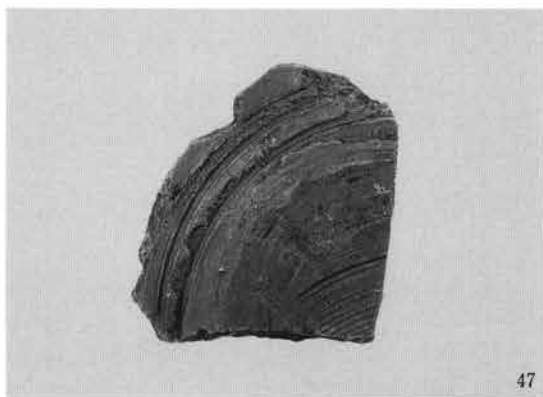
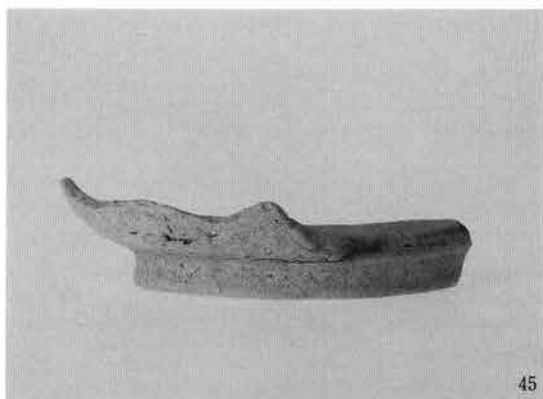


1区J-09落ち込み出土遺物

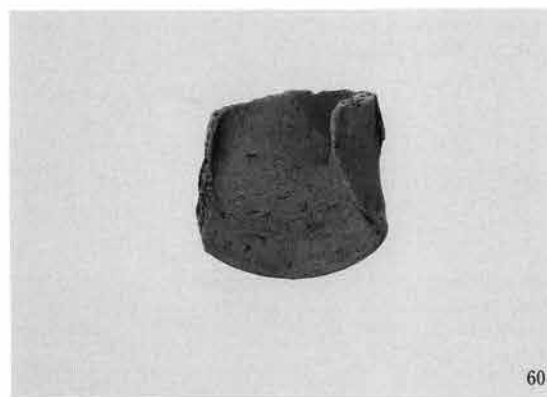




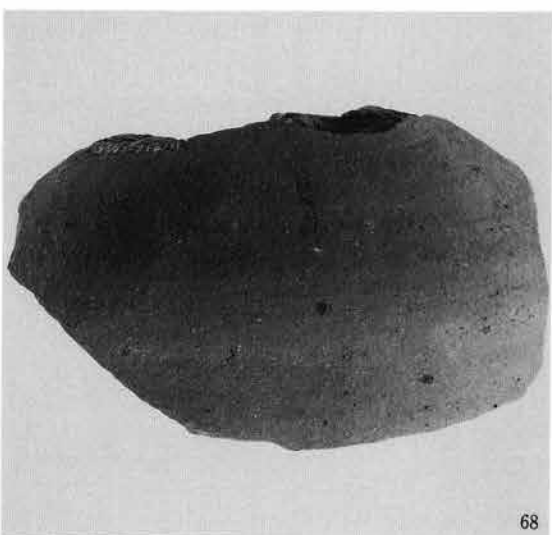
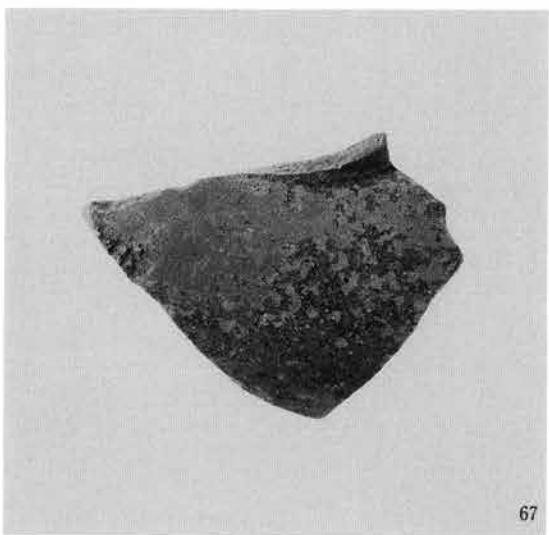
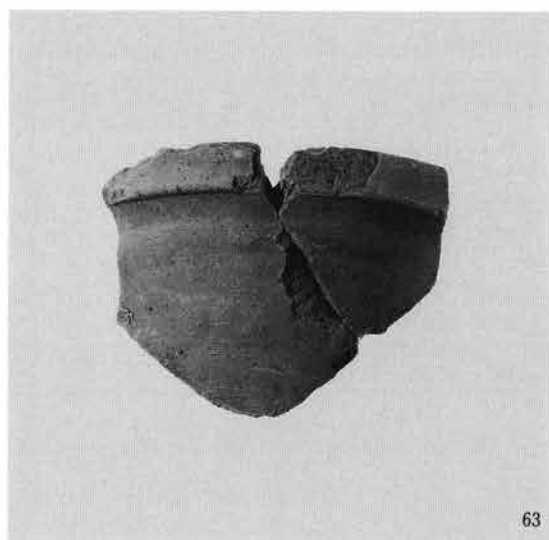




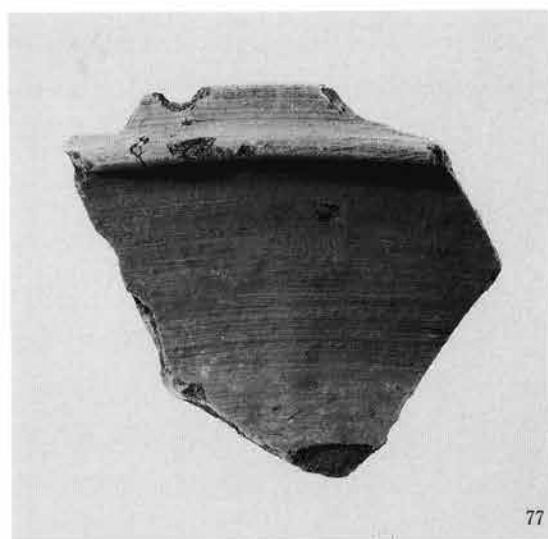
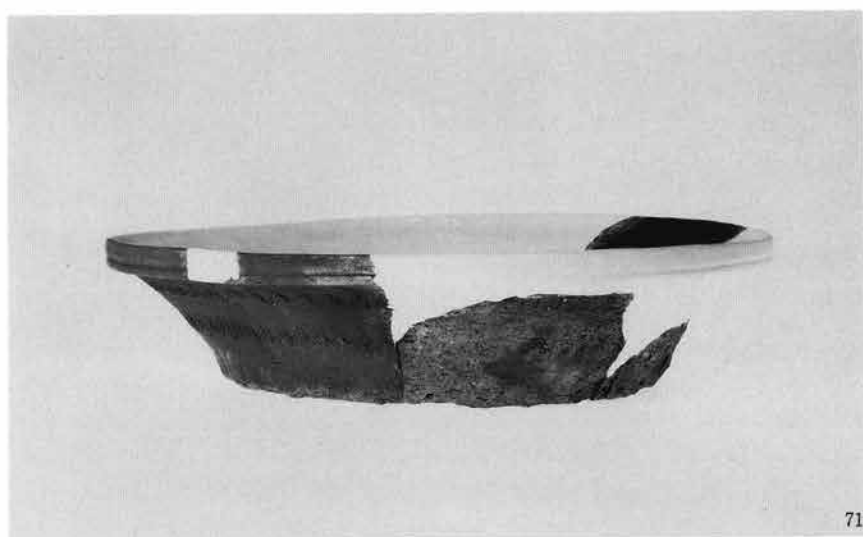
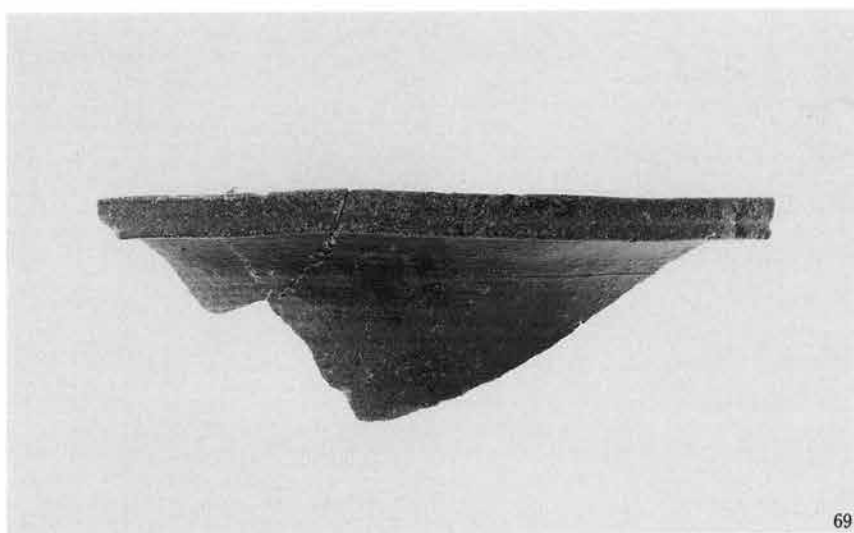
平安時代包含層出土遺物 (4)

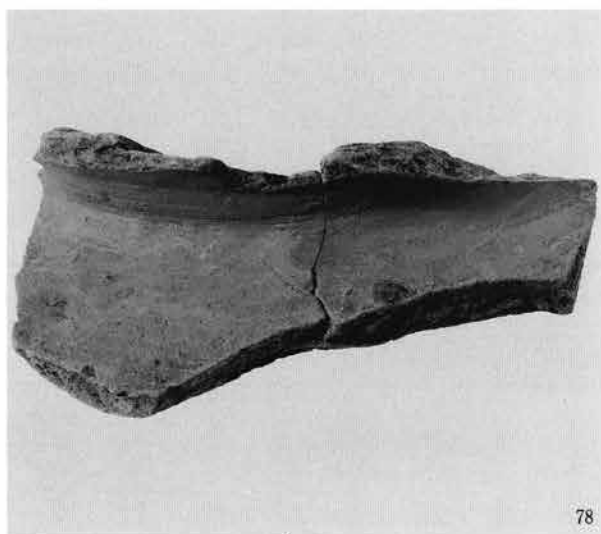






平安時代包含層出土遺物 (6)





78



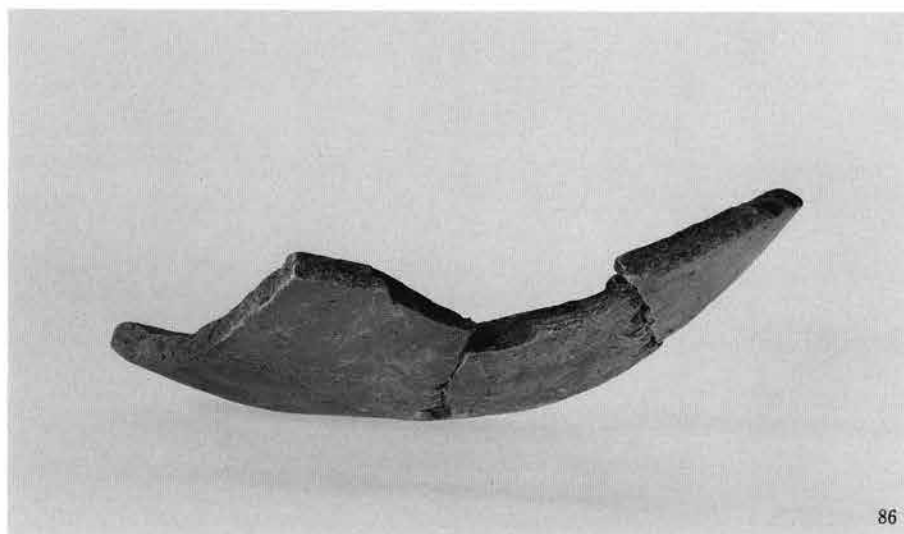
79



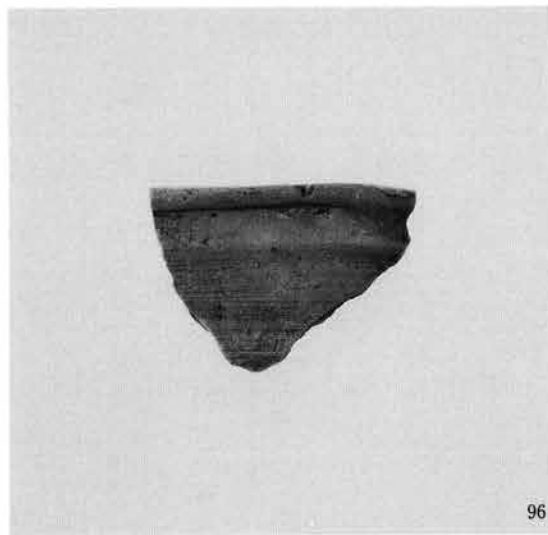
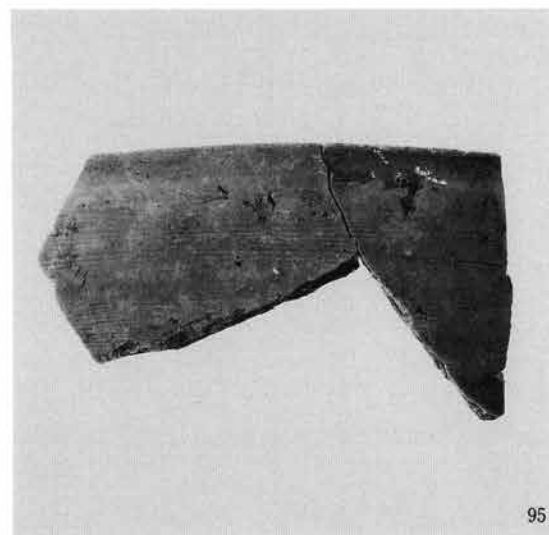
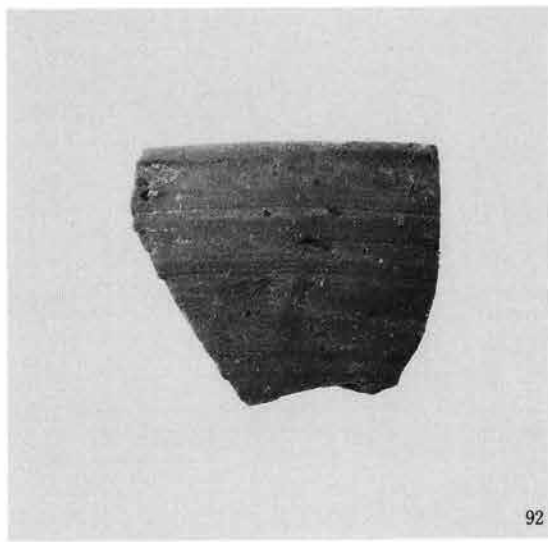
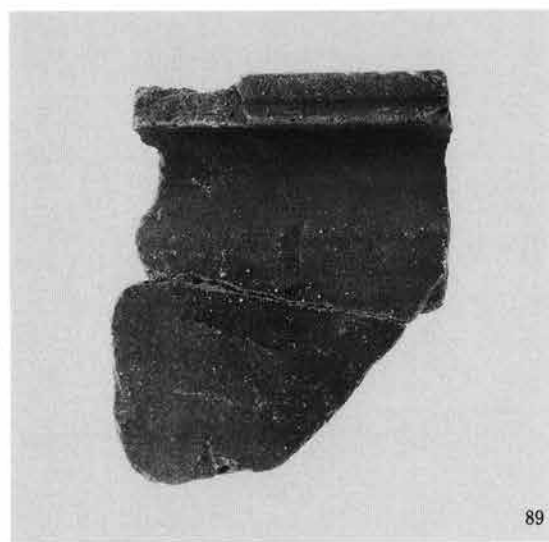
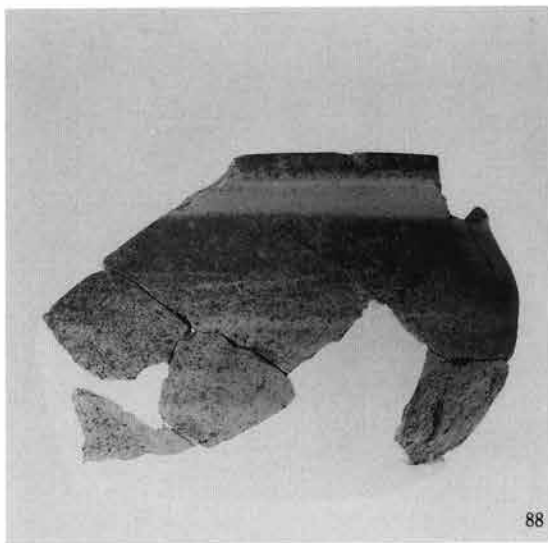
81

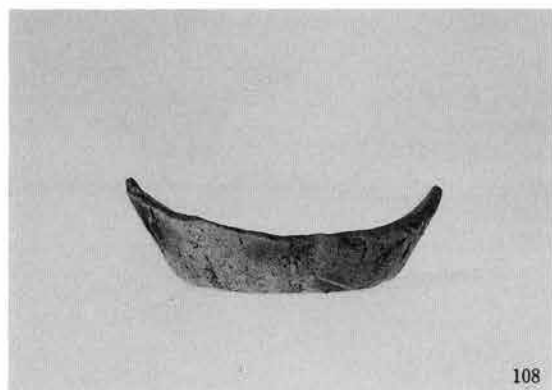
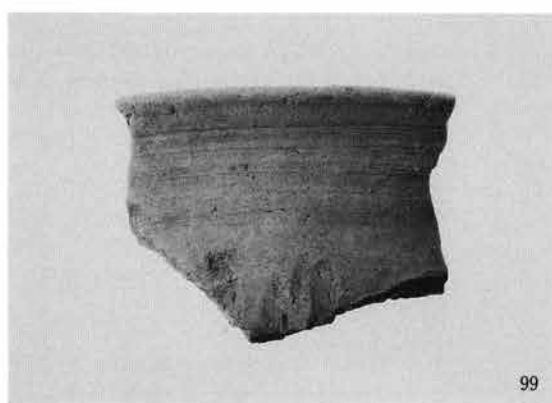


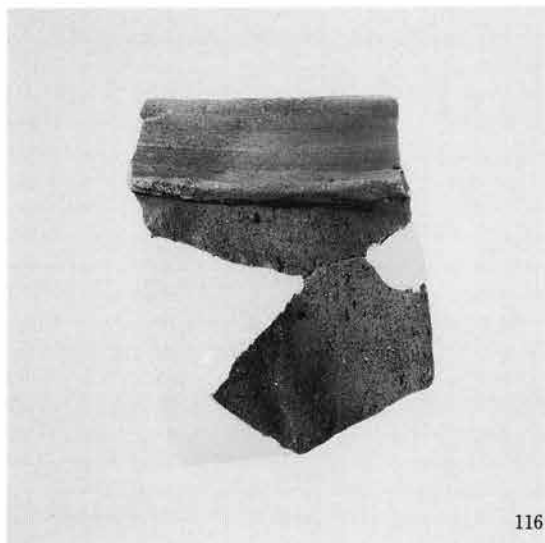
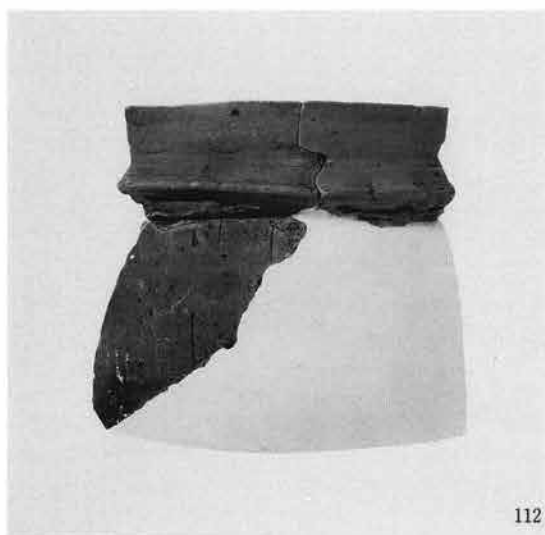
84



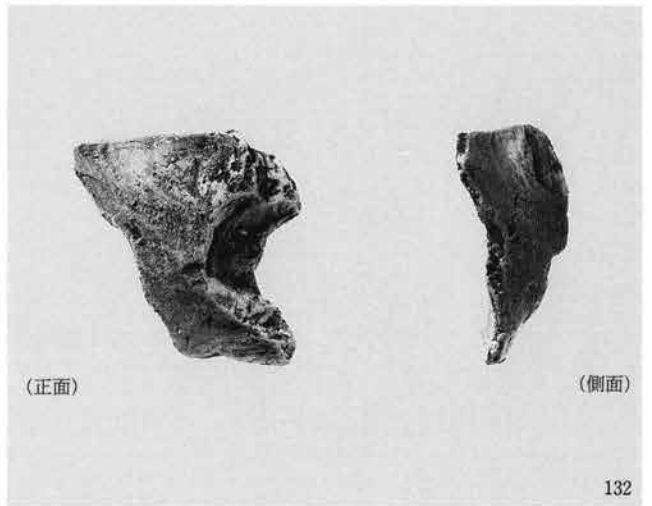
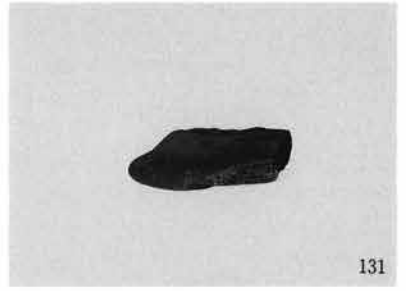
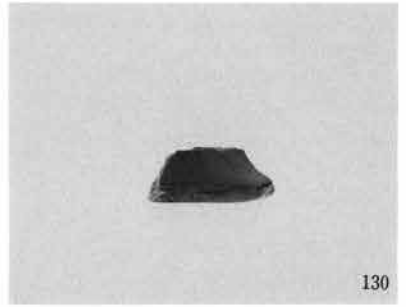
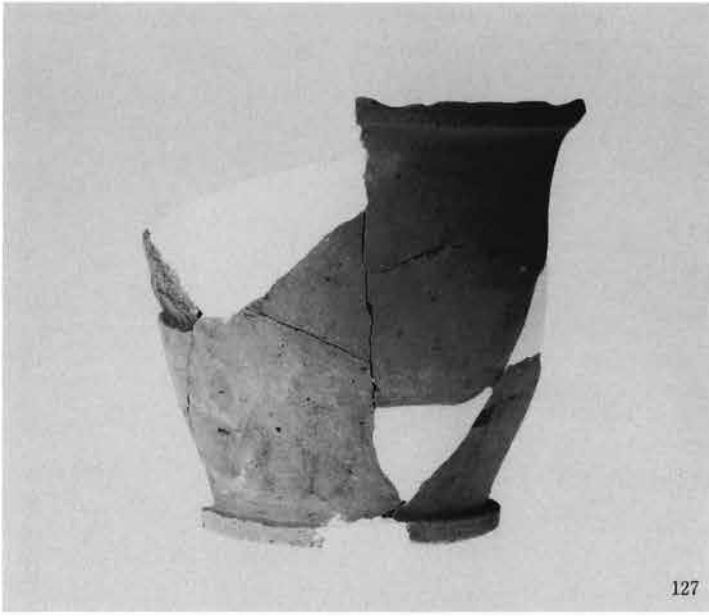
86



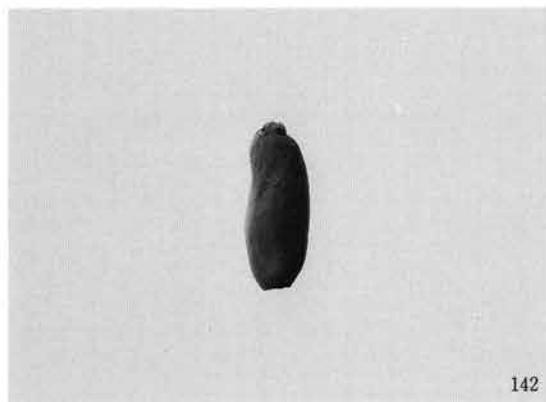
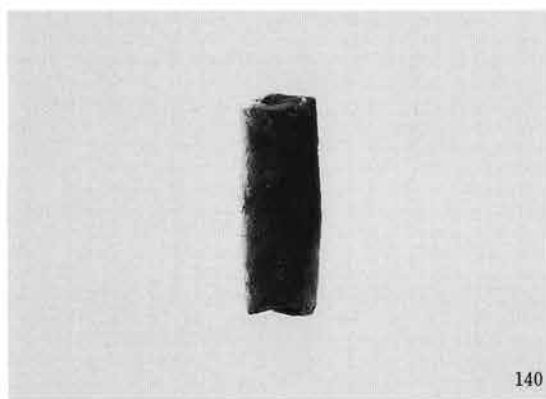
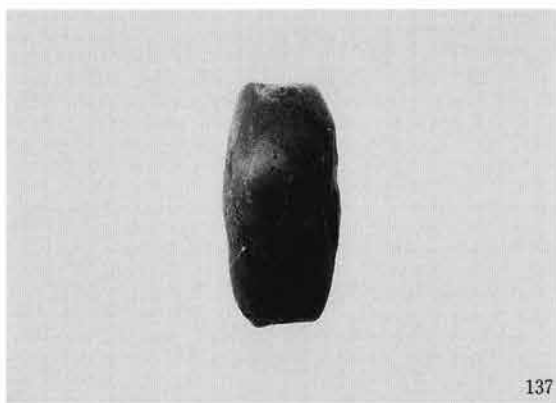


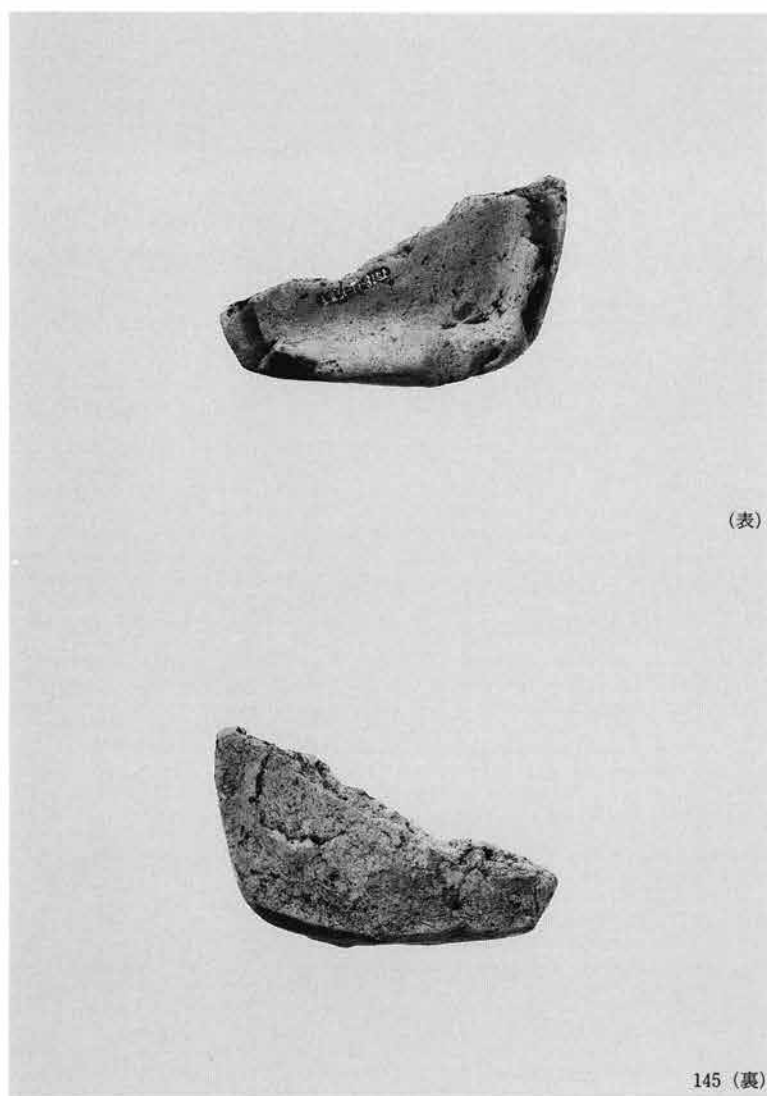
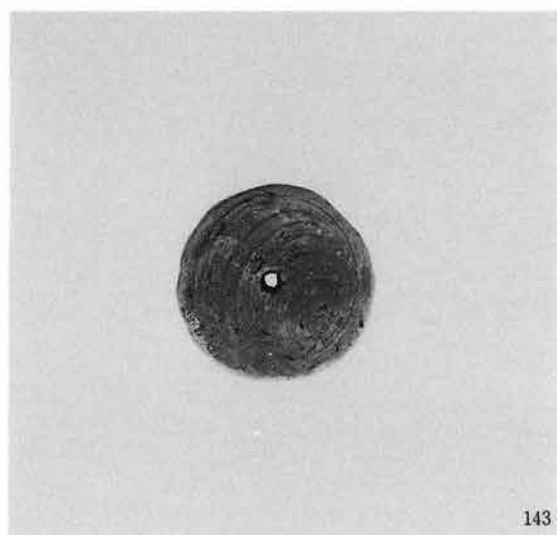


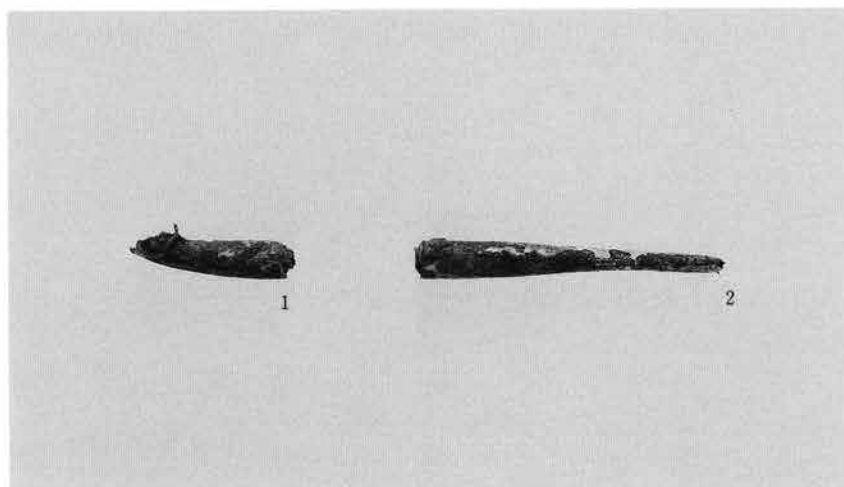
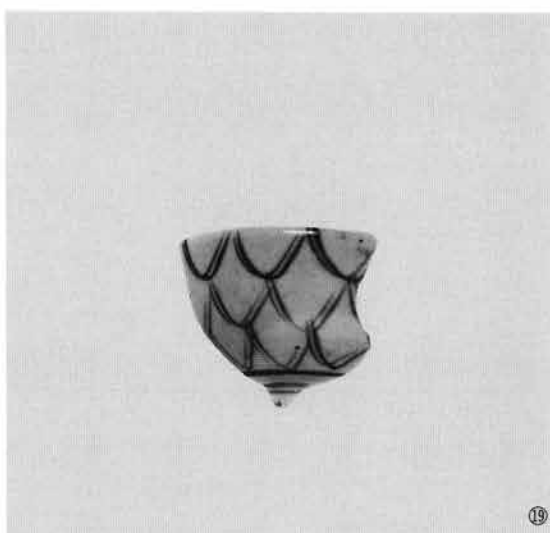












1号井戸出土遺物



①

13号土坑



②



③

14号土坑



④



⑤



⑥



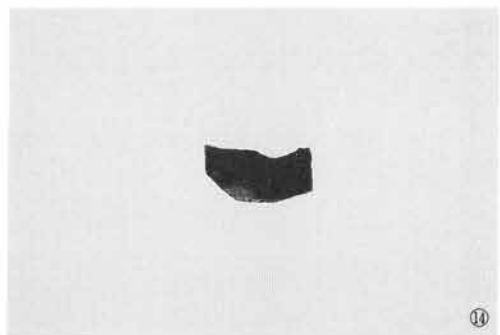
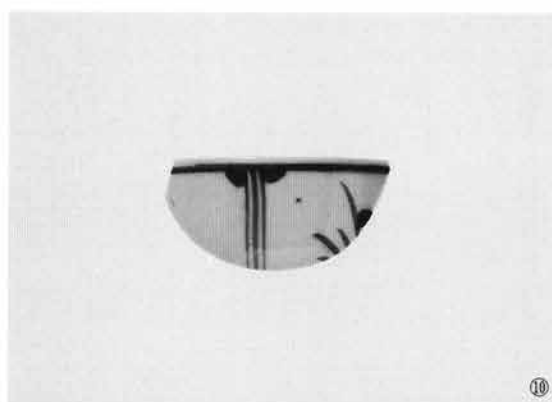
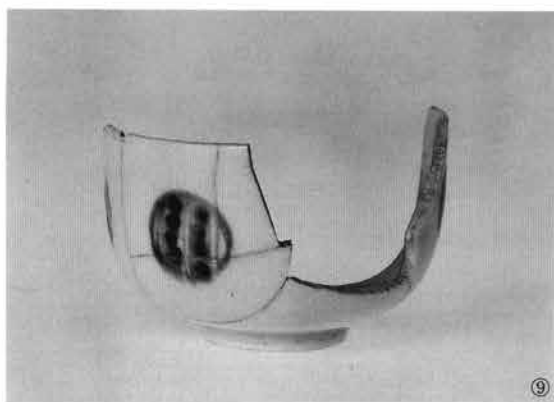
⑦



⑧

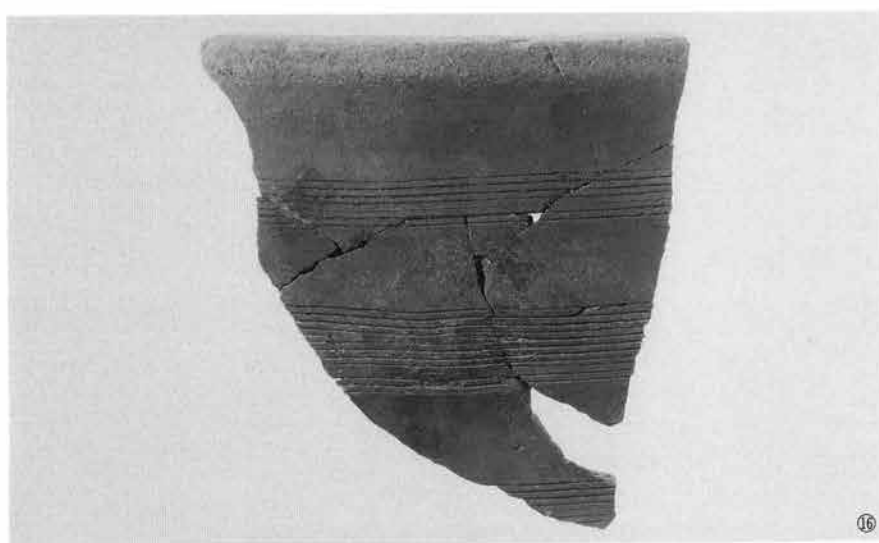
土坑出土遺物 (1)

15号土坑



土坑出土遺物 (2)

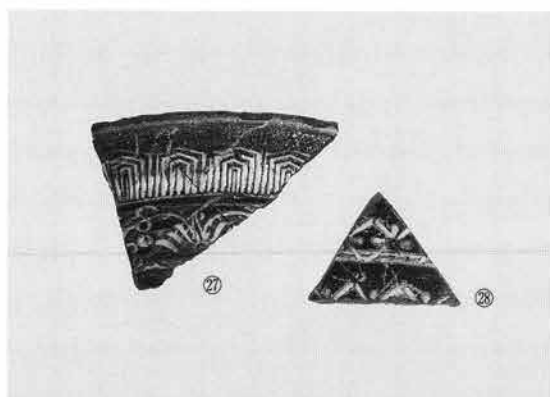
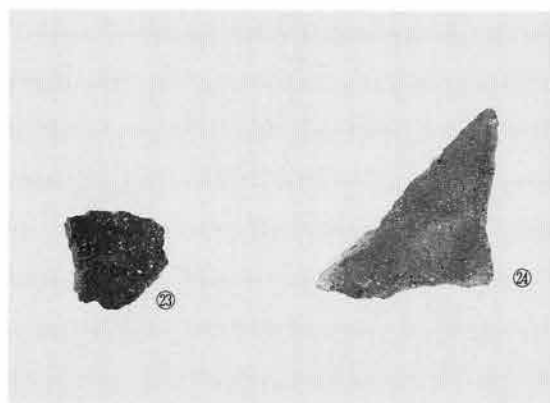
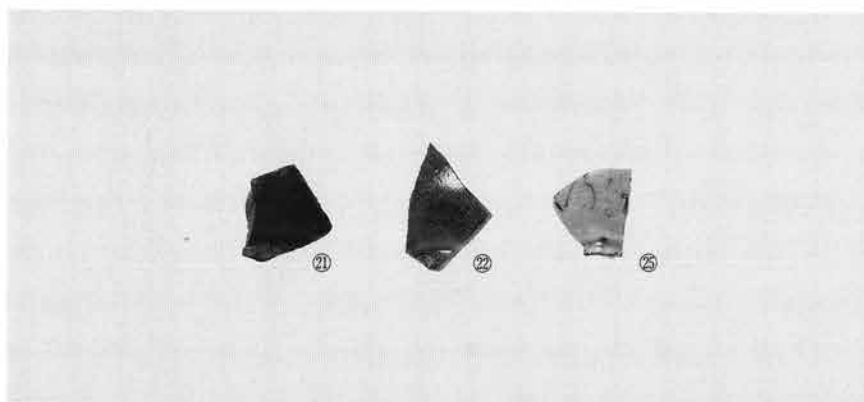
15号土坑



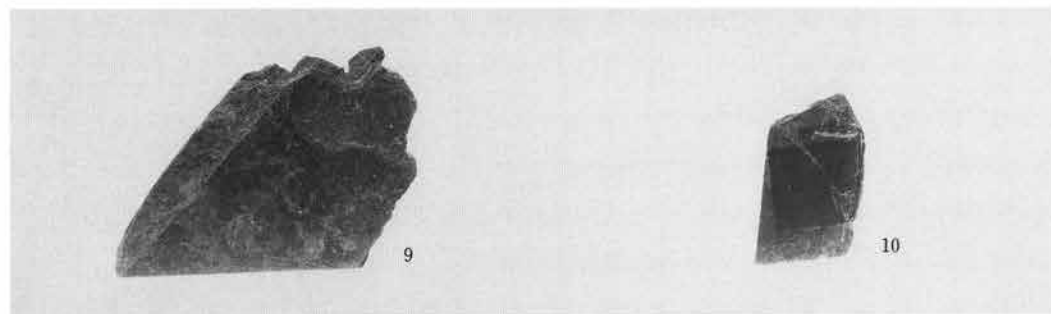
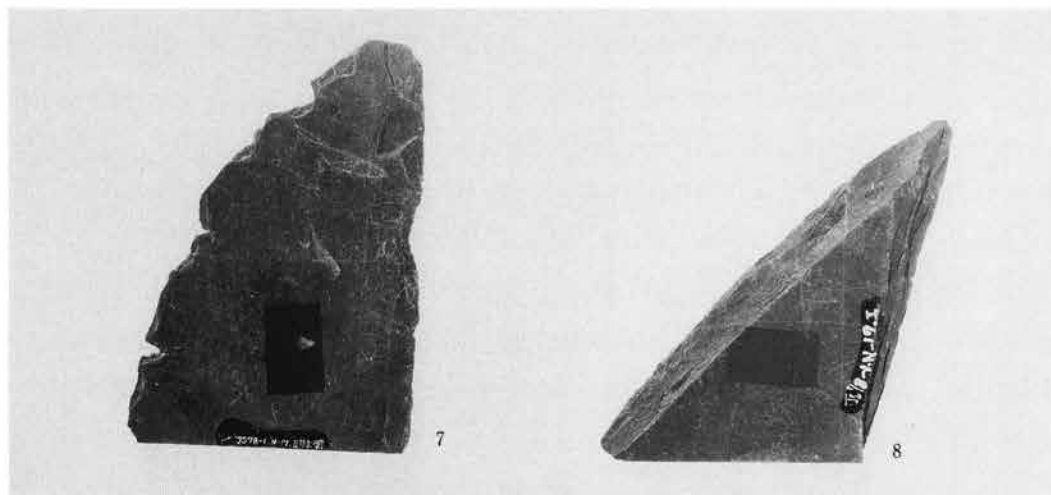
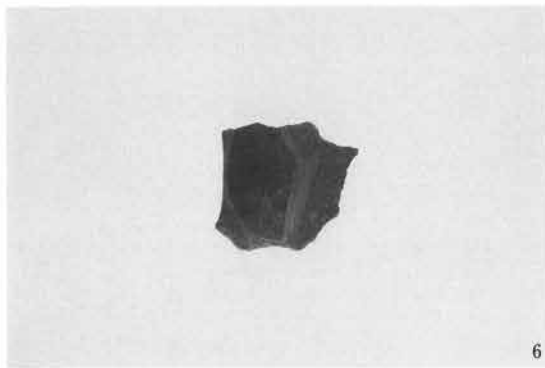
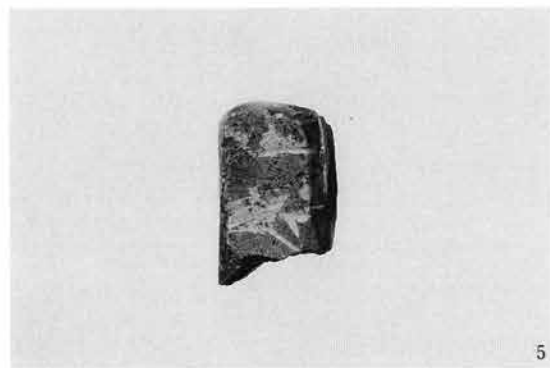
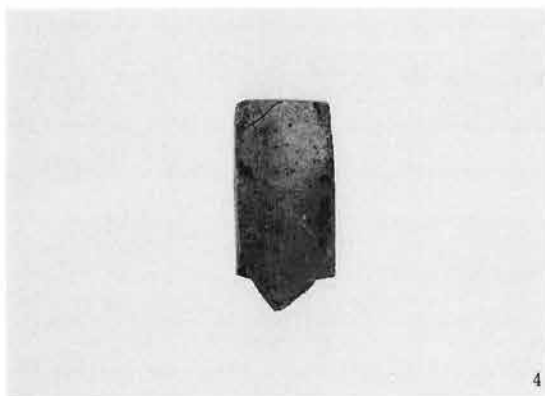
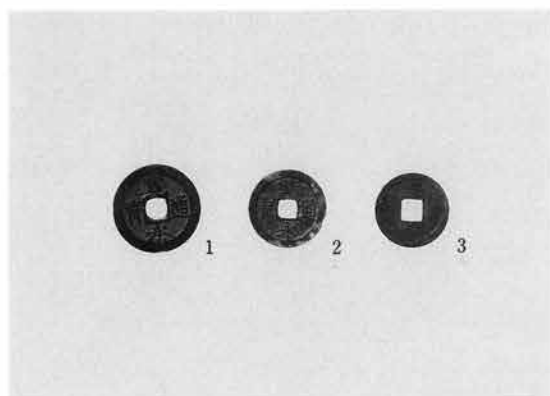
15号土坑



18号土坑



グリット出土の中・近世遺物 (1)



グリット出土の中・近世遺物 (2)



# 洞 II 遺跡





1 洞II遺跡遠景（北西より）



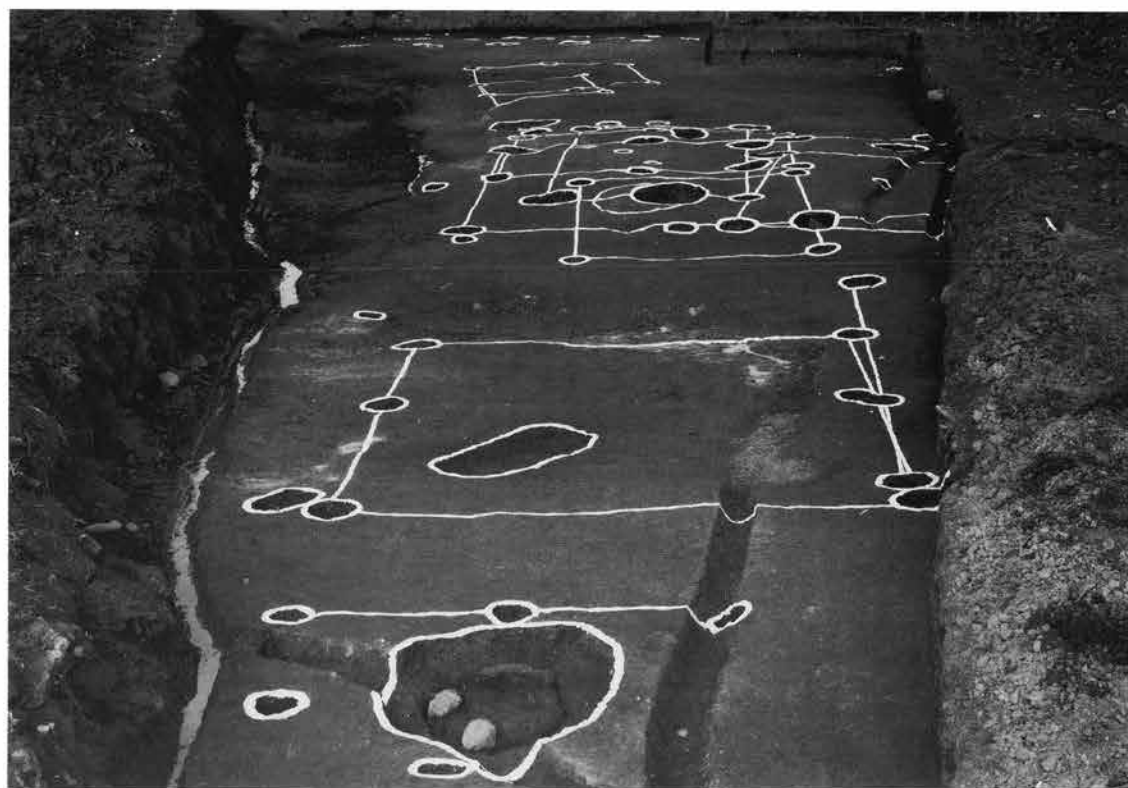
2 洞II遺跡調査状況（第1次調査、東南より）



1 1・2号溝および2～7号土坑（南より）



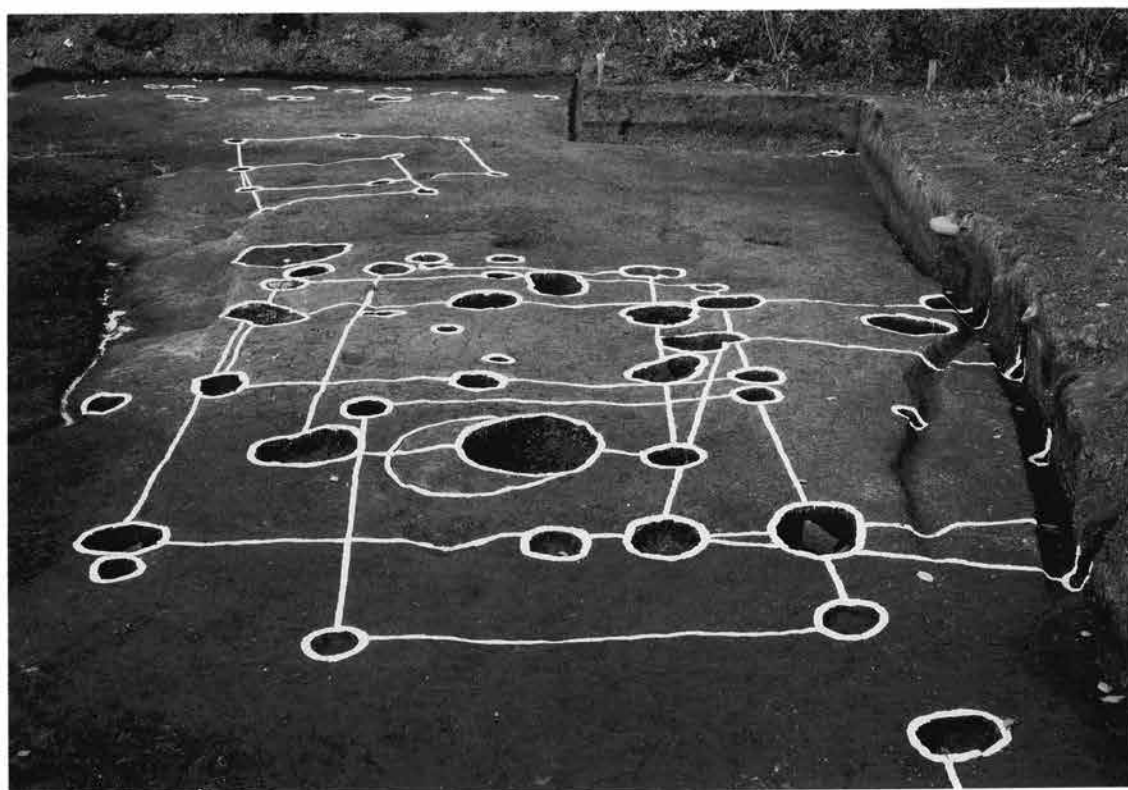
2 1号柱列および3号溝周辺（南より）



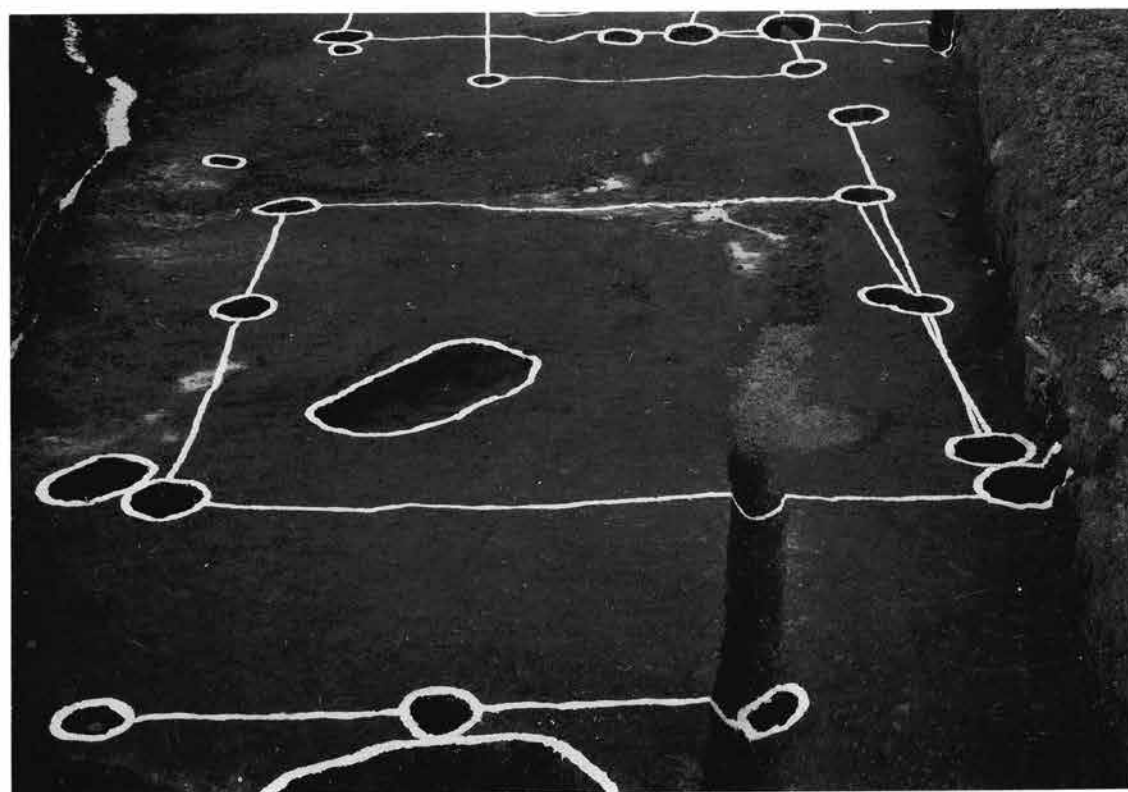
1 掘立柱建物群南半（南より）



2 掘立柱建物群北半（南東より）

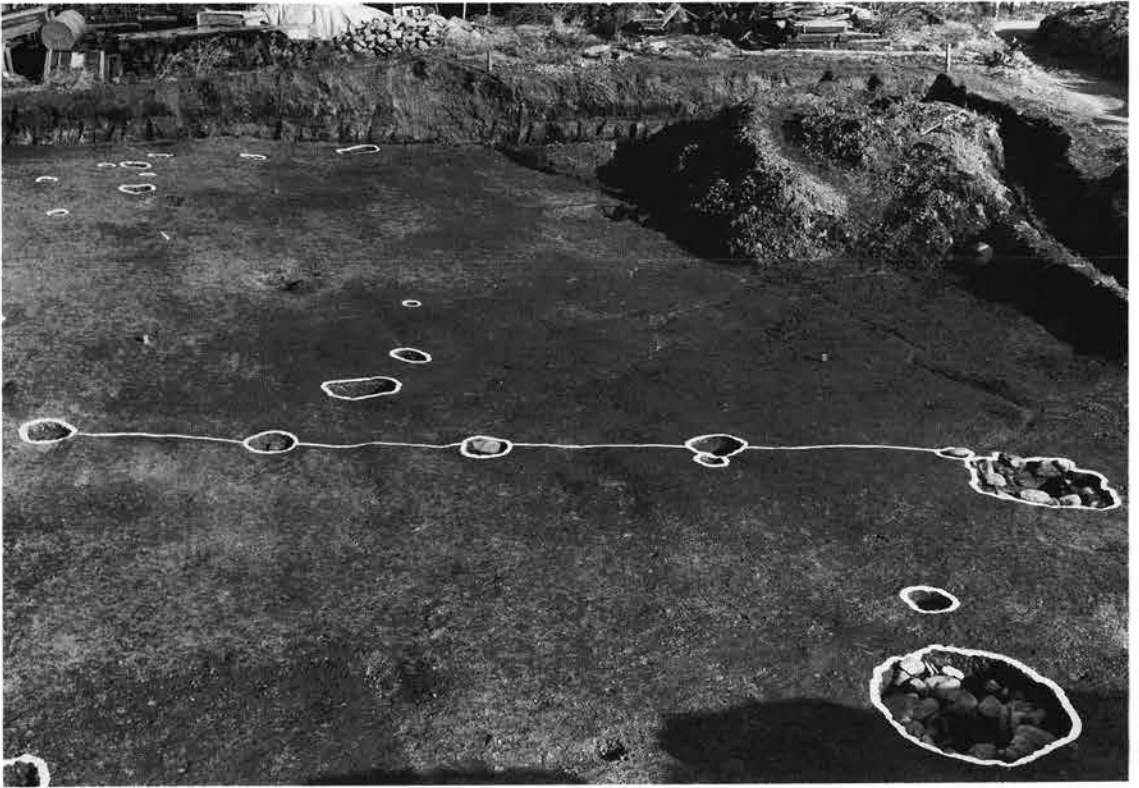


1 1～7号掘立柱建物（南より）



2 8号掘立柱建物と2・3号柱列（南より）





1 1号柱列と2・3号井戸（西より）



2 鍛冶屋敷跡（南より）



1 3号溝 (東より)



2 3-c 構の堰 (北西より)

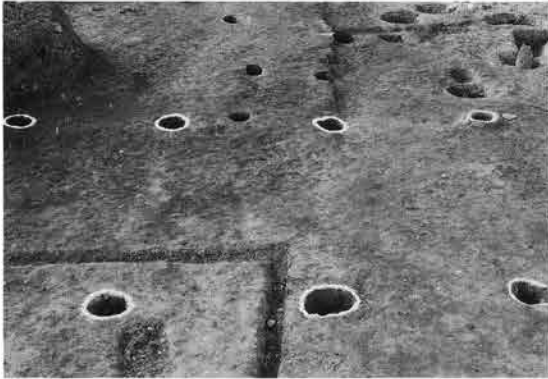




1 9号掘立柱建物（北西より）



2 10号掘立柱建物（北より）



3 11号掘立柱建物（東より）



4 12号掘立柱建物（東より）



5 13号掘立柱建物（南より）



6 12号掘立柱建物の柱痕（北より）



7 1号土坑（上面、西より）



8 1号土坑（下面、北より）



1 3号溝土層断面（東より）



2 3号溝蔵骨器出土状態（東より）



3 3号溝木器出土状態（南東より）



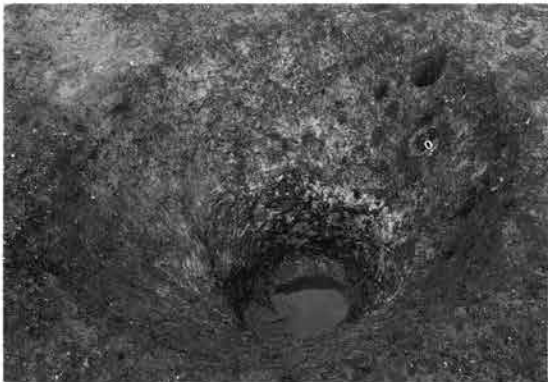
4 3号溝銭貨出土状態（東より）



5 2号井戸（北より）



6 3号井戸（北より）



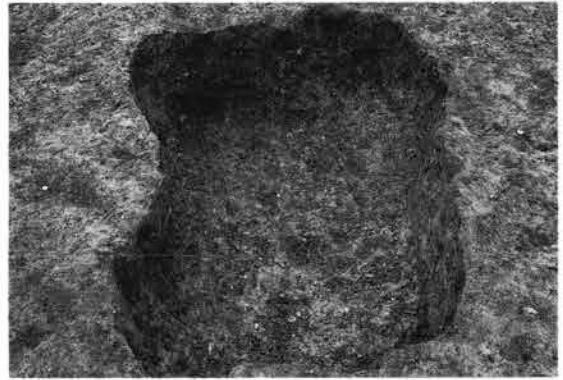
7 4号井戸（南より）



8 5号井戸（北東より）



1 2号土坑 (南東より)



2 3号土坑 (南東より)



3 8号土坑 (南より)



4 9号土坑 (西より)



5 13号土坑 (東より)



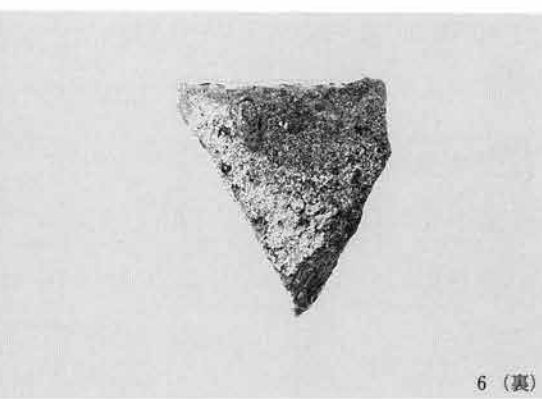
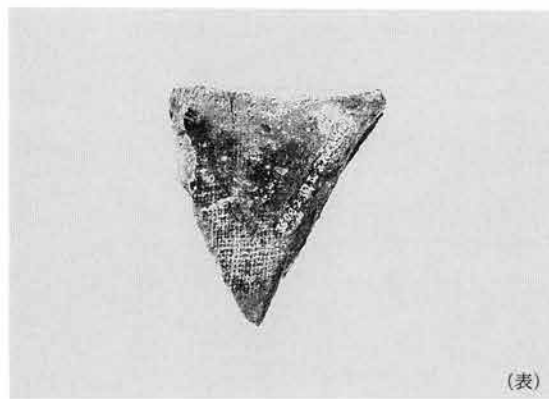
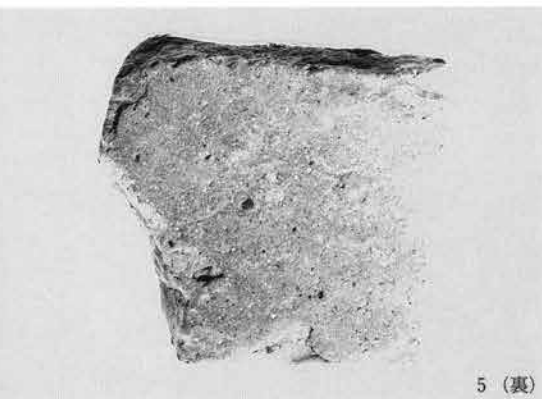
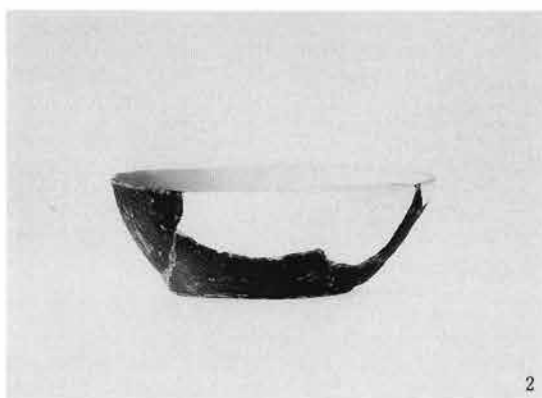
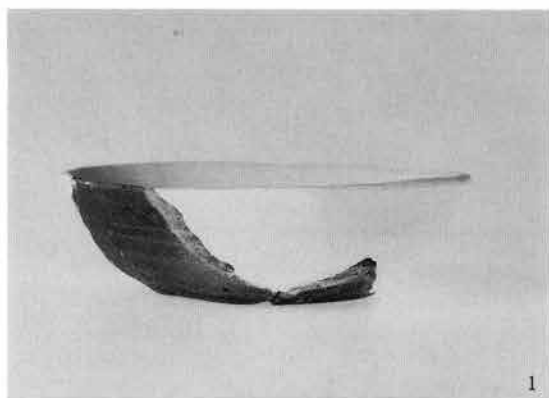
6 10号土坑 (東より)



7 15号土坑 (南西より)

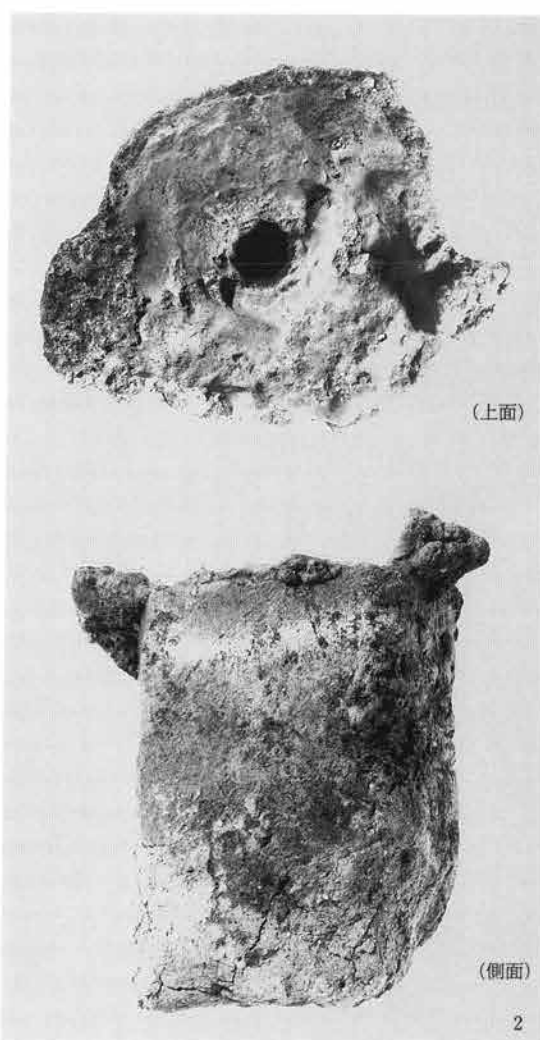
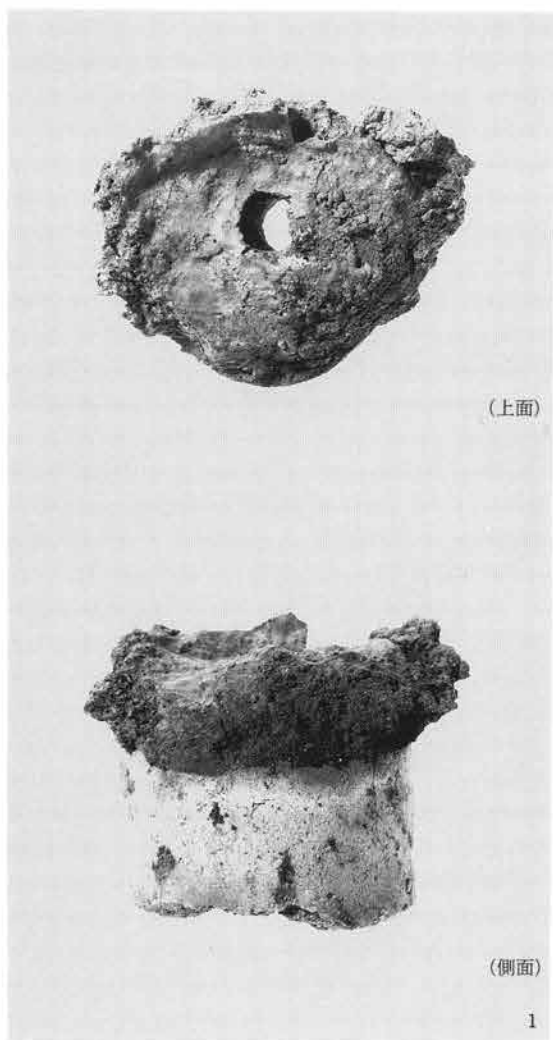


8 17号土坑 (北より)

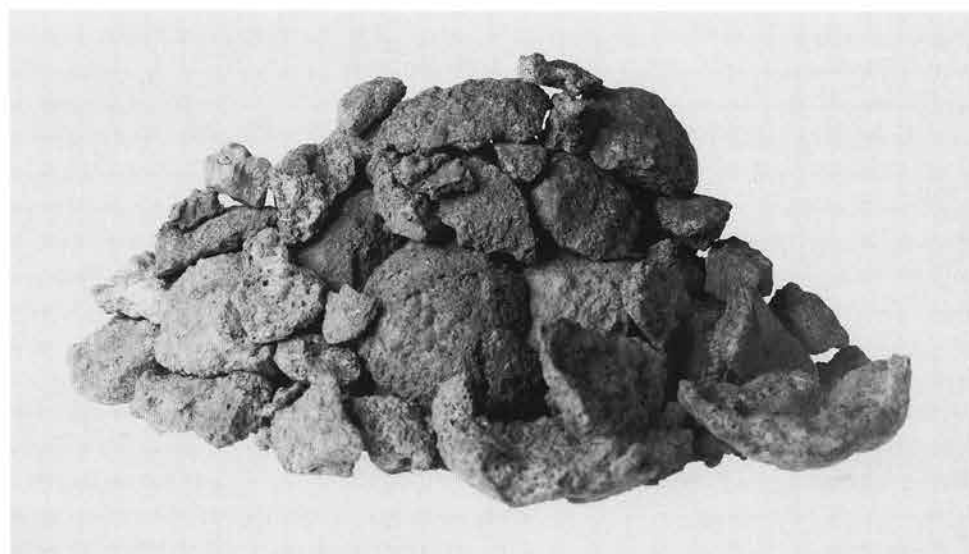


グリット出土の平安時代遺物

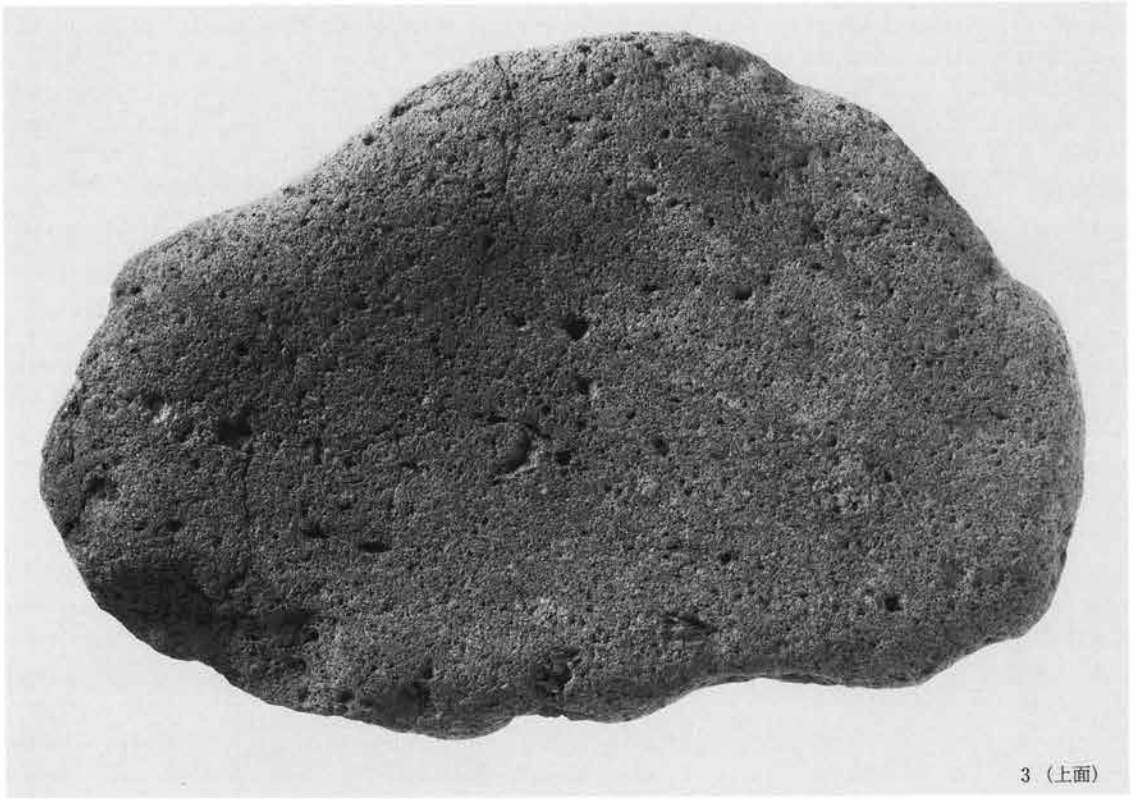




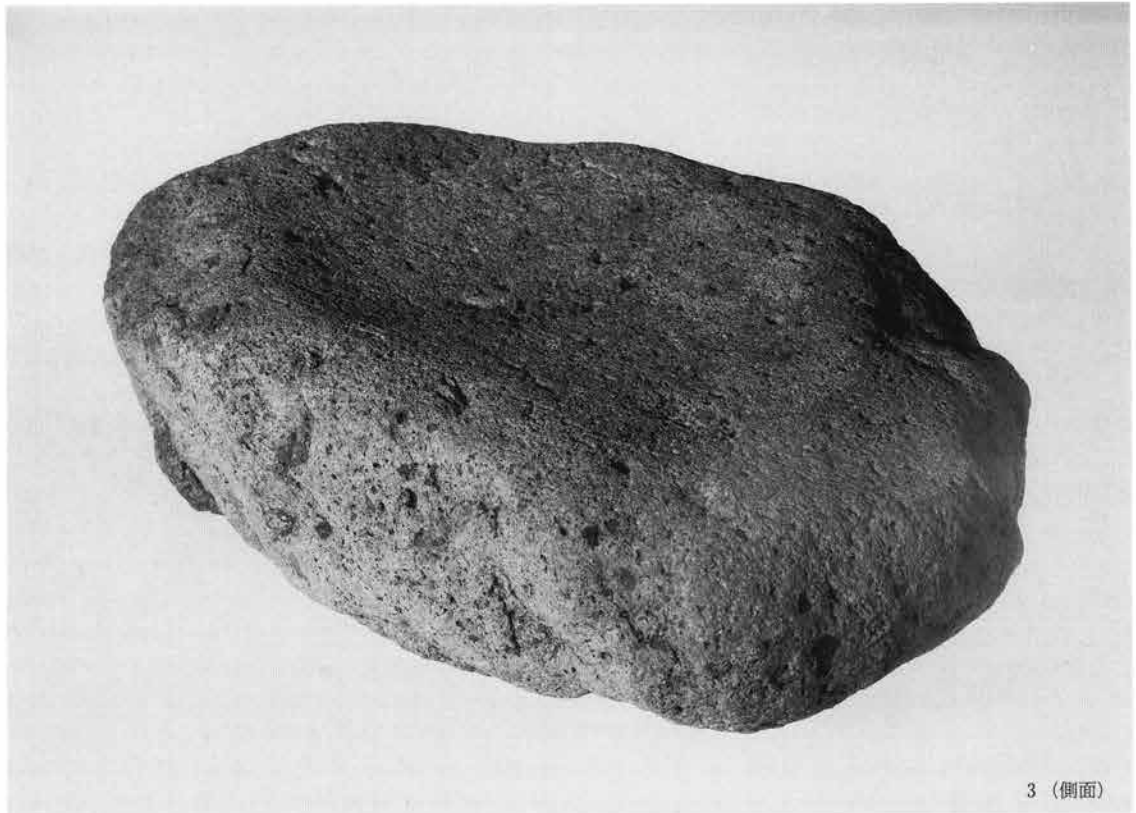
1 鍛冶屋敷跡関連の1号土坑出土遺物



2 鍛冶屋敷跡関連の3号溝出土鉄滓

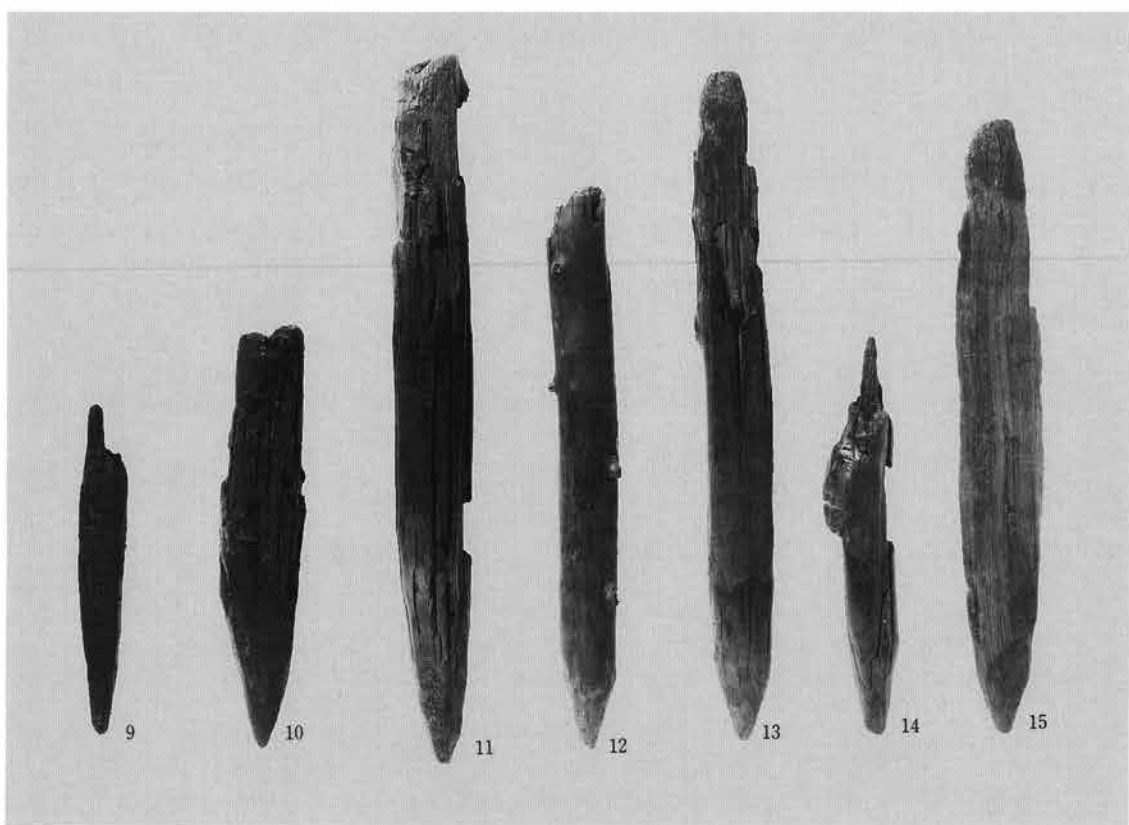
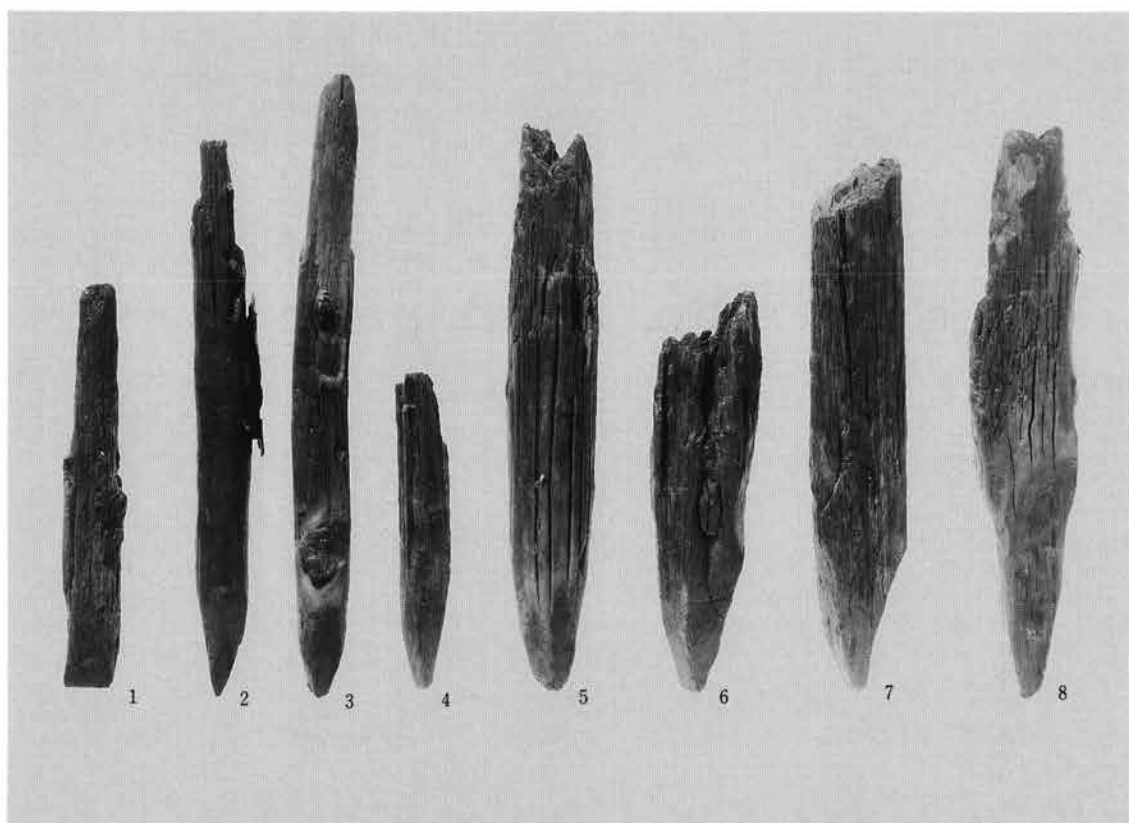


3 (上面)

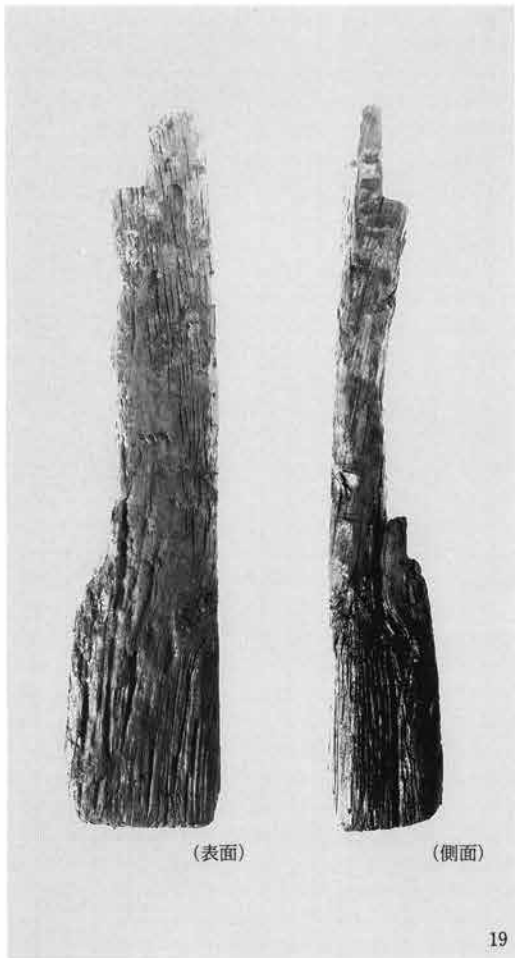
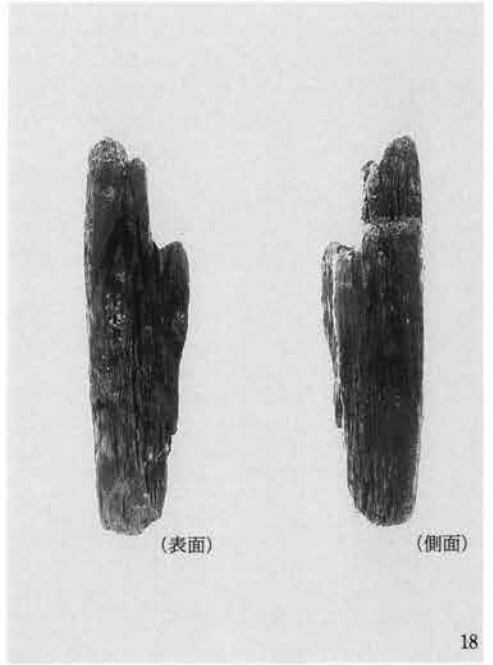


3 (側面)

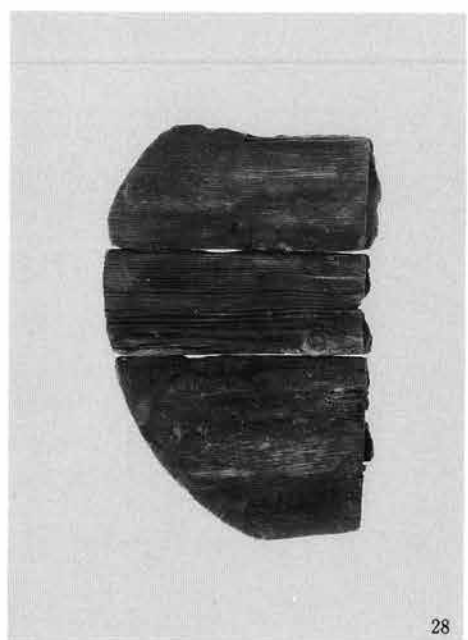
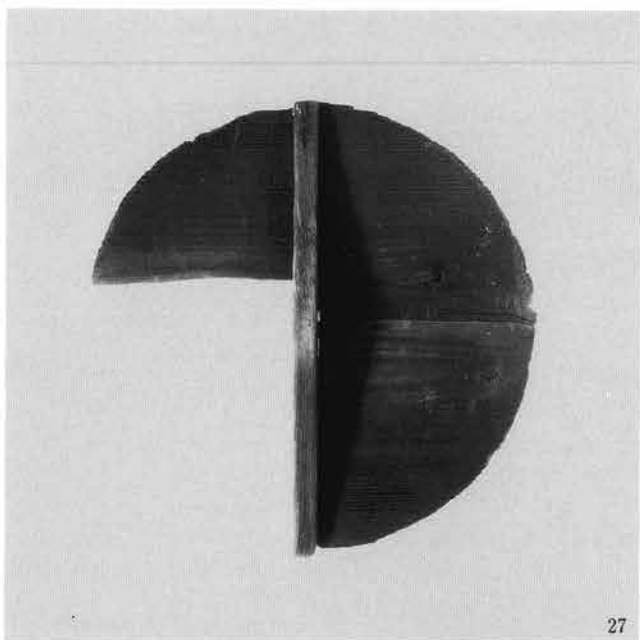
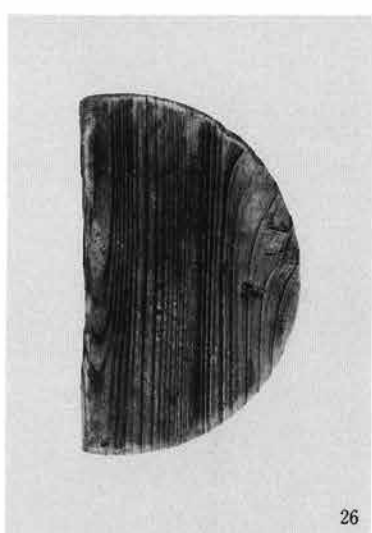
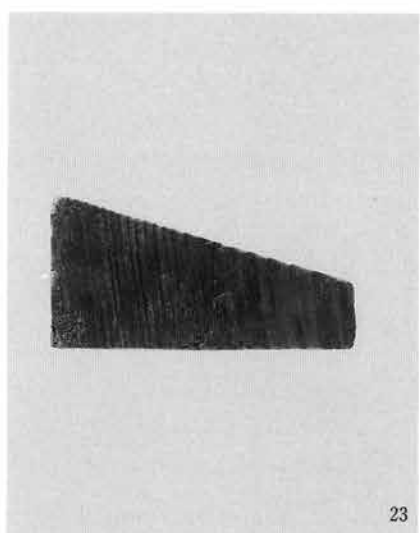
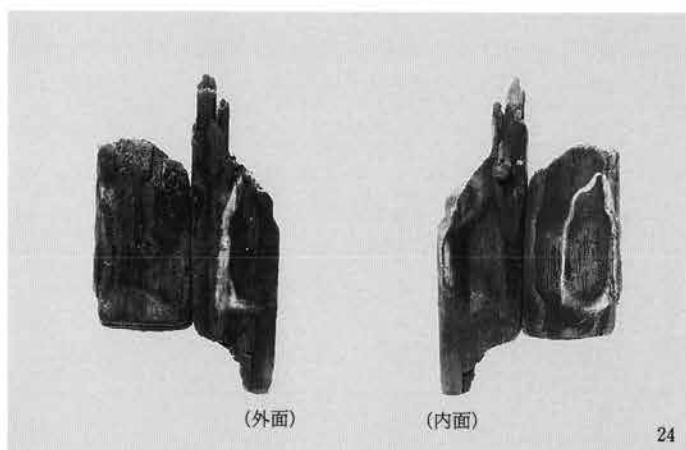
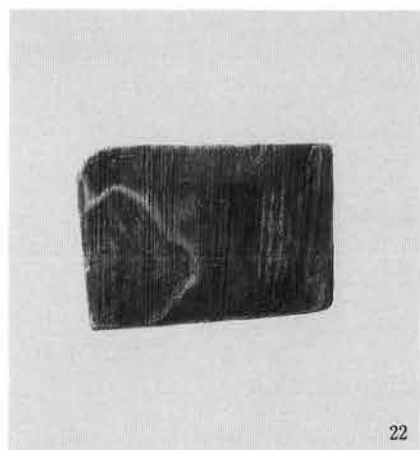
鍛冶屋敷跡出土の磨石状台石

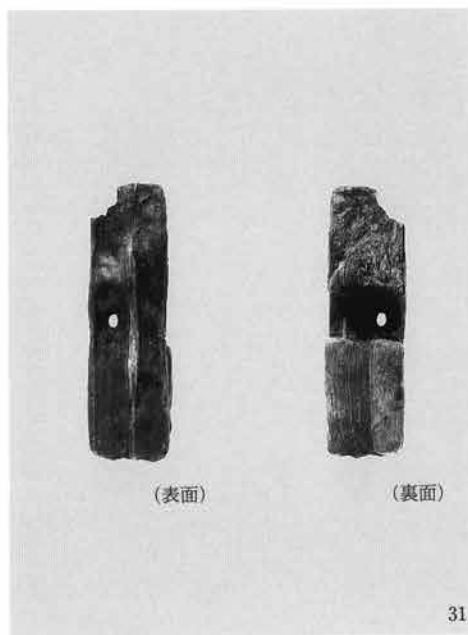
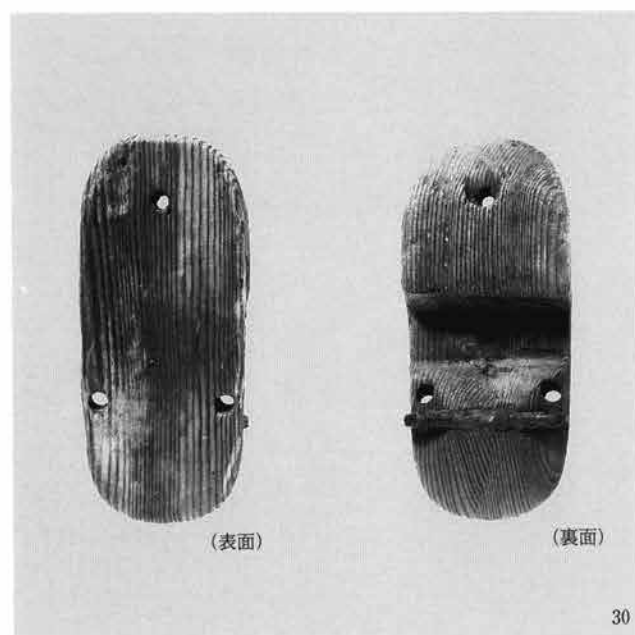
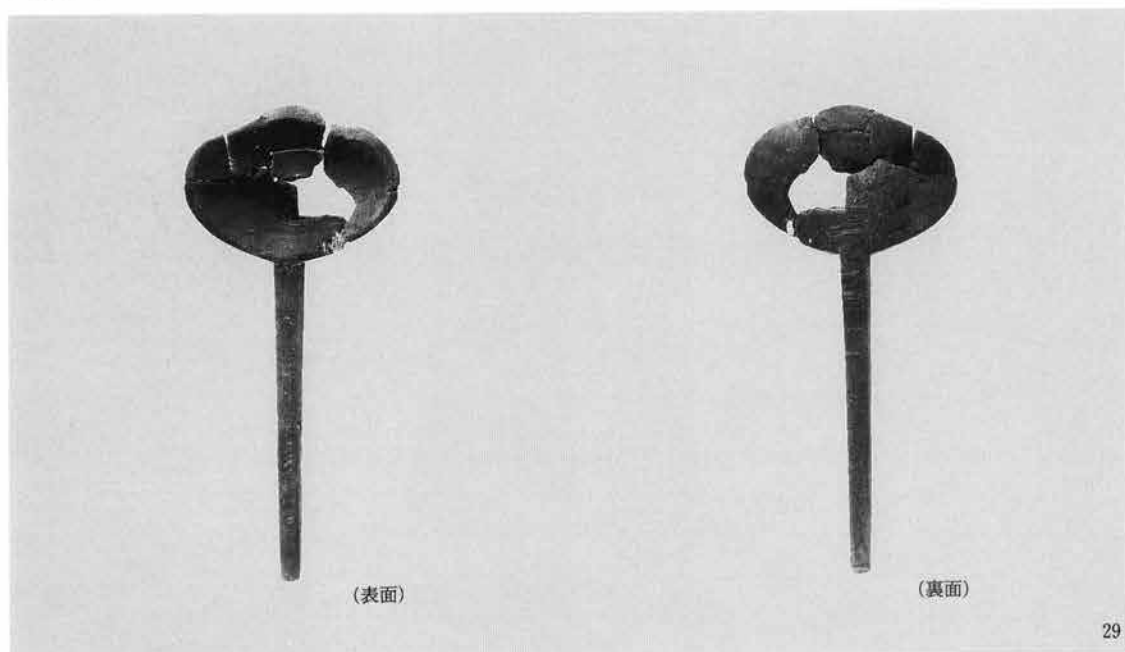


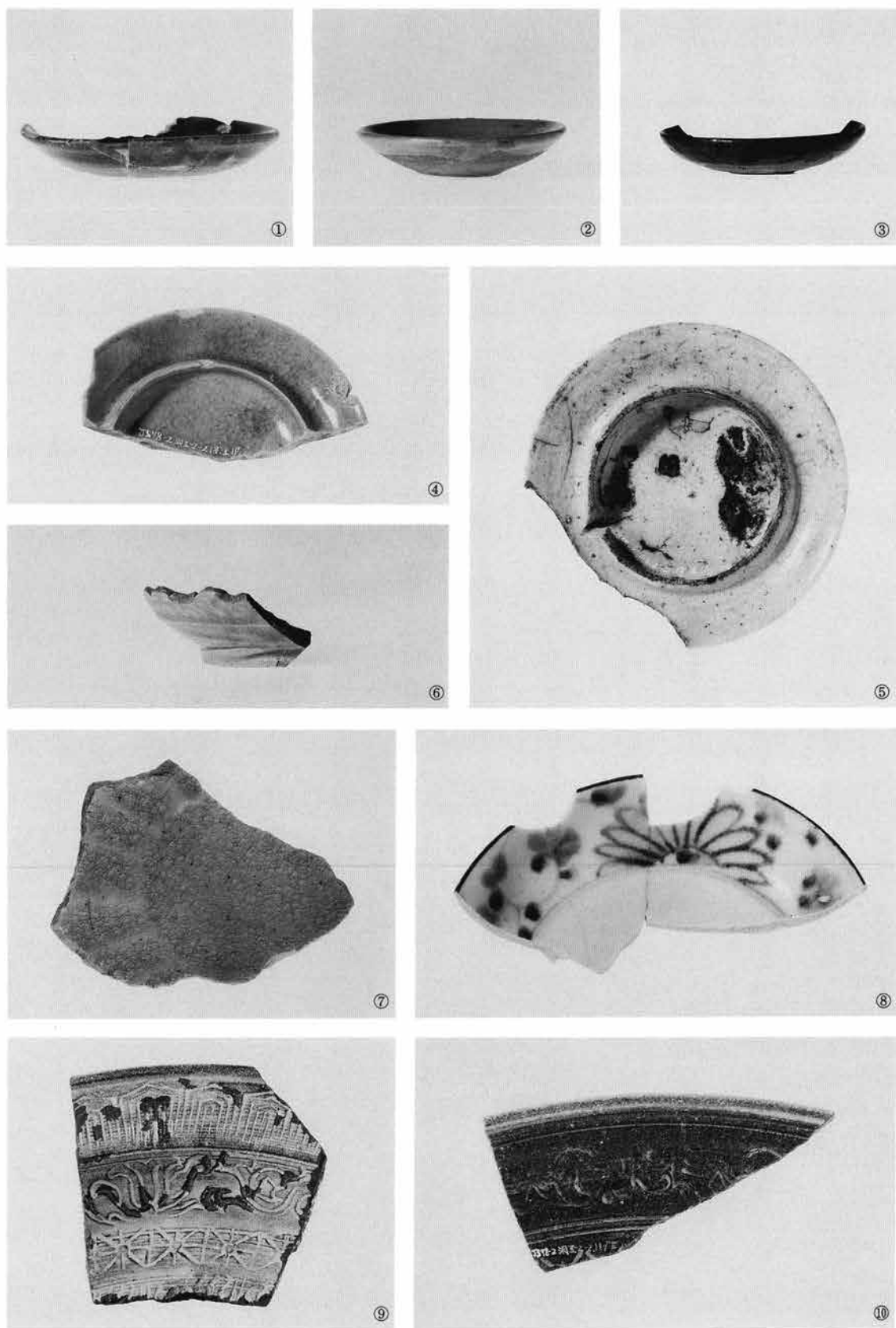
3号溝出土遺物 (1)



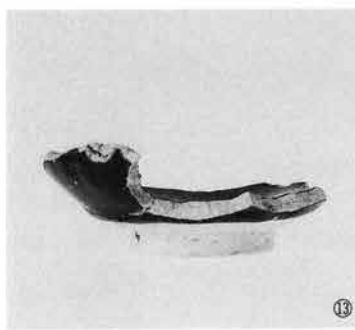


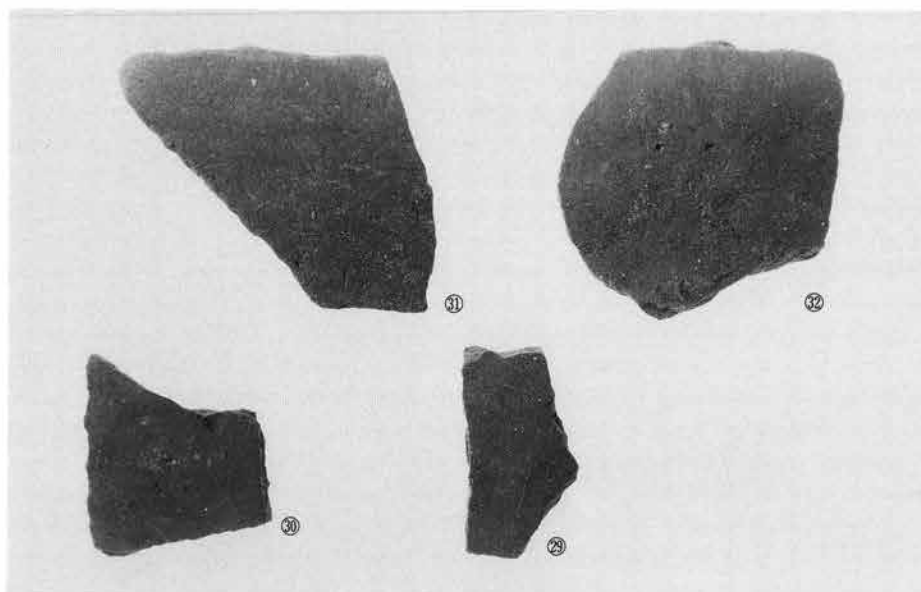
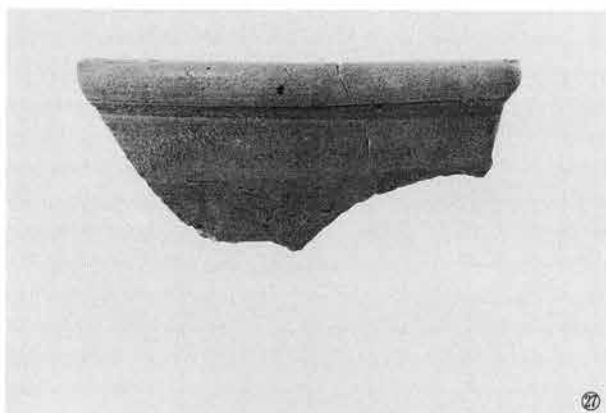
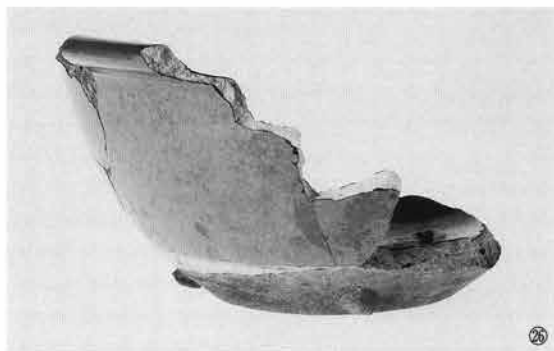




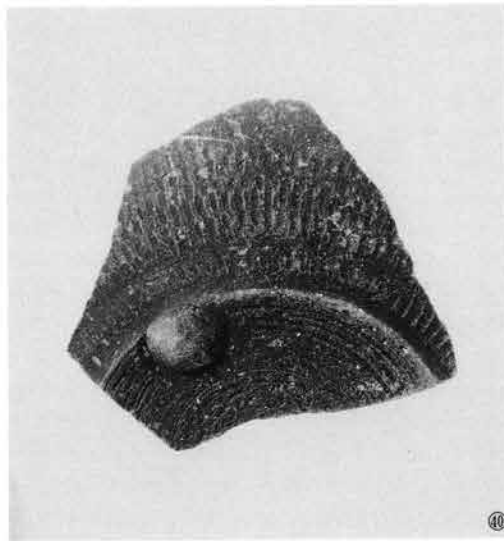
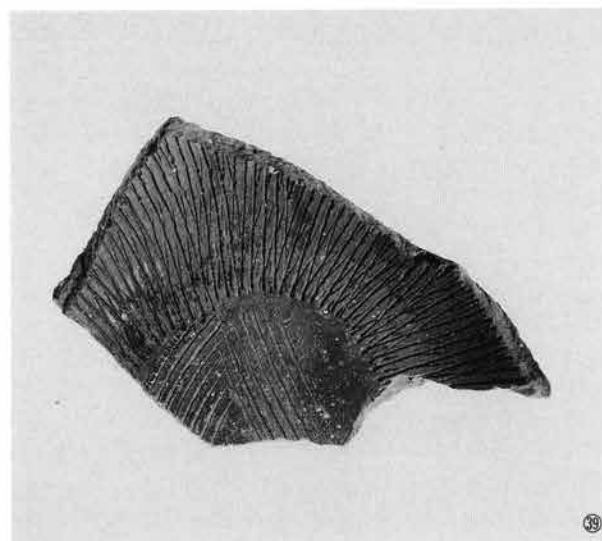
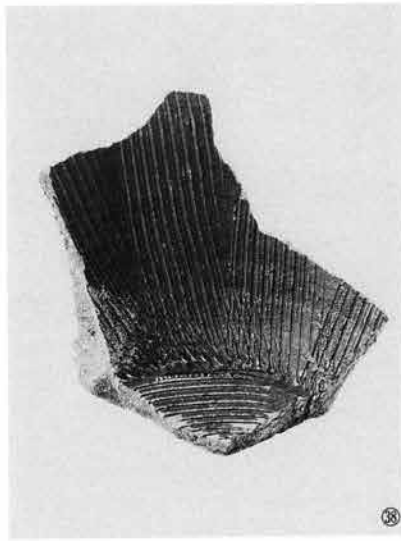
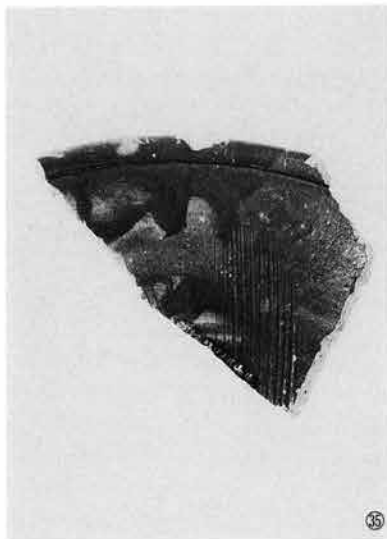
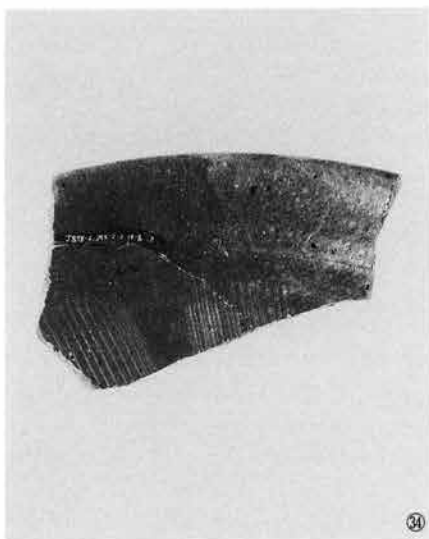


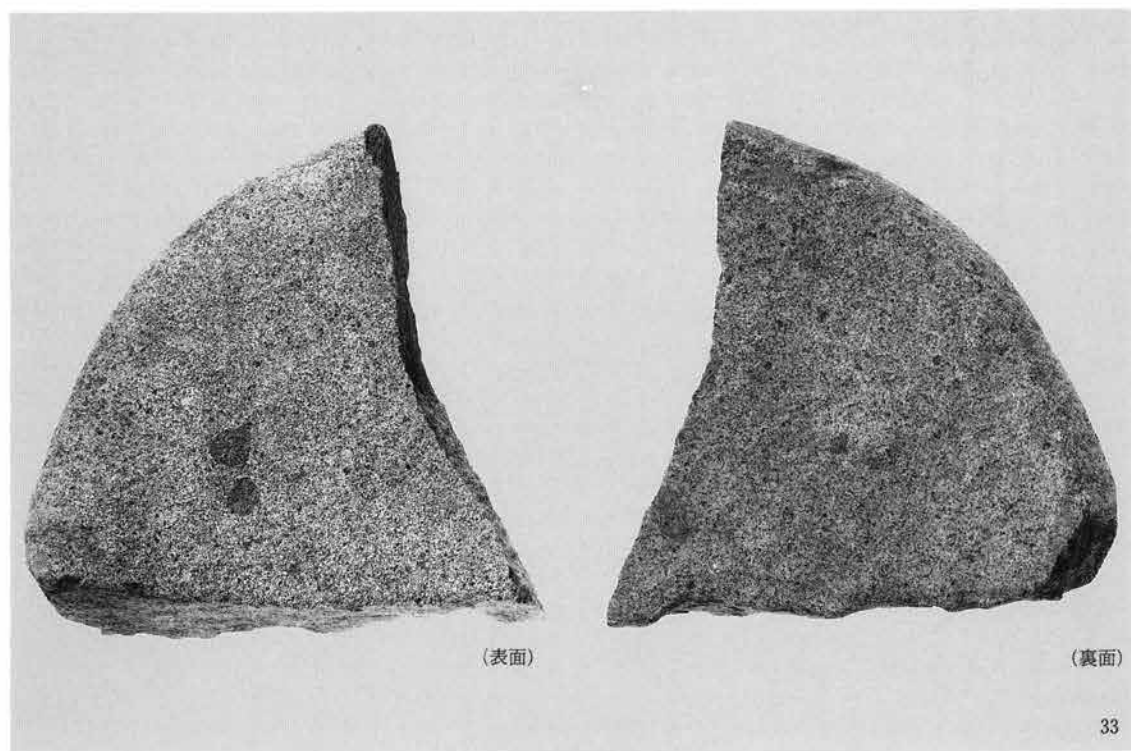
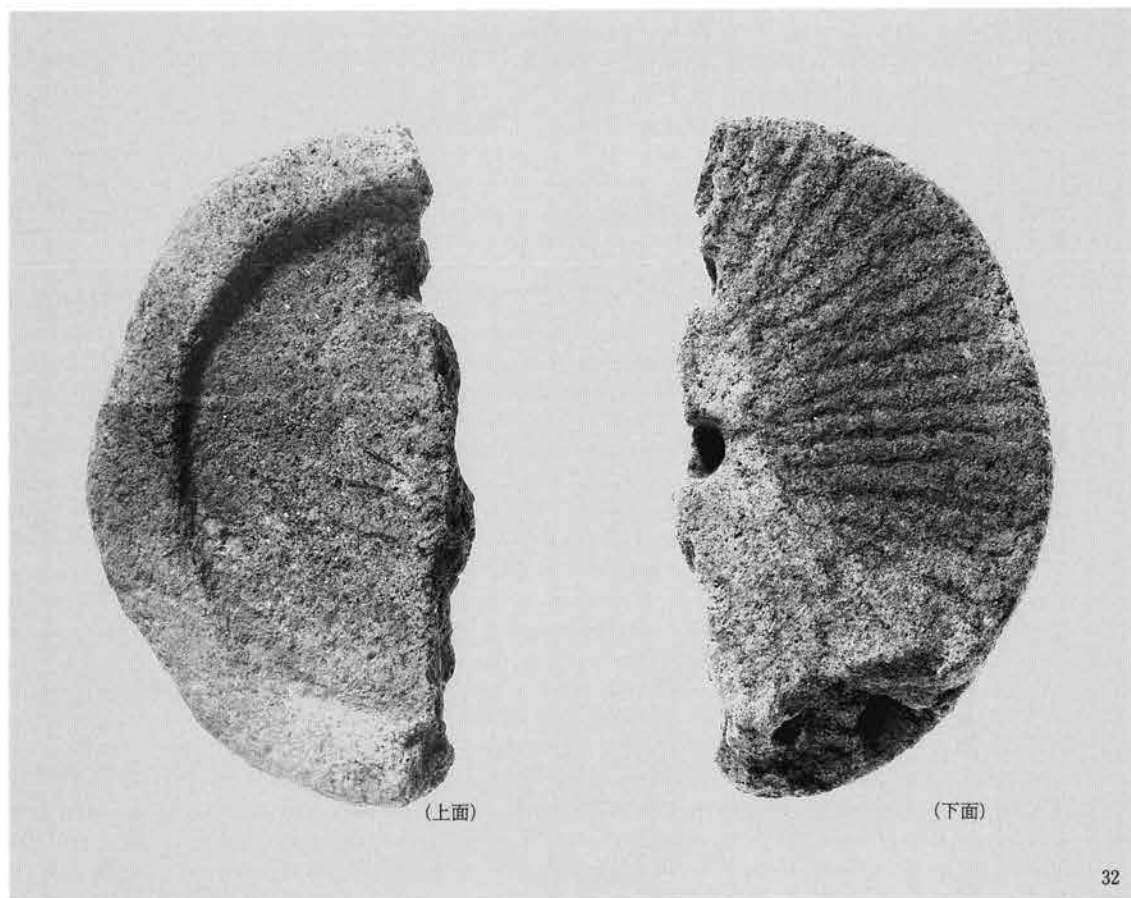
3号溝出土遺物 (5)





3号溝出土遺物 (7)



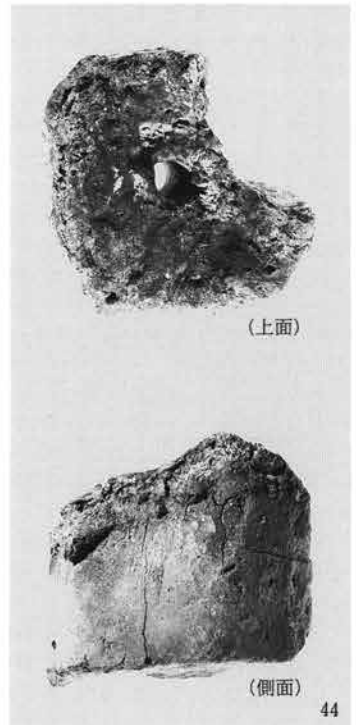
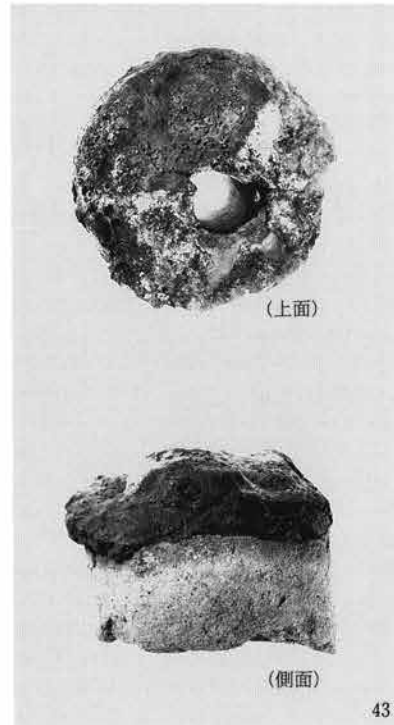
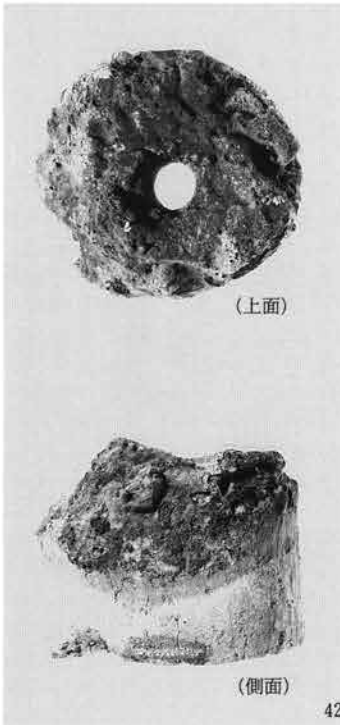
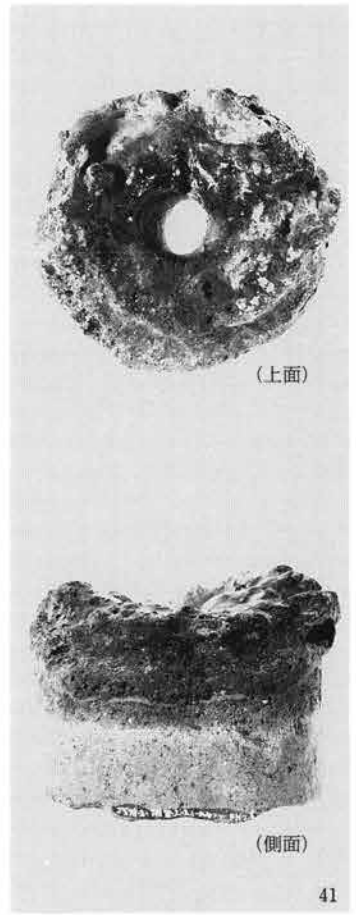
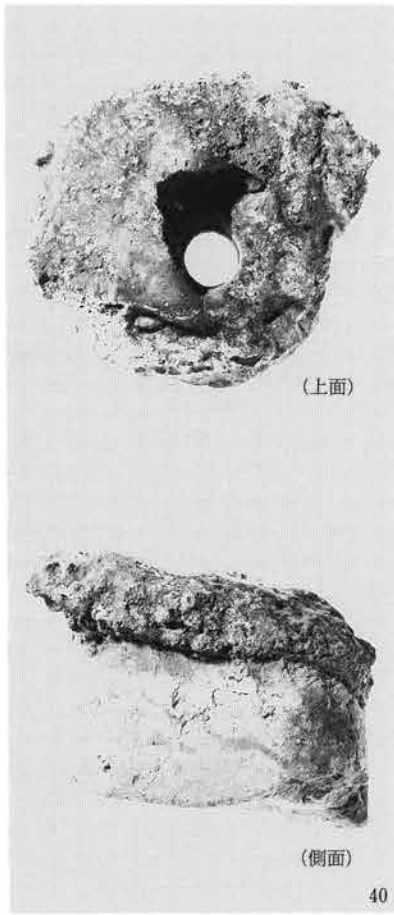
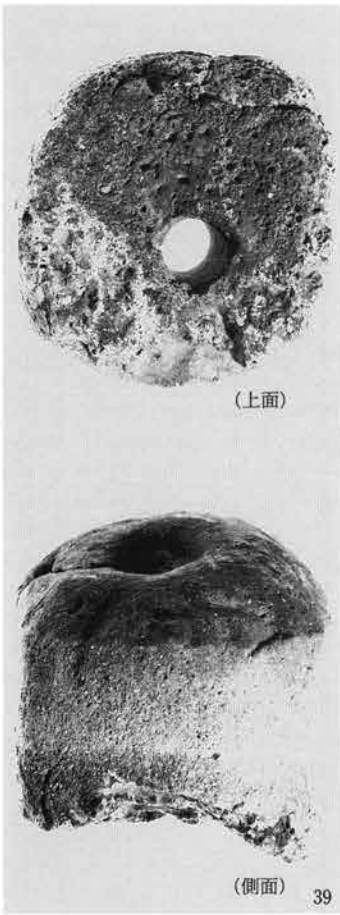


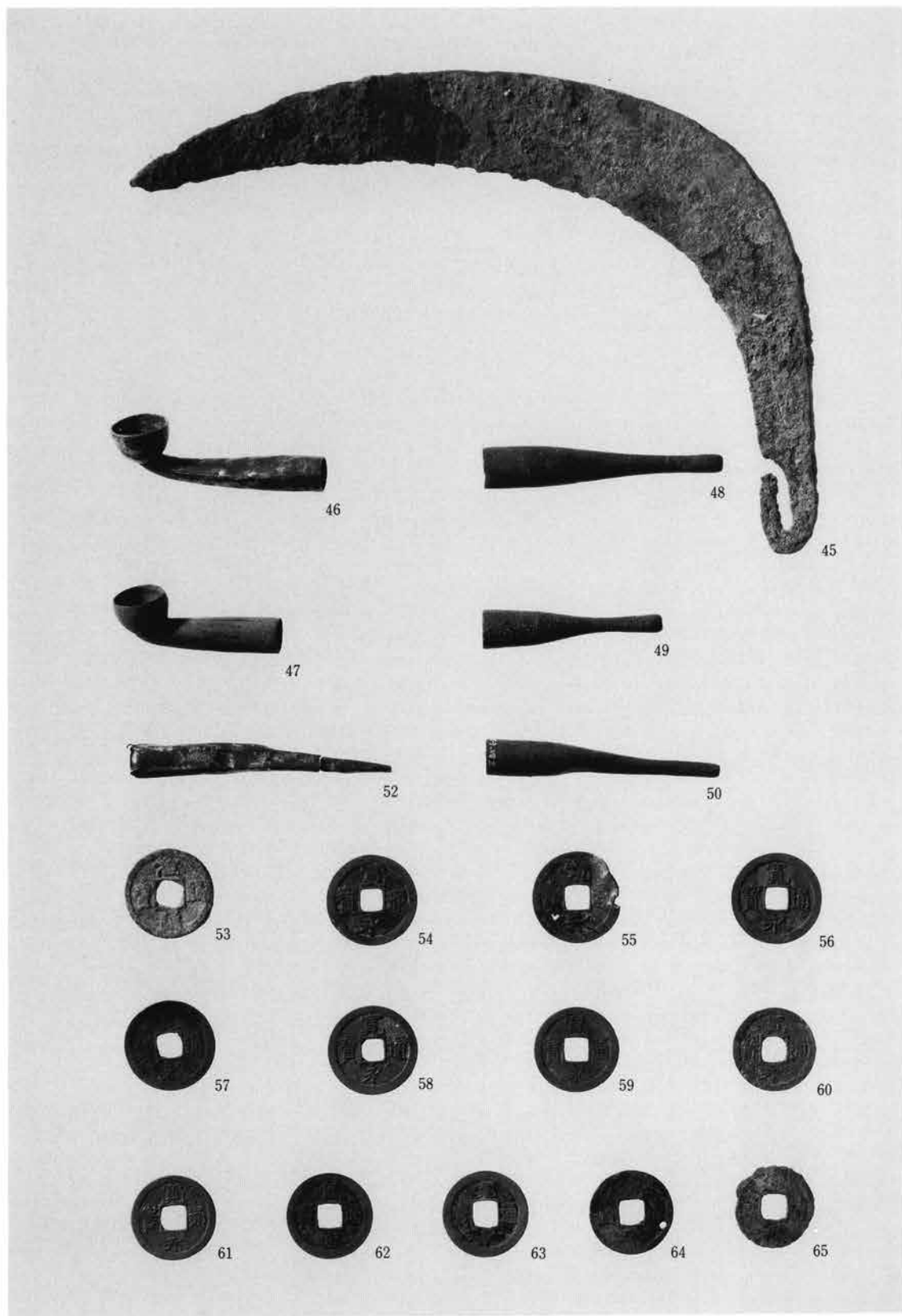
3号溝出土遺物 (9)

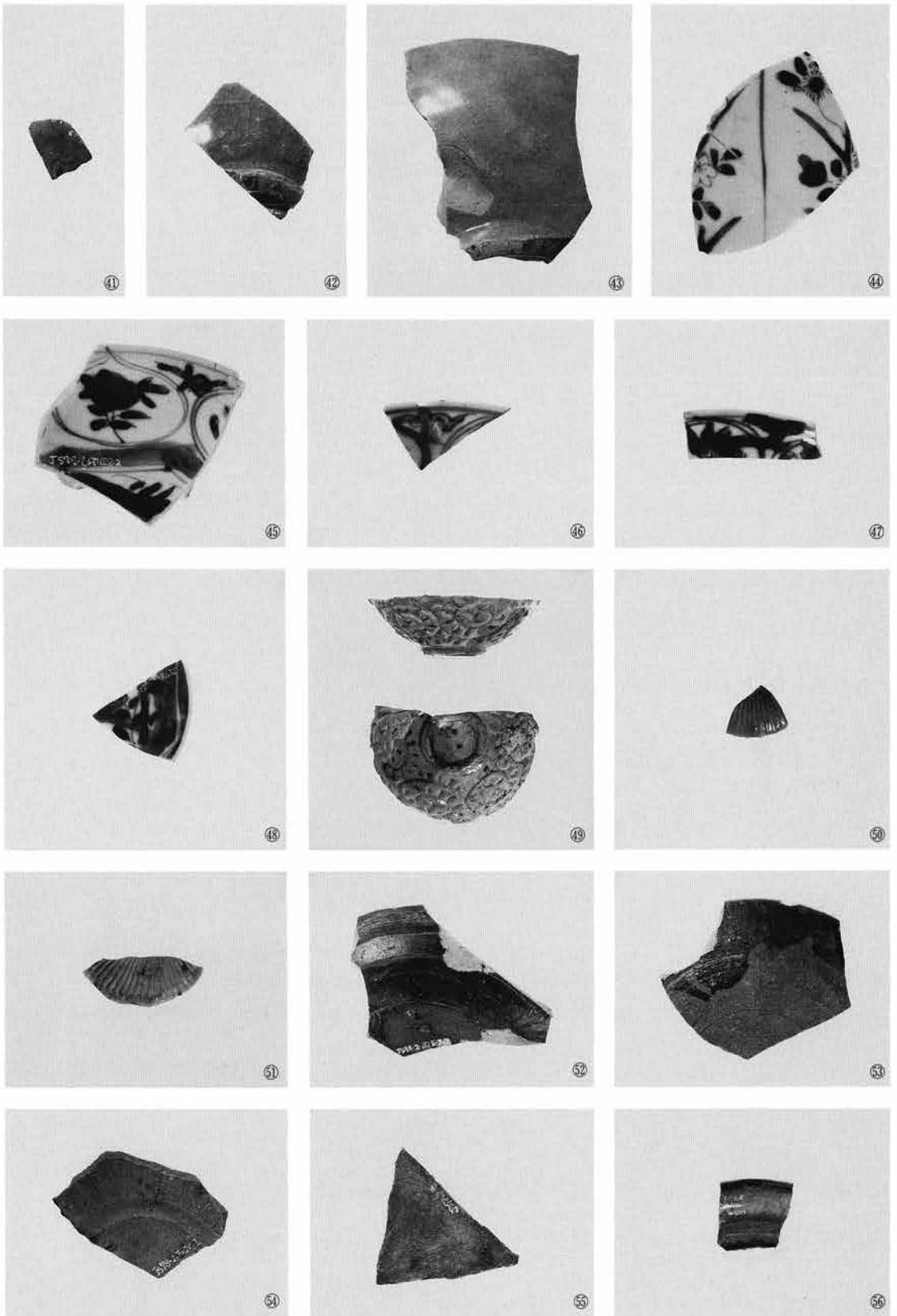




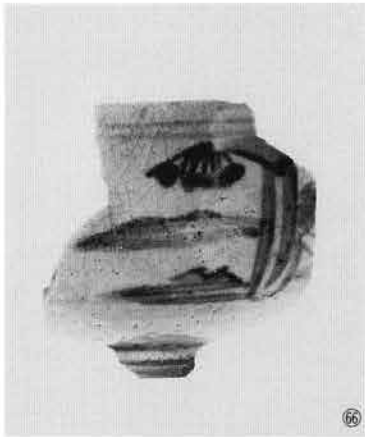
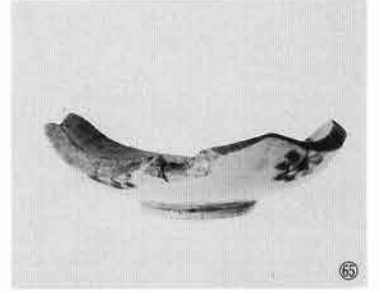
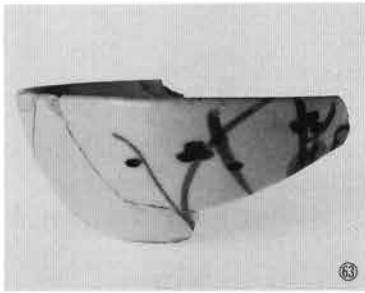
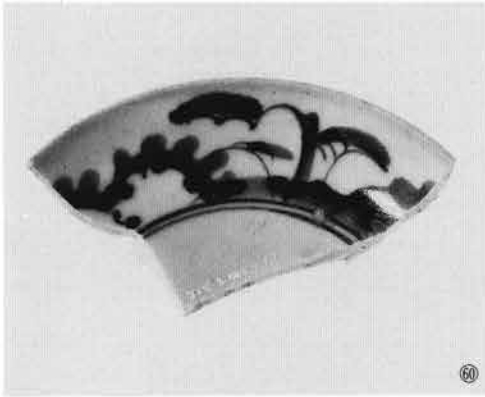
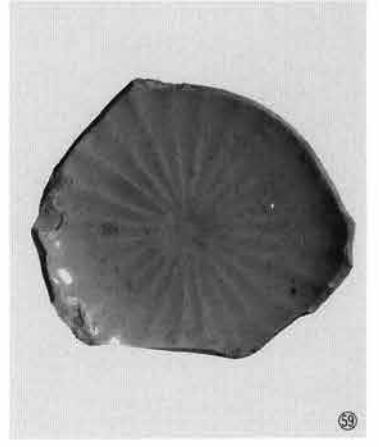






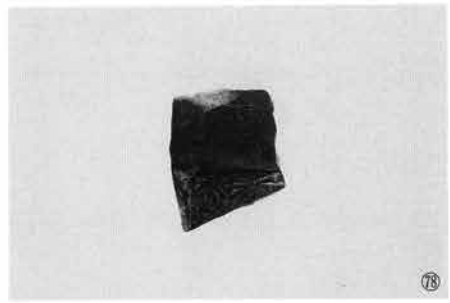
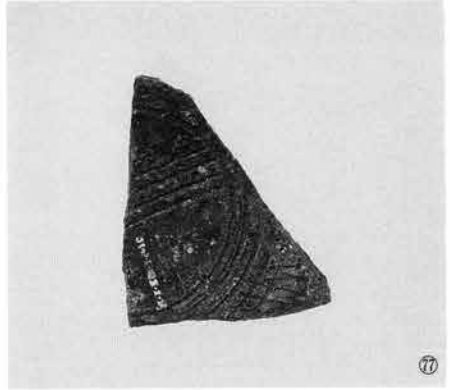
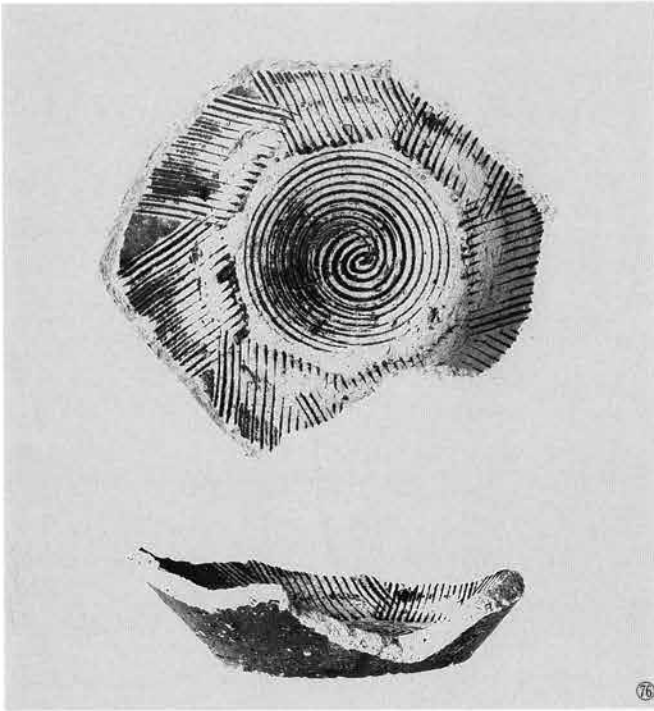
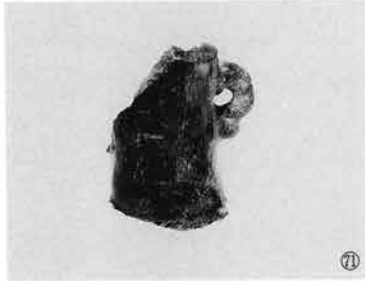
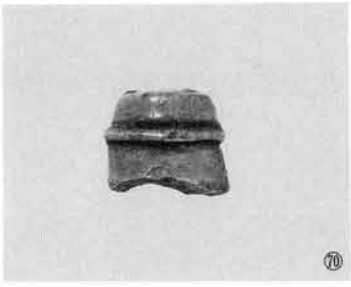


グリット出土の中・近世遺物 (1)

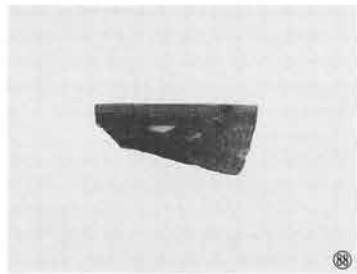
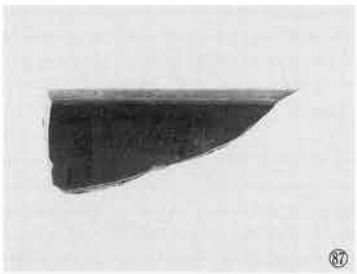
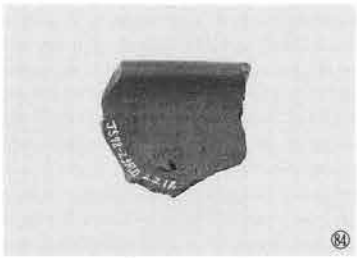
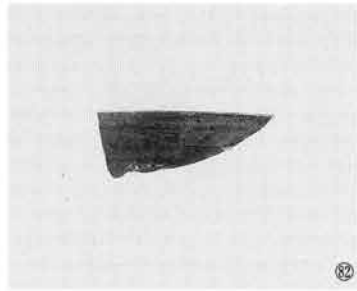
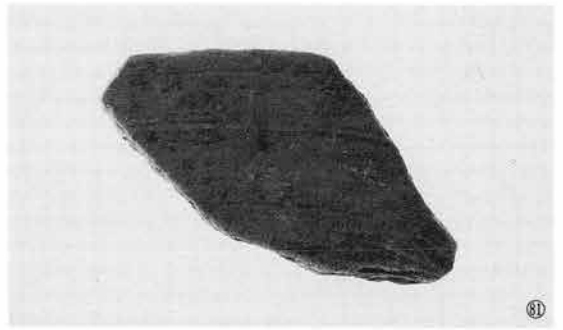




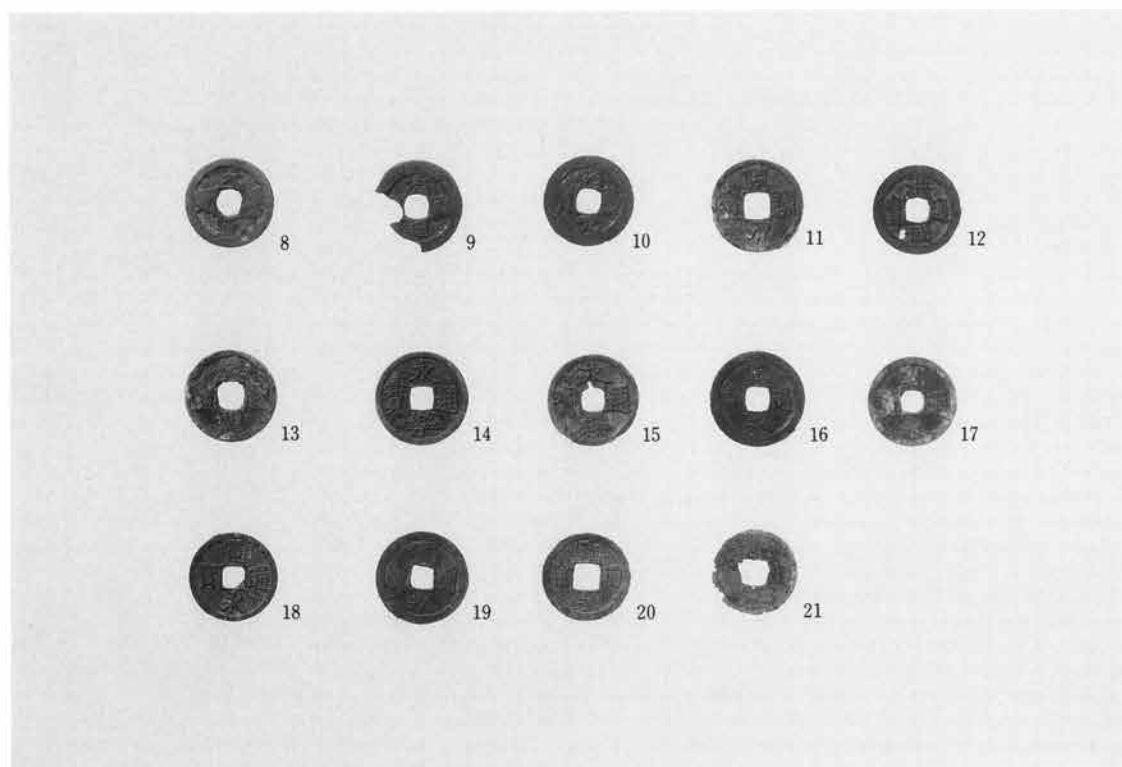
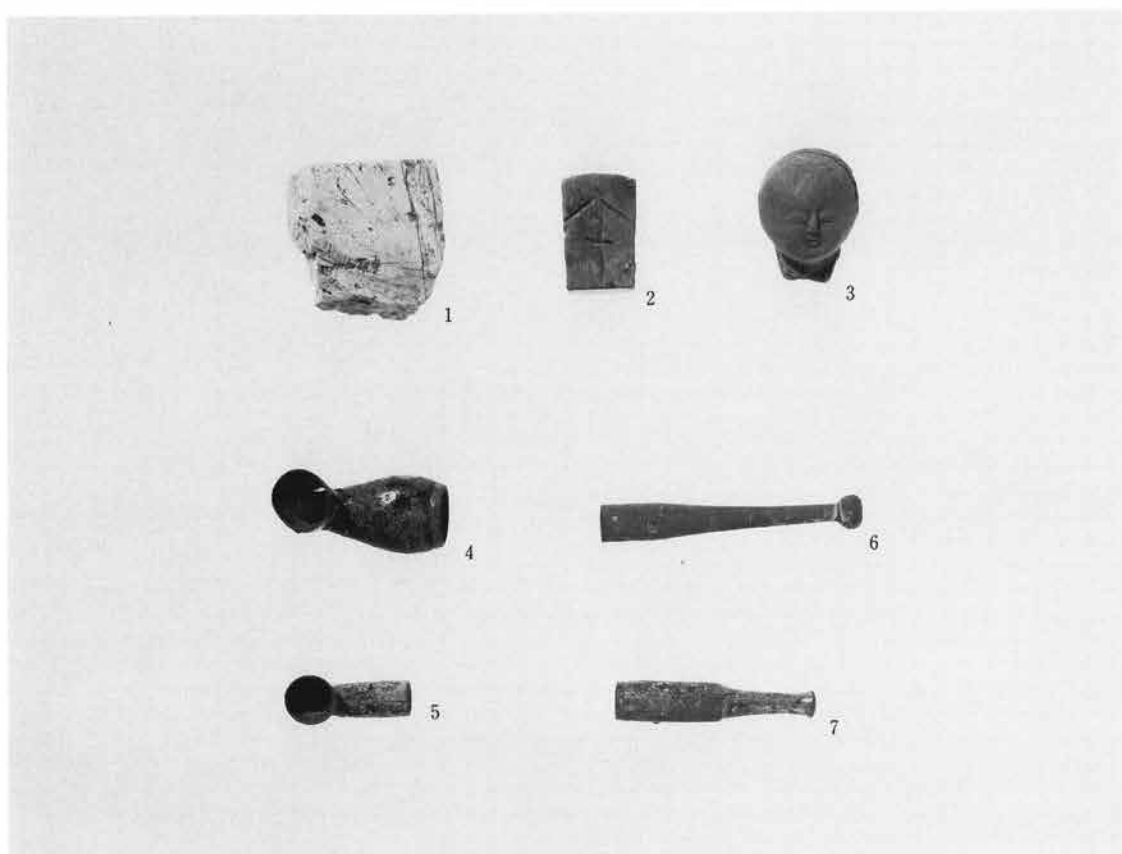
グリット出土の中・近世遺物 (3)



グリット出土の中・近世遺物 (4)



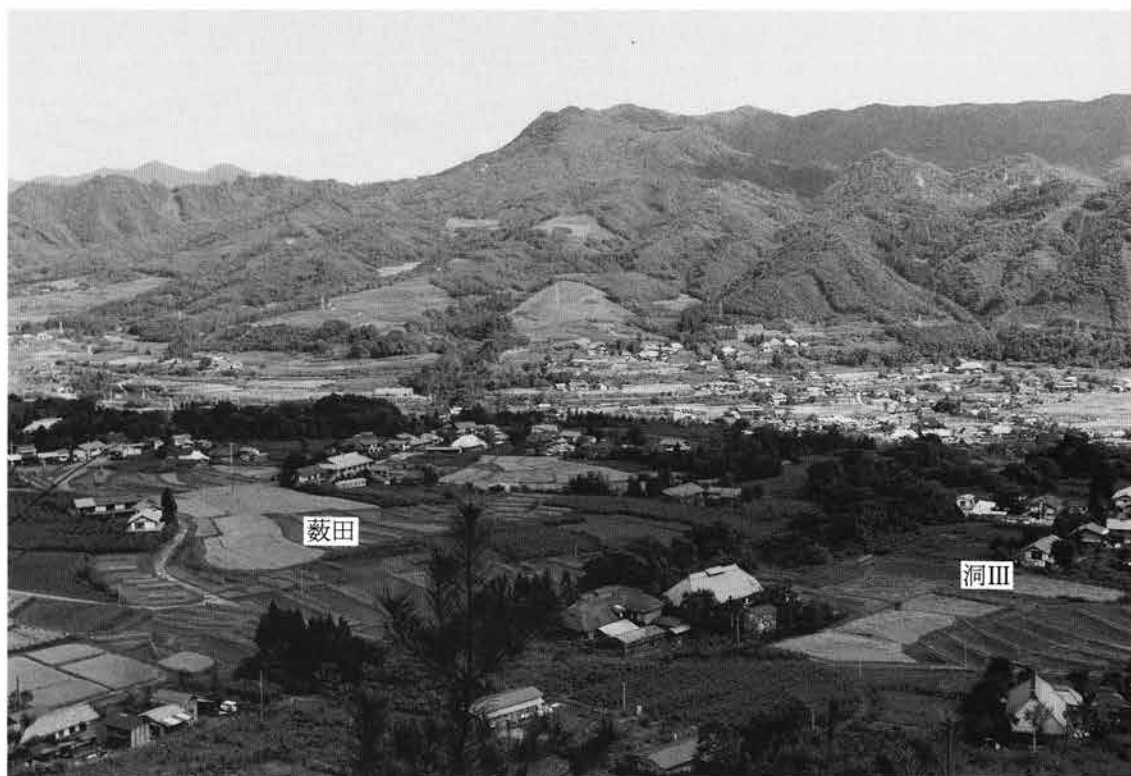
グリット出土の中・近世遺物 (5)





# 洞 III 遺跡





1 洞III遺跡遠景（調査前、南西より）



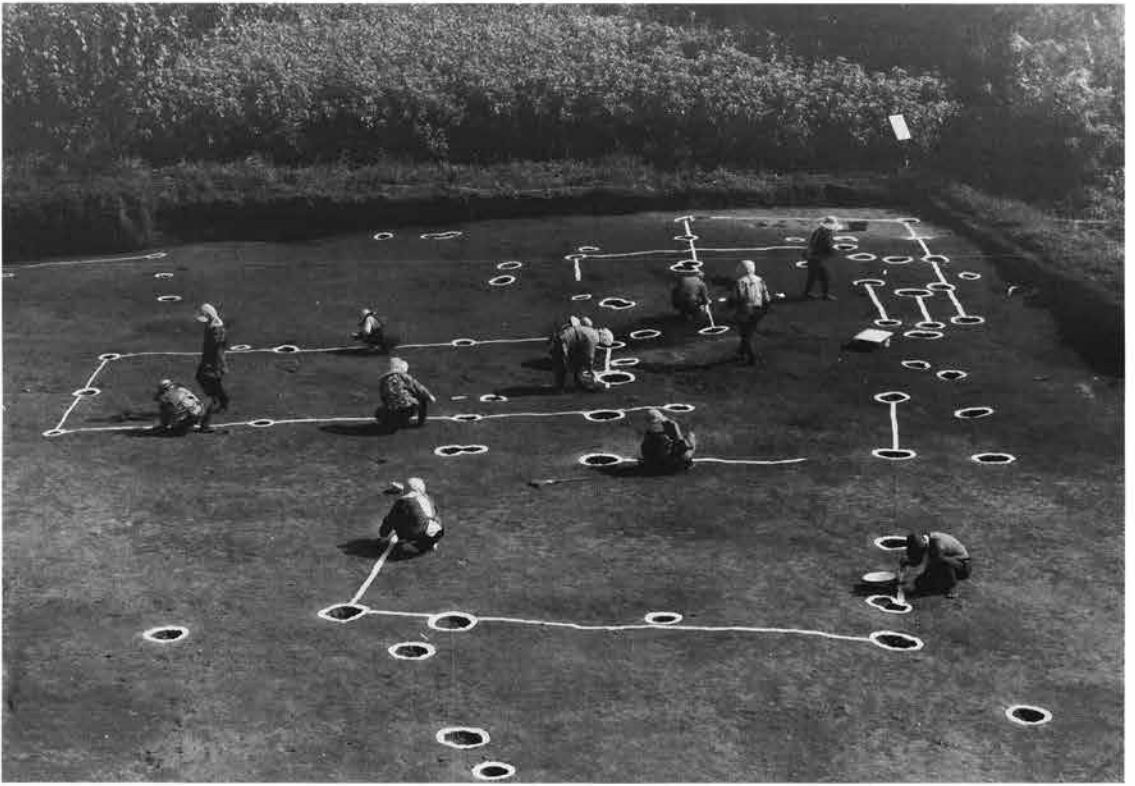
2 洞III遺跡全景（南西より）



1 調査中の洞Ⅲ遺跡全景（南より）



2 洞Ⅲ遺跡に関連する小川城二の丸の調査（昭和55年、南より）



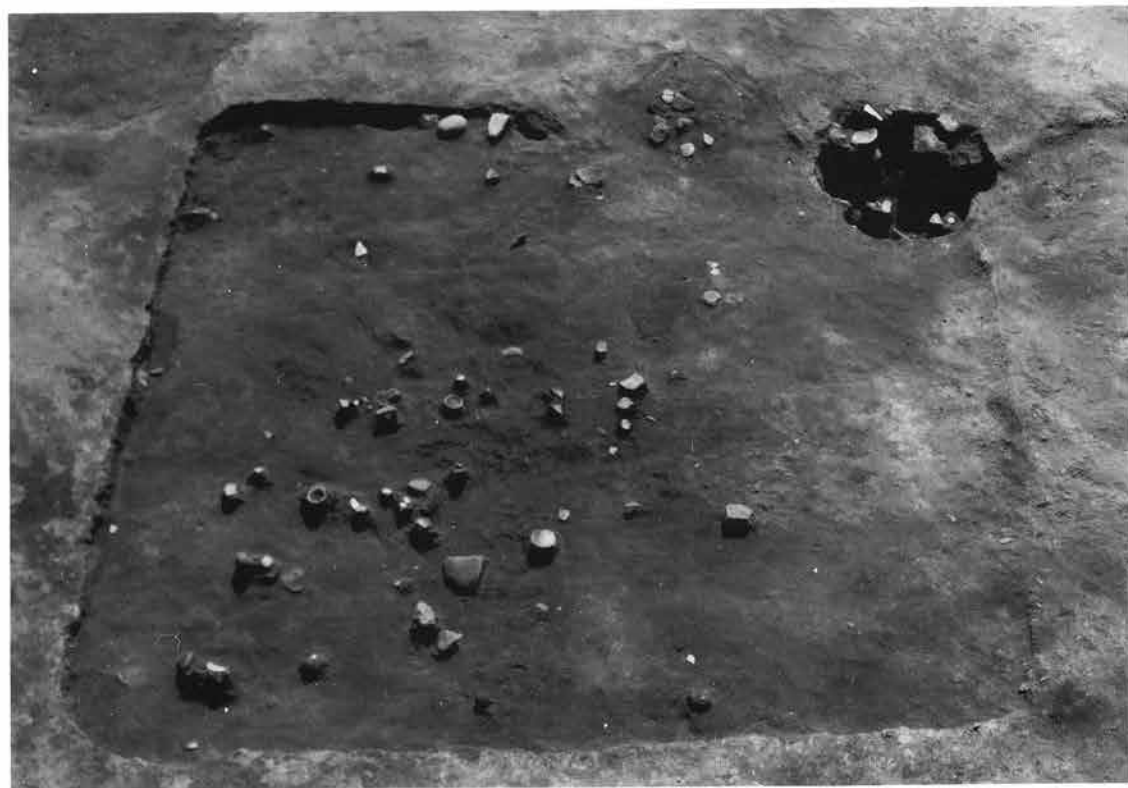
1 調査状況（14号掘立柱建物周辺、西より）



2 調査状況（2号溝周辺、南西より）

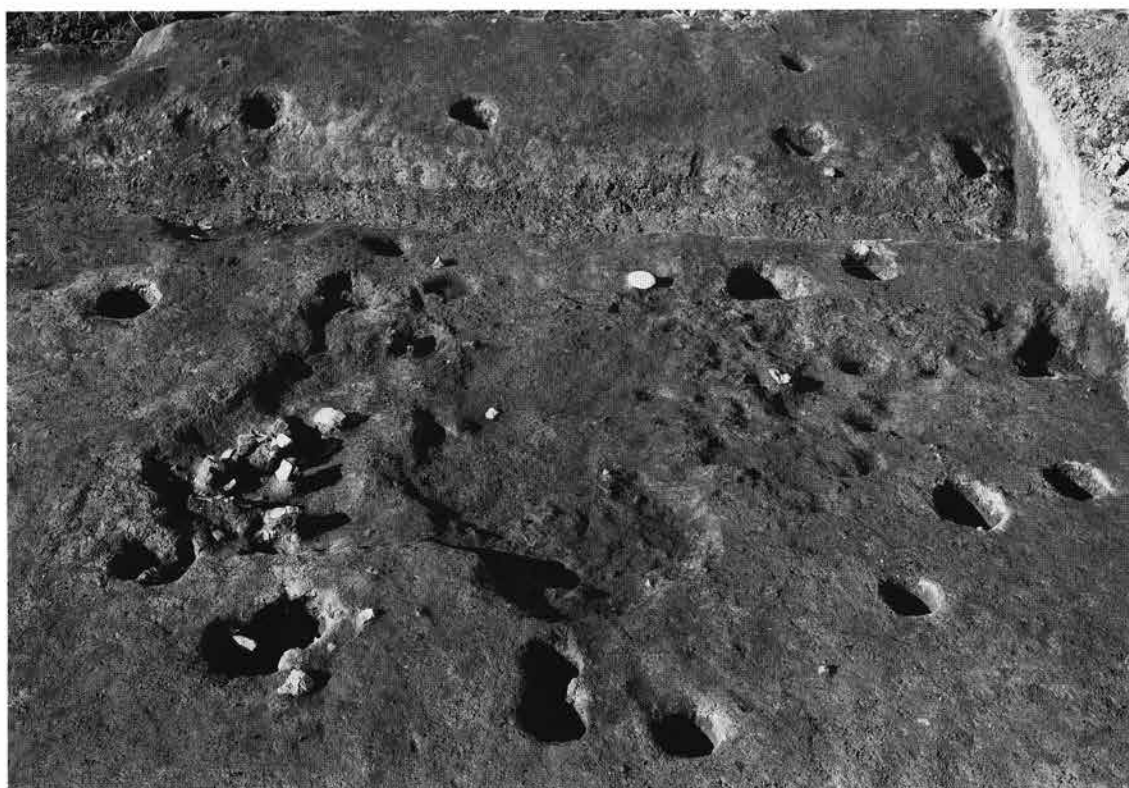


1 2号住居跡（西より）



2 3号住居跡（西より）

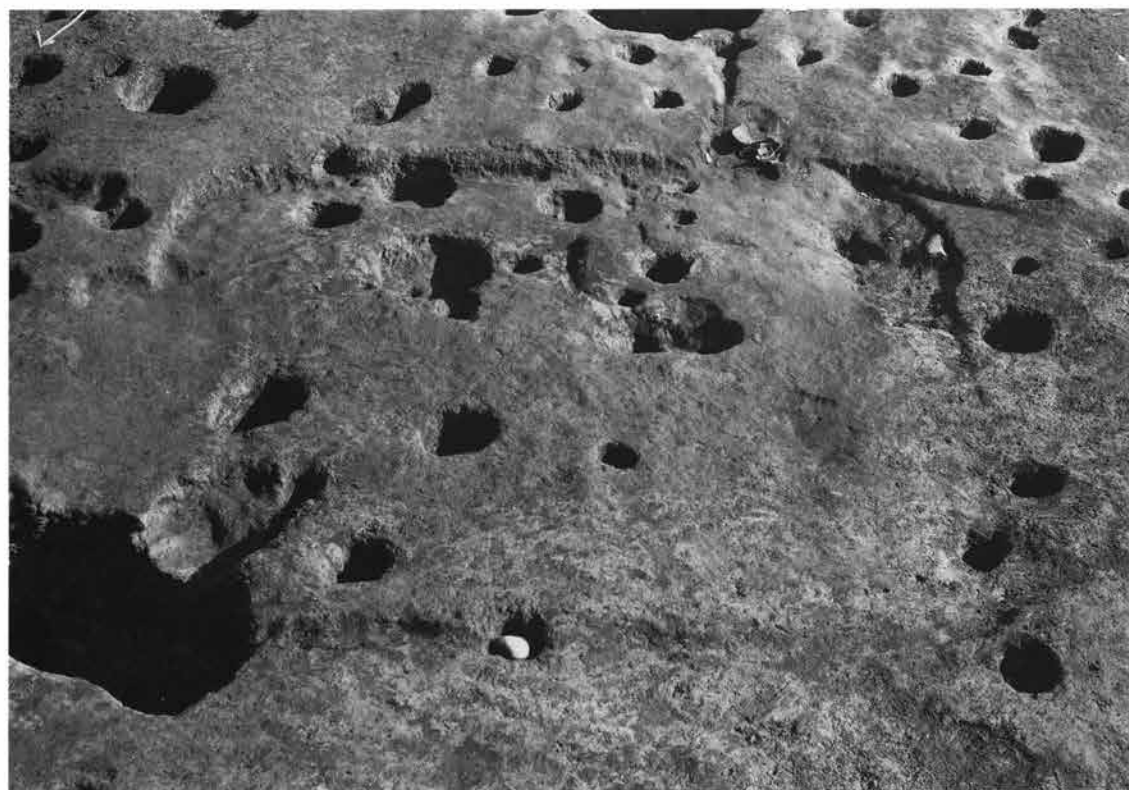




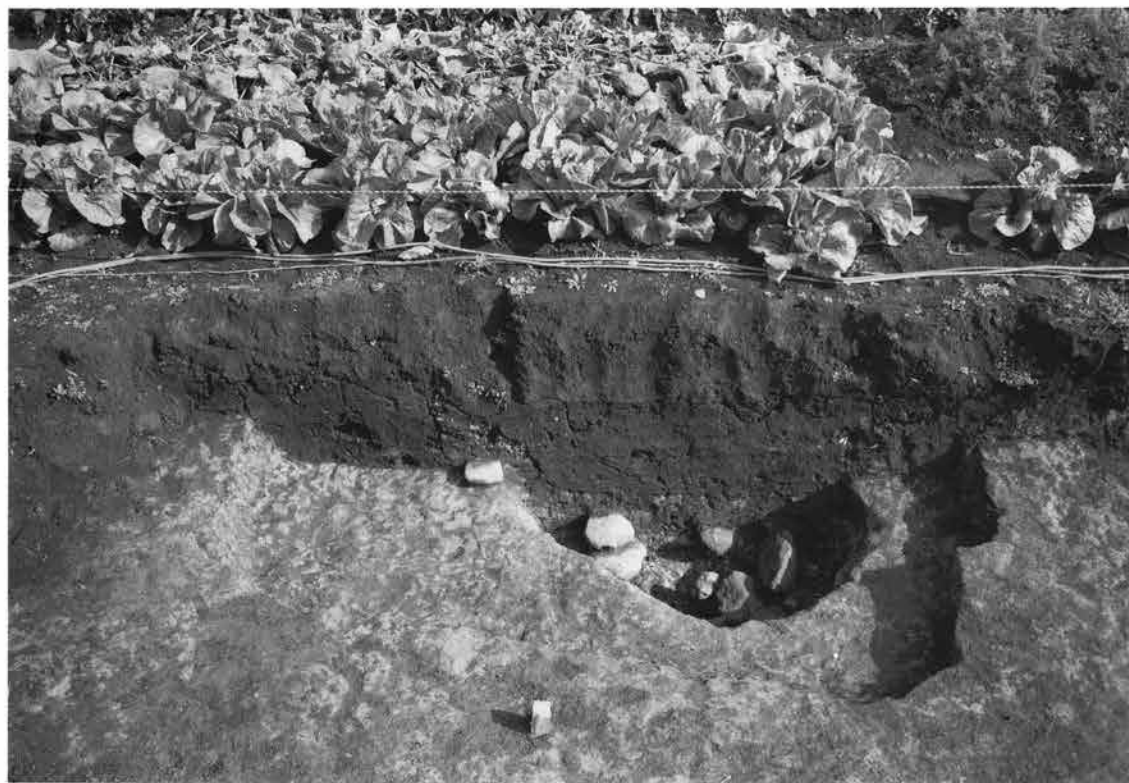
1 4号住居跡（東より）



2 5号住居跡（西より）



1 6号住居跡（西より）



2 7号住居跡と30号土坑（西より）





1 1号住居跡（東より）



2 2号住居跡遺物出土状態（南東より）



3 3号住居跡貯蔵穴（西より）



4 4号住居跡貯蔵穴（東より）



5 5号住居跡貯蔵穴（西より）



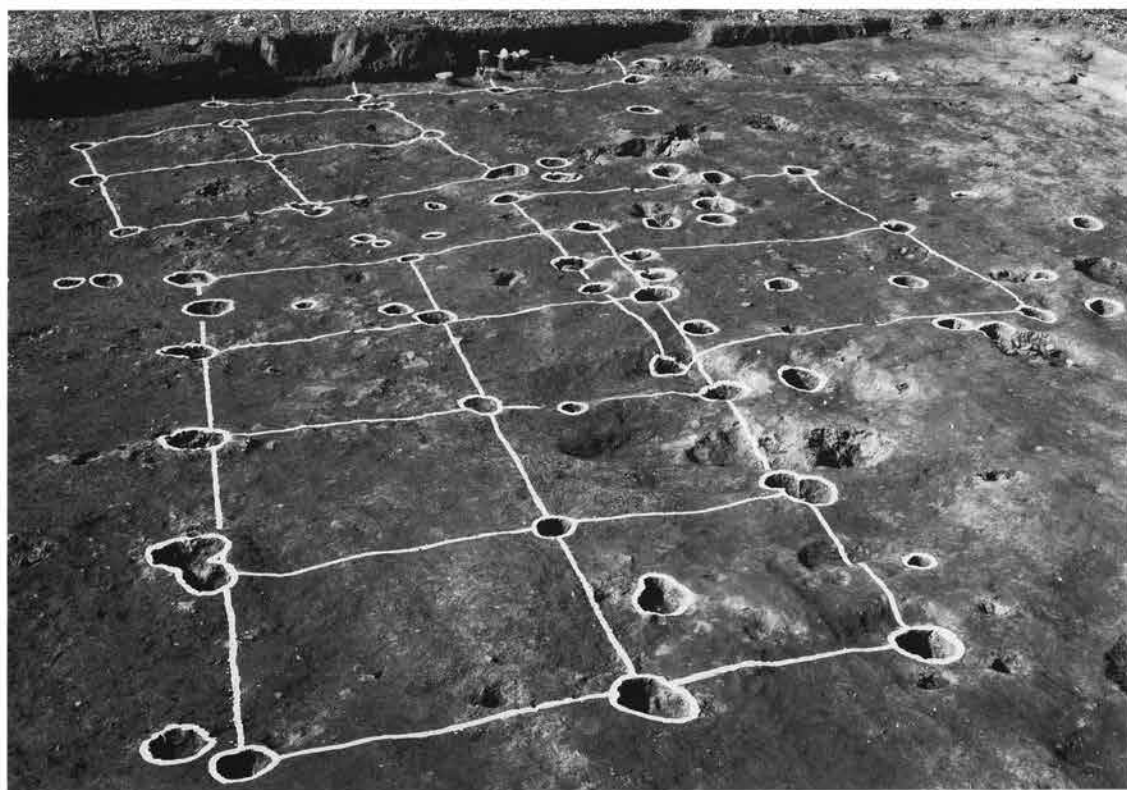
6 6号住居跡カマド（南西より）



7 2号土坑（南東より）



8 47号土坑（北東より）



1 1～4号掘立柱建物（東より）



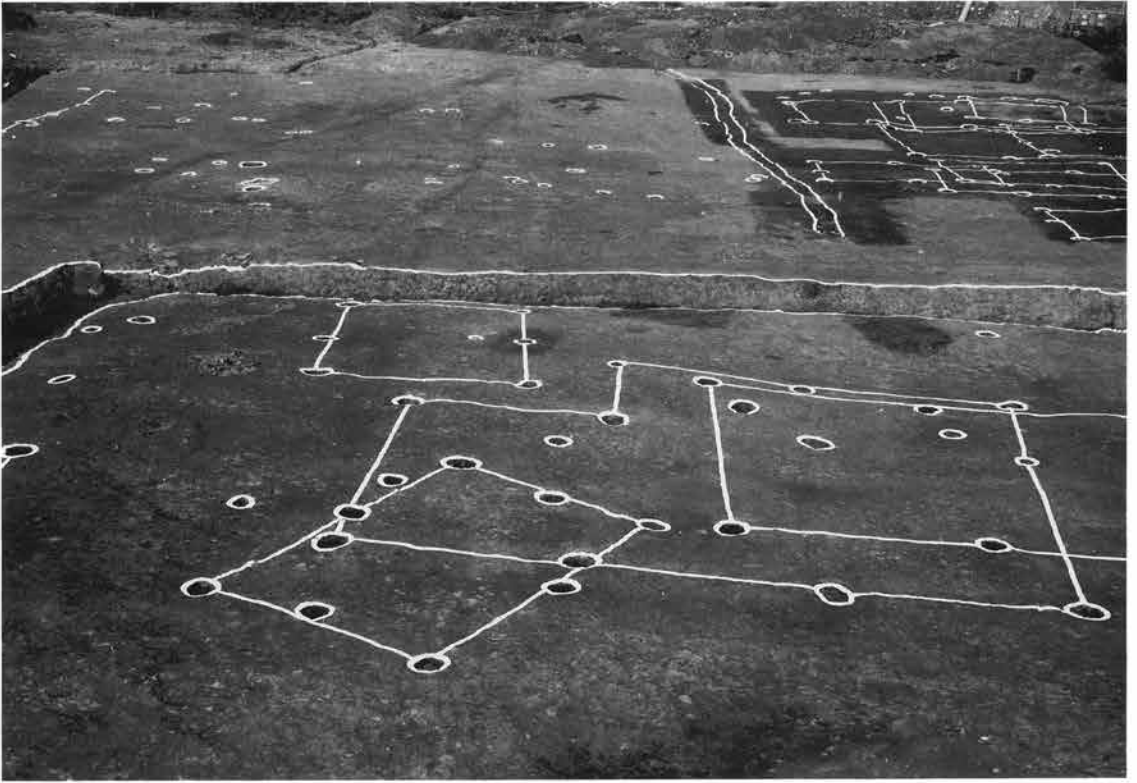
2 5・6・32号掘立柱建物と1・2号柱列（東より）



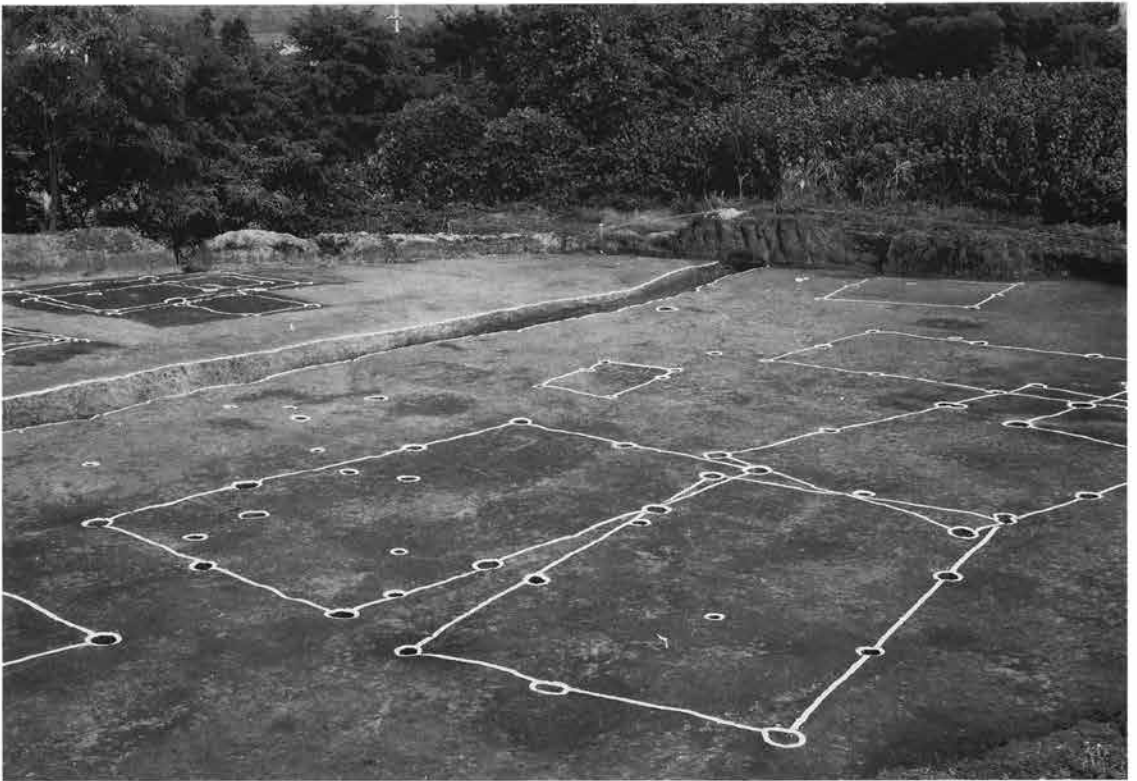
1 7・8・22～35号掘立柱建物と1（左）・2号溝（手前、南より）



2 36・96号掘立柱建物と4・5号柱列および1・2号溝（南より）

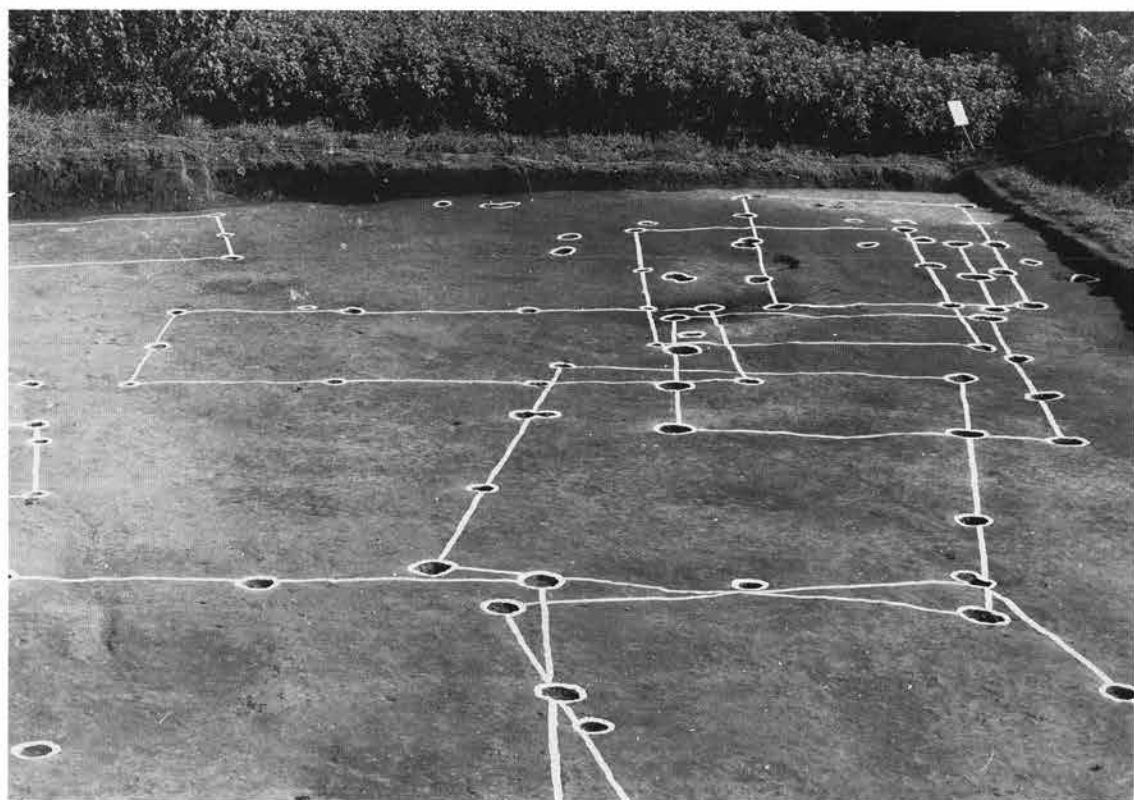


1 18~21号掘立柱建物と2号溝（南より）

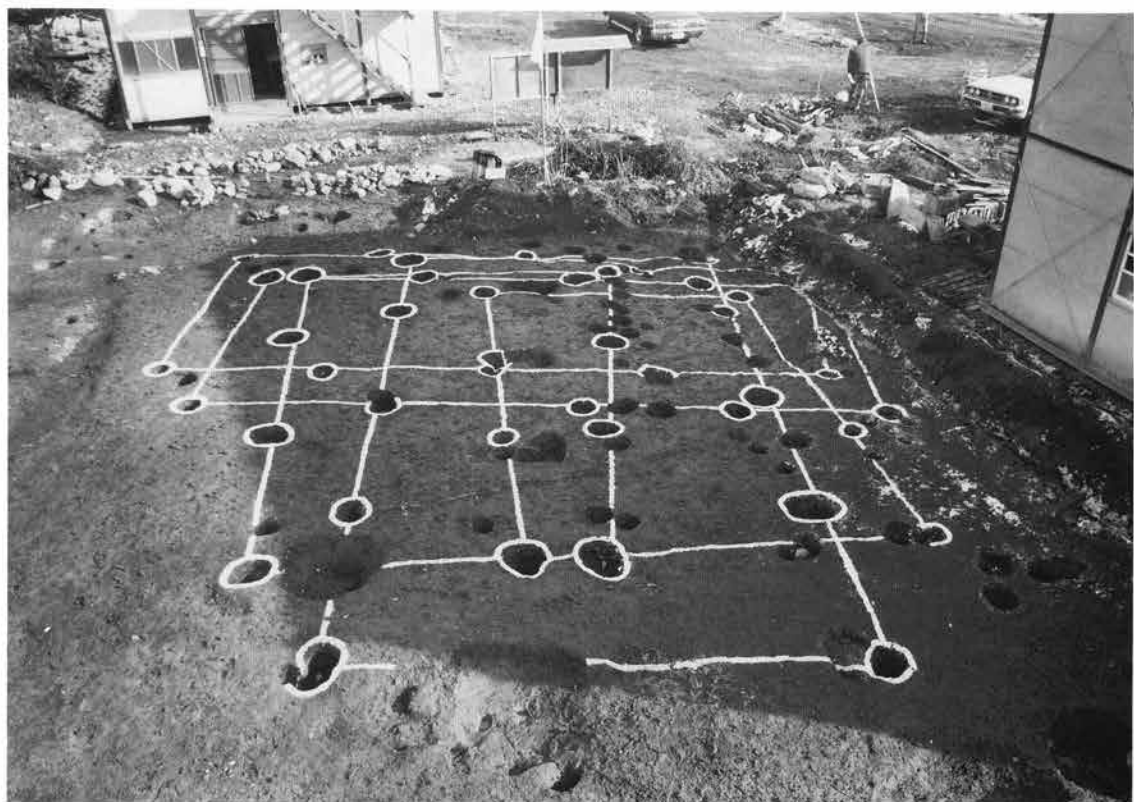


2 11~17号掘立柱建物と2号溝（南西より）





1 9～17・39号掘立柱建物と6号柱列（西より）



2 80～85・97号掘立柱建物と11・12号柱列（西より）



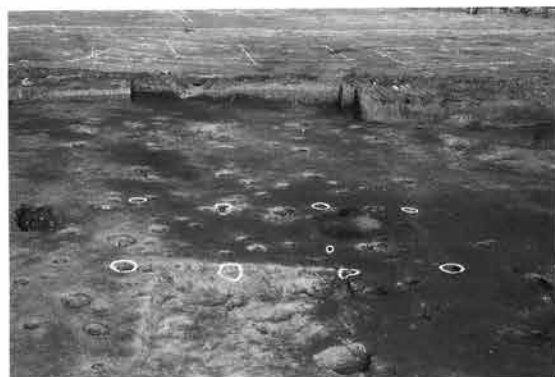
1 40号掘立柱建物（南より）



2 42号掘立柱建物（南より）



3 43号掘立柱建物（南より）



4 46号掘立柱建物（南より）



5 53号掘立柱建物（南より）



6 55号掘立柱建物（南より）



7 57号掘立柱建物（北より）



8 59号掘立柱建物（西より）



1 60号掘立柱建物（西より）



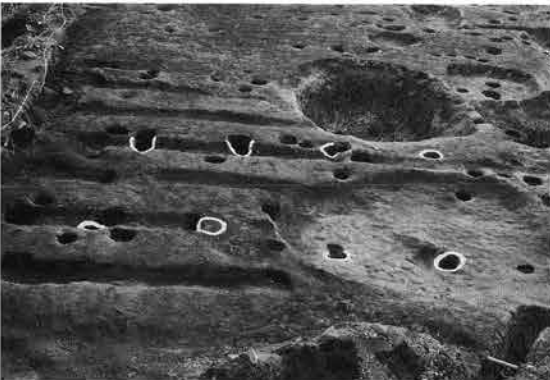
2 62号掘立柱建物（西より）



3 65号掘立柱建物（北より）



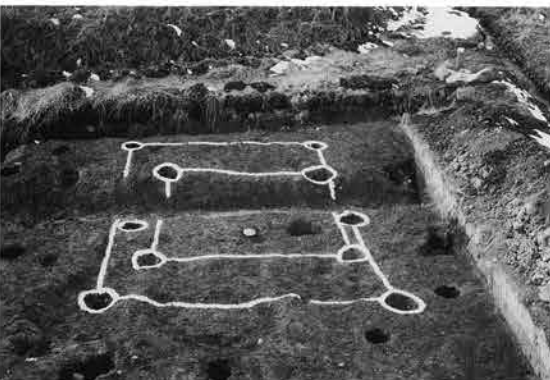
4 67号掘立柱建物（北より）



5 72号掘立柱建物（北より）



6 74号掘立柱建物（北より）



7 75・76号掘立柱建物（東より）



8 70号掘立柱建物の柱痕と銭貨（南より）



1 2号溝北辺(西より)



2 2号溝西辺(北より)



3 3号溝(北西より)



4 78号掘立柱建物と現在の水路(南東より)

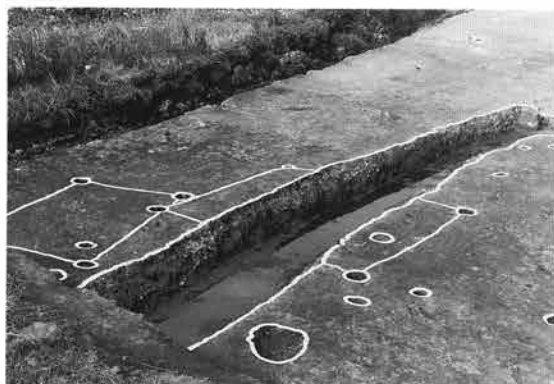




1 2号溝北辺土層断面（東より）



2 2号溝北西隅出土状態（南東より）



3 2号溝西辺と37・38号掘立柱建物（南東より）



4 2号溝中世甕出土状態（東より）



5 2号溝平安時代遺物出土状態（東より）



6 鳥形土器の出土状態（北より）



7 1号井戸（東より）



8 2号井戸（南より）



1 5号土坑（南西より）



2 15号土坑（南より）



3 21号土坑（東より）



4 23号土坑（西より）



5 31号土坑（西より）



6 10号土坑（東より）



7 14号土坑（東より）



8 16号土坑（西より）



1 35~37号土坑（東より）



2 38号土坑（南より）



3 18号土坑（東より）



4 20号土坑と石列（西より）



5 40号土坑（北より）



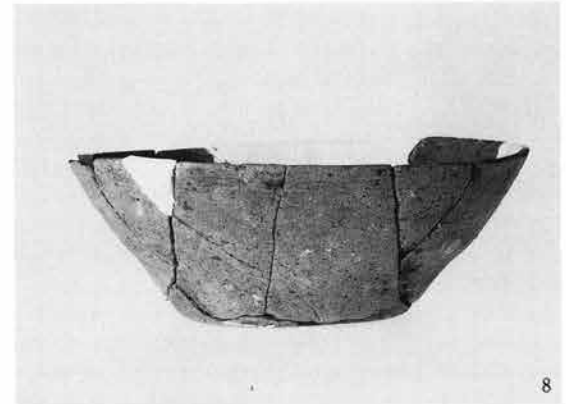
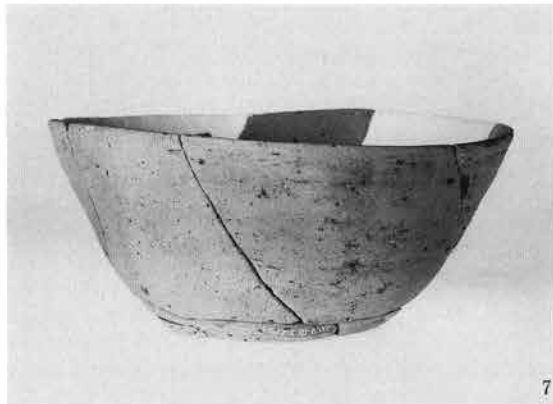
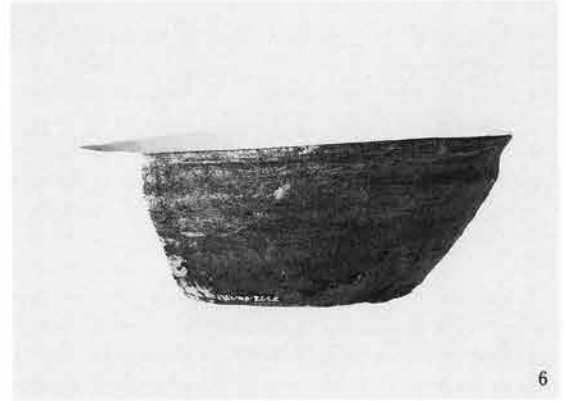
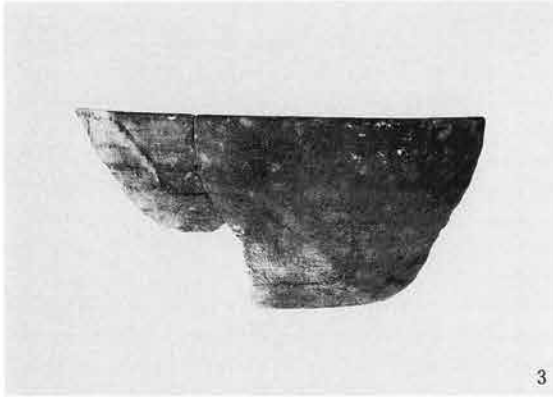
6 41号土坑（南より）



7 46号土坑（北より）

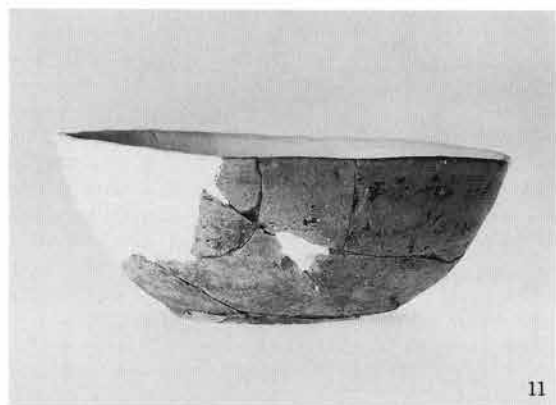
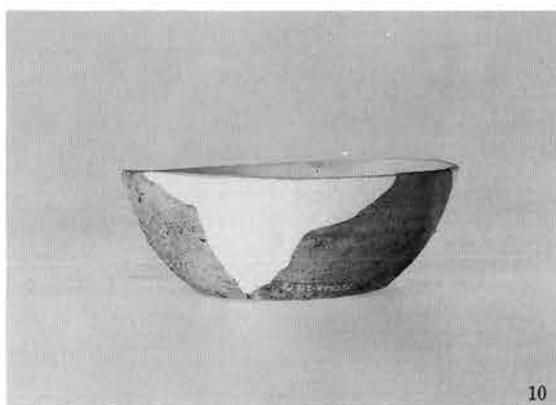
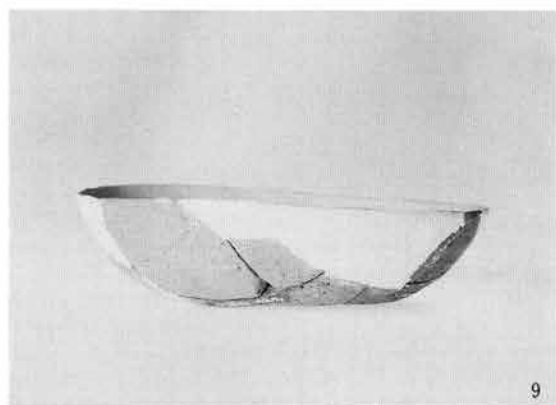


8 24号土坑出土状態（東より）

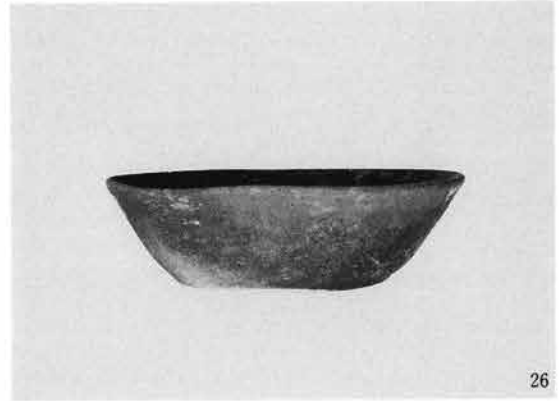
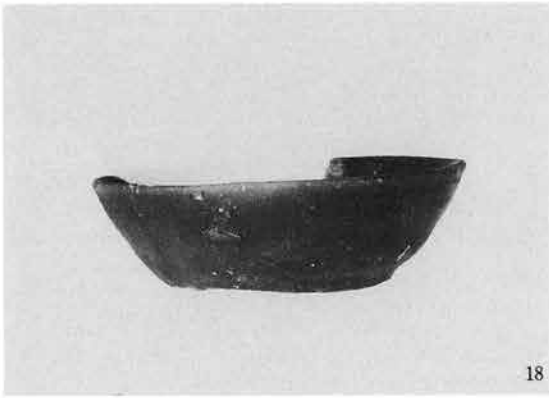


2号住居跡出土遺物 (1)

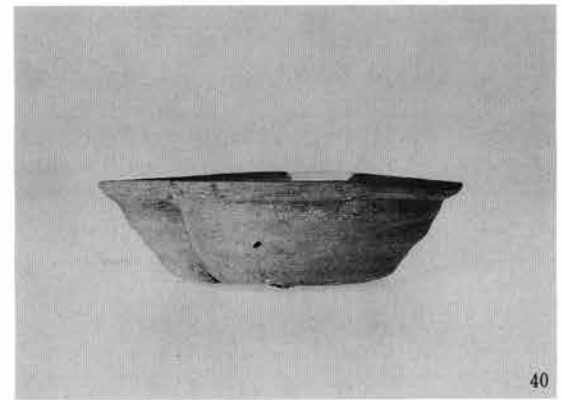
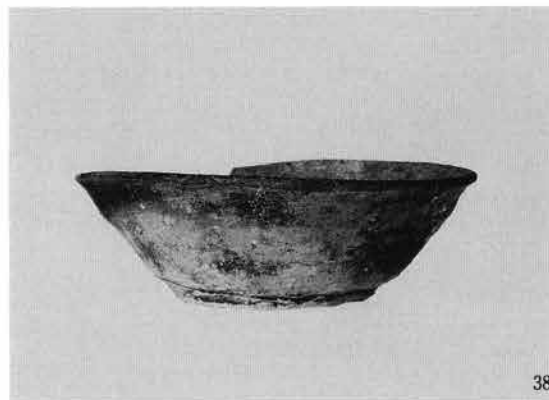
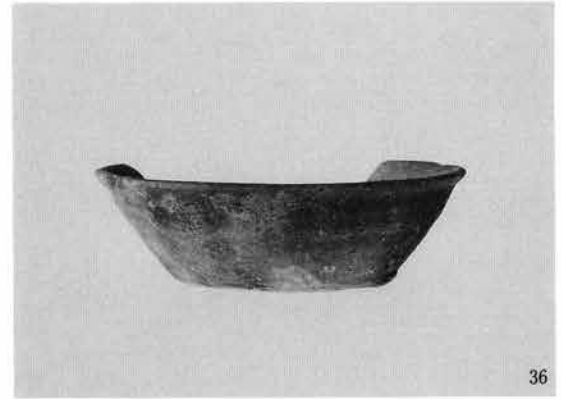
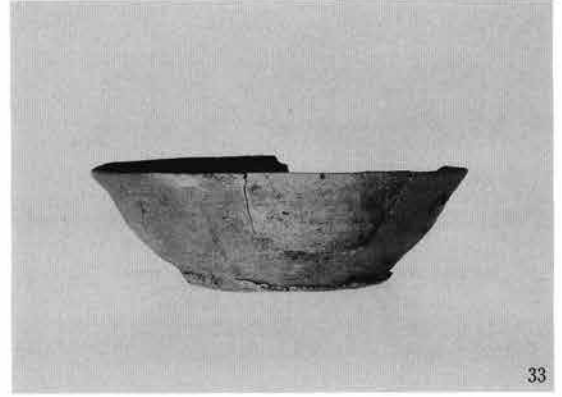
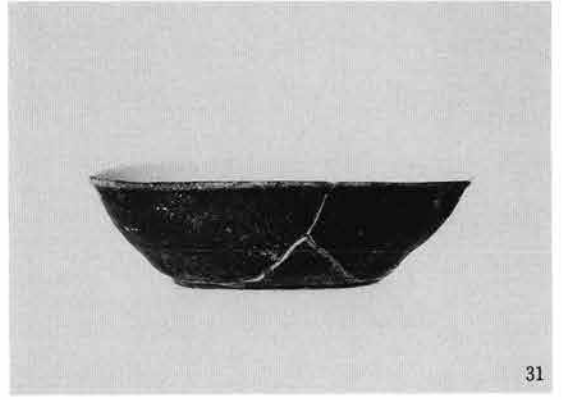
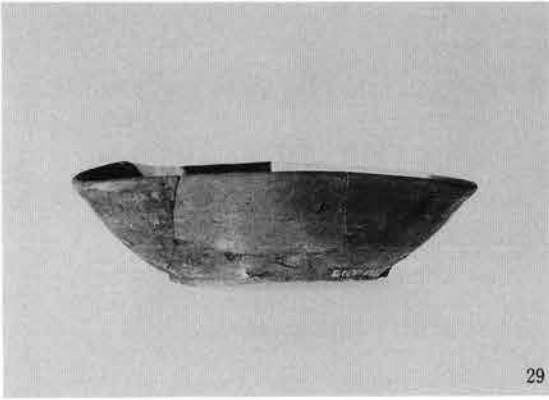




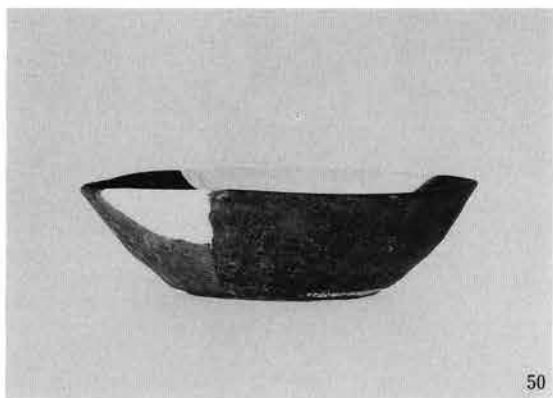
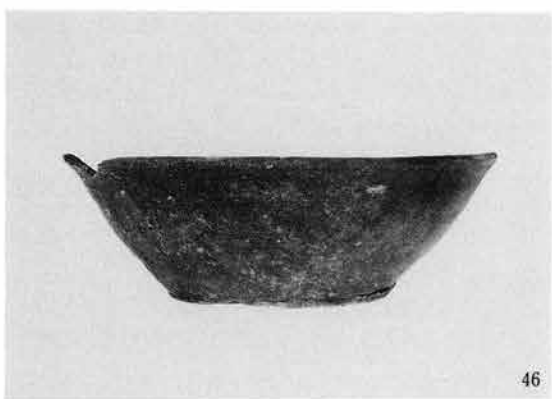
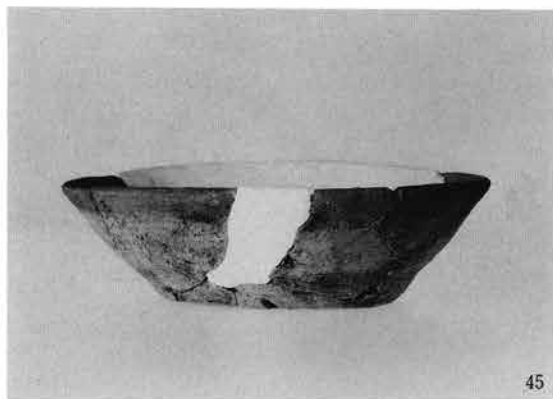
2号住居跡出土遺物 (2)



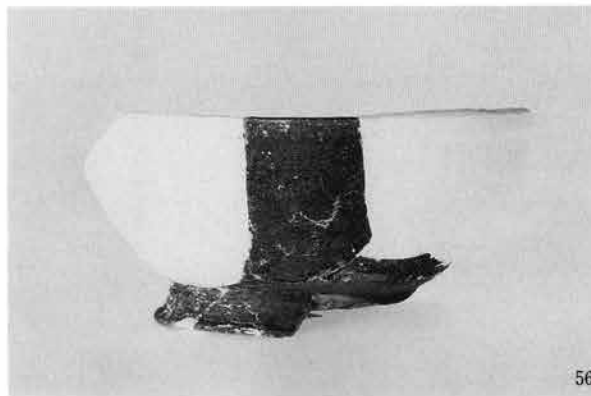
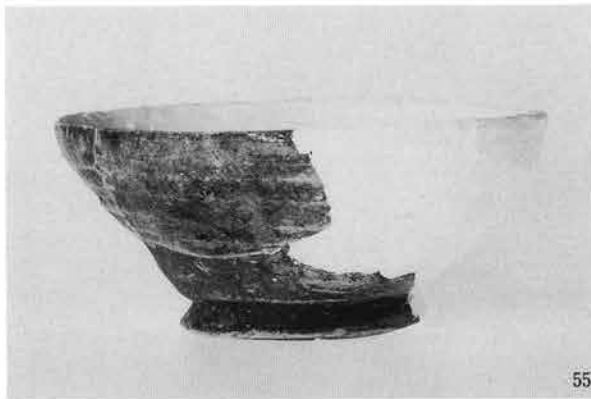
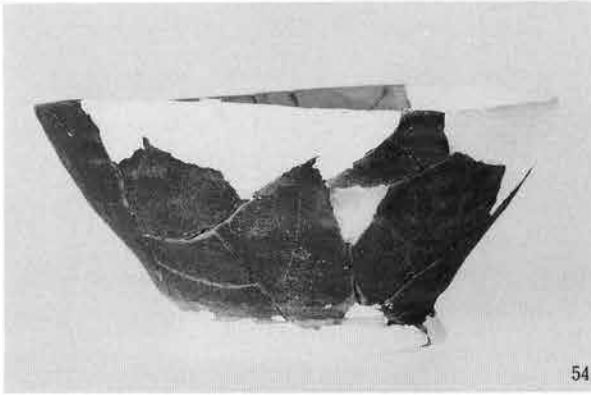
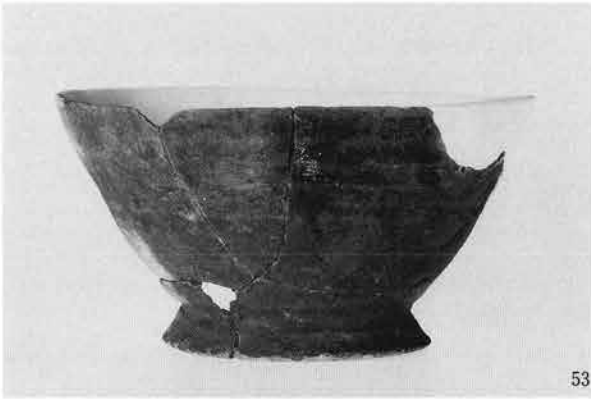
2号住居跡出土遺物 (3)

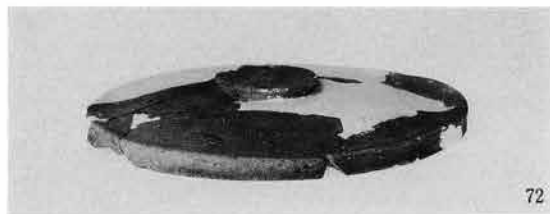
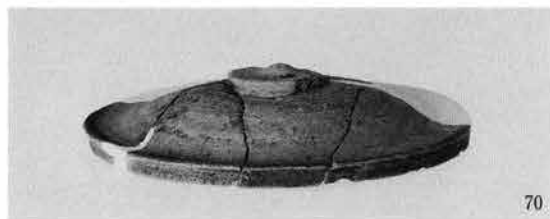
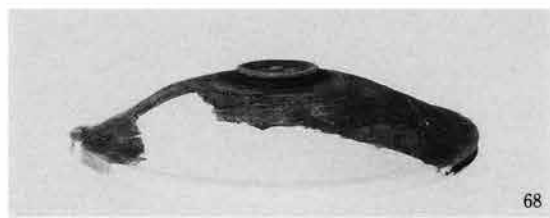
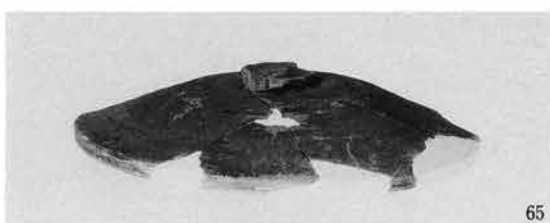


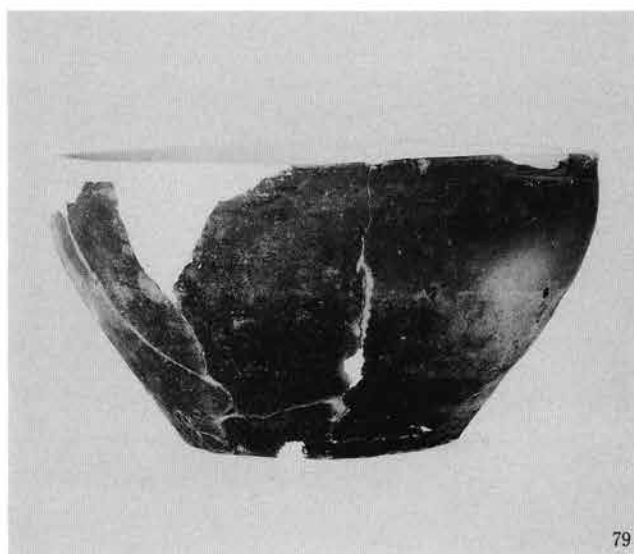
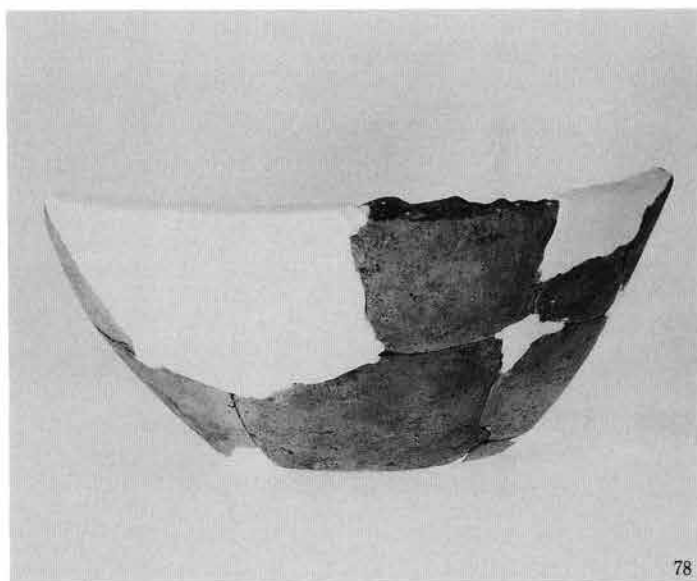
2号住居跡出土遺物 (4)

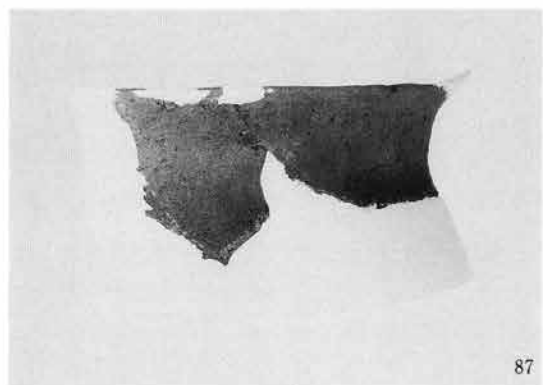
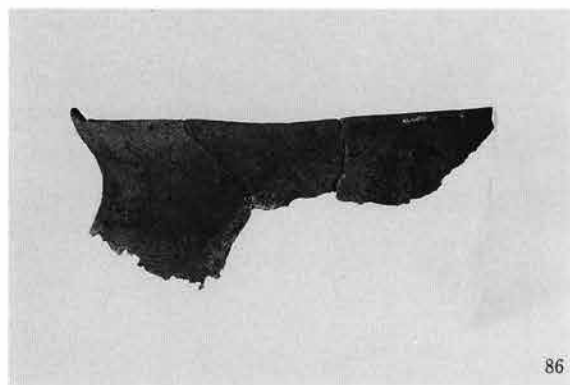
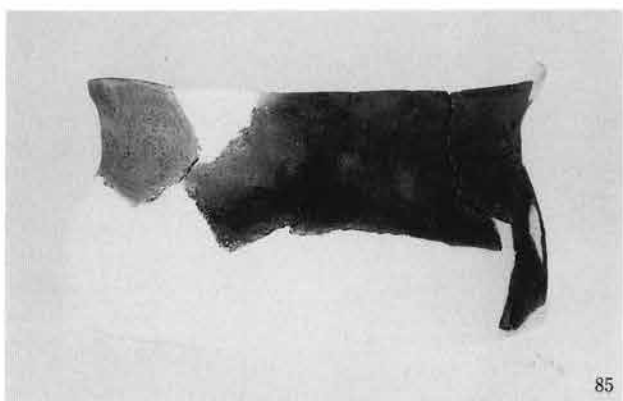
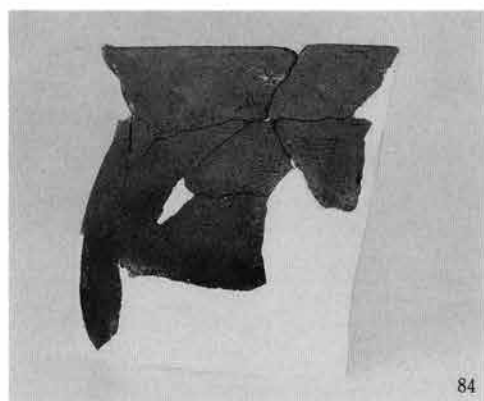
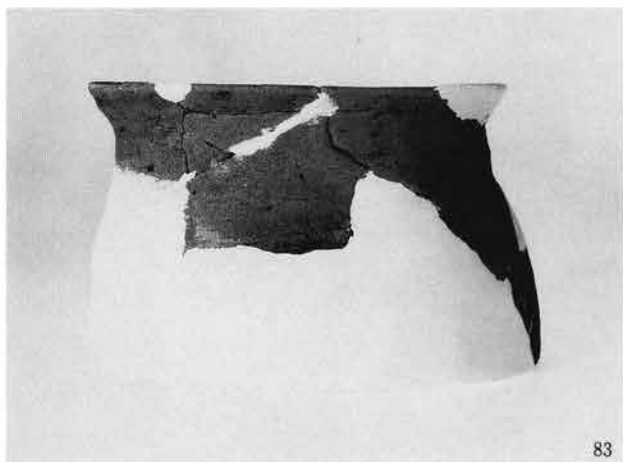
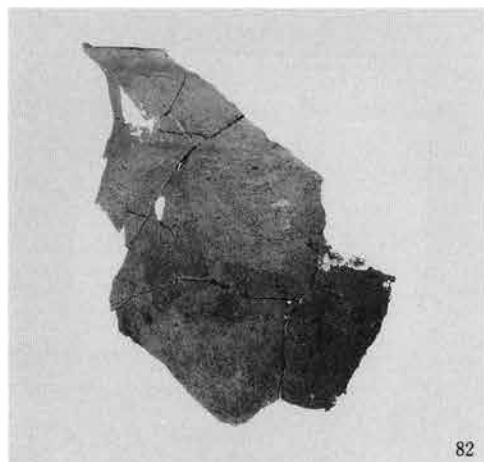
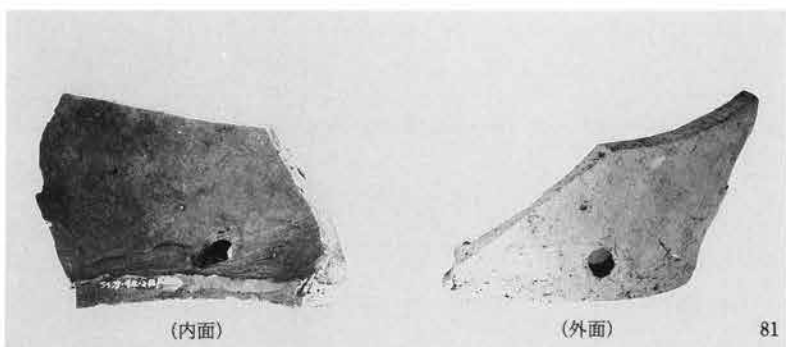


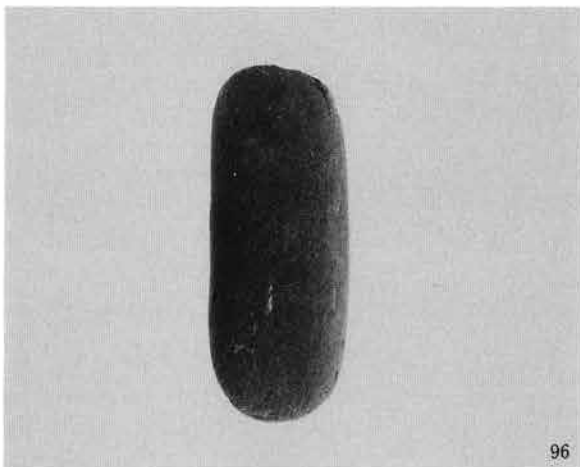
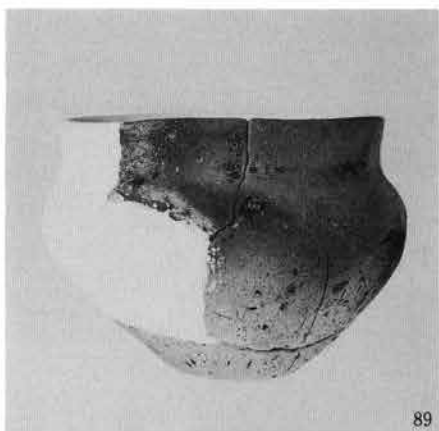
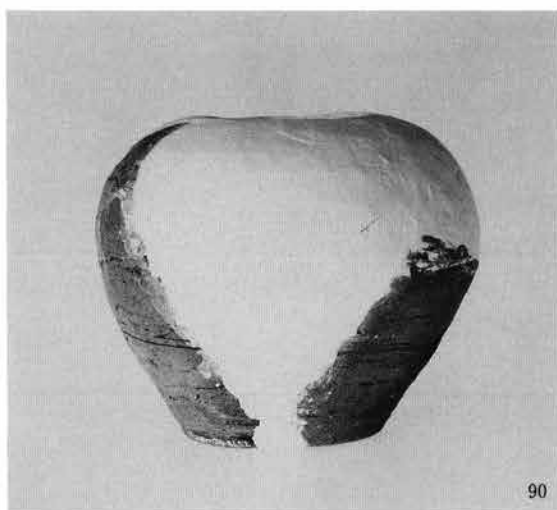


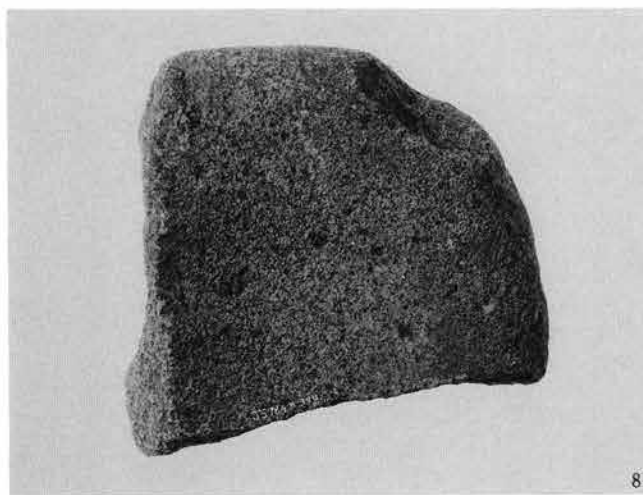
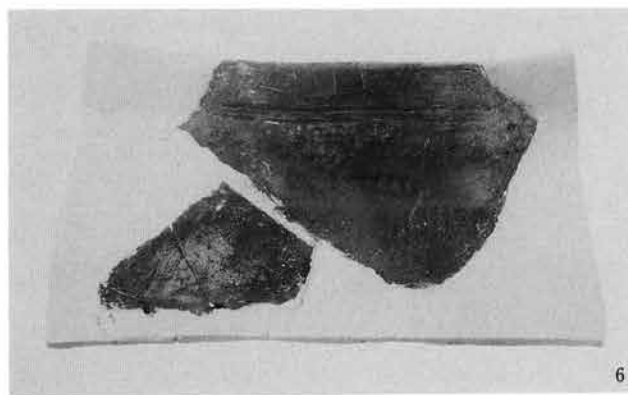


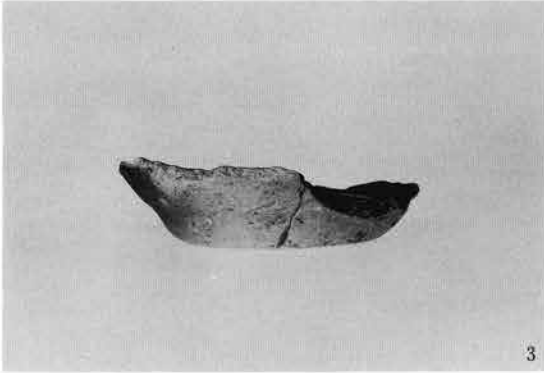
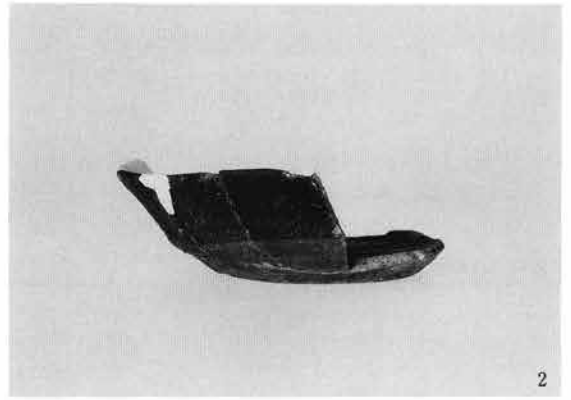




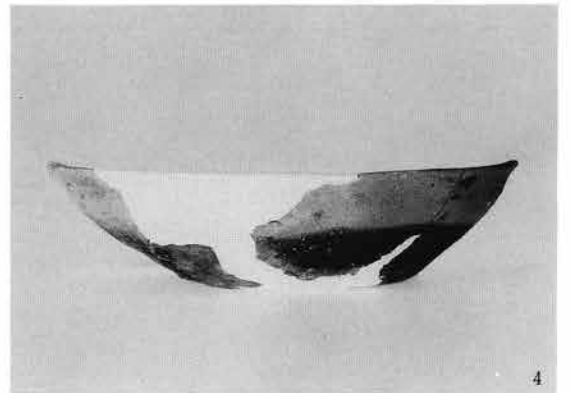
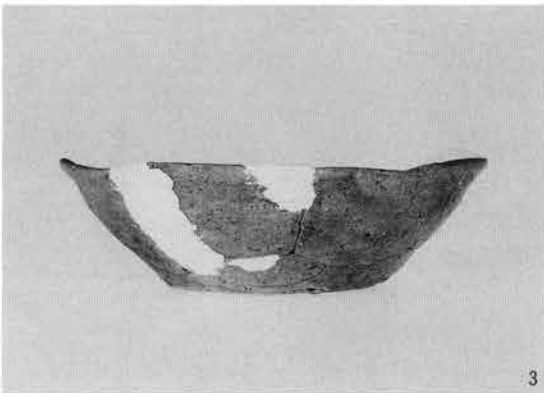
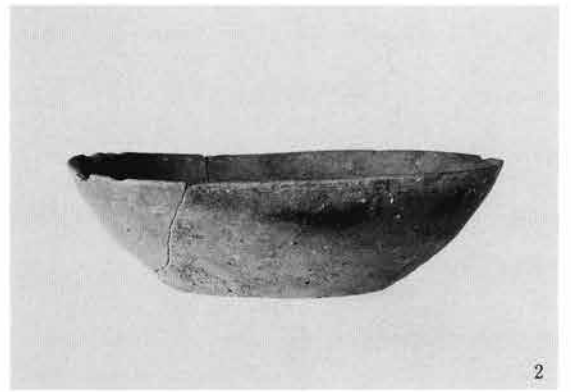




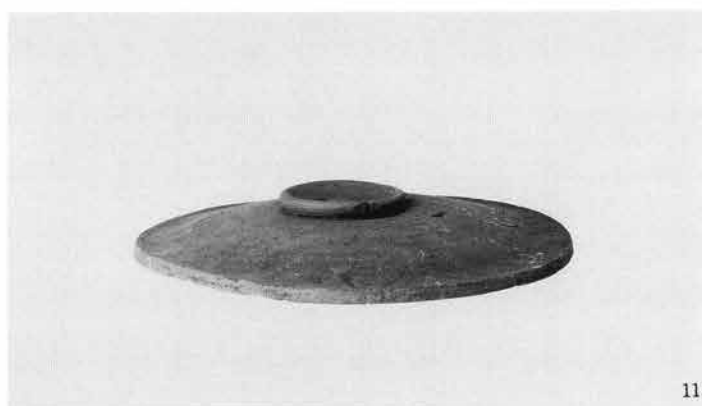
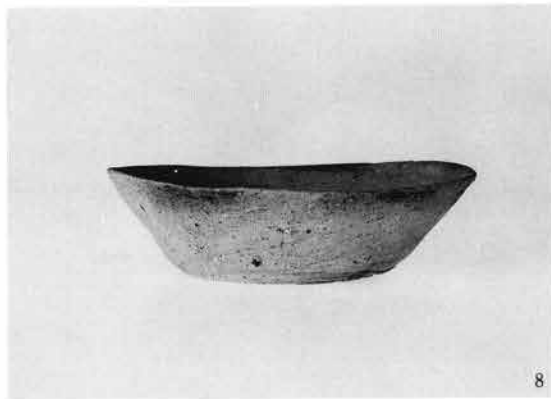




1 4号住居跡出土遺物

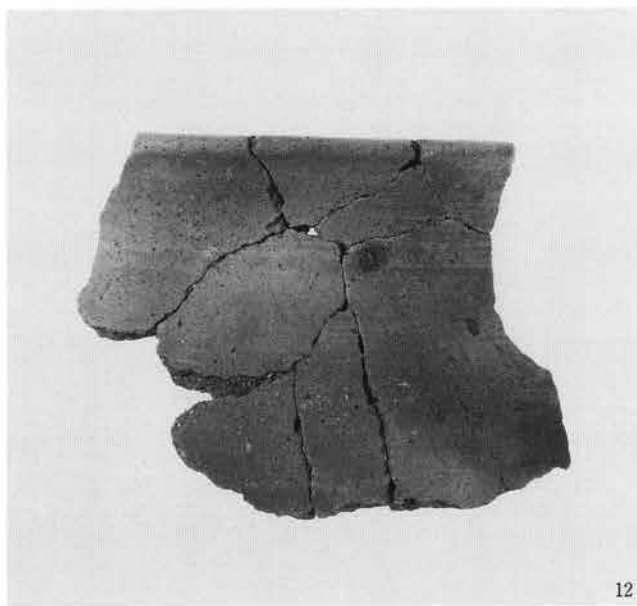


2 5号住居跡出土遺物 (1)

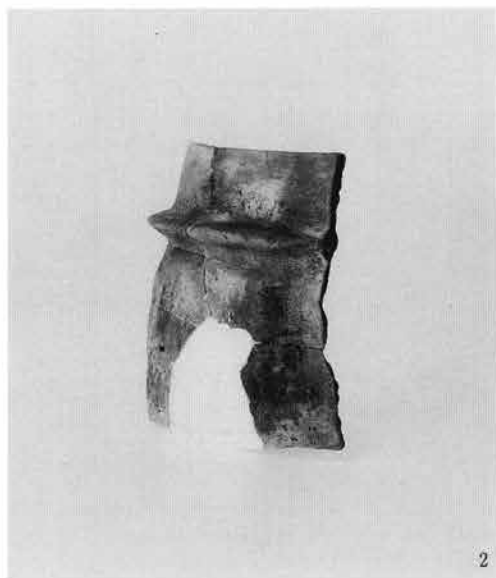
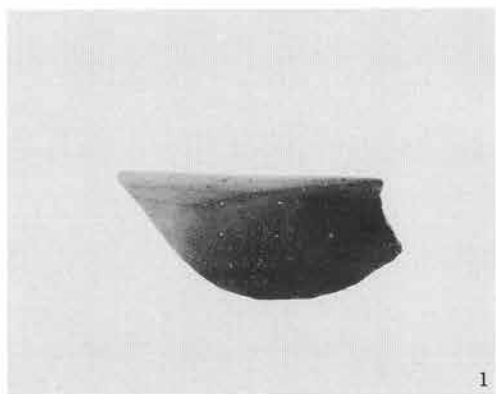


5号住居跡出土遺物 (2)

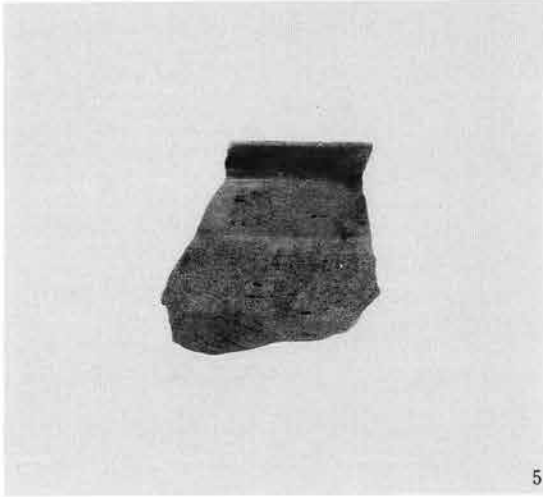
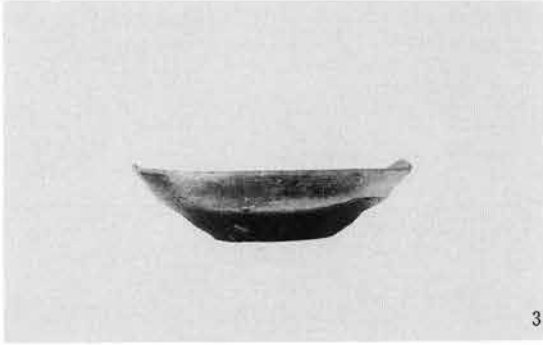
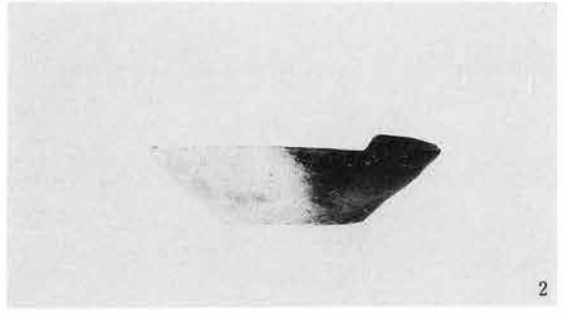
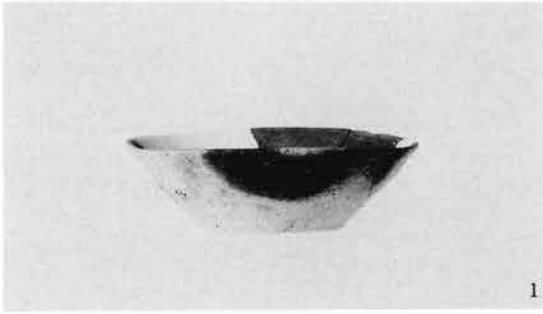




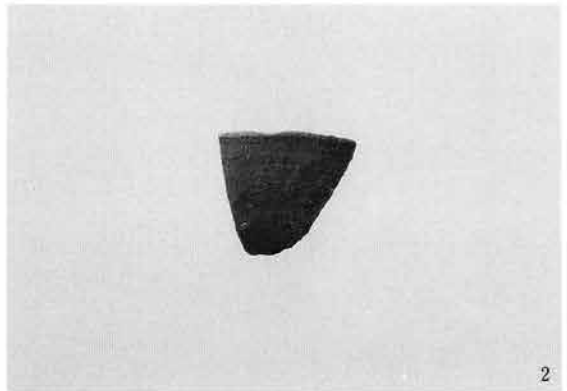
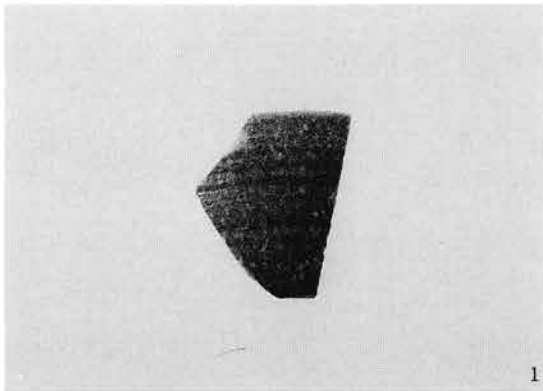
1 5号住居跡出土遺物 (3)



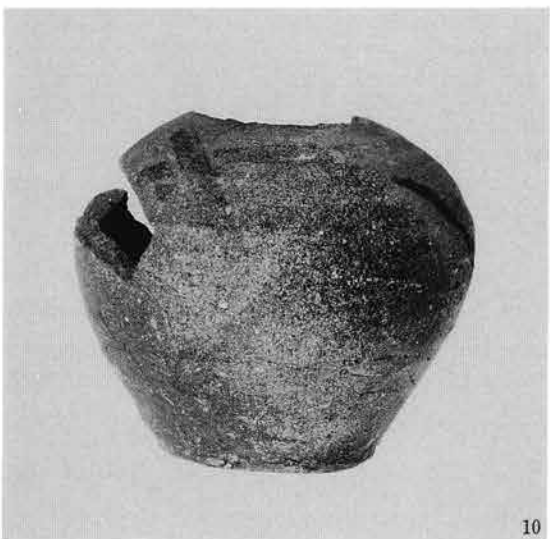
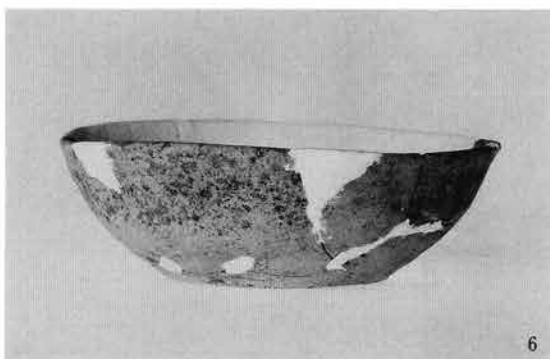
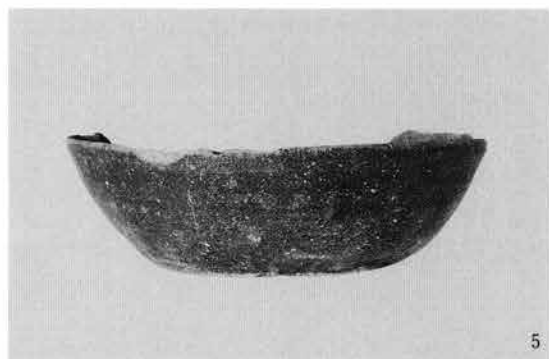
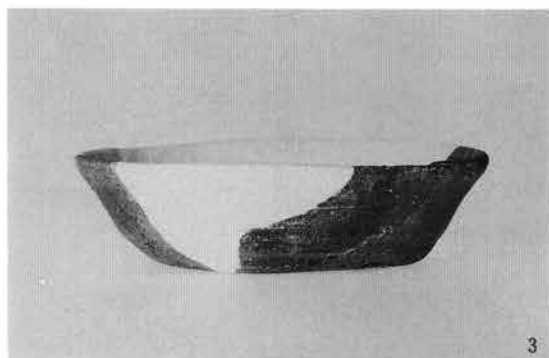
2 6号住居跡出土遺物



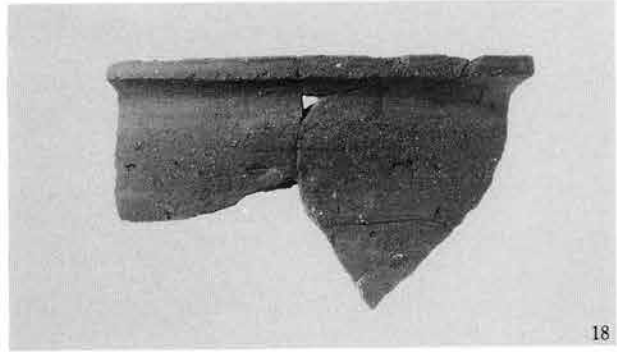
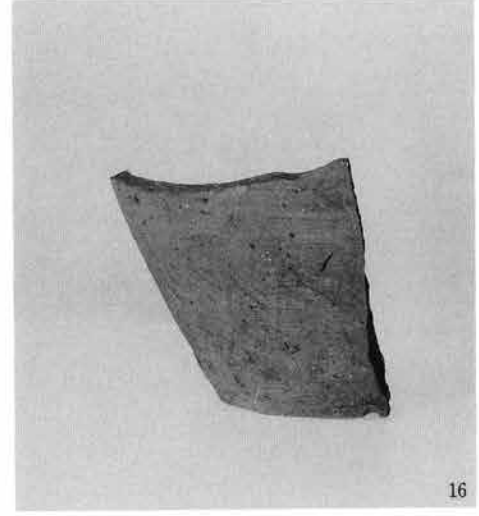
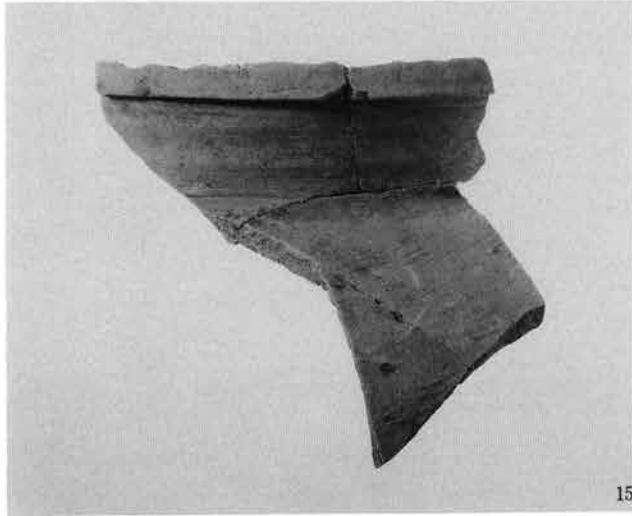
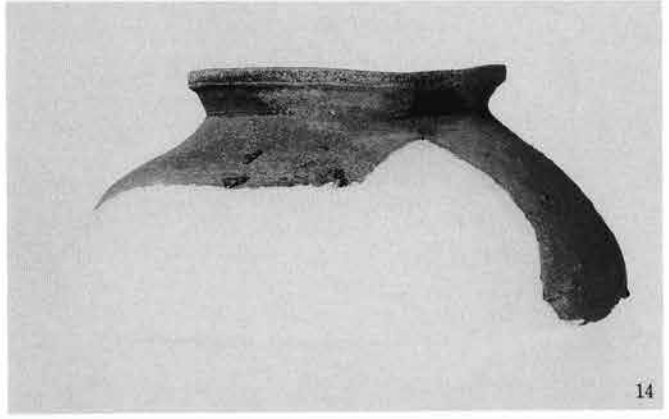
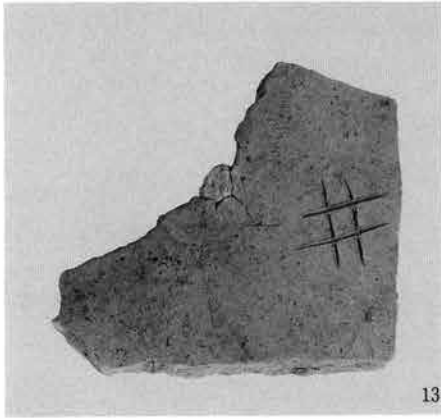
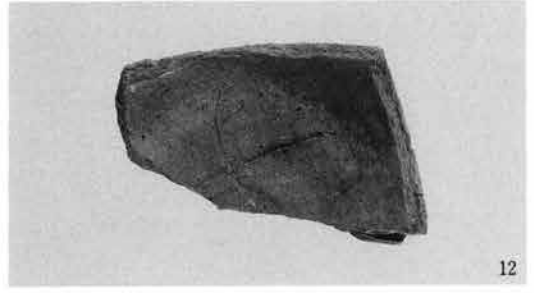
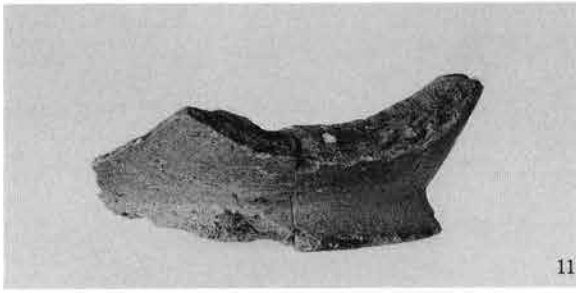
1 2号土坑出土遺物

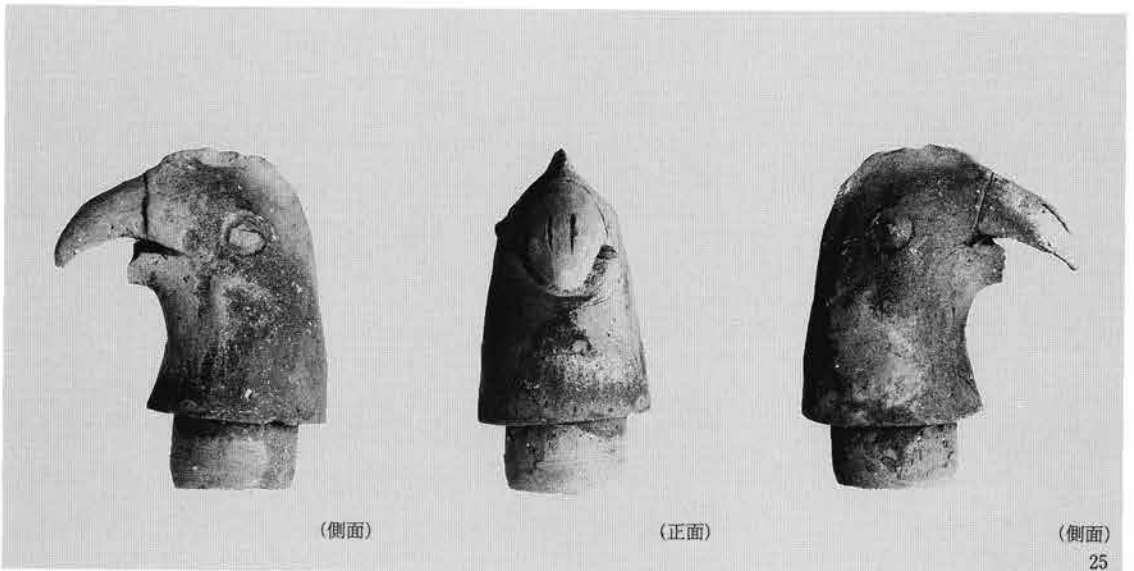
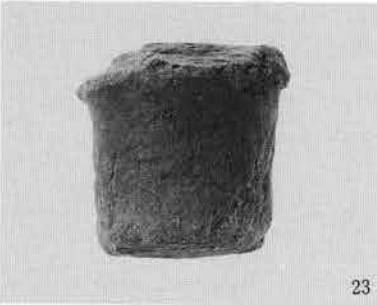
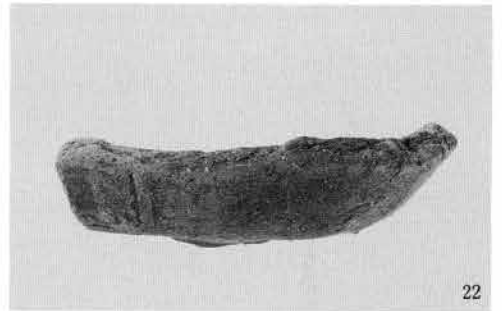
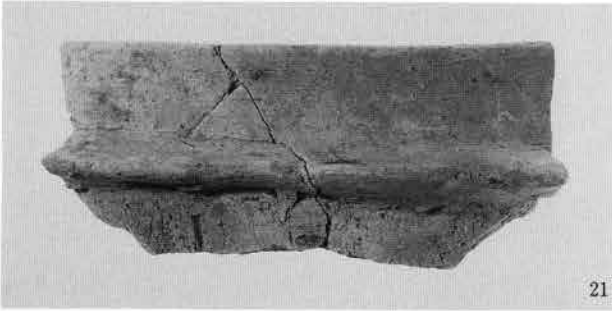
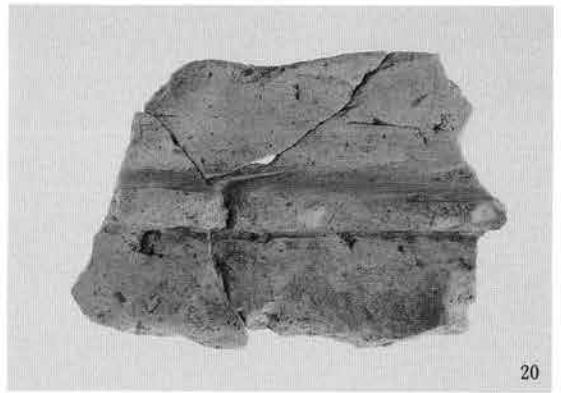
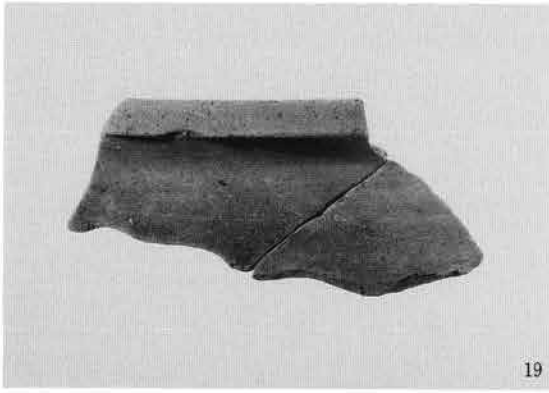


2 グリット出土の平安時代遺物 (1)

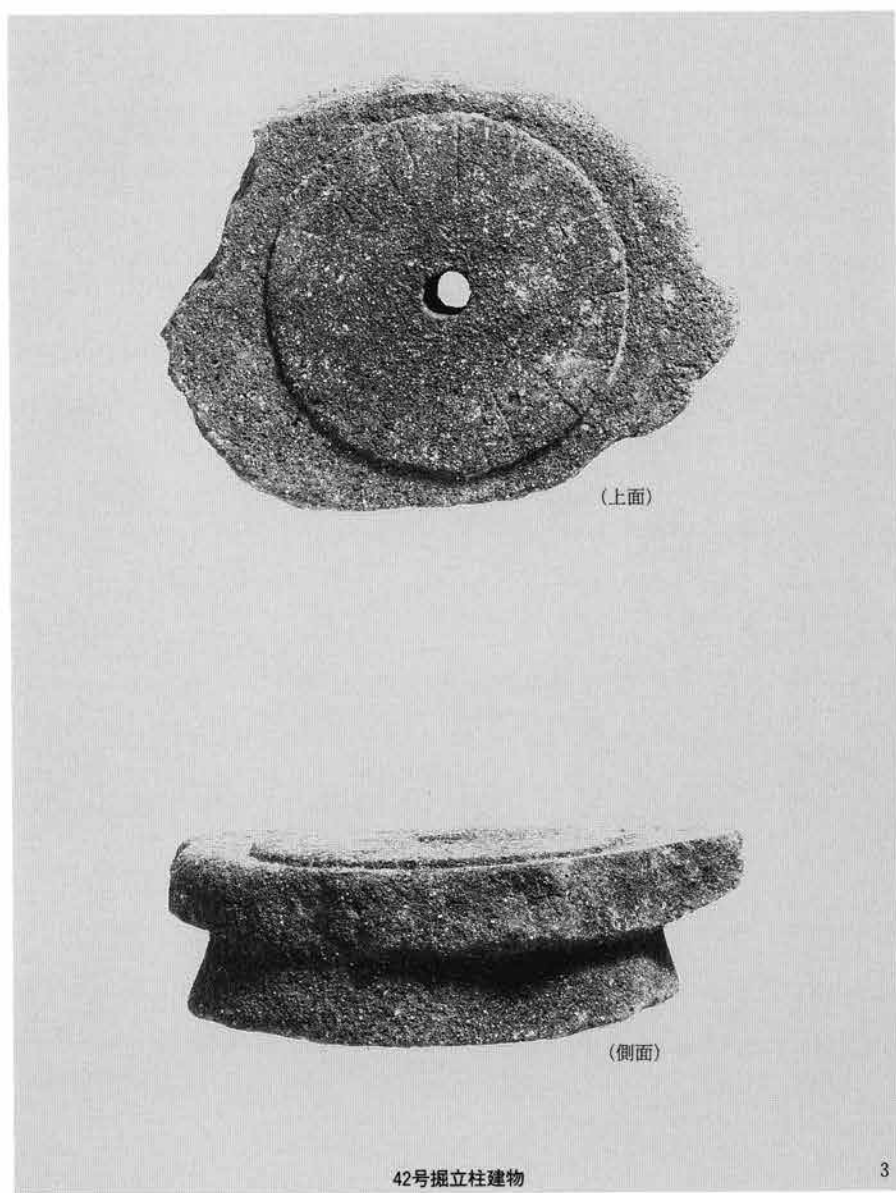
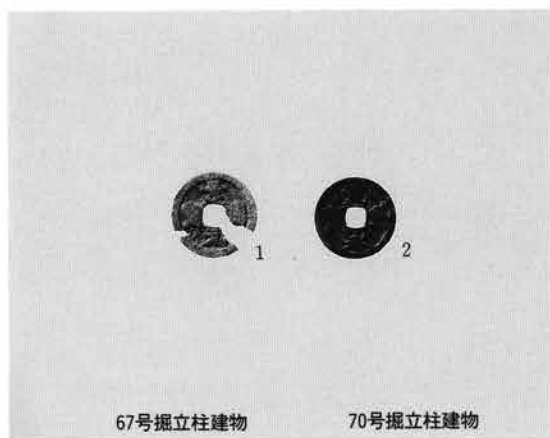


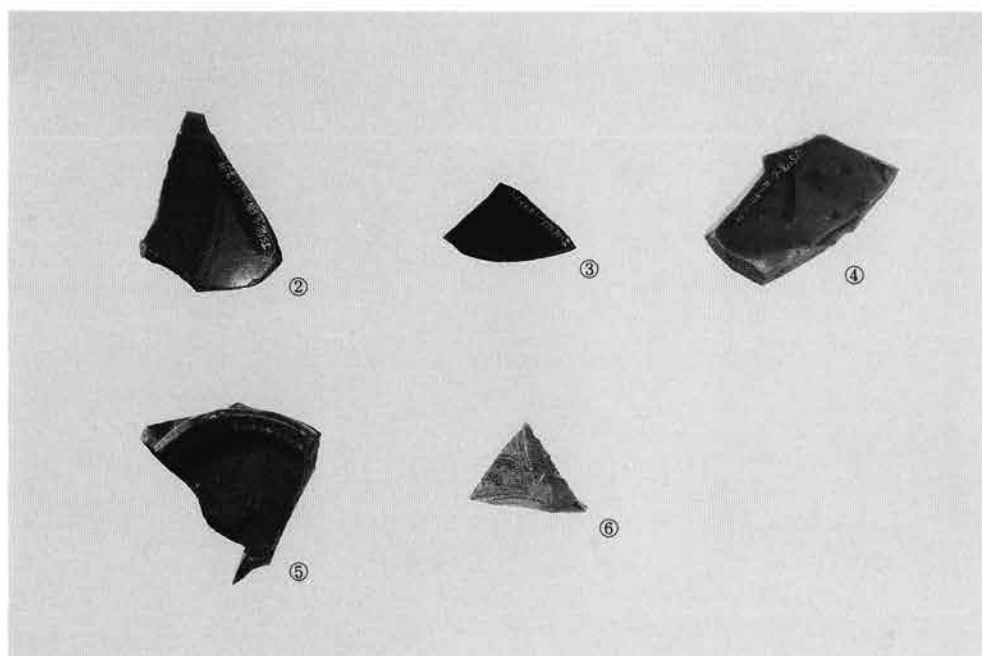
グリット出土の平安時代遺物 (2)



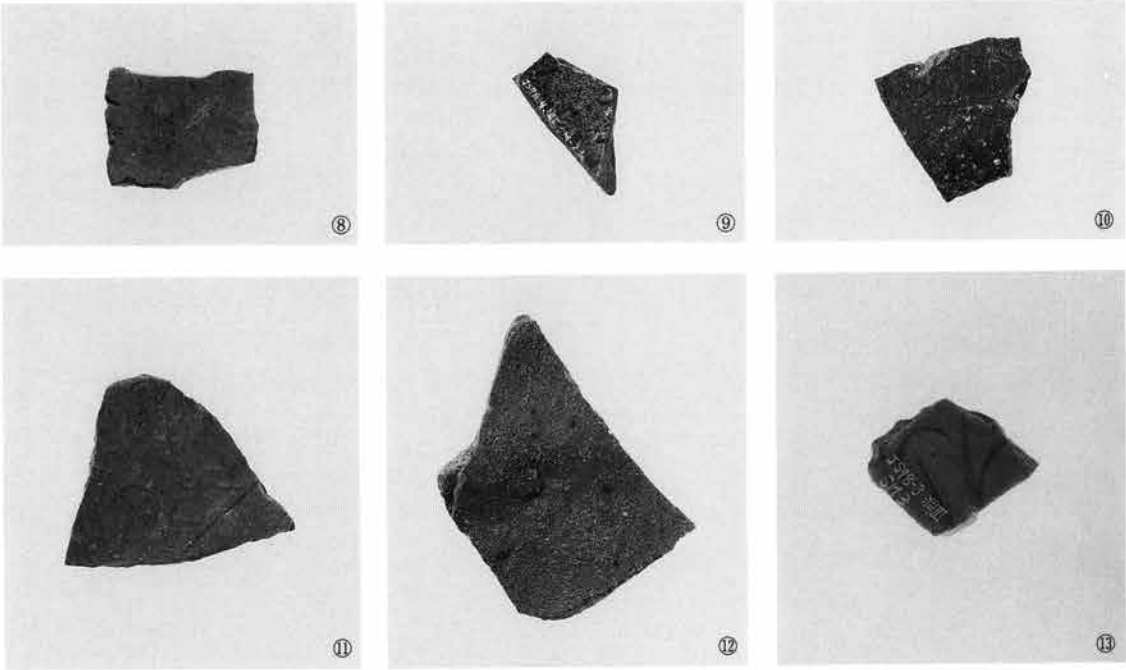


グリット出土の平安時代遺物 (4)

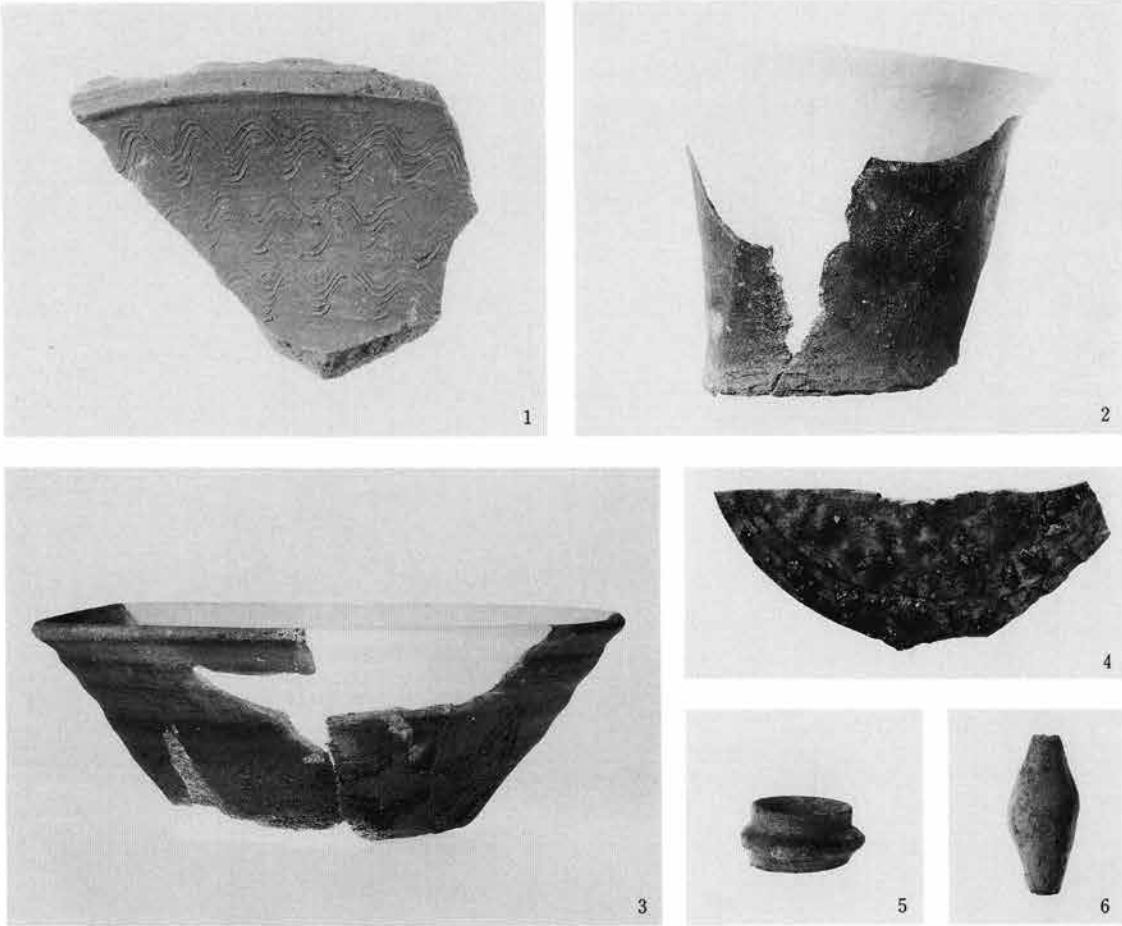




2号沟出土遺物

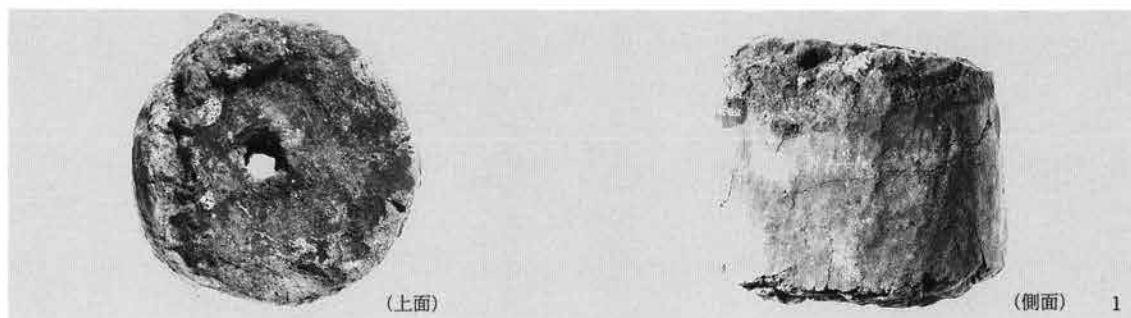


1 2・3号溝出土遺物



2 2号溝出土の平安時代遺物



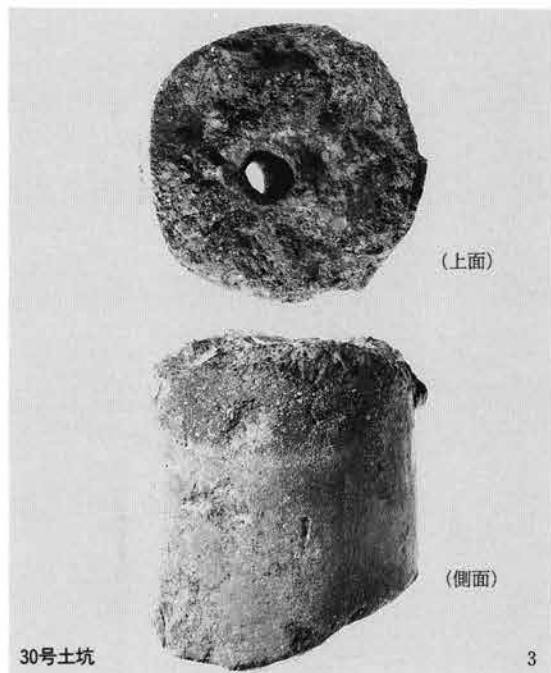


(上面)

(側面)

1

1 2号井戸出土遺物

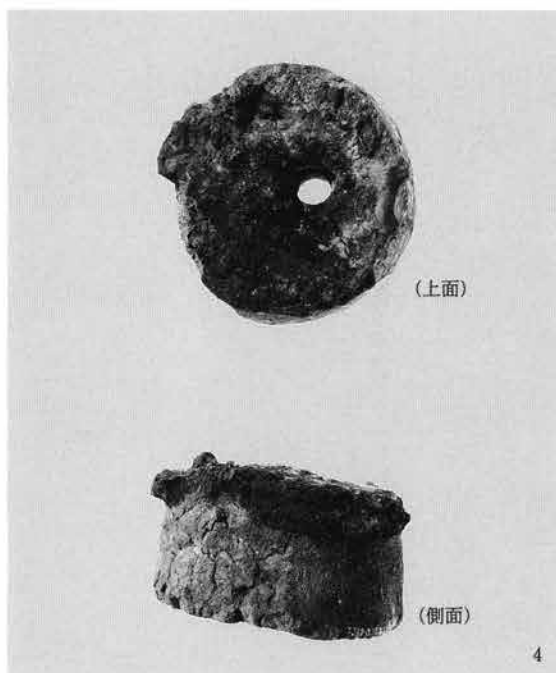


(上面)

(側面)

30号土坑

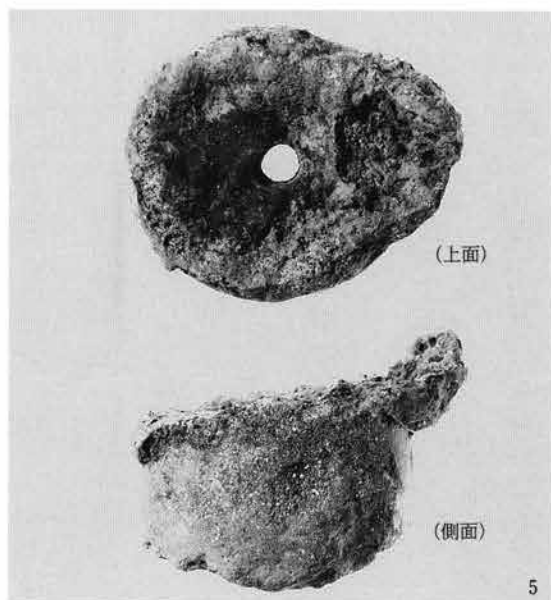
3



(上面)

(側面)

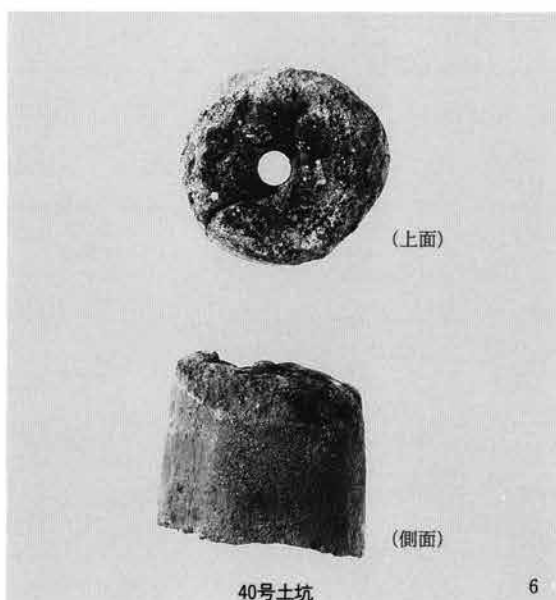
4



(上面)

(側面)

5



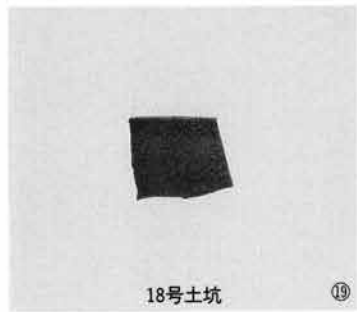
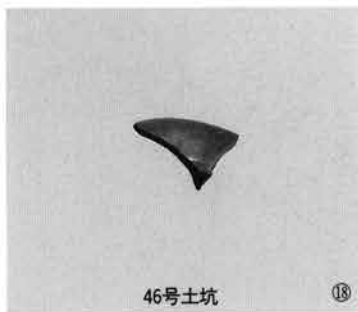
(上面)

(側面)

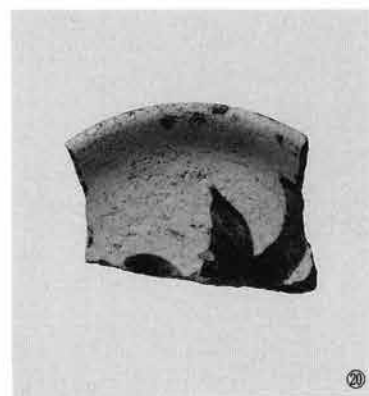
40号土坑

6

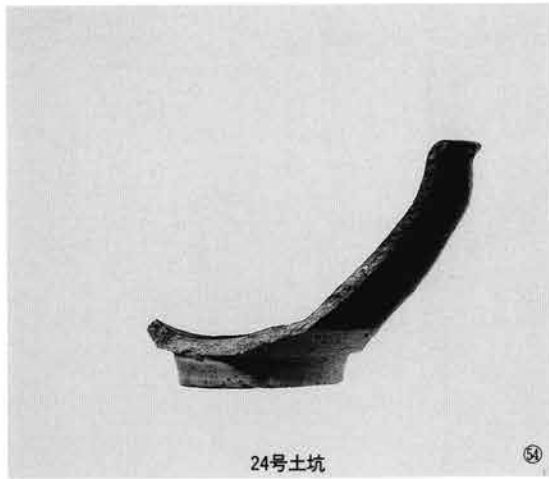
2 30・40号土坑出土遺物



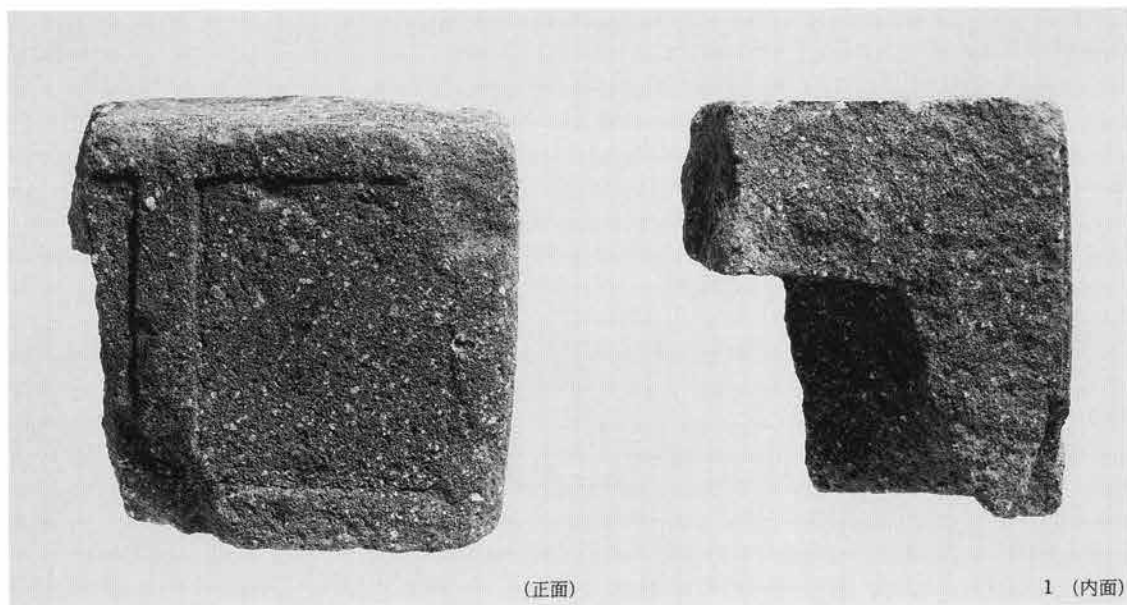
1 46·18号土坑出土遺物



2 18·40号土坑出土遺物



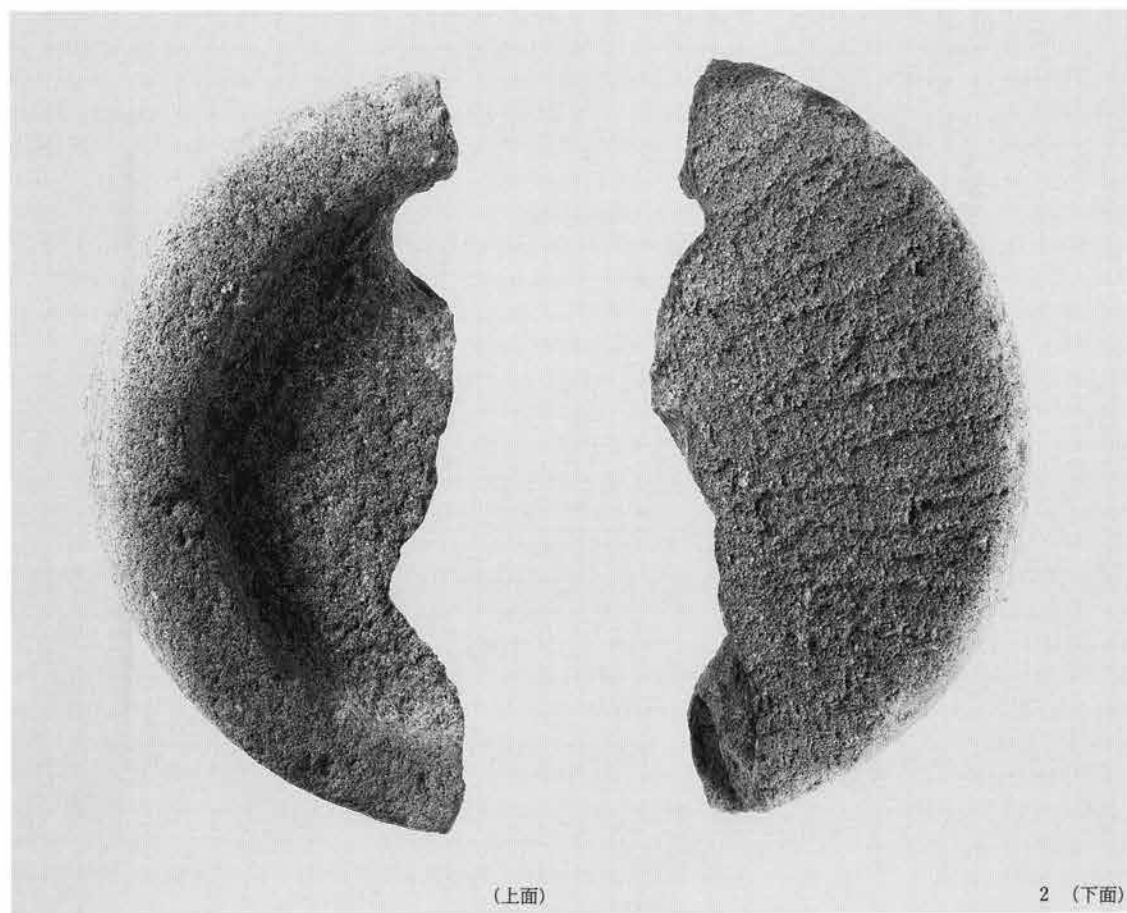
3 40·24号土坑出土遺物



(正面)

1 (内面)

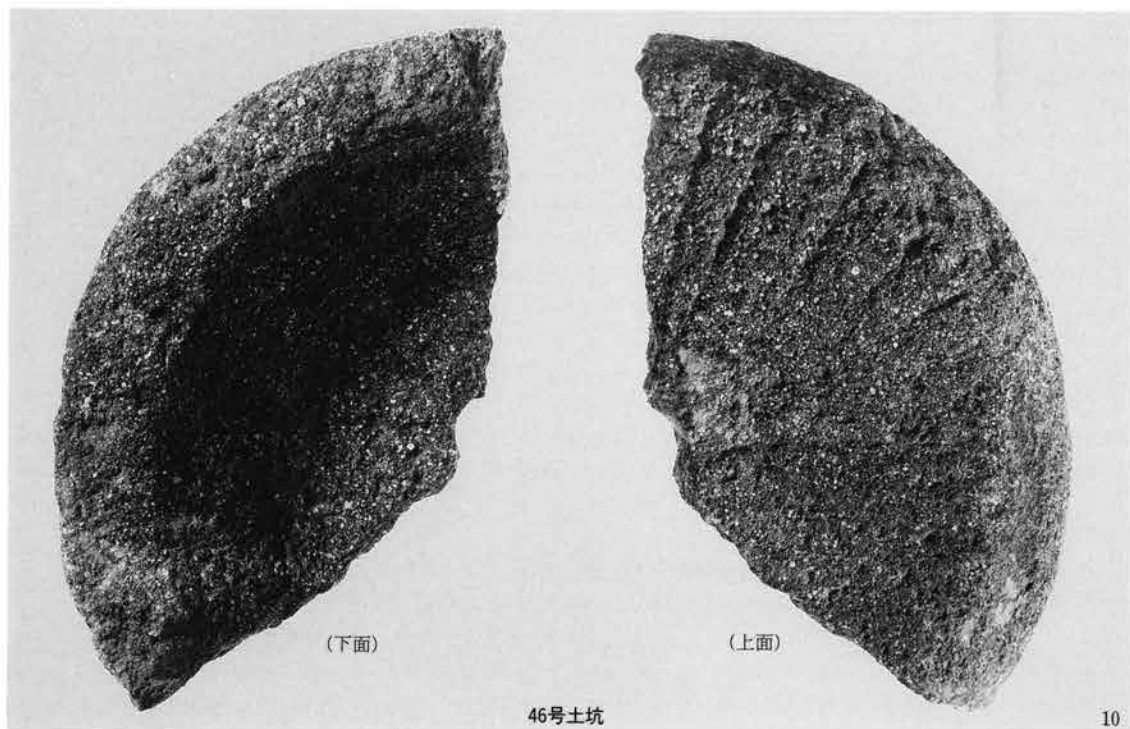
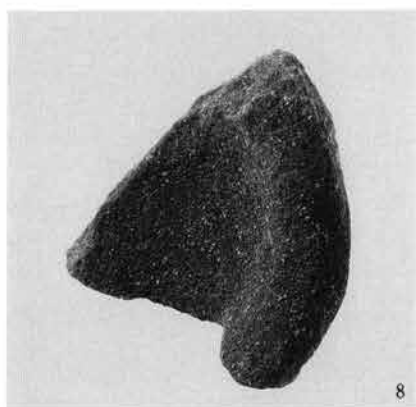
1 20号土坑出土遺物

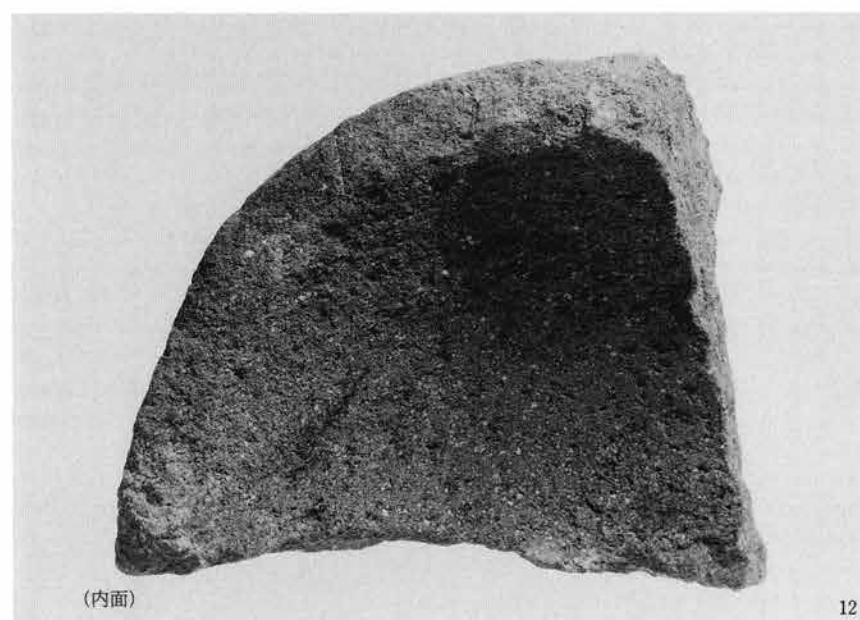
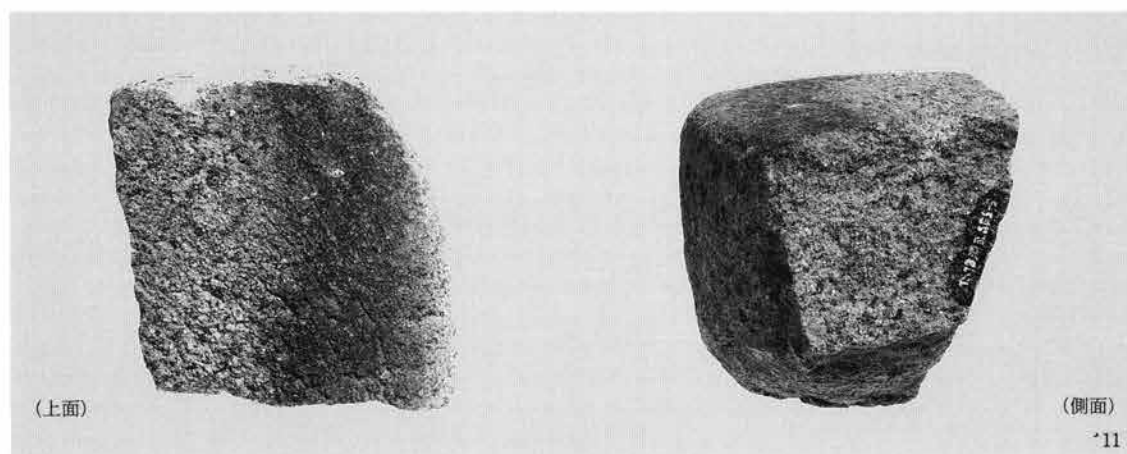


(上面)

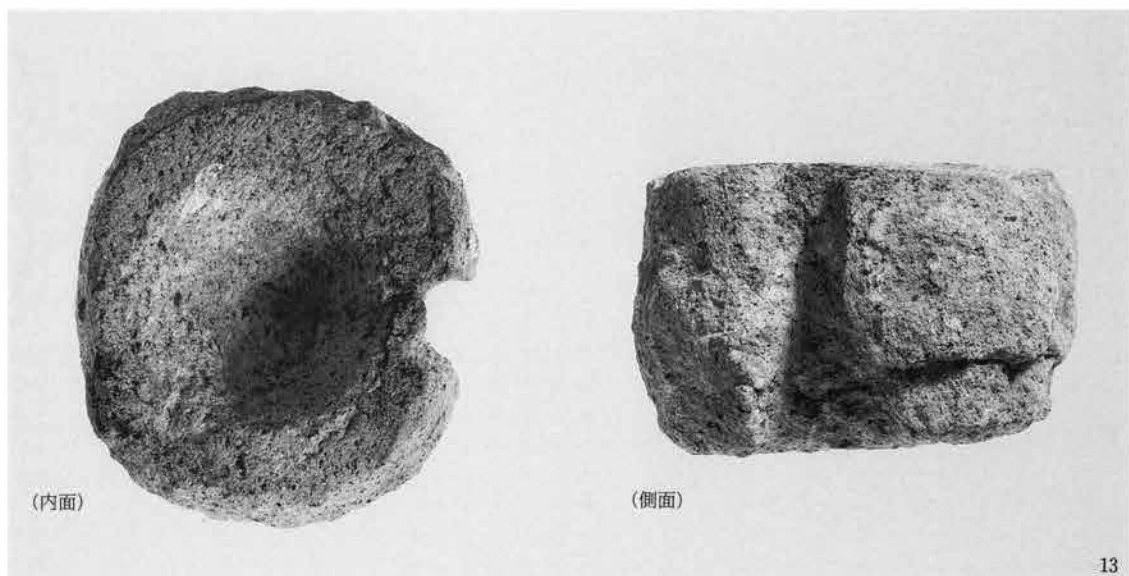
2 (下面)

2 40号土坑出土遺物 (1)

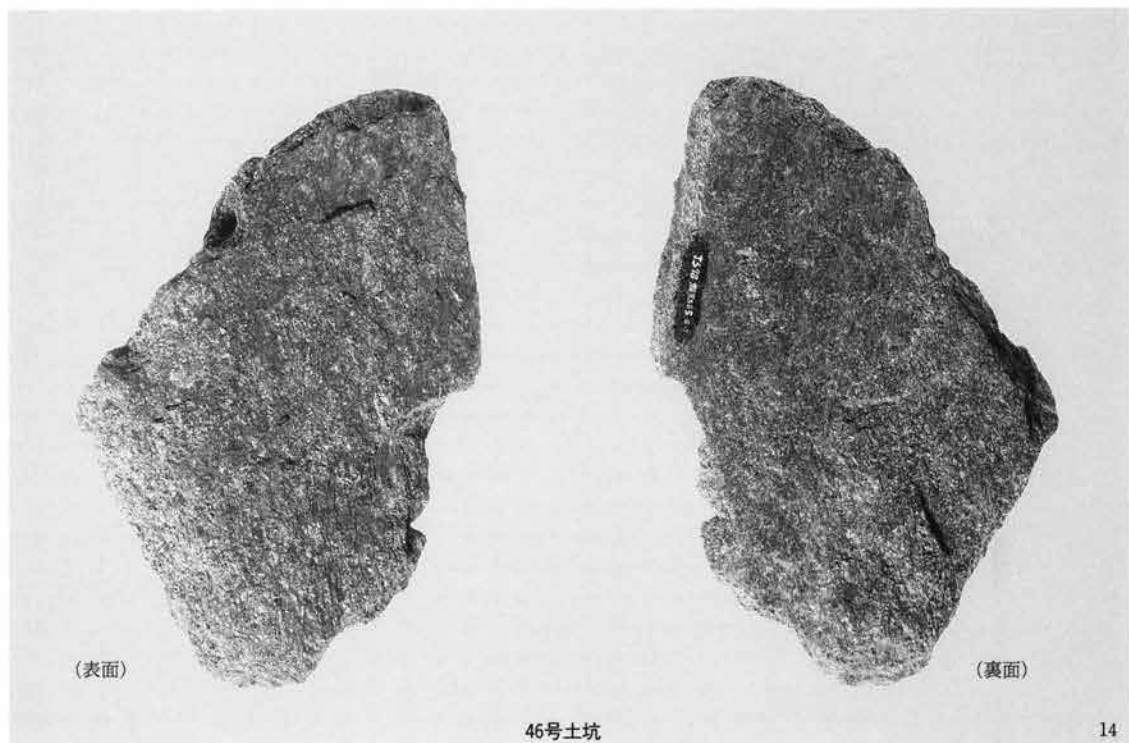




46号土坑出土遺物

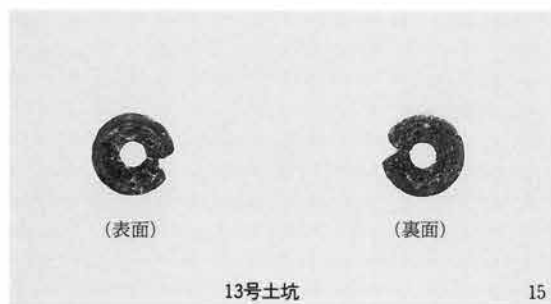


13



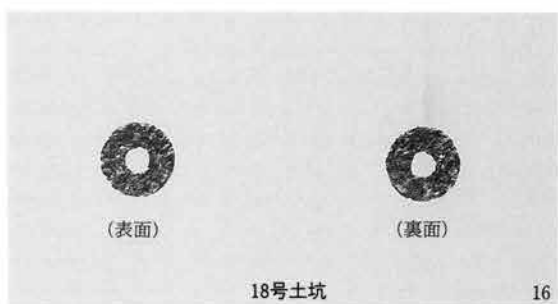
46号土坑

14



13号土坑

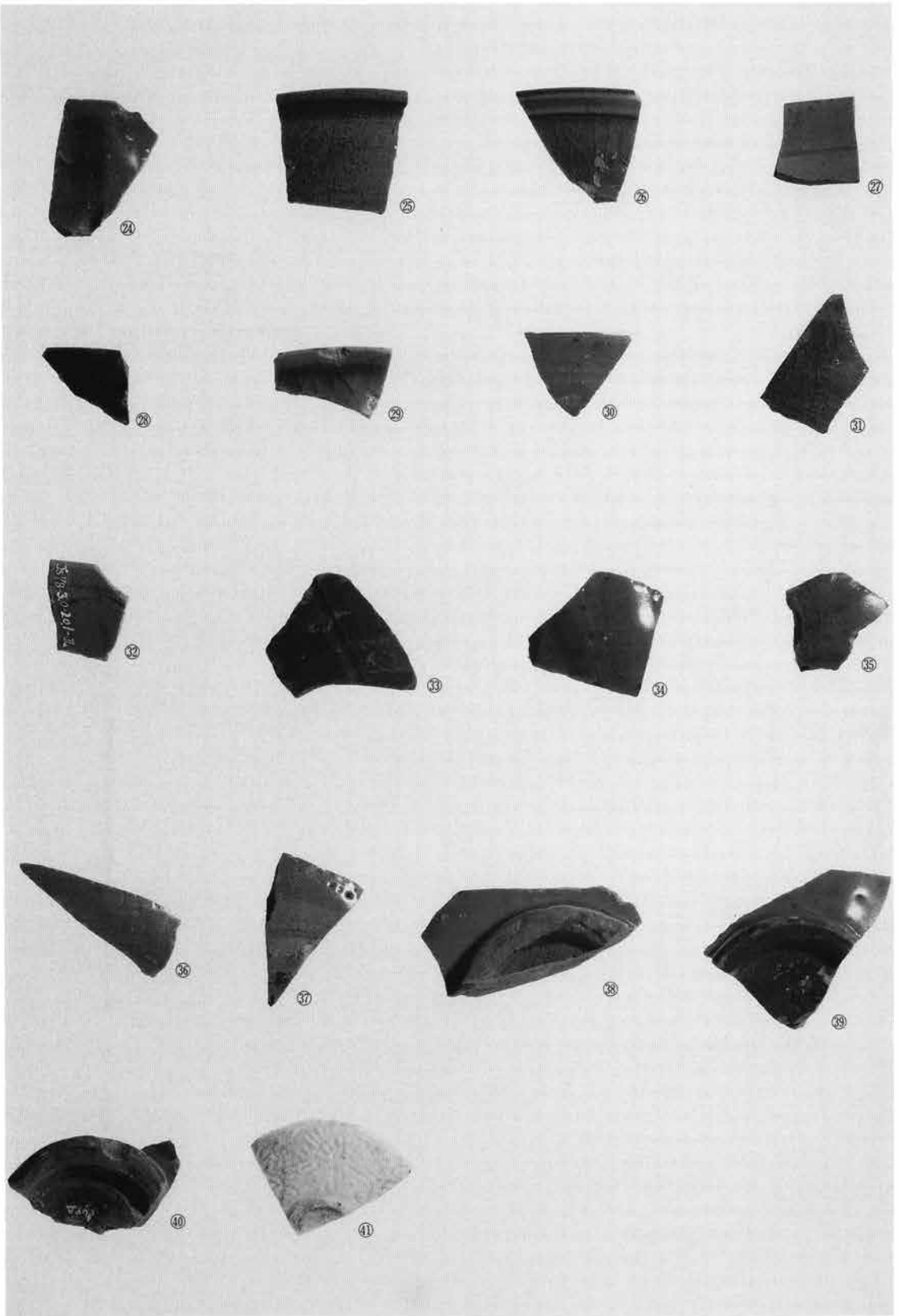
15



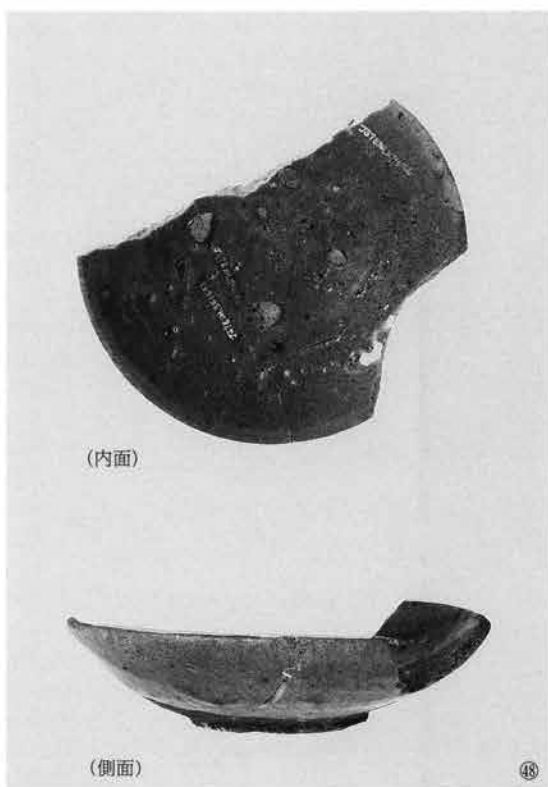
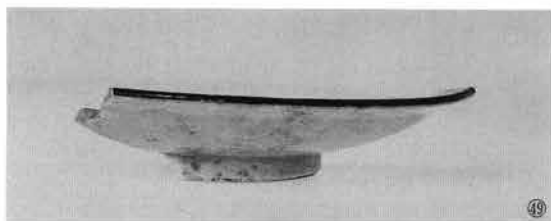
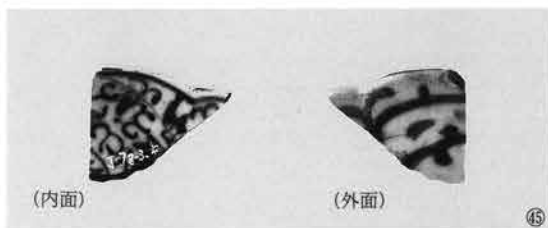
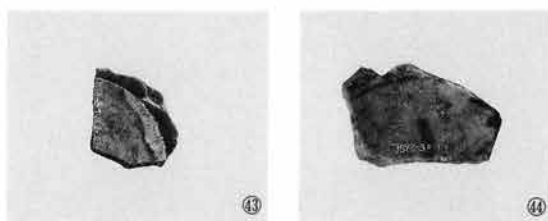
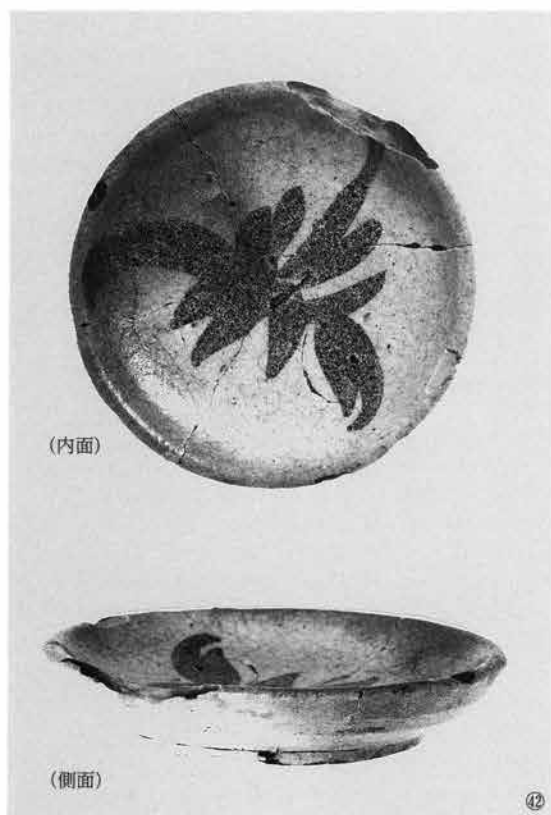
18号土坑

16

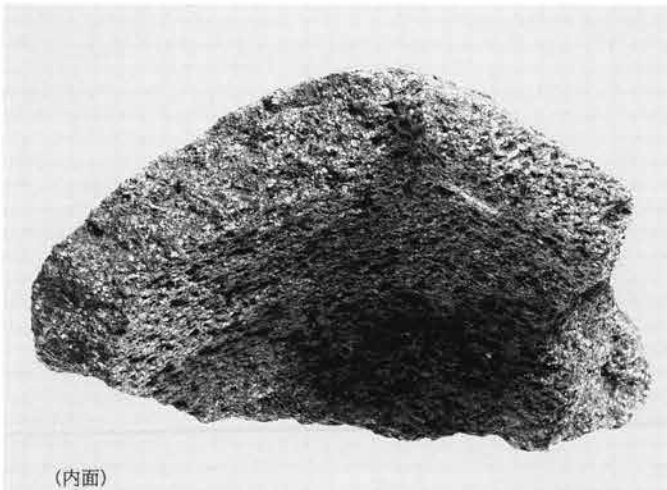




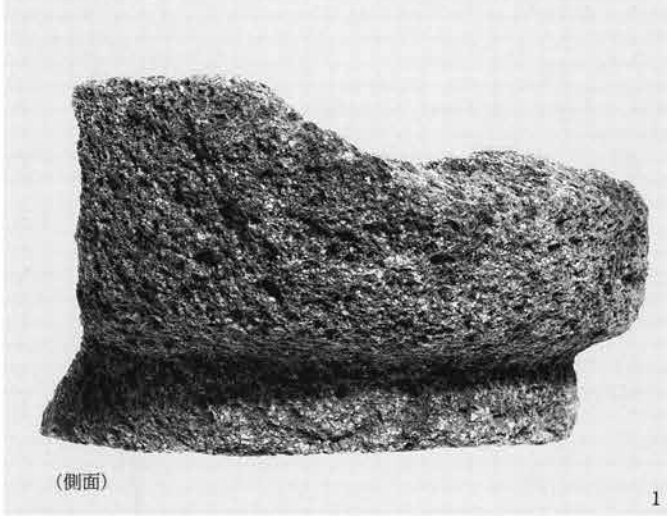
グリット出土の中・近世遺物 (1)



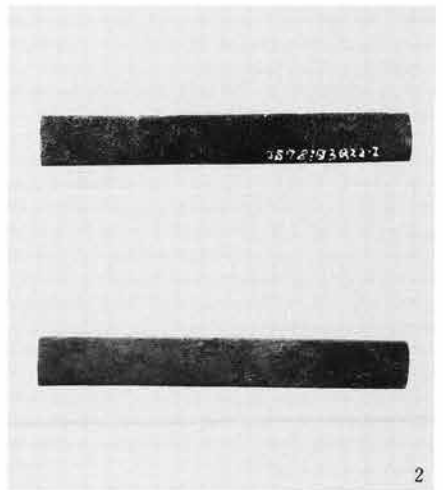




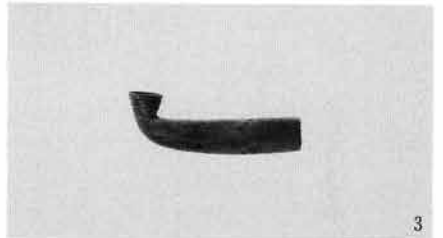
(内面)



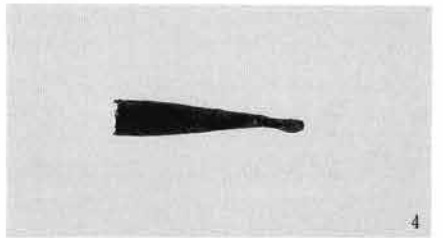
(側面)



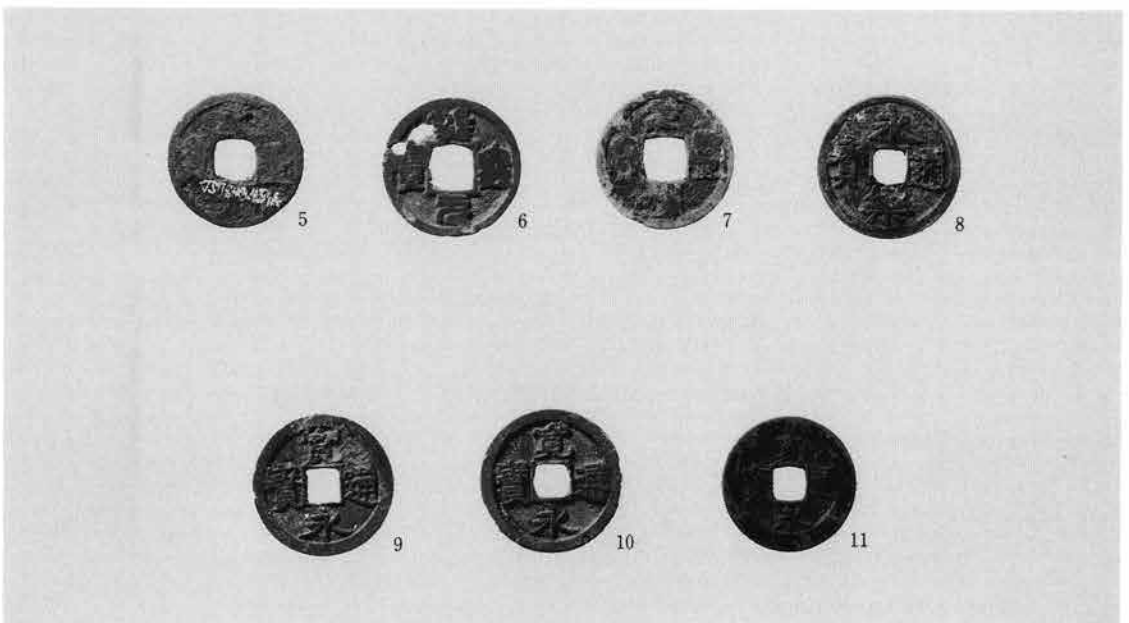
2



3



4



グリット出土の中・近世遺物 (3)



洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡調査員（昭和53年12月）

# 洞 I・II・III遺跡

—上越新幹線関係埋蔵  
文化財発掘調査報告 第7集—

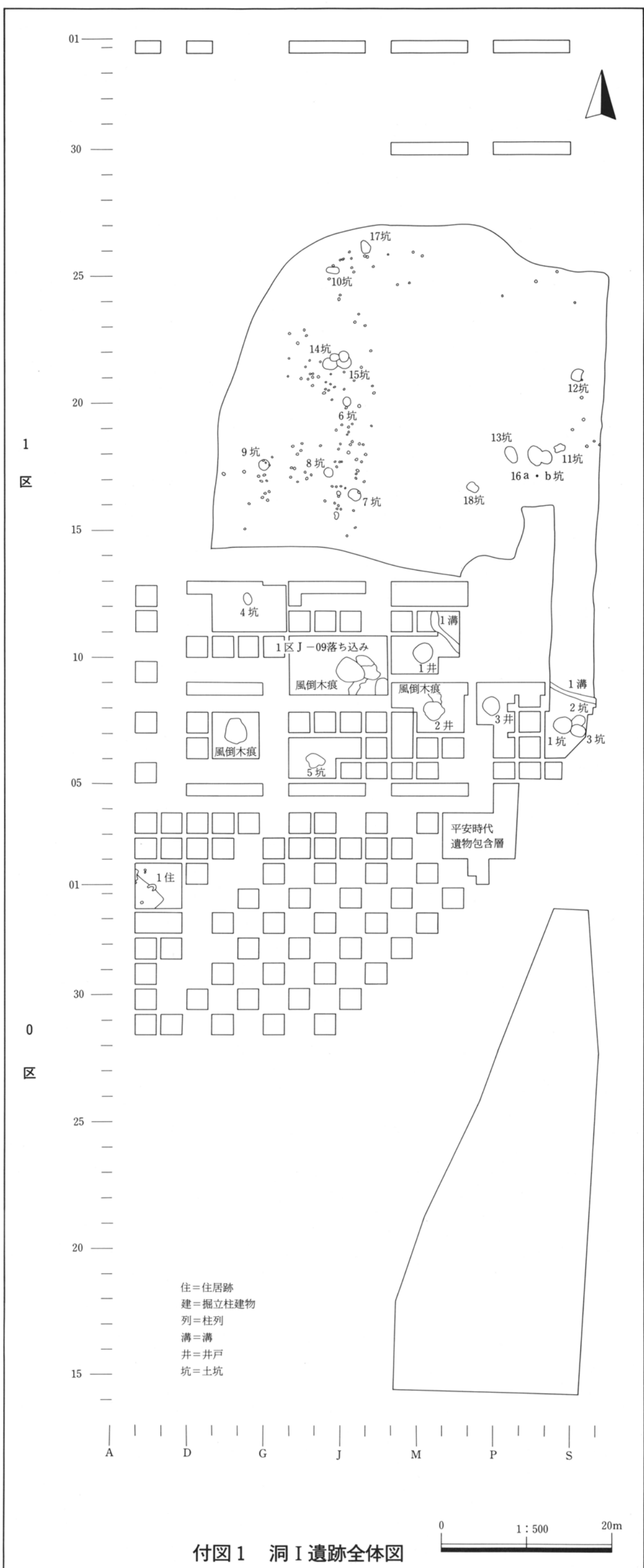
印刷 昭和61年5月26日

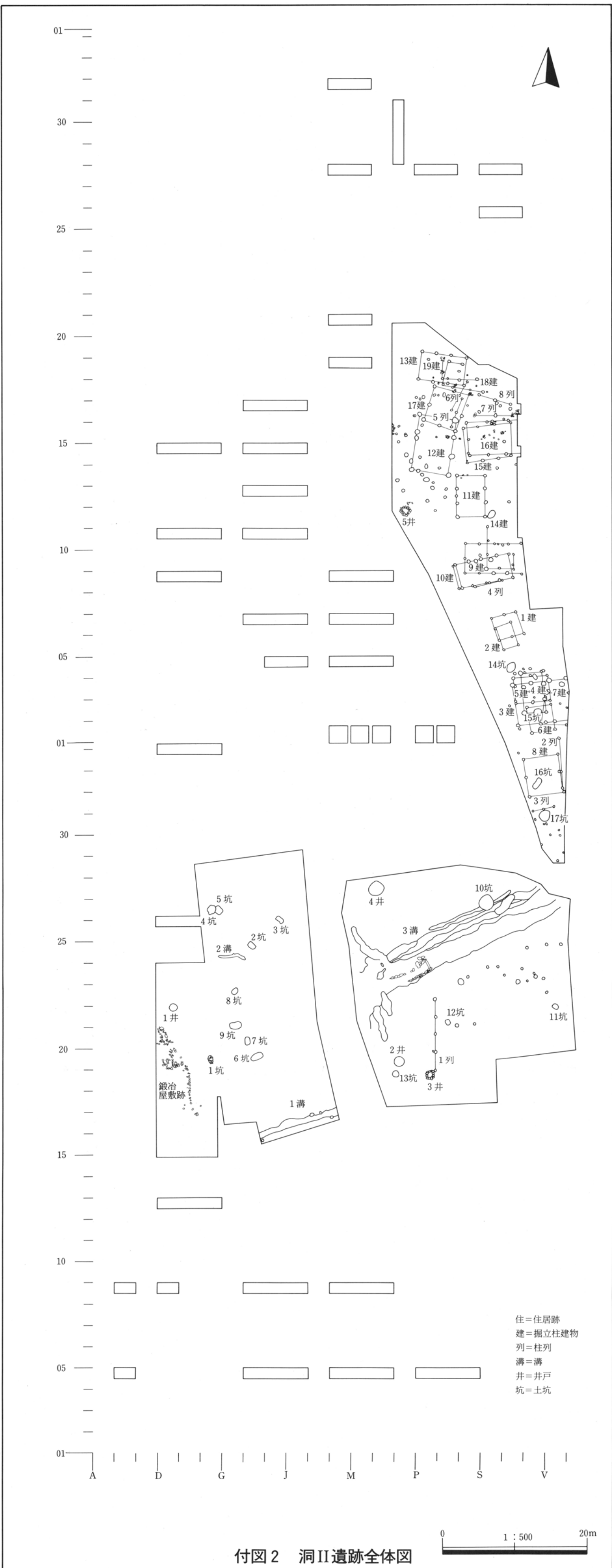
発行 昭和61年5月31日

編集 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
(0279) 52-2511(代)

発行 群馬県考古資料普及会  
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
(0279) 52-2511(代)

印刷 上毎印刷工業株式会社





付図2 洞II遺跡全体図

0 1 : 500 20m

